秋田県文化財調査報告書第178集

一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

――福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡――

１９８９・３

秋田県教育委員会

一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

――福田(ふくだ)遺跡・石丁(こくちょう)遺跡・蟹子沢(かにこざわ)遺跡・十二林(じゅうにはやし)遺跡――

１９８９・３

秋田県教育委員会

序

能代・山本地方には国指定の杉沢台遺跡、桧山安東氏城館跡、県指定の菅刈沢貝塚、柏子所貝塚など多くの史跡があり、県内埋蔵文化財の集中地域のひとつに数え上げられます。この能代山本地方の新たな幹線道路として一般国道７号八竜・能代道路が計画され、秋田県教育委員会はその事前調査として能代市南部の浅内地区の埋蔵文化財発掘調査を、昭和61年度から実施して参りました。

昨年度は、おもに平安時代中～後半期の遺跡が調査対象となり、福田遺跡では合計19軒にも上る竪穴住居跡からなる集落跡が、また十二林遺跡では竪穴住居跡12軒の他に、須恵器窯１基、土器焼成遺構14基、製鉄業に関連する炭窯１基が検出されました。特に須恵器窯は県内では極めて希な地下式の登窯であるなど、貴重ないくつかの事実が判明いたしました。

本書は昭和62年度調査の４遺跡の調査報告をまとめたものであります。本書が広く学術研究、埋蔵文化財保護の分野で活用いただくことを切に願う次第であります。

最後に本書を上梓するにあたり、種々ご便宜いただいた建設省東北建設局能代工事事務所をはじめとする関係機関、各位に深く感謝の意を表します。

平成元年３月25日

秋田県教育委員会
教育長　斎藤　長

例　言

1．本報告書は一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る福田遺跡、石丁遺跡、蟹子沢遺跡、十二林遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書の執筆分担は以下のとおりである。

高橋　学・・・・・・「福田遺跡」「石丁遺跡」「蟹子沢遺跡」
「十二林遺跡」のうちＳＩ52、ＳＩ67、ＳＩ83、ＳＩ88および平安時代の遺物に関する項

小林　克・・・・・・「はじめに」「立地と環境」「発掘調査の方法」
「福田遺跡」「石丁遺跡」「蟹子沢遺跡」のうち縄文時代遺物に関する項
「十二林遺跡」

3．本報告書の作成にあたり、以下の方々から御助言、御指導を頂いた。記して謝意を表する。
六沢義功、工藤雅樹、桑原滋郎、西野　修、宇部則保、藤田俊雄、高橋信雄、小松正夫、
口野　久、岡田茂弘、古岡康輔、熊谷太郎、永瀬福男、白石健雄、福野彰子

4．別編「自然科学的分析」のうち、第１章は学習院大学年代測定室に、第２章～第４章はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した結果の報告である。

5．巻頭図版中、福田遺跡地下遺構レーダー探査画面写真は、(有)桜小路電機、工藤博司氏の提供による。

6．土層註記における色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』によった。

凡　例

1．検出遺構に使用した略号は次のとおりである。

ＳＡ(柱列、有溝柱列)、ＳＢ(掘立柱建物跡)、ＳＤ(溝跡)、ＳＩ(竪穴住居跡)、ＳＫ(土坑)ＳＫＴ(Ｔピット)、ＳＮ(焼土遺構、土器焼成遺構、須恵器窯跡、炭窯)、ＳＸ(竪穴状遺構)

2．遺構平面図、断面図の縮尺は次のとおりであるが、例外もある。

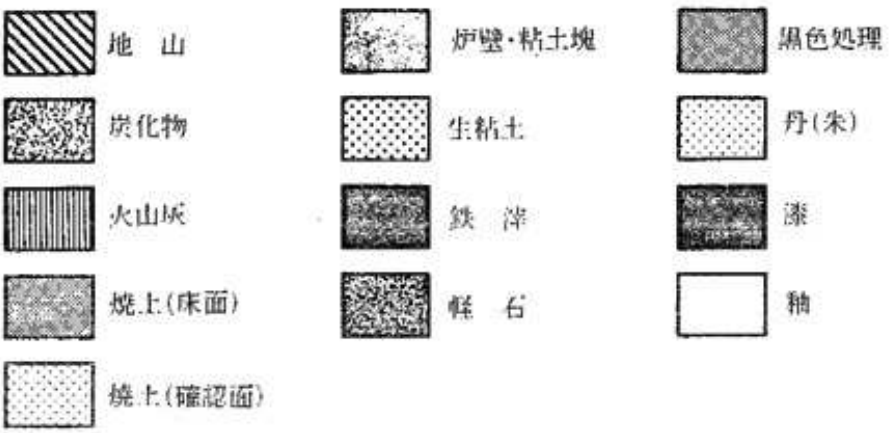
遺構配置図(1/400)、竪穴住居跡・土坑・土器焼成遺構・焼土遺構・Ｔピット(1/40)、竪穴住居跡カマド(1/20)、掘立柱建物跡・竪穴状遺構・須恵器窯跡・炭窯(1/60)

3．遺物実測図の縮尺は1/3を基本としているが、十二林遺跡ＳＮ223第１号須恵器窯跡出土の甕は、1/4、1/6である。なお、土器断面図を黒く塗りつぶしてあるものは須恵器を示している。

4．出土遺物は、各遺跡毎に連番号を付し、挿図、写真図版とも対応できるように統一してある。

5．ロクロを用いた坏・甕等の底部切り離し技法については次の文献に拠り、「静止かけ引き糸引り」、「前引き糸切り」の名称を用いているものもある。単に回転糸切りと記述してあるのは「まわし糸切り」あるいは「離し糸切り」を示す。【小川貴司「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』第26巻第１号　1979(昭和54年)】

6．挿図中に使用したスクリーントーンは以下のとおりである。



7．竪穴住居跡各部の計測法について

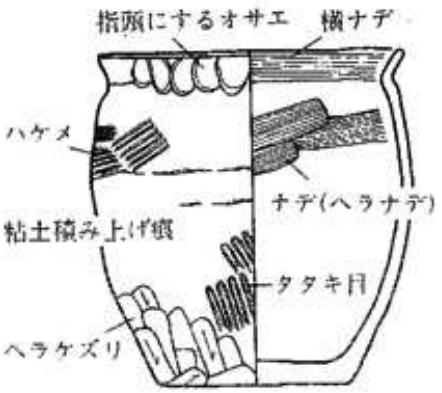
竪穴住居跡の規模を計測するには二通りの方法を用いた。一つは、各壁長の中軸線によって長軸、短軸の長さを計測する方法、他は各壁長を各々の壁の内側で計測する方法である。前者は平面形が正方形・長方形などほぼ矩形プランのものに用い、後者は歪みのあるもの、壁の立ち上りが不明瞭なものに用いている。

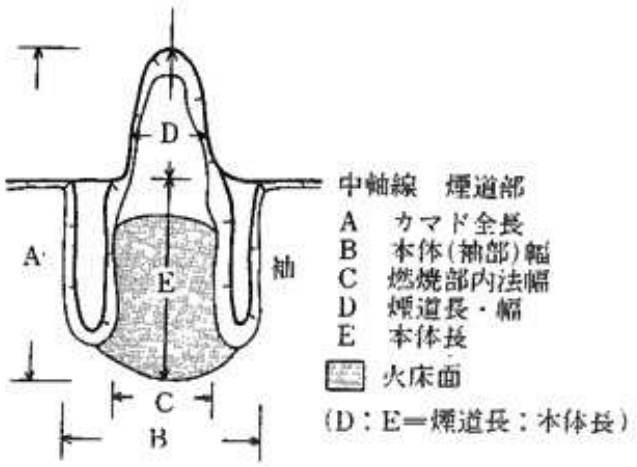
面積は、カマド煙出しを除いた竪穴計画面積、すなわち上端のラインで囲まれる図形を計測した。プラニメーターはウシカタエリアカーブメータ(X－PLAN360)を用いた。竪穴の深さは壁高で記述することにし、竪穴内でのもっとも高い壁を計測するか、それを含めた複数の地点で計測した。柱穴については床面からの深さを計測した。壁溝については、幅を竪穴の上端と床面の上端のと間で計測し、深さは床面からの深さを計測した。

カマドの主軸方位が竪穴の平面形の主軸方位とほぼ一致する場合には、カマド主軸方位によって、各住居跡の主軸方位を代表させた。カマド主軸方位と竪穴主軸方位とに著しいずれがある場合は、その両方の計測値を記した。カマドの主軸方位は煙出し孔の中心と、焚口の中央を結んだ線と磁北とのずれを計測し、竪穴平面形の主軸方位は、各壁長の中軸線のうち磁北に近い一本と磁北とのずれを計測して記している。カマド各部の名称と計測位置については下図を参照されたい。

8．土坑計測法については、規模は平面形での長軸と短軸の両方の計測値を記した。深さは確認面から底面中央部までを計測した。

9．平安時代の土師器等における整形・調整技法については以下の名称、図示方法によった。





目　次

序

例言・凡例

目　次

挿図・表・図版目次

はじめに……1
　調査に至るまでの経緯……1
　調査の組織と構成……2
立地と環境……5
　遺跡の位置と地形……5
　能代平野南部の地形と地質……6
　周辺の遺跡……8
発掘調査の方法……13
　調査区の設定……13
　遺構の精査、およびその記録……14
福田遺跡……15
　第1章　発掘調査の概要……17
　　第1節　遺跡の概観……17
　　第2節　調査の経過……21
　第2章　調査の記録……22
　　第1節　縄文時代の遺構と遺物……22
　　第2節　平安時代の遺構と遺物……27
　第3章　まとめ……140
石丁遺跡……145
　第1章　発掘調査の概要……147
　　第1節　遺跡の概観……147
　　第2節　調査の経過……148
　第2章　調査の記録……150
　　第1節　検出遺構……150
　　第2節　出土遺物……153
　第3章　まとめ……159
蟹子沢遺跡……161
　第1章　発掘調査の概要……163
　　第1節　遺跡の概観……163
　　第2節　調査の結果……163
　第2章　調査の記録……164
　　第1節　遺跡の基本層位……164
　　第2節　出土遺物……168
　第3章　まとめ……176
十二林遺跡……177
　第1章　発掘調査の概要……179
　　第1節　遺跡の概観……179
　　第2節　調査の経過……180
　第2章　調査の記録……187
　　第1節　縄文時代の遺構……187
　　第2節　遺構外出土の縄文時代
　　～弥生時代の遺物……195
　　第3節　平安時代以降の遺構と遺物……202
　　第4節　近代の遺構と遺物……386
　　第5節　遺構外出土遺物……389
　第3章　まとめ……394
図版1～図版126
別編　自然科学的分析……525
　第1章　^{14}C年代測定……528
　第2章　重・軽鉱物分析
　　および屈折率測定……529
　第3章　花粉分析……537
　第4章　土器胎土重鉱物分析……544
　第5章　材同定……553

挿図目次

第１図　一般国道７号八竜能代道路遺跡位置図……3
第２図　遺跡の位置と周辺地形……4
第３図　能代平野の地形分類図……7
第４図　周辺遺跡分布図……8
第５図　福田遺跡周辺採集の遺物1……9
第６図　福田遺跡周辺採集の遺物2……10
第７図　柏子所遺跡採集の遺物1……11
第８図　柏子所遺跡採集の遺物2……12

福田遺跡

第９図　遺跡周辺地形図……16
第10図　遺跡基本土層図……18
第11図　遺構配置図……19・20
第12図　ＳＫＴ16第１号Ｔピット……22
第13図　ＳＫ63第２号土坑……23
第14図　縄文時代土器拓影図・石器1……24
第15図　縄文時代石器2……25
第16図　遺構群位置図……28
第17図　北部遺構群遺構配置図……29
第18図　ＳＩ01第１号竪穴住居跡……30
第19図　ＳＩ02第２号竪穴住居跡……32
第20図　ＳＩ02第２号竪穴住居跡出土遺物…33
第21図　ＳＩ03第３号竪穴住居跡・遺物出土状況……34
第22図　ＳＩ03第３号竪穴住居跡カマド……35
第23図　ＳＩ03第３号竪穴住居跡出土遺物…35
第24図　ＳＩ04第４号竪穴住居跡……36
第25図　ＳＩ04第４号竪穴住居跡遺物出土状況……37
第26図　ＳＩ04第４号竪穴住居跡出土遺物…38
第27図　ＳＩ05第５号竪穴住居跡……40
第28図　ＳＩ05第５号竪穴住居跡遺物出土状況……41
第29図　ＳＩ05第５号竪穴住居跡出土遺物…41
第30図　ＳＩ20第６号竪穴住居跡……43
第31図　ＳＩ20第６号竪穴住居跡遺物出土状況……44
第32図　ＳＩ20第６号竪穴住居跡出土遺物…44
第33図　ＳＩ21第７号竪穴住居跡・ＳＫ22第３号土坑……46
第34図　ＳＩ21第７号竪穴住居跡カマド……47
第35図　ＳＩ21第７号竪穴住居跡・ＳＫ22第３号土坑遺物出土状況……48
第36図　ＳＩ21第７号竪穴住居跡・ＳＫ22第３号土坑出土遺物1……49
第37図　ＳＩ21第７号竪穴住居跡・ＳＫ22第３号土坑出土遺物2……50
第38図　ＳＩ23第８号竪穴住居跡……52
第39図　ＳＩ23第８号竪穴住居跡遺物出土状況……53
第40図　ＳＩ23第８号竪穴住居跡出土遺物…54
第41図　ＳＩ27第９号竪穴住居跡・ＳＫ79第25号土坑……55・56
第42図　ＳＩ27第９号竪穴住居跡カマド……57
第43図　ＳＩ27第９号竪穴住居跡遺物出土状況……58
第44図　ＳＩ27第９号竪穴住居跡出土遺物(1)……59
第45図　ＳＩ27第９号竪穴住居跡出土遺物(2)……60
第46図　ＳＩ28第10号竪穴住居跡……61
第47図　ＳＩ28第10号竪穴住居跡カマド・遺物出土状況……62
第48図　ＳＩ28第10号竪穴住居跡出土遺物(1)……62
第49図　ＳＩ28第10号竪穴住居跡出土遺物(2)……63
第50図　ＳＩ29第11号竪穴住居跡……65
第51図　ＳＩ29第11号竪穴住居跡カマド……66
第52図　ＳＩ29第11号竪穴住居跡出土遺物…66
第53図　ＳＩ30第12号竪穴住居跡……67
第54図　ＳＩ30第12号竪穴住居跡カマド……68
第55図　ＳＩ30第12号竪穴住居跡遺物出土状況……69
第56図　ＳＩ30第12号竪穴住居跡出土遺物(1)……70
第57図　ＳＩ30第12号竪穴住居跡出土遺物(2)……71
第58図　ＳＩ31第13号竪穴住居跡……73
第59図　ＳＩ31第13号竪穴住居跡遺物出土状況……74
第60図　ＳＩ31第13号竪穴住居跡出土遺物(1)……75
第61図　ＳＩ31第13号竪穴住居跡出土遺物(2)……76

第62図　ＳＢ14第１号掘立柱建物跡……77
第63図　ＳＢ06第２号・ＳＢ49第３号掘立柱建物跡1)……78
第64図　ＳＢ06第２号・ＳＢ49第３号掘立柱建物跡2)……79
第65図　ＳＢ78第４号掘立柱建物跡……81
第66図　ＳＢ81第５号掘立柱建物跡・遺物出土状況……82
第67図　ＳＢ81第５号掘立柱建物跡出土遺物……82
第68図　ＳＫ07第４号・ＳＫ08第５号土坑……83
第69図　ＳＫ09第６号・ＳＫ10第７号・ＳＫ11第８号・ＳＫ12第９号・ＳＫ13第10号土坑……84
第70図　ＳＫ15第11号・ＳＫ17第12号・ＳＫ18第13号土坑……86
第71図　ＳＫ25第14号・ＳＫ26第15号・ＳＫ35第16号・ＳＫ36第17号土坑……87
第72図　ＳＫ42第18号・ＳＫ43第19号・ＳＫ44第20号土坑……89
第73図　ＳＫ45第21号・ＳＫ50第22号・ＳＫ54第23号・ＳＫ70第24号土坑……90
第74図　北部遺構群土坑内出土遺物……92
第75図　ＳＸ51第１号竪穴状遺構……93
第76図　ＳＸ51第１号竪穴状遺構出土遺物…94
第77図　ＳＮ24第１号焼土遺構出土遺物……94
第78図　ＳＡ46第１号柱列……95
第79図　南東部遺構群配置図……97
第80図　ＳＩ32第14号竪穴住居跡……98
第81図　ＳＩ48第15号竪穴住居跡・ＳＮ71第３号焼土遺構……100
第82図　ＳＩ48第15号竪穴住居跡……101
第83図　ＳＩ32第14号・ＳＩ48第15号竪穴住居跡出土遺物……101
第84図　ＳＩ57第16号竪穴住居跡・ＳＫ58第27号土坑……102
第85図　ＳＩ57第16号竪穴住居跡カマド…103
第86図　ＳＩ57第16号竪穴住居跡遺物出土状況……104
第87図　ＳＩ57第16号竪穴住居跡出土遺物(1)……105
第88図　ＳＩ57第16号竪穴住居跡出土遺物(2)……106
第89図　ＳＩ57第16号竪穴住居跡出土遺物(3)……107
第90図　ＳＩ64第17号・ＳＩ66第18号竪穴住居跡……110
第91図　ＳＩ66第18号竪穴住居跡カマド……111
第92図　ＳＩ64第17号・ＳＩ65第18号竪穴住居跡遺物出土状況……112
第93図　ＳＩ64第17号・ＳＩ66第18号竪穴住居跡出土遺物1)……113
第94図　ＳＩ66第18号竪穴住居跡出土遺物(2)……114
第95図　ＳＢ73第６号掘立柱建物跡……115
第96図　ＳＢ80第７号掘立柱建物跡……116
第97図　ＳＫ41第26号・ＳＫ68第28号土坑…117
第98図　ＳＫ59第30号土坑……117
第99図　ＳＫ39第31号土坑……118
第100図　ＳＮ60第２号焼土遺構……120
第101図　南東部遺構群土坑・焼土遺構出土遺物……120
第102図　溝跡出土遺物……121
第103図　ＳＩ65第19号竪穴住居跡・ＳＤ37第11号溝跡……123
第104図　ＳＩ65第19号竪穴住居跡カマド…124
第105図　ＳＩ65第19号竪穴住居跡遺物出土状況……125
第106図　ＳＩ65第19号竪穴住居跡出土遺物…126
第107図　ＳＸ61第２号・ＳＸ62第３号・ＳＸ77第４号・ＳＸ67第５号竪穴状遺構……128
第108図　ＳＸ62第３号・ＳＸ77第５号竪穴状遺構出土遺物……129
第109図　ＳＫ40第32号土坑……130
第110図　遺構外出土遺物1)……132
第111図　遺構外出土遺物(2)……133
第112図　遺構外出土遺物3)……134
第113図　遺構外出土遺物4)……134
第114図　遺構外出土遺物5)……135
第115図　遺構外出土遺物6)……137
第116図　遺構外出土遺物7)……137
第117図　遺構外出土遺物8) 砥石(1)……138
第118図　遺構外出土遺物9) 砥石(2)……139
第119図　遺構変遷図……141

石丁遺跡

第120図　遺跡周辺地形図……146
第121図　遺跡基本土層図……148
第122図　遺構配置図……149
第123図　ＳＫ01第１号土坑・ＳＫＴ04第１号

Tピット・SKT05第2号Tピット…… 151
第124図 SN02第1号・SN03第2号・SN06第3号・SN07第4号焼土遺構… 152
第125図 遺構外出土遺物1…… 154
第126図 遺構外出土遺物2…… 156
第127図 遺構外出土遺物3…… 157
第128図 遺構外出土遺物4…… 158
蟹子沢遺跡
第129図 遺跡周辺地形図…… 162
第130図 グリッド配置図及び遺物出土位置図…… 165
第131図 B地点V層上面を基準にした土層平面分布概念図…… 165
第132図 遺跡基本土層柱状図…… 165
第133図 土層模式図【東－西方向】…… 166
第134図 遺物出土状況及び接合関係図…… 167
第135図 遺構外出土縄文土器(1)…… 169
第136図 遺構外出土縄文土器(2)…… 170
第137図 遺構外出土縄文土器拓影図1)…… 171
第138図 遺構外出土縄文土器拓影図2)…… 172
第139図 遺構外出土縄文時代石器…… 173
第140図 平安時代以降の遺物…… 175
十二林遺跡
第141図 遺跡周辺地形図…… 178
第142図 遺跡基本土層図…… 181
第143図 遺構配置図……185・186
第144図 SK04第1号フラスコ状土坑・SK08第2号フラスコ状土坑……188
第145図 SKT45第1号Tピット・SKT161第7号Tピット…… 190
第146図 SKT128第2号Tピット・SKT130第3号Tピット…… 191
第147図 SKT131第4号Tピット・SKT159第5号Tピット…… 192
第148図 SKT160第6号Tピット・SKT165第8号Tピット…… 193
第149図 縄文時代の出土遺物1拓影図…… 196
第150図 縄文時代の出土遺物2)…… 200
第151図 縄文時代の出土遺物3)…… 201
第152図 SI02第1号竪穴住居跡…… 204
第153図 SI02第1号竪穴住居跡カマド…… 205
第154図 SI02第1号竪穴住居跡出土遺物(1)…… 206
第155図 SI02第1号竪穴住居跡出土遺物(2)…… 207
第156図 SI22A第2号竪穴住居跡…209・210
第157図 SI22B第2号竪穴住居跡…211・212
第158図 SI22B第2号竪穴住居跡カマド…213
第159図 SI22A第2号竪穴住居跡カマド…214
第160図 SI22A第2号竪穴住居跡遺物出土状況……215・216
第161図 SI22第2号竪穴住居跡出土遺物…217
第162図 SI52第3号竪穴住居跡……219・220
第163図 SI52第3号竪穴住居跡カマド…… 221
第164図 SI52第3号竪穴住居跡遺物出土状況…… 222
第165図 SI52第3号竪穴住居跡出土遺物(1)…… 223
第166図 SI52第3号竪穴住居跡出土遺物(2)…… 224
第167図 SI52第3号竪穴住居跡出土遺物(3)(土錘)…… 226
第168図 SI60第4号竪穴住居跡…… 227
第169図 SI60第4号竪穴住居跡カマド及び住居跡出土遺物…… 228
第170図 SI67第5号竪穴住居跡…… 230
第171図 SI67第5号竪穴住居跡カマド…… 231
第172図 SI67第5号竪穴住居跡出土遺物(1)…… 232
第173図 SI67第5号竪穴住居跡出土遺物(2)…… 233
第174図 SX68(竪穴状遺構)出土遺物…… 234
第175図 SI77第6号竪穴住居跡…… 235
第176図 SI77第6号竪穴住居跡遺物出土状況…… 236
第177図 SI77第6号竪穴住居跡出土遺物…237
第178図 SI83第7号竪穴住居跡・SI86第8号竪穴住居跡・SI136第14号竪穴住居跡……239・240
第179図 SI83第7号竪穴住居跡カマド…… 241
第180図 SI86第8号竪穴住居跡カマド…… 243
第181図 SI83第7号竪穴住居跡出土遺物…214
第182図 SI86第8号竪穴住居跡出土遺物…215
第183図 SI136第14号竪穴住居跡出土遺物…… 216
第184図 SI94第9号竪穴住居跡出土遺物……249・250
第185図 SI94第9号竪穴住居跡カマド…… 251
第186図 SI94第9号竪穴住居跡遺物出土状況……253・254

第187図 ＳＩ94第9号竪穴住居跡出土遺物(1)…… 255
第188図 ＳＩ94第9号竪穴住居跡出土遺物(2)…… 256
第189図 ＳＩ94第9号竪穴住居跡出土遺物(3)…… 257
第190図 ＳＩ95第10号竪穴住居跡……259・260
第191図 ＳＩ95第10号竪穴住居跡…… 261
第192図 ＳＩ95第10号竪穴住居跡遺物出土状況…… 262
第193図 ＳＩ95第10号竪穴住居跡出土遺物(1)…… 264
第194図 ＳＩ95第10号竪穴住居跡出土遺物2)…… 265
第195図 ＳＩ100第11号竪穴住居跡……266
第196図 ＳＩ100第11号竪穴住居跡出土遺物…… 266
第197図 ＳＩ101第12号竪穴住居跡 …267・268
第198図 ＳＩ101第12号竪穴住居跡カマド…270
第199図 ＳＩ101第12号竪穴住居跡遺物出土状況…… 271
第200図 ＳＩ101第12号竪穴住居跡出土遺物(1)…… 272
第201図 ＳＩ101第12号竪穴住居跡出土遺物2)…… 273
第202図 ＳＩ108第13号竪穴住居跡… 275・276
第203図 ＳＩ108第13号竪穴住居跡カマド… 277
第204図 ＳＩ108第13号竪穴住居跡遺物出土状況…… 278
第205図 ＳＩ108第13号竪穴住居跡出土遺物1)…… 280
第206図 ＳＩ108第13号竪穴住居跡出土遺物2)…… 281
第207図 ＳＩ94第9号竪穴住居跡東方の掘立柱建物跡・柱列配置図…… 283
第208図 ＳＢ144第1号掘立柱建物跡・ＳＡ171第1号柱列……285・286
第209図 ＳＢ166第2号掘立柱建物跡…… 287
第210図 ＳＢ167第3号掘立柱建物跡 …… 288
第211図 ＳＢ141第4号掘立柱建物跡…… 289
第212図 ＳＢ172第5号掘立柱建物跡…… 290
第213図 ＳＡ211第1号・ＳＡ213第2号有溝柱列…… 292
第214図 ＳＮ124第10号土器焼成遺構及び遺物出土状況…… 294
第215図 ＳＮ66第5号土器焼成遺構及び遺物出土状況・ＳＫ70第38号土坑… 295
第216図 ＳＮ09第1号・ＳＮ46第2号・ＳＮ78第6号・ＳＮ79第7号土器焼成遺構…… 297
第217図 ＳＫ42第20号・ＳＫ47第26号・ＳＫ49第27号・ＳＫ50第28号土坑・ＳＮ48第3号・ＳＮ51第4号土器焼成遺構… 299
第218図 ＳＫ87第47号・ＳＫ90第48号土坑・ＳＮ85第9号土器焼成遺構……300
第219図 ＳＫ93第50号土坑・ＳＮ81第8号・ＳＮ139第11号・ＳＮ148第12号土器焼成遺構…… 301
第220図 ＳＫ151第86号土坑・ＳＮ149第13号・ＳＮ152第14号土器焼成遺構…… 302
第221図 ＳＮ46第2号・ＳＮ124第10号・ＳＮ148第12号土器焼成遺構出土遺物…… 304
第222図 ＳＮ149第13号土器焼成遺構出土遺物…… 305
第223図 土坑群の長軸長・短軸長の分布… 305
第224図 ＳＫ120第69号土坑…… 306
第225図 ＳＫ01第1号・ＳＫ05第2号・ＳＫ07第3号・ＳＫ10第4号土坑…… 307
第226図 ＳＫ15第5号・ＳＫ16第6号・ＳＫ18第7号・ＳＫ19第8号・ＳＫ71第39号土坑…… 308
第227図 ＳＫ23第9号・ＳＫ24第10号・ＳＫ25第11号・ＳＫ26第12号土坑… 309
第228図 ＳＫ27第13号・ＳＫ28第14号・ＳＫ29第15号・ＳＫ30第16号土坑…… 310
第229図 ＳＫ31第17号・ＳＫ32第18号・ＳＫ33第19号・ＳＫ35第20号土坑…… 311
第230図 ＳＫ36—37第21号・ＳＫ38第22号・ＳＫ39第23号・ＳＫ41第24号土坑…… 312
第231図 ＳＫ53—55第29号・ＳＫ54第30号土坑…… 313
第232図 ＳＫ56第31号・ＳＫ59第32号・ＳＫ61第33号・ＳＫ62第34号土坑…… 314

第233図 ＳＫ63第35号・ＳＫ64第36号土坑…… 315
第234図 ＳＫ65第37号・ＳＫ72第40号・ＳＫ74第42号・ＳＫ80第44号土坑…… 316
第235図 ＳＫ73第41号・ＳＫ75第43号・ＳＫ82第45号・ＳＫ84第46号・ＳＫ103第54号土坑 …… 317
第236図 ＳＫ91第49号・ＳＫ96第51号・ＳＫ97第52号・ＳＫ98第53号土坑…… 318
第237図 ＳＫ104第55号・ＳＫ105第56号・ＳＫ106第57号・ＳＫ109第58号土坑…… 319
第238図 ＳＫ110第59号・ＳＫ111第60号・ＳＫ112第61号・ＳＫ113第62号土坑…… 320
第239図 ＳＫ114第63号・ＳＫ115第64号・ＳＫ116第65号・ＳＫ117第66号土坑…… 321
第240図 ＳＫ118第67号・ＳＫ119第68号土坑…… 322
第241図 ＳＫ121第70号・ＳＫ122第71号・ＳＫ123第72号・ＳＫ125第73号・ＳＫ127第74号土坑 …… 323
第242図 ＳＫ129第75号・ＳＫ132第76号・ＳＫ133第77号・ＳＫ134第78号・ＳＫ135第79号・ＳＫ162第93号土坑…… 324
第243図 ＳＫ137第80号・ＳＫ142第81号・ＳＫ143第82号・ＳＫ146第83号・ＳＫ147第84号土坑 …… 325
第244図 ＳＫ150第85号・ＳＫ153第87号・ＳＫ154第88号・ＳＫ155第89号・ＳＫ156第90号土坑 …… 326
第245図 ＳＫ157第91号・ＳＫ158第92号・ＳＫ163第94号・ＳＫ164第95号・ＳＫ168第96号土坑 …… 327
第246図 ＳＮ58第1号焼土遺構・ＳＮ107第2号焼土遺構……333
第247図 土坑及び土器焼成遺構出土遺物1)… 334
第248図 土坑及び土器焼成遺構出土遺物2)… 336
第249図 土坑及び土器焼成遺構出土遺物3)… 338
第250図 土坑及び土器焼成遺構出土遺物4)… 339
第251図 土坑及び土器焼成遺構出土遺物5)… 340
第252図 ＳＮ17第1号製鉄炉 …… 342
第253図 ＳＮ17第1号製鉄炉出土遺物 …… 343
第254図 ＳＮ102第2号製鉄炉…… 344
第255図 ＳＮ102第2号製鉄炉出土遺物…… 345
第256図 土坑・溝跡覆土内出土土錘…… 349
第257図 緩斜面上遺構密集区の遺構推移… 350
第258図 南側斜面拡張区断面模式図…… 351
第259図 南側斜面拡張区全体図…… 352
第260図 ＳＮ223第1号須恵器窯(確認状態) 354
第261図 ＳＮ223第1号須恵器窯(遺物出土状態・土層断面) …… 355
第262図 ＳＮ223遺物取り上げ区画 …… 356
第263図 ＳＮ223第1号須恵器窯出土遺物;須恵器坏(1)…… 358
第264図 ＳＮ223第1号須恵器窯出土遺物;須恵器坏(2)…… 359
第265図 ＳＮ223第1号須恵器窯出土遺物;須恵器甕(1)…… 361
第266図 ＳＮ223第1号須恵器窯出土遺物;須恵器甕(2)…… 362
第267図 ＳＮ223第1号須恵器窯出土遺物;須恵器甕(3)…… 363
第268図 特殊タタキ目工具原体模式図…… 363
第269図 ＳＮ223第1号須恵器窯出土遺物拓影図;須恵器甕(4)…… 364
第270図 ＳＮ223第1号須恵器窯出土遺物;須恵器甕・鍋(5)…… 365
第271図 ＳＮ223第1号須恵器窯出土遺物;須恵器壺…… 366
第272図 ＳＮ223第1号須恵器窯出土遺物;須恵器坏・土師器坏…… 368
第273図 ＳＮ223第1号須恵器窯出土遺物;土師器坏・耳皿 …… 369
第274図 ＳＮ223東端煙出口内出土遺物;土師器甕…… 370
第275図 ＳＮ223第1号須恵器窯内出土焼台(1)…… 373
第276図 ＳＮ223第1号須恵器窯内出土焼台(2)…… 374
第277図 ＳＮ223第1号須恵器窯内出土焼台(3)…… 376
第278図 ＳＮ223第1号須恵器窯内出土焼台(4)…… 377
第279図 ＳＮ223第1号須恵器窯内出土焼台(5)…… 379

第280図 ＳＮ223第1号須恵器窯内出土焼台(6)…… 380
第281図 ＳＮ220第3号炭窯…… 381・382
第282図 ＳＮ220第3号炭窯焚口出土遺物… 384
第283図 ＳＮ221第1号鍛冶関連遺構…… 385
第284図 ＳＮ88第1号炭窯・ＳＮ89第2号炭窯…… 387
第285図 遺構外出土遺物1)…… 390
第286図 遺構外出土遺物(2)…… 391
第287図 遺構外出土遺物(砥石)…… 392

表目次

第1表 Ｔピット観察表…… 194
第2表 ＳＩ52第3号竪穴住居跡出土土師計測表…… 226
第3表 土器焼成遺構観察表…… 303
第4表 土坑観察表(1)…… 328
第5表 土坑観察表(2)…… 329
第6表 土坑観察表(3)…… 330
第7表 土坑観察表(4)…… 331
第8表 土坑観察表(5)…… 332
第9表 焼土遺構観察表…… 333
第10表 出土遺物観察表(1)…… 358
第11表 出土遺物観察表(2)…… 359
第12表 出土遺物観察表(3)…… 368
第13表 出土遺物観察表(4)…… 370
第14表 ＳＮ223第1号須恵器窯内出土焼台観察表(1)…… 372
第15表 ＳＮ223第1号須恵器窯内出土焼台観察表(2)…… 375
第16表 ＳＮ223第1号須恵器窯内出土焼台観察表(3)…… 378

図版目次

巻頭図版1 石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡航空写真【南東上空から】
巻頭図版2 1 福田遺跡航空写真【西上空から】
2 福田遺跡航空写真【北上空から】
巻頭図版3 1 福田遺跡南東部遺構群【北→南】、ＳＡ72第6号柱列・ＳＤ55第3号溝跡・ＳＤ56第4号溝跡
2 福田遺跡北部遺構群・ＳＩ30第12号竪穴住居跡【東→西】
巻頭図版4 十二林遺跡ＳＮ223第1号須恵器窯【西→東】
巻頭図版5 1 十二林遺跡ＳＮ223第1号須恵器窯内遺物出土状況
2 十二林遺跡ＳＮ46第2号土器焼成遺構【南→】
巻頭図版6 1 十二林遺跡ＳＩ94第9号竪穴住居跡・ＳＡ144第1号掘立柱建物跡【南東→北西】
2 福田遺跡ＳＩ27第9号竪穴住居跡レーダー探査画面写真

福田遺跡

図版１　福田・石丁・蟹子沢・十二林遺跡周辺航空写真

図版２　１発掘調査前(現況)　【北→南】
２発掘調査前(現況・南側)　【北→南】

図版３　１南側斜面調査風景
２土壌分析試料サンプリング作業

図版４　１遺構確認状況【北→南】
２遺構完掘後　【北→南】

図版５　１調査風景（ＳＸ51）
２調査風景（ＳＩ03カマド）

図版６　１ＳＫＴ16第1号Ｔピット　【西→東】
２ＳＫ63第2号土坑土層
３ＳＫ63第2号土坑【北→南】

図版７　１ＳＩ01第1号竪穴住居跡　【真上より】
２ＳＩ02第2号竪穴住居跡(右)・ＳＩ03第3号竪穴住居跡　【真上より】

図版８　１ＳＩ02第2号竪穴住居跡カマド
２ＳＩ03第3号竪穴住居跡カマド袖部断ち割り
３同上住居跡遺物出土状況

図版９　１ＳＩ04第4号竪穴住居跡確認状況【東→西】
２同上住居跡完掘　【東→西】

図版10　１ＳＩ05第5号竪穴住居跡確認状況【西→東】
２同上住居跡完掘　【西→東】

図版11　１ＳＩ20第6号竪穴住居跡　【東→西】
２同上住居跡焼土
３同上住居跡南東部土坑遺物出土状況

図版12　１ＳＩ21第7号竪穴住居跡・ＳＫ22第3号土坑完掘　【東→西】
２同上住居跡遺物出土状況　【北→南】
３同上住居跡カマド　【北→南】

図版13　１ＳＩ23第8号竪穴住居跡　【西→東】
２ＳＮ24第1号焼土遺構　【南→北】

図版14　１ＳＩ27第9号竪穴住居跡　【真上から】
２遺物出土状況　【西→東】
３皿出土状況
４同上住居跡カマド　【北→南】

図版15　１ＳＩ28第10号竪穴住居跡　【南→北】
２同上住居跡カマド　【西→東】

図版16　１ＳＩ29第11号竪穴住居跡　【西→東】
２同上住居跡カマド　【西→東】

図版17　１ＳＩ30第12号竪穴住居跡完掘(右)及びＳＩ31第13号竪穴住居跡確認状況【真上から】
２同上【西→東】

図版18　１ＳＩ30第12号竪穴住居跡カマド(上面)【西→東】
２ＳＩ30第12号竪穴住居跡カマド(下面)【西→東】
３ＳＩ31第13号竪穴住居跡　【東→西】

図版19　１ＳＢ14第1号掘立柱建物跡・ＳＢ81第5号掘立柱建物跡【東→西】
２ＳＢ78第4号掘立柱建物跡　【東→西】

図版20　１ＳＢ06第2号掘立柱建物跡・ＳＢ49第3号掘立柱建物跡【東→西】
２遺物出土状況（土師器鍋）
３貝出土状況

図版21　１ＳＫ07第4号土坑
２ＳＫ08第5号土坑
３ＳＫ09第6号土坑
４ＳＫ11第8号土坑
５ＳＫ10第7号土坑完掘
６ＳＫ10第7号土坑土層断面
７ＳＫ10第7号土坑火山灰検出状況
８ＳＫ12第9号土坑・ＳＫ13第10号土坑

図版22　１ＳＫ15第11号土坑
２ＳＫ18第13号土坑
３ＳＫ36第17号土坑
４ＳＫ42第18号土坑
５ＳＫ43第19号土坑
６ＳＫ44第20号土坑

7ＳＫ45第21号土坑
8ＳＫ50第22号土坑
図版23　1ＳＫ54第23号土坑
2ＳＫ70第24号土坑
3ＳＫ79第25号土坑
図版24　1ＳＸ51第1号竪穴状遺構【西→東】
2ＳＸ51第1号竪穴状遺構【北→南】
3ＳＸ51第1号竪穴状遺構焼土分布
図版25　1南東部遺構群【北→南】
2南東部遺構群竪穴住居跡【真上から】
図版26　1ＳＩ32第14号竪穴住居跡確認状況【北→南】
2ＳＩ48第15号竪穴住居跡確認状況【西→東】
図版27　1ＳＩ48第15号竪穴住居跡【西→東】
2ＳＩ57第16号竪穴住居跡【西→東】
図版28　1ＳＩ57第16号竪穴住居跡土層堆積状況【北→南】
2ＳＩ57第16号竪穴住居跡カマド
3ＳＩ57第16号竪穴住居跡カマド支脚
4ＳＩ57第16号竪穴住居跡遺物出土状況
5ＳＩ57第16号竪穴住居跡遺物出土状況
図版29　1ＳＩ64第17号竪穴住居跡・ＳＩ66第18号竪穴住居跡【南→北】
2ＳＩ66第18号竪穴住居跡カマド
3ＳＫ58第27号土坑とＳＩ57第16号竪穴住居跡重複状況
図版30　1ＳＫ39第31号土坑
2ＳＫ59第30号土坑
3ＳＮ60第2号焼土遺構
図版31　1南西部遺構群【東→西】
2南西部遺構群【南→北】
図版32　1ＳＸ62第3号竪穴状遺構・ＳＸ77第4号竪穴状遺構
2ＳＤ37第11号溝跡・ＳＤ38第12号溝跡【北東→南西】
図版33　1ＳＩ65第19号竪穴住居跡【東→西】
2ＳＩ65第19号竪穴住居跡カマド
3ＳＩ65第19号竪穴住居跡カマド
図版34　遺構外出土縄文時代石器
図版35　平安時代遺構内出土遺物(1)
図版36　平安時代遺構内出土遺物(2)
図版37　平安時代遺構内出土遺物(3)
図版38　平安時代遺構内出土遺物(4)
図版39　平安時代遺構内出土遺物(5)
図版40　平安時代遺構内出土遺物(6)
図版41　平安時代遺構内出土遺物(7)
図版42　平安時代遺構内出土遺物(8)
遺構外出土遺物1)
図版43　遺構外出土遺物(2)
図版44　遺構外出土遺物（砥石）
石丁遺跡
図版45　1調査前状況(現況)　【北→南】
2調査前状況(取り付け道路部分)【東→西】
図版46　1調査終了後【北→南】
2調査終了後(本線部分)【西→東】
図版47　1取り付け道路部分終了後【西→東】
2土層断面(盛土部分)【西→東】
図版48　1北側斜面地割れ部分【東→西】
2北側斜面地割れ部分【西→東】
図版49　1ＳＫ01第1号土坑確認状況
2ＳＫ01第1号土坑土層
3ＳＫ01第1号土坑完掘
4ＳＮ02第1号焼土遺構
5ＳＮ03第2号焼土遺構
6ＳＫＴ04第1号Ｔピット
7ＳＫＴ07第2号Ｔピット確認
8ＳＫＴ07第2号Ｔピット完掘
図版50　遺構外出土縄文時代遺物(1)
図版51　遺構外出土縄文時代遺物(2)
蟹子沢遺跡
図版52　1調査前状況(現況)　【南→北】
2調査終了後【南→北】
図版53　1調査終了後【南→北】
2遺物出土状況【東→西】
図版54　1調査風景
2遺物出土状況【南→北】
図版55　1調査風景

2 調査風景
図版56 1 土層断面
2 土師器出土状況
3 縄文土器出土状況
図版57 出土縄文土器(1)
図版58 出土縄文土器(2)
図版59 出土縄文土器(3)
図版60 平安時代以降の遺物
十二林遺跡
図版61 1 遺跡全景【南→北】
2 調査区内【北→南】
図版62 1 SK04第1号土坑土層断面
2 SK04第1号土坑完掘状態
3 SK08第2号土坑完掘状態
図版63 縄文時代Tピット(1)
1 SKT45 第1号Tピット
2 SKT128第2号Tピット
3 SKT130第3号Tピット
4 SKT131第4号Tピット
5 SKT160第6号Tピット
図版64 縄文時代Tピット(2)
6 SKT159第5号Tピット
7 SKT161第7号Tピット
8 SKT165第8号Tピット
図版65 1 SI02第1号竪穴住居跡
2 SI02第1号竪穴住居跡土層断面
図版66 1 SI02第1号竪穴住居跡カマド確認状態
2 SI02第1号竪穴住居跡カマド遺物出土状態
3 SI02第1号竪穴住居跡カマド完掘状態
図版67 1 SI02第1号竪穴住居跡カマド支脚設置状態
2 SI02第1号竪穴住居跡南東隅土師器杯出土状態
3 SI02第1号竪穴住居跡垂直写真
図版68 1 SI22第2号竪穴住居跡A・B
2 SI22第2号竪穴住居跡A・B土層断面
図版69 1 SI22A第2号竪穴住居跡カマド
2 SI22B第2号竪穴住居跡カマド
3 SI22B第2号竪穴住居跡カマド煙出口
図版70 1 SI52第3号竪穴住居跡A・B確認状態
2 SI52第3号竪穴住居跡A・B完掘状態
図版71 1 SI52第3号竪穴住居跡Aカマド遺物出土状態
2 SI52第3号竪穴住居跡Aカマド遺物出土状態
3 SI52第3号竪穴住居跡Aカマド完掘状態
図版72 1 SI52第3号竪穴住居跡Aカマド左袖土師器杯出土状態
2 SI52第3号竪穴住居跡A床面中央部土錘出土状態
3 SI52第3号竪穴住居跡Bカマド完掘状態
図版73 1 SI60第4号竪穴住居跡
2 SI60第4号竪穴住居跡カマド確認状態
3 SI60第4号竪穴住居跡カマド完掘状態
図版74 1 SI67第5号竪穴住居跡遺物出土状態
2 SI67第5号竪穴住居跡完掘状態
図版75 1 SI67第5号竪穴住居跡カマド内遺物出土状態
2 SI67第5号竪穴住居跡カマド完掘状態
3 SI67第5号竪穴住居跡カマド支脚設置状態
図版76 1 SI83第7号竪穴住居跡
2 SI83第7号竪穴住居跡カマド内遺物出土状態
3 SI83第7号竪穴住居跡カマド完掘状態
図版77 1 SI83第7号竪穴住居跡カマド右袖部
2 SI83第7号竪穴住居跡カマド左袖部
3 SI83第7号竪穴住居跡カマド支脚設置状態
図版78 1 SI86第8号竪穴住居跡カマド

2ＳＩ86第8号竪穴住居跡カマド完掘状態
3ＳＩ86第8号竪穴住居跡カマド支脚設置状態
図版79　1ＳＩ94第9号竪穴住居跡
2ＳＩ94第9号竪穴住居跡完掘状態
図版80　1ＳＩ94第9号竪穴住居跡カマド内遺物出土状態
2ＳＩ94第9号竪穴住居跡カマド内遺物除去後状態
3ＳＩ94第9号竪穴住居跡カマド完掘状態
図版81　1ＳＩ95第10号竪穴住居跡火山灰堆積状態
2ＳＩ95第10号竪穴住居跡完掘状態
図版82　1ＳＩ95第10号竪穴住居跡土層断面
2ＳＩ95第10号竪穴住居跡Ｐ1遺物出土状態
図版83　1ＳＩ95第10号竪穴住居跡カマド内遺物出土状態
2ＳＩ95第10号竪穴住居跡カマド完掘状態
3ＳＩ95第10号竪穴住居跡カマド燃道部断面
図版84　1ＳＩ95第10号竪穴住居跡Ｐ3遺物出土状態
2ＳＩ95第10号竪穴住居跡北西隅床面白色粘土堆積状態
3ＳＩ95第10号竪穴住居跡Ｐ6断面
図版85　1ＳＩ101第12号竪穴住居跡完掘状態
2ＳＩ101第12号竪穴住居跡カマド内遺物出土状態
3ＳＩ101第12号竪穴住居跡カマド完掘状態
図版86　1ＳＩ108第13号竪穴住居跡火山灰・炭化材検出状態
2ＳＩ108第13号竪穴住居跡完掘状態
図版87　1ＳＩ108第13号竪穴住居跡カマド左袖側火山灰堆積状態
2ＳＩ108第13号竪穴住居跡内遺物出土状態
3ＳＩ108第13号竪穴住居跡カマド完掘状態
図版88　1ＳＢ166第2号・ＳＢ167第3号掘立柱建物跡
2ＳＢ141第4号掘立柱建物跡
図版89　1ＳＡ211第1号有溝柱列・ＳＡ213第2号有溝柱列
2ＳＡ213第2号有溝柱列
図版90　1ＳＡ211第1号有溝柱列
2ＳＡ200第2号柱列
図版91　1ＳＮ124第10号土器焼成遺構土器出土状態
2ＳＮ124第10号土器焼成遺構火床面
3ＳＸ126西側焼粘土塊出土状態
図版92　1ＳＮ81第8号・ＳＮ93第50号土器焼成遺構
2ＳＮ124第10号土器焼成遺構
3ＳＮ124第10号土器焼成遺構垂直写真
図版93　1ＳＮ46第2号土器焼成遺構
2ＳＮ78第6号土器焼成遺構
3ＳＮ79第7号土器焼成遺構
図版94　1ＳＮ09第1号土器焼成遺構
2ＳＮ09第1号土器焼成遺構覆土内壁体片
3ＳＮ46第2号土器焼成遺構炭化物堆積状態
図版95　1ＳＫ97第52号土坑
2ＳＫ105第56号土坑
3ＳＫ104第55号土坑
4ＳＫ110第59号土坑
5ＳＫ111第60号土坑
6ＳＫ112第61号土坑
7ＳＫ115第64号土坑
8ＳＫ116第65号土坑
図版96　1ＳＫ32第18号・ＳＫ33第19号土坑
2ＳＮ48第3号土器焼成遺構・ＳＫ49第27号土坑
図版97　1ＳＮ17第1号製鉄炉確認状態
2ＳＮ17第1号製鉄炉炉壁
3ＳＮ17第1号製鉄炉下部土坑内遺物出土状態

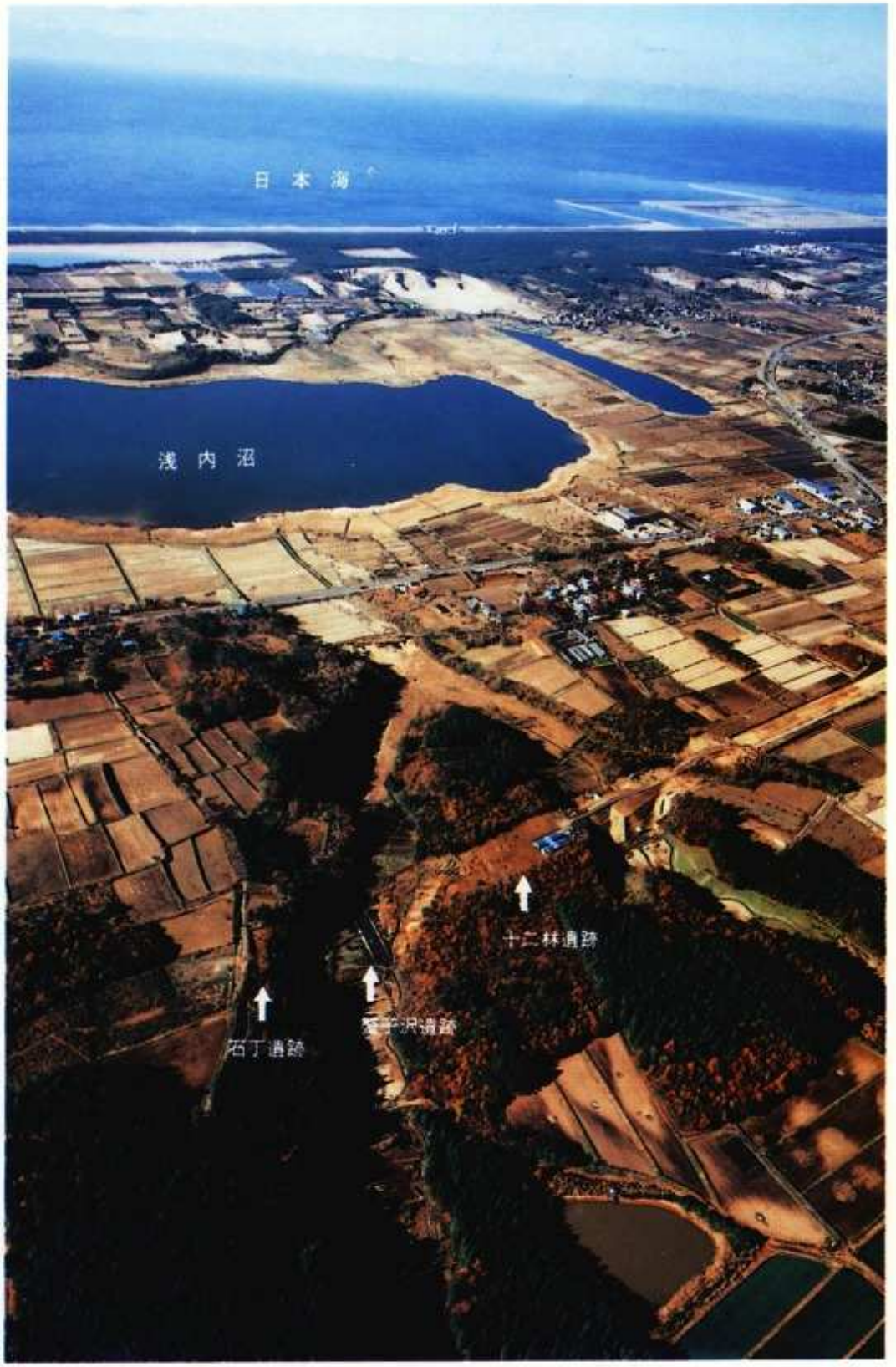
図版98　1 ＳＮ102第2号製鉄炉確認状態
2 ＳＮ102第2号製鉄炉先端部
3 ＳＮ102第2号製鉄炉断面
図版99　1 南側斜面検出状況【西→東】
2 ＳＮ220第3号炭窯【西→東】
図版100　1 ＳＮ220第3号炭窯木炭出土状態
2 ＳＮ220第3号炭窯底部断面
3 ＳＮ220第3号炭窯煙道部
図版101　1 ＳＮ223第1号須恵器窯検出状態
2 ＳＮ223第1号須恵器窯遺物出土状態
図版102　1 ＳＮ223第1号須恵器窯断面（窯体下部）
2 ＳＮ223第1号須恵器窯断面（C—Dセクション）
3 ＳＮ223第1号須恵器窯断面（E—Fセクション）
図版103　1 ＳＮ221第1号鍛冶関連遺構【東→西】
2 ＳＮ221第1号鍛冶関連遺構【南→北】
3 ＳＮ221第1号鍛冶関連遺構壁面
図版104　1 ＳＮ88第1号炭窯・ＳＮ89第2号炭窯調査前状況【北→南】
2 ＳＮ88第1号炭窯・ＳＮ89第2号炭窯調査後状況【北→南】
図版105　遺構外出土縄文・弥生土器
図版106　遺構外出土石器
図版107　平安時代遺構内出土遺物1
図版108　平安時代遺構内出土遺物2
図版109　平安時代遺構内出土遺物3・土錘
図版110　平安時代遺構内出土遺物4
図版111　平安時代遺構内出土遺物5
図版112　平安時代遺構内出土遺物6
図版113　平安時代遺構内出土遺物7
図版114　平安時代遺構内出土遺物8
図版115　平安時代遺構内出土遺物9
図版116　ＳＮ223第1号須恵器窯内出土遺物(1)
図版117　ＳＮ223第1号須恵器窯内出土遺物(2)
図版118　ＳＮ223第1号須恵器窯内出土遺物(3)
図版119　平安時代遺構内出土遺物(10)・遺構外出土遺物1
図版120　遺構外出土遺物2
図版121　ＳＮ223第1号須恵器窯内出土焼台(1)
図版122　ＳＮ223第1号須恵器窯内出土焼台(2)
図版123　ＳＮ223第1号須恵器窯内出土焼台(3)
図版124　遺構外出土の遺物（砥石）

福田遺跡周辺

図版125　1 縄文土器
2 石器

柏子所遺跡

図版126　縄文土器



石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡航空写真（南東上空から）

1．福田遺跡航空写真（西上空から）

2．福田遺跡航空写真（北上空から）

1．福田遺跡南東部遺構群、ＳＡ72第６号柱列・ＳＤ55第３号溝跡・ＳＤ56第４号溝跡（北→）

2．福田遺跡北部遺構群、ＳＩ30第12号竪穴住居跡（東→）

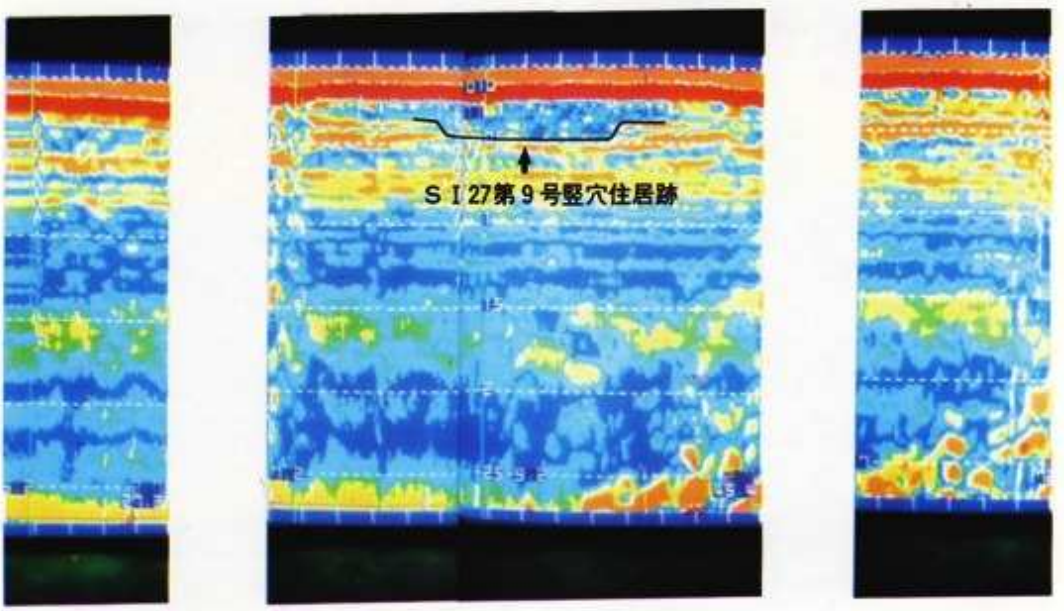
十二林遺跡ＳＮ223第１号須恵器窯（西→）

1．十二林遺跡ＳＮ223第１号須恵器窯内
遺物出土状況

2．十二林遺跡ＳＮ46第２号土器焼成遺構（南→）

1．十二林遺跡ＳＩ94第９号竪穴住居跡、ＳＡ144第１号掘立柱建物跡（南東→）

福　田　遺　跡
（縦 断）



2．福田遺跡ＳＩ27第９号竪穴住居跡レーダー探査画面写真

はじめに

調査に至るまでの経緯

一般国道７号八竜能代道路は、県北日本海沿岸部の輸送幹線道路として現在の一般国道７号の機能を拡大・強化するため計画された、自動車専用の高規格道路である。その幅は22m、計画延長は八竜町大曲から能代市浅内までの７kmである。この一般国道７号八竜能代道路の概略設計は昭和56年度に行われ、昭和57年度にその計画説明、昭和58年度に設計説明、昭和60年度には工事計画説明が行われて、昭和61年には一部着工を見ている。

路線予定区域は標高20～30mの段丘上にあるため、計画当初から埋蔵文化財包蔵地内に路線のかかることが予想された。そして、計画路線が示された段階で県教育委員会の把握している寒川、十二林、石丁、福田、萱刈沢、館ノ上のいわゆる周知の遺跡について路線のかかることが明らかになった。この時点で県教育委員会と工事実施者である建設省東北建設局能代工事事務所は協議を行い、路線上での分布調査を実施し、現状保存をはかることの不可能な遺跡については路線内での範囲確認調査を行った上で発掘調査による記録保存をはかることとした。

路線にかかる遺跡については県教育委員会が昭和60年度にその分布調査を実施したが、その結果、寒川、および萱刈沢の２遺跡については、路線にかかる遺跡の範囲が２つの地点に分かれることが、工事実施計画図面との照合で判明した。そのため、この２遺跡についてはそれぞれ南側から寒川Ⅰ、寒川Ⅱ、萱刈沢Ⅰ、萱刈沢Ⅱ遺跡と呼称して、路線上の遺跡としては独立した１遺跡として扱うこととなった。したがって、昭和60年の段階でその所在の確認された遺跡は８遺跡である。

昭和61年度から用地買収の完了した能代市側の遺跡から発掘調査が実施され、寒川Ⅰ、寒川Ⅱ遺跡が８月18日から12月５日までの間に調査された。この２遺跡についてはすでに昭和57年度に能代市浅内地区が対象となった国営能代開拓建設事業に先立っての範囲確認調査が実施されており、調査対象面積もそれぞれ約3,000㎡、4,000㎡と決定されていた。しかし、他の遺跡のうち用地買収の完了していた十二林、石丁、福田遺跡については調査を要する面積が確定していなかったために、寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査期間中に範囲確認調査が行われている。

この範囲確認調査を行った結果、十二林遺跡と石丁遺跡は間にある沢もふくめて一連の遺跡であると認められたが、沢地の部分は施工上、盛り土工法がとられるために、掘削による破壊を免れない水路部分のみの調査を行うことが県教育委員会と能代工事事務所の間で最終的に確認され、この沢地を盤子沢遺跡として追加することにした。また福田遺跡については範囲確認

調査によって、耕地として周辺農家により自己開田された際に、すでに遺跡の一部が削平されて壊滅していることが分かったため、それを外した区域が調査対象として設定された。

発掘調査に係る契約は福田遺跡については昭和62年4月1日に、十二林遺跡については同年5月1日、蟹子沢遺跡、石丁遺跡については同年7月1日に締結されている。

調査の組織と構成

1．遺跡所在地　福田遺跡；秋田県能代市浅内字福田上野204他
石丁遺跡；秋田県能代市浅内字石丁家の上46
蟹子沢遺跡；秋田県能代市浅内字蟹子沢43
十二林遺跡；秋田県能代市浅内字十二林93－1他

2．調査期間　福田遺跡；昭和62年5月11日～8月1日
石丁遺跡；昭和62年8月3日～9月17日、11月16日～11月26日
蟹子沢遺跡；昭和62年9月18日～10月2日
十二林遺跡；昭和62年5月11日～11月14日

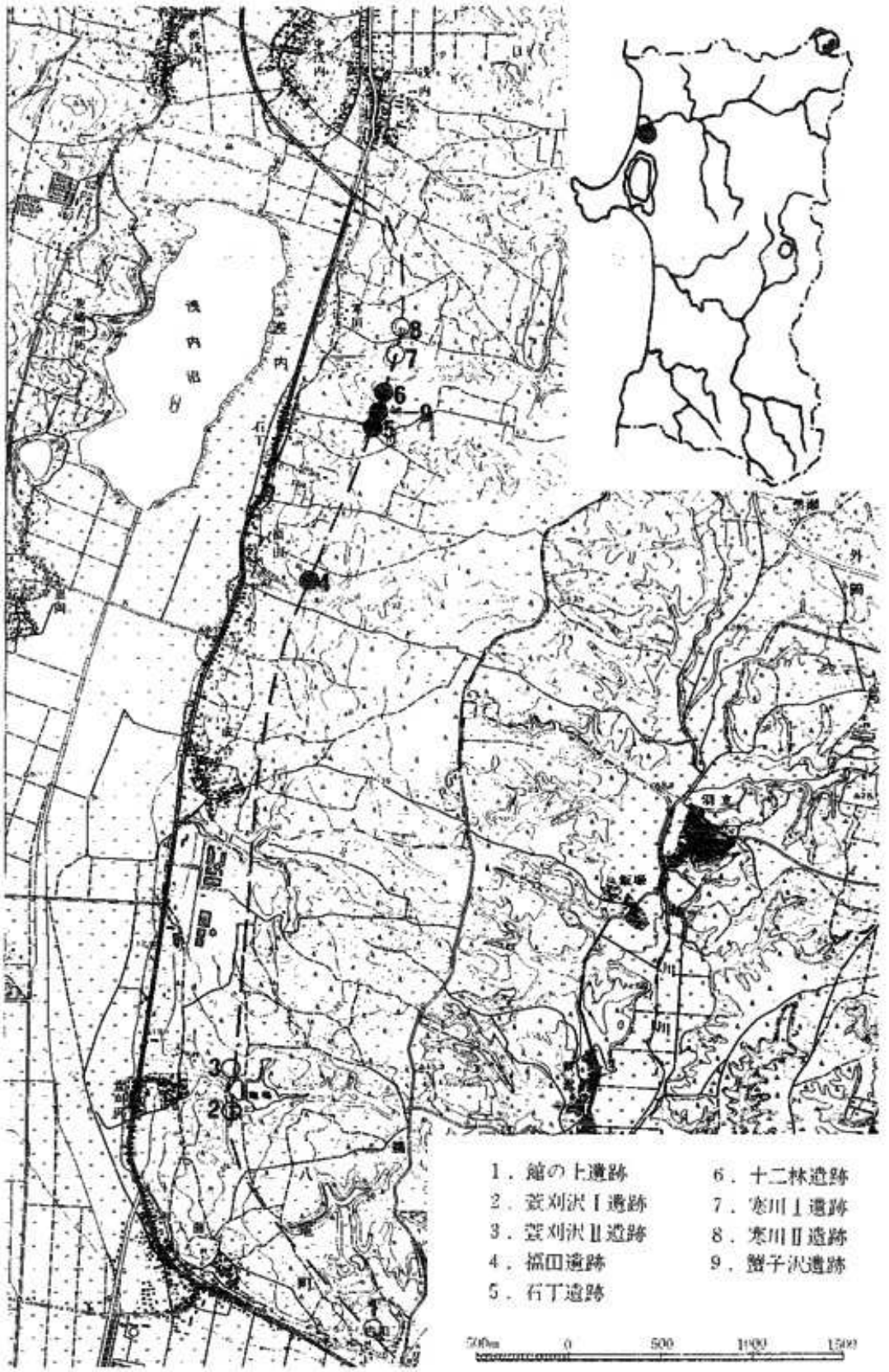
3．調査面積　福田遺跡；4,480㎡
石丁遺跡；1,080㎡
蟹子沢遺跡；500㎡
十二林遺跡；4,800㎡

4．調査主体　秋田県教育委員会

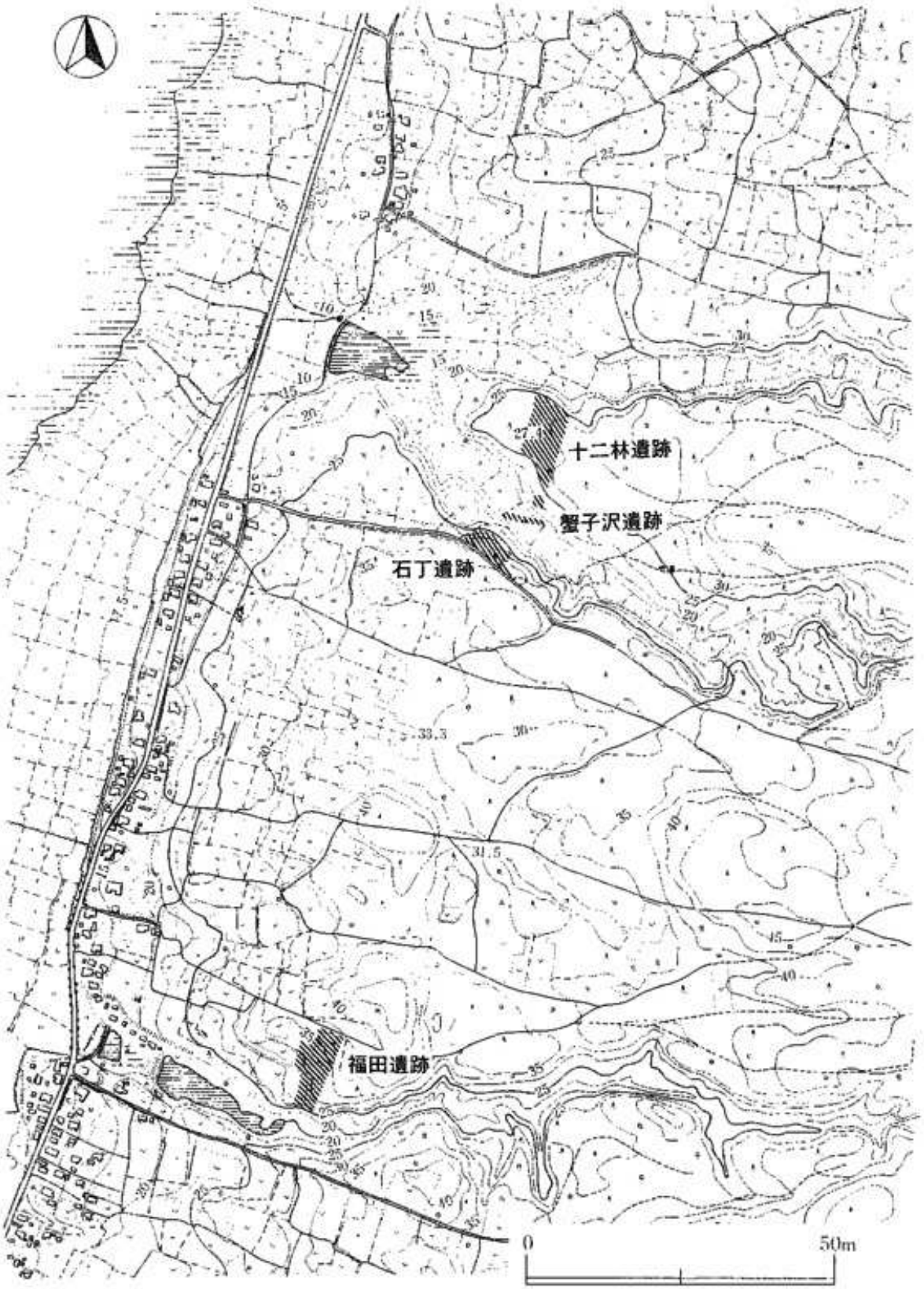
5．調査担当者　小林　克（秋田県埋蔵文化財センター　文化財主事）
高橋　学（秋田県埋蔵文化財センター　学芸主事）
横山伸司（講師）
三崎隆儀（秋田県立博物館　嘱託）

6．総務担当　加藤　進（秋田県埋蔵文化財センター　主査）
高橋忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター　主事）

7．協力機関　建設省東北建設局能代工事事務所
能代市教育委員会
能代市浅内地区自治会
能代市本地方史研究会



第１図　一般国道７号八竜能代道路遺跡位置図



第２図　遺跡の位置と周辺地形

立地と環境

遺跡の位置と地形

奥羽脊梁山脈中に源を発し秋田県の北部を西流して日本海に注ぐ米代川は、その下流域に広大な沖積平野を形成している。県境に近い岩手県安代町付近を分水嶺として花輪盆地、大館盆地、鷹巣盆地と順次下るこの川は、その下流域で大きく蛇行を繰り返す。能代平野と呼ばれるその沖積平野は、米代川の河口部に広がっており、その北側を青森県境との間に横たわる白神山地に、東側は奥羽脊梁山脈から西に突き出した太平山山地によって限られている。またその南側は、八郎潟を介して秋田平野へ連続している。

能代平野はまた秋田県の北部沿岸に連なる日本海岸砂丘（能代砂丘）の後背低地でもある。米代川河口北側に位置する峰浜村から八郎潟西岸の若美町までの間、延長35kmの長さをもつこの日本海岸砂丘は、その最高地点で標高62m をはかる。砂丘と砂丘後背地の境には、浅内沼をその最大のものとする湖沼群が連なっているが、これらは砂丘伏流水によってできたものとされている。

今回、調査の対象となった福田、石丁、蟹子沢、十二林の４遺跡は日本海岸砂丘の後背低地に臨む標高20～30m の台地上に立地している。遺跡は米代川の河口から8.5～9.2km南に、日本海汀線からは日本海岸砂丘、浅内沼を隔てて3.1～3.2km東に離れた地点に位置する。各遺跡の経緯度は以下のとおりである。

福田遺跡	北緯 40° 8′ 8″	東経 140° 1′ 9″
石丁遺跡	北緯 40° 8′ 34″	東経 140° 1′ 23″
蟹子沢遺跡	北緯 40° 8′ 36″	東経 140° 1′ 25″
十二林遺跡	北緯 40° 8′ 40″	東経 140° 1′ 28″

これらの遺跡が立地する台地は成合台地とよばれる海成段丘で、その北端に接続している浅内台地も含めて、能代市浅内字相染森から八竜町大曲までの間、幅2.2km、延長8kmにわたってひろがる広い台地である。成合台地の東側は鶏川川低地に、西側は浅内低地に臨み、この両低地に挟まれたかたちで伸びる台地はN－15° －E の延長方向にある。この方向は日本海の海岸線にも、また８km東側にある丘陵地の境界線にも一致する。このように南北に長い浅内・成合台地は、１～1.5kmの間隔をおいて東隅の浅内低地に直角に開口する5本の沢によって、大きく６つのブロックに分けられる。福田、石丁の２遺跡は、このうち北側から数えて２本目と３本目の沢に挟まれた台地上の南縁と北縁の一部に当たる。また蟹子沢遺跡は２本目の沢の低地部分、十二林遺跡は２本目の沢のなかで西側に突き出した舌状台地部分が相当する。

能代平野南部の地形・地質

土地分類基本調査『森岳・羽後浜田』【秋田県農政部農地整備課；1984(昭和59年)】および『能代』【同；1983(昭和58年)】によれば、能代平野を含む地形は山地、丘陵、台地・段丘地、低地と大きく4つに区分されている。

山地は、能代平野の北側に横たわる白神山地に属するものと、南東側に位置する太平山山地に属するものとに分かれる。前者はその起伏量が100～400mの小・中伏山地で、標高も最も高い大倉山で721mである。また後者は中・大起伏山地と小起伏山地に分かれ、最も高い房住山が標高409mである。また両山地はその基盤層に違いがあるとされ、白神山地に属する山地群は、素破里安山岩、西黒沢階玄武岩、西黒沢層緑色凝灰岩からなり、太平山山地に属する山地群は、グリーン・タフ地域の西端に位置する七座山山地が七座凝灰岩、船川黒色泥岩からなるほかは、女川層、船川上部層、船川下部層、天徳寺層などで構成される。

丘陵地は11の丘陵からなる。標高は100～300mで、その地質は第三紀中新世中期の西黒沢層玄武岩、後期女川層、船川層、天徳寺層の泥岩、凝灰岩、シルト岩および第四紀更新統笹岡層、潟西層のシルト岩、砂岩、砂がち堆積物から構成されている。

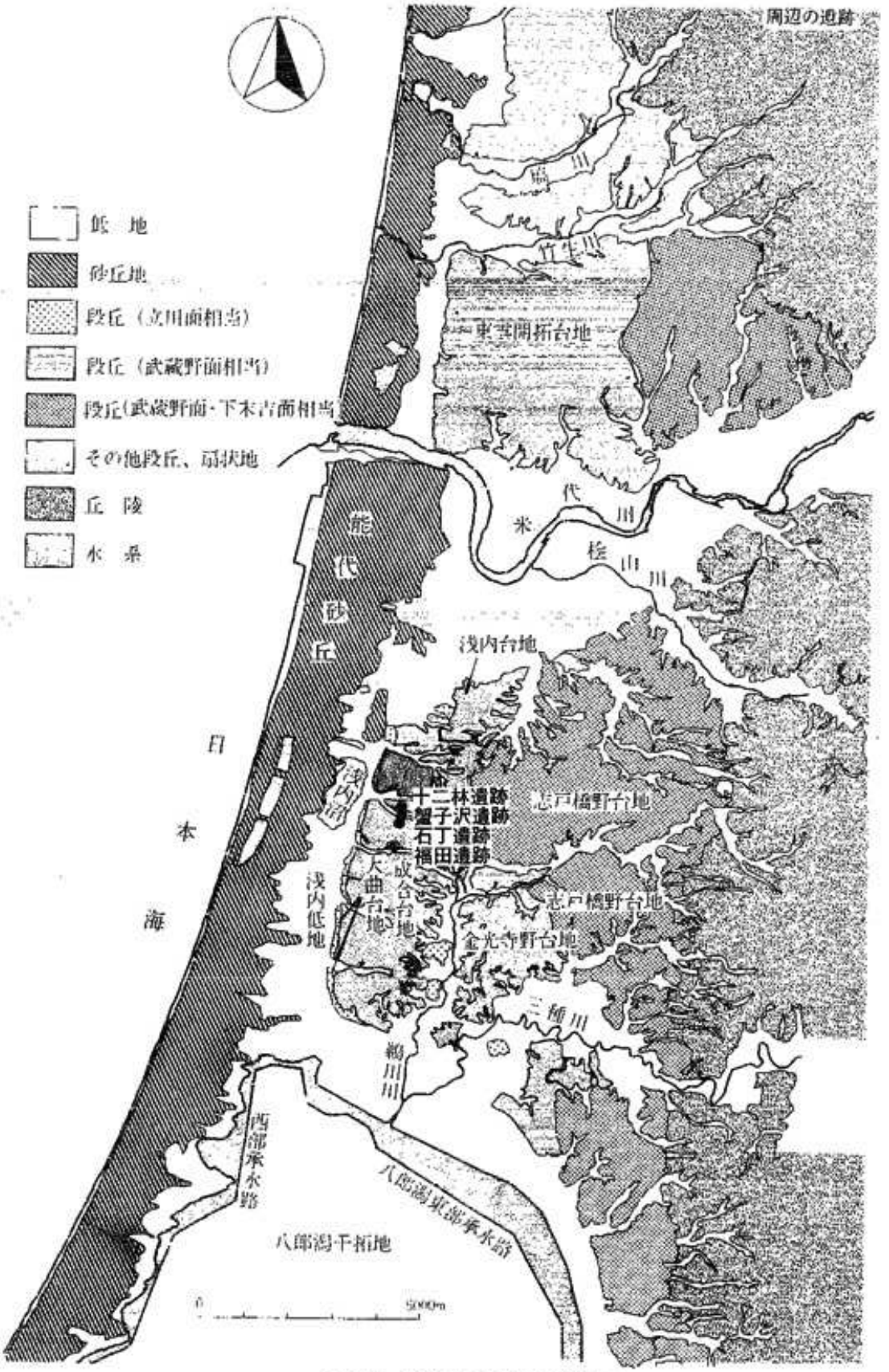
台地・段丘地は米代川の右岸に10、左岸に9つ存在する。左岸に属するものには海進に伴う侵食面としての海成段丘が含まれるが、豊岡台地と志戸橋野台地の一部は下末吉面に、鳥野台地、浅内台地、成合台地、金光寺野台地、志戸橋野台地の一部は武蔵野面に、大曲台地は立川面に対比されている。

低地のうちその主要部分をなす海岸低地は米代川下流部に集中し、他には台地面をきる幾つかの河谷低地がある。また米代川河口から若美町玉の池付近まで延長25kmに及ぶ日本海岸砂丘(能代砂丘)は、その形成時期で5つに区分されており[注1]、考古学的にも重要な砂丘である。

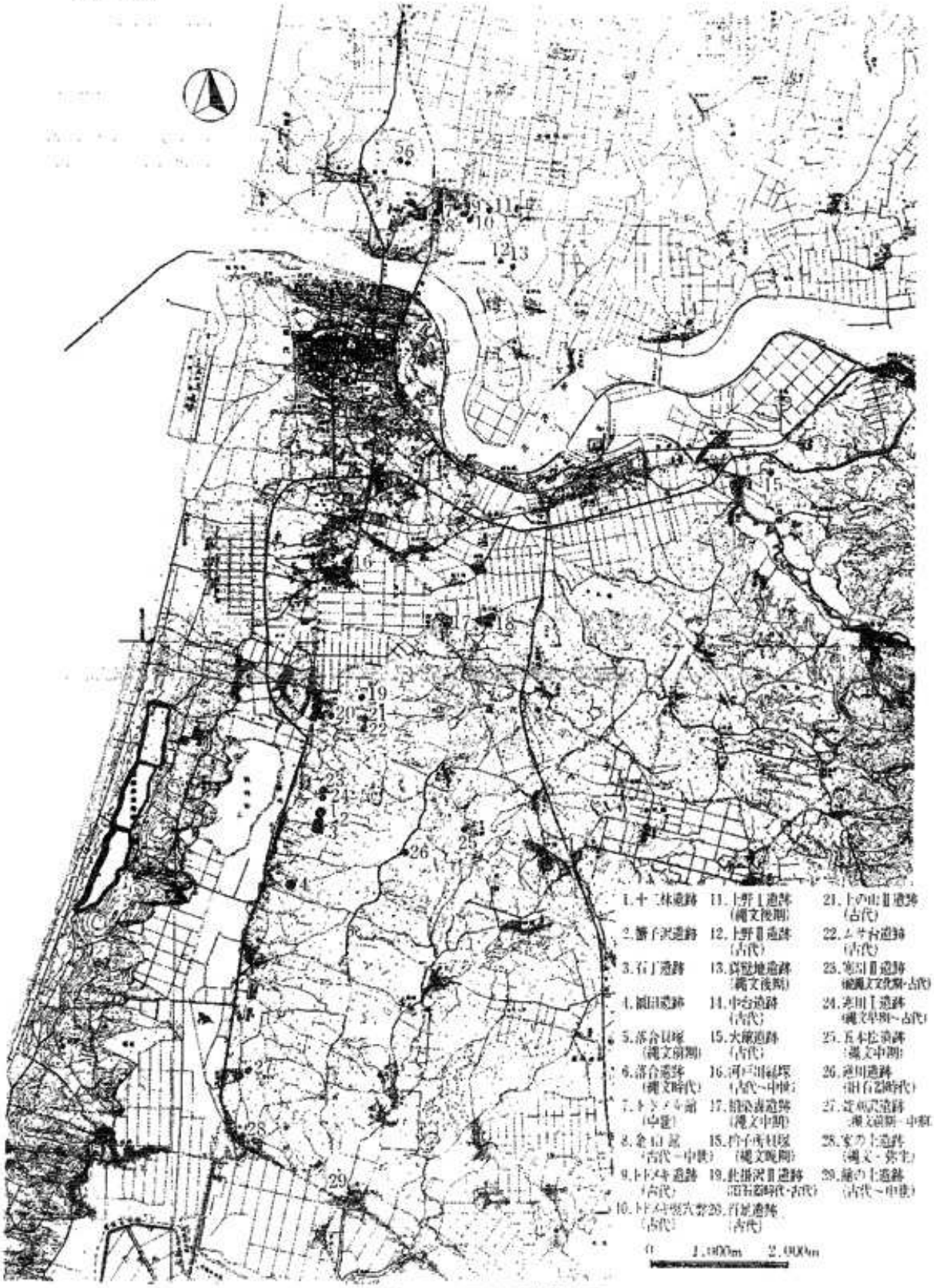
周辺の遺跡

能代市周辺および山本郡内の台地・段丘上には発掘調査の実施された遺跡も多く、柏子所貝塚、笹刈沢貝塚、杉沢台遺跡などの指定史跡をはじめ、昭和51年までに278箇所が登録されている[注2]。

一般国道7号八竜能代道路が通る成合台地とその北側に隣合う浅内台地上では、旧石器時代の此掛沢Ⅱ遺跡、逆川遺跡、縄文時代早期～後期の寒川Ⅰ遺跡、続縄文文化期～平安時代の寒



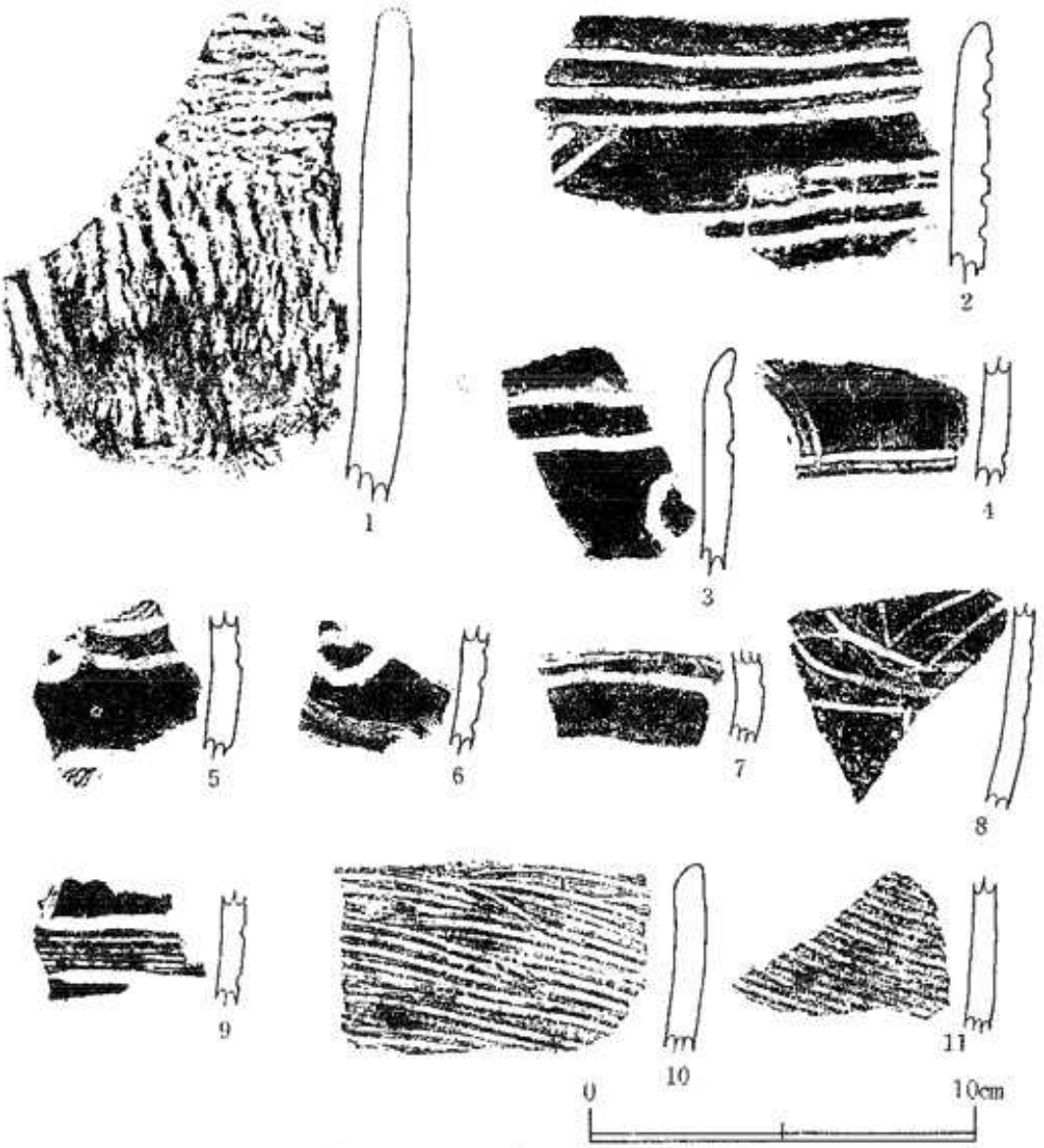
第3図　能代平野の地形分類図


1.十二林遺跡
2.簪子沢遺跡
3.石丁遺跡
4.福田遺跡
5.落合貝塚
(縄文前期)
6.落合遺跡
(縄文時代)
7.トドメキ館
(中世)
8.金山館
(古代～中世)
9.トドメキ遺跡
(古代)
10.トドメキ竪穴群
(古代)
11.上野Ⅰ遺跡
(縄文後期)
12.上野Ⅱ遺跡
(古代)
13.真慈地遺跡
(縄文後期)
14.中台遺跡
(古代)
15.大館遺跡
(古代)
16.河戸川緑塚
(古代～中世)
17.稲染森遺跡
(縄文中期)
18.拾子所貝塚
(縄文晩期)
19.此掛沢Ⅱ遺跡
(旧石器時代・古代)
20.百景遺跡
(古代)
21.上の山Ⅱ遺跡
(古代)
22.ムサ台遺跡
(古代)
23.寒川Ⅱ遺跡
(縄文文化期・古代)
24.寒川Ⅰ遺跡
(縄文早期～古代)
25.五本松遺跡
(縄文中期)
26.道川遺跡
(旧石器時代)
27.笠川沢遺跡
(縄文前期～中期)
28.家の上遺跡
(縄文・弥生)
29.館の上遺跡
(古代～中世)
0 1,000m 2,000m

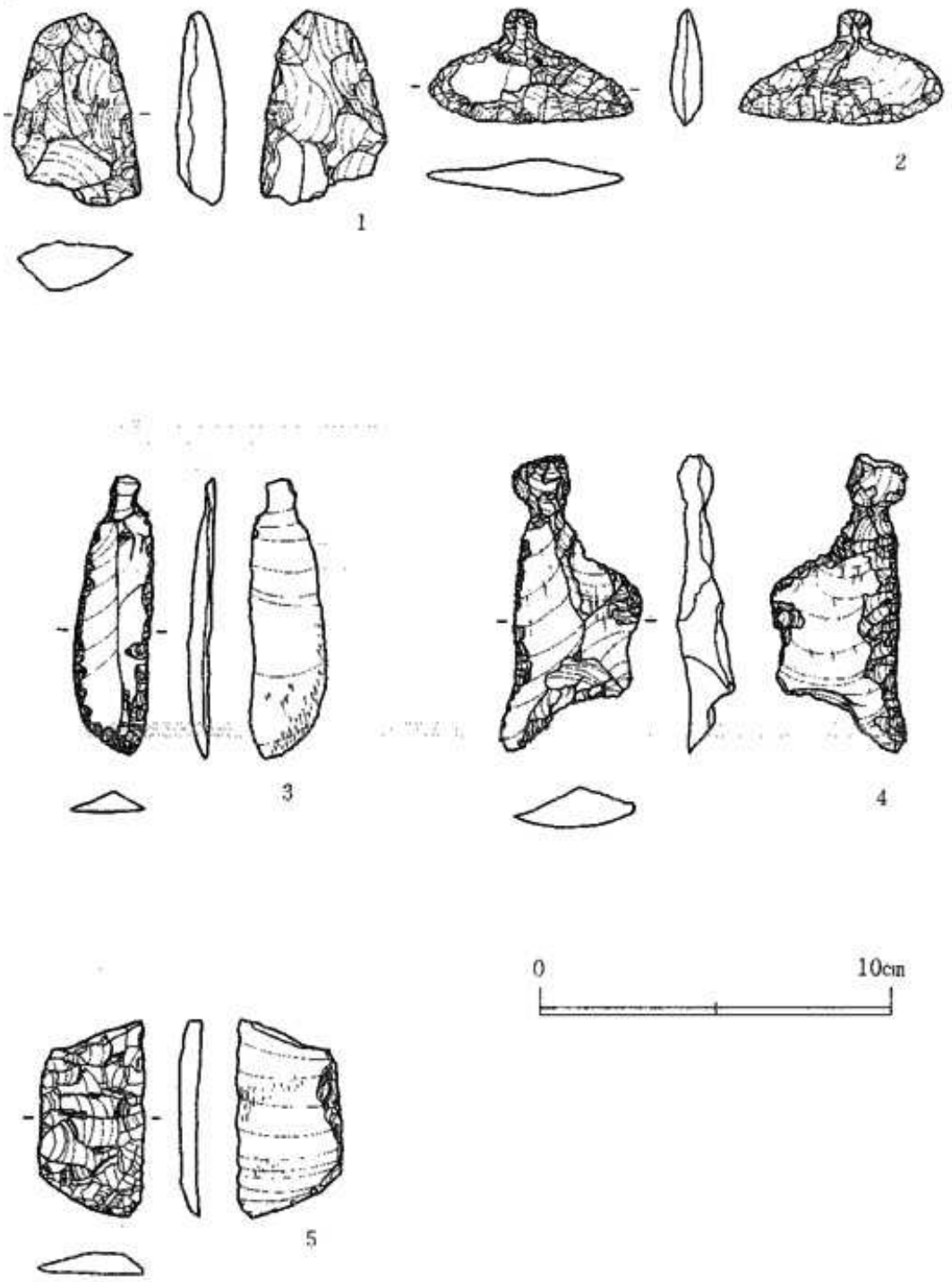
第４図　周辺遺跡分布図

川Ⅱ遺跡、上の山Ⅱ遺跡などが知られている。

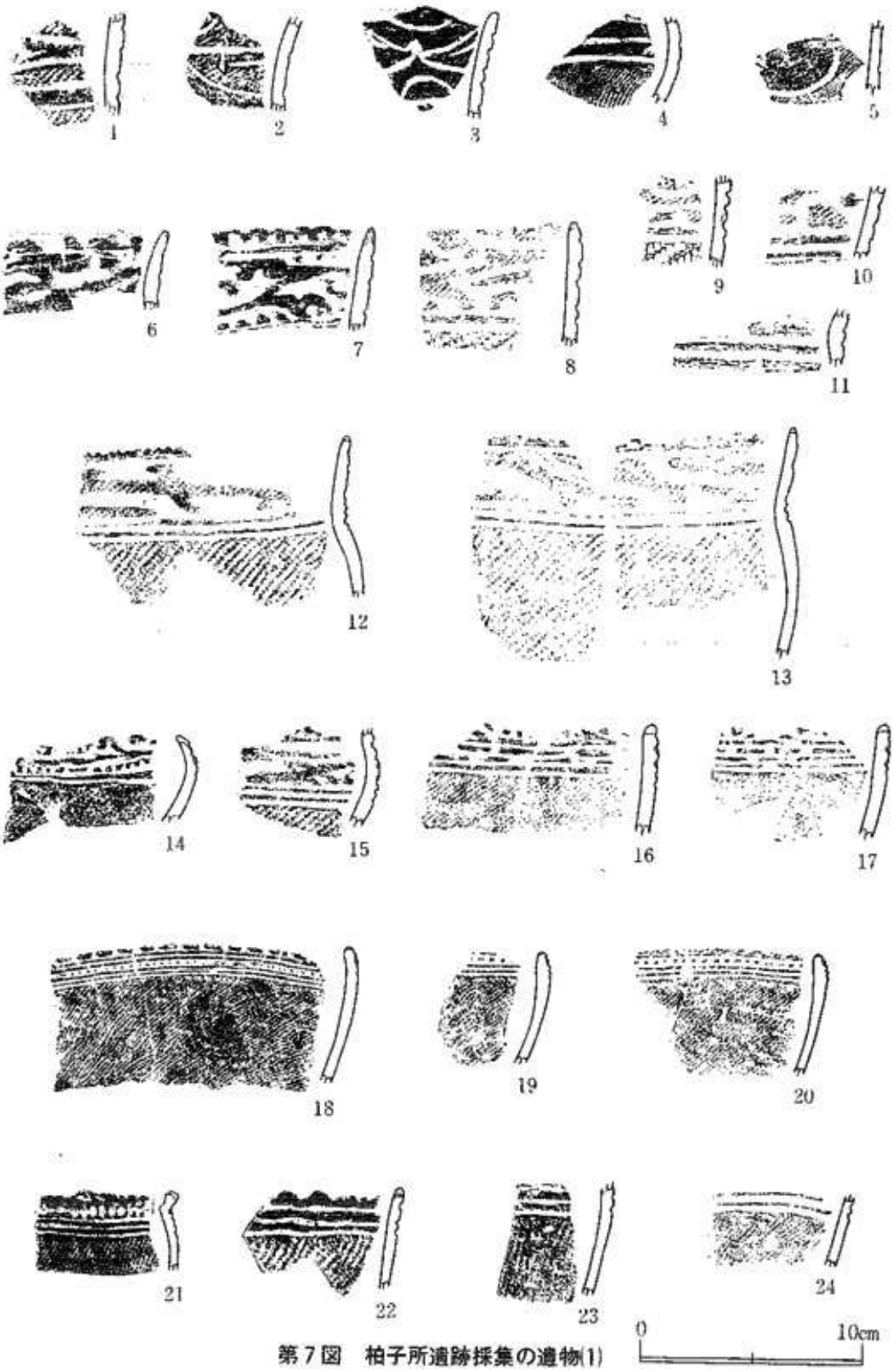
今回の調査期間中に表面採集によって得られた遺物を第5図～第8図に示す。採集地は福田遺跡南側の沢を東に上った地点と、柏子所貝塚北側の斜面である。福田遺跡周辺採集の遺物には縄文時代前期の円筒下層a式土器（第5図―1）、後期前葉の十腰内Ⅰ式土器（第5図―2～9）、同じく後期のものと思われる横位の貝殻条痕を施した土器（第5図―10）などがある。また、柏子所貝塚採集の遺物には縄文時代晩期初頭～中葉の大洞B1式から大洞C1式までの土器が含まれるが、比較的広い口縁部文様帯にK字文や擦消しによる雲形文の描かれる例（第7図―6～13）が注意される。



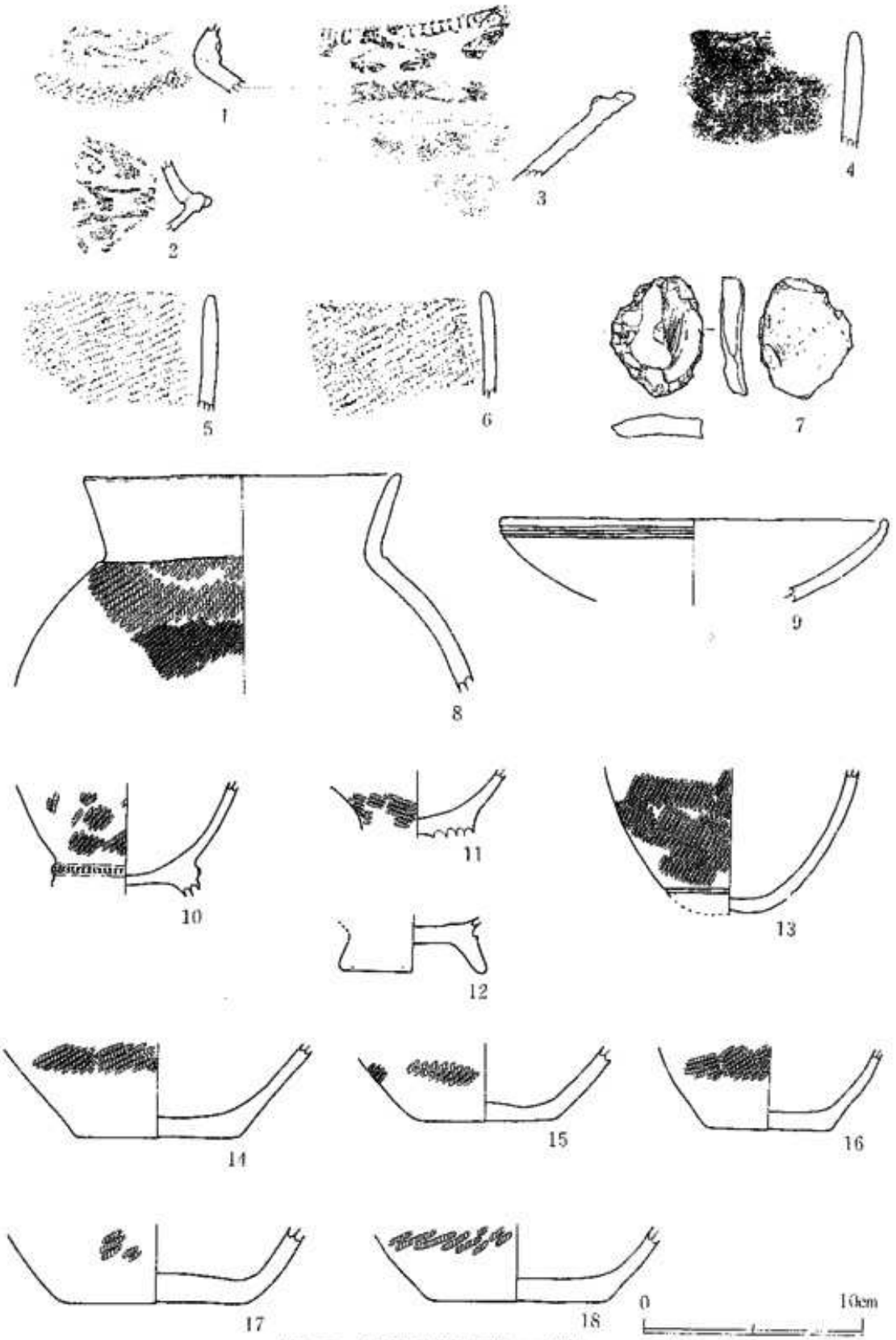
第5図　福田遺跡周辺採集の遺物(1)



第６図　福田遺跡周辺採集の遺物(2)



第７図　柏子所遺跡採集の遺物(1)



第8図　柏子所遺跡採集の遺物(2)

発掘調査の方法

調査区の設定

一般国道７号八竜能代道路建設関係の発掘調査では、本調査の実施年度にさきがけて行われた範囲内確認調査によって調査対象範囲および面積が決定されている。昭和62年度に行われた４遺跡の範囲確認調査は工事にかかる区域内に試掘坑、試掘溝をいれ、遺構存在の程度、遺物散布の範囲を推察する方法や、地下遺構をレーダー探査によってとらえる方法で行われた（巻頭図版6—2）。その成果の一部は『秋田県文化財調査報告書第155集 遺跡詳細分布調査報告書』【秋田県教育委員会　1987(昭和62年)】に収められている。

本調査では工事によって破壊される範囲が調査対象区域となるため、調査区は路線の方向に沿って長く設定される。今年度調査された４遺跡のうち4,000㎡以上の調査面積をもつ福田、十二林遺跡では路線の伸びる南北方向に 120ｍ、それと直交する東西方向の幅が40ｍと細長い範囲の調査区が設定されている。

福田遺跡、石丁遺跡、十二林遺跡の調査はグリッド法により、盤子沢遺跡の調査は幅４ｍのトレンチ法によった。グリッド法による調査をおこなった遺跡では路線中心杭のひとつを選んで基準点とし、磁北方向に基線をひいて東西、南北方向にそれぞれ４ｍ刻みに座標を設けていった。ただし十二林遺跡については中心杭のうち２つを選び、その両方を通る線を基線としている。東西方向の刻みには２文字のアルファベットをＬＩ・ＬＪ・ＭＡ・ＭＢ・ＭＣ・ＭＤ・ＭＥ……と、南北方向の刻みには２桁のアラビア数字を48・49・50・51・52・53・54・55・…と振り当て、その組み合わせによって各座標を、すなわちＬＩ48・ＬＪ49・ＭＡ50・ＭＢ51・ＭＣ52……のように、呼ぶこととした。この際、基準点となった路線中心杭にはＭＡ50の呼称が与えられている。福田遺跡、石丁遺跡、十二林遺跡の基準点(ＭＡ50)となった中心杭は以下の通りである。

福田遺跡……ＳＴＡNo.240

石丁遺跡……ＳＴＡNo.284

十二林遺跡……ＳＴＡNo.295　(No.297を見通した線が基線)

実際には調査区内に４ｍ四方に木杭を打設して方眼を組んだが、各方眼の呼称はその南東隅の木杭に振り当てられた座標の呼称にならうこととした。掘り作業はこの方眼に沿って行い、また遺構外からの遺物の取り上げも方眼毎に行っている。

また、調査の際に記録されるレベルは、この路線中心杭をベンチ・マークとして測量している。調査区が南北に長い福田遺跡、十二林遺跡では適宜方眼杭の上にベンチ・マークの移動を行った。

遺構の精査、およびその記録

検出した遺構は、4分法または2分法によって覆土を掘り込んだが、覆土中、遺構底面から出土した遺物とも、その出土状態を記録するため出土位置に残したまま精査している。カマドについてはいわゆる「キの字形」切開法によった。炭窯、須恵器窯などは窯体中軸線にそって一本、それと直交する数本の覆土観察用ベルトを残して精査した。また、通常の精査では取り落とされる遺物(炭化米、鍛造薄片など)を採取するため、微細遺物の包含されると思われるカマド周辺などの遺構内の覆土、および製鉄炉周辺の土は1mmメッシュの篩を用いて水洗した。

検出した遺構は写真と実測図によって記録していった。

写真は遺構を検出し遺構番号をふりあてた時点でまず確認状態を撮影し、次に覆土を掘り上げる途中で覆土断面、遺物出土状態の撮影、そして最後に完掘状態の撮影と、同一遺構について最低3回の撮影を行っている。フィルムは35mmのモノクロおよびリバーサル・カラーの2種類を用いている。

図面は遺構の平面形、遺物の出土状態を記録した平面図と、遺構の断面形、覆土の堆積状態を記録した断面図の2種類の実測図を作成した。平面図の作成にあたっては方眼杭を用いた簡易遣り方測量と、リフティング・ケーブル・カメラシステム(註3)を用いる方法とによった。福田遺跡の竪穴住居跡平面図、十二林遺跡南側斜面拡張区の炭窯、須恵器窯の平面図はこのリフティング・ケーブル・カメラシステムによる。これらの図面は原則として1/20の縮尺によっているが、カマドや特に遺物出土状態を細かく記録する必要のある土器焼成遺構などは1/10の縮尺で作成した。また平面図には適宜その標高を書き込むようにしている。

福田遺跡、十二林遺跡については調査の終了間際に航空写真の撮影を行っている。また福田遺跡については航空写真の撮影と併せて、縮尺1/200の遺構全体図作成のため、航空測量を行っている。

註

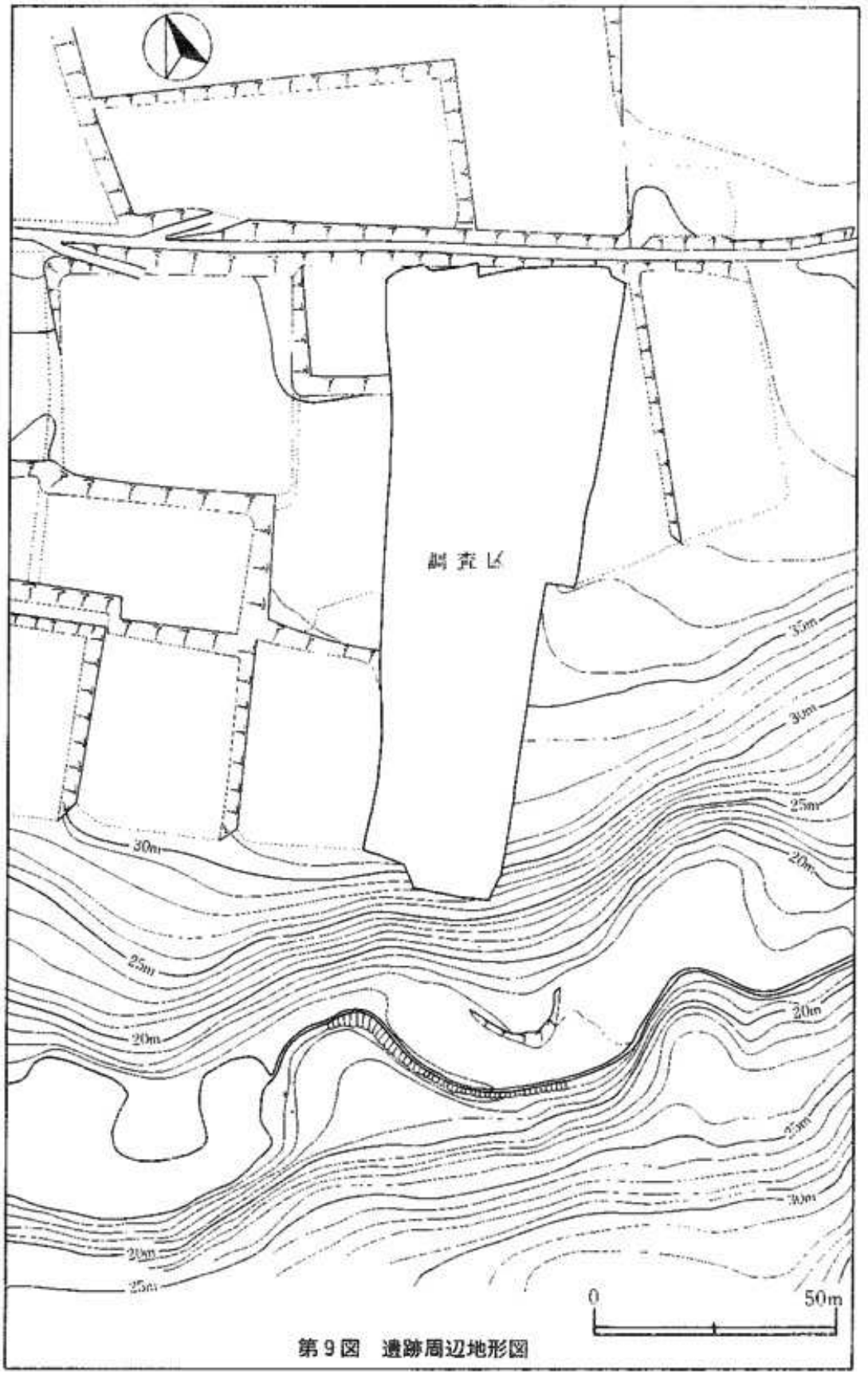
註1　工藤英美「能代砂丘について」『能代山本地方史研究』第4号1987(昭和62年)

註2　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』1976(昭和51年)

註3　シン航空写真株式会社委託の写真測量法

福田遺跡

（3FD）



第9図　遺跡周辺地形図

第1章　発掘調査の概要

第1節　遺跡の概観

福田遺跡はJR能代駅の南約8km、能代市浅内字福田上野に所在する。遺跡は日本海汀線から3.1km離れた成合台地に立地している。海岸線と平行するように南北に延びるこの台地には、これと概ね直交するように沢が幾本か入り込んでいる。遺跡の南端は、福田堤を抱える沢により画されている。北側に目を転じれば、約1kmで次の沢に行き着く。ここが蟹子沢遺跡の所在する沢であり、福田遺跡ののる台地北端部には石丁遺跡が占地することになる。

本調査に先立って実施された、昭和60年の分布調査、昭和61年の範囲確認調査において明らかにし得たことは次のとおりである。遺跡の中を東西に走る農道以北については、道路北～西側にかけて自己開田等により完全に削平されている。ただし開田の際多量の土器（土師器らしい）が出土していることから福田遺跡の一隅を占していたことは確かであろう。ここで標高が約38mあるが、ここから北・北東側の台地中央部平坦面にかけてはやや高度を増し40～43mを測る。路線内だけの試掘結果ではあるが、標高が40mを超える地点では遺構・遺物を確認できなかった。すなわち福田遺跡に限定すれば、遺跡の北端は農道の北側、削平された標高約38mの水田面であり、ここを最高位として南側と西側に緩く下る一帯をその範囲と推定できる。調査区は、農道以北の削平された部分を除く路線内の全域が遺跡の範囲であり、面積にして4,780㎡が対象となる。

遺跡現況は、調査区北側が畑地（休耕田）、南側が松を中心とする山林である。標高は最も高い北東部で37.8m、ここから南西方向に緩く傾斜し、南西端では31.4mを測る。北側の畑地は、減反政策により水田から転作された耕地であり、農道北側の水田同様、30年程前に開田されたものである。開田にあたって、調査区内だけでも標高差が4～5mもあるため、斜面を切土・盛土して5段の平坦面を造り水田として使用していたものである。この結果、表土に1m以上も盛土された箇所や、地山面を少なくとも50cmは削平された箇所が生じることになった。

遺跡の基本層位は、畑地部分（A地点）と松林部分（B地点）で観察・記録を留めてある。

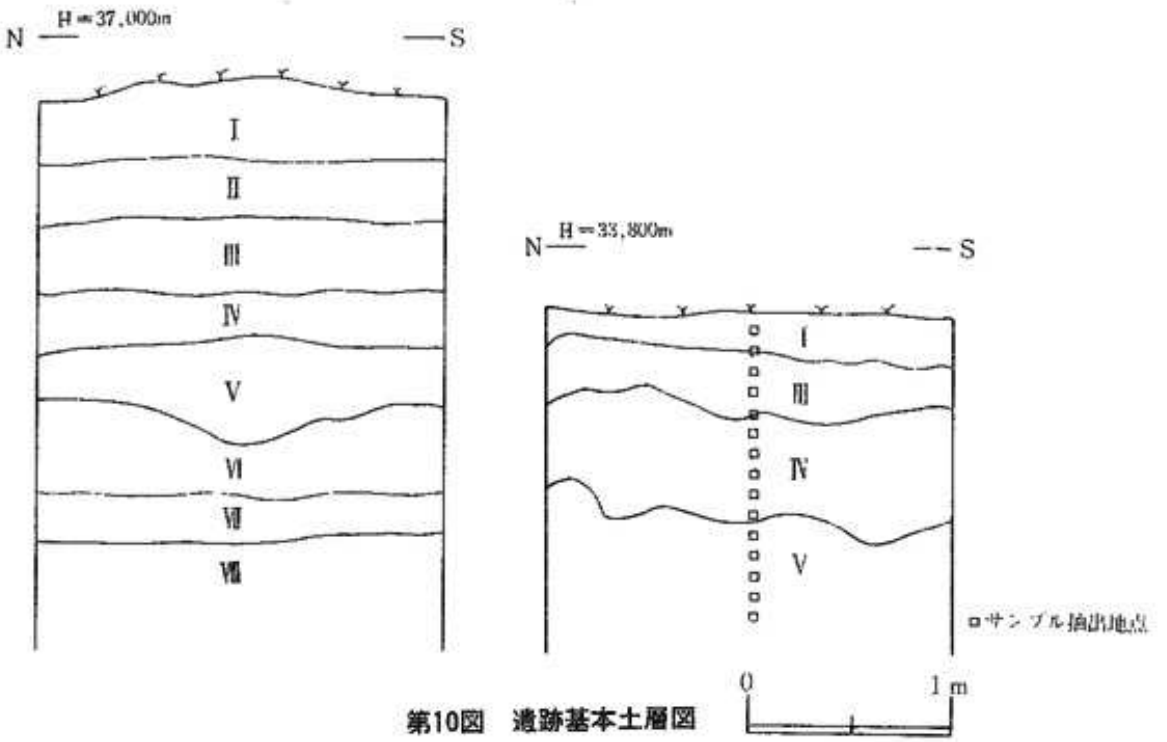
A地点（調査区中央東側の西面する壁で観察を行った）

Ⅰ層　褐　色（10YR4／4）耕作土、盛土（厚いところでは1mを超す）

Ⅱ層　暗褐色（10YR3／3）旧表土

Ⅲ層　黒褐色（10YR2／2）部分的に途切れる、土器・陶器を僅かに含有する。

Ⅳ層　黒褐色（10YR2／3）地山漸移層・遺物包含層、Ⅲ層より赤味やや増し、しまり・粘性



第10図　遺跡基本土層図

もⅢ層よりややある。同層で大部分の遺構が確認できる。

Ⅴ層　黄褐色（10Y 5／6）粘質土、この層以下がいわゆる地山である。

Ⅵ層　オリーブ褐色（2.5Y 4／6）粒子の粗い砂質土、堅く締まっている。

Ⅶ層　オリーブ褐色（2.5Y 4／6）基本的にⅥ層と同、暗オリーブ褐色（2.5Y R 3／3）の砂質土が筋状に水平に入り込む。

Ⅷ層　オリーブ褐色（2.5Y 4／4）粒子と粗い砂質土、同層上位にはやや明るいオリーブ褐色（2.5Y 4／6）砂質土が、下位には暗オリーブ褐色（2.5Y 3／3）砂質土がそれぞれ筋状に入る。

B地点（調査区南東部の西面する壁で観察を行った）

Ⅰ層　黒褐色（10Y R 3／2）表土、木根多い、層厚は10～40cm。

Ⅱ層　黒褐色（10Y R 2／3）地山漸移層、A地区Ⅳ層に対比される遺物包含層、この地点を含め調査区中央～東側では同層を確認できなかった。

Ⅲ層　褐　色（7.5Y R 4／6）粘質土、遺構確認面である。

Ⅳ層　褐　色（7.5Y R 4／4）粘質土、Ⅲ層の粘質土に褐色の砂質土が斑状に混入される。粘質部分は堅く締まり、砂質部分はややしまりに欠ける。

Ⅴ層　オリーブ褐色（2.5Y 4／6）粒子の粗い砂質土、堅くしまっている。A地点Ⅵ層以下に対比される。

43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
42
41
40
39
38
37
36
35
MF
ME
MD
MC
MB
MA
LJ
LI
LH
LG
LF
LE
LD
LC
LB
LA
KJ
KI
KH
KG
KF
SK13
SK22
SK12
SI21
SK11
SK10
SK09
SA46
SA86
SA87
SA85
SI30
SI31
SI04
SD38
SD37
SK40
SK70
SK25
SI01
SI05
SK79
SK26
SI27
SK15
SB14
SI29
SA63
SI65
SX67
SX77
SX62
SD47
SD34
SA84
SB49
SB06
SI03
SB78
SD75
SK59
SD56
SB73
SD76
SK39
SA82
SK58
SA72
SK07
SK08
SB81
SI02
SK18
SK17
SKT16
SD83
SB80
SI18
SK68
SI57
SI32
SD55
SK54
SD52
SI64
SK41
SI28
SK44
SK45
SD33
SK36
SK35
SD71
SI66
SK60
SX60
SK42
SK43
SK50
SX51
B地点
A地点
0
20m

第11図　遺構配置図

第2節　調査の経過

5月11日より調査を開始した。調査に先立ち、調査区北側の盛土部分を重機により除去している。作業は、調査区内に残る雑木の排除から取りかかり、スコップを用いての粗掘りは13日に入ってからである。同日、早くもＬＭ・ＬＮ54にて住居跡らしい黒色土の落込みを発見している。15日より粗掘りの進度を高めるべくベルトコンベアー・ホイルローダーを投入する。18日、ＬＫ53にて径20cmの範囲からハマグリと思われる2枚貝が塊状となって出土。遺構に伴うものではないらしい。25日、粗掘りと並行して北東部から遺構確認のための精査に入る。6月1日、ＬＥ55にて黒色の大きな土器片が2枚重なって出土。取り上げてみると、内黒の土師器で鍋のような器形を呈するものであった。4日、調査区中央～北側の大部分で遺構確認を終える。遺構番号を付し次第、確認面の写真撮影を行う。10日、本日で遺構番号28まで登録。16日、本格的に遺構精査に入る。切土により削平されて堆積土の少なくなっているＳＩ 29については、土を総て回収し水ぶるいにかける。18日、待望の炭化米1粒発見、最終的には184粒を検出している。26日、ＳＫ10堆積土の上位において灰白色を呈する粉状の物質を確認、火山灰らしい。ここ数日、晴天続きで地山面のヒビ割れ目立ち始める。遺構周辺の水まき終日フル稼動する。29日、リフティング・ケーブルシステムカメラを導入し、遺構実測の省力化を企る。初日はまずＳＩ 29で実験。7月6日、ＳＩ 27床面にて土師器とも須恵器とも呼べないような完形の皿が出土する。9日、ＳＫ44でも火山灰を検出。この遺構は土器焼成の土抗のようである。14日、2間×1間の掘立柱建物跡であるＳＢ06周辺を精査したところ、これを大きく囲むように3間×2間の掘立柱建物を確認。ＳＢ49とする。17日、調査区南東部で住居跡が数軒重複しているようであるが、埋土と地山の土色が類似しプランははっきりしない。同日午後からの雨で翌18日には3軒分のプランを確認できた。20日、ＳＩ 57とした3軒の中では最も新しい住居跡を掘り下げる。床面まで深いところで60cmもある。床面から湯のみ茶碗のような小型の坏出土。23日には完掘したが風雨強くなり写真撮影は明日にする。24日、ＳＩ 23東側の焼土遺構(ＳＮ24)中に完形の土師器坏が倒立で出土、後日水洗いしたところ「大」の墨書が確認できた。27日、地元のお祭りのため出勤率極めて低い。28日、3軒の重複まで確認していた南東部では、精査の結果5軒と判明、さらにこれら住居跡の外周を幅15～20cmの溝が他と直交するように巡っていることも明らかになった。31日、調査区南西部で住居跡確認（ＳＩ 65)、開田による削平で西側半分は既に失われていた。8月1日、総ての遺構調査・図面作成等を完了させる。同日、北方向からの全景写真撮影を行い、本日で現地での調査を終了した。

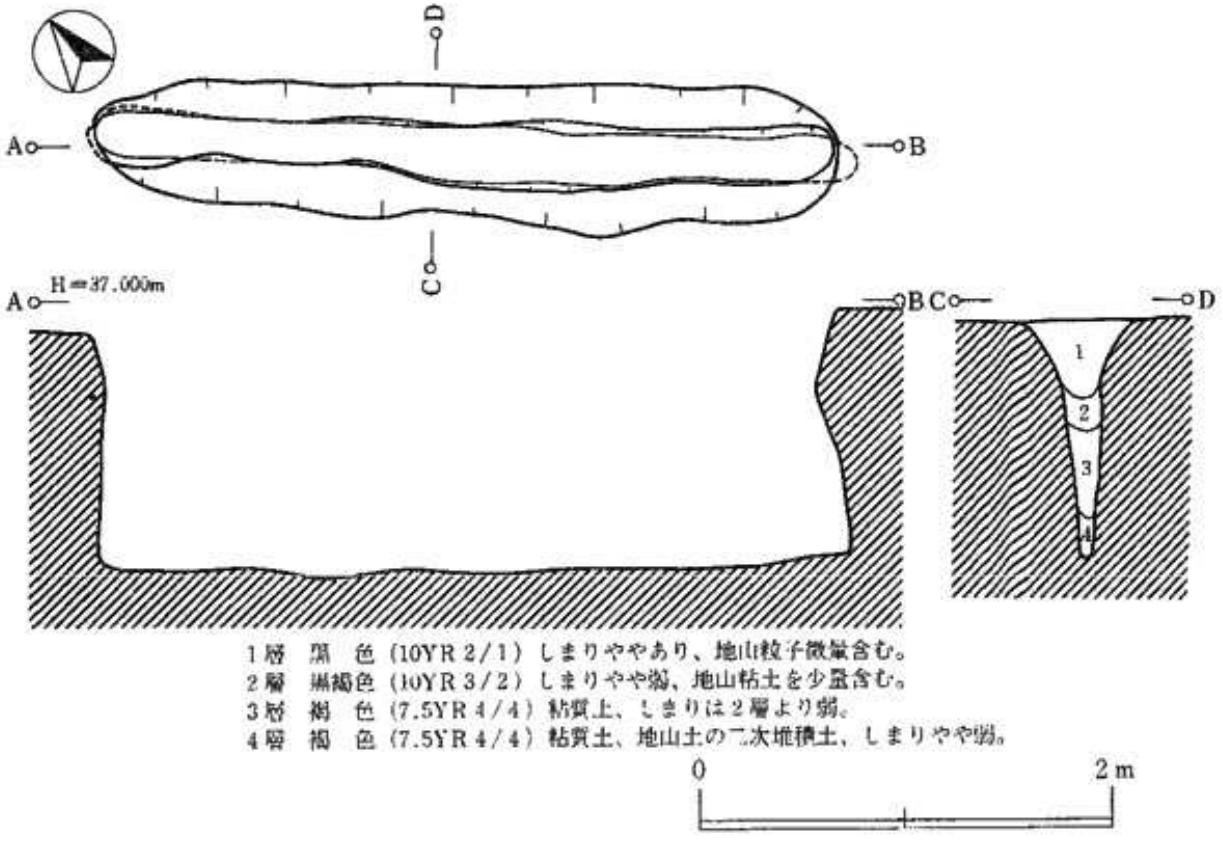
第２章　調査の記録

第１節　縄文時代の遺構と遺物

発掘調査により得られた膨大な資料のうち、縄文時代に帰属すると考えられるものには、ごく僅かな縄文土器片と石器・フレークが数えられるにすぎない。しかも総てが遺構外の出土であるため、縄文時代の遺構が存在していたのかについては、遺物から明示できない。ただ形態的な特徴、埋土の状態などから次に記する遺構を縄文時代のものと判断している。

ＳＫＴ16第１号Ｔピット（第12図、図版６）

調査区北東部、ＫＩ 57、ＫＪ 57・58の地山面で検出した。確認面での長軸は3.65cm、これに直交する短軸は0.6～0.7m、深さは1.16mある。長軸方向は、北西一南東となる。底部は長軸方向で幾分オーバーハングしており、その長さは3.8mである。埋土は第12図のとおりであるが、埋土下位ほど粘性は強くなるがしまりは次第に弱くなっていく。



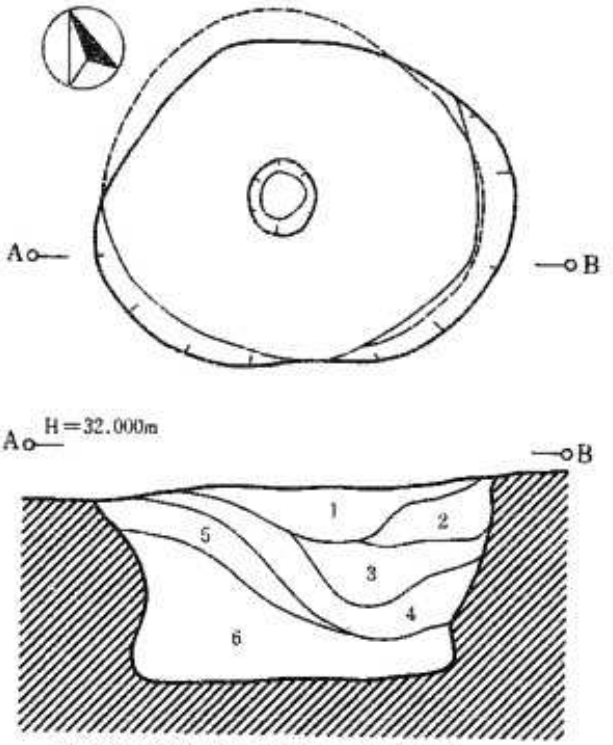
1層　黒　色（10YR 2/1）しまりややあり、地山粒子微量含む。
2層　黒褐色（10YR 3/2）しまりやや弱、地山粘土を少量含む。
3層　褐　色（7.5YR 4/4）粘質土、しまりは２層より弱。
4層　褐　色（7.5YR 4/4）粘質土、地山土の二次堆積土、しまりやや弱。

第12図　ＳＫＴ16第１号Ｔピット

ＳＫ63第2号フラスコ状土坑（第13図、図版6）

調査区南西部、ＭＨ40・41の地山面で検出した。袋状を呈する土坑であり、遺構の確認状況、埋土の状況が他の遺構と異なることと、同形態の土坑が昭和61年に調査された寒川Ⅱ遺跡において、縄文時代の遺構として検出されている。このことから遺物の出土はないものの、縄文時代の土坑と判断したものである。

規模は、長径1.9m、短径1.7mでやや歪つな円形を呈している。深さは、確認面から0.9～1ｍである。ほぼ平坦な底面中央には径35cm、深さ10cmのピットが掘り込まれている。



第13図　ＳＫ63第２号土坑

遺構外出土の遺物

縄文時代の遺物としては、土器片2点、剥片も含めた石器12点が出土している。ここでは図示可能な土器片2点と石鏃1点、トランシェ様石器２点、削器２点、調整のある剥片２点、磨製石斧１点、石核１点、石錘１点を扱う。

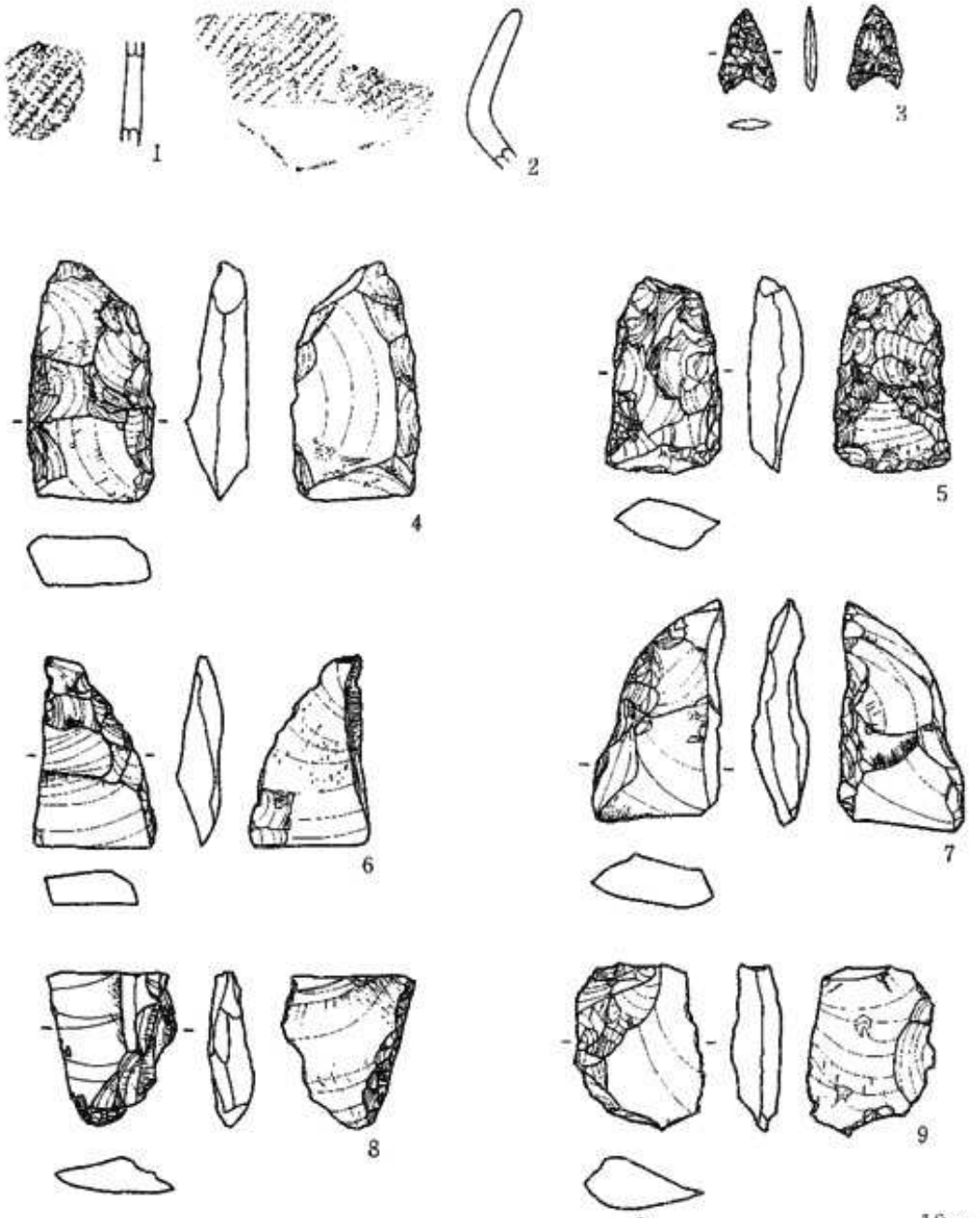
土器（第14図－１・２）

１はＬＲ撚紐を横位回転施文した鉢～深鉢形土器の破片である。器高６mmと薄手につくられ、胎土には僅かながら砂粒を含んでいる。２も口縁部にのみＬＲ撚紐を横位回転施文した壺形土器の口縁～肩部の破片である。口縁～頸部はほぼ垂直にひらき、頸部と肩部は大きく「く」の字形に屈曲する。口縁外面の縄文は幅３cmの帯となって施文されるが、使用される撚紐の長さはこの帯の約1／2内外の長さしかないものと推定され、施文単位が２段になって観察される。頸部と肩部以下は縄文施文後に横位のミガキ調整がなされ無文となる。内面も横位のミガキ調整が丹念に施され、平滑に仕上げられている。胎土には微細な石英粒・雲母片などを含む砂粒が混和されている。

石器

石鏃（第14図－３）

硬質頁岩製の石鏃である。薄手の剥片を素材として用い、丹念な調整剥離を両面に加えて製作している。有脚となる基部には、右側に置いた図の表面から細かな剥離が最終的に加えられ

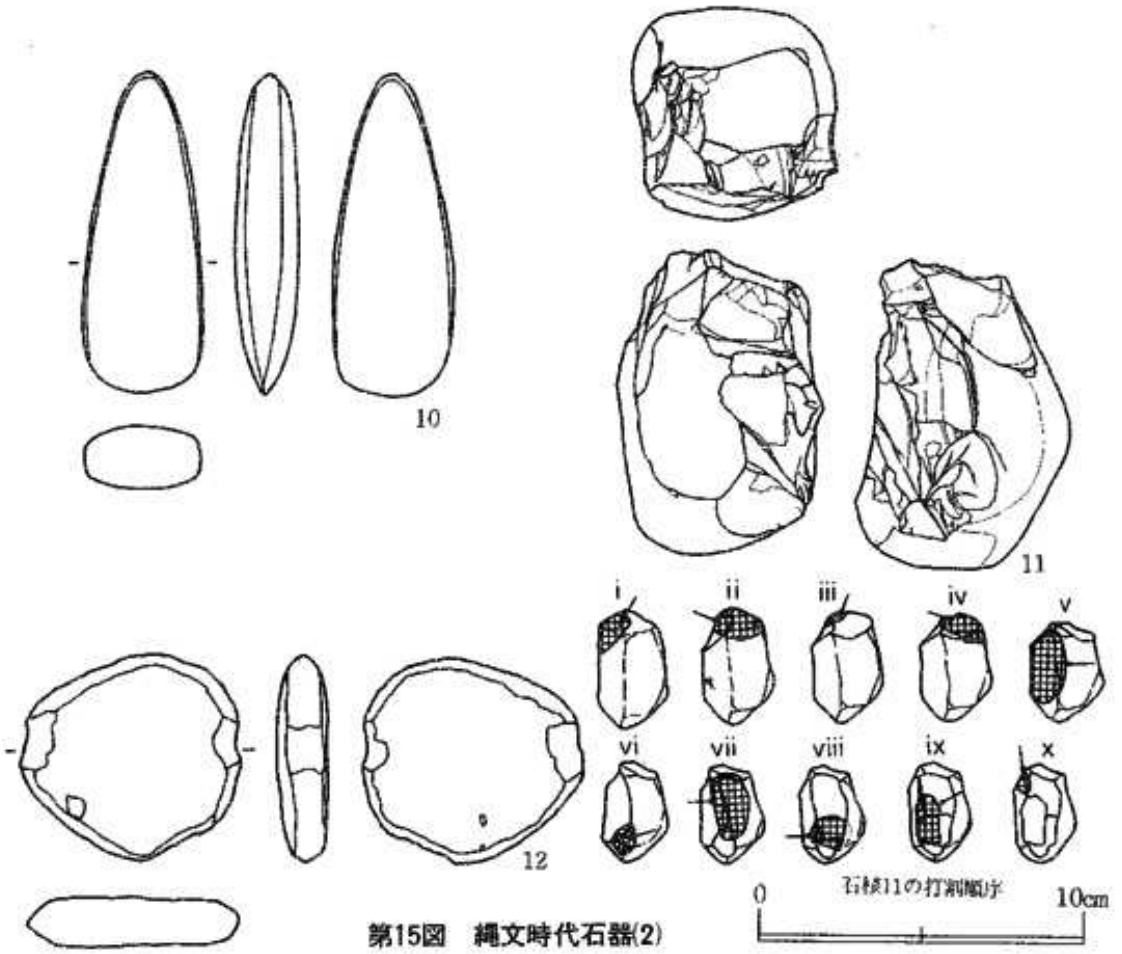


第14図　縄文時代土器拓影図・石器(1)

成形されている。

トランシェ様石器（第14図－4・5、図版34）

4は横長の剝片を用いたトランシェ様石器である。素材剝片の表面側右側縁を刃縁とし、基部には母岩の礫皮が残っている。製作にあたっては素材剝片の整形を行うため、打面側と下縁に主要剝離面側からの数回の加撃を行い、石器基部側をやや狭くする。その後、打面・打瘤を



第15図　縄文時代石器(2)

除き石器自体の厚さをある程度薄くするため、前に素材の打面側と下縁に加えた剥離面を打面として表面側からの剥離を加える。この剥離は打角を深くした結果石器中央まで及び、基部に近い部分では素材剥片の主要剥離面がほぼ失われる。刃縁には使用のための刃毀れがごく僅かに認められる。刃縁の長さは36mm、その角度は57°、石器全長は79mmを測る。5は縦長の剥片を用いたトランシェ様石器である。母岩の端に近い部分の剥片を素材として利用しているため、基部・刃縁とも礫皮を残す。側縁の整形・調整の剥離は、右側縁で表面→主要剥離面、主要剥離面→表面、左側縁で主要剥離面→表面、表面→主要剥離面の方向・順で行われている。5と同様主要剥離面の基部側は左右両側縁からの剥離が中央まで及ぶ他、表面側への剥離も全面に施されている。また、幾分ヒンジフラクチャー気味の刃縁を調整するため、ごく小さな剥離が主に礫皮すなわち表面側から数回加えられている。刃縁の長さは37mm、その角度は46°、石器全長は64mmを測る。4・5とも石材には硬質頁岩が用いられている。

削器（第14図―6―8、図版34）

6は縦長の剥片を用い、その一方の側縁を緩い弧状の刃縁として調整した削器である。素材

剥片の打面を含む一方の側縁は折断されている。側縁を弧状の刃縁に仕上げるための調整はほとんど主要剥離面側からなされるが、側縁下端に残る礫皮部分ではこの礫皮面を打面とした剥離も2回程度施される。またこれとは別に図の上部では折断面を打面としての剥離も2回行われている。7は横長の剥片を用い、その下縁を弧状の刃縁に仕上げた削器である。素材剥片の主要剥離面は、剥片を剥ぎとった際と同じ方向からの加撃によって大きく剥ぎとられ、刃縁を作り出すための調整剥離はこの面を打面として素材剥片の表面側へ加えられている。8は縦長の剥片を用い、その一方の側縁に調整剥離を加えて刃縁とした削器である。素材となった縦長剥片の打面・打瘤は折断されて除かれている。刃縁を作り出すための調整剥離は素材剥片の表面に残る大きな剥離面を打面として主要剥離面側に加えられている。また先端部では、逆に主要剥離面から表面へ向かって細かな剥離が加えられ、その形状を弧状に整えている。石材として6と8は硬質頁岩、7は頁岩を用いている。

調整ある剥片（第14図－9、図版34）

縦長剥片の一方の側縁をそのまま刃縁として用い、他方の側縁は表面側、主要剥離面側とも比較的大きな剥離を加えて、握り易い形状に整えた剥片である。刃縁として使用された図の右側縁は、本来僅かな弯曲をもっていたと思われるが、使用の刃毀れによってほとんど直線に近いものとなっている。石材には硬質頁岩が用いられている。

磨製石斧（第15図－10、図版34）

緩く弯曲する刃部をもち、基部の尖る磨製石斧である。刃部は使用によって僅かに刃毀れをおこしている。本体には比較的明瞭な稜線が残される他、製作時の擦痕も主に長軸に沿った方向で観察される。石材には琉紋岩を用いている。重量110.81g 。

石核（第15図－11、図版34）

礫皮を残す頁岩の石核である。11は10×6×6cm程の楕円礫を用い、その一方の端と一側縁を中心に最低10回の加撃によって剥片を取り出している。剥片を取り出すにあたっては、図の上部、原礫の端を加撃して平坦面を作りそこを打面として3回の剥離を行い、さらに側面を2回加撃して平坦面を作り、それを打面としての剥離を2回行っている。以上が礫皮を伴う剥片を剥ぎとる作業であり、その後に芯の部分から剥片をとる剥離が2回行われている（ix、x）。

石錘（第15図12、図版34）

扁平な楕円礫の長軸端を打ち欠いて抉りをつくった石錘である。抉りは両端とも表裏両面に加えられた加撃によって作られているが、図の裏面（右に置いた面）の方が表面よりも深く剥ぎとられている。おそらくは両端とも裏面側から表面側にかけて打ち欠いた後、表面から裏面にかけて打撃を加えたものと思われる。安山岩質の石材を用い、重量は81.22g を量る。

第２節　平安時代の遺構と遺物

平安時代に機能を果たしていたと考えられる遺構には、竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡７棟、土坑30基、竪穴状遺構５基、焼土遺構３基、および溝跡12条、柱列７列が挙げられる。ただし後２者については、竪穴住居跡・掘立柱建物跡などとの配置関係から平安時代に収まるであろう遺構と、竪穴住居跡を切っていることから平安時代以降となる可能性をもつ遺構が混在している点は事実である。しかしながら、明らかに平安時代以降を裏付ける遺構内出土遺物を認めることができなかったことから、報告に際しては一応、総て平安時代の遺構として扱うこととする。

記述にあたっては、遺構の配置を考慮にいれ以下のように進めていく。第16図に示した遺構配置図を一覧すると、大きく２つのグループに分けることができそうである。調査区中央部のほとんど遺構の存在しない区域を介して、北側のグループと南側のグループがそれである。さらに南側のグループは、東と西に分離することができる。これをまとめてみると、

１．北部遺構群 ―― ＳＤ33とＳＤ34で画されるような配置を示す

２．南東部遺構群 ―― ＳＤ55・ＳＤ56・ＳＡ72などで画されるような配置を示す

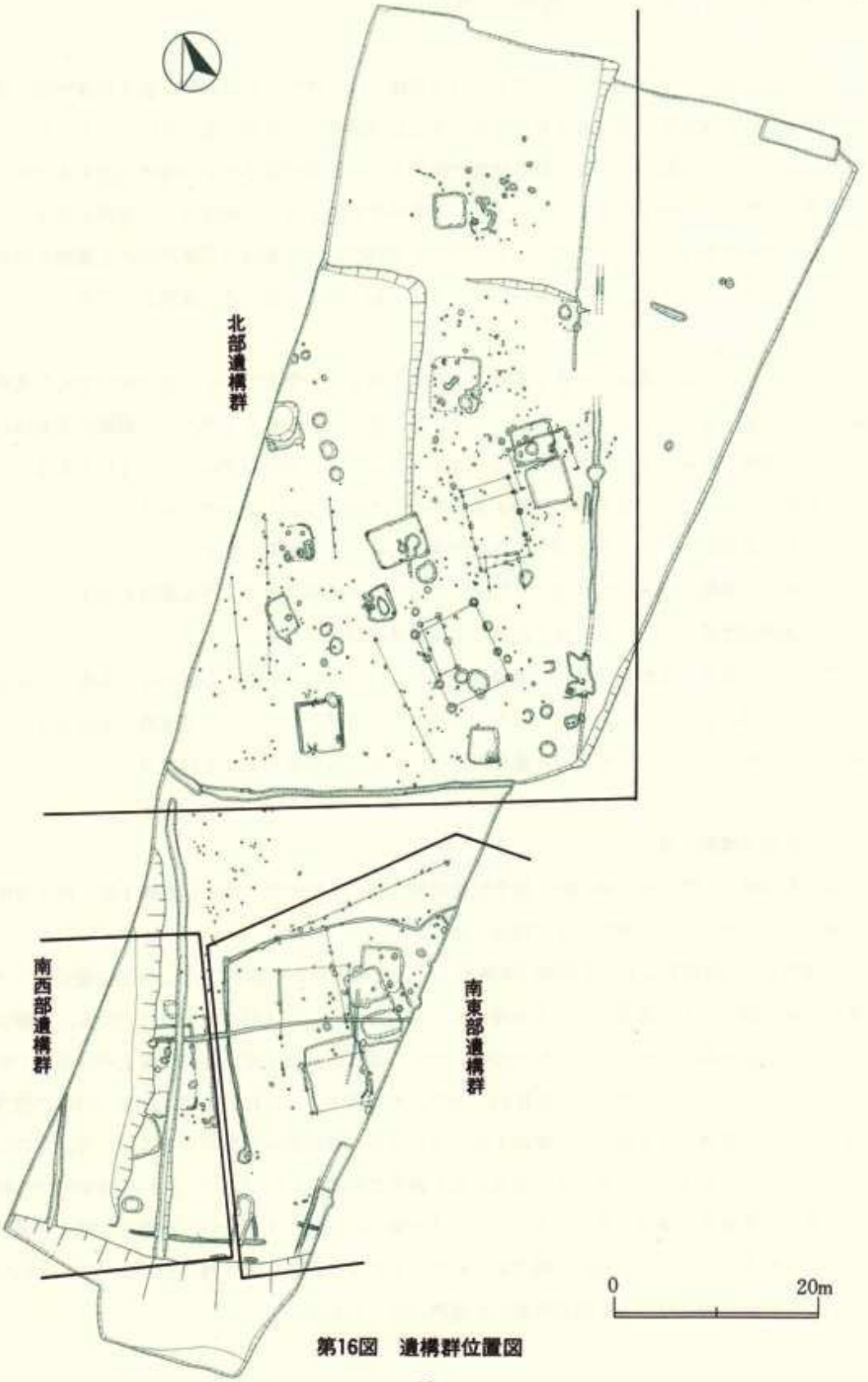
３．南西部遺構群 ―― ＳＤ56の西方に広がる遺構群

検出された遺構の大勢は、３つの遺構群で説明がつけられる。ただし群からはみ出ているもの、２つの群にまたがるものも認められる。これらの遺構については、恣意的にではあるが、検出位置を明示した上で一応３つの遺構群のいずれかに帰属させることにする。

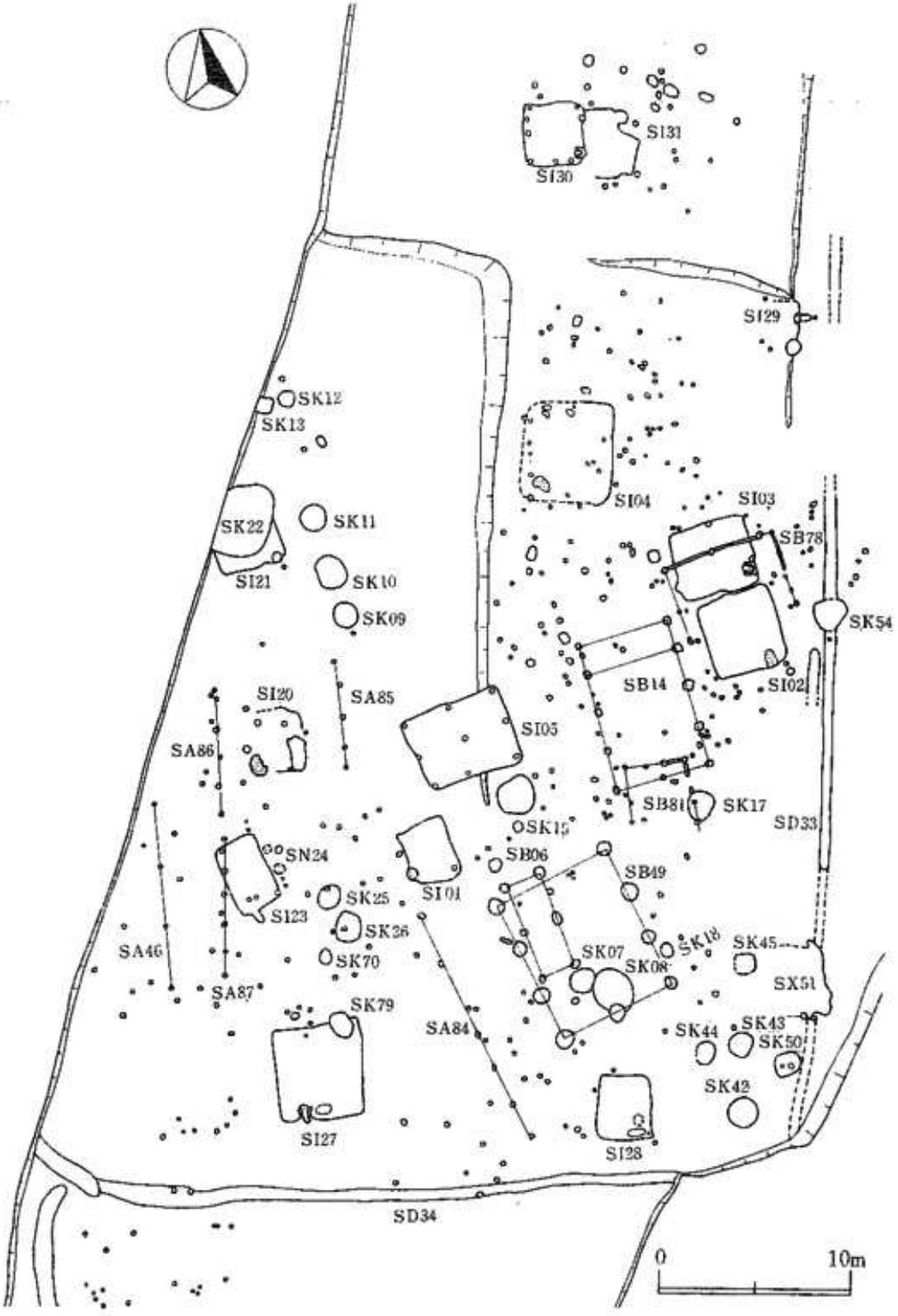
１．北部遺構群（第17図）

北部遺構群は、竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡５棟、土坑25基、竪穴状遺構１基、焼土遺構１基、柱列５列、および溝跡２条で構成される。

本遺構群は、調査前における畑地（休耕田）とほぼ一致する。このことは、検出位置により遺構の遺存状態が大きく異なることを意味する。この点については前述のとおりである。遺構は、切土などにより削平されていないものについては、ほぼ例外なく地山面の１枚上のⅣ層中で確認できる。ＳＩ 02・03・30・31、ＳＢ14・78などが該当する。ＳＩ 27・28は畑地と山林の接点部にあたり、南側では木根により撹乱を受けているが、確認面はⅣ層中である。一方、その他の大部分は削平を受けていることになる。最も顕著な例はＳＩ 05である。ＳＩ 05は東側では削平を免れ、Ⅳ層中で確認できているが、これは全体の1／3程にすぎない。西側では壁高を僅５cm残して削平されている。50cmは削り取られたことになる。ＳＩ 01・04・20・23・29、ＳＫ07～13、ＳＢ06・49・81なども削平の著しい遺構に挙げられる。



第16図　遺構群位置図



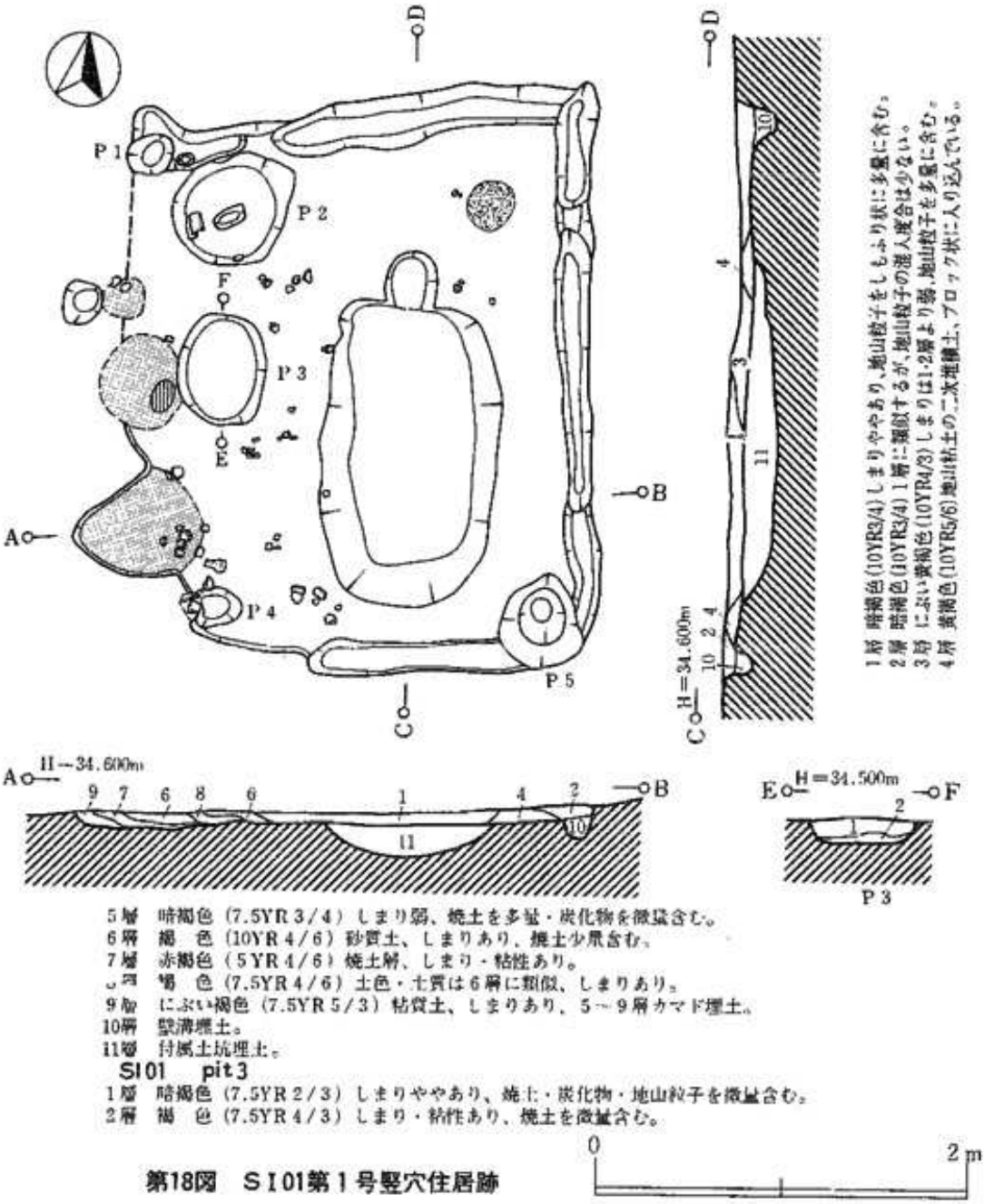
第17図　北部遺構群遺構配置図

なお、ＳＤ33の東方にＳＫ35・36が位置する。両遺構についても本群で扱うことにする。

（1）竪穴住居跡

ＳＩ 01第１号竪穴住居跡（第18図、図版７）

遺構群中央南側、ＬＨ52・53、ＬＩ 52・53で検出した。規模は、南北長3.1m、東西長は北壁で2.5m、南壁で2.3mの南北にやや長い長方形を呈している。西壁の北側を除き壁の立ち上がりを確認できるが、削平により床面まで５cm前後しか遺存していなかった。面積は7.4㎡、主軸



第18図　ＳＩ01第１号竪穴住居跡

方位はN－８°－Wを示す。床面はあまり平坦とは言えないが、堅く締まっている。中央には、長軸1.6m、短軸0.9m、深さ 0.2mの土坑が存在する。確認状況から住居跡に付属するものと考えている。また床面よりやや浮いているが、北東部では径30cm程の炭化物の広がりを認めることができる。西壁と南壁西側を除き壁溝が巡る。幅は15～25cm、深さは10～15cmを測る。

柱穴はＰ１・Ｐ４が隅柱となるであろうが、Ｐ５は住居跡を切っているものである。

カマドは西壁南寄りに位置する。三角状に突出した全面に焼土を認め、底面や側壁も火熱を受け、僅かではあるが赤変している。火床面は平坦な床面をそのまま利用している。削平によりその痕跡を留める程度ではあるが、カマド埋土中の焼けた数点の礫と6・8層に認められる砂質土から両者を用いてカマドを構築していた可能性が高い。カマド北側、西壁中央部に焼土が堆積している。その上面には少量ではあるがブロック状に灰白色を呈する火山灰が含まれていた。この焼土についてもカマドであった可能性がある。

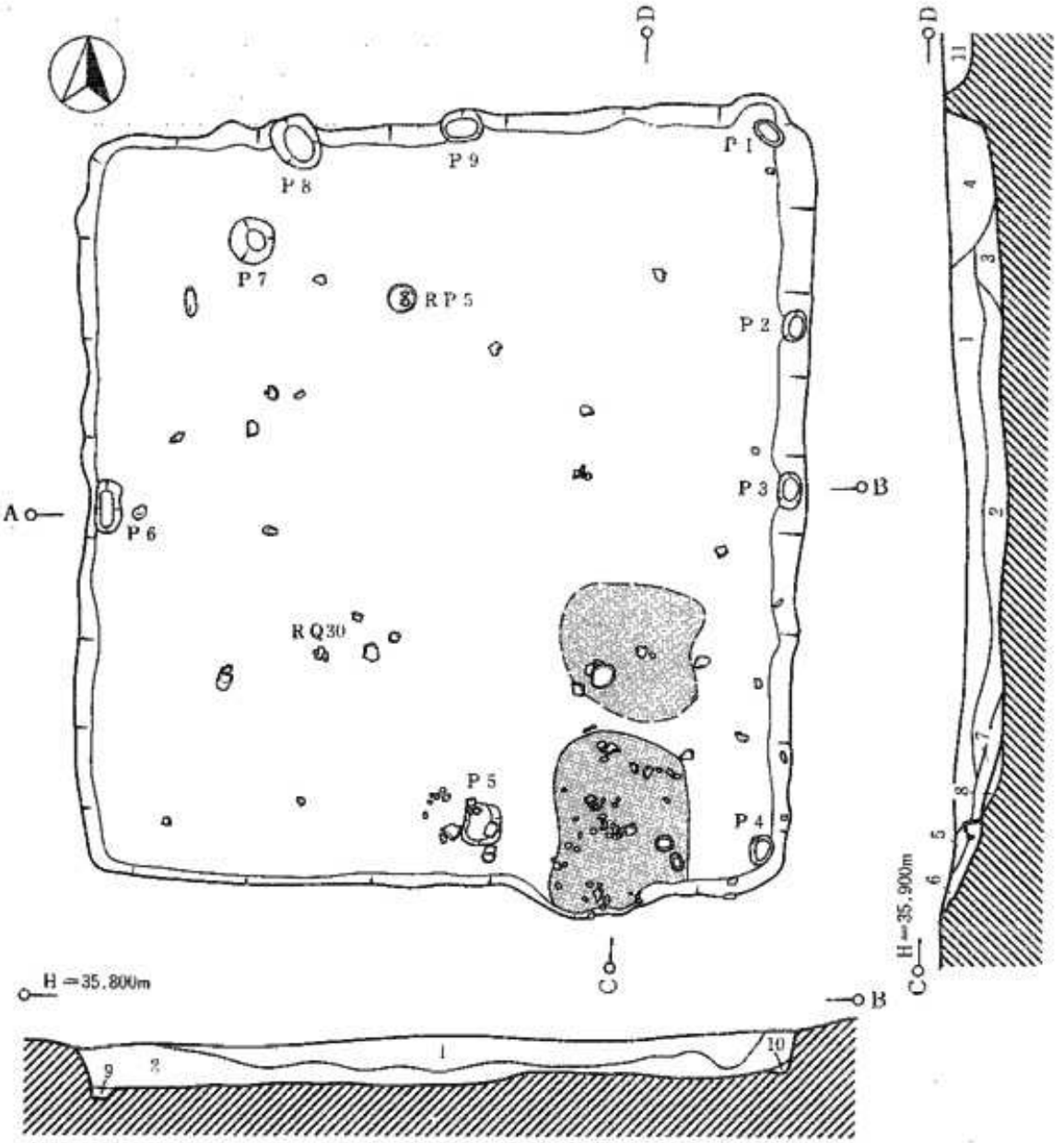
出土遺物には土師器坏・甕がある。細片のため図示できなかった。

ＳＩ 02第２号竪穴住居跡（第19図・第20図、図版７・図版８・図版35）

遺構群東端中央、ＬＣ54・55、ＬＤ54・55で検出した。北側にＳＩ 03が近接しているが、切り合い関係はない。規模は、南北長4.1m、東西長3.8mの南北にやや長い方形を呈している。壁高は20～25cmを測る。堆土４層としたものは、明らかに１・３層などより新しく、最終的に堆積したものであることが分かる。断面でみた限りにおいてはＳＩ 02そのものを切っているようである。しかしながら平面的に、別の遺構との重複等を確認することはできなかった。面積は15.9㎡、主軸方位はＮ－４°－Wを示す。床面は、あまり平坦とは言えず、全体的に見た場合、中央より西側が、その東側より５～６cm低くなっている。柱穴様のピットはＰ１～Ｐ９まで検出している。径や長さが15～30cm程の円形・楕円形を呈するものであるが、深さがいずれも10cm未満であり、他の住居跡の柱穴に比較しても、しっかりした掘り込みではなく、仮にこれらが柱穴として機能を有していたとしても、支柱程度と考えられよう。

カマドは南壁東寄りに設けられている。しかしながら完全に崩落しており、長さ1m、幅0.7mの焼土の広がりのみを確認できた。このほぼ中央の火床面上には、土師器の甕底部が倒位に置かれていたことから支脚と考えられる。火熱の度合からみると、支脚を中心に焚口方向が煙出し方向より格段に高くなっている。このことから支脚はほぼ原位置を保っていたものと思われる。支脚の位置は、壁下端より30～35cm離れている。カマドの前庭にも径約70cmの焼土が広がっている。この部分がやや窪んでいることと、検出位置から、カマドの焼土等をかき出した跡と考えられる。

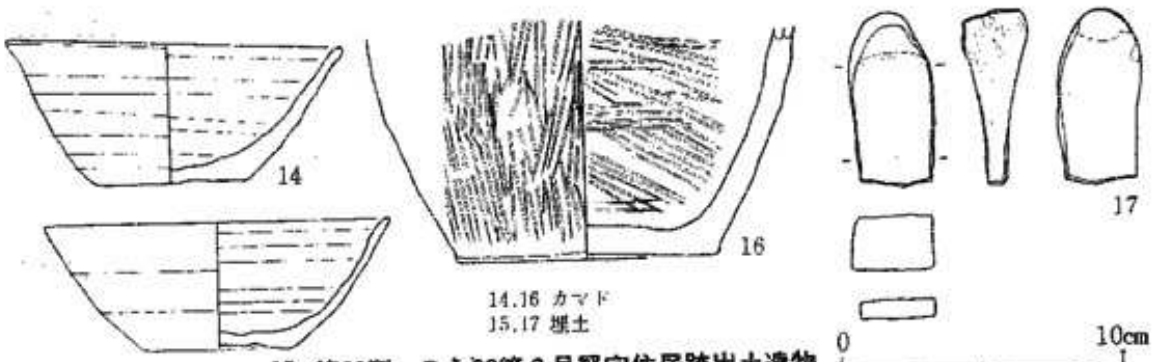
出土遺物には、土師器坏・甕、砥石がある。14はカマド内より出土した坏で、二次火熱を受け特に器外面がもろくなっている。底部は回転糸切りである。16は支脚に転用された甕である。



1層　黒　色（10YR 2/1）しまりやや弱、地山粒子微量含むが他の混入物はほとんどない。
2層　黒褐色（10YR 3/2）しまり・粘性ややあり、地山粒子をしもふり状に少量含む。
3層　褐　色（10YR 4/4）粘質土、しまり粘性ややあり。
4層　暗褐色（10YR 3/3）しまりやや弱、地山粒子をしもふり状に少量、炭化物を微量含む。
5層　黄褐色（10YR 5/8）しまりはあるがボソボソしている。焼土は含まない。
6層　黒褐色（10YR 2/2）しまりやや弱、焼土微量含む。
7層　暗褐色（7.5YR 3/3）しまりやや弱、焼土多量、炭化物微量含む。
8層　赤褐色（2.5YR 4/8）火熱による赤変箇所。
9層　P6埋土。
10層　P3埋土。
11層　SI03埋土。

0　2 m

第19図　SI02第2号竪穴住居跡



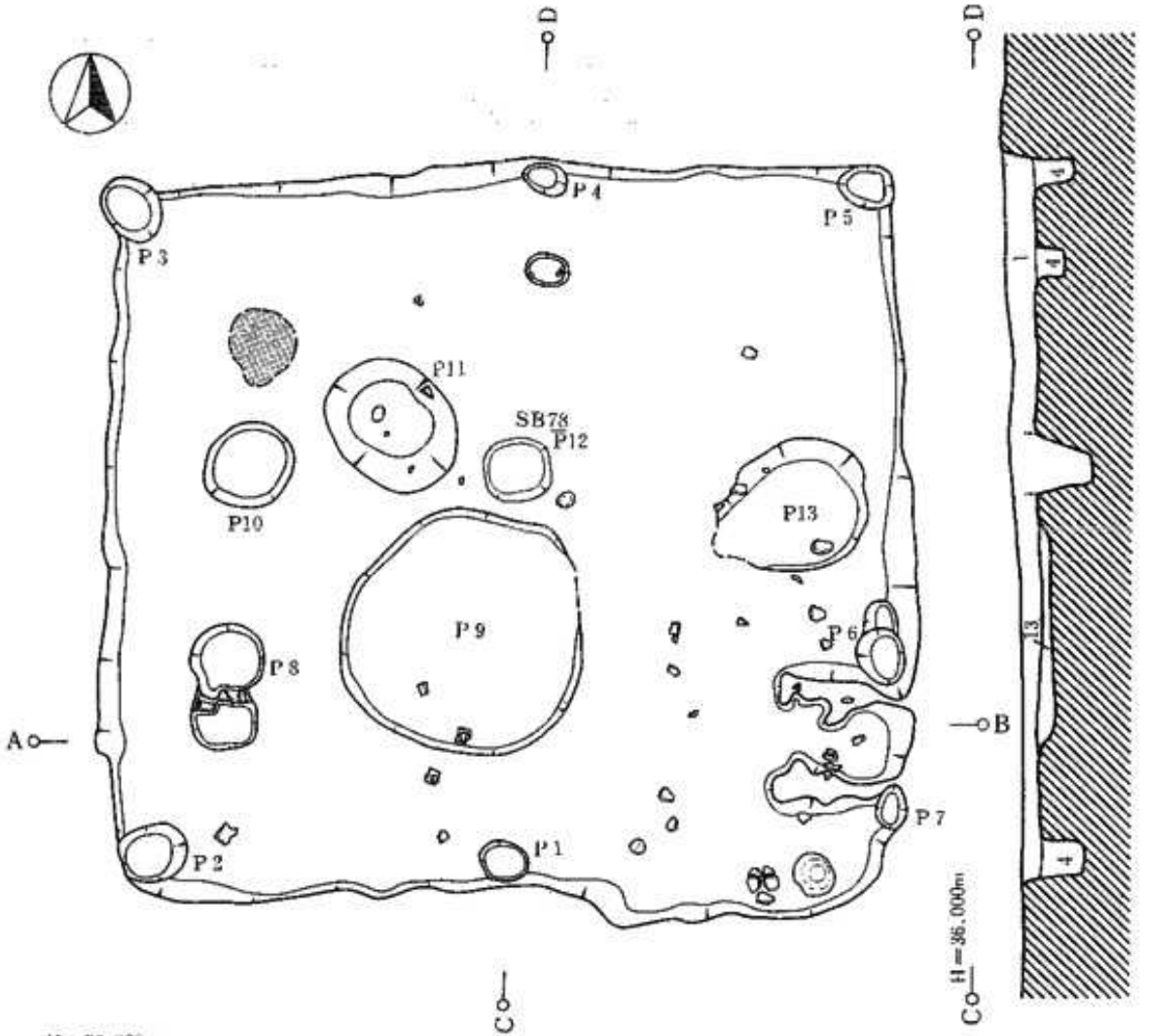
15 第20図　ＳＩ02第２号竪穴住居跡出土遺物

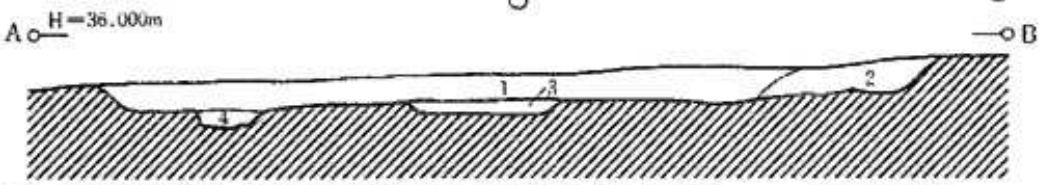
胎土には多量の砂が混入されているようで、器面がザラザラした感じを呈している。外面は縦位、内面は横位をそれぞれ主とするハケメ調整が施されている。底面は丁寧にナデられている。これも火熱の影響で器色が変化している。15は住居跡中央北側埋土から出土した杯である（ＲＰ５）。底部には回転糸切り痕を留める。17も埋土中より出土した砥石である（ＲＱ30）。図示面の下端を欠く。砥面は２面で、だいぶ使い込まれている。凝灰岩質の石材を用いている。重量は40g である。この他、土師器甕は非ロクロで外面ハケメ、内面ナデのもの、外面ケズリ、内面ナデの調整を残すもの、またロクロ使用の甕もカマド崩落土内より出土している。

ＳＩ 03第３号竪穴住居跡（第21図～第23図、図版７・図版８・図版35）

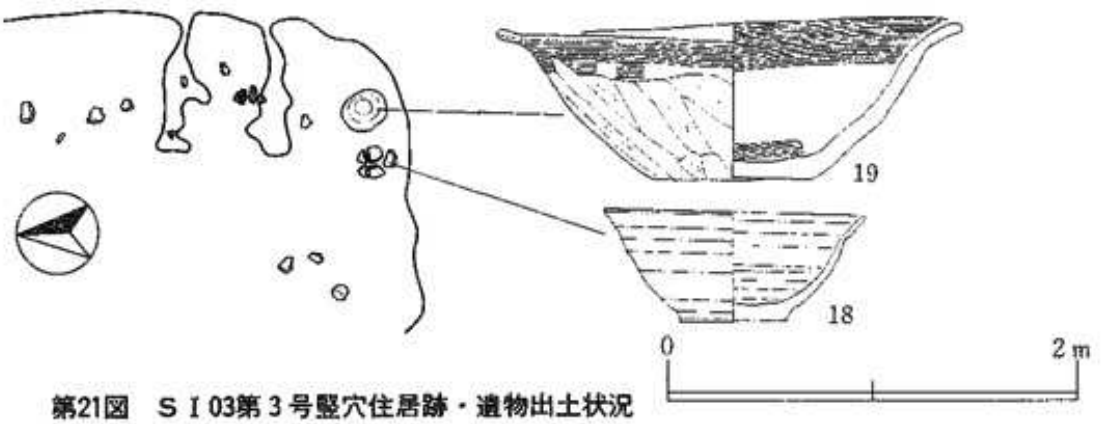
遺構群東端中央、ＬＤ55・56で検出した。ＳＩ 02・03をまたぐように検出されたＳＢ78は、ＳＩ 03を切り込んで構築されている。規模は、南北長が西壁で3.6m、東壁で3.8m、東西長は4.05m を測り、東西にやや長い方形を呈する。確認面からの深さは15cm前後の数値を示す。面積は14.8㎡、主軸方位はほぼ磁北を向く。床面上には大小の土坑・ピットが掘り込まれているが、Ｐ12がＳＢ78の柱穴である他は本住居跡に伴うものである。柱穴はＰ１～Ｐ７が該当するが、南東隅部分では確認できなかった。Ｐ６・Ｐ７はカマドの上屋施設に伴う柱穴がある可能性が高い。柱穴平面形は円形もしくは楕円形を呈し、径25～35cm、深さは隅柱Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５が30～47cm、壁中央に位置するＰ１・Ｐ４が18～23cmである。

カマドは東壁南寄りに設置されている。煙出し部は、壁外にほとんど掘り込みを有しない形態を示す。袖部は遺存状態が良く、構築方法を復元できる。まず、床面に黒褐色シルト質土に粘土を少量混ぜた土を５cmの厚さに敷く。奥壁部分にも貼り付けるように敷いている。次いで、粘土を主体とする土をシルト質土の上に、奥の方から順に袖部全体の1／3程置いていく。これは芯材の役割を果たしたのかもしれない。そしておそらくは粘土を覆うようにして、砂質土に少量の粘土を加えた土を用いて袖部を完成させている。袖部外側には、部分的に粘土が貼られており、砂質土を主体とするカマド本体を補強するためのものと考えられる。この砂質土は、基盤層である褐西層を利用したものであろう。燃焼部には土師器破片がいくらか入り込んでい

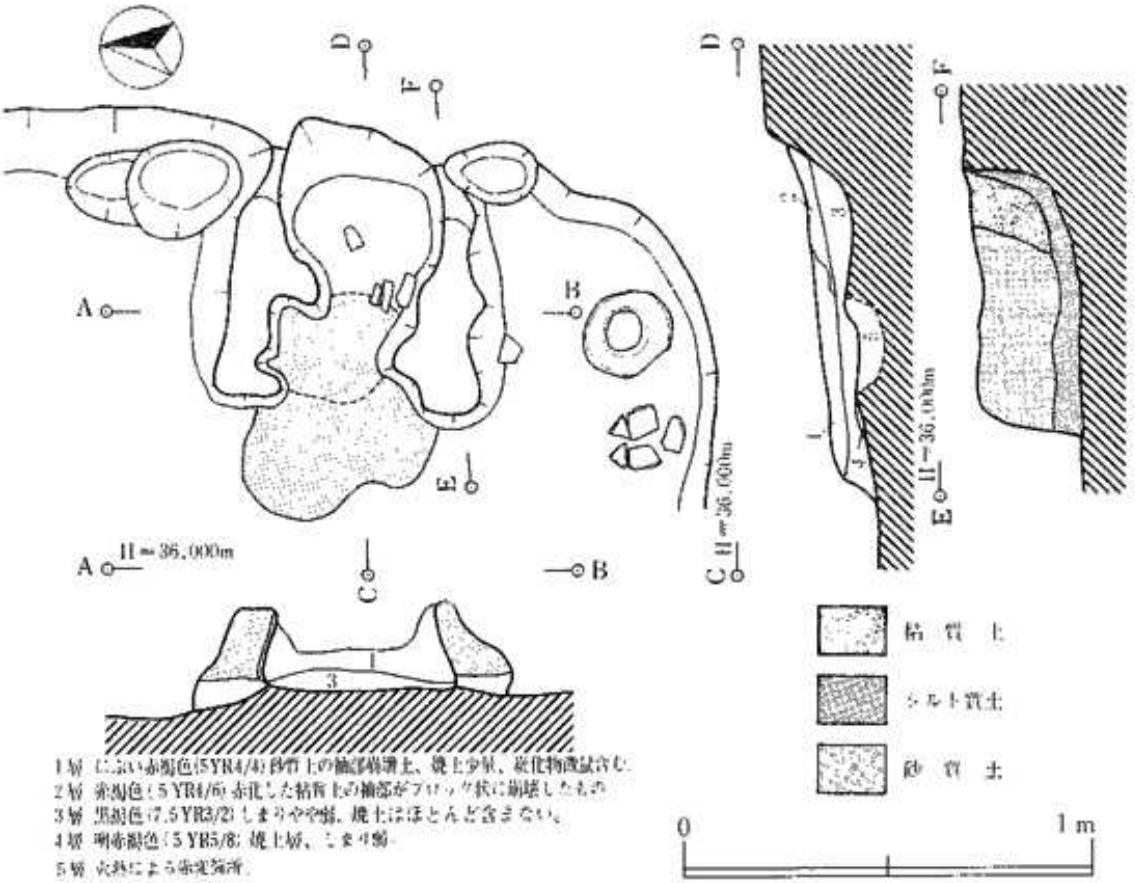




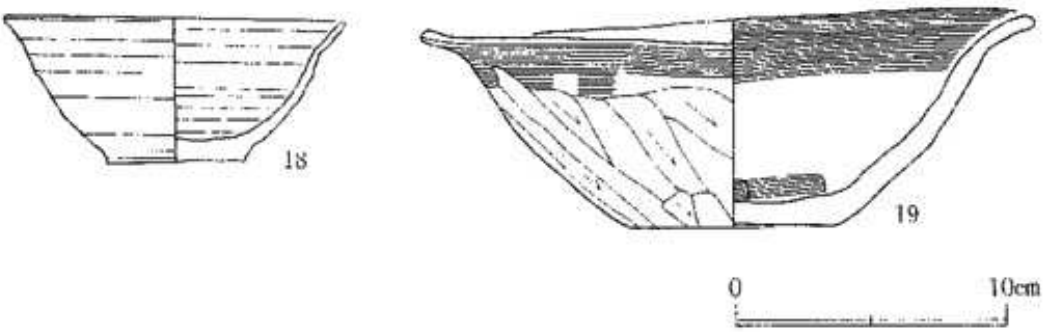
1層　黒褐色(10YR3/2)　土色はＳＩ02の２層と同、しまりはＳＩ02よりやや弱、地山粒子は径５～10mmのものを西側に多く、東側に少量含む。
2層　カマド埋土１～４層に対応する。
3層　Ｐ９埋土。
4層　掘穴埋土。



第21図　ＳＩ03第３号竪穴住居跡・遺物出土状況



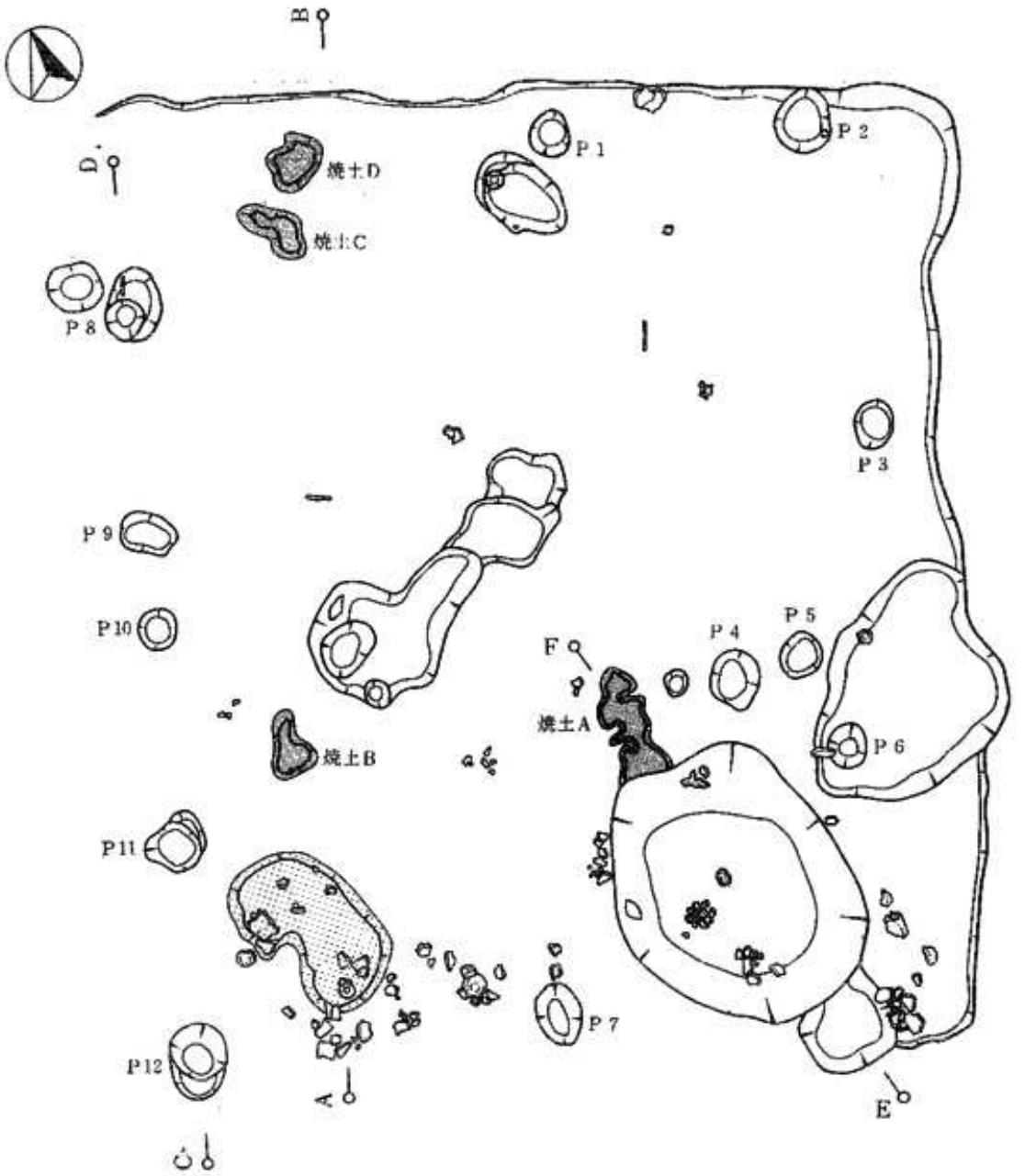
第22図　ＳＩ03第３号竪穴住居跡カマド



第23図　ＳＩ03第３号竪穴住居跡出土遺物

たが、支脚と見られるものは確認できなかった。燃焼部内法幅は40cmである。火床面は床面と同一レベルで、平坦で堅く締まっている。火熱の影響で火床面下６cmまで土色が変化している。

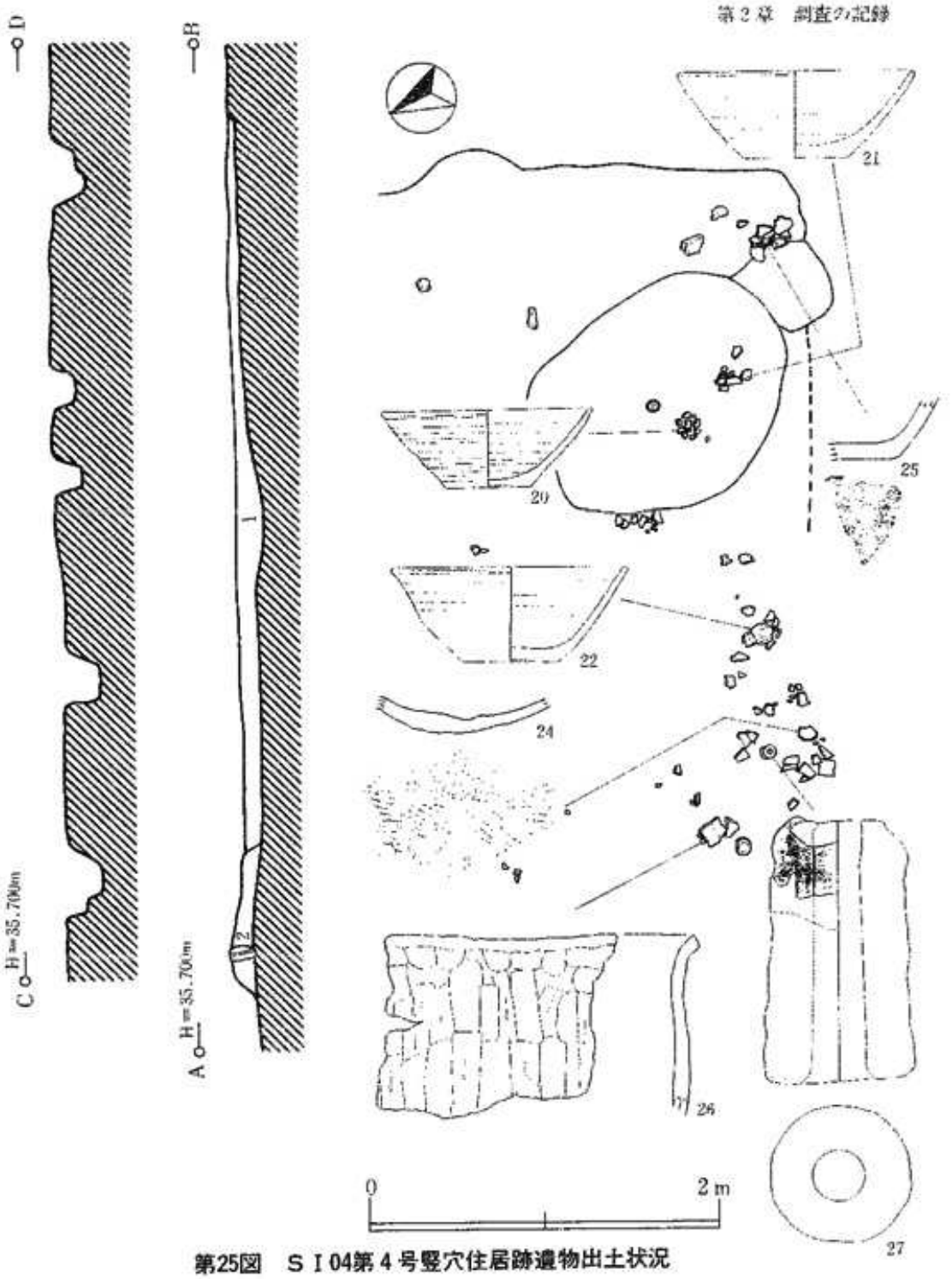
出土遺物は多くはないが、図示し得た２個体の土師器について報告する。19はカマド南側床面上に正位して検出された鉢形を呈するものである。ロクロ利用の有無は明らかでないが、外面口縁部から内面にかけて器面を一周する横ナデが認められる。外面はこのナデの後、荒いケ



1層　黒褐色（10YR2/2）しまりやや弱、粘性も弱。地山粒子を少量混入。
2層　赤褐色（5YR4/6）カマド崩落土
3層　黒褐色（10YR2/3）地山粘土小ブロック（10～30cm）をしもふり状に少量含む。
4層　黒褐色（10YR2/2）しまりは3層より弱、炭化物微量含む。

0　2m

第24図　ＳＩ04第４号竪穴住居跡



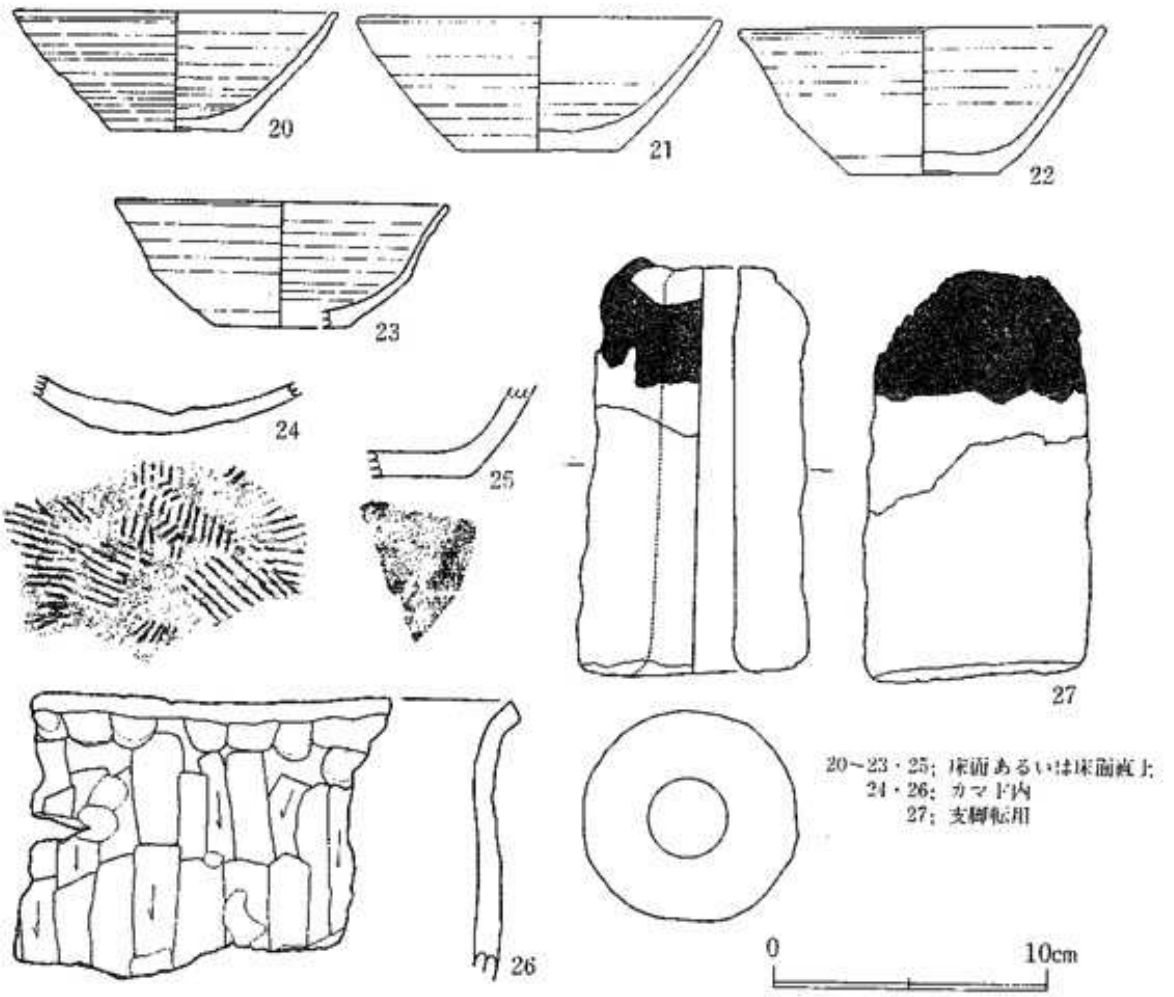
第25図　ＳＩ04第４号竪穴住居跡遺物出土状況

ズリを施している。底部はケズリあるいはナデられており、安定感がある。外面ほぼ一帯と内面口縁部および底面には煤状炭化物の付着を認めることができる。法量は口径で22～22.8cm、底径7.5cm、器高6.8～8.2cmで、小型の鍋と解することもできよう。18は19の東隣の床面上で検出した坏である。倒立状態でつぶれていた。底部には回転糸切り痕を留める。その他、須恵器では甕の破片が出土している。

ＳＩ04第４号竪穴住居跡（第24図～第26図、図版９・図版35）

遺構群中央北側、Ｉ.Ｅ57・58、ＬＦ57・58で検出した。遺構確認時点において、既に床面が現れた箇所もあり遺存状態は極めて悪い。西壁と南壁の大部分は失われているが、南北長は東壁で約5.1m、東西長は不明であるが、方形を呈するものと思われる。壁高は最大でも８cmである。主軸方位はＮ－18°－Ｅを示す。床面は平坦であるが、特に堅く締まってはいない。柱穴様のピットを10ケ所以上で検出したが、明確に組み合わせることはできなかった。位置的にはＰ１・Ｐ７は北壁・南壁のそれぞれ中央に配された柱穴になる可能性を残す。深さは床面からＰ１で21cm、Ｐ７で27cmである。Ｐ８～Ｐ12は西壁沿いの柱穴、あるいは独立した柱列であった可能性もある。

カマドは推定南壁西寄りに位置する。完全に崩壊しており、焼土の中に支脚に転用したと考えられるフイゴ羽口の存在が、かろうじてカマドであったことを物語る。フイゴ羽口は基部を上にして使用されていた。また床面上にはカマド以外に４ケ所で焼土の広がり（Ａ～Ｄ）を認め



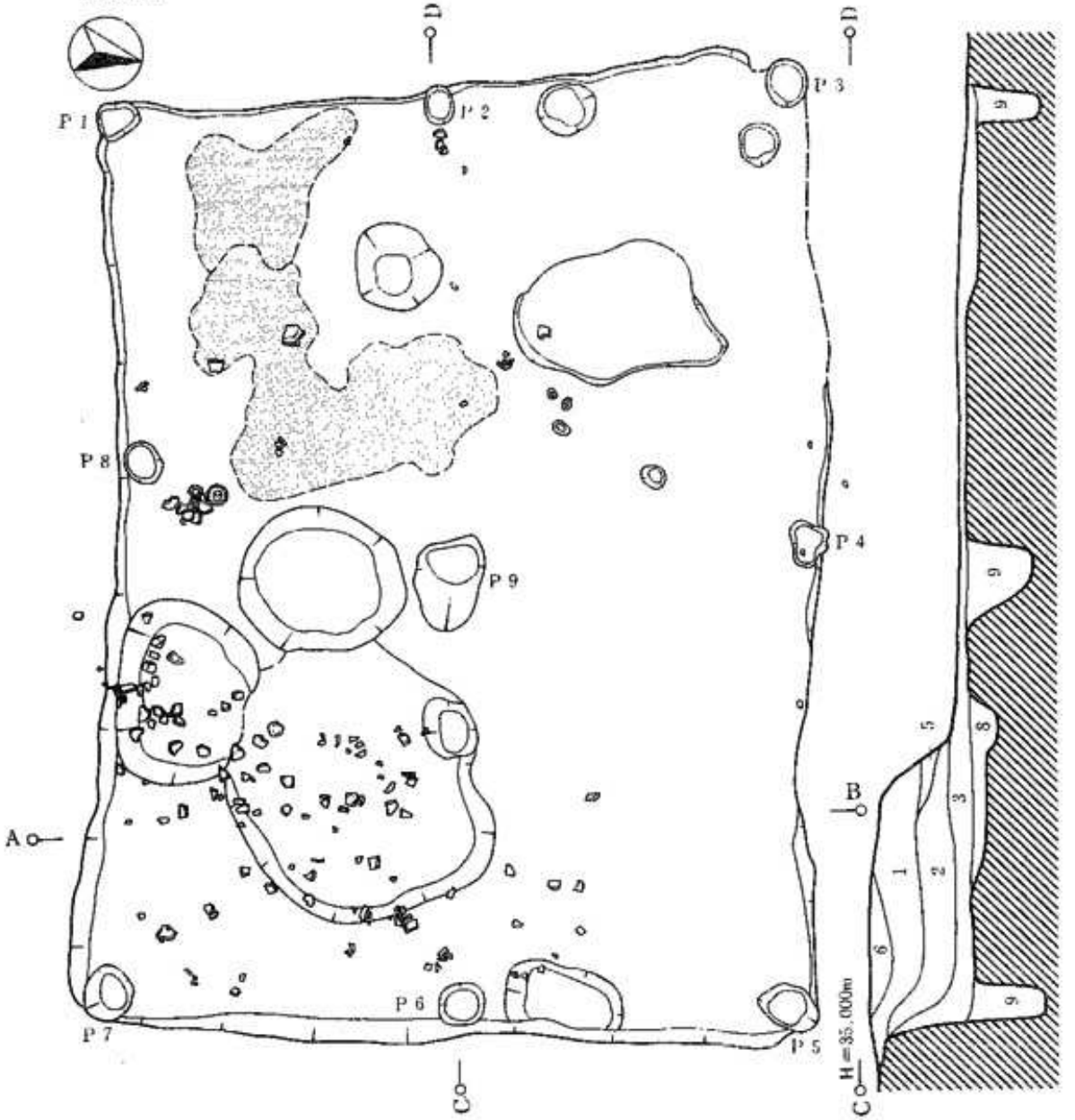
第26図　ＳＩ04第４号竪穴住居跡出土遺物

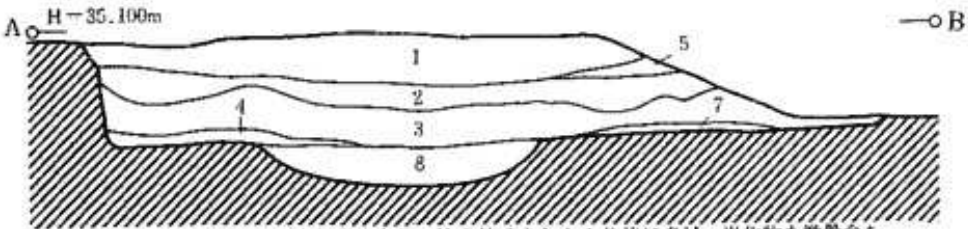
ることができる。B～Dは、それで火を使用したとしても頻度は高いものではない。Aは、明らかに堅い焼土面を形成しており、長期にわたる使用と考えられる。焼土Aに南接して、長径1.6m、短径1.2m、深さ0.3～0.35mの楕円形を呈する土坑が掘り込まれている。本住居跡に伴う焼土Aを切っているようであるが、土坑の確認面は床面上であり、これらの構築から廃棄を次のように理解できる。SI 04構築→焼土A使用→土坑構築→土坑廃棄→SI 04廃棄となる。またこの土坑の東側と、床面中央部に不整形の土坑が存在する。これらは住居跡より新しい次期の所産と考えている。なお、カマドの焼土中より炭化米18粒を検出している。

出土遺物は、カマド周辺と南東部の土坑周辺に集中している。確認面＝床面であることから、遺物は床面もしくは総て床面直上出土と解することができる。20～23は土師器坏で、底部に回転糸切り痕を留める。22はカマド東側から倒立して出土したもので、内にもう1個体の坏が重なっていた。内側の坏はもろくなっており復元できなかった。22は内外面に、23は外面に煤状炭化物が付着している。24はカマド内出土の土師器甕で、丸底の底部破片である。外面にのみタタキ目を残す。内面は凹凸しており、丸い小石様のものをアテ具としていた可能性がある。26もカマド内出土の非ロクロ甕である。胎土には径1～3㎜の赤褐色を呈する砂粒が多く混入されている。外面は口縁部に指頭による成・整形痕、体部には縦位のケズリが施される。内面はヘラによるナデである。25はいわゆる砂底の甕で、住居跡南東部から出土している。27は支脚に転用されたフイゴ羽口でほぼ完形で残る。長さは15.4cm、直径は先端部で7cm、基部で8.5cm、孔径は2.8～3.2cmを測る。先端部には海綿状の鉄滓が付着している。その他、土師器甕では非ロクロで内外面ハケメ調整されているものも含まれる。

SI 05第5号竪穴住居跡（第27図～第29図、図版10・図版35）

遺構群ほぼ中央、LG54・55、LH54・55で検出した。規模は、東西長が北壁で5.3m、南壁で5m、南北長は4mの東西に長い長方形を呈する。確認面からの深さは、遺存状態の良い東壁では55～60cmであるのに、西壁では削平され5cm前後しか残っていない。埋土は1～7層まで分層したが、4・7層を除くと基本的には同一層ともみなせる。分層基準は地山粒子の径の大きさであり、含有度合である。これに基づくと、下位ほど粒径が大きくなり、かつ含有量を増していく特徴を見いだせる。面積は20.3㎡、主軸方位はN－5°－Wを示す。床面は、平坦で堅く締まっている。床面の南東部には径0.7～1.5m程の土坑が3基掘り込まれている。確認状態からこの住居跡に伴うものである。柱穴は4隅（P1・3・5・7）と各壁のほぼ中央部（P2・4・6・8）に位置している。P8だけ中央よりやや西にずれている。さらに4隅から対角線を引いた交点にも柱穴P9が存在し、これらで柱が構成されていたものと思われる。径は20～25cmで、深さは最も浅いP6で21cm、P1・3～5・9が26～30cm、P2・7・8で34～38cmである。

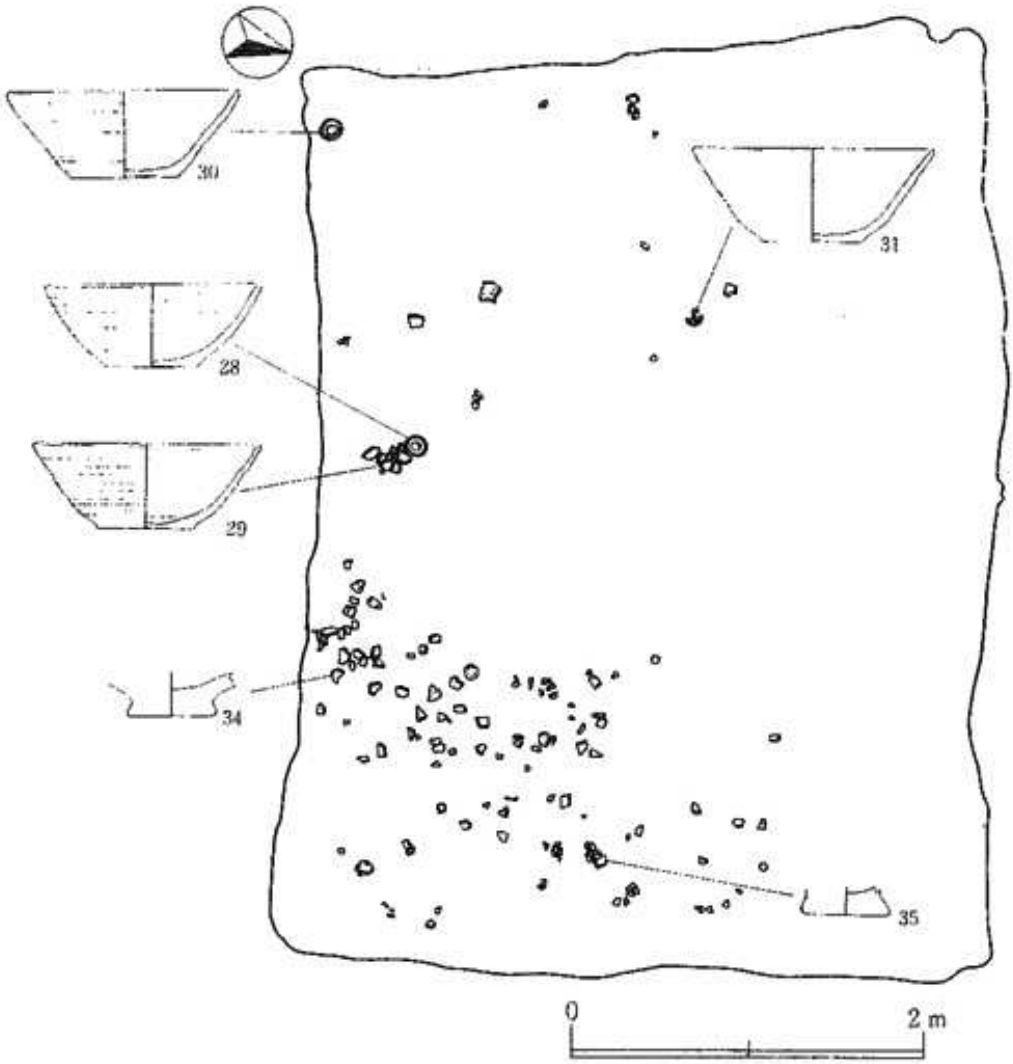




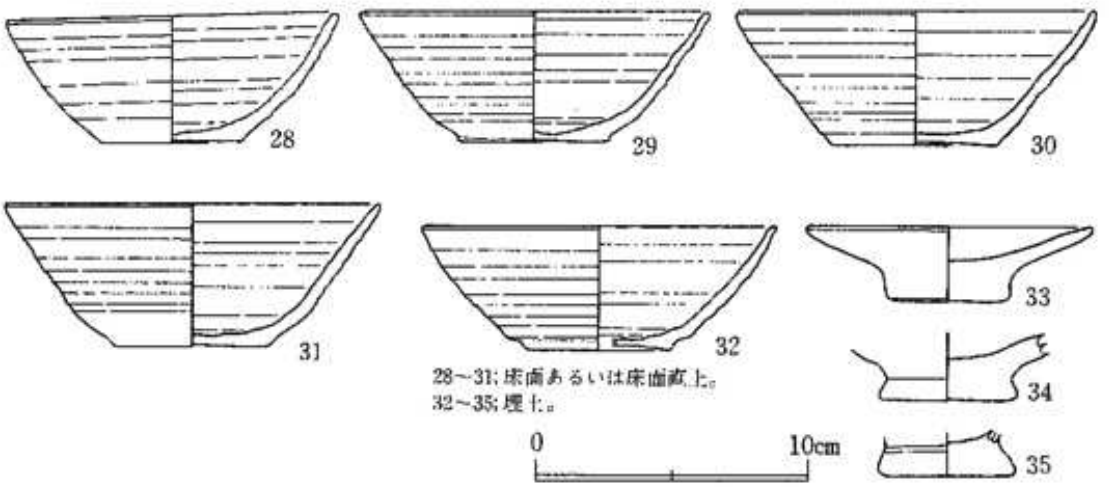
1層　黒褐色（10YR2/3）しまりややあり、地山粒子をしもふり状に多量、炭化物を微量含む。
2層　黒褐色（10YR2/2）しまりは1層よりやや弱、地山粒子は1層より多く、炭化物を少量含む。
3層　暗褐色（10YR3/3）しまりは2層よりやや弱、粘性はややあり、地山粒子径2～5mmを2層より多く含む。
4層　黒褐色（10YR3/2）しまりは3層よりやや弱、地山粘土径5mm以上を少量含む。炭化物も微量含む。
5層　黒褐色（10YR2/2）土色・土質ともに1・2層の中間的様相を呈する。
6層　暗褐色（10YR3/3）土色は3層に類する。焼土・炭化物を微量含む。
7層　黒褐色（10YR3/2）土色は4層に類するが、混入物をほとんど含まない。
8層　付属土坑埋土。　9層　柱穴埋土。

第27図　ＳＩ05第５号竪穴住居跡

0　2m



第28図　ＳＩ05第５号竪穴住居跡遺物出土状況



第29図　ＳＩ05第５号竪穴住居跡出土遺物

カマドは検出できなかったものの、南西部の床面上に2ヶ所の焼土の広がりを認めることができる。このことから、南壁の西寄りもしくは西壁の南寄りにカマドが設けられていたと考える。

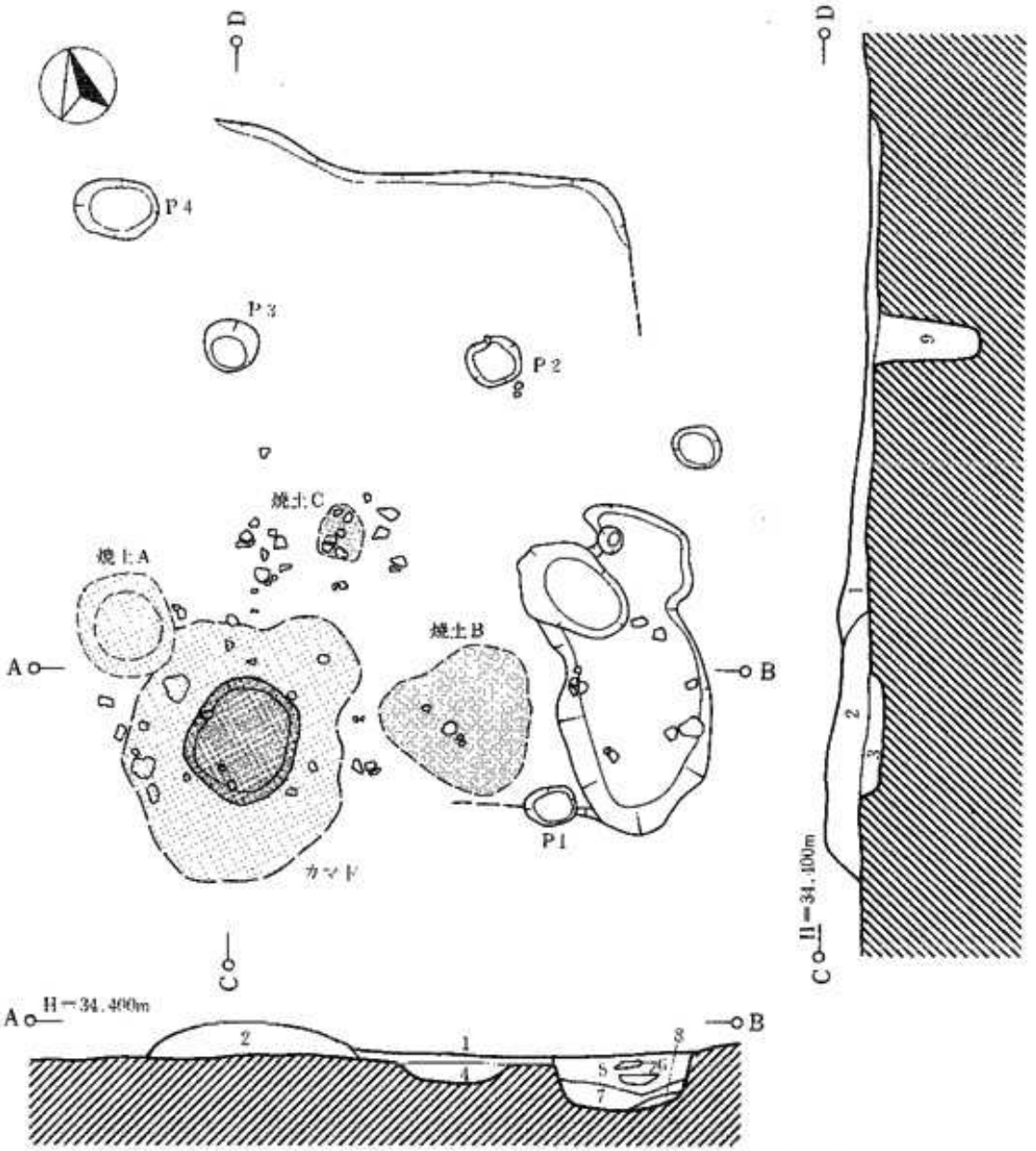
出土遺物は、図示した土師器坏・皿以外には、内面を黒色処理した土師器坏・甕、須恵器甕が検出されている。土師器甕では、外面ハケメ、内面ナデ、外面・内面ハケメ、外面ケズリ、内面ナデのものがある。28～32は土師器坏で32を除き、床面あるいは床面直上出土である。いずれも底部には回転糸切り痕を留める。30・32が二次火熱を受けもろくなっている。33～35は埋土から出土した皿である。底部が12～15mmと厚く作られており、「柱状高台」と称される部類に入るものであろう。3点とも摩滅が著しいが、底部に回転糸切り痕をもつ。

SI 20第6号竪穴住居跡（第30図～第32図、図版11・図版35）

遺構群西側、LJ 54・55で検出した。遺存状態は極めて良くなく、壁の立ち上がりを確認できたのは北壁の一部と、ここから東壁へ折れるコーナー部分のみである。壁高は10cmにも満たない。推定南壁西寄りに長さ1.3m、幅1.1mの焼土の広がりを確認でき、崩壊したカマドと推定される。カマドの位置から推定される規模は、南北長約3.4mである。カマドとみられる焼土を除去すると床面に径60～70cm、深さ8～10cmの円形の掘り込みがある。位置的にはカマド掘り方様であるが、明らかにし得ない。柱穴様のピットは、P 1～4が該当するが、位置的にはP 1～3については柱穴の一部をなしていたものと考える。径25～30cmの円形を呈し、床面からの深さはP 1で30cm、P 2・3では50～53cmを測り、しっかりした掘り込みをもつ。

床面上には、カマドの周囲3ヶ所に焼土が認められる。焼土Aは、深さ20cmの堆積土中に焼土を充塡させているもので、カマドに伴うものであろう。焼土Bは、カマド同様底面に掘り込みをもち、位置的にみても旧い時期のカマドであった可能性がある。焼土CはA・Bとは異なり、底面上に薄く分布しているものである。焼土Bに隣接して、長軸1.7m、短軸0.8m、深さ0.25～0.3mの土坑が位置する。埋土の状態からみると、住居跡と同時期に廃棄されたものと理解できる。なお、カマド（焼土）から36粒、焼土Aから59粒の炭化米を検出している。

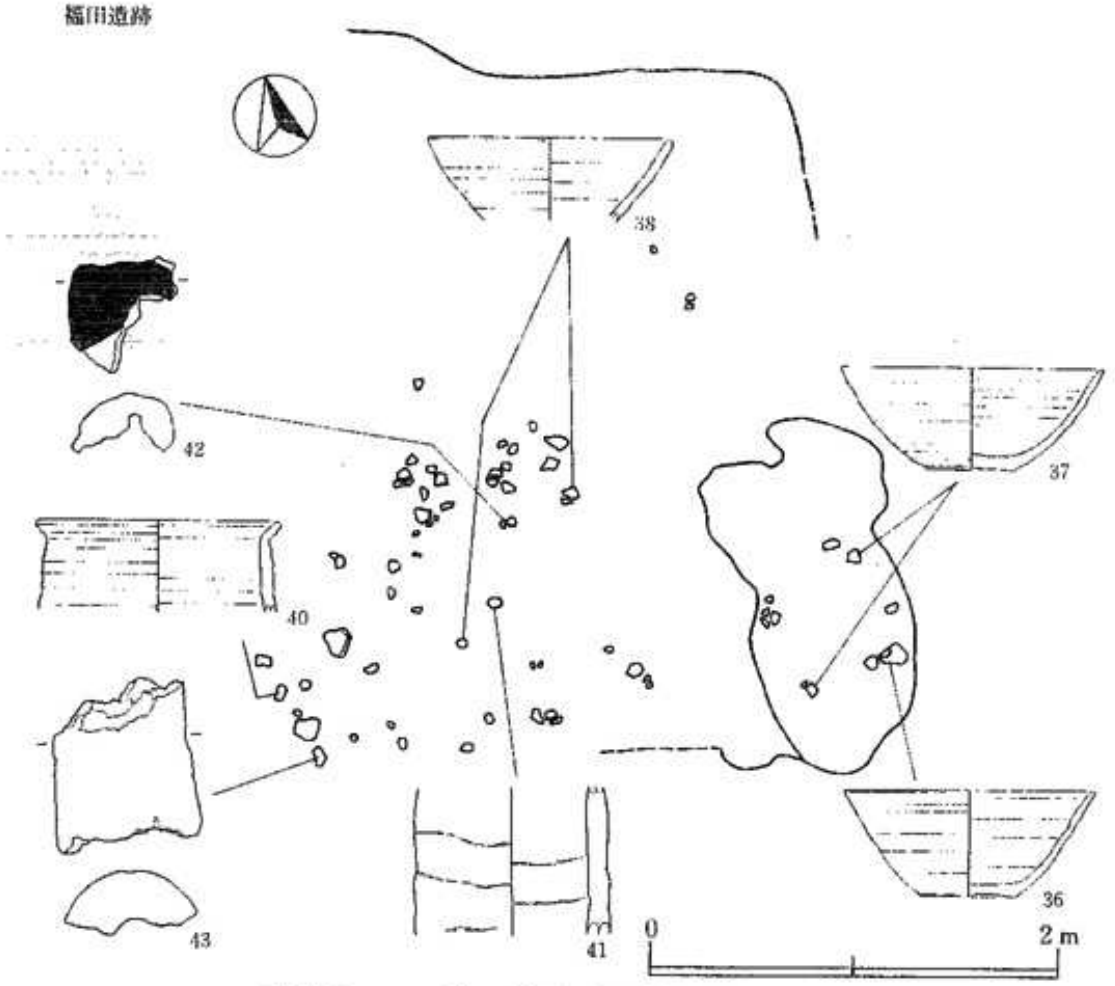
出土遺物は、カマド周辺及び南東部の土坑内に集中する。36・37は土坑埋土から出土した土師器坏で、底部には回転糸切り痕を留める。38～40はカマド周辺部出土であり、一括資料として扱うことができる。39は高台付坏というより口径16.2cmの大形で、埦に近い形態を示す。底部の切り離しは不明であるが、低い高台を貼り付けている。内面は丁寧にミガキ（単位不明）の後、黒色処理を施している。ミガキは外面口縁部にも認められる。40はロクロ使用の小型の甕である。内面口縁部に煤状炭化物が厚く付着している。41は土製支脚で、上・下部を欠く。42・43はフイゴ羽口で両者が同一個体かどうかは不明である。42は、先端部破片で、飴状を呈する鉄滓が付着している。43も先端部にほど近い部分であろう。直径は7cm程になる。この他では、



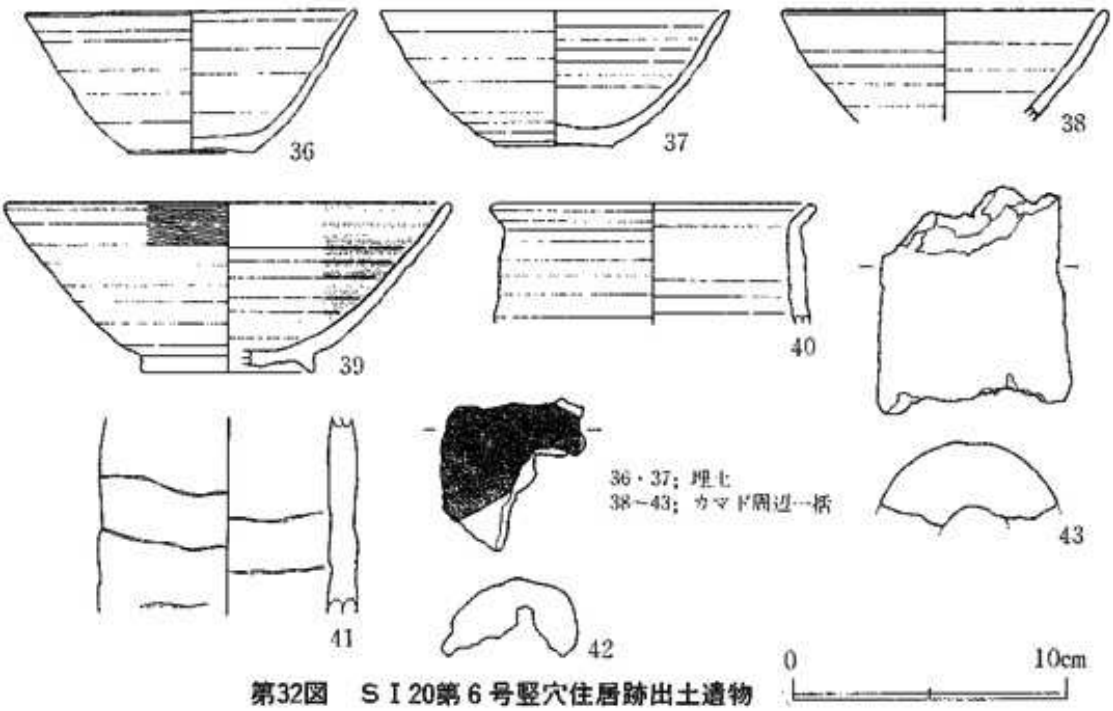
1層　黒褐色（10YR2/2）しまりやや弱、焼土をしもふり状に少量、炭化物を微量含む。
2層　赤褐色（5YR4/6）焼土層、カマド崩壊土。
3層　赤褐色（5YR4/8）焼土層、しまりやや弱、カマドの掘り方(?)。
4層　にぶい赤褐色（5YR4/4）焼土層、焼土粒子径5～20mmのものも少量含む（焼土B）。
5層　黒褐色（10YR2/2）土色は1層と同じで、層境がはっきりしない、焼土をごく微量含む。
6層　暗褐色（10YR3/4）地山粘土を主とするブロック、焼土を微量含む。
7層　褐　色（10YR4/4）粘質土、上面に焼土を多量に含む。
8層　褐　色（10YR4/4）7層よりしまりやや弱、焼土を7層より多く含む。
9層　柱穴埋土。

0　2m

第30図　ＳＩ20第6号竪穴住居跡



第31図　ＳＩ20第６号竪穴住居跡遺物出土状況



第32図　ＳＩ20第６号竪穴住居跡出土遺物

非ロクロの土師器甕も出土している。外面ケズリ・内面ナデ調整を加えている。

ＳＩ 21第７号竪穴住居跡・ＳＫ22第３号土坑（第33図～第37図，図版12・図版35・図版36）

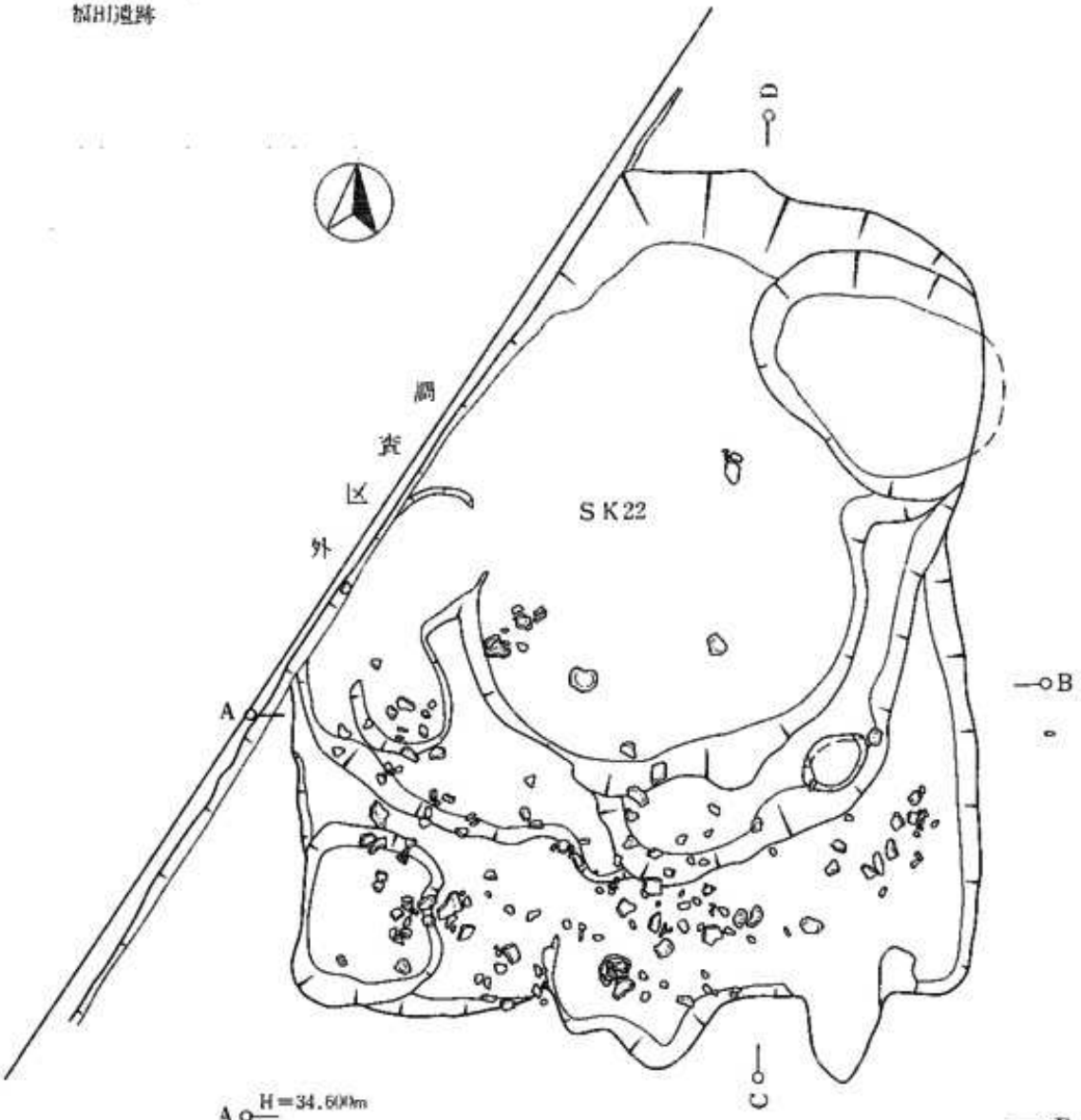
遺構群西端、ＬＩ 57・58、ＬＪ 57・58で検出した。遺構確認時において、カマドをもつ住居跡南壁部分と、これに対応しない丸味をもった壁が北側で存在することが明らかになった。このことから、住居跡と土坑が重複しているものと判断し、前者をＳＩ 21、後者をＳＫ22と登録した。ＳＫ22はＳＩ 21の東壁部分を切り込んであり、土坑が住居跡より新しい時期のものであることが判明したが、この段階で土坑の南側の壁は確認できなかった。理由は土層観察により明らかになった。第34図に示したように、住居跡を切って構築された土坑も廃棄され埋没する段階には住居跡とともに埋っており（14層に対応する）、この結果土坑の南側の壁を確認面では把えることができなかったものである。

ＳＩ 21は、南壁を除きＳＫ22に大きく切られているため南北長は不明である。東西長は、南壁で3.5m を測る。南壁と直交する線を主軸方位とすると、これはほぼ磁北に一致する。壁高は残りの良い部分で15～20cmである。壁溝・柱穴は確認できなかった。住居跡南西隅には、長さ95cm、幅75cmの土坑が掘り込まれており、住居跡に伴うものと考えている。

カマドは南壁の東寄りに設置されている。遺存状態はよく、構築方法を復元できる。煙出し部は壁をＵ字状に45cm程掘り進めているが、住居跡内部の燃焼部から煙出しにかけて緩いスロープ状に削り込んでいるのである。このことは、住居構築時にカマドの位置とその構築法を念頭にいれて作業した結果と理解できる。これで後の火床面と煙道が完成する。袖部は、左・右袖の用材が異なることから、改築の可能性が高い。右袖（７層）は粘土を主体とするが、周辺の地山粘土よりやや明るい色調を呈していることから、粘土を他所から搬入したか地山粘土をある程度精選して用いたものと思われる。これにある程度の砂質土と炭化物が混入する。左袖（６層）も粘土を主とするが、砂質土の混入が右袖より多く粘性をやや欠く。これにも炭化物・焼土が少量混じる。袖先端部には赤変した河原石が埋め込まれており、芯材あるいは補強材の役割を果たしていたものと考える。支脚は燃焼部ほぼ中央に位置する。土師器の甕を転用しているもので、まず胴部の破片を敷き、その上に底部を欠く甕を倒位に置いている。支脚の現存高は８cm、この位置での燃焼部内法幅は45cmである。

ＳＫ22も一部が調査区外に延びているため、規模・形状は不明と言わざるを得ないが、残存部分から径約3.7m 程の略円形を呈するものと思われる。深さは最深で1.12m ある。坑底面は、大小さまざまな凸凹をみせており、掘った穴をいわゆる土坑として機能させたのではなく、土取りなど掘ること自体が目的であった遺構と解するが自然であろう。

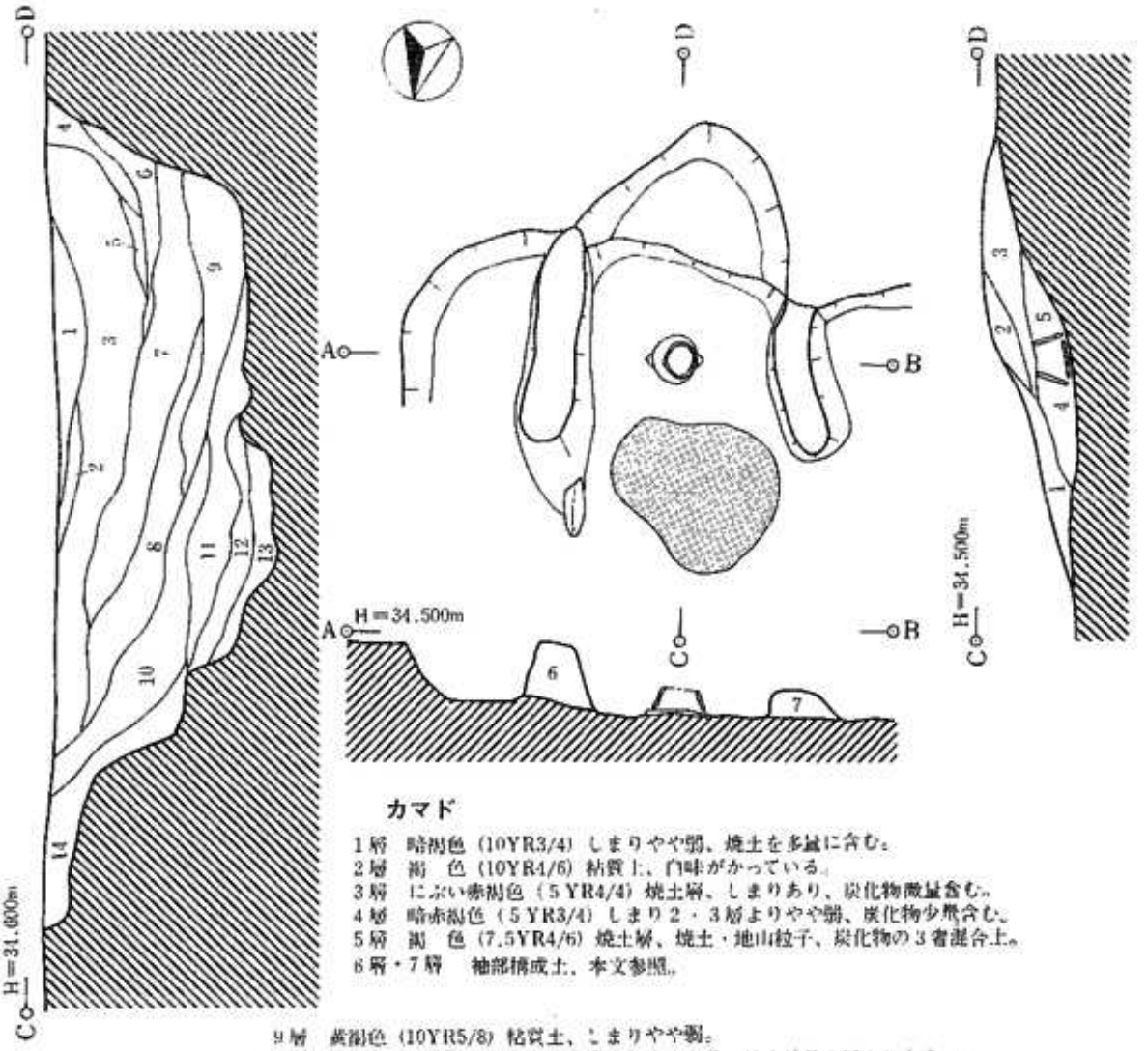
出土した遺物は、土師器坏・高台付坏・皿・甕、須恵器甕、砥石がある。土師器坏には内面を丹塗りしたものも含まれている。44～48は床面より出土した土師器坏類である。底部は切り



1層　黒褐色（10YR2/3）しまりやや弱、混入物ほとんどなし。
2層　暗赤褐色（5YR3/3）焼土層、しまりややあり。
3層　暗褐色（10YR3/4）しまりやや弱、粘性ややあり、地山粒子を少量含む。
4層　黒褐色（10YR2/2）しまり3層よりやや弱、混入物ほとんどなし。
5層　黒褐色（10YR2/3）しまり4層よりやや弱、地山粒子は3層よりやや多い。
6層　黒褐色（10YR2/3）しまり4層と同、地山粒子は5層より多い。
7層　黒褐色（10YR3/3）しまり3～6層よりややある、地山粒子の混入度合は5層と同じ。
8層　暗褐色（10YR3/3）しまり3層よりやや弱、地山粒子3層より少ない。

第33図　SI21第7号竪穴住居跡
SK22第3号土坑

0　2m



カマド

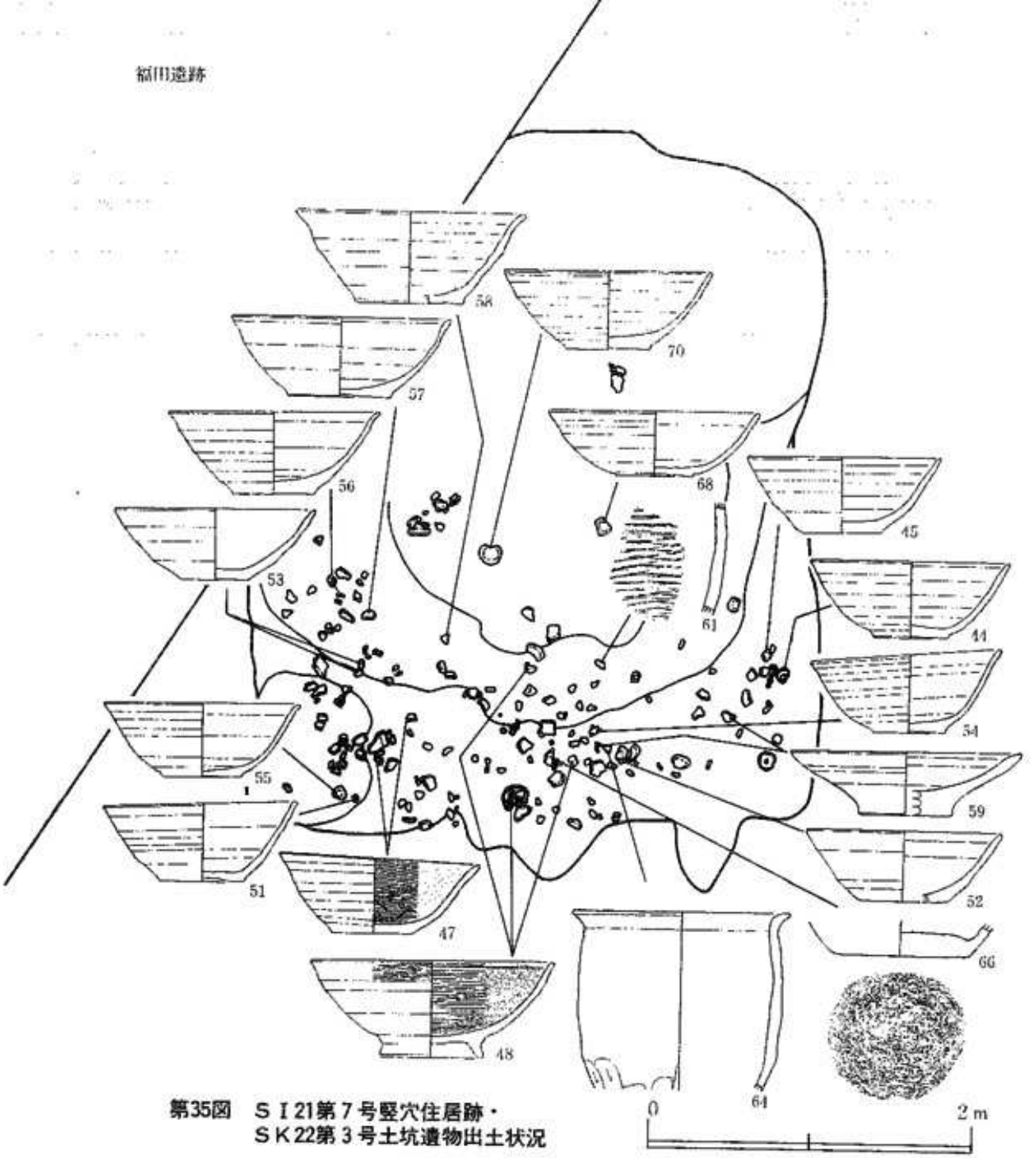
1層　暗褐色（10YR3/4）しまりやや弱、焼土を多量に含む。
2層　褐　色（10YR4/6）粘質土、門味がかっている。
3層　にぶい赤褐色（5YR4/4）焼土層、しまりあり、炭化物微量含む。
4層　暗赤褐色（5YR3/4）しまり2・3層よりやや弱、炭化物少量含む。
5層　褐　色（7.5YR4/6）焼土層、焼土・地山粒子、炭化物の3者混合土。
6層・7層　袖部構成土、本文参照。

9層　黄褐色（10YR5/8）粘質土、しまりやや弱。
10層　暗褐色（10YR3/3）しまり8層よりややあり、地山粒子8層より少ない。
11層　黄褐色（10YR5/8）9層に類似。
12層　黒褐色（10YR2/2）4層に類似。
13層　黄褐色（10YR5/8）9層に類似。
14層　にぶい黄褐色（10YR4/3）しまりややあり、焼土・地山粒子をしもふり状に多量に含む。
15層　黒　色（10YR2/1）しまりやや弱。
16層　褐　色（7.5YR4/4）粘質土、焼土多量、地山粒子少量含む。

0　1m

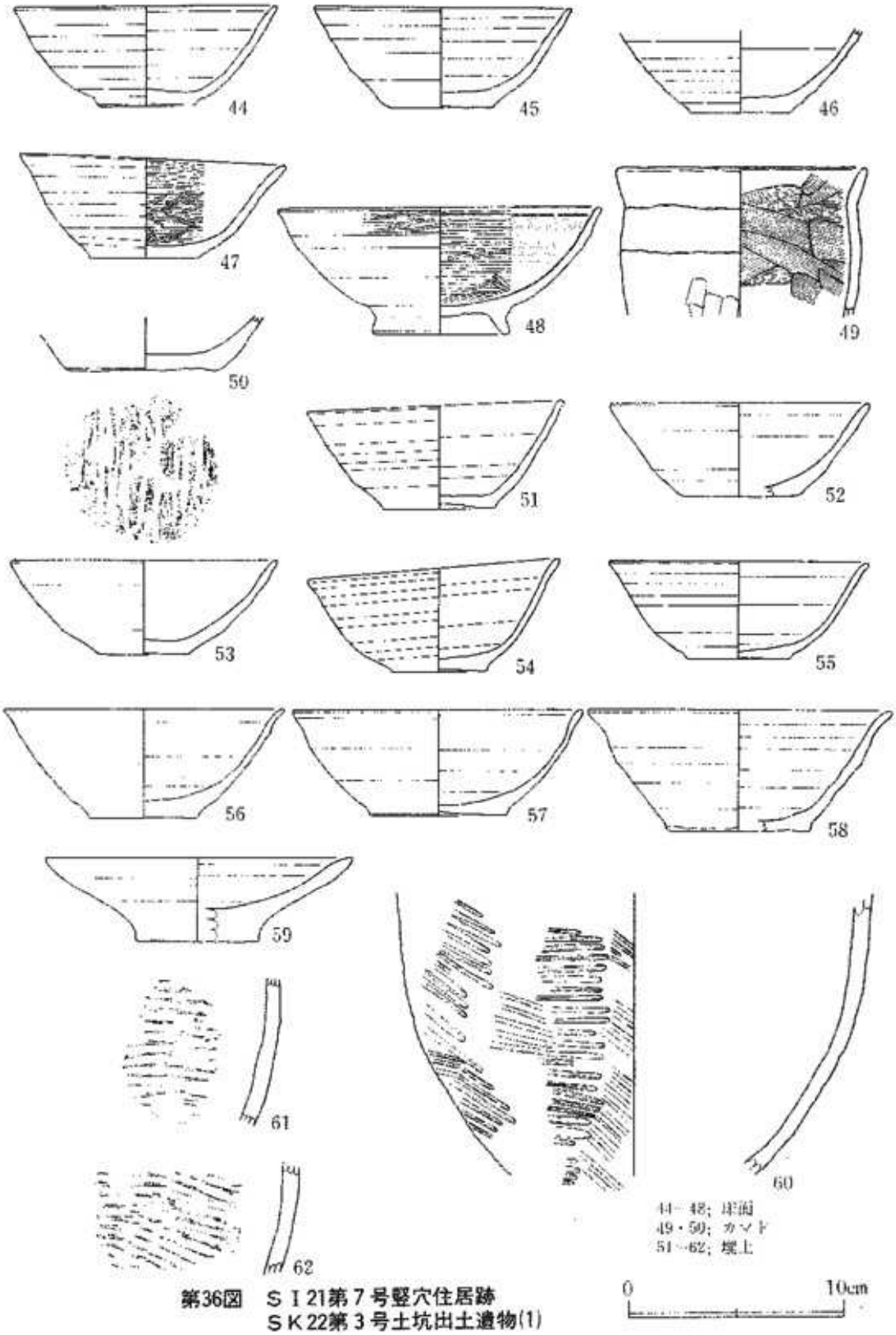
第34図　ＳＩ21第７号竪穴住居跡カマド

離しの不明な48を除き回転糸切り痕を留める。45は二次火熱を受けており、外面には煤状炭化物が付着している。47は内面底部を放射状、体部を横位・斜位に細かくミガキした後に丹塗りを行っている坏である。丹は部分的に失われているが内面全体に塗られていたものと考えられる。丹の色を土色帖の表記に従うと、赤（10R 5／8）～明赤褐（2.5Y R 5／8）に近い。この土器は、器形・胎土・焼成からみても他の土師器と異なるものではない。48は、内面をミガキの後、黒色

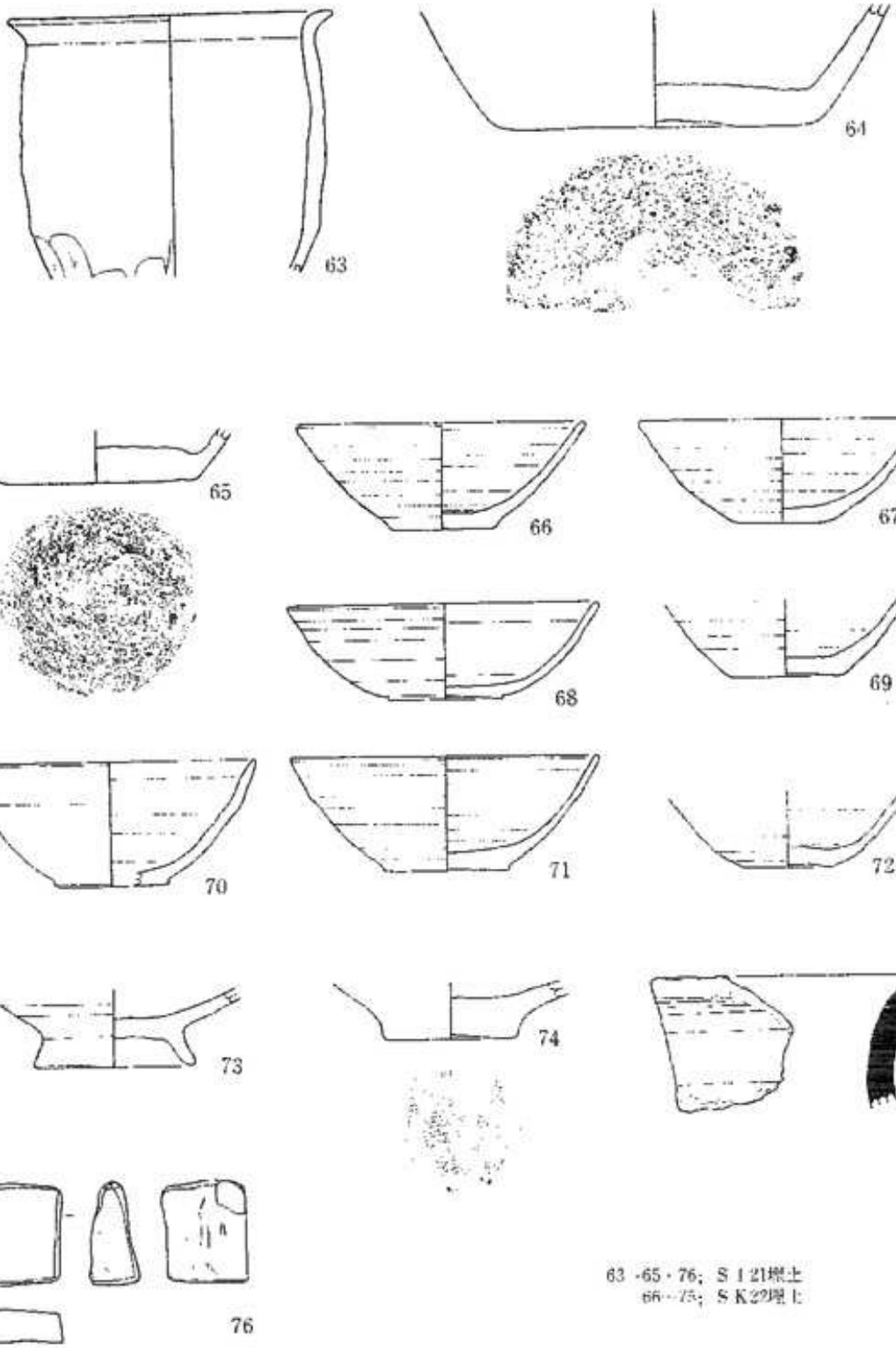


第35図　ＳＩ21第７号竪穴住居跡・
ＳＫ22第３号土坑遺物出土状況

処理した塊状を呈する高台付坏である。二次火熱を受け、部分的に黒色がとんでいる。底部の切り離しは不明であるが、菊花状に削り出しを行ってから高台を付している。その後ロクロを用いて台内部をナデている。49・50はカマド内より出土した甕である。49は支脚に転用されたもので、幅２cm程の輪積み痕跡が残る。外面にはケズリ、内面にナデが施されている。50の底部には簾状圧痕が認められる。51～65・76はＳＩ 21埋土から、66～75はＳＫ22埋土から出土したものである。51～58は坏で、底部に回転糸切り痕を留める。51・55・56は二次火熱を受けている。55は内面体部に板痕を残す。長さ５mm、幅2.5mmを計測する。59は柱状高台の皿で、底



第36図　ＳＩ21第７号竪穴住居跡
ＳＫ22第３号土坑出土遺物(1)



63・65・76; S I 21埋土
66～75; S K22埋土

第37図　S I 21第7号竪穴住居跡・
S K22第3号土坑出土遺物(2)

0　10cm

部は回転糸切りである。60～62は、いわゆるタタキ目をもつ甕で、いずれも丸底を呈するものであろう。内面はナデ調整となっている。63は非ロクロの甕で、二次火熱を受け器面が荒れている。外面の一部にはケズリ痕跡が残る。64・65は砂底の甕で、64は底部周縁に、65は底部中央部分にそれぞれ砂粒が付着している。

66～74はＳＫ22から出土した坏類である。73を除き底部に回転糸切り痕を留める。69は内面に漆かタール状の付着物が認められる。72は底径が3.9cmと小さいものである。73は、底部を菊花状のケズリの後に高台を貼り付けている。74は柱状高台の皿で、底部は1.8cmの厚さを有する。75は須恵器甕の口縁部である。76はＳＩ21埋土から出土の砥石で、凝灰岩を素材としている。４面に砥面をもち、縦断面が三角状を呈している。重量は35.9g。図示し得なかったものに、須恵器壺・甕の破片がある。土師器との比率でみると微々たるものであるが、本遺跡ではＳＩ28に次ぐ量である。

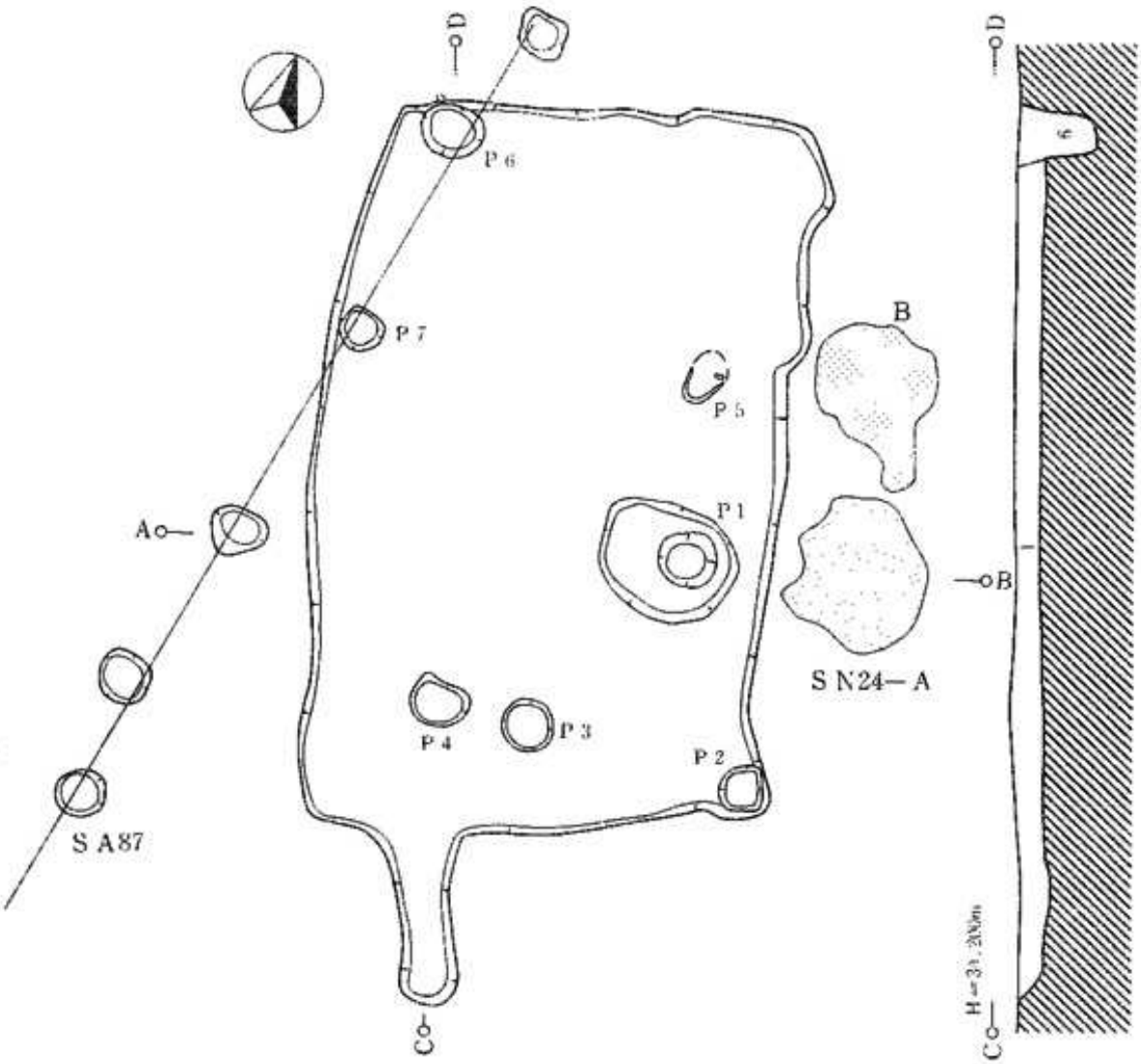
ＳＩ23第８号竪穴住居跡（第38図～第40図、図版13・図版36）

遺構群西側、ＭＡ53で検出した。住居跡北西部をＳＡ87とした柱列が通っている。住居跡を切り込んでいるものである。また住居跡の東隣には焼土遺構（ＳＮ24－Ａ・Ｂ）が位置する。規模は南北長3.65m、東西長2.3mのやや歪な長方形を呈している。ここも著しい削平を受けており、確認面からの深さは10～15cmである。面積は8.4㎡、主軸方位はＮ－９°－Ｗを示す。床面は平坦であるが、特に堅く締まってはいない。南壁西寄りに長さ90cm程の煙道状の掘り込みをもつ。焼土・焼面等一切確認できず、未使用の煙道である可能性を残しつつも、カマドは不明と言わざるを得ない。また床面上にも焼土の分布はない。住居内で柱穴様ピットはＰ１～６を確認している。Ｐ６・７はＳＡ87に伴うもので、住居跡埋土を切っている。柱穴は位置的にはＰ２以外不明である。なお埋土中より炭化米20粒を検出している。

出土した遺物は、土師器坏・高台付坏・甕・鍋、及び軽石がある。図示した土器はいずれも床面・床面直上で検出したものである。77は口縁部内外面に煤状炭化物が付着する坏である。底部は回転糸切り痕を留める。78は、内・外面ともミガキの後に黒色処理した坏である。底部はごく一部しか残っておらず、切り離しは不明である。79は非ロクロの甕で、胎土に砂粒を多く含んでいる。外面には幅1.7～2.3cmで粘土の積み上げ痕が観察できる。内面はナデられて、この痕跡は消されている。80・81は鍋と言えるものであろう。81は丸底を呈するもので、推定口径37.2cm、器高13.3cmである。外面下半にはケズリ、内面はヘラナデされている。２点とも非ロクロ製品であり、二次火熱を受けている。79と同様、胎土には砂粒を多く含んでいる。

ＳＩ27第９号竪穴住居跡（第41図～第45図、図版14・図版36・図版37）

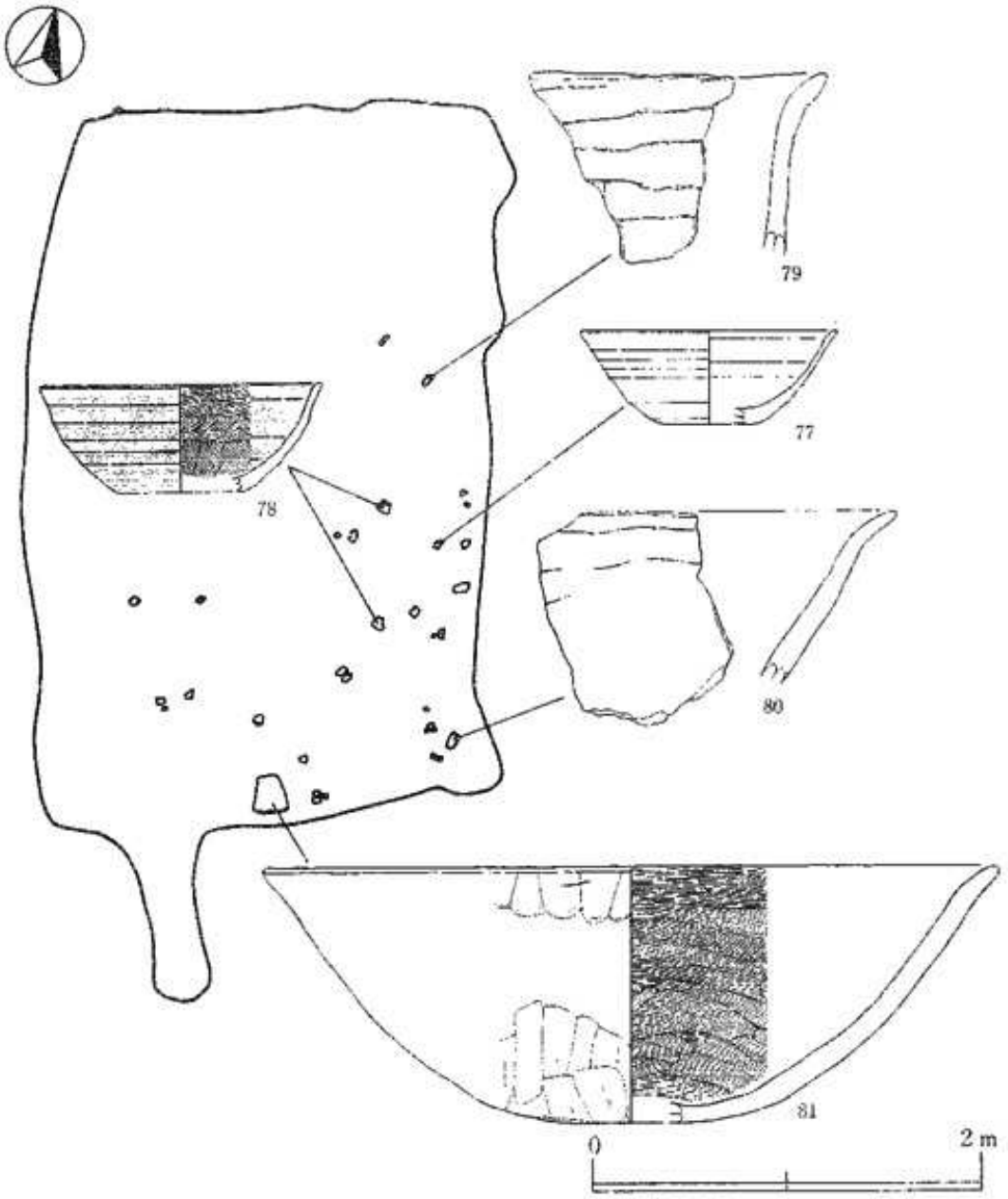
遺構群南端西側、ＩＪ50・51、ＭＡ50・51で検出した。住居跡の北東部で焼土及び黒色土のフランを確認、当初はカマドもしくは付属する土坑と考えていたが、精査の結果、住居跡壁溝



1層　暗褐色（10YR3/3）しまりややあり，地山粒子は中央～南側にかけてもふり状に少量含む。
　　焼土を微量含む。
1層　赤褐色（5YR4/6）焼土層。
2層　黒褐色（10YR2/1）しまりやや弱，焼土粒子少量含む。
3層　黒褐色（10YR2/2）しまりややあり，地山漸移層（旧層）。
4層　付属土坑埋土。
5層　P1埋土，SI23より旧い。
6層　SA87柱穴埋土。

0　2m

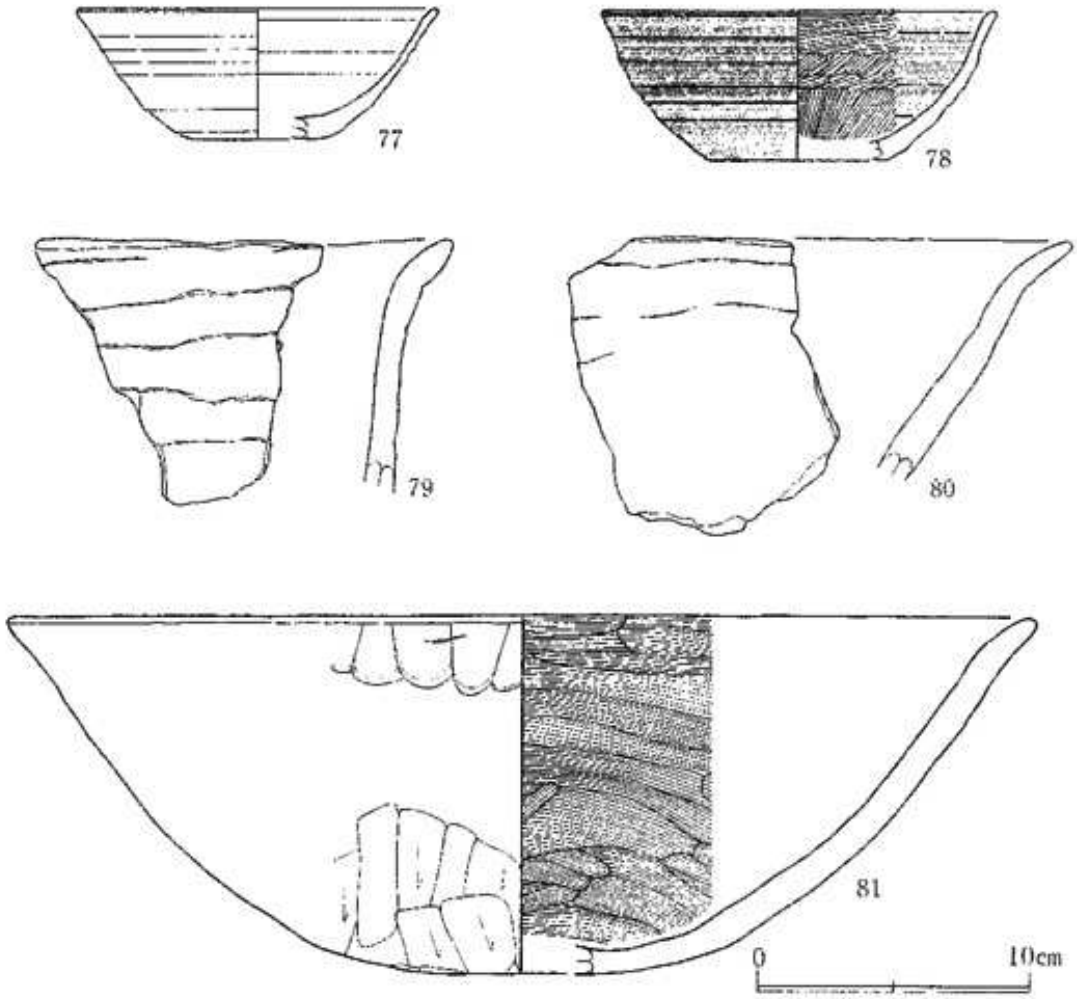
第38図　SI23第8号竪穴住居跡



第39図　ＳＩ23第８号竪住居跡遺物出土状況

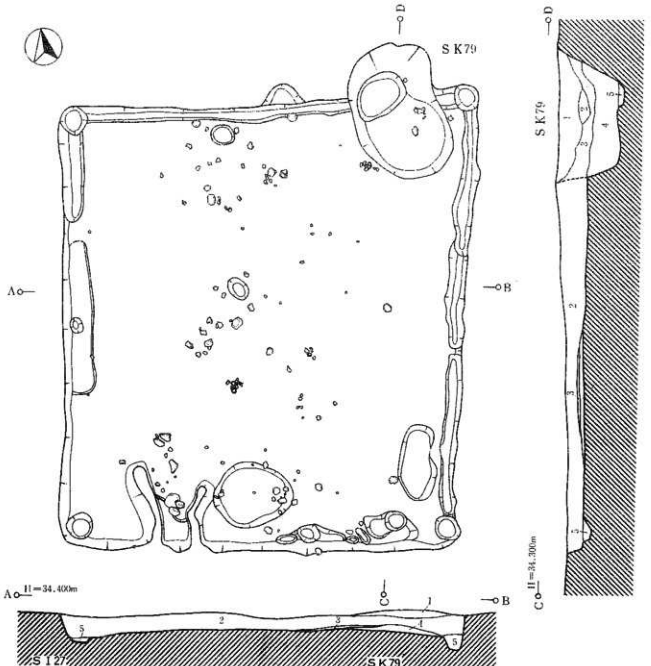
を切っている土坑（ＳＫ79）であることが判明している。規模は、南北長が東壁で5.1m、西壁で4.8m、東西長は北壁で4.55m、南壁で4.3mの南北にやや長い方形を呈している。壁高は、最も低い北西隅で22cm、東壁では35～43cmである。面積は21.6㎡、主軸方位はＮ－10°－Ｅを示す。

壁溝は、カマドの両脇を除いてほぼ全周している。南壁では根による撹乱著しく、僅かに痕跡を留める程度である。北壁・東壁は、幅15～20cm、深さ10～15cmであるのに対し、西壁では幅約25cm、深さ５～８cmと幅広く浅い溝になっている。柱穴は４隅に位置し、その径25～30cm、床面からの深さは20～35cmを測る。



第40図　ＳＩ23第８号竪穴住居跡出土遺物

カマドは、南壁西寄りに位置している。煙出しにあたる壁を若干緩く削り込む形態で、カマド堆積土（２層）の観察から煙道を粘土により架構させ、掘り込み長以上の長い煙道を形成していたものと考えられる。袖部は、右袖には根が多く入り込んで明確ではないが、左袖からその構築法をおおよそ明らかにできる。まず、黒色シルト質土を主体にし、粘土を荷降り状に混入させた土を床面上に厚さ５cm位敷く。これはＳＩ03カマドと同じように、奥壁部分にも貼るように敷かれている。この上に袖本体となる土を構築させて完成である。この用土は、黒色シルト質土を主体に粘土と焼土粒子をやや多めに混入させたもので、カマドは全体として赤黒く見える。焼土が入っていることから、改築されたものとも考えられる。燃焼部中央には、火床面よりやや浮く形で焼けている河原石１個と土師器坏が検出された。河原石については、カマド構築材の一部であった可能性が高い。この位置で燃焼部の内法幅40cm、焚口部へ向かって「ハ」字形に広がっている。カマド東側には長さ90cm、幅70cmの土坑が掘り込まれている。位置と、埋土に焼土・土器が多量に含まれていることから、カマドに付設されたものであろう。また床面

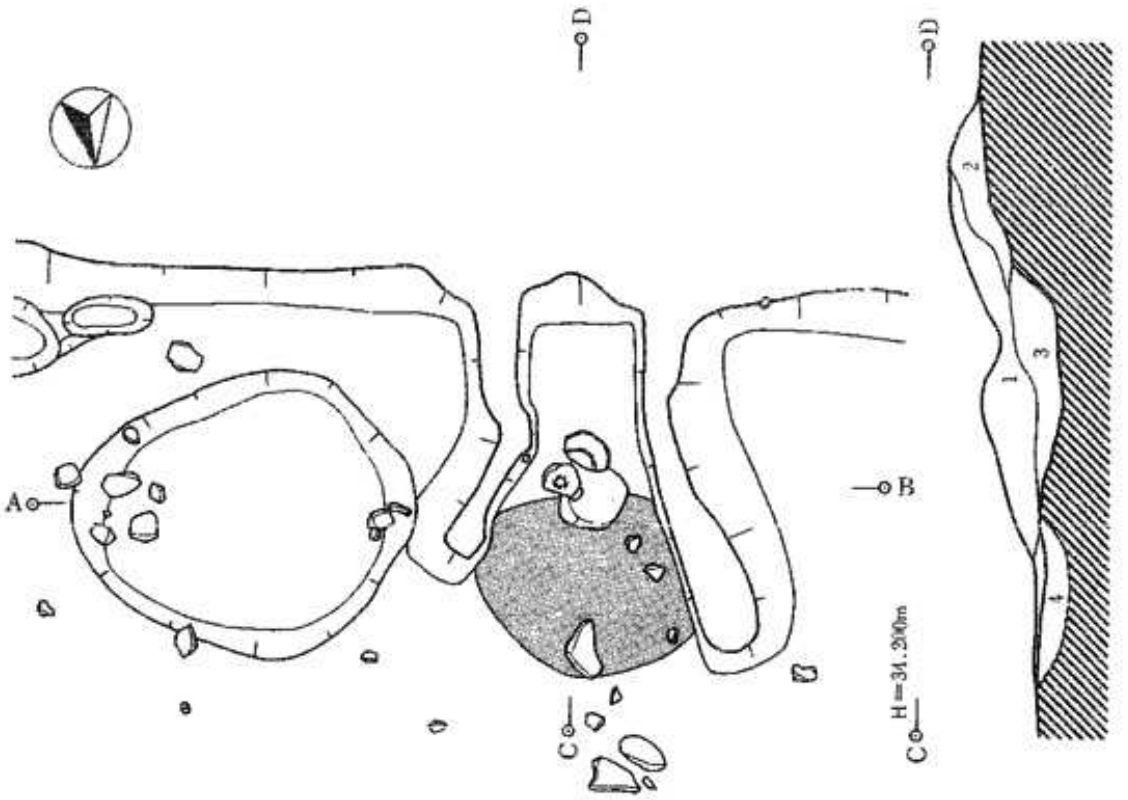


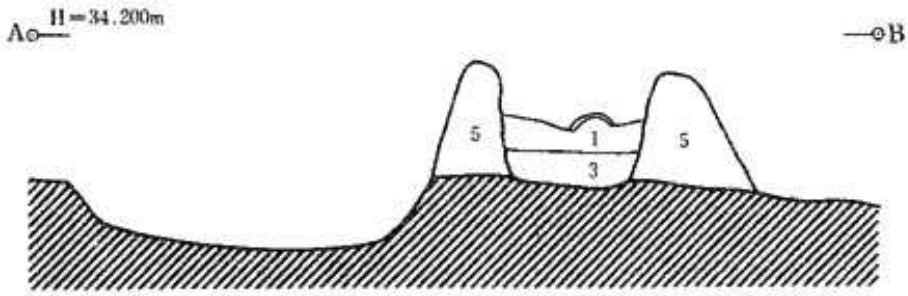
1層　黒褐色（10YR2/2）しまりややあり、震入物はほとんどない。
2層　暗褐色（10YR3/3）しまりはややあるが1層よりは弱、地山粒子少量、焼土・炭化物微量含む。
3層　黒褐色（10YR2/2）しまりなし、厚さ2～4mmの筋状に入り込んでいる。
4層　暗褐色（10YR3/4）しまりは2層よりやや弱、地山粒子は2層よりやや多く含む。
5層　壁溝埋土。

1層　黒褐色（10YR2/3）しまりやや弱、地山粒子少量、炭化物、焼土微量含む。
2層　暗褐色（7.5YR3/3）しまりは1層よりやや弱、焼土を多量に含む。
3層　黒褐色（10YR2/3）粘性ややあり、地山土をブロック状に多量に含む、焼土も少量含む。
4層　褐　色（10YR4/6）粘性あるがしまりは弱。
5層　褐　色（10YR4/4）しまりは4層よりややあり。

第41図　ＳＩ27第９号竪穴住居跡・ＳＫ79第25号土坑

0　2m





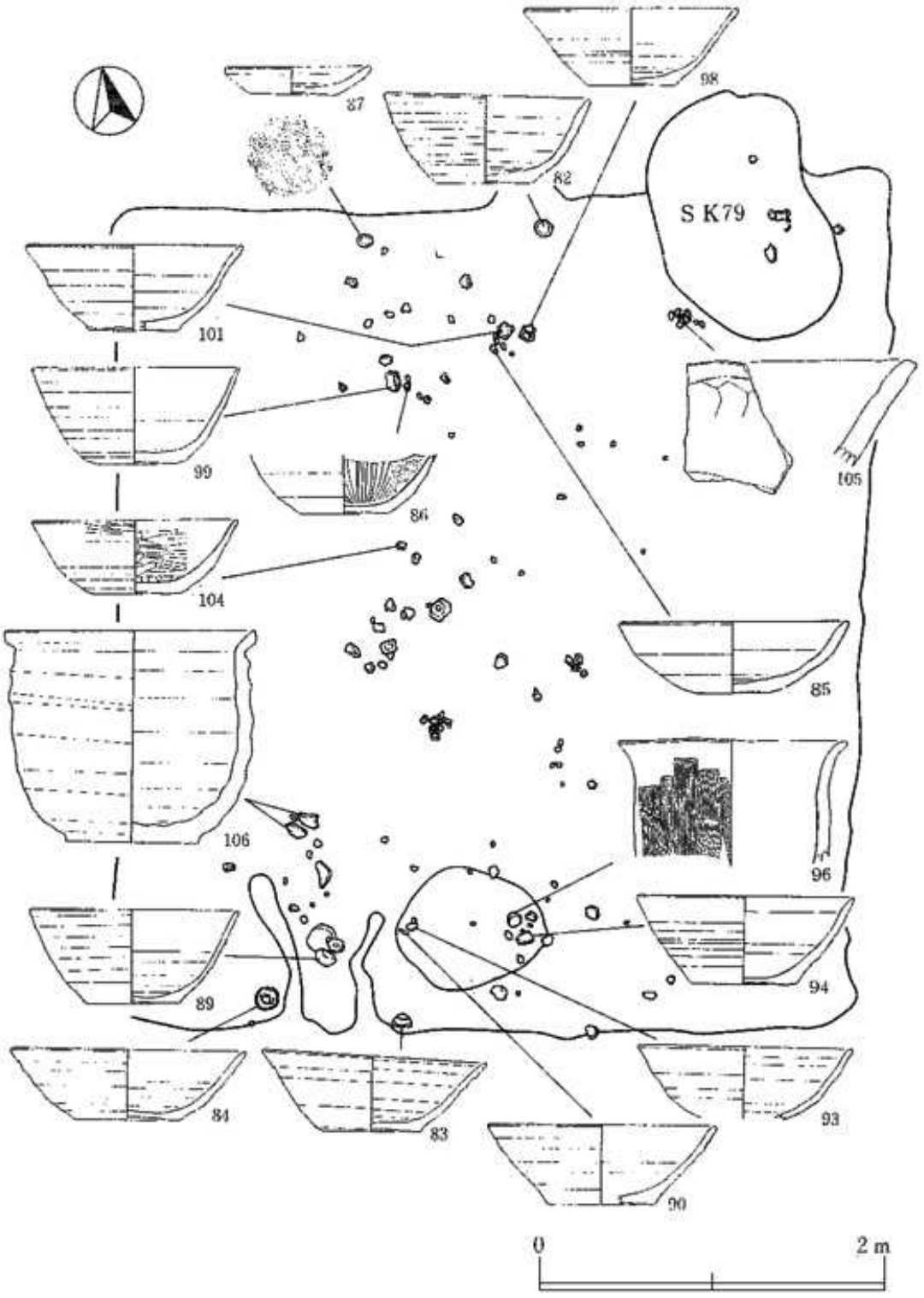
1層　暗褐色（7.5YR3/4）しまり・粘性弱、焼土少量含む。
2層　褐　色（7.5YR4/6）粘土層、天井部崩落土か。
3層　黒褐色（10YR2/3）しまり弱、粘性ややあり、地山粘土をしもふり状に多量に含む。
4層　赤褐色（2.5YR4/8）火熱による赤変箇所。
5層　袖部構成土、本文参照。

0　1m

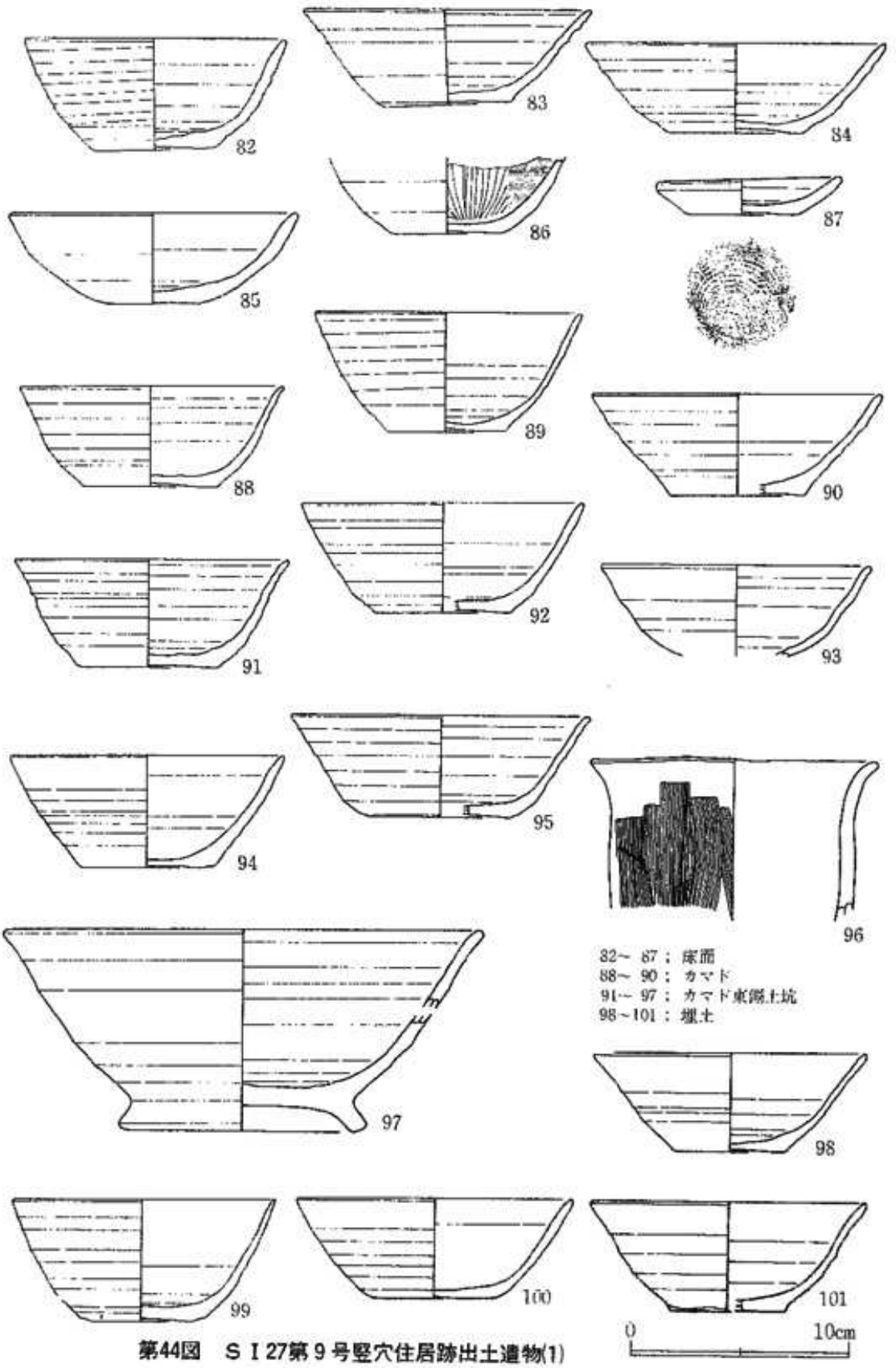
第42図　ＳＩ27第９号竪穴住居跡カマド

はほぼ平坦で堅く締まっているが、カマド西側の南西隅は周囲よりやや低くなっている。土坑同様カマドと密接な係りをもつ場であったのかもしれない。

遺物は、カマド周辺及び床面中央～北側で多く検出された。図示し得た遺物は、土師器坏・皿・高台付埦・甕・鍋がある。82～87は床面出土、88～90はカマド内出土、91～97はカマド東側土坑内出土、98～106は埋土出土である。坏類は総て底部に回転糸切り痕を留める。82はロクロ目のうち３本は沈線様であり意図的になされたと考えられる。84は二次火熱を受けている。

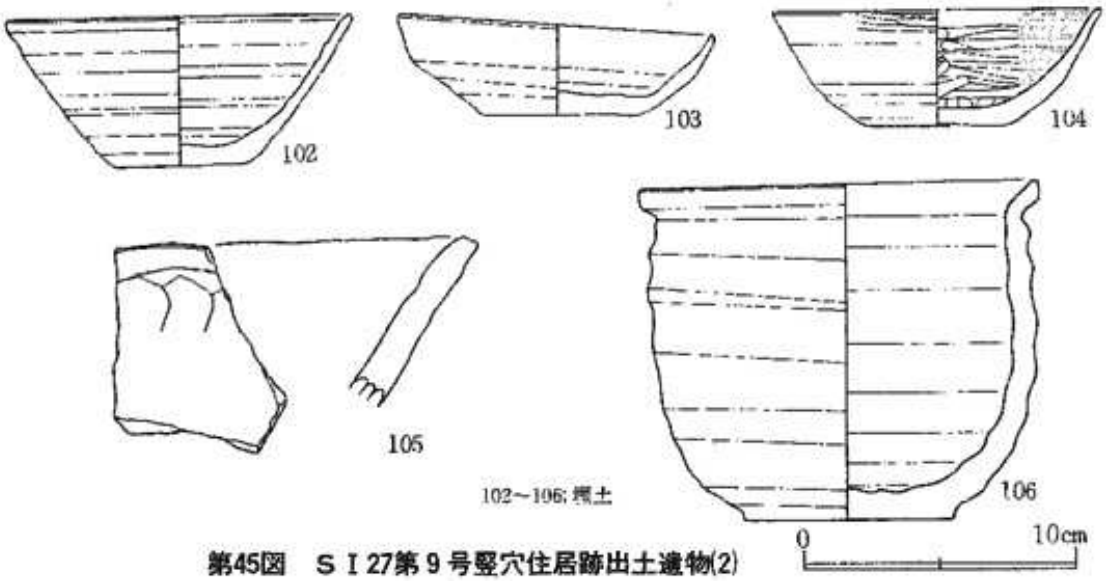


第43図　ＳＩ27第９号竪穴住居跡遺物出土状況



82～ 87：床面
88～ 90：カマド
91～ 97：カマド東隣土坑
98～101：堆土

第44図　ＳＩ27第９号竪穴住居跡出土遺物(1)



第45図　ＳＩ27第９号竪穴住居跡出土遺物(2)

85は器形・胎土が103と似るもので、この２点のみ異質の感を受ける。86は内面を放射状のミガキの後、黒色処理した坏である。87は、土師器とも須恵器とも呼べないような皿で、完形で出土したものである。一見すると、坏の体下半部を再利用したかのような器形を呈する。内面はだいぶ使い込まれているようでテカテカした光沢を放つ。口径8.3cm、底径5.2cm、器高1.65cm、色調は内外面とも黒色を示す。カマド内出土の88～90は、いずれも二次火熱を受け、89は内面に煤状炭化物あるいはタール状の物質を付着する。91も82と同じくロクロ目が沈線様を呈している。96の甕は非ロクロで胎土に径１～５㎜の砂粒を多く含んでいる。外面には縦位のハケメ、内面は横位を主とするナデ（単位不明）のようである。97は推定口径21.6cmの大型の高台付椀である。底部は回転糸切りの後、高台を貼り付けている。焼成は他の土師器と比較しても大変良好である。埋土出土の坏では98と99が二次火熱を受けている。104は破片の一部がＳＫ79埋土から出土している黒色処理された坏である。105は小破片であるが、鍋であることが分かる。胎土には砂粒が多く含まれている。非ロクロで外面はケズリ、内面はナデのようである。106は、底部に回転糸切り痕を残すロクロ使用の甕である。最大径を口縁部に持つものの、胴下半部に膨らみを有す下ぶくれの甕である。この胴下半部を中心に二次火熱を受け、もろくなっている。

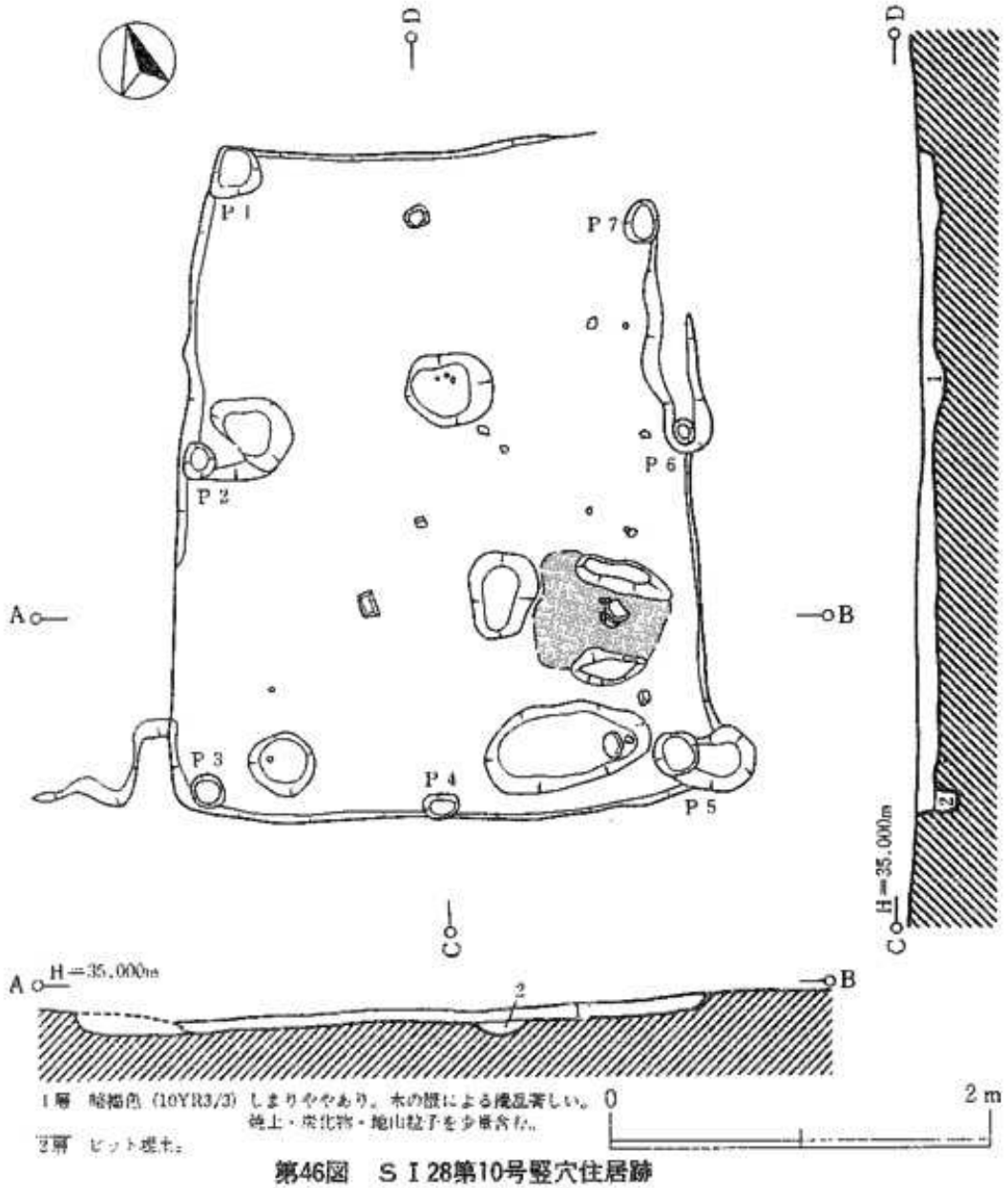
その他、埋土から柱状高台の皿、軽石が出土している。

ＳＩ 28第10号竪穴住居跡（第46図～第49図、図版15・図版37・図版38）

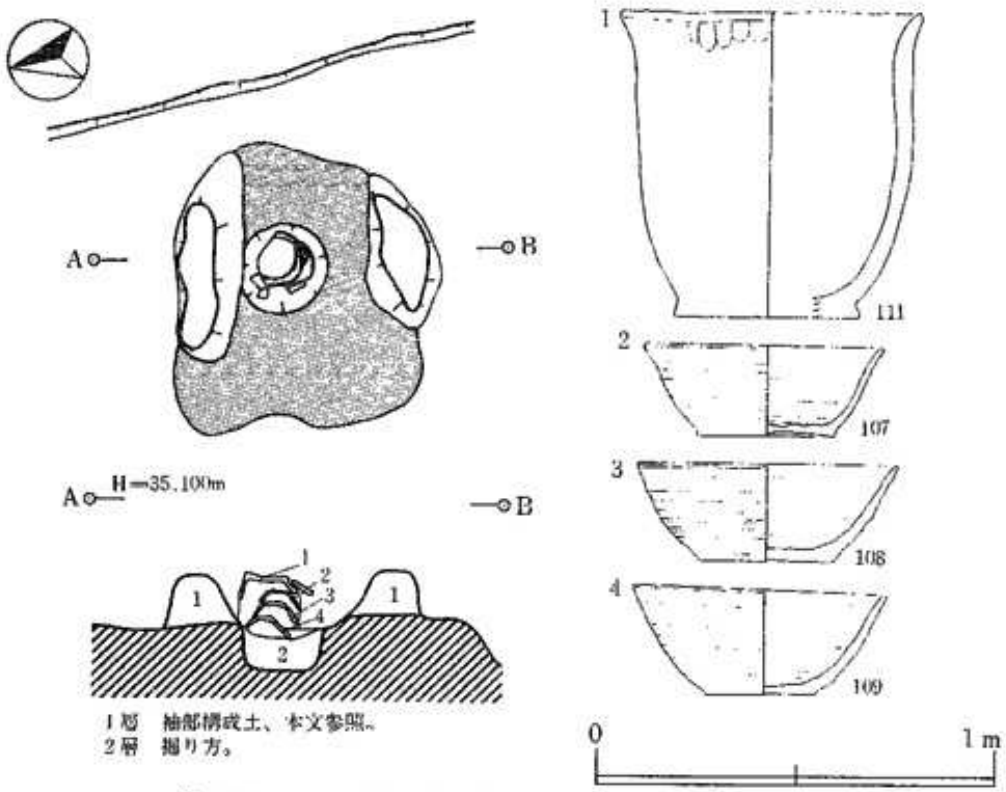
遺構群南東部、ＬＦ48・49、ＬＧ48・49で検出した。木の根による撹乱で北東部、南西部は破壊されていた。規模は南北長3.5m、東西長は西壁で2.8m、北壁は推定で2.4mの南北に長い長方形を呈している。壁高は、遺存状態の良い南壁でも12cm、他では５cm前後である。面積は推定で9.7㎡、主軸方位はＮ－18°－Ｅを示す。柱穴はＰ１～７が各隅と壁の中央に位置している。

径15～25cmの円形・楕円形の平面形を呈し、深さはＰ５で24cm、他が14～20cmである。

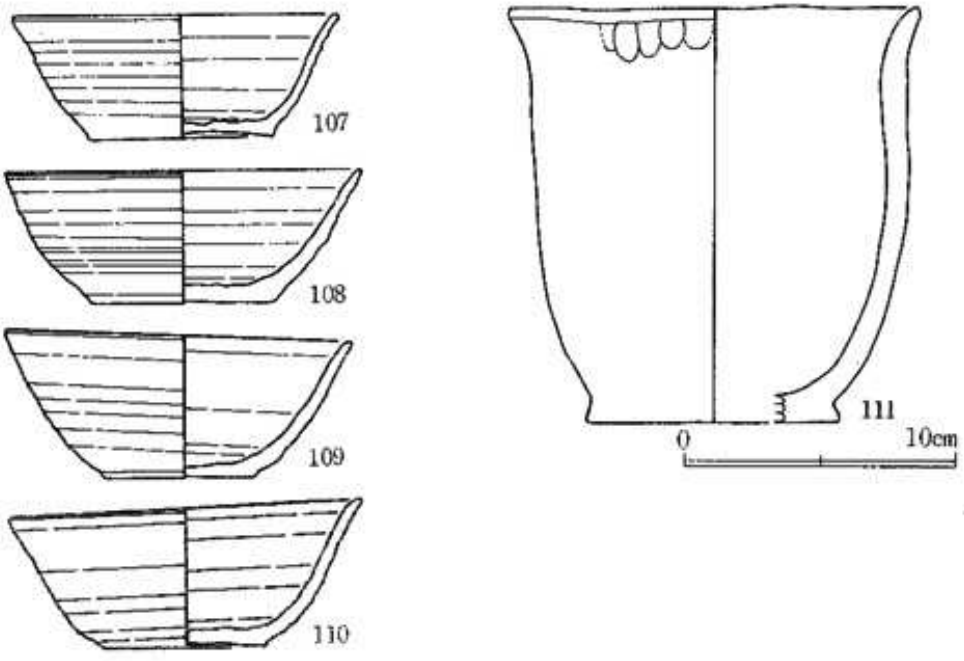
カマドは東壁南寄りに設けられている。つぶれた状態であったが、ごく僅かの袖と支脚を検出できた。袖部は黒褐色シルト質土を主体に粘土を混入させているもので、燃焼部内法幅は40cmである。支脚は中央よりやや左袖寄りに置かれている。径20cm、深さ10cmのピット状の掘り方を伴うもので、明らかに原位置を保っている。支脚はいずれも転用で、土師器坏３個体を倒位で重ね、その上に土師器甕の底部を被せている。一番下の坏は掘り方に半分程埋っている。積み上げられた支脚の高さは15cmになる。この支脚中央から壁までは45cm離れている。火床面は



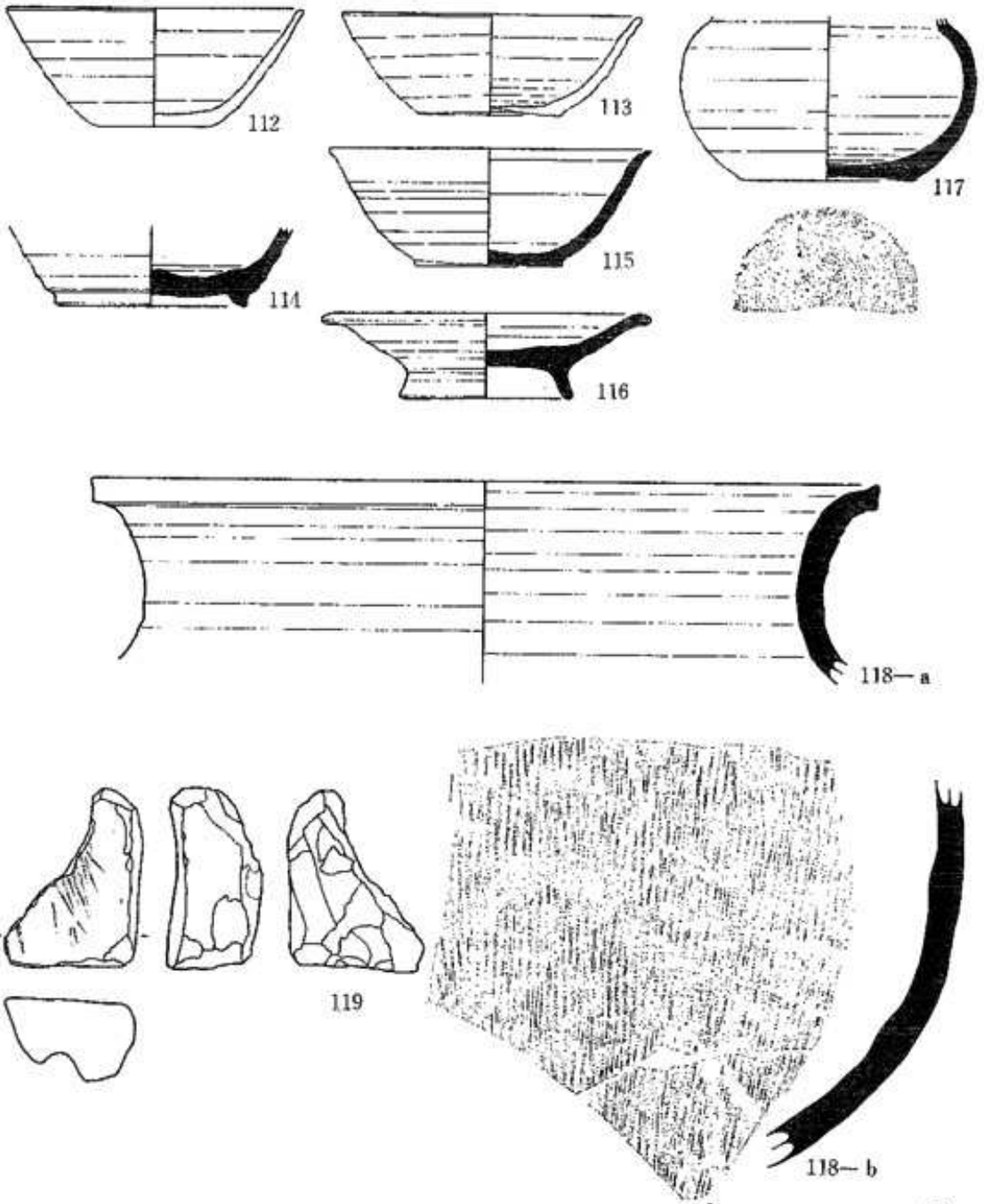
第46図　ＳＩ28第10号竪穴住居跡



第47図　ＳＩ28第10号竪穴住居跡カマド・遺物出土状況



第48図　ＳＩ28第10号竪穴住居跡出土遺物(1)



第49図　ＳＩ28第10号竪穴住居跡出土遺物(2)

掘り込みを持たず、平坦で堅く締まっている。火熱の影響で、火床面下８cmまで土色が変化している。カマドの南に隣接して長さ90cm、幅40cmの土坑が位置している。

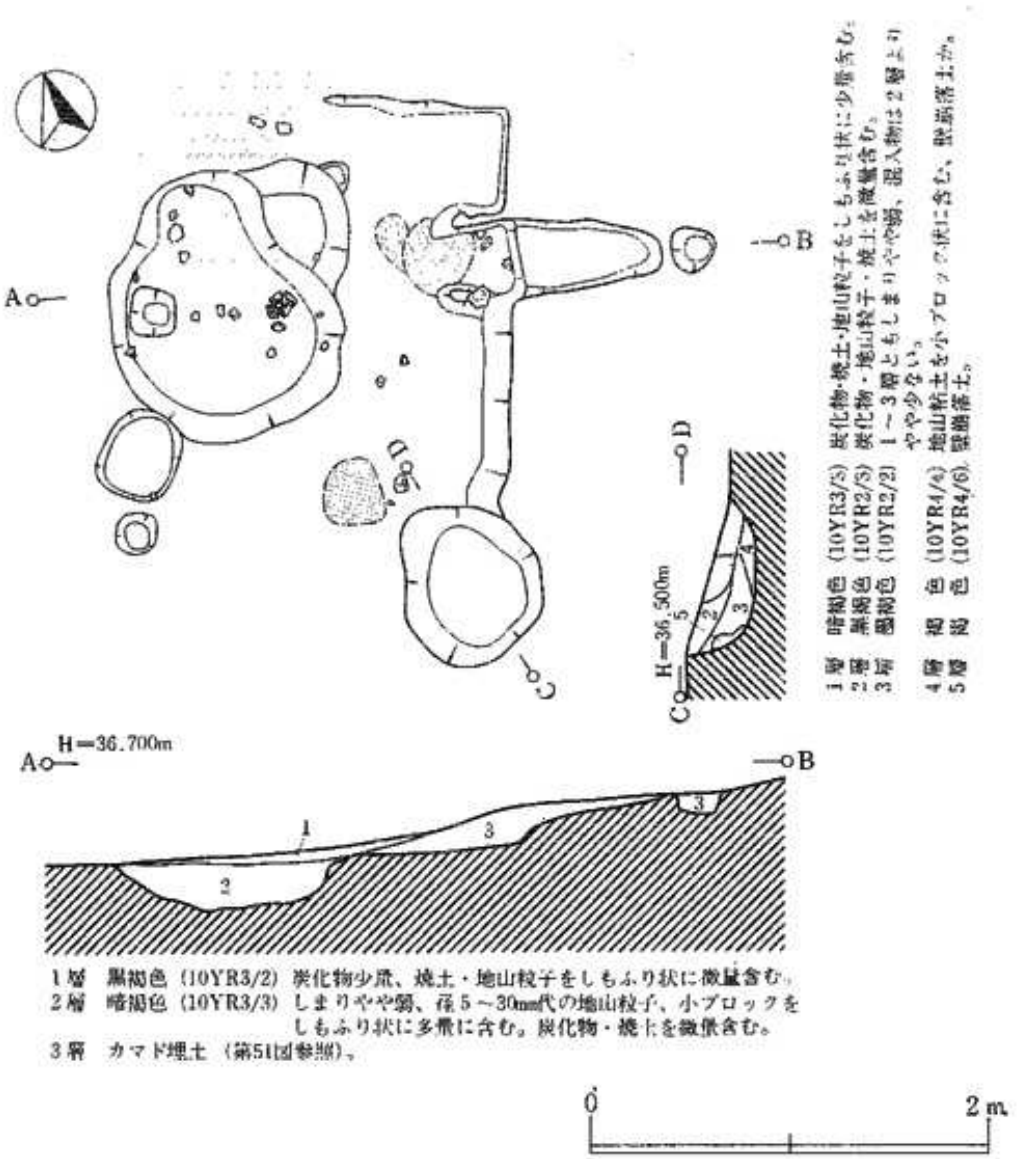
出土した遺物は、土師器坏・高台付坏・甕、須恵器坏・高台付坏・高台付皿・短頸壺・甕がある。須恵器についてみれば、確認した遺構の中では器種が豊富で量も多くなっている。ただしこれらの出土状況については、大部分が住居跡南西部における抜根作業中に得られたもので

あり、床面出土か否かについては明らかにできなかった。107～109・111は支脚として用いられたものであり、いずれも火熱を受けているが、坏の中で真中に置かれた108は他に比較すると火熱を受けた度合が低くみえる。111の甕は非ロクロで底縁部が外に張り出す。調整痕は火熱と摩滅のため不明であるが、短い頸部には成形時と思われる指頭痕が残る。110の坏はカマド南側土坑出土である。底部は回転糸切りで、これも二次火熱を受けている。112～118は、住居跡南西部にあった松の大木を除去する際に得られた遺物である。112と113は土師器坏で、底部に回転糸切り痕を留める。113は口縁部内外面の1ケ所に煤状炭化物が付着しており、灯火具として使用されたものと考えられる。114は須恵器高台付坏で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。内外面とも灰色を呈する。115は坏で、底部は回転糸切りとなる。口径13.3cm、底径6.1cm、器高5cmを測る。116は高台付皿である。底部を回転糸切りの後、高台を貼り付けている。内面は擦痕が認められ、墨痕はないものの転用硯の可能性がある。逆に高台内側には、擦痕は認められないが、墨痕があることから、墨溜として用いられたものと思われる。 117は短頸壺になるものであろう。底部には回転糸切り痕をもつ。歪みがあり、内外面に自然釉がかかっている。118は須恵器大甕で推定口径32.4cmを測る。胴部外面にはタタキ目をもつが、内面には明瞭なるアテ具痕は認められない。同一個体と考えられる破片は重量にして約5.6kg分出土しているが、接合はできなかった。底部は丸底になると思われる。119は3面に砥面をもつ砥石である。上面には擦痕が認められる。重量は137g である。その他には、土師器甕で外面ハケメ、内面ナデ、外面ケズリで内面ナデのものも出土している。

SI 29第11号竪穴住居跡（第50図～第52図、図版16・図版38）

遺構群北東部、LB58で検出した。開田による削平の著しい箇所であり、西壁・南壁は完全に消滅しており、北壁と東壁の一部をかろうじて確認できたものである。東壁の南端に長径82cm、短径72cmの土坑が掘り込まれているが、これが住居の隅に設けられていたものであるとすれば、南北長は2.8m となる。確認面からの深さは最大でも10cmに満たない。主軸方位はN－18°－E を示す。床面は、カマド前面部分しか残っていないが、平坦で堅く締まっている。また床面から長径1.4m、短径1.2m、深さ0.2～0.25mの土坑が掘り込まれている。これも住居跡に伴うものと考えている。壁溝及び柱穴と考えられるピットは確認できなかった。

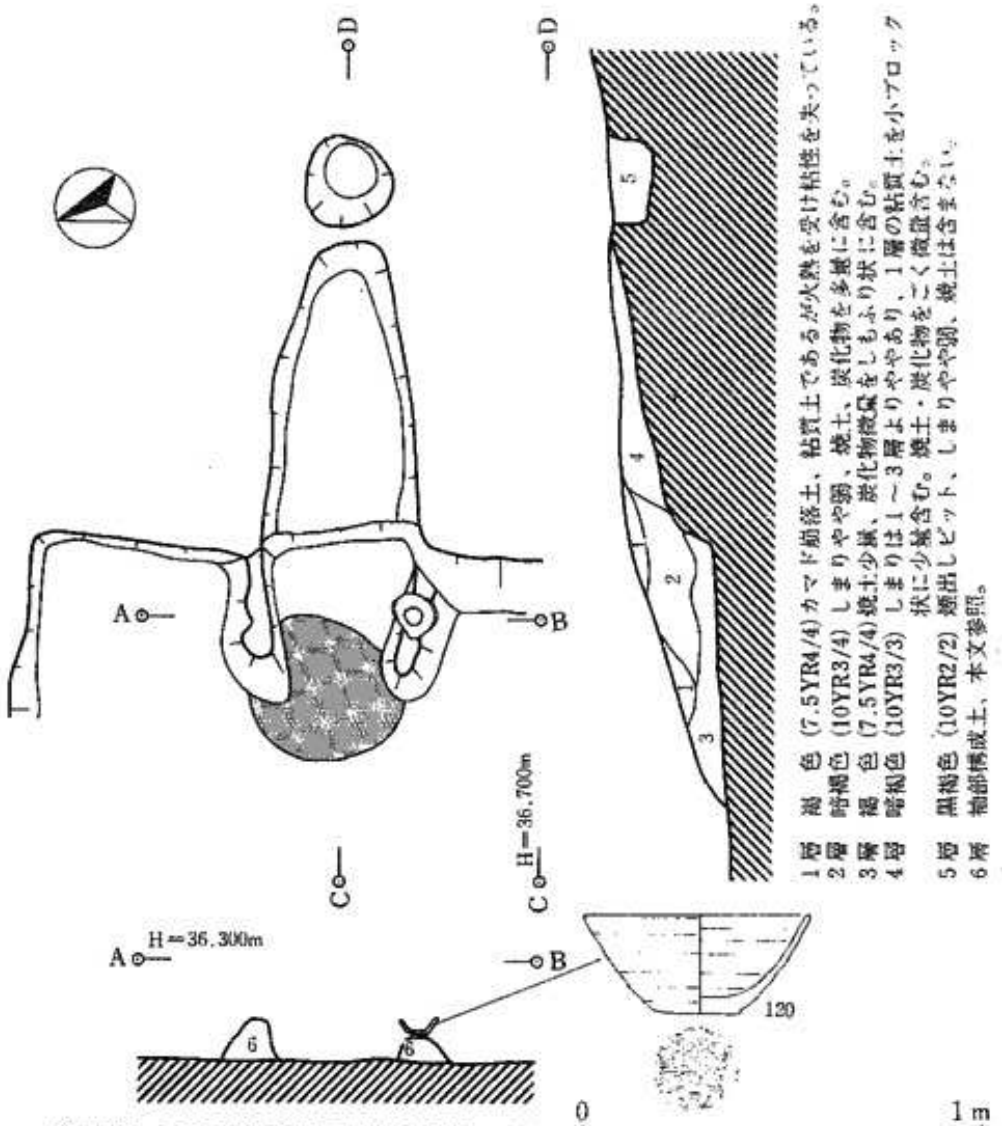
カマドは東壁北寄りに位置している。福田遺跡で唯一の溝状の煙道をもつものである。煙道は、奥壁から1m延び先端に煙出しピットをもつ。袖部は、暗褐色シルト質土を主体に地山粘土を少量混入させた土からなる。右袖については、住居構築の際、わずか10cmではあるが、地山を掘り残しており、この地山部分も袖の一部として利用している。この部分がカマドの中で最も良く焼けている箇所である。内法幅は、焚口部で28cm、燃焼部で32cmを測り、袖が幾分逆「ハ」字形を呈している。火床面は平坦で掘り込みをもたない。火熱により火床面下3cmまで土



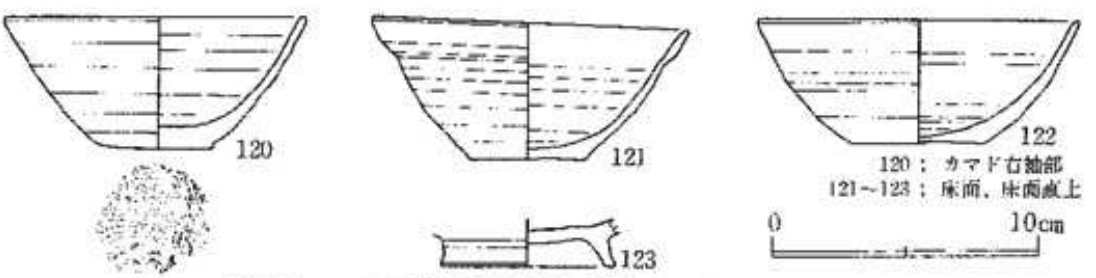
第50図　ＳＩ29第11号竪穴住居跡

色が変化している。

出土遺物は、遺構の確認状態からして総て床面あるいは床面直上と理解できる。120はカマド右袖上から正立して検出された土師器坏である。底部の切り離しは「静止かけ引き糸切り」と称されているものであろう。121は薄手な作りの坏で体部上半に屈曲部をもつ。内外面に煤状炭化物が付着している。122は二次火熱を受けている坏で、胎土に砂粒を多く含む。123は高台付坏で黒色処理されているものである。底部の切り離しは不明であるが、菊花状にケズリを行ったのち高台を貼り付けているようである。そのほかロクロ使用の土師器甕も出土している。



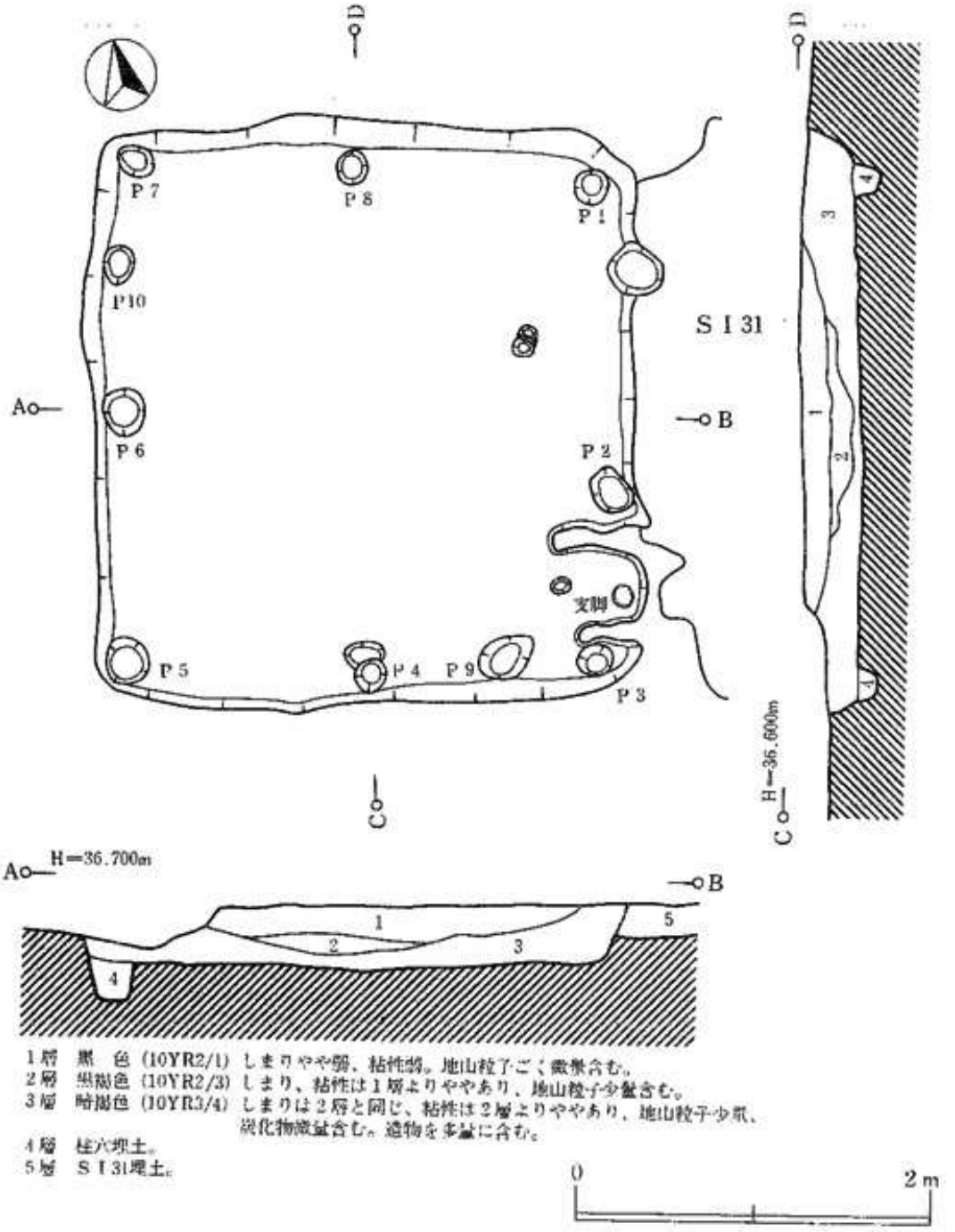
第51図　ＳＩ29第11号竪穴住居跡カマド



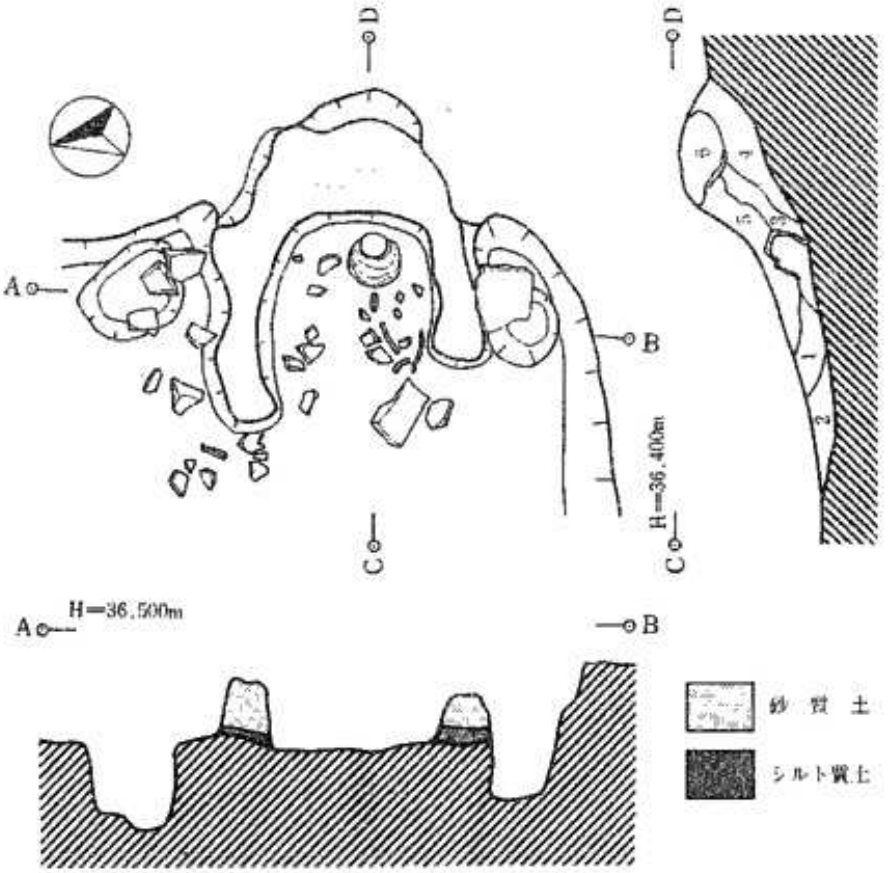
第52図　ＳＩ29第11号竪穴住居跡出土遺物

ＳＩ 30第12号竪穴住居跡（第53図～第57図、図版17・図版18・図版38・図版39）

遺構群北端部、ＬＤ61、ＬＥ61で検出した。遺構確認時には、黒色を呈するプランが黒褐色を呈するプランを切っているように観察できた。形状・焼土などから両者とも住居跡と考え、前者をＳＩ 30、後者をＳＩ 31と登録したものである。規模は、南北長3.3m、東西長3.1mの整った方形を呈する。確認面からの深さは30～37cmを測る。面積は9.9㎡、主軸方位はＮ－14°－Ｅ



第53図　ＳＩ30第12号竪穴住居跡



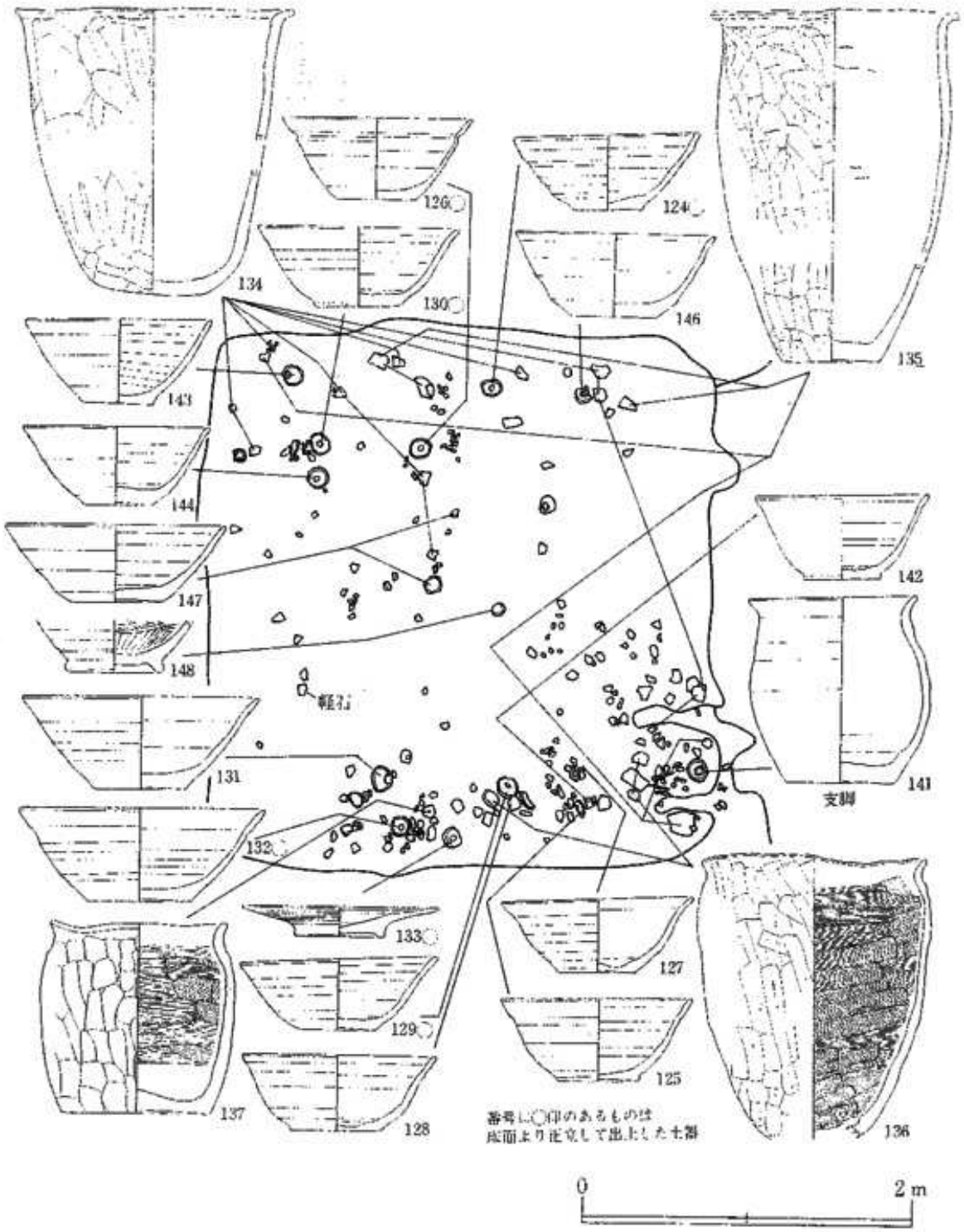
1層　赤褐色（5YR 4/6）しまり、粘性あまりなし。焼土。
2層　暗褐色（10YR 3/4）よごれた床面。
3層　褐　色（7.5YR 4/6）砂質の強い焼土。しまり弱い。
4層　暗褐色（7.5YR 3/4）しまり弱し。焼土微量。
5層　極暗褐色（7.5YR 2/3）5層上面から上に遺物多い。
6層　カマド本体天井部。

0　1m

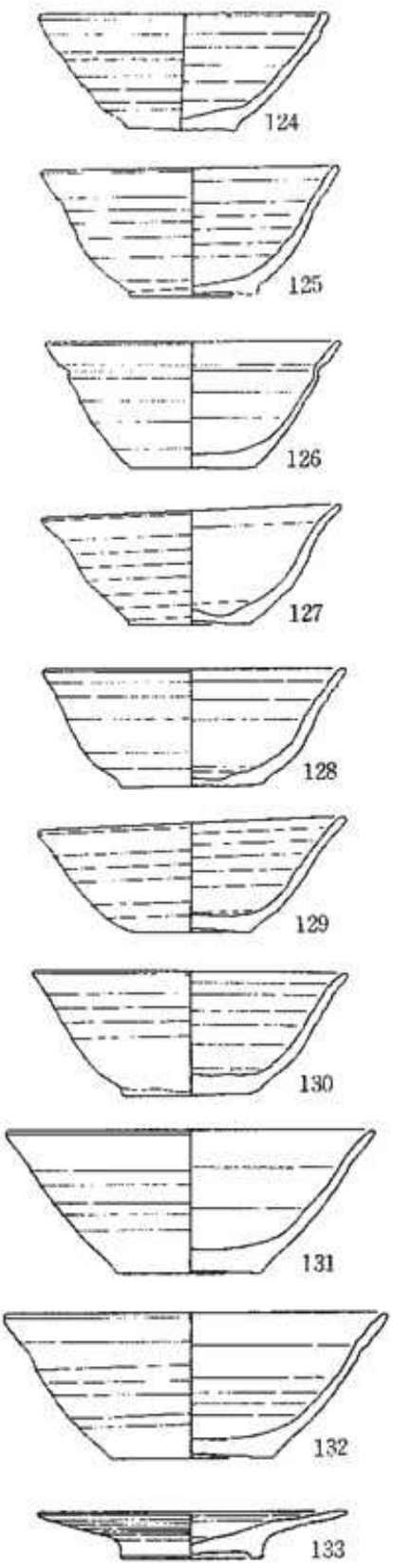
第54図　ＳＩ30第12号竪穴住居跡カマド

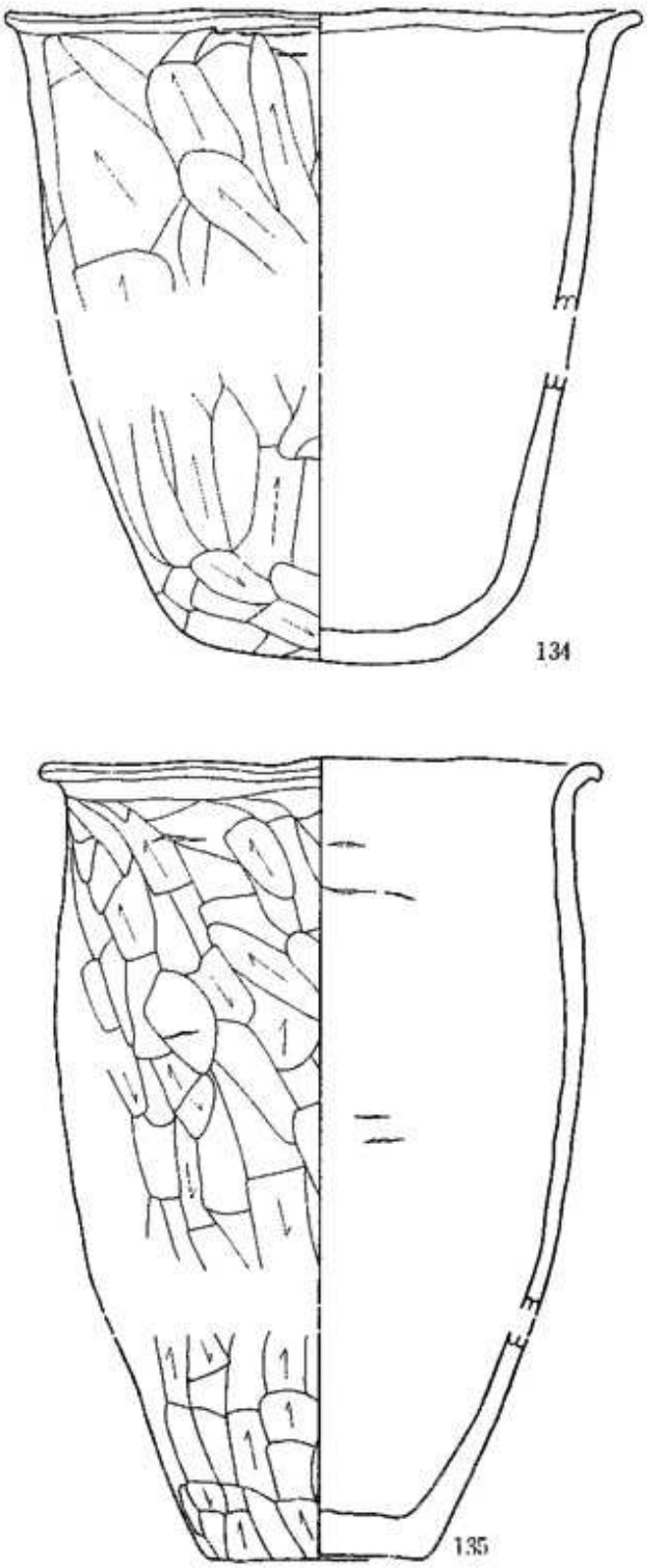
を示す。床面は平坦で堅く締まっている。柱穴様ピットはＰ１～10まで確認した。うち主柱穴と考えられるのはＰ１～８で、４隅と各壁中央に位置する。ただし東壁の柱穴については、カマド上屋との関係からか、中央より南側のカマド左袖に隣接して掘り込まれている。径18～25cmの円形を呈し、深さはＰ10で５cm、Ｐ４・７・９で11～13cm、Ｐ１・３・５・８で15～16cm、Ｐ２・６が22cmを測る。

カマドは東壁南寄りに設けられている。遺存状態は良く、燃焼部の奥から煙出し部にかけて一部ではあるが天井部がそのまま残されていた。煙出し部は壁を緩く削り出している。袖部の構築法は、ＳＩ03などに似る。まず黒褐色シルト質土を用意して、平坦な床面ー（火床面）に３～５cm敷く。この上にカマド本体となる砂質土を主とする土を架構している。この砂質土に



第55図　ＳＩ30第12号竪穴住居跡遺物出土状況

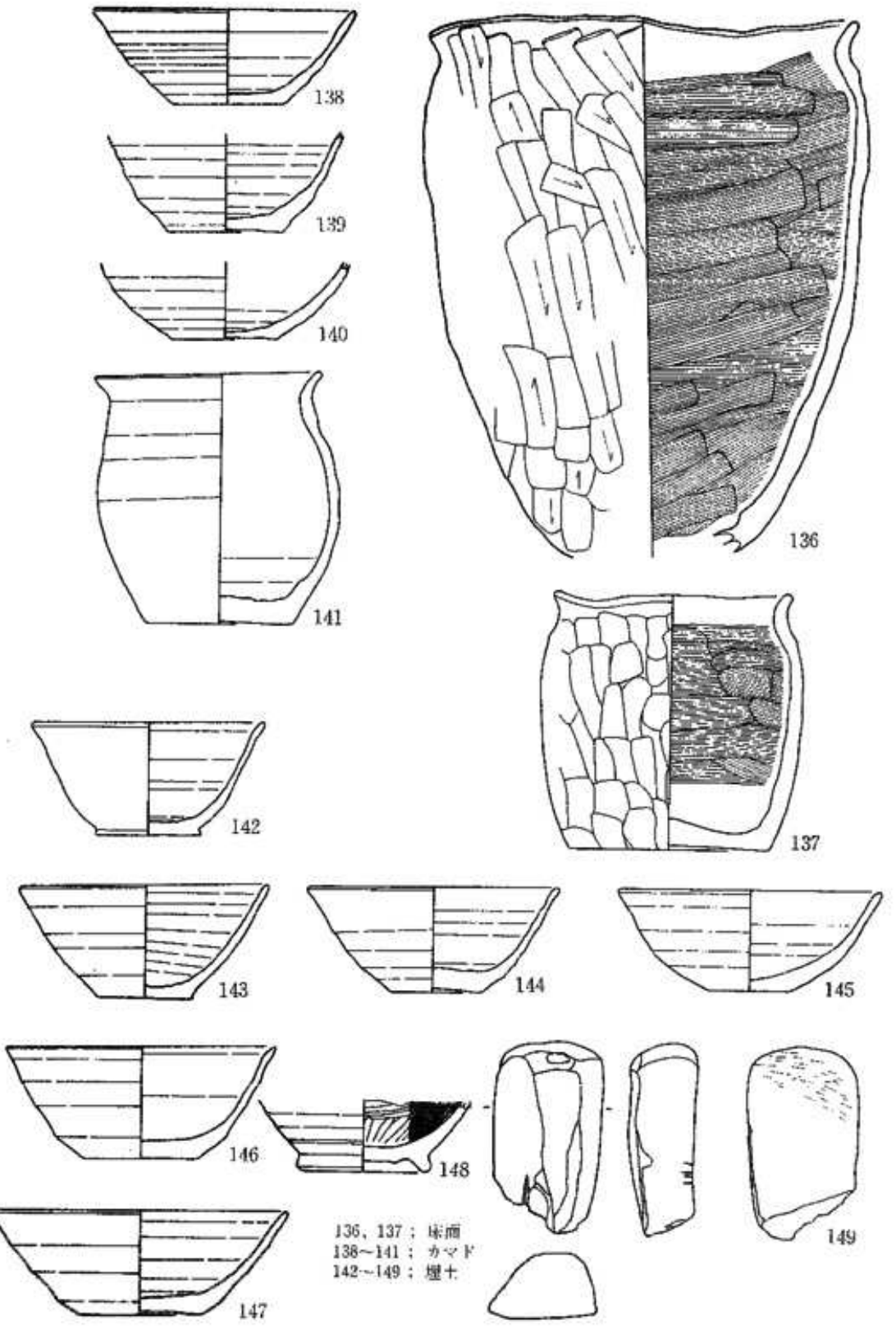




124～135：床面

0 10cm

第56図　ＳＩ30第12号竪穴住居跡出土遺物(1)



第57図　ＳＩ30第12号竪穴住居跡出土遺物(2)

は、少量の粘質土・黒褐色シルト質土が混入されているが、ＳＩ03に比すとこれらの混入度合は低く、カマドが白っぽく見える。袖部には焼土・炭化物を含まないことから、この点から言えば改築等はなされていないようである。火熱の影響で、火床面・側壁が焼けているが、最も良く焼けているのは一部残った天井部内壁である。支脚は燃焼部中央やや奥、中央よりやや右袖寄りで確認できた。土師器甕を倒位で転用しており、煙出し部に向かって傾いていることから、原位置を保っていない可能性が高い。この位置で燃焼部内法幅は40cmである。

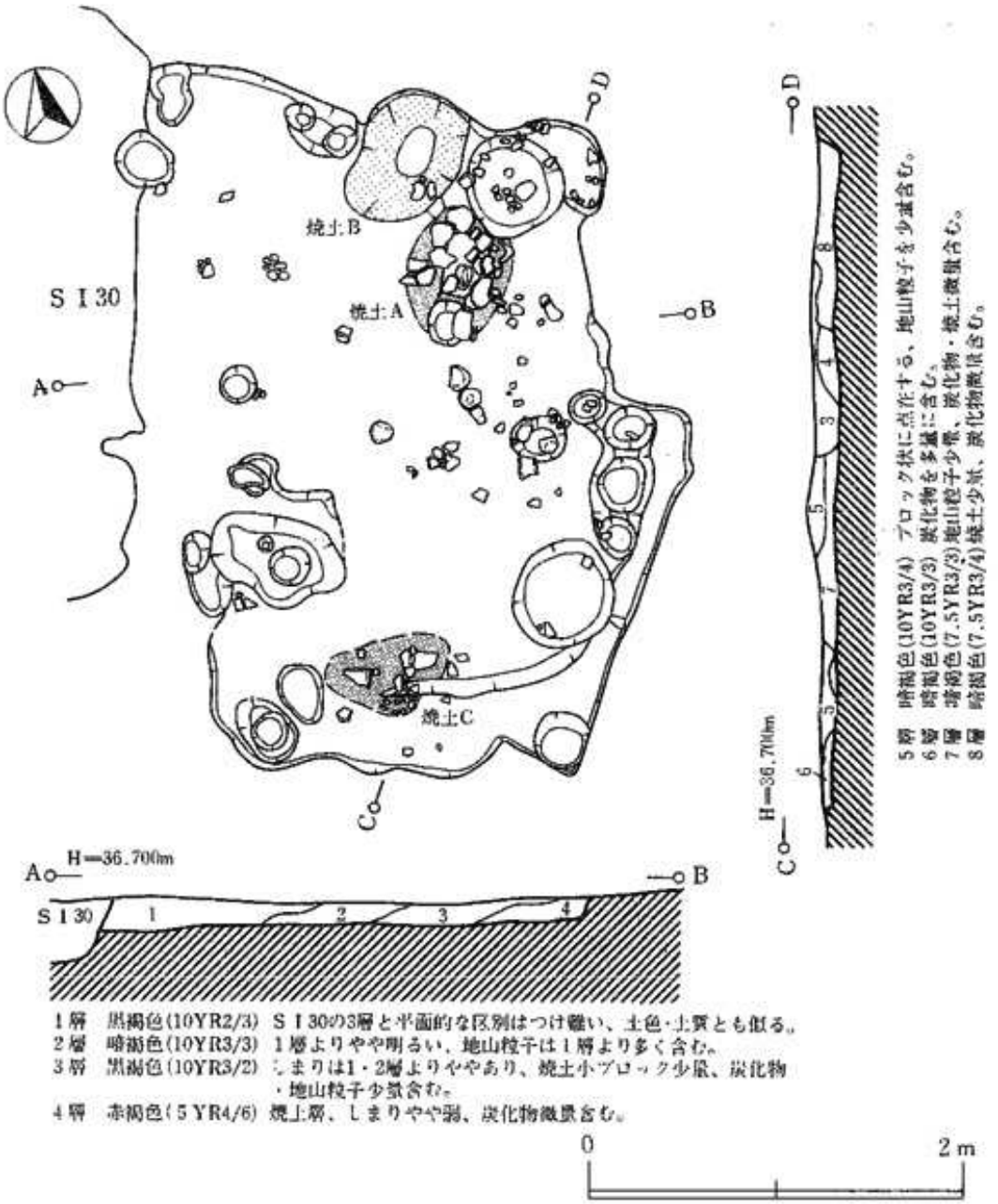
出土遺物は多く、カマド周辺・北壁沿い・南壁沿いを中心に分布している。遺物には土師器坏類が多く、しかも正立した状態で検出される例が多い点を特徴とする。土師器甕134・135はカマド内及びその周辺と北壁沿いの床面上で出土した破片が接合できたものであり、あたかも、カマド内で使用していた甕が破損して破片の一部を北壁の方へ投げ棄てたかのような様相を示している。図示した遺物は、土師器坏・高台付坏・皿・甕・砥石であるが、その他に須恵器壺、軽石なども出土している。

124～132は床面出土の土師器坏である。底部には回転糸切り痕を留めるが、法量の最も小さい124のみ前引き糸切りで、他はまわし糸切りもしくは離し糸切りと称されているものである。125は、外面と内面底部に煤状炭化物が付着しており、126・127は全体を、130・131は体中央部以下を二次的に火熱を受けている。126は全体に薄手な作りで、体上半部に屈曲部をもつ。133の皿も床面出土である。摩滅のため、底部の切り離しは不明である。口径12cm、高台径5.5cm、器高1.8m を測る。134～137の大形の土師器甕はカマド内・周辺及び床面から出土したものであり、138の小型の甕は床面出土で、いずれもロクロは用いていない。134はすわりの良くない平底を呈するもので、この部分はケズリの後、ナデを行っている。外面は荒いケズリ、内面は横ナデのようである。胎土には径１～５mmの砂粒というより小石を多く含み、色調は赤褐色をなしている。135は底部に砂粒を付着させている砂底と称される甕である。外面はケズリで煤状炭化物が付着する。内面は横ナデのようであるが単位不明で図化し得なかった。胎土には径１～２mmの赤褐色を呈する砂粒が多量に混入している。136は底部を欠く。外面はケズリ、内面口縁部は指などによる横ナデ、胴部はヘラ状工具によるナデが認められる。胎土には少量ではあるが赤褐色の砂粒を含む。137は底部をナデにより整形している甕である。外面をケズリ、内面を指などによる横ナデを施している。内面口縁部～外面にかけては煤状炭化物が付着している。胎土には、これも少量であるが赤褐色の砂粒を含む。色調は135～137とともに明褐～浅黄橙色を呈している。

138～141の4点はカマド内出土である。いずれも底部には回転糸切り痕を留める。141は支脚として用いられた甕で、最大径を胴部中央にもつ。138は胎土に砂粒を多く含み、139・141は二次火熱を受けており、このため部分的に歪みを生じている。140は内外面に、タール状付着物あ

るいは漆が認められる。

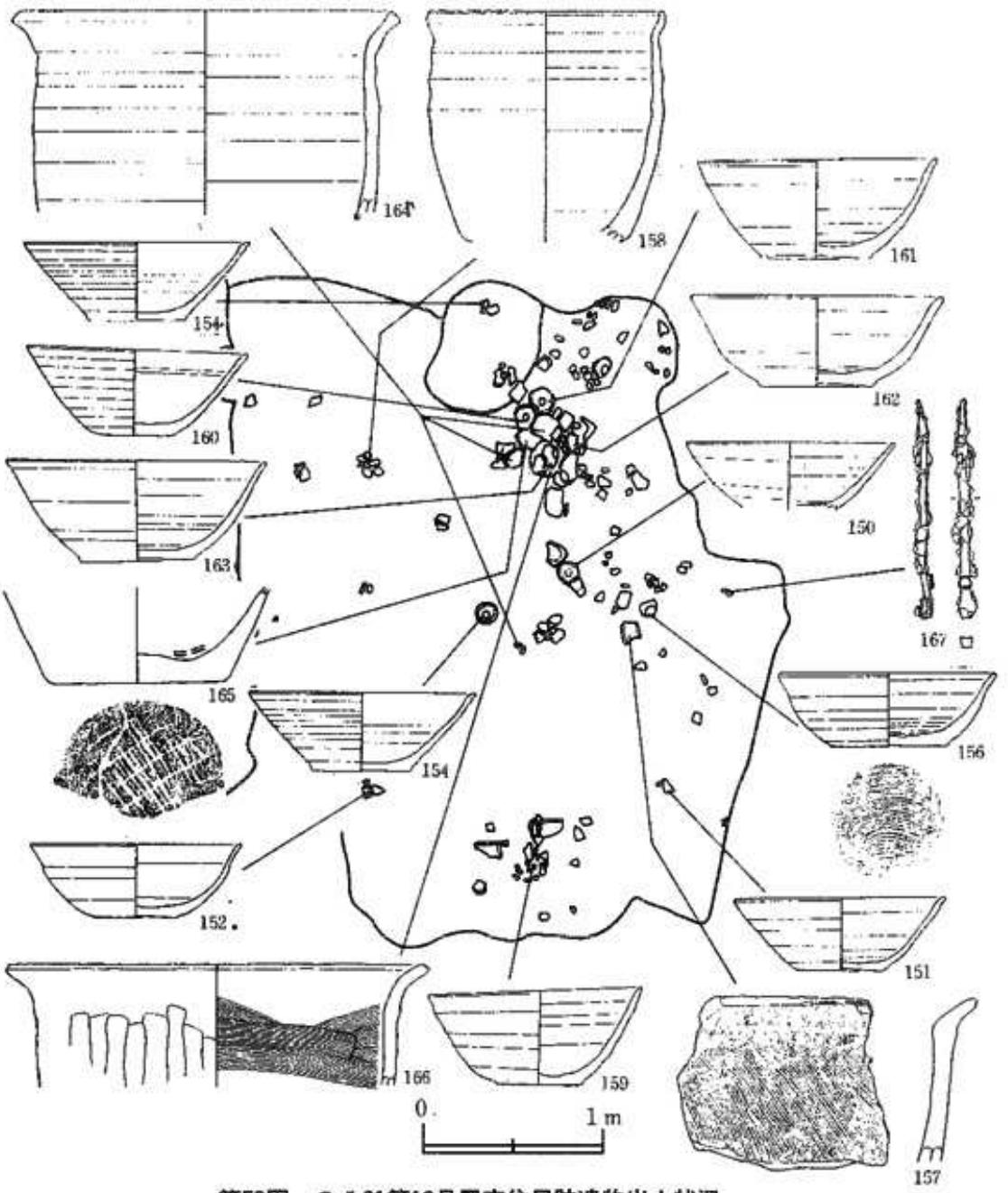
142～149は埋土出土である。底部には回転糸切り痕を留める。142は二次火熱を受けもろくなっている。144・147は胎土に砂粒を多く含み、器面がザラザラしている。148は内面を黒色処理した高台付坏である。内面の放射状ミガキは丁寧になされている。砥石149は、凝灰岩を用い、欠損部以外の5面総て砥面としている。断面が台形状を呈している。現存重量は158g である。



1層　黒褐色(10YR2/3)　S I 30の3層と平面的な区別はつけ難い、土色・土質とも似る。
2層　暗褐色(10YR3/3)　1層よりやや明るい、地山粒子は1層より多く含む。
3層　黒褐色(10YR3/2)　しまりは1・2層よりややあり、焼土小ブロック少量、炭化物・地山粒子少量含む。
4層　赤褐色(5YR4/6)　焼土層、しまりやや弱、炭化物微量含む。

0　2m

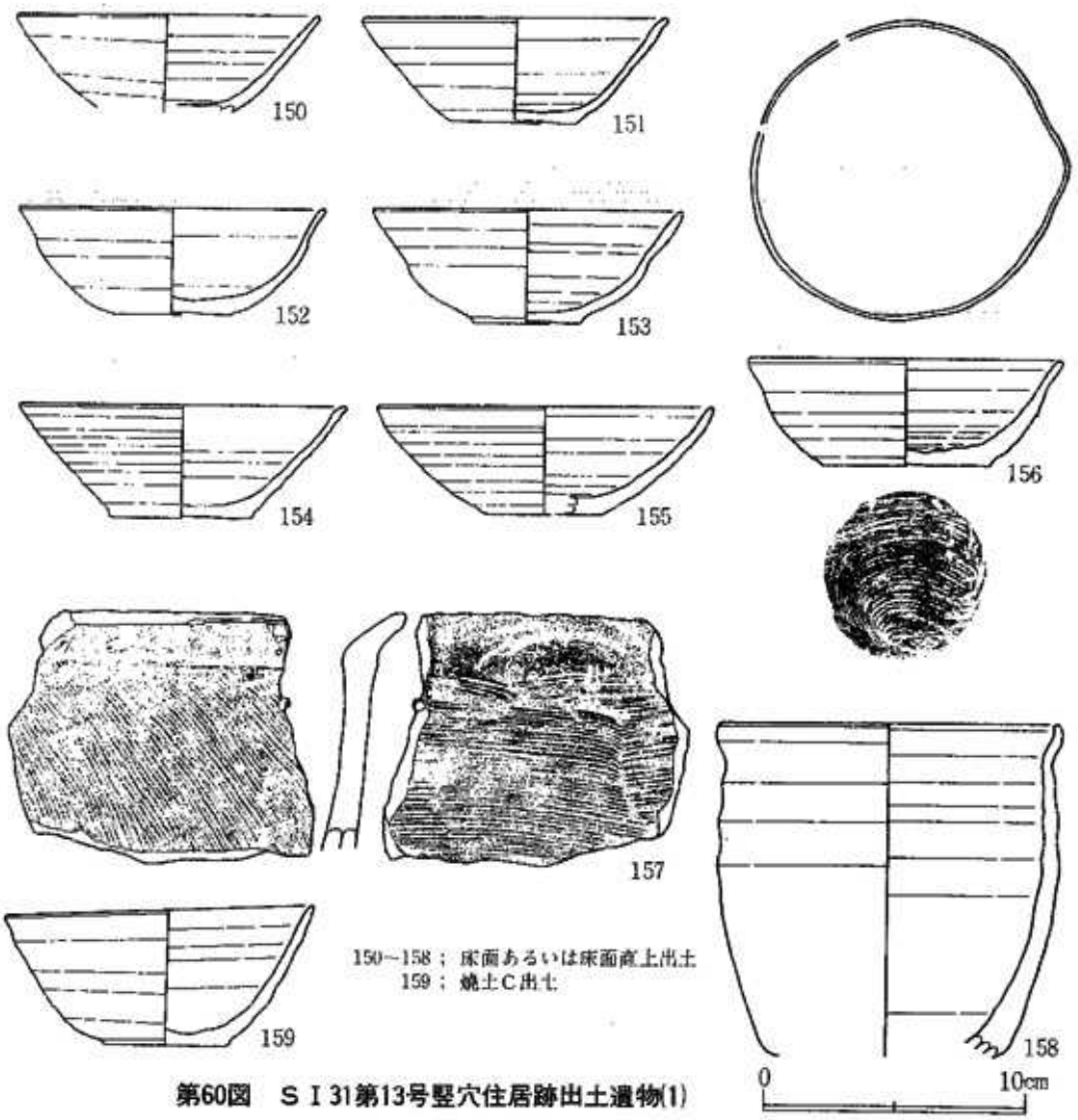
第58図　S I 31第13号竪穴住居跡



第59図　ＳＩ31第13号竪穴住居跡遺物出土状況

ＳＩ 31第13号竪穴住居跡（第58図～第61図、図版17・図版18・図版39）

遺構群北端部、ＬＣ61、ＬＤ61で検出した。西側でＳＩ 30に切られている。この住居跡は、確認時においてプランが多角形を呈していたことから、複数の遺構が重複するものと考えていた。しかしながら、平面的・立面的な土色・土層の観察においては、これを裏付ける資料を得ることはできなかった。したがって規模・形状については言及できない。壁高は削平されていることも考慮にいれなければならないが、切り合っているＳＩ 30と比較しても8～18cmと低く、

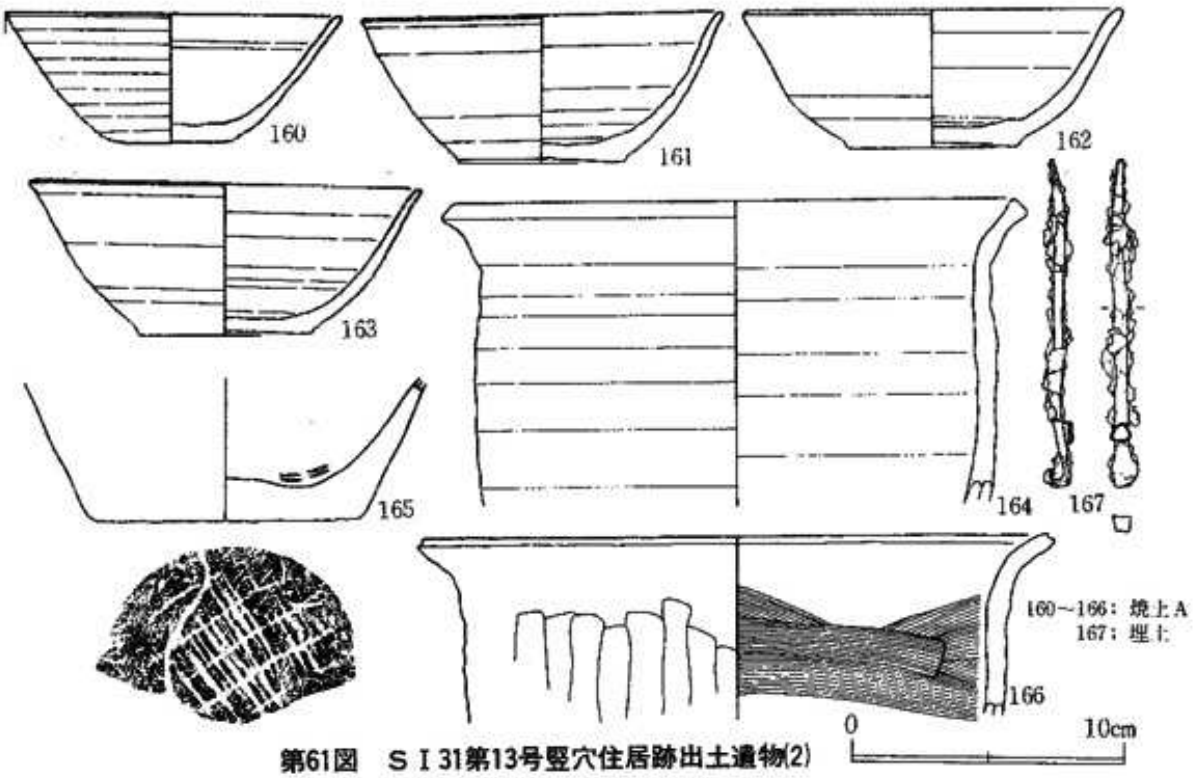


第60図　ＳＩ31第13号竪穴住居跡出土遺物(1)

床面でのレベル差はＳＩ 30より20cm程高く位置している。

焼土の広がりを３ケ所で確認した。焼土Ａ・Ｃは床面上に分布するもので、崩壊したカマドであった可能性がある。特に焼土Ｃは、焼土中に焼けた切石２個が存在し、袖部の芯材や補強材として用いられたのかもしれない。焼土Ｂは、長さ75cm、幅55cm、深さ25cmの楕円形を呈する土坑で、焼土と少量の炭化物が充填しているものである。焼土Ａと密接な関りをもつものと思われる。

出土遺物は、焼土Ａ・Ｂ周辺、及び床面上からまとまって検出している。150～156は、床面あるいは床面直上出土の土師器坏である。底部の遺存するものは回転糸切り痕をもつ。150～152・154は二次火熱を受けている。155は内面に煤状炭化物が付着している。156は片口様の坏で、胎土・焼成は際立って良く、他の土師器とは異質の感がある。157は内外面ハケメ整形の甕、158



第61図　ＳＩ31第13号竪穴住居跡出土遺物(2)

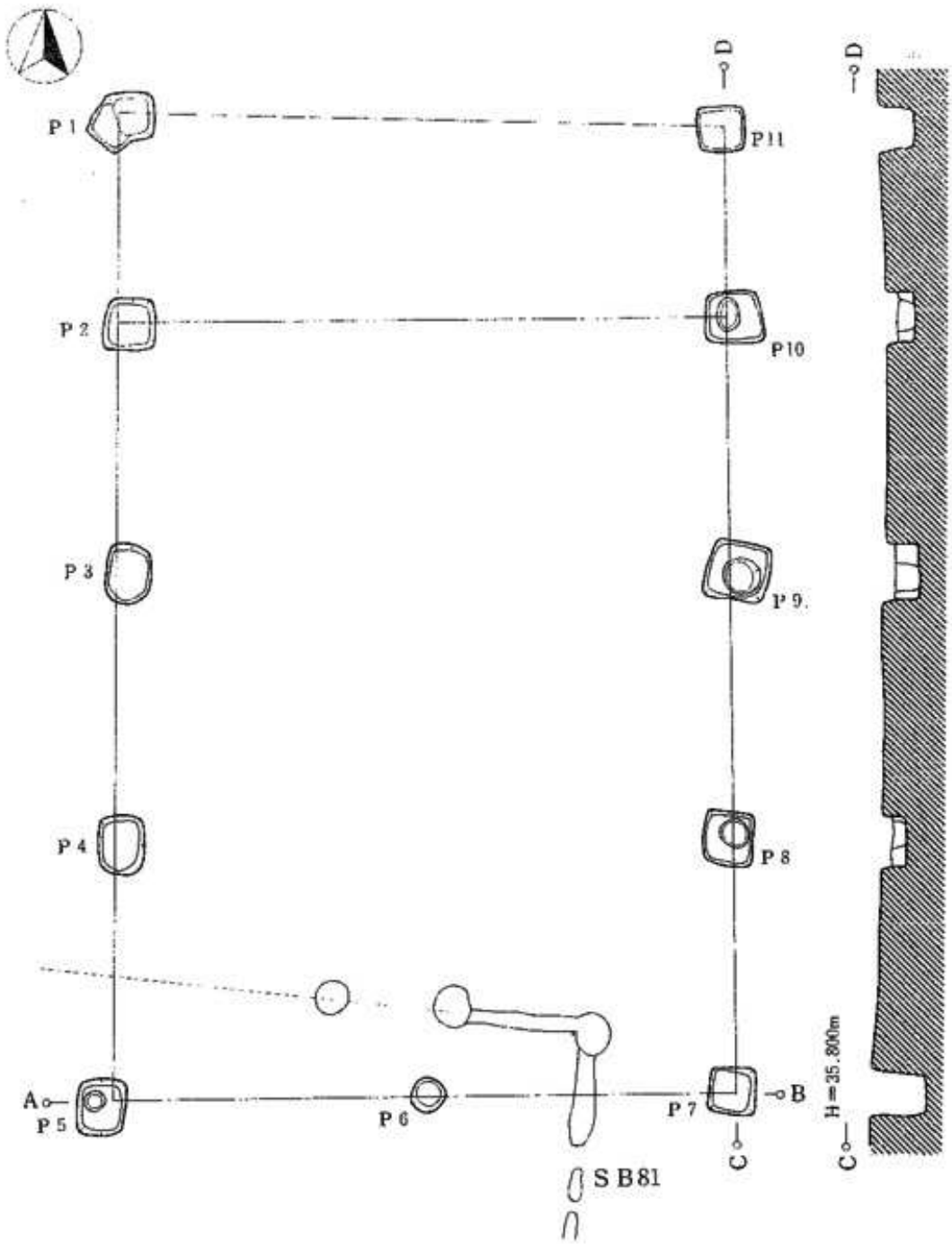
ロクロ使用の甕である。いずれも床面出土である。

159は焼土C内出土の土師器坏である。底部には回転糸切り痕を留め、二次火熱を受けている。160～166は、焼土Aよりまとまって出土した土師器である。160～163の坏は、底部の切り離しにバラエティーがある。162は静止糸切りで他は回転糸切りとなるが、160は離し糸切り、161・163は前引き糸切りと称されているものである。163を除き二次火熱を受け、かつ内面に煤状炭化物が付着している。164はロクロ使用の甕で、色調は赤褐色を呈し焼成良好である。165は非ロクロの甕で、底部には網代痕が認められる。内面はハケメ整形がなされている。166も非ロクロの甕で、内面に煤状炭化物が付着している。167は種別不明の鉄製品である。長さ122mm、幅5mm、厚さは中央部で5mm、両端部では3mm程である。基部は丸く折り込まれている。

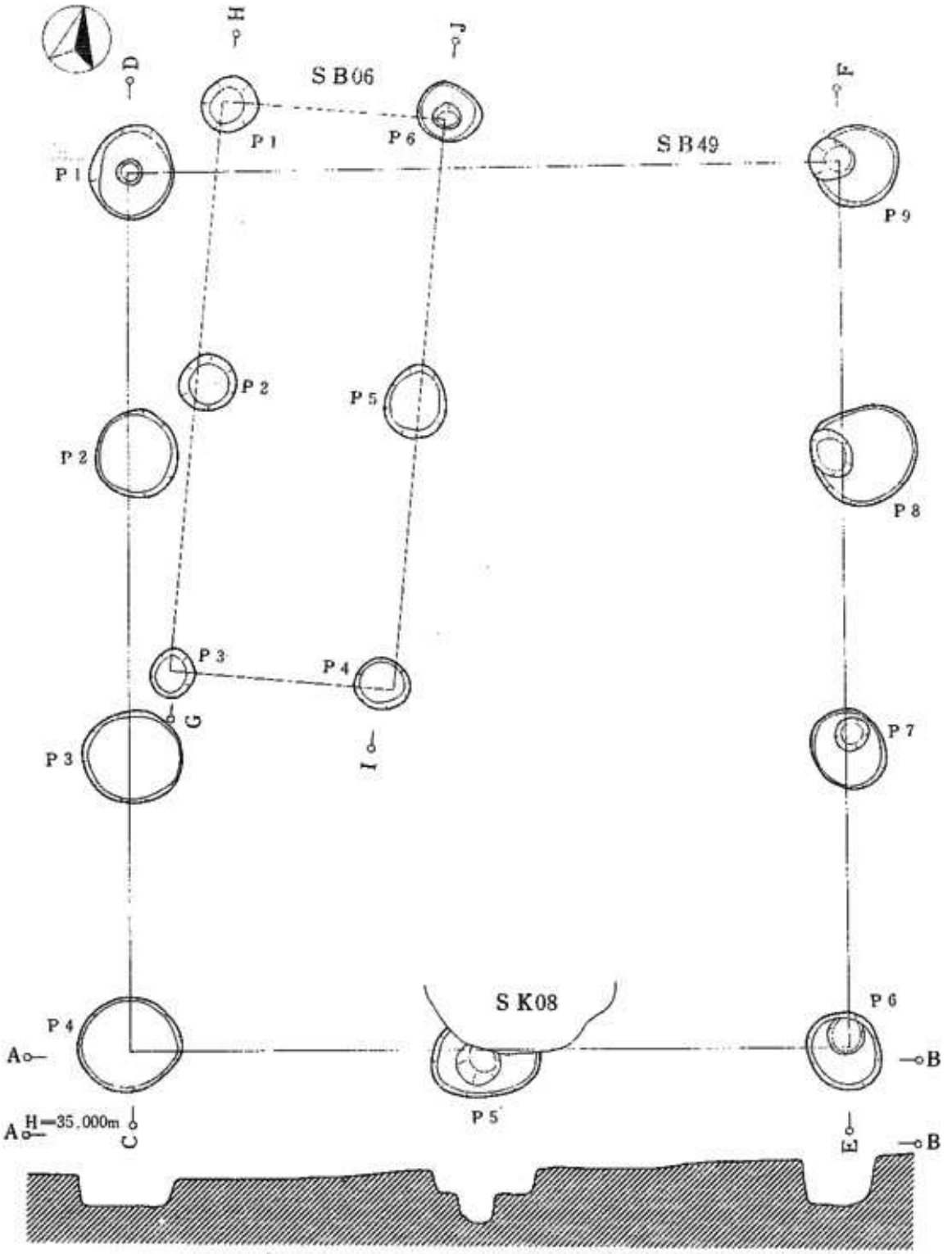
（2）掘立柱建物跡

ＳＢ14第1号掘立柱建物跡（第62図、図版19）

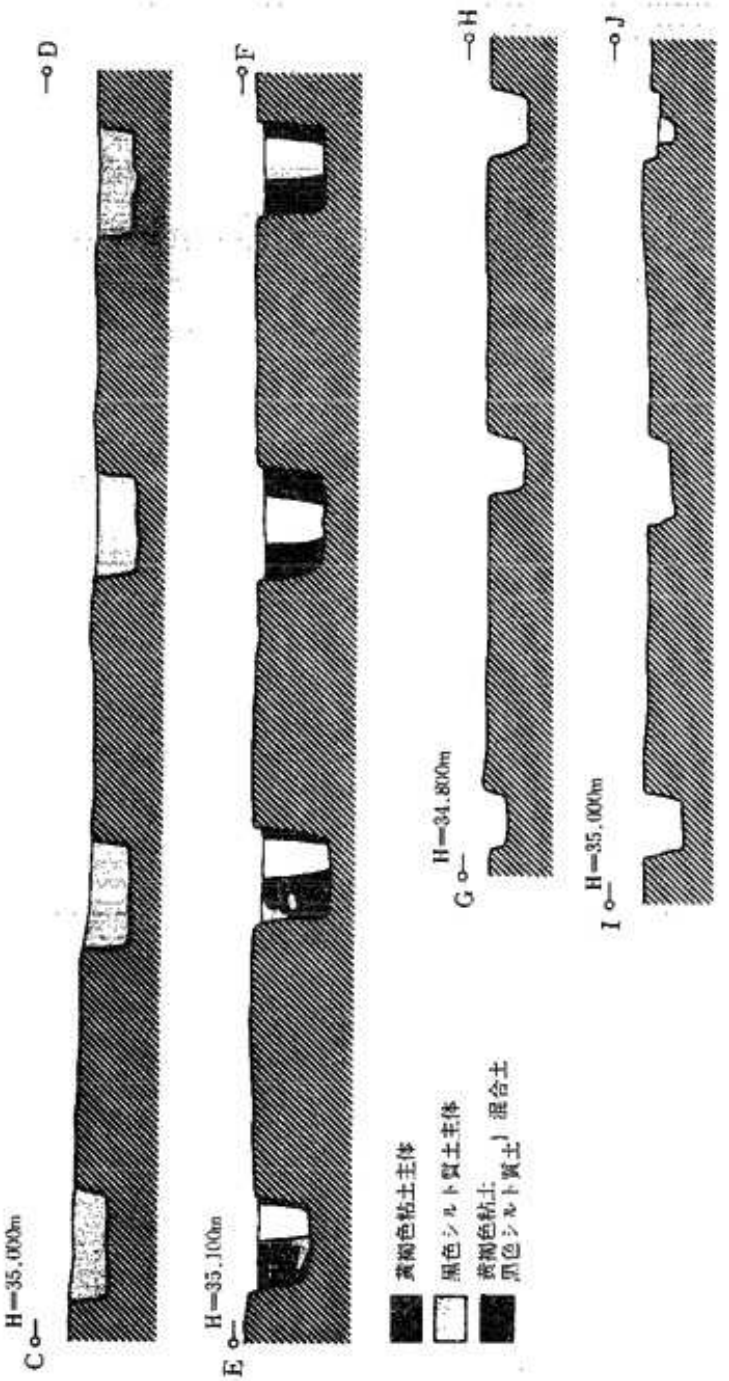
遺構群中央東側、ＳＩ02の西隣で検出した。桁行4間×北側梁行1間・南側梁行2間の南北棟である。柱間距離での規模は、桁行7.9m、梁行5mとなる。桁行での柱間距離をみると、Ｐ1－Ｐ2、Ｐ10－Ｐ11間は1.5mであるのに対し、他の掘り方間では2.05～2.15mの数値を示す。このことから北面に庇をもつ建物と解することができる。桁行の中軸線は、ほぼ磁北方向を指し示している。



第62図　ＳＢ14第１号掘立柱建物跡



第63図　SB06第2号・SB49第3号掘立柱建物跡(1)　0　2m



第64図　SB06第2号・SB49第3号掘立柱建物跡(2)

掘り方は、一辺40～50cmの隅丸方形を呈するが、南側梁行中央のP 6のみ径28cmの円形となる。柱痕跡はP 8～10で確認できた。径20～30cmの円形で、その深さは12～20cmを測る。

なお、柱間距離からすれば、北面の梁行は2間となるのが自然なのであろうが、精査の結果中央部分には掘り方らしいものは確認できなかった。

SB06第2号掘立柱建物跡（第63図・第64図、図版20）

遺構群中央やや南東寄り、SB49内に入り込む形で検出した。両者には掘り方どおしでの切り合いはない。桁行2間×梁行1間の南北棟である。柱間距離は、桁行5.1m、梁行2mを測る。主軸方位は、N－6°－Wを示す。掘り方は、P 3が最も小さく径40～45cm、他は50～60cmのほぼ円形を呈している。深さは、P 3で15cm、他は20～25cmである。P 6で柱痕跡を確認している。径20cmで、柱痕の深さは12cmである。

SB49第3号掘立柱建物跡（第63図・第64図、図版20）

SB06同様、遺構群中央やや南東寄りで検出した。桁行3間×北側梁行1間・南側梁行2間の南北棟である。南側梁行中央のP 5は、SK08に切られている。柱間距離は、桁行8m、梁行6.4mである。主軸方位は、N－5°－Wを示す。SB14と同様、北側梁行中央部については精査を繰り返しても掘り方を確認できず、掘り方9個で建物を構成していたものと判断した。

掘り方は、円形を基調とするもので、確認時にはほぼ正円を示していた。径は70～90cmで、深さは東側桁行で50～55cm、西側桁行で30～35cmを測る。底面でのレベル差をみると、東側を0とすると、西側では一様に10～15cm下がっている。掘り方埋土は、東側桁行、南側梁行中央P5と西側梁行では明らかに大きな相異を認めることができる。前者は、黄褐色（地山）粘土と黒褐色シルト質土を用い、一部では版築様に交互に重ね、あるいは両者を混合させた土で充填させており、一見すると撹乱を受けた土のように観察できるものである。一方の後者は、黒褐色シルト質土単層であり、黄褐色粘土をほとんど含まず、単独でみると、土坑埋土と見間違う程である。この両者の土色の違いは、掘立柱建物跡としての認定を遅らせた一要因ともなっている。柱痕跡はP6～9については、掘り方を5cm前後下げた段階で径30～35cmのプランを確認している。P1・P5は、掘り方底面で柱痕を検出しているが、P1の柱痕の深さは、僅か2～3cmである。なおP9については、柱痕跡が西に傾き、掘り方の一部を切っていることから、柱を西側に傾け抜き取っているようである。

SB78第4号掘立柱建物跡（第65図、図版19）

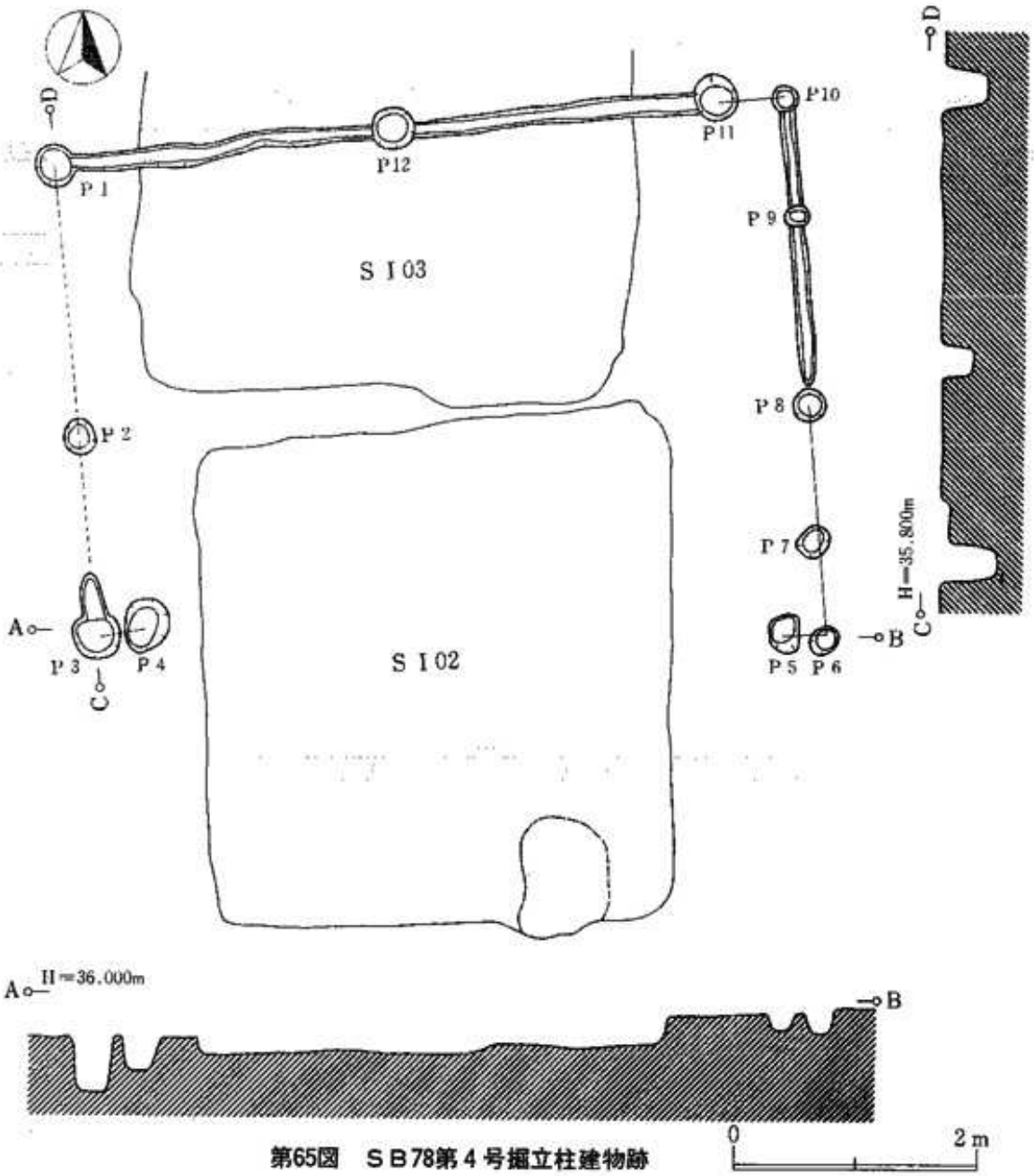
遺構群東端中央、SI 02・03と重複するように検出された。SI 03の確認面を精査中に、これを切る細長い溝が建物の北面の溝となることが判明し、SB78と登録したものである。P1・3・6・10を隅柱とすれば、柱間距離で東西6m、南北4.5mの東西棟となる。柱穴配置にあまり規則性は認められない。ただし、南面では両隅柱から40cm程内側にP4・5の柱穴が配されている。主軸方位はN－6°－Wを示す。各柱穴は、東面のP5～P10で径20～25cm、深さは、P6・7・9で20～24cm、他が10～13cmである。これ以外の柱穴は、P2が径25cm程であるが、残りは30～38cm、深さもP2で23cm、P1・4・11～12で30～35cm、P3では46cmを測る。溝は柱穴の中央を、北面のP11・12・1を結び、東西のP10・9を通ってP8の手前まで、西面のP3から40cm北に延びている。溝の幅は15cm前後、深さは7～10cmである。

南面には中央部分に柱穴が存在せず、図示したように南に開く「冂」字状の塀のような施設とも推定できそうである。とすれば位置的にみて、SI 02に付属してこの北側を囲むように設けられたと考えることも可能であろう。

SB81第5号掘立柱建物跡（第66図・第67図、図版19・図版40）

遺構群中央東側、SB14南側梁行の柱筋と交錯する位置で検出した。SB78と同様、柱穴間に溝をもつ建物である。北面は柱間距離で5m、東面・西面とも南側は削平により規模を特定できない。現存で東面はP4－P7間4.2m、西面はP1－P3間で3.1mを測る。溝は北面のP7－P8間と、東面はP7から断続的にP5の南側までは延びているようである。P5・6と溝は、SK17埋土を切っている。主軸方位は、N－10°－Eを示す。

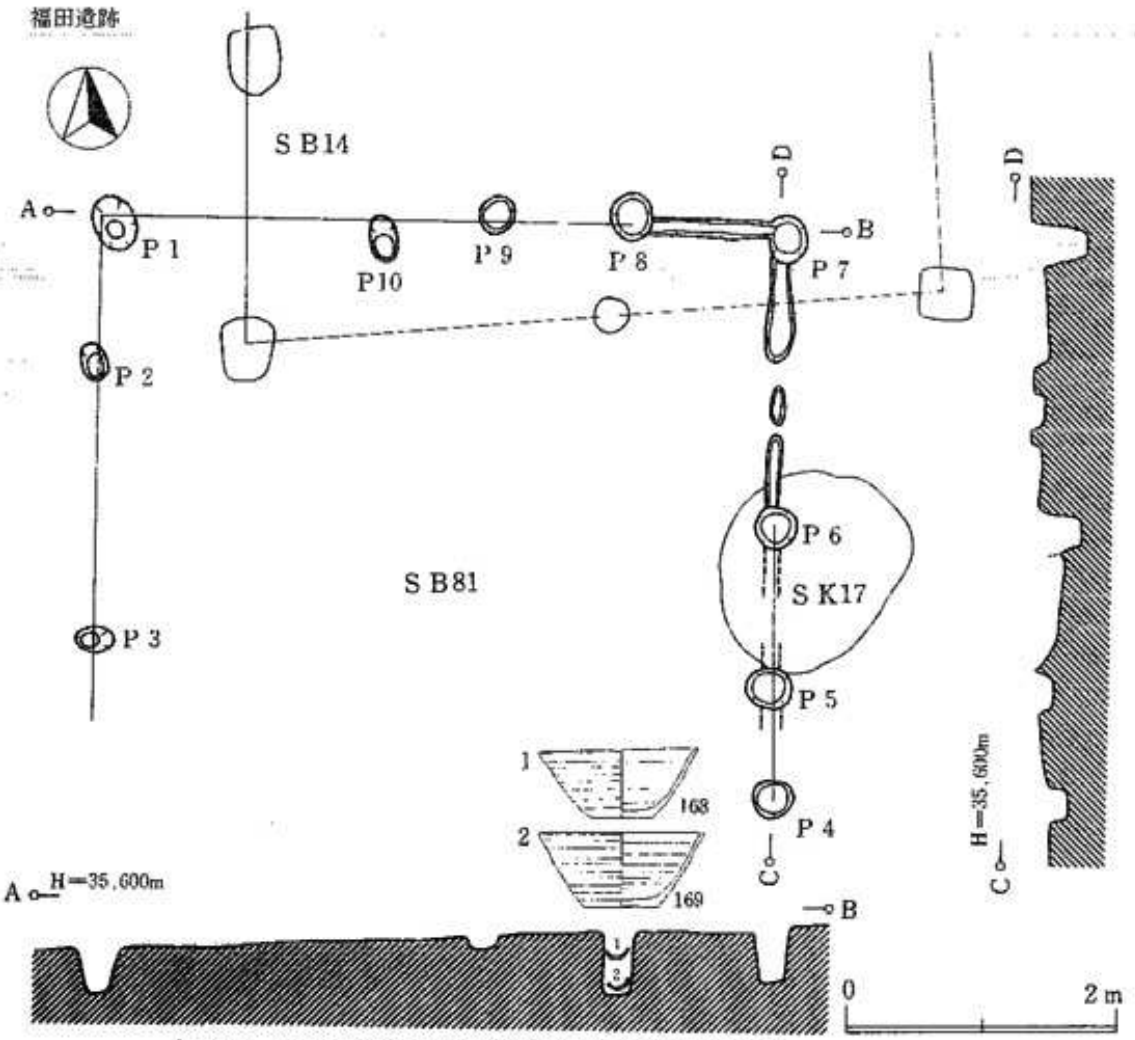
掘り方は、径20～30cmの円形もしくは不整方形を呈している。確認面からの深さは、P2～



第65図　ＳＢ78第４号掘立柱建物跡

Ｐ５・Ｐ９が10～15cm、Ｐ１・Ｐ６が30～32cm、Ｐ７・Ｐ８が44～45cmである。

遺物は、Ｐ８内より土師器坏２個体がほぼ完形で出土している。２個体とも掘り方底面よりは浮いた状態で検出されたが、いずれも正立していた。168・169とも底部に回転糸切り痕を留め、全体に薄手な作りで、二次火熱を受けているという共通点が認められる。出土状態からみれば、建物掘り方に埋納されたかのようであるが、土器自体からすると、器形・胎土は他の土師器と大きく異なる点はない。



第66図　ＳＢ81第５号掘立柱建物跡・遺物出土状況

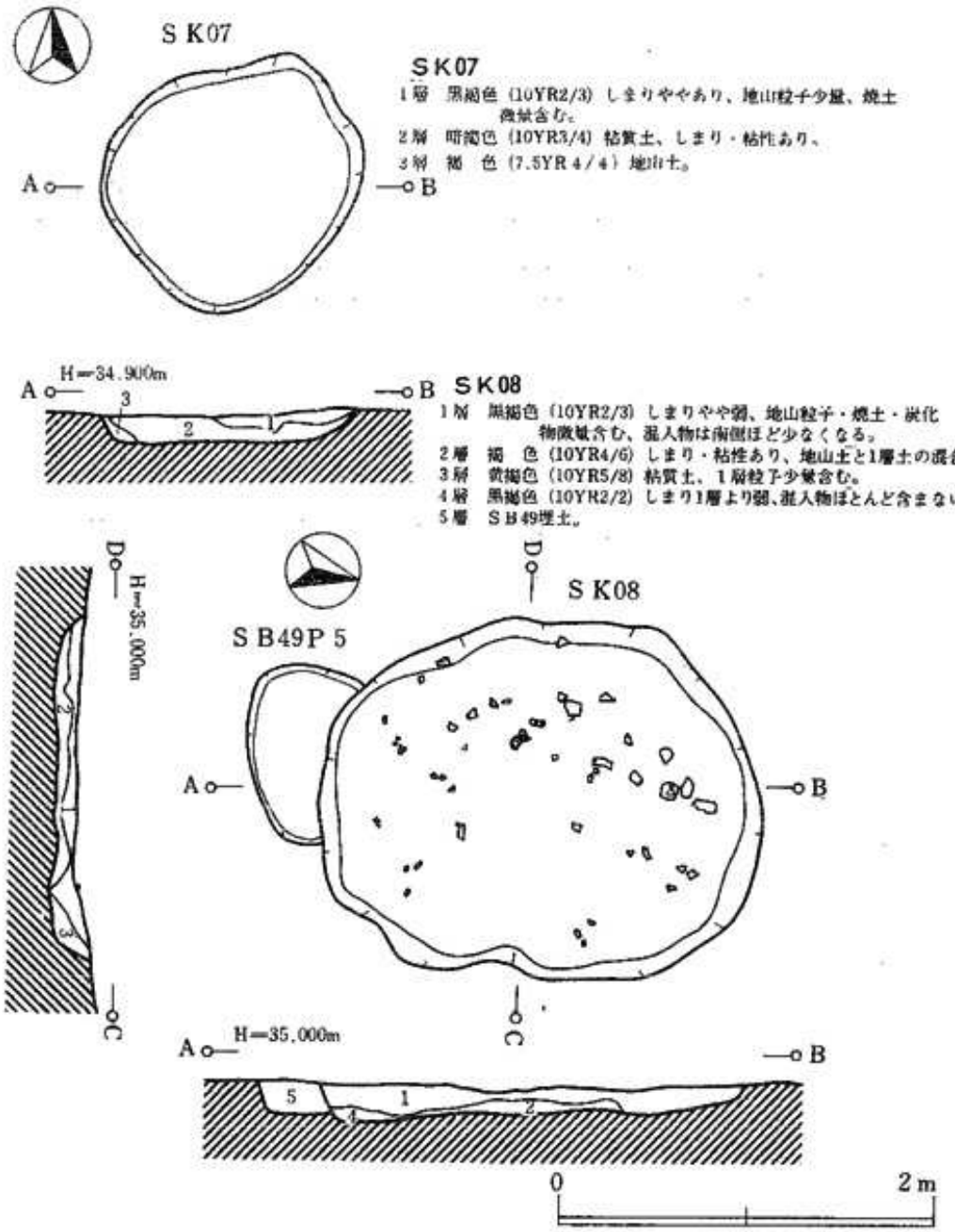
第67図　ＳＢ81第５号掘立柱建物跡出土遺物

（３）土坑

ＳＫ07第４号土坑（第68図、図版21）

遺構群中央南東側、ＳＢ49に囲まれたＬＧ50・51で検出した。南東側にＳＫ08が近接して掘り込まれているが、重複関係はない。規模は長径1.4m、短径1.3mの不整円形を呈する。確認面からの深さは14～16cmである。

遺物は土師器細片が出土している。

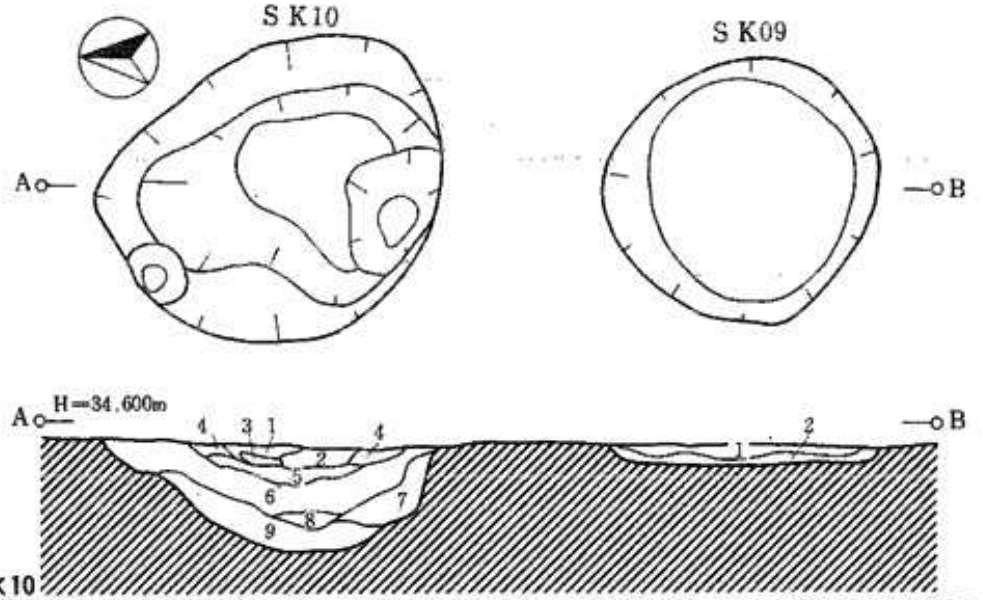


第68図　SK07第4号・SK08第5号土坑

SK08第5号土坑（第68図・第74図、図版21・図版40）

SK07の南東側、SB49に囲まれた位置で検出した。土坑南半部で、SB49南側梁行中央のP5の掘り方を切っている。規模は、長径2.4m、短径1.9mの歪んだ楕円形を呈している。確認面からの深さは15～20cmを測る。

遺物は、土師器坏・甕、須恵器甕が埋土より出土している。170の坏は、底部に回転糸切り痕を留め、二次火熱を受けている。土師器甕ではロクロ使用と非ロクロ製品がある。

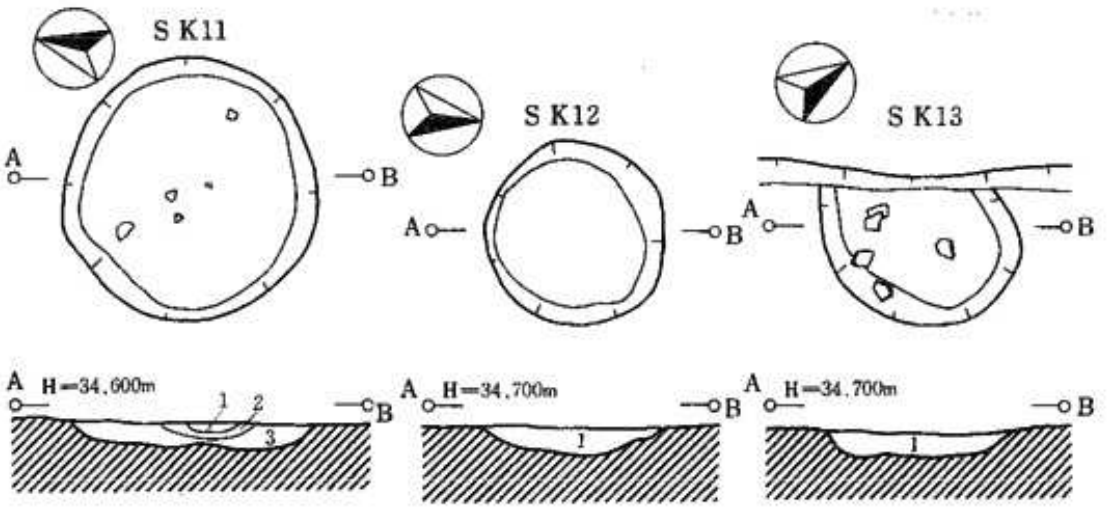


SK10

1層 暗褐色 (10YR3/4) しまりややあり、炭化物微量含む。
2層 褐 色 (7.5YR4/3) しまりやや弱、火山灰を斑状に多量に含む。炭化物少量含む。
3層 にぶい黄色 (2.5YR6/4) 火山灰がブロック状に入っている。
4層 暗褐色 (10YR3/3) 火山灰を微量含む。
5層 暗褐色 (10YR3/4) しまりやや弱、5～10mm炭化物を多量に含む。地山粒子少量、火山灰をごく微量含む。
6層 褐 色 (10YR4/4) しまりやや弱、地山粒子・ブロックを多量に含む。
7層 黒褐色 (10YR2/2) しまり弱、地山粒子少量含む。
8層 黒 色 (10YR2/1) しまり7層より弱、混入物ほとんどない。
9層 褐 色 (10YR4/6) しまりあり、地山粒子、ブロックを多量に含む。

SK09

1層 黒褐色 (10YR2/2) しまりややあり、地山粒子・ブロック少量、炭化物微量含む。
2層 黄褐色 (10YR5/8) 粘質土。



SK11

1層 赤褐色 (5YR4/6) 焼土、しまりやや弱でボソボソしている。
2層 黒褐色 (10YR2/3) しまりややあり、焼土微量含む。
3層 黒褐色 (10YR3/2) しまりややあり、焼土・炭化物微量含む。

SK12

1層 黒褐色 (10YR2/3) しまり・粘性弱、地山粒子少量含む。

SK13

1層 黒褐色 (10YR2/3) 土色はSK12に類似、しまりやや弱、粘性ややあり、地山粒子少量、炭化物微量含む。

第69図　SK09第6号・SK10第7号・SK11第8号・SK12第9号・SK13第10号土坑

ＳＫ09第６号土坑（第69図、図版21）

遺構群西側、Ｌ１ 56で検出した。ここはＳＫ10・11とともに地山面をも削平されている箇所である。北側にＳＫ10が位置している。径1.35m の円形を呈し、深さは10cm前後である。

遺物は土師器細片が少量出土している。

ＳＫ10第７号土坑（第69図、図版21）

遺構群西側、Ｌ１ 57で検出した。ＳＫ09とＳＫ11の間に挟まれるように位置している。規模は、長径1.75m、短径1.5m の不整円形を呈する。深さは中央で54cm、底面は凸凹が認められる。埋土上位で火山灰を検出している。６～９層が堆積した後の凹レンズ状の窪みに、灰白～にぶい黄色をなす火山灰が二次的に流入しているものである。

遺物は、土師器坏・甕の破片が出土している。

ＳＫ11第８号土坑（第69図、図版21）

遺構群西側、ＬＩ 57で検出した。ＳＩ 21の東隣に位置する。径1.3mの円形を呈し、深さは10～13cmを測る。

遺物は土師器細片が少量出土している。

ＳＫ12第９号土坑（第69図、図版21）

遺構群西端、ＬＩ 59で検出された。西隣にＳＫ13が位置している。径90cmの円形を呈し、深さは14cmを測る。

遺物は土師器細片が数点出土したのみである。

ＳＫ13第10号土坑（第69図）

遺構群西端、ＬＩ 59で検出した。一部は調査区外に延びている。推定される規模は、長径1.1m、短径0.9m の東西にやや長い円形を呈するものと思われる。確認面からの深さは10～12cmである。

遺物は埋土中より土師器細片が少量出土している。

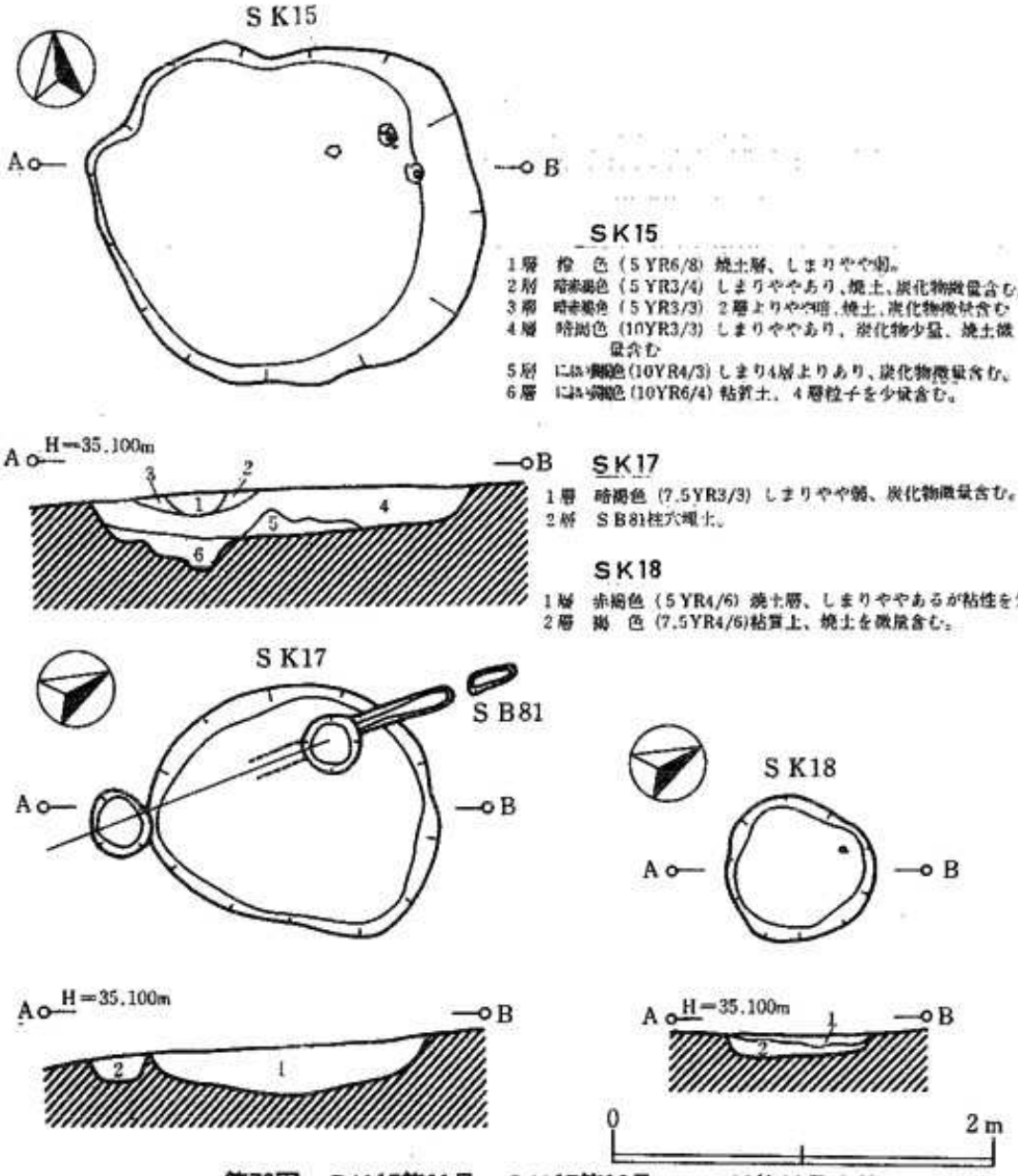
ＳＫ15第11号土坑（第70図・第74図、図版22・図版40）

遺構群ほぼ中央、ＬＧ53で検出した。ＳＩ 05の南に隣接して位置している。規模は長径2.1m、短径1.7m の不整円形を呈する。底面は平坦ではなく凸凹を認め、深さも東側で20cm前後、西側では25～40cmの数値を示す。

遺物は4層とした埋土中より土師器坏・甕が出土している。171は底部に回転糸切り痕を留める坏である。胎土には細砂粒を多く含んでいる。172はロクロ使用の甕底部である。回転糸切りがなされている。胎土には径１～４mmの小礫を含み、外面には煤状炭化物が付着している。

ＳＫ17第12号土坑（第70図）

遺構群中央東側、ＬＥ52で検出した。ほぼ南北方向に軸線をもつＳＢ81の柱穴と溝により切



第70図　SK15第11号・SK17第12号・SK18第13号土坑

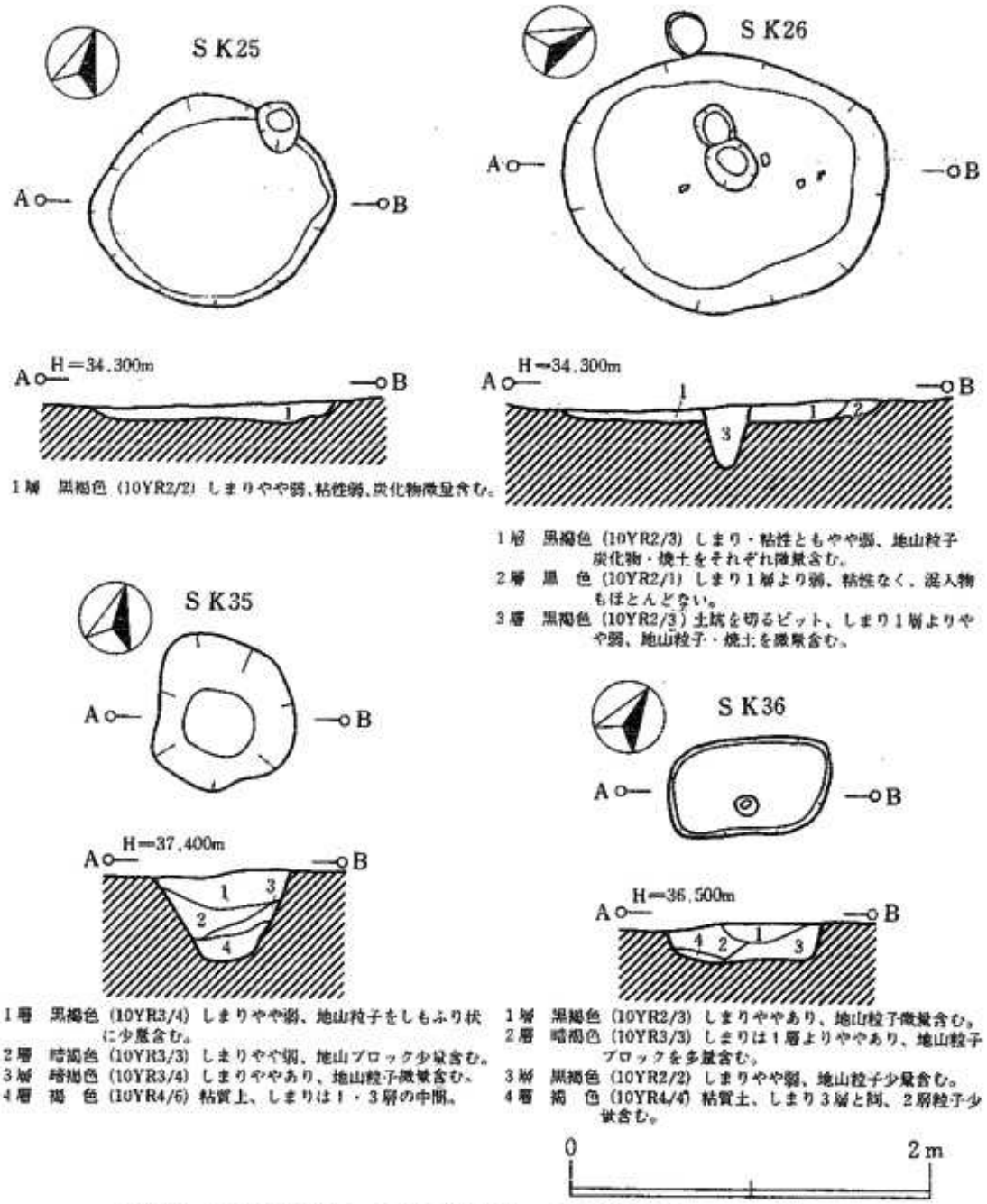
られているものである。規模は、長径1.5m、短径1.3mの不整円形を呈する。中央部での深さは25cmを測る。

遺物は土師器細片が少量出土している。

SK18第13号土坑（第70図、図版22）

遺構群南東部、LF50・LF51で検出した。SB49東側桁行の南東外方に位置している。径75cmの円形で、焼土が充填していたものである。底面・側面とも焼けてはいない。

遺物は土師器細片が数点出土している。



1層　黒褐色（10YR2/2）しまりやや弱、粘性弱、炭化物微量含む。

1層　黒褐色（10YR2/3）しまり・粘性ともやや弱、地山粒子炭化物・焼土をそれぞれ微量含む。
2層　黒　色（10YR2/1）しまり1層より弱、粘性なく、混入物もほとんどない。
3層　黒褐色（10YR2/3）土坑を切るピット、しまり1層よりやや弱、地山粒子・焼土を微量含む。

1層　黒褐色（10YR3/4）しまりやや弱、地山粒子をしもふり状に少量含む。
2層　暗褐色（10YR3/3）しまりやや弱、地山ブロック少量含む。
3層　暗褐色（10YR3/4）しまりややあり、地山粒子微量含む。
4層　褐　色（10YR4/6）粘質土、しまりは1・3層の中間。

1層　黒褐色（10YR2/3）しまりややあり、地山粒子微量含む。
2層　暗褐色（10YR3/3）しまりは1層よりややあり、地山粒子ブロックを多量含む。
3層　黒褐色（10YR2/2）しまりやや弱、地山粒子少量含む。
4層　褐　色（10YR4/4）粘質土、しまり3層と同、2層粒子少量含む。

第71図　SK25第14号・SK26第15号・SK35第16号・SK36第17号土坑

SK25第14号土坑（第71図）

遺構群中央西側、I.J 52・I.J 53で検出した。SI 01とSI 23の間に位置している。規模は長径1.35m、短径1.2mの円形を呈している。深さは確認面から7～11cmである。北端部で径25cm、深さ23cmのピットに切られている。

遺物は土師器細片が出土している。

ＳＫ26第15号土坑（第71図・第74図、図版40）

遺構群中央西側、Ｉ.Ｊ 52で検出した。ＳＫ25の南隣に位置している。規模は長径1.8m、短径1.45mの南北にやや長い円形を呈する。深さは５～10cmである。中央部で２つのピットにより切られている。

遺物は、土師器坏・甕が出土している。173は底部に回転糸切り痕を留める坏である。胎土には径1mm前後の砂粒・小礫を含んでおり、器面がザラザラしている。口径に比し、器高の低いものである。

ＳＫ35第16号土坑（第71図）

遺構群を画するＳＤ33の東方、ＫＨ58で検出した。規模は、長径90cm、短径75cmの不整円形を呈する。深さは48cmで先細りの形状を示す。

遺物は土師器の細片が少量出土している。

ＳＫ36第17号土坑（第71図・第74図、図版22・図版40）

ＳＫ35同様、ＳＤ33の東方、ＬＡ54で検出した。長軸90cm、短軸52cmの北東－南西方向に長い隅丸長方形を呈する。深さは確認面から18～20cmを測る。底面はほぼ平坦で、ここから完形の土師器坏が倒立して出土している。他に遺物は出土しなかった。174は底部に回転糸切り痕をもつ。やや厚手な作りで、色調は浅黄橙色を示す。

ＳＫ42第18号土坑（第72図、図版22）

遺構群南東隅、ＬＥ48・ＬＦ48で検出した。規模は、長径1.7m、短径1.5mの東西にやや長い円形を呈する。確認面からの深さは26cmである。

遺物は土師器細片が少量出土している。

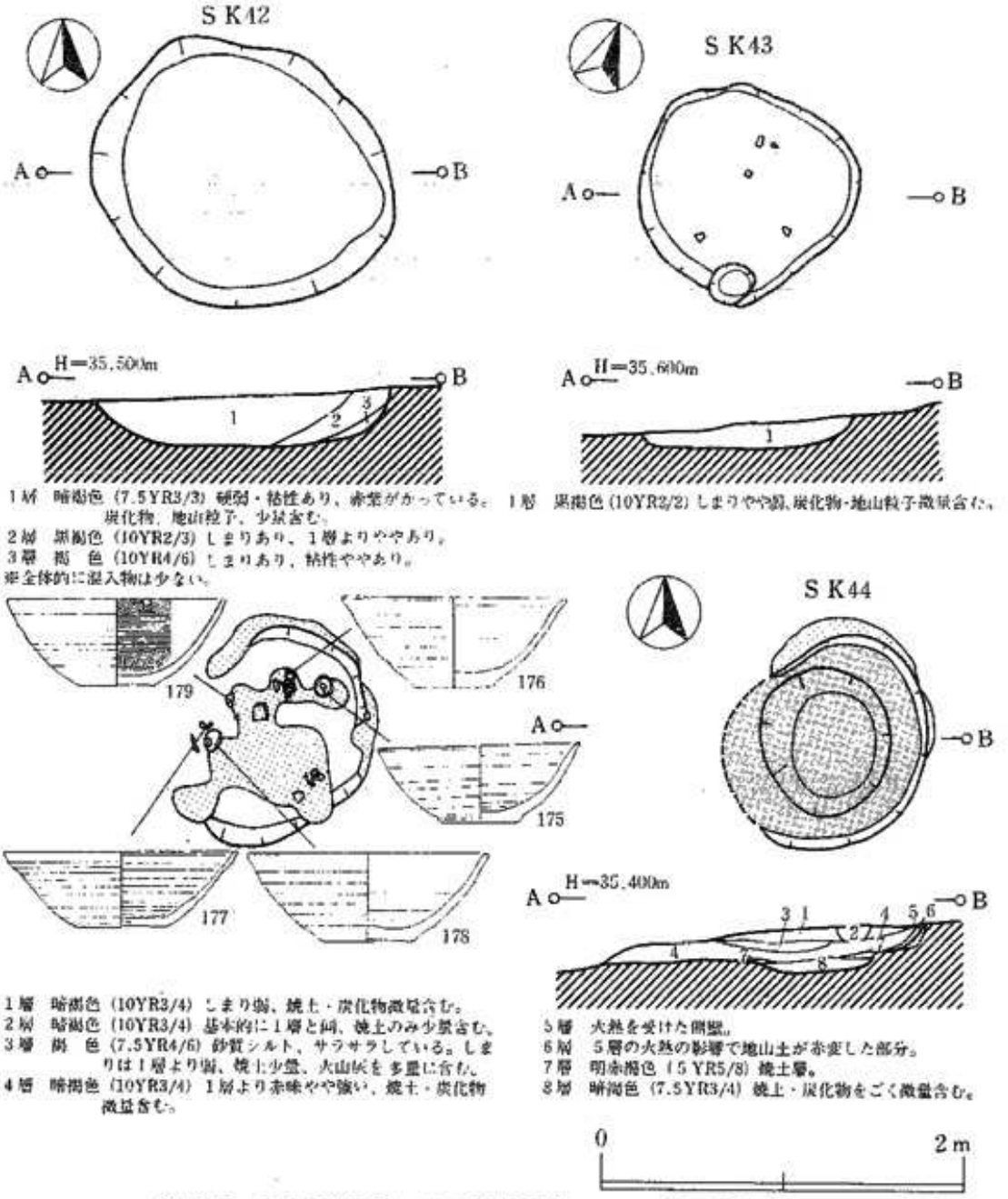
ＳＫ43第19号土坑（第72図、図版22）

遺構群南東部、ＬＤ49で検出した。西隣はＳＫ44が位置している。径1.2mの円形を呈しており、深さは10～15cmを測る。壁南端を径25cm、深さ23cmのピットにより切られている。

遺物は土師器片が数点出土している。

ＳＫ44第20号土坑（第72図・第74図、図版22・図版40）

遺構群南東部、ＬＦ49で検出した。径約1.2mの円形を呈するものと思われるが、西側の壁を欠く。土坑側壁及び底面が焼けていることから、いわゆる土器焼成の窯であった可能性もある。ただし遺物の出土層位は、総て１～４層上面までであり、明確にこの土坑に伴うと判断できるものはない。確認面から15～20cm掘り込まれた底面には径70cm、深さ６～８cmのピットが存在する。ピットの上面のみが焼けていることから、火を使用した時点では、これは埋められていたことになる。また土層を観察すると、次のことを明らかにできる。４層の堆積状態をみると、土坑が廃棄された時点で既に西側の壁がなかったことを物語る。この後、３層・４層上面には



1層　暗褐色（7.5YR3/3）硬質・粘性あり、赤紫がかっている。炭化物、地山粒子、少量含む。
2層　黒褐色（10YR2/3）しまりあり、1層よりややあり。
3層　褐　色（10YR4/6）しまりあり、粘性ややあり。
非全体的に混入物は少ない。

1層　黒褐色（10YR2/2）しまりやや弱、炭化物・地山粒子微量含む。

1層　暗褐色（10YR3/4）しまり強、焼土・炭化物微量含む。
2層　暗褐色（10YR3/4）基本的に1層と同、焼土のみ少量含む。
3層　褐　色（7.5YR4/6）砂質シルト、サラサラしている。しまりは1層より強、焼土少量、火山灰を多量に含む。
4層　暗褐色（10YR3/4）1層より赤味やや強い、焼土・炭化物微量含む。

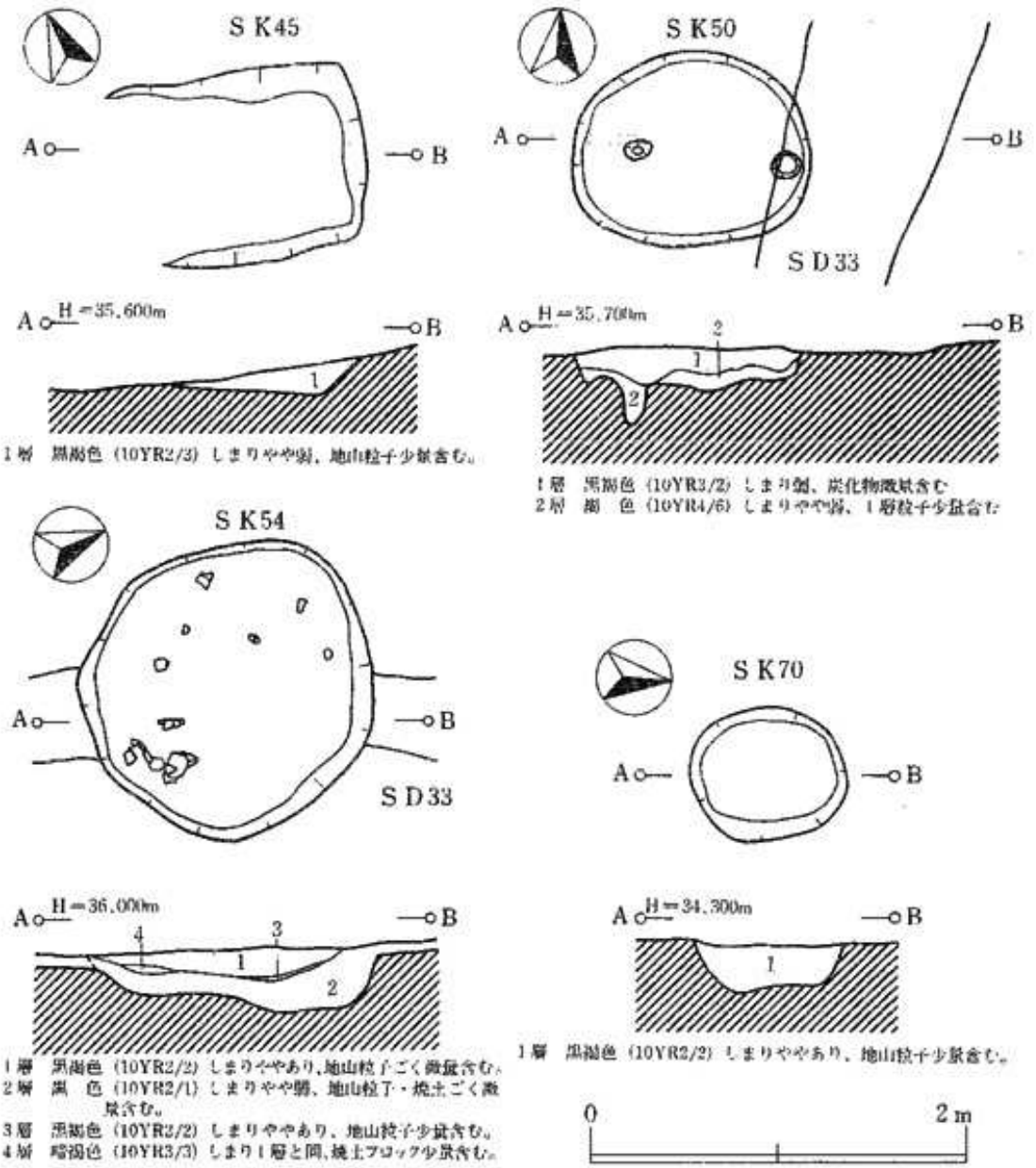
5層　火熱を受けた面盤。
6層　5層の火熱の影響で地山土が赤変した部分。
7層　明赤褐色（5YR5/8）焼土層。
8層　暗褐色（7.5YR3/4）焼土・炭化物をごく微量含む。

第72図　SK42第18号・SK43第19号・SK44第20号土坑

二次的な火山灰の流入、および1～3層の堆積と続くのである。

ここでも多量の炭化米を検出している。遺物を含む1～3層では63粒、遺物をほとんど含まない4層下面・8層では1,629粒、合計すると実に1,692粒、重さにして13.02g の炭化米を確認している。

遺物は土師器坏、須恵器甕が出土している。175～179の坏には底部に回転糸切り痕を留める。ロクロの回転は177が左、他が右回転である。176は胎土に細砂粒を多く含んでいる。179は内



第73図　SK45第21号・SK50第22号・SK54第23号・SK70第24号土坑

面を丁寧なミガキの後、黒色処理している坏である。ミガキは外面口縁部にも及ぶ。

SK45第21号土坑（第73図、図版22）

遺構群南東部、LE50で検出した。削平により西側の壁を欠く。長軸は現存1.3m、短軸1mの長方形を呈する。深さは東側で16cmである。遺物は出土しなかった。

SK50第22号土坑（第73図、図版22）

遺構群南東隅、LD49・LE49で検出した。SD33に東側の壁を切られている。規模は、長

径1.25m、短径1mの東西に長い小判形を呈する。深さは16～20cm、底面から径15cm、深さ13cmと20cmのピットが掘り込まれている。

遺物は土師器細片が少量出土している。

ＳＫ54第23号土坑（第73図・第74図、図版23・図版40）

遺構群を画するＳＤ33に重複するＬＢ54・ＬＣ54で検出した。両者の新旧関係は不明である。径1.6mの円形を呈する。確認面からの深さは24～33cmである。

遺物は土師器坏・甕、砥石が出土している。２点の坏は大型で180が口径14.4cm、底径5.7cm、器高6.3cm、181は口径15cm、底径6.4cm、器高5.5cmを測る。いずれも底部には回転糸切り痕を留める。182は凝灰岩を素材とした砥石である。4面を砥面としているが、上面と1側面が最も使い込まれている。

ＳＫ70第24号土坑（第73図、図版23）

遺構群中央南西側、ＬＪ52で検出した。東隣にＳＫ26が位置している。規模は長径85cm、短径70cmの南北にやや長い円形を呈する。深さは20～25cmである。

遺物は土師器細片が少量出土している。

ＳＫ79第25号土坑（第41図・第74図、図版23）

遺構群南西側、ＬＪ50・ＬＪ51で検出した。土坑はＳＩ27の北東部を切り込んで構築されてる。規模は長径1.5m、短径0.95mの楕円形を呈している。深さは確認面から65cmある。

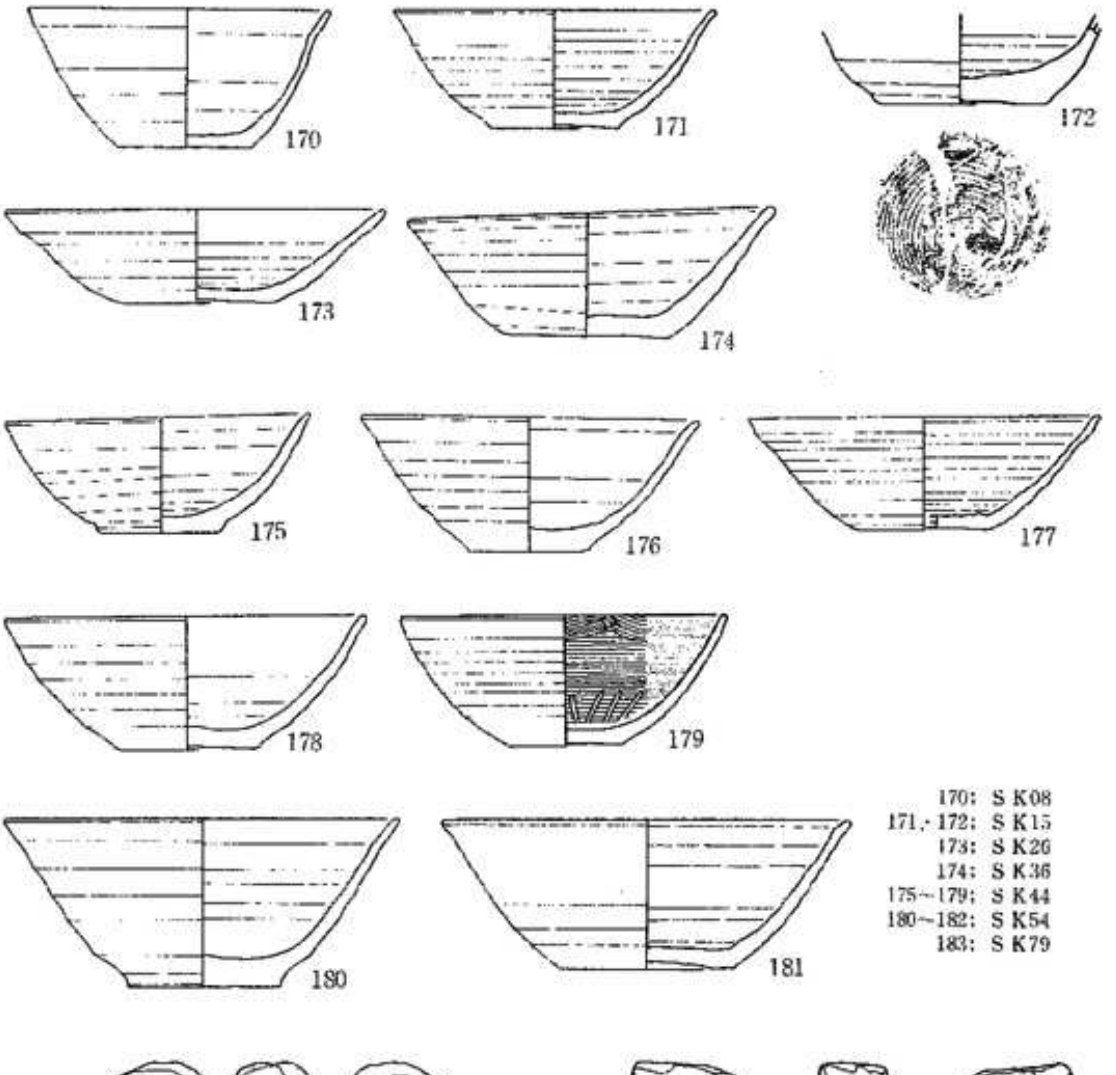
遺物は埋土中より土師器坏・甕、砥石が出土している。土師器では、ＳＩ27埋土の破片と接合できたものもある。183は、軽石質凝灰岩を素材とする砥石である。4面を砥石としており、それぞれが凹状に窪んでいる。完形で149gを測る。

（4）竪穴状遺構

ＳＸ51第1号竪穴状遺構（第75図・第76図、図版24）

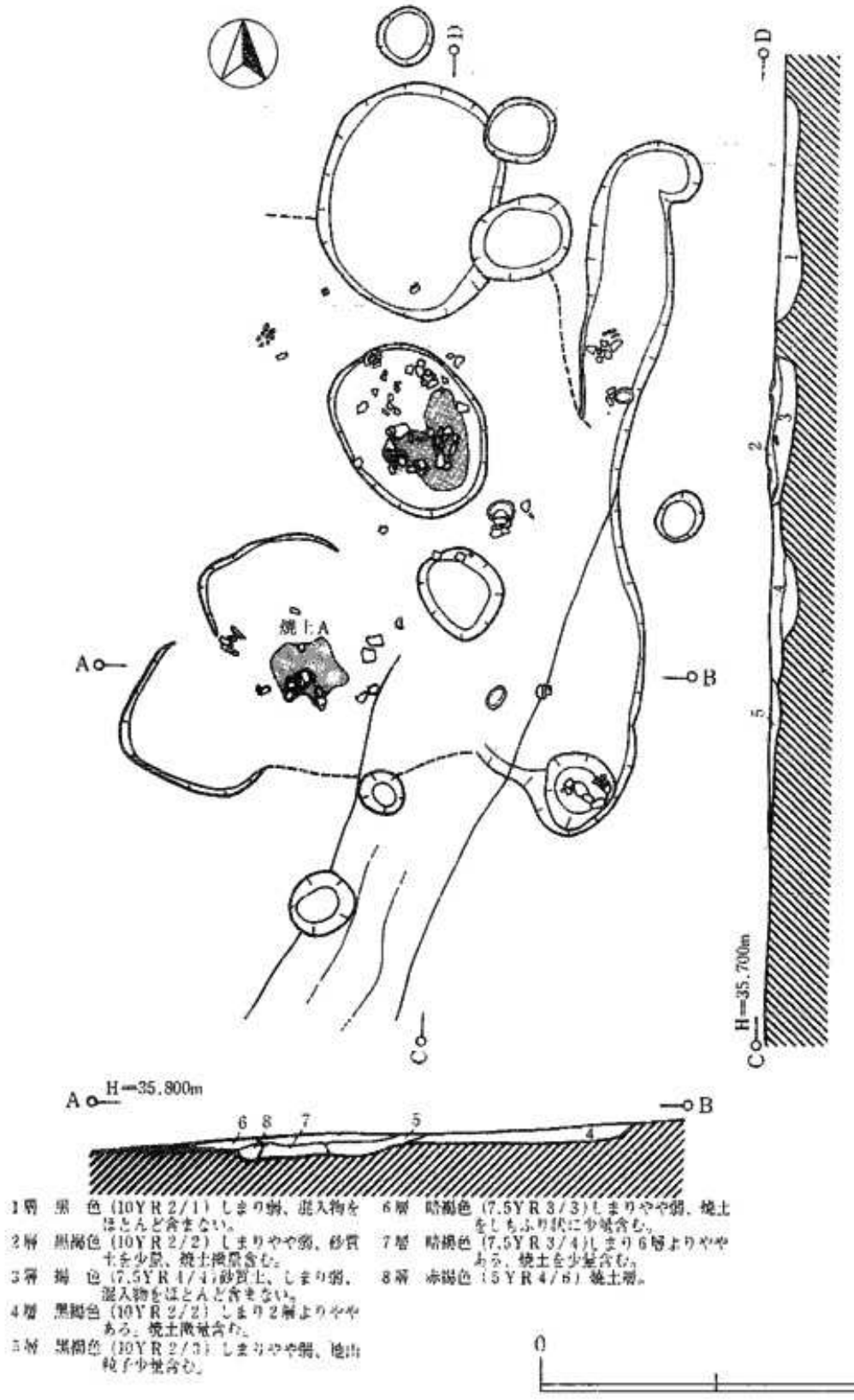
遺構群南東部、ＬＤ49・ＬＤ50で検出した。地山より1枚上のⅣ層上面での確認状態では、長軸4.5m、短軸2.5m程の南北に長い長方形を呈するプランとして把えていた。ＳＤ33と重複していたが、両者とも個々の線引きを行える段階ではなかった。さらにⅣ層面を精査して遺構確認に努め、ＳＤ33の下面でＳＸ51が確認できることが明らかとなった。しかしながら依然ＳＸ51のプランは不明確のまま地山面に達していた。結果的には複数の土坑様の集合体という形になった。これを1つの遺構＝竪穴状遺構としたのは次の点によるものである。長方形を呈する落ち込みを確認していること。落ち込み直下の床面（点線内）が竪穴住居跡床面のように締まっていること。焼土Aのあり方は、崩壊したカマドであった可能性をもつこと。以上から竪穴住居跡の可能性を残しつつ、竪穴状遺構として登録したものである。

遺物は土師器坏・甕が出土している。184は非ロクロの甕で底部は丁寧にナデである。器面調



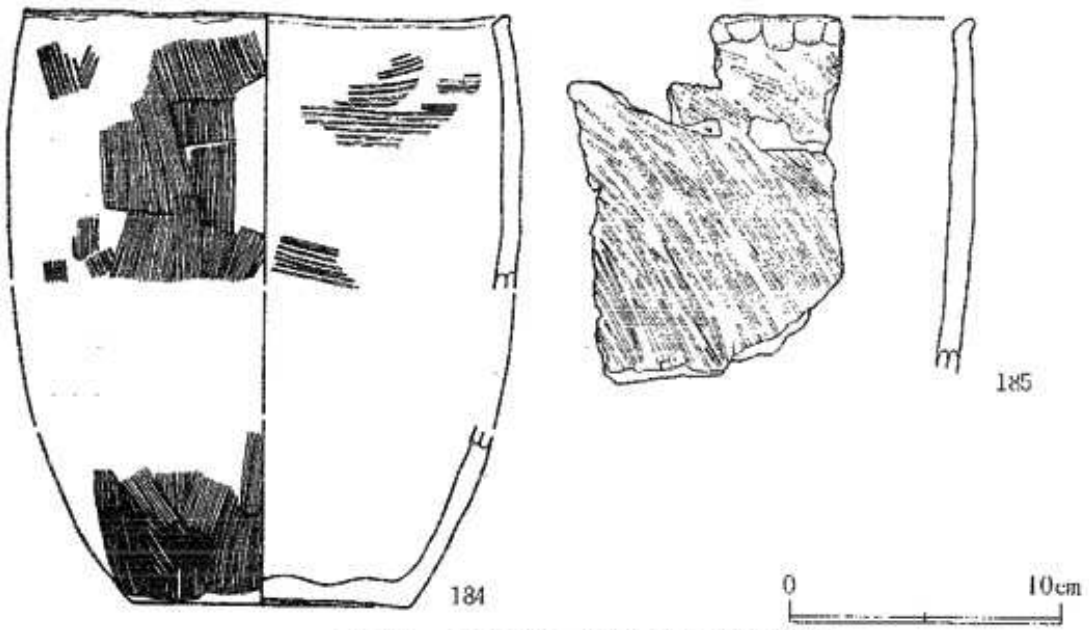
第74図　北部遺構群土坑内出土遺物

整は、外面上半がハケメ、下半がケズリ（？）のちハケメあるいはナデ、内面はハケメである。胎土には径1～5mmの小礫を多く含む。外面には煤状炭化物が付着している。185も非ロクロの甕口縁部である。外面は細かい棒状工具による粗いナデが認められる。痕跡としては光沢をもちミガキのようである。内面はヘラ状工具によるナデを行っている。胎土には184と同種の小礫が混じるが、径も小さく量も少ない。



1層　黒　色（10YR 2/1）しまり弱、混入物をほとんど含まない。
2層　黒褐色（10YR 2/2）しまりやや弱、砂質土を少量、焼土微量含む。
3層　褐　色（7.5YR 4/4）砂質土、しまり弱、混入物をほとんど含まない。
4層　黒褐色（10YR 2/2）しまり2層よりやや弱く、焼土微量含む。
5層　黒褐色（10YR 2/3）しまりやや弱、地山粒子少量含む。
6層　暗褐色（7.5YR 3/3）しまりやや弱、焼土をしもふり状に少量含む。
7層　暗褐色（7.5YR 3/4）しまり6層よりやや弱く、焼土を少量含む。
8層　赤褐色（5YR 4/6）焼土層。

第75図　SX51第1号竪穴状遺構



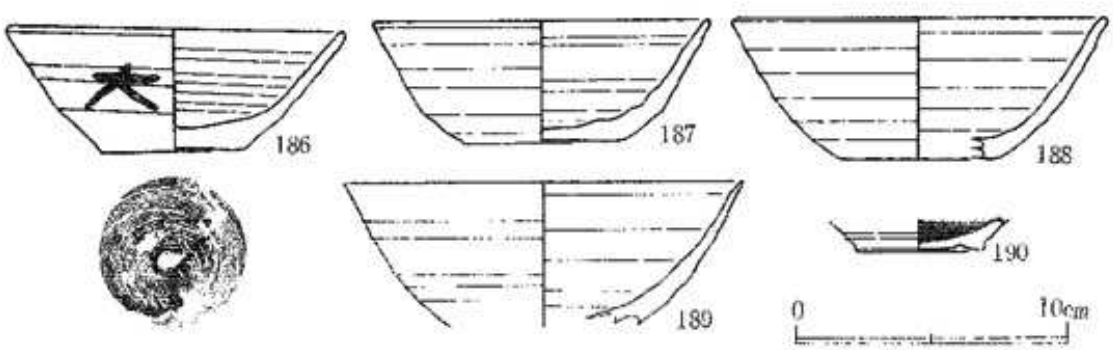
第76図　ＳＸ51第１号竪穴状遺構出土遺物

（５）焼土遺構

ＳＮ24第１号焼土遺構（第38図、第77図、図版40）

遺構群西側、ＬＪ 53で検出した。ＳＩ 23の東隣に位置するもので、当初はこの住居跡に伴うものと考えていた。精査の結果、ＳＮ24の焼土がＳＩ 23に入り込んでいないことが明らかとなり、独立した遺構として扱ったものである。確認面では、長さ1.7m、幅0.7mの南北に長い焼土の広がりを検出していたが、焼土密度の高いＡとやや低いＢに分けられそうである。いずれも掘り込みを伴うものではなく、遺構底面はⅣ層中に収まる。

遺物は土師器坏が出土している。186・188・190はＡから、187・189はＢ出土である。底部の遺存するものは回転糸切り痕を留める。186は焼土中に倒立して検出されたもので、体部に「大」の墨書が認められる。189は二次火熱を受け、器面が剥落している。190は高台付坏で、内面をミガキの後黒色処理している。



第77図　ＳＮ24第１号焼土遺構出土遺物

（６）柱列

ＳＡ46第１号柱列（第78図）

遺構群西端、ＳＩ 23の西４ｍに位置する。柱穴４本からなる。柱間距離は9.9m、主軸方位はＮ－10°－Ｅを示す。

各柱穴は径20～25cmの円形を呈し、確認面からの深さは北側のＰ１で15cm、Ｐ２～４で20～25cmである。各柱穴間の距離は北側から、3.3m、3.2m、3.4mを測る。遺物は出土しなかった。

ＳＡ84第２号柱列（第17図）

遺構群南側、ＳＢ49の西方に位置する。柱列軸線がＳＢ49西側桁行と平行していることから、ＳＢ49に伴う施設であった可能性が高い。両者の間隔は3.7mである。柱間距離は13m、軸線上の柱穴は８本からなる。各柱穴間の距離は1.5～2.8mとばらつきがある。径18～35cm、深さは12～29cmを測る。主軸方位はＳＢ49と同じくＮ－５°－Ｗを示す。遺物は出土しなかった。

ＳＡ85第３号柱列（第17図）

遺構群中央西側、ＳＩ 20とＳＩ 05の間に位置する。柱穴５本からなり柱間距離は5.7m測る。主軸方位はＮ－10°－Ｅを示す。各柱穴は径15～25cm、深さは16～26cmである。各柱穴間の距離は北側から1.3m、1.7m、1.6m、1.1mでばらつきがある。遺物は出土しなかった。

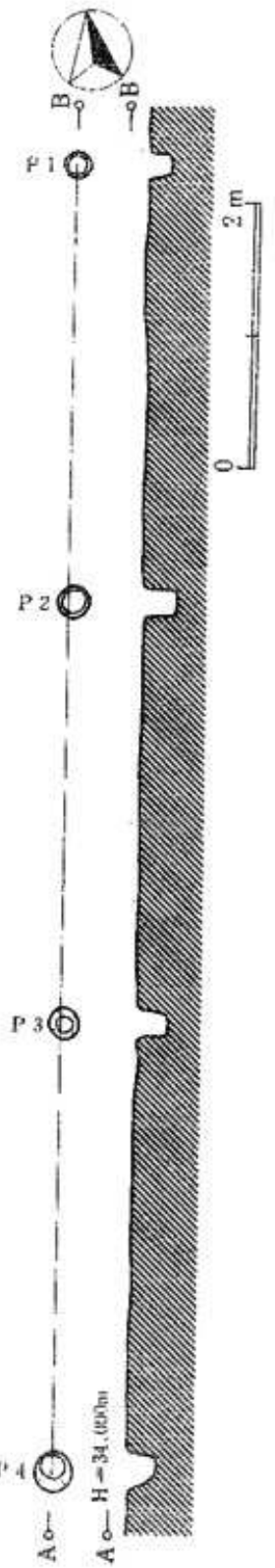
ＳＡ86第４号柱列（第17図）

遺構群西端、ＳＩ 20の西方に位置する。柱穴５本からなり、柱間距離は6m、主軸方位はＮ－13°－Ｅを示す。各柱穴は径20～30cm、深さは20～26cmを測る。各柱穴間の距離は1.4～1.6mとほぼ等間である。遺物は出土しなかった。

ＳＡ87第５号柱列（第17図）

遺構群西端、ＳＩ 23埋土を一部切り込む位置で検出した。ＳＡ86の延長上に存在するが、軸線方向がやや異なることと、ＳＡ86がほぼ等間であるのに対し、ＳＡ87はばらつきが大きく、別々の遺構として把えたものである。軸線上の柱穴は８本で、柱間距離は7.2mを測る。径15～30cm、深さは13～32cmである。主軸方位はＮ－15°－Ｅを示す。

柱穴内から土師器細片を少量出土している。



第78図　ＳＡ46第１号柱列

（7）溝跡

ＳＤ33第１号溝跡（第17図、図版４）

遺構群の東端を画する溝である。遺構は地山面より１枚上のⅣ層上面で確認でき、北端はＳＩ29北東側のＬＡ59まで延びる。南端は調査区外に及びその全長は約47mである。中軸線はＮ－18°－Ｅを示す。溝の幅は35～60cmであるが、50cm前後を平均とする。確認面からの深さは、10～15cmで地山面まで掘り下げるとほとんど消滅してしまう。底面での高低差は、北を０とすると、南で1.1m下がる。なお、部分的にはあるがＳＤ33の西側に平行して同規模の溝が認められる。ＳＫ54の南側及びＳＸ51との重複部分（第75図参照）である。このことからＳＤ33は二時期あったことも推定できる。

遺物は土師器坏・甕が出土している。甕は非ロクロで、外面にケズリが認められるものである。

ＳＤ34第２号溝跡（第17図）

遺構群の南側を画する溝である。両端とも調査区外に延び、確認できた全長は約34mである。東端はＳＤ33と結ばれていた可能性がある。溝の幅は40～50cm、深さは５～15cm程である。西端部分のみ幅広く、掘り込みもやや深くなる。その幅70～110cm、深さは20～25cmを測る。底面での高低差は東を０とすれば、西で約1.7m下がる。

遺物は土師器坏・甕が出土している。甕は非ロクロで、外面ハケメ、内面ナデ整形されているものも含まれる。

２．南東部遺構群（第79図）

本遺構群は、竪穴住居跡５軒、掘立柱建物跡２棟、土坑４基、焼土遺構２基、及び柱列２列、溝跡２条で構成される。本群は北側をＳＤ55・ＳＡ72で、西側をＳＤ56で画した狭い範囲内に集中的に存在している。北部遺構群とは幅14～16mの無遺構域を隔てている。

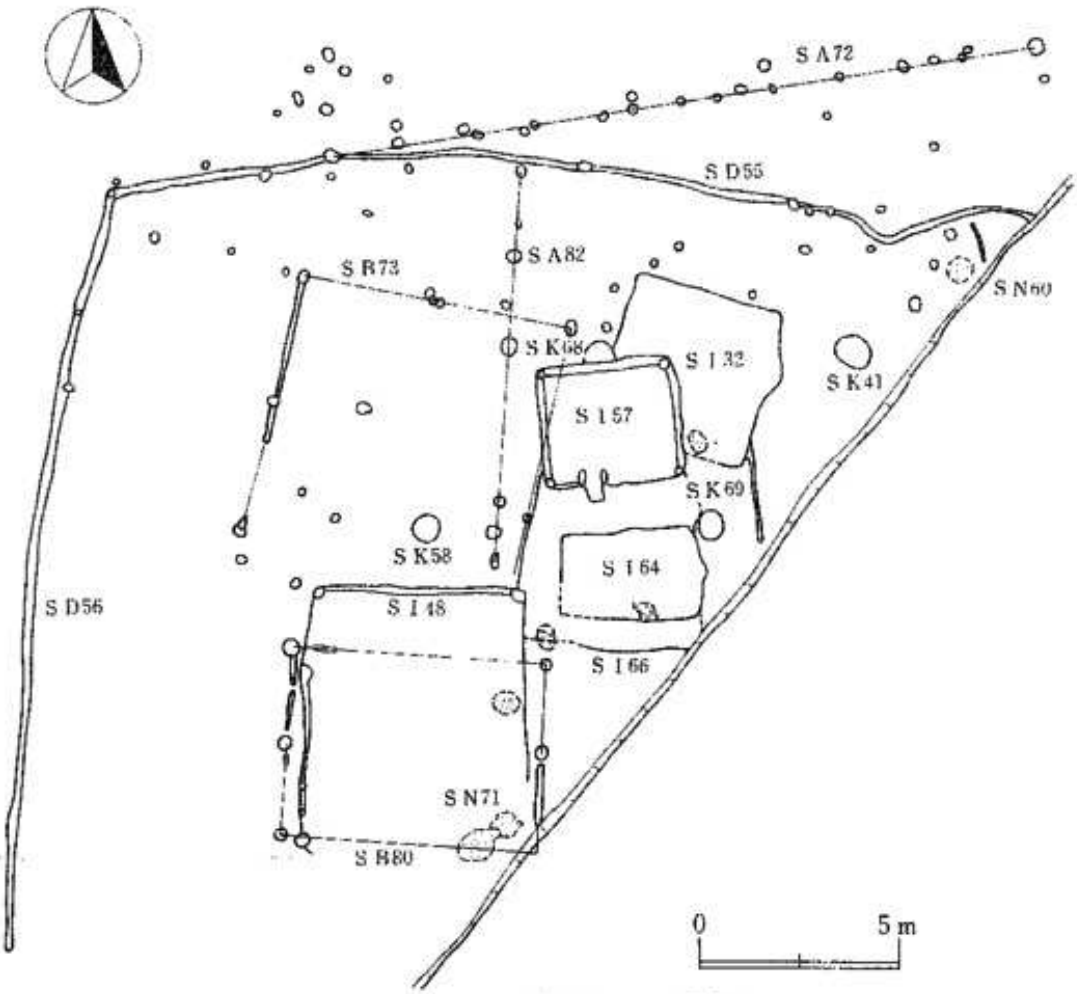
なお、本群を切っているＳＤ47・52、及び遺構群の南側に位置する溝跡、土坑についても本群中にて述べることにする。

（1）竪穴住居跡

５軒の竪穴住居跡は、直接的に切り合い関係をもたないものも存在するが、埋土の状況を加味してみると次のような新旧関係になると考えている。（新）ＳＩ64→ＳＩ57→ＳＩ32・ＳＩ66→ＳＩ48（旧）である。

ＳＩ32第14号竪穴住居跡（第80図・第83図、図版26・図版40）

遺構群北東部、ＬＪ44・45、ＭＡ44・45で検出した。南西部をＳＩ57に切られている。また住居跡南東隅から南に向かって幅８～10cm、深さ４～５cmの溝が弧状に2.3m延びている。両者



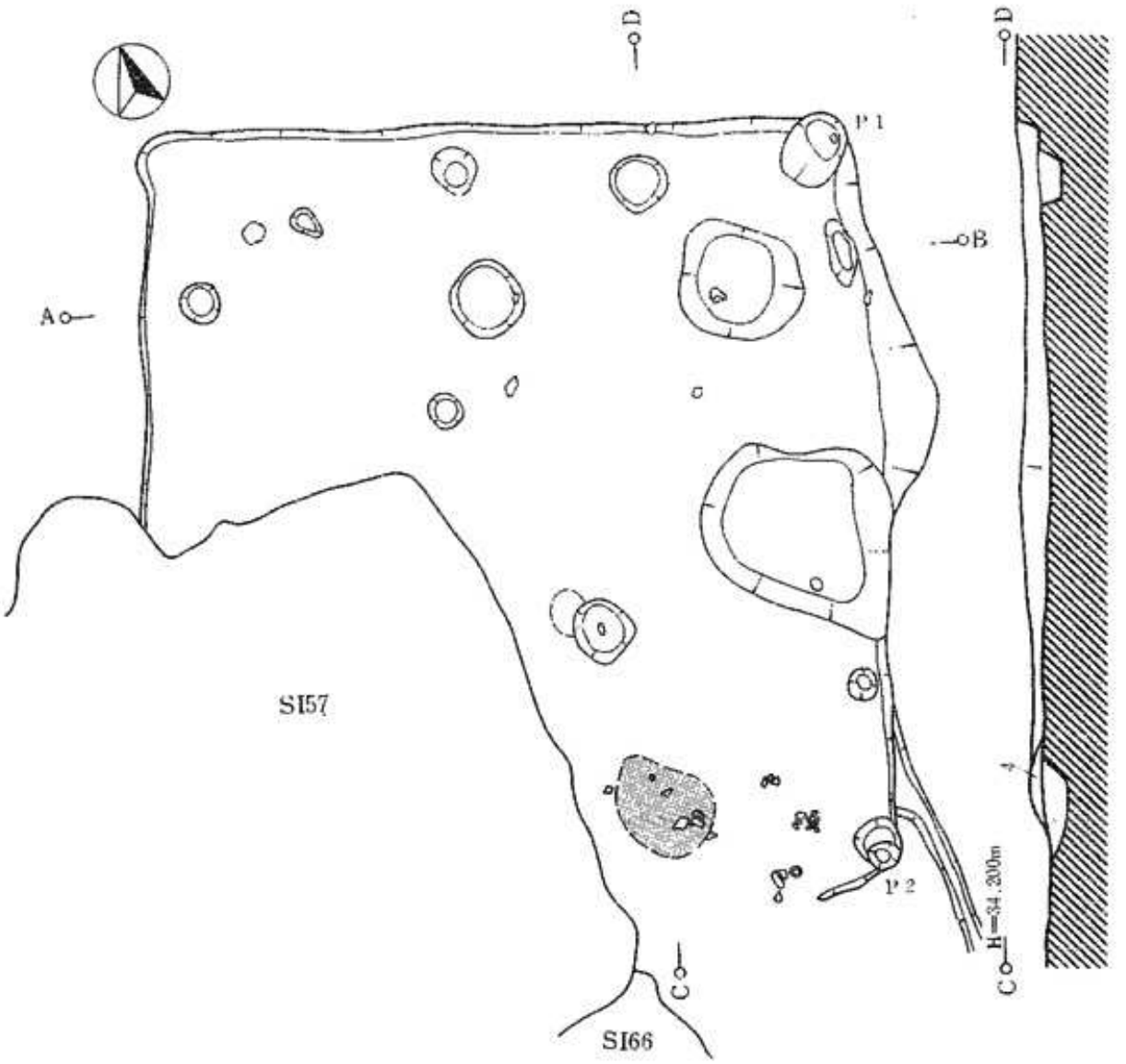
第79図　南東部遺構群配置図

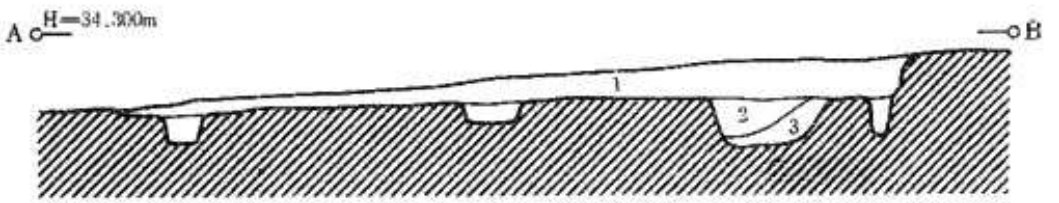
の関係は不明である。規模は東西長が北壁で3.7m、中央部で４m、南北長は、南壁が不明確であるが約4.3mになるもので、南北にやや長い方形を呈する。確認面からの深さは、東壁部で20～25cm、西壁部では10cmに満たない。主軸方位はN－18°－Eを示す。床面は平坦で堅く締まっている。

柱穴はＰ１・Ｐ２が東壁の隅柱となる。北西隅では柱穴を確認できなかった。深さはＰ１で29cm、Ｐ２で15cmであるが、他のピットについては10cm未満で位置的にも組み合わせることはできなかった。東壁中央部分に一辺１m程の不整方形の土坑が床面より掘り込まれている。

カマドは、南壁東寄りに設けられている。径50cm程の火床面のみが残るに留まる。平坦な床面をそのまま利用しているもので、火熱の影響で火床面がヒビ割れをおこし、面下13cmまで土色が変化している。

遺物は、土師器坏、甕が出土している。坏は底部に回転糸切り痕を留める。191は内面に煤状炭化物が付着し、193は胎土に細砂粒を多量に含んでいる。





1層　黒褐色（10YR 2/3）全体に焼土が小ブロック状でまじっている。
2層　褐　色（7.5YR 4/4）土はやや軟らかく粘性弱焼土と炭化物が少量混入。
3層　黄褐色（10YR 1）地山粘土の二次堆積土。上から見る限りでは覆土と思えない状況を呈している。やや硬い。
4層　明褐色（10YR）3層同様の二次堆積土。土性もほぼ同じで混入物がほとんどない。ただし3層に比べ軟かい。

第80図　ＳＩ32第14号竪穴住居跡

ＳＩ 48第15号竪穴住居跡（第81図～第83図、図版26・図版27・図版40）

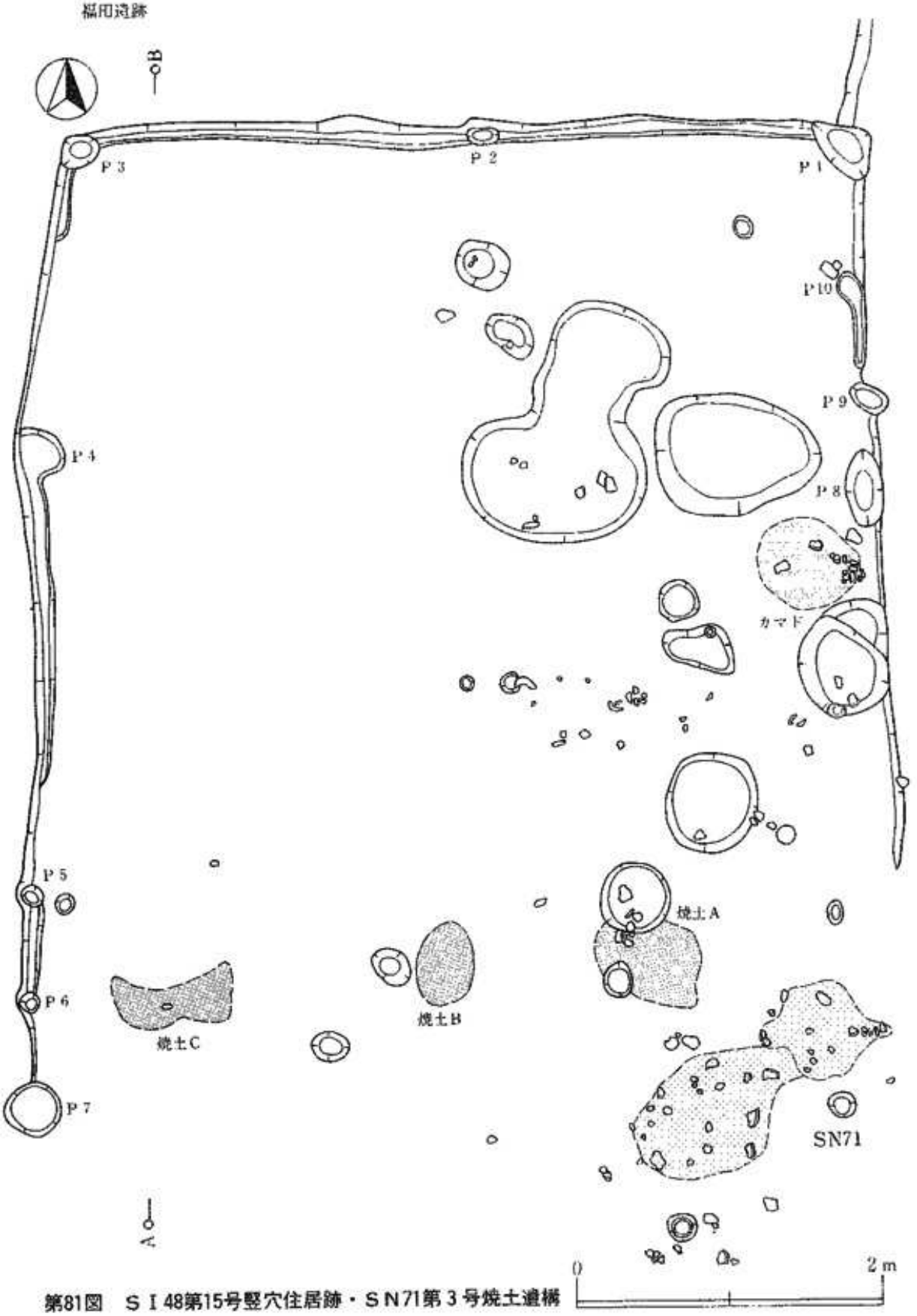
遺構群南側、ＭＢ41～43、ＭＣ41～43で検出した。北東隅でＳＩ 66に切られている。またＳＢ80とした掘立柱建物が住居跡をまたぐように位置しているが両者の新旧関係は不明である。木根による攪乱を随所で受けており、南壁と西壁、東壁の南半部を欠く。このため規模、形状を明らかにできないが、東西長は北壁で5.3m、中央部で5.7m、南北長は少なくとも６ｍを越す。今回検出された住居跡の中では最大規模となる。深さは、残りの良い北壁部で20cmを測る。主軸方位は、ほぼ磁北を示す。床面は根による攪乱を受けていることを差し引いても、あまり平坦とは言えず、堅く締まってもいない。床面上には焼土Ａが分布しているが、使用頻度は高くない。

壁溝は北壁と西壁、東壁の一部で検出している。溝の幅は10～15cmを示すが、この数値はいわゆる掘り方の幅とは考えていない。壁溝の埋土状態から次のように理解している。平面観察では床面と壁溝の境を識別できない。埋土も床面と同色である。土の締まり具合からみると、壁の直下から幅５cm前後が最も締まりが弱であり、その内側すなわち床面との接点部分ではいくらか締まりはある。とは言っても指で押すと簡単に凹むのである。これらのことは、壁溝の機能とその構築過程を想定する上での一つの示唆を与えてくれるものである。まず周壁の直下床面に直接板材を打ち込む方法で板壁を据える。異種の材（横木などか）を用いて壁板を安定させたものと思われる。その後、廃棄され土砂が入り込む前に板を抜き取る。この際、板幅以上の土（床面の地山土）が持ち上げられ、攪乱され締まりを失った床面と同色の土が残される。これが発掘時において10～15cmの幅の遺構として確認できるのである。

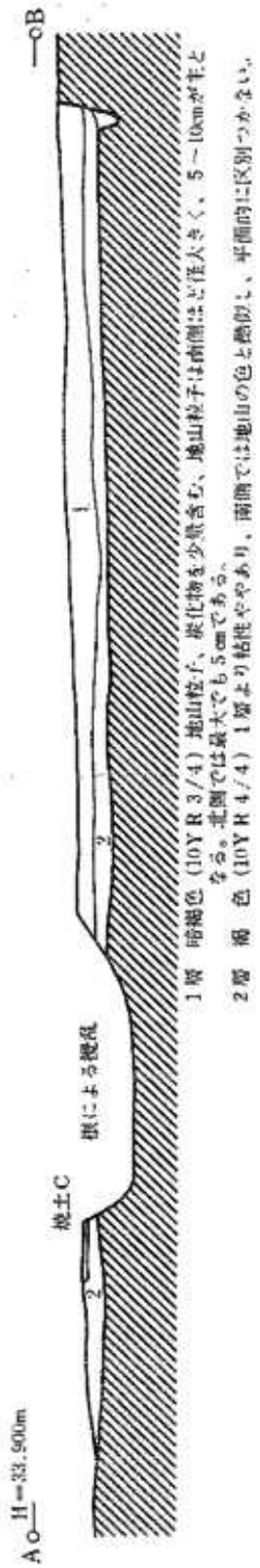
カマドは東壁北寄りに位置している。火床面のみであり、袖部等と考えられるものは一切確認できなかった。煙出しは壁をほとんど掘り込まない形態となるものであろう。火床面は長さ70cm、幅60cmで平坦な床面をそのまま利用している。火熱の影響で床面下８cmまで土色が変化している。カマドの南側には焼土の詰った土坑が検出され、このカマドに伴うものと思われる。柱穴は、壁際にあるＰ１～Ｐ10が該当する。ただし床面からの深さは５～15cmと全体的に浅い。

住居跡の南半部には、床面よりやや浮いた状態ではあるが３ケ所で焼土を確認している。焼土Ｂ・Ｃは、床面から６～８cm浮いているが、この面で火を使用したことは明らかであり、平坦で堅く締まった面を残している。一方、焼土Ａの南側に分布するものについてはＳＮ71として焼土遺構の項で述べる。三者とも住居跡より新しい時期の所産である。

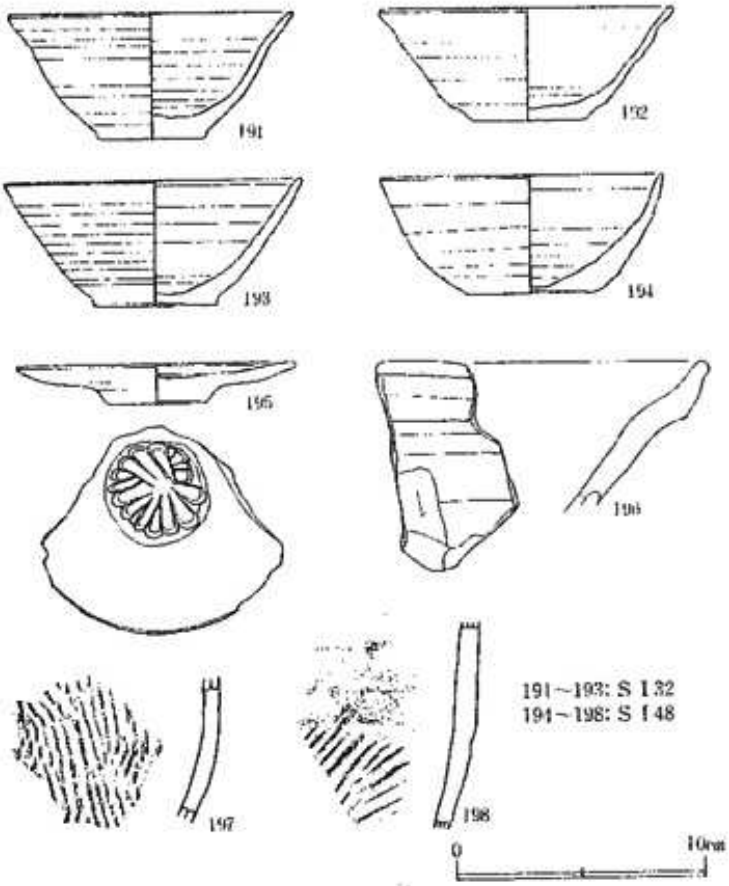
遺物は、土師器坏、甕が出土している。図示した土器は総て埋土中の出土である。194の坏は底部に回転糸切り痕を留めるもので、内面底部が平らではなく擂鉢状に窪んでいる。195の皿は厚く作り出した底部を菊花状に削り高台風に仕上げている。成形にはロクロを用い、色調は淡黄橙色を呈する。196はロクロ使用の甕と思われる。外面の一部にケズリが残る。197・198はタ



第81図　ＳＩ48第15号竪穴住居跡・ＳＮ71第３号焼土遺構



第82図　ＳＩ48第15号竪穴住居跡



第83図　ＳＩ32第14号・ＳＩ48第15号竪穴住居跡出土遺物

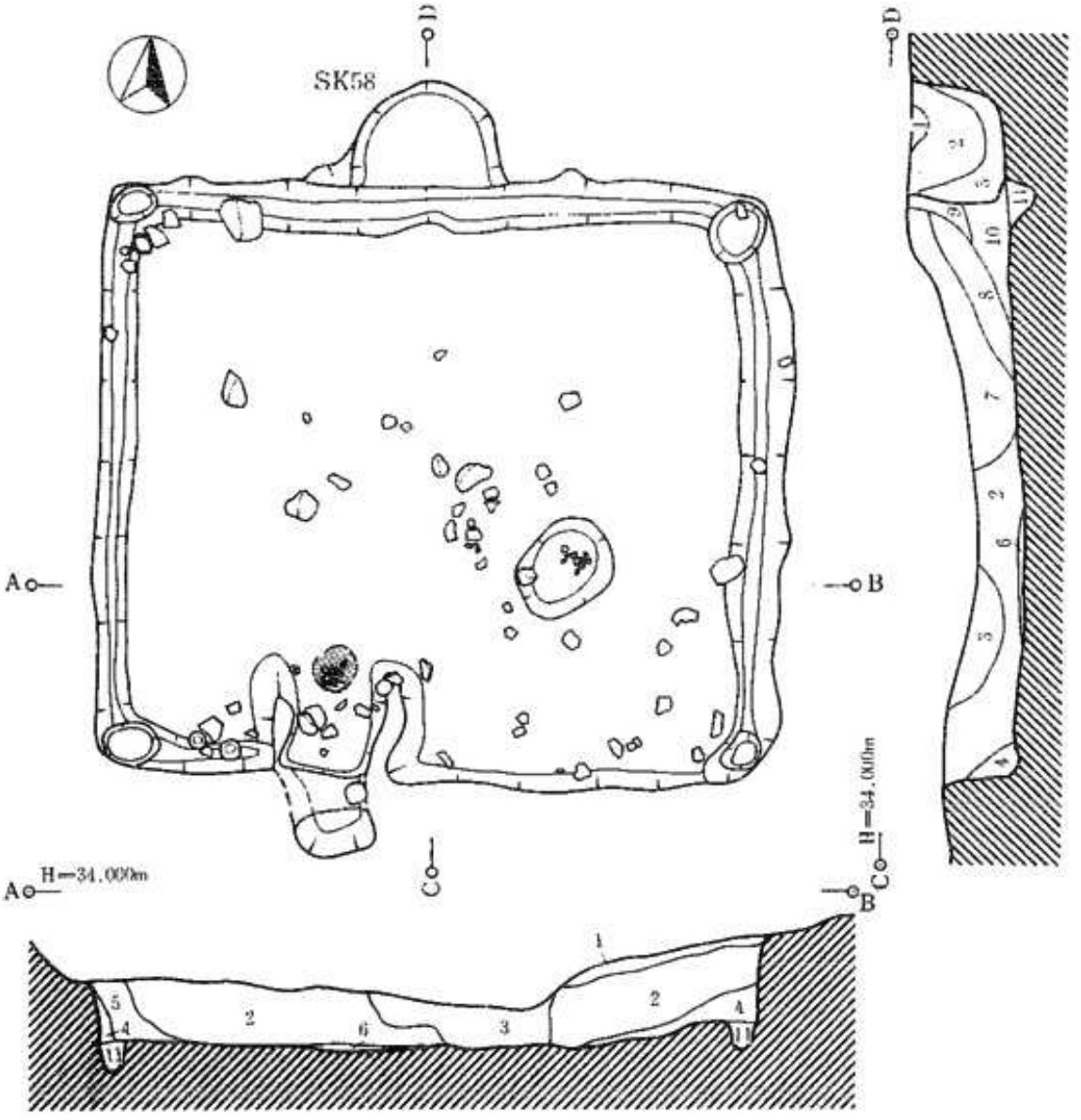
タキ目をもつ甕で、198はロクロ成形の後、タタキ目を施している。197は二次火熱を受けている。その他には、坏では内面あるいは内外面をミガキの後、黒色処理しているもの、甕ではロクロ使用で底部に回転糸切り痕を留めるもの、非ロクロで胴部外面をケズリ、内面ナデ、内外面ハケメのもの、須恵器甕・壺なども出土している。

ＳＩ 57第16号竪穴住居跡

（第84図～第89図、図版27・図版28・図版40・図版41）

ＭＡ44・ＭＡ44に位置し、ＳＩ 32・ＳＩ 66を切って構築されている。一方で北壁中央ではＳＫ58に、南北に延びるＳＤ52には切られている。規模は、南北長で3.15m、東西長3.6mの整った隅丸方形を呈する。遺存状態は良好で床面までの深さは50～60cmを測る。

面積は11.2㎡、主軸方位はＮ－3°－Ｗを示す。埋土の状態を観察すると、切り合いの認められないＳＩ 64との関係が想定できる。すなわちＳｉ 57の埋土には7・8層とした多量の黄褐色粘土が人為的と思



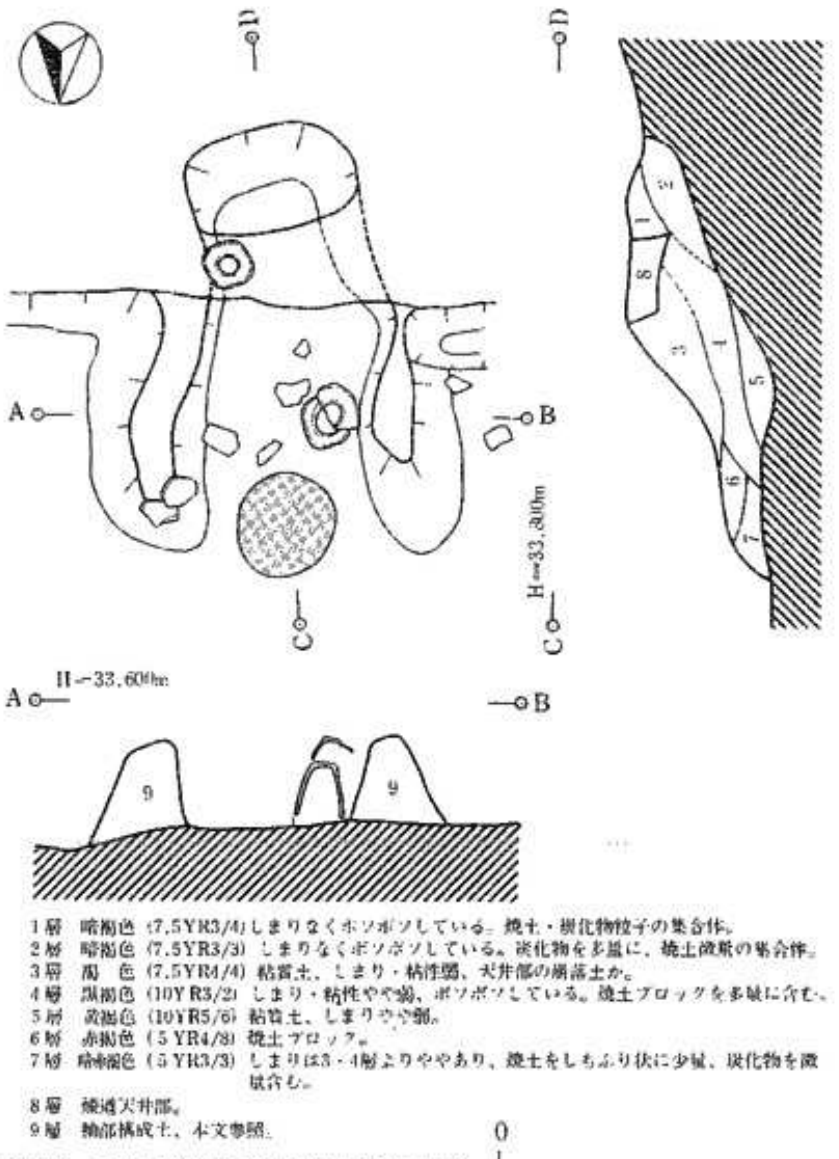
1層　黒褐色（10YR2/3）しまりやや弱、焼土・地山粒子をごく微量含む。
2層　褐　色（10YR4/4）しまりは1層よりやや弱、5mm台の地山粒子を多量に含む。
3層　木根による撹乱。
4層　褐　色（10YR4/6）粘質土、壁の崩落土か。
5層　暗褐色（10YR3/4）土質は2層に類似、しまりは2層よりやや弱。
6層　黒褐色（10YR3/2）床面上に薄く分布、焼土・炭化物を少量含む。
7層　黄褐色（10YR5/6）粘質土、地山の2次堆積土、中央より北側にレンズ状に入り込む。
8層　褐　色（10YR4/6）粘質土、地山の2次堆積土、しまり・粘性は7層よりやや弱。
9層　暗褐色（10YR3/3）土質は5層に類似。炭化物・地山粒子微量含む。
10層　褐　色（10YR4/6）粘質土、地山の2次堆積土、小ブロック状の粘土の集合体、ボソボソしている。
11層　壁溝埋土

SK58

1層　黒褐色（10YR2/2）炭化物層、しまりなし、焼土を微量含む。
2層　暗褐色（10YR3/4）しまりやや弱・炭化物少量含む。
3層　黄褐色（10YR5/6）粘質土、しまりあり。

0　2m

第84図　SI57第16号竪穴住居跡・SK58第27号土坑



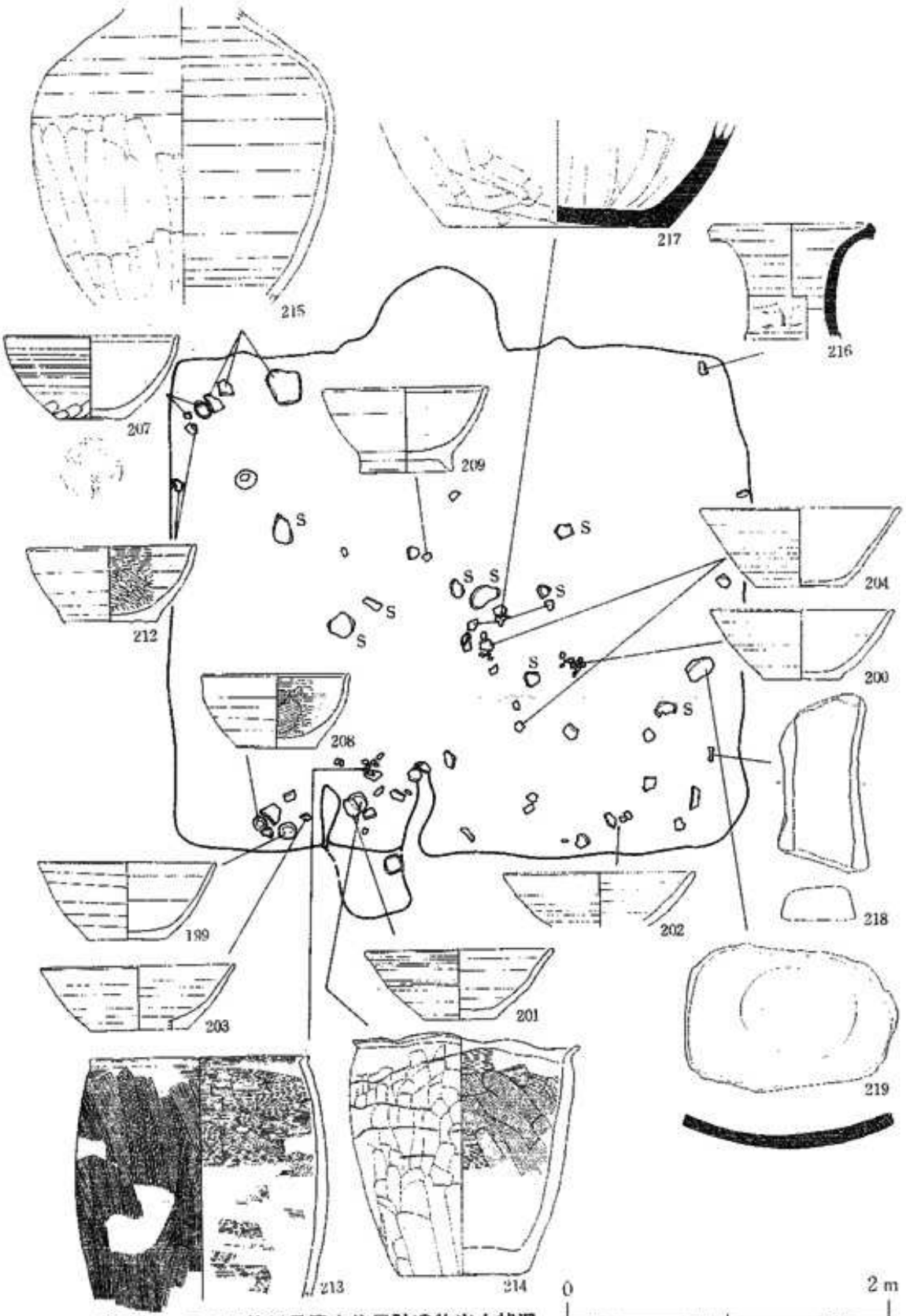
1層　暗褐色（7.5YR3/4）しまりなくボソボソしている。焼土・炭化物粒子の集合体。
2層　暗褐色（7.5YR3/3）しまりなくボソボソしている。炭化物を多量に、焼土微粒の集合体。
3層　褐　色（7.5YR4/4）粘質土、しまり・粘性弱、天井部の崩落土か。
4層　黒褐色（10YR3/2）しまり・粘性やや弱、ボソボソしている。焼土ブロックを多量に含む。
5層　黄褐色（10YR5/6）粘質土、しまりやや弱。
6層　赤褐色（5YR4/8）焼土ブロック。
7層　暗赤褐色（5YR3/3）しまりは3・4層よりややあり、焼土をしちふり状に少量、炭化物を微量含む。
8層　壁溝天井部。
9層　柱部構成土、本文参照。

0　2m

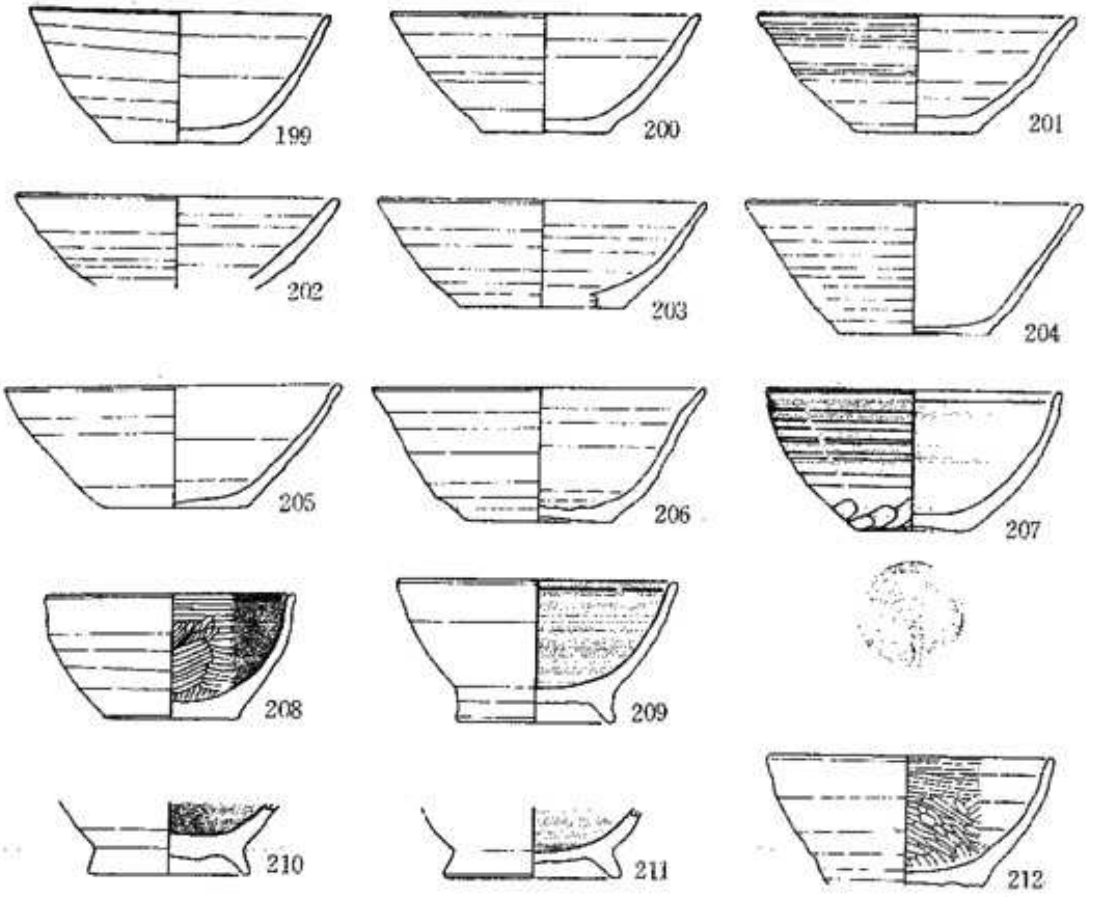
第85図　S I 57第16号竪穴住居跡カマド

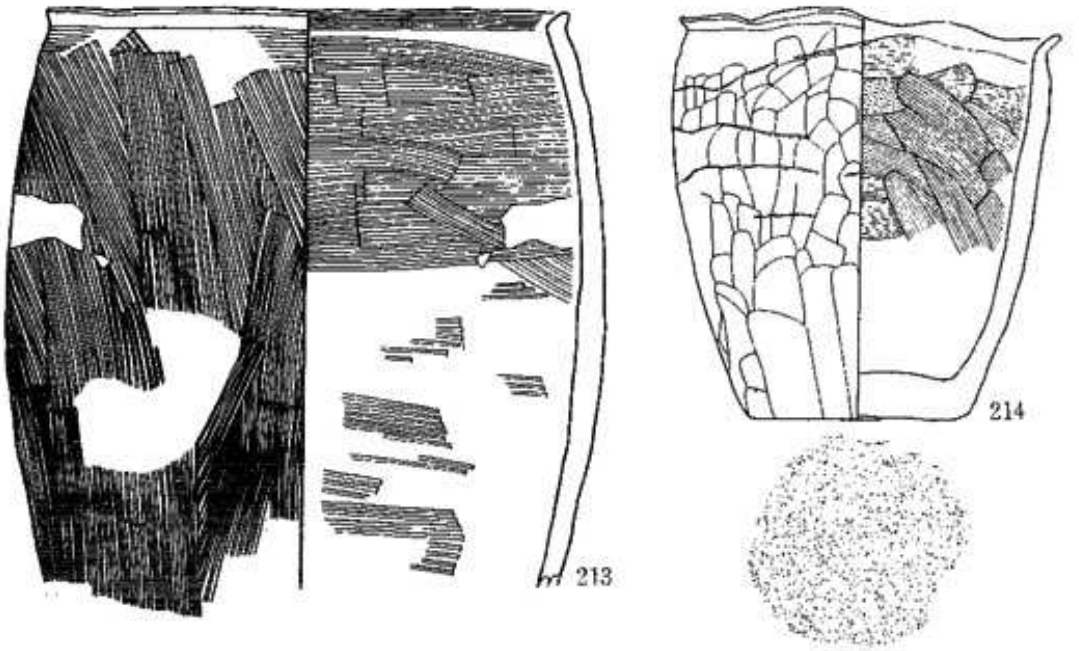
われる堆積を示している。黄褐色粘土は地山土と考えられ、この土の供給元をS I 57の南隣のS I 64を仮定すれば、二者については、構築、廃棄の関係が明らかとなる。S I 57が廃棄され褐色（2層）を主とする土が流入あるいは投入される。この時点でS I 64が構築され、多量に生じた排土である地山土を運んだままのS I 57に捨てる。このように考えると埋土の解釈が成立するのではないか。

床面は平坦で堅く締まっている。4隅には、深さ35～40cmの柱穴を持つ。柱穴を連絡するように壁溝が巡るが、カマド部分は途切れる。この壁溝のあり方は、S I 48と同じである。幅15～30cmの溝は掘り方の示すものではないと考える。壁の直下に板材を直接打ち込み、廃棄と同

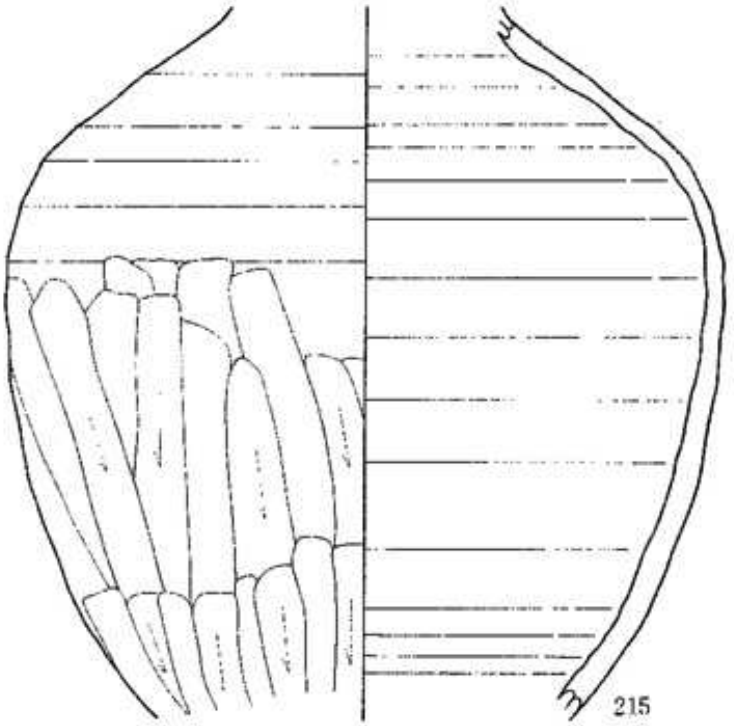


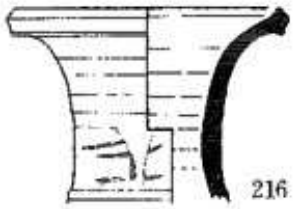
第86図　ＳＩ57第16号竪穴住居跡遺物出土状況

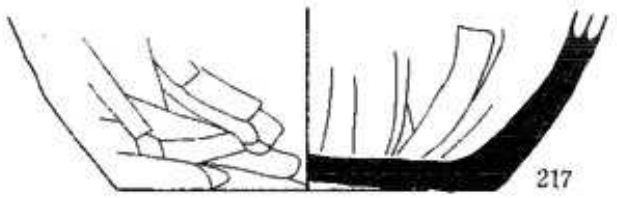


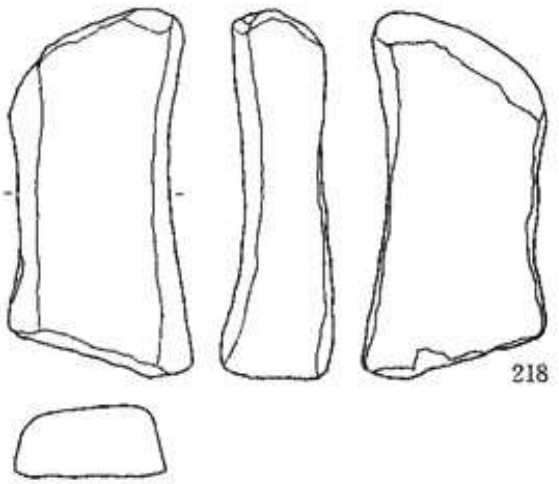


第87図　ＳＩ57第16号竪穴住居跡出土遺物(1)

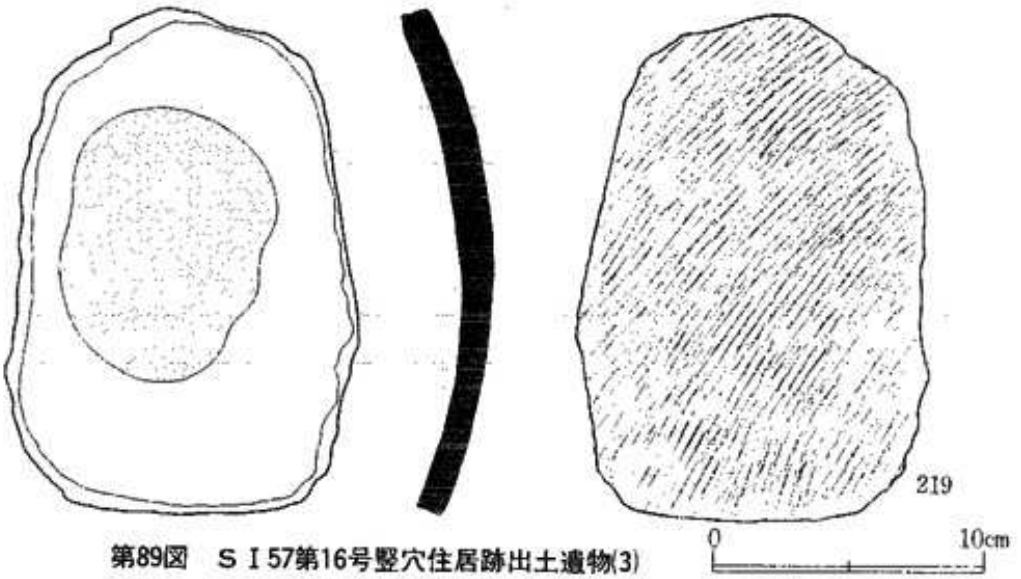








第88図　ＳＩ57第16号竪穴住居跡出土遺物(2)



第89図　ＳＩ57第16号竪穴住居跡出土遺物(3)

時に材を引き抜くことにより、板幅以上の土砂が持ち上げられる。これが完掘時において掘り方を異するがごとく残るものである。

カマドは南壁西寄りに設置されている。遺存状態は良好である。煙道部は、壁を45cm程溝状に掘り進む。煙出し部の長さ25cm、幅40cm分を残して、煙道を黄褐色粘土を主体にし、黒褐色シルト質土を混ぜた土で架構させる。いわば半地下式の煙道部の完成である。楕円形を呈する煙出し部は、その内壁が火熱で赤変著しい。袖部は粘土を主用材としているが、粘性はあまり強くなく、砂質土を多く混ぜているようである。右袖には粘土の上に切石をのせて補強している。石は火熱でもろくなっており、一部は燃焼部に落下していた。支脚は燃焼部中央やや右袖寄りに位置している。この位置での燃焼部内法幅は40cmである。

遺物は、カマド両側、北西部の床面上を中心にまとまって出土している。遺物には、土師器坏・高台付坏・甕・甑、須恵器甕・長頸瓶・砥石、および転用硯がある。199～206は土師器坏で、底部の遺存するものは回転糸切り痕を留める。201は支脚に転用されたもので、206はカマド内出土である。207は内外面黒色処理された小型の坏である。内面は丁寧にミガキされ、単位を読み取れない。底部は回転糸切りの後、体下半部に手持ヘラケズリ調整を加えている。この後、体部全体にミガキを行っている。208～212は内面を黒色処理した坏で、208を除き高台が付され、法量も近似するものと思われる。底部には回転糸切り痕を留めているが、210、211は高台貼り付け後のナデにより切り離しが不明となっている。209～211は二次火熱を受け、部分的に黒色がとんでいる。213の甕はカマド焚口部から出土したもので、内外面にハケメが認められ、外面にのみ煤状炭化物が付着している。214はカマドの支脚に転用された甕である。底部はいわゆる砂底となっている。胎土には径２～５mmの小石等を多く含んでいるが、焼成は大変良好で

ある。外面にはケズリ、内面はヘラナデが認められる。215は床面北西隅から出土した土師器の壺になるものと思われる。最大径を胴部中央よりやや上にもちロクロ成形されている。外面には縦位のケズリが加わる。色調は浅黄橙色を呈している。217は須恵器長頸壺である。北東隅の埋土上位から出土している。頸部に低い凸帯が巡り、刻線が認められる。横画3本を引いた後、1本の縦画を引いている。倒立させて刻書しているように観察できる。内面にはゴマ塩状の自然釉がかかっている。218は須恵器甕底部である。底面はナデられている。219は床面南東部から出土した砥石である。石英斑岩を素材とし、4面を砥面としている。使用面は1側面を除いて凹状を呈する。完形で408g を量る。220は須恵器甕を転用した硯である。甕胴部を再整形して長さ18.7cm、最大幅13cmの楕円形に仕上げている。内面を硯面として、全面に墨が残る。中央のスクリーントーン部分が顕著に擦られ、アテ具痕が部分的に消されている。外面にはタタキ目が認められるが、中央の凸部分は使用のためか摩耗している。

SI 64第17号竪穴住居跡（第90図～第94図、図版29・図版41）

MA43に位置し、SI 66の中に入り込むように構築されている。規模は南北長が西壁で2m、東壁で2.4m、東西長が3.7mの東西に長いやや歪んだ長方形を呈している。確認面からの深さは15～20cmである。面積は8.1㎡、主軸方位はN－10°－Wを示す。床面はあまり平坦と言えず、さほど堅く締まっていない。柱穴と考えられるピットは北壁沿いにいくつか確認できたが、組み合わせることはできなかった。径15～20cm、深さは10cm前後である。

カマドは南壁東寄りで確認した。奥壁を僅かに弧状に掘り進み、この部分が火熱を受けていることからカマドと認定したものである。袖や支脚と思われるものは一切検出できなかった。カマド東側と前面に径50～60cmの円形の土坑が掘り込まれているが、これらはカマドに伴う施設と考えることができる。なお燃焼部中央に径15cmのピットが存在するが、これらは明らかに住居跡より新しい時期の掘り込みである。

遺物は土師器を中心に多量に出土している。ただ根の撹乱等により、重複するSI 66出土遺物と混同している可能性は高い。図示した遺物は、土師器坏・高台付坏・甕である。220～227は坏で、220・227が埋土出土、他は床面あるいは床面直上出土である。221を除き底部には回転糸切り痕を留める。223～225は二次火熱を受けもろくなっている。228・229は内面に黒色処理を施している高台付坏である。229は底部に回転糸切り痕を残す。228は胎土に細砂粒を多く含んでいる。231は埋土出土の甕で、ロクロを使用している。外面をケズリ後、上半部をナデ、内面もナデで仕上げている。236～240はロクロ使用で236を除き、胴下半部にタタキ目の認められるものである。いずれも床面出土である。241は断面が三角状を呈する河原石を素材とする砥石で、図示面を砥面とし、側縁には敲打による潰れが認められる。

他の遺物では、土師器甕、フイゴの羽口、軽石などが総て埋土中ではあるが出土している。

ＳＩ 66第18号竪穴住居跡（第90図～第94図、図版29・図版41・図版42）

ＭＡ42・ＭＢ43に位置し、ＳＩ 57・64およびＳＤ47に切られＳＩ 48を切っている。ＳＩ 32・ＳＫ69との関係は不明である。壁は、西壁と南壁のごく一部を確認するに留まり、壁高は西側で10～12cmである。平面形、規模は明らかではないが、残存部分から一辺4.4mを越すものであろう。壁溝はなく、柱穴も不明である。

カマドは南壁西寄りに位置している。火床面、袖の一部および支脚が遺存していた。火床面は径45cmのピットに一部切られているが、長さ55cm、幅45cmの平坦で堅い面を形成している。他のカマドと同様に掘り方を伴わない形態で、火熱で火床面下10cmまで土色が変化していた。袖部は左袖の一部が残っていた。地山を掘り残した左壁を袖としているものである。火熱を受け袖内壁が赤変していた。支脚は火床面中央より南側に位置している。支脚の直下部分だけが、火熱を受けた度合がやや低くなっていることから、原位置を保っていたことが分かる。完形で下部に１対の逆Ｖ字形の切り込みが入る。切り込みの位置は、焚口と煙出しを結ぶ軸線上をまたぐようになっている。

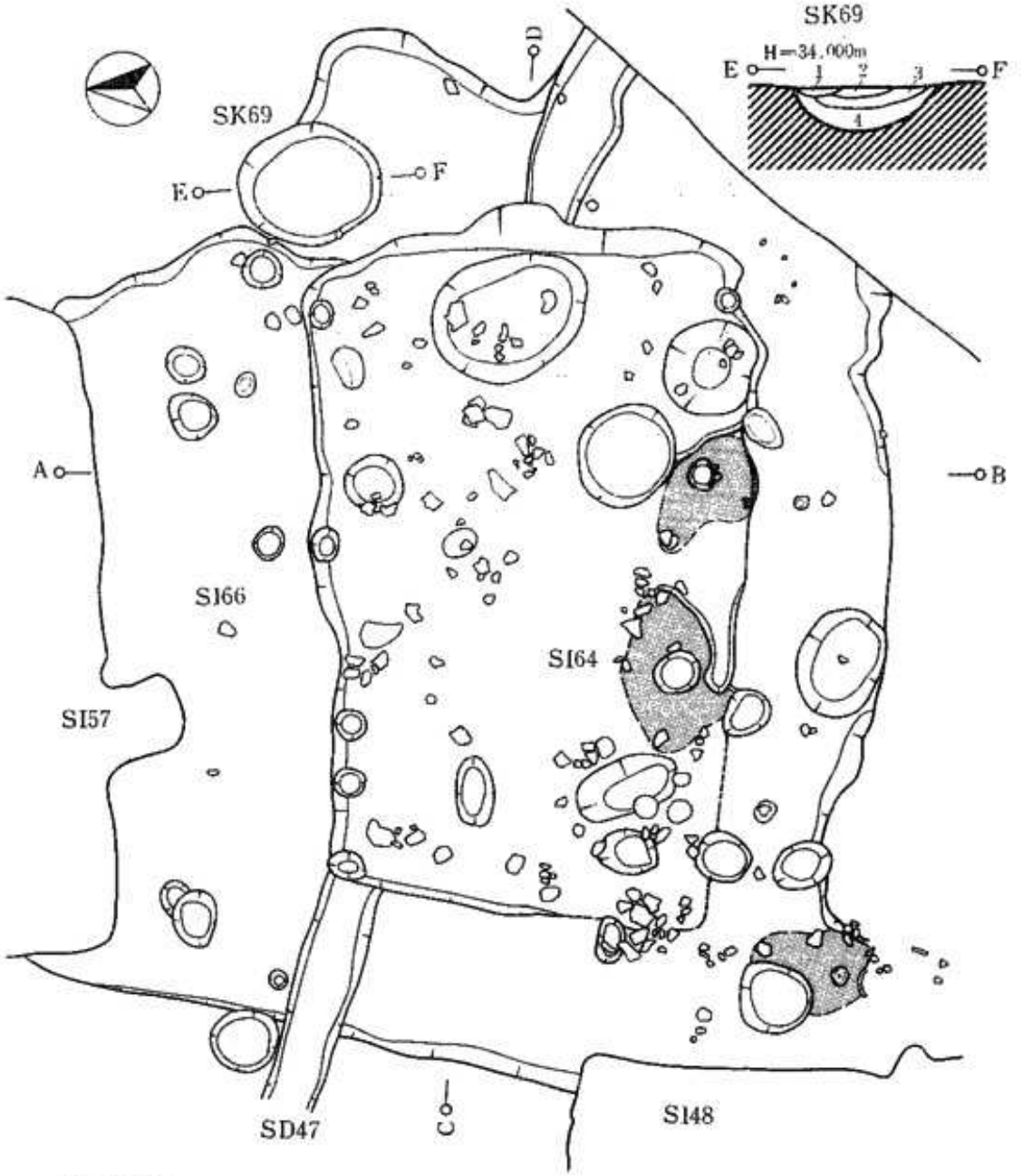
遺物はカマド周辺から出土している。232は床面出土、233はカマド内出土の土師器坏で、底部に回転糸切り痕を留める。２点とも二次火熱を受けている。234は高台付皿である。底部の切り離しは不明であるが、菊花状に削り出しを行ってから高台を貼り付けている。235は土製支脚で高さ12.9～13.3cm、上部径９cm、下部径11.6cmを測る。上部天井には径2.5cm～3cmの孔がある。この部分は特に火熱を受けもろくなっていることから、焼成前に意図的に穿ったものか、使用に伴いあいたものなのかについては不明である。

（２）掘立柱建物跡

ＳＢ73第６号掘立柱建物跡（第95図）

遺構は、後に建物の西面となった溝を確認したことから始まる。溝は幅15～20cm、深さ５～10cmでＰ１からＰ３をつなぐ長さ4.5mのものである。これが溝、柱列あるいは掘立柱建物の一部である可能性が考えられるため、柱筋の精査を行った。この結果、南面の柱穴は確認できなかったものの、北部遺構群にみられるＳＢ78・ＳＢ81と同形態の建物であることが想定できるに至ったものである。

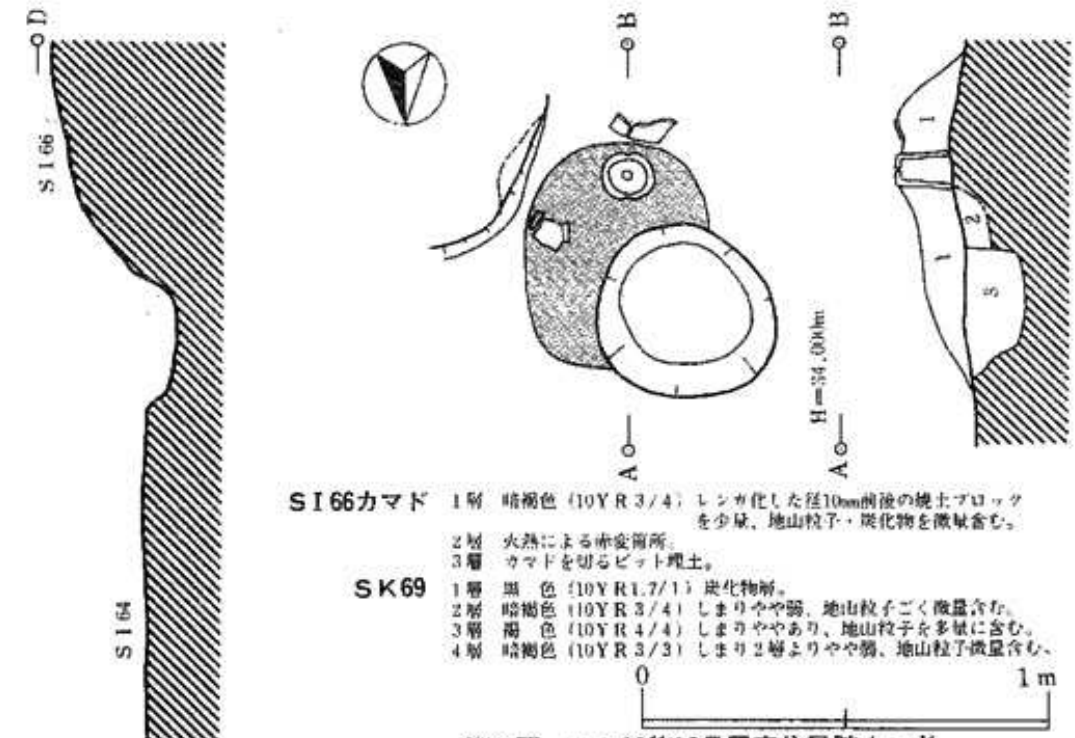
北面は２間で柱間距離6.9m、西面はＰ１からＰ５で完結するものであれば、柱間距離6.7mとなり、東西方向にやや長くなる。東面は、Ｐ６とＰ７の間がＳＩ 57や根の攪乱により、Ｐ６以南もＳＩ48構築により消滅したものと思われる。各柱穴は径25～35cm、確認面からの深さは、５・８・９が12～14cm、Ｐ７が19cm、Ｐ１・２・６が24～28cm、Ｐ３・４が30～32cmを測る。遺物は出土しなかった。



1層　暗褐色（7.5YR 3/3）しまりやや弱、焼土少量含む。
2層　褐　色（7.5YR 4/4）しまりやや弱、焼土多量、炭化物少量含む。
3層　暗褐色（10YR 3/4）しまりやや弱、橙土・地山粒子をしもふり状に多量含む。

0　2m

第90図　ＳＩ64第17号・ＳＩ66第18号竪穴住居跡



第91図　ＳＩ66第18号竪穴住居跡カマド

ＳＢ80第７号掘立柱建物跡（第96図）

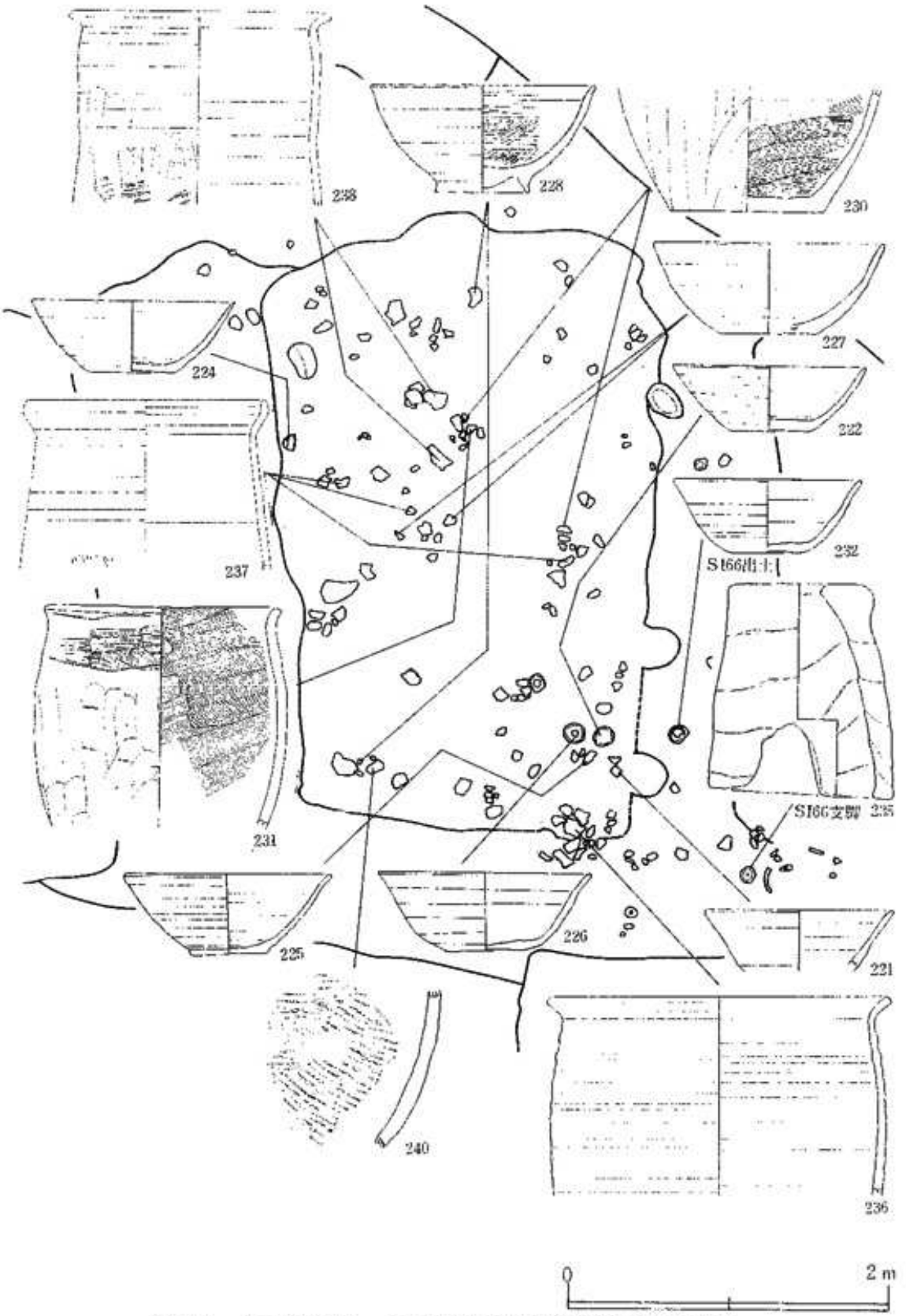
遺構は、ＳＩ 48の東、西壁をまたぐような形で検出された。ＳＩ 48内にＳＢ80の溝が存在することから重複していることは明らかであるが、新旧関係は不明である。西面は２間で、柱間距離4.8ｍ、東面も西面同様２間となるであろうが、隅柱部分は調査区外である。直交する北面は１間で6.4ｍの東西棟である。柱穴は径30～45cmの円形を呈し、確認面から深さはＰ３で17cm、Ｐ１・２・５で25～29cm、Ｐ４で35cmを測る。南面を除き柱穴間に部分的ではあるが溝をもつ。Ｐ１－Ｐ２間、Ｐ４以南は明瞭で、幅15～20cm、深さ８～13cmである。Ｐ２－Ｐ３間、Ｐ１－Ｐ５間にも痕跡程度の溝を確認している。

建物南面付近には重複するＳＩ 48より新しいＳＮ71とした焼土遺構や、住居跡床面より一段高い位置での堅い焼面が存在する。仮にこれらがこのＳＢ80建物に伴うものであるとすれば、ＳＩ 48より後出の遺構となるが、明らかにできなかった。遺物は出土しなかった。

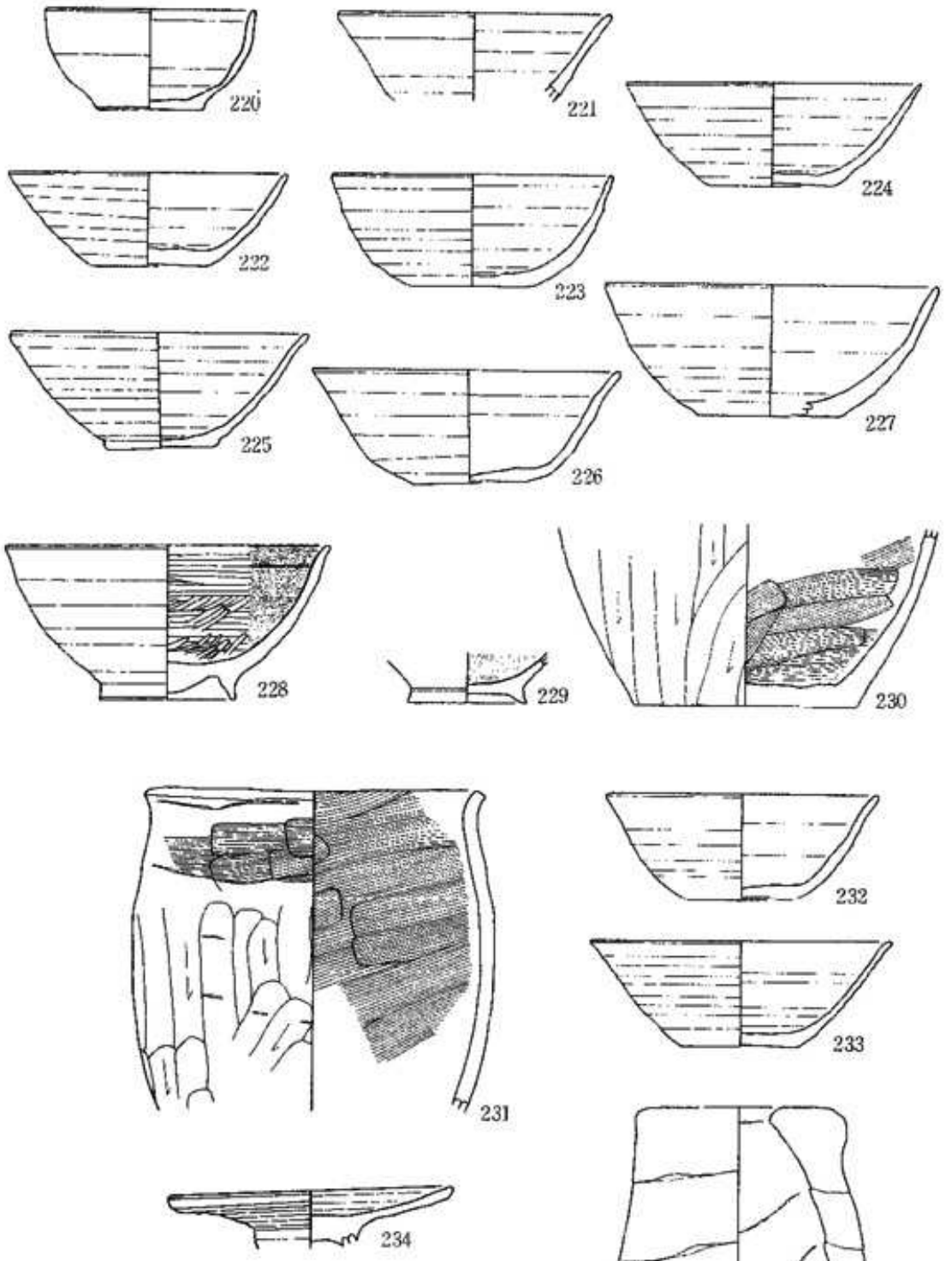
（３）土坑

ＳＫ41第26号土坑（第97図・第101図、図版42）

遺構群北東部、ＬＪ 44で検出した。ＳＩ 32の東方、ＳＤ55の南方に位置する。長径95cm、短径78cmで北東－南西方向にやや長い円形を呈している。深さは僅か８～10cmである。

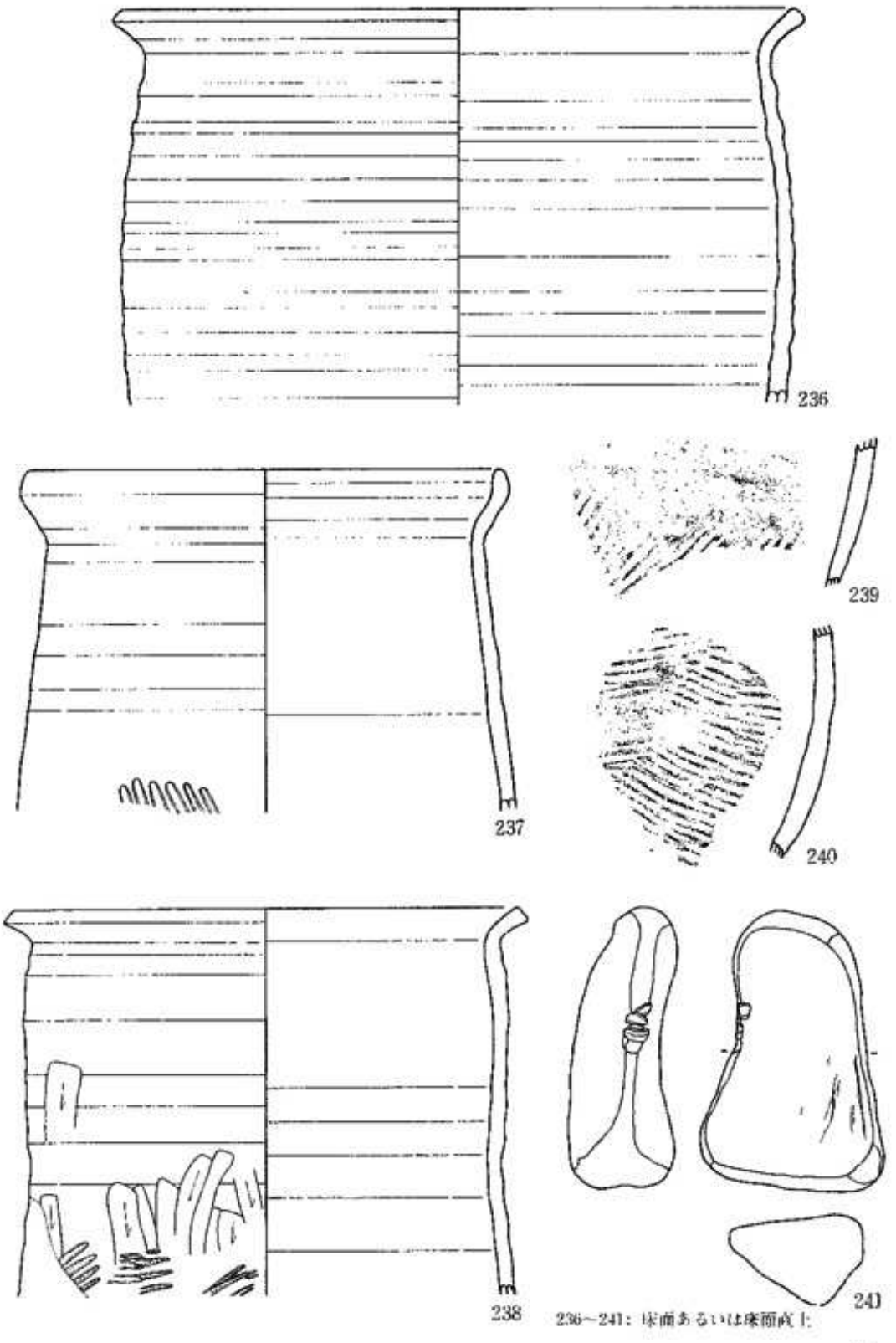


第92図　ＳＩ64第17号・ＳＩ65第18号竪穴住居跡遺物出土状況

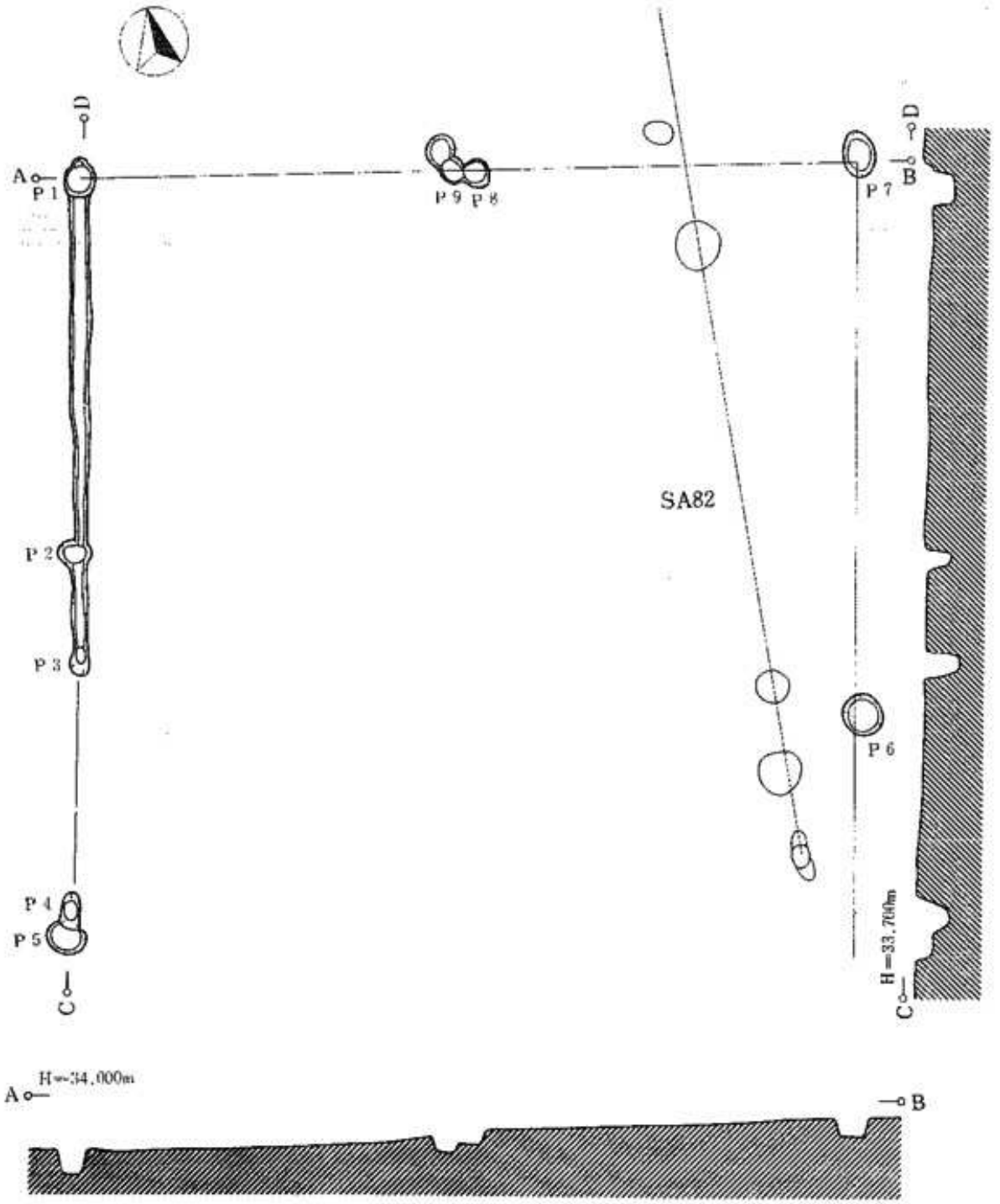


S164　出土　221～226、228；床面あるいは床面直上
　　220、227、229、230；埋土
S166　出土　232；床面
　　233；カマド
　　234；埋土
　　235；カマド支脚

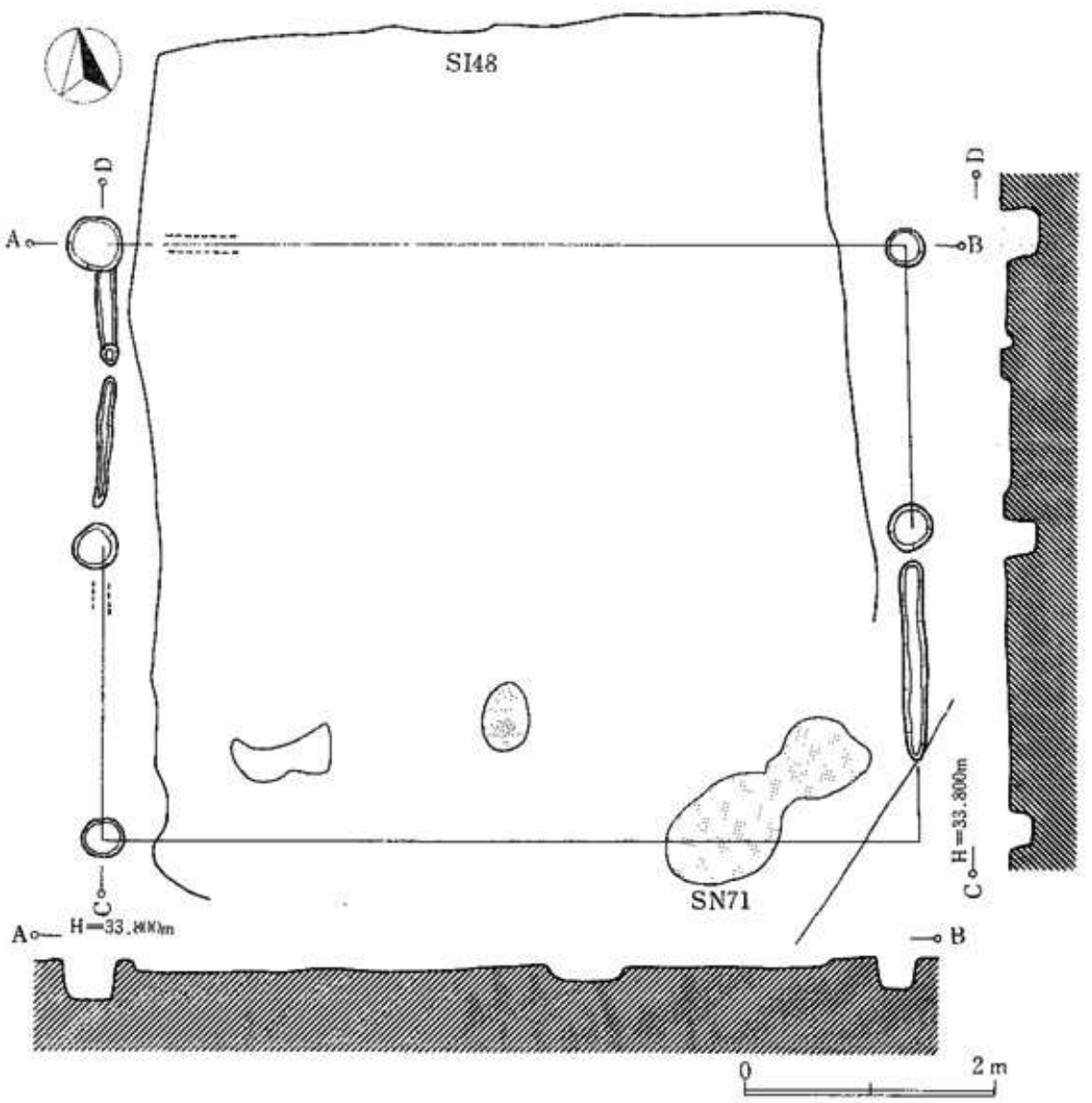
第93図　ＳＩ64第17号・ＳＩ66第18号竪穴住居跡出土遺物(1)



第94図　ＳＩ66第18号竪穴住居跡出土遺物(2)



第95図　ＳＢ73第６号掘立柱建物跡　0　2m



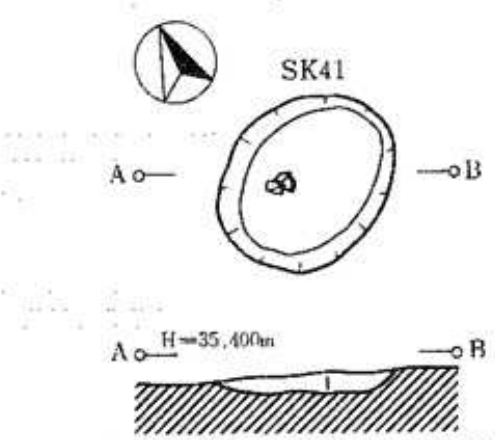
第96図　ＳＢ80第７号掘立柱建物跡

遺物は土師器坏が出土している。242は埋土出土で、底部に回転糸切り痕を留める。二次火熱を受け部分的に剥落しているが、焼成は良好である。他に内面黒色処理を施した坏も出土している。

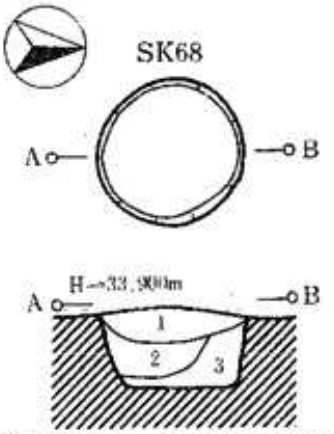
ＳＫ58第27号土坑（第84図、図版29）

ＭＡ44に位置し、ＳＩ 57北壁中央部を切り込んで構築されている。径75cmの円形を呈し、深さは35cmである。

遺物は土師器片が少量出土している。



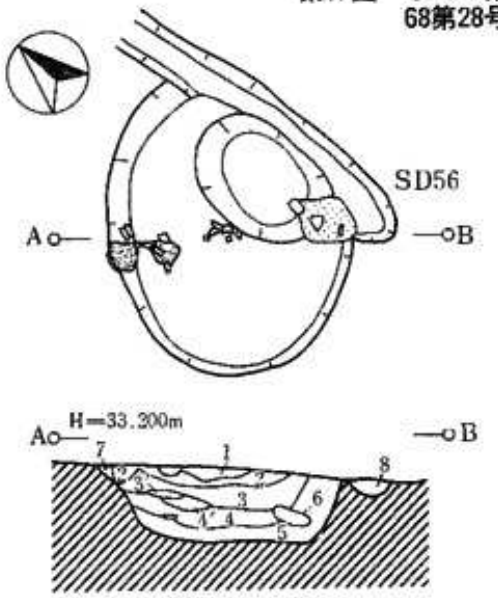
1層　暗褐色（10YR3/3）粘性ややあり、炭化物少量含む



1層　褐　色（10YR4/4）しまり・粘性あり、地山粘土3～10mmロック多量に含む
2層　暗褐色（10YR3/4）しまりやや弱、地山粒子少量含む
3層　黄褐色（10YR5/6）粘質土、しまりやや弱

0　2m

第97図　ＳＫ41第26号・ＳＫ68第28号土坑



1層　褐　色（7.5YR4/4）焼土少量、炭化物微量含む。
2層　赤褐色（5YR4/6）焼土層。
3層　褐　色（7.5YR4/6）地山粒子少量、炭化物微量含む。
4層　にぶい赤褐色（5YR4/4）焼土層。
5層　褐　色（10YR4/4）炭化物・地山粒子ごく微量含む。
6層　暗褐色（10YR3/4）炭化物層。
7層　暗褐色（10YR3/3）炭化物微量含む。
8層　ＳＤ56埋土。

0　2m

第98図　ＳＫ59第30号土坑

ＳＫ68第28号土坑（第97図）

ＭＢ43で検出した。ＳＩ 48の北方に位置している。径70cmの円形を呈している。円筒状に掘り込まれ、その深さは40cmである。遺物は出土しなかった。

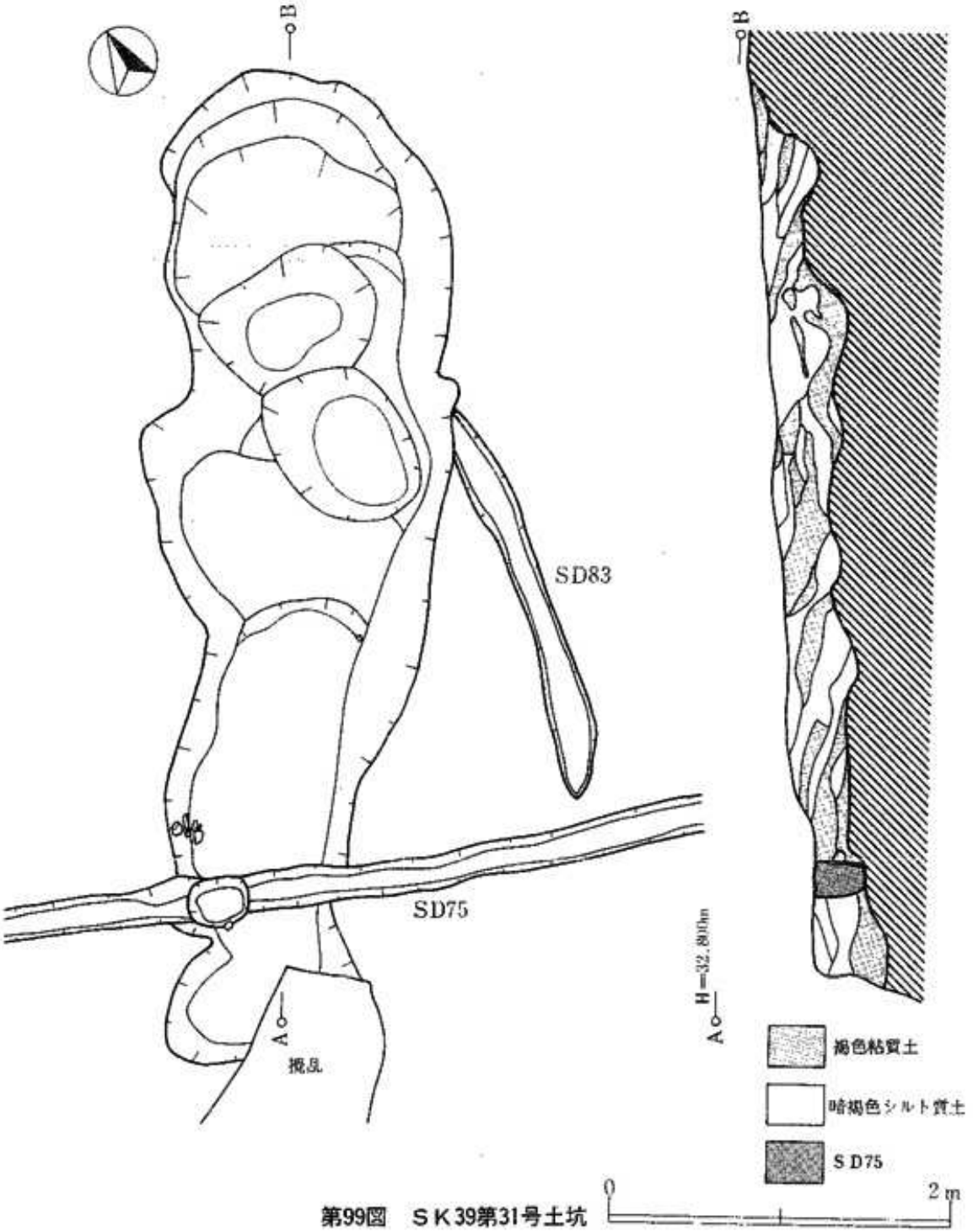
ＳＫ69第29号土坑（第90図）

ＭＡ43で検出した。ＳＩ 64の東隣に位置しているが、重複の考えられるＳＩ 66との関係は明らかではない。長径78cm、短径66cmの円形を呈し、深さは中央部が25cmである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ59第30号土坑（第98図、図版30）

遺構群の西端を画するＳＤ69南端部で検出した。両者の新旧関係は不明である。規模は、長径1.45m、短径1.2m北東一南西方向にやや長い円形を呈する。深さは44cmを測る。埋土には二枚の焼土層（２、４層）が入る。間層（３層）には焼土を含まないことから、ＳＫ59が廃棄された後の二時期にわたって、焼土が投げ込まれたものと考えることができる。

遺物は土師器坏、甕が出土している。甕はいずれも非ロクロのもので、内外面ハケメ、外面



第99図　ＳＫ39第31号土坑

ハケメ、内面ナデを施したものも含まれている。

ＳＫ39第31号土坑（第99図、図版30）

ＳＤ55・56で画された遺構群から逸脱するとみられる土坑である。調査区南端、ＭＦ39・40・ＭＦ39・40で検出した。東側の壁でＳＤ83を切り、南側をＳＤ75に切られている。規模は長

さ5.8m、幅1.1～1.7mの南北方向に長い不整長円形を呈している。深さは20～46cmで、底面は凸凹著しい。埋土を分層すると35層になる。これを大別してみると褐色粘質土と暗褐色シルト質土にはっきり分けられる。これが互層に入っているようである。堆積状況は、南側から順に北に向って埋まっていったように観察できる。

遺物は土師器甕が少量埋土上位から出土している。

（4）焼土遺構

ＳＮ60第2号焼土遺構（第100図・第101図、図版30）

遺構群北東隅、ＬＩ45で検出した。ＳＤ55東端南側に位置する。規模は径60～70cmの焼土の広がりで、地山面への掘り込みは認められない。この北側と南側にも径30～40cmの焼土が地山面上に分布しており、さらに東側（調査区外）に展開していく遺構の一部である可能性がある。

北側に延びるＳＤ55とこのＳＮ66との係りにも注目したい。ＳＤ55は概ね、東西方向に計画されているが、ＳＮ60の手前で方向をやや北側に転じ、ＳＮ60の北側を弧を描くように東側へ続いていく。これを平面的にみると、ＳＤ55が構築される時点で、既にＳＮ60が機能しており、この遺構が枠内に入るように意図的に溝を曲げたものとみることができるかもしれない。

また遺構の北東部には長さ1.25m、幅6～8cm、深さ10～12cmの細長い溝が存在する。これがＳＮ60に伴うものかＳＤ55に伴うものなのかについては明らかではない。

遺物は、土師器坏・甕・鍋がある。244は丸底を呈し口径22.8cmの小ぶりな鍋である。ロクロを使用しており、外面にはケズリが残る。推定器高は10.9cmである。245は非ロクロの甕で、外面頸部には成形時の指頭痕を留める。外面ハケメ、内面ヘラナデが認められる。246は内外面ともハケメの施されている甕である。

ＳＮ71第3号焼土遺構（第81図・第101図、図版42）

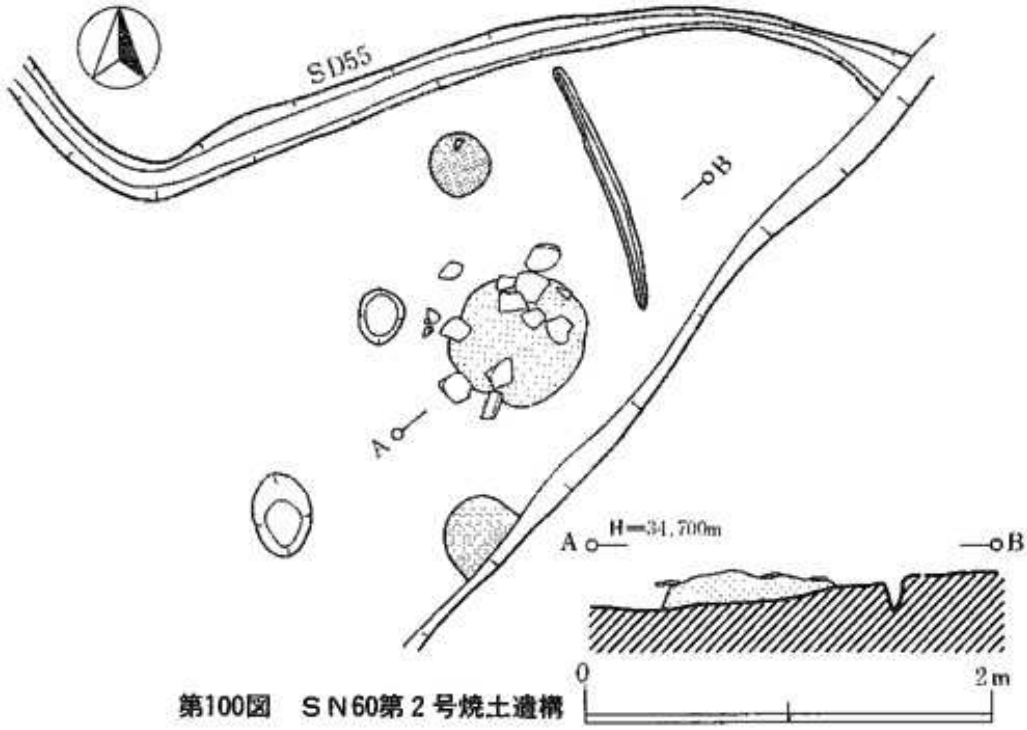
ＭＢ41・42で検出した。ＳＩ48の南東部に位置し、これより新しい時期のものである。規模は長さ1.7m、幅0.6～0.8mの北東－南西方向に向い長い形状を示す。東側は調査区外に延びる可能性がある。遺構底面はＳＩ48確認面であり、これを掘り込んではいない。

遺物は土師器坏・甕・鍋が出土している。243は底部に静止糸切りを留める坏である。内面底部は平坦ではなく、円錐状に窪んでいる。247はロクロ使用の鍋である。外面にはケズリを残す。

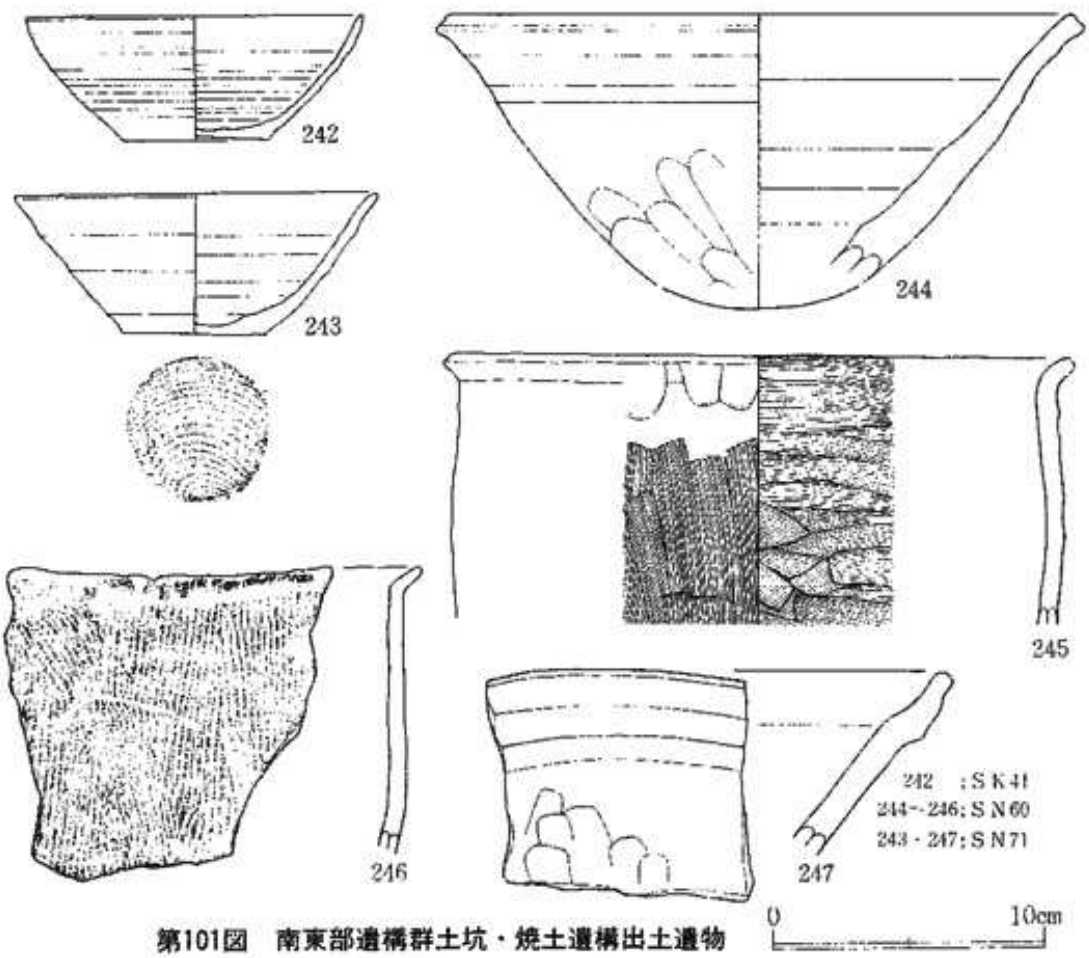
（6）溝跡

ＳＤ55第3号溝跡

遺構群の北端を画するおおよそ東西方向に延びる溝である。西端には、径20cm、深さ33cmのピットを交点として南に折れＳＤ56となる。東端は調査区外に延び、確認できる長さは約24mである。幅は20～25cmでほぼ一定する。深さは5～10cm、西側で10～18cmを測る。溝底面には数ケ所で深さ10～15cmのピットが掘り込まれているが、規則性は認められない。底面での高低



第100図　ＳＮ60第２号焼土遺構



第101図　南東部遺構群土坑・焼土遺構出土遺物

第102図　溝跡出土遺物

差は、東を0とすると西で14cm下がる。

遺物は土師器細片が少量出土している。

S D 56第4号溝跡（第79図）

遺構群の西端を画するおおよそ南北方向に延びる溝である。S D 47・S K 59と重複しているがいずれも新旧関係を明らかにできなかった。北端は約115°の角度で東に折れ、S D 55となる。南端はS K 59と重複する箇所まで確認でき、その長さは約20mである。幅はS D 55と同じく20～25cmでほぼ一定する。深さは5～17cmを測る。底面での高低差は北を0として、南で僅か22cm下がるだけである。

遺物は土師器が少量出土している。

S D 47第5号溝跡（第79・102図、図版42）

南東部・南西部両遺構群を東西に横断する形で検出した溝である。基本的には両遺構群より新しい時期のものである。これにほぼ直交するS D 37には切られている。S D 52・56新旧関係は不明である。東端は調査区外に延び、西端は開田による削平で消滅している。確認できる長さは22.5m、幅は東側で30～40cm、中央～西側で10～20cm、深さは15～20cmである。

遺物は土師器が出土している。248は高台付坏の底部破片である。部分的に貼り付けた高台部が剝落していることで、この土器の製作工程が分かる。①底部を回転糸切り技法で切り離す。②底部周縁を菊花状削る。これは後に高台を貼る際、密着性をもたせるためと考えられる。③底部に新たに少量の粘土を置き、ロクロを利用して高台をつまみ出す。この結果①②の痕跡は粘土で覆われ見えなくなる。その他には甕も出土している。

S D 52第6号溝跡（第11・102図）

南東部遺構群を南北に縦断する溝である。北端はS I 32埋土を切って始まり、S I 57・66・48をそれぞれ切り込み、M E 38まで断続的ではあるが、全長約30mを測るものである。途中でS D 47・74と交差しているが、新旧関係は不明である。幅は20～35cm、深さは10cm前後である。

遺物は土師器坏、甕、鍋が出土している。249はロクロ使用の鍋で、外面にケズリ痕跡を留める。甕では非ロクロで内外面ハケメの施されているものも含まれている。

S D 74第7号溝跡（第11図）

M D 39で検出した東西方向の溝である。S D 52と直交するように重複しているが新旧関係は明らかではない。幅15～20cm、深さ5～7cmで現存長は2.9mである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ75第８号溝跡（第11図）

台地南縁に沿うようにおよそ東西方向に延びる溝である。ＳＤ37・ＳＫ39と重複しており、前者に切られ、後者を切っているものである。全長は13.6m、幅は20～25cm、深さは10～20cmである。底面での高低差は東を０とすると西で65cm下がっている。遺物は出土しなかった。

ＳＤ76第９号溝跡（第11図）

ＳＤ75の南側に位置し、これにほぼ平行している溝である。両者の間隔は約1.3mある。全長は6.8mであるが、東、西ともさらに延びていた可能性がある。幅は15～30cm、深さは東側で４～５cm、西側で10～15cmを測る。底面での高低差は東を０とすると、西で40cm下がる。ＳＤ75と異なり底面が凸凹している。遺物は出土しなかった。

ＳＤ83第10号溝跡（第11図）

ＳＤ83はＳＫ39東側の壁から南に延びるものである。全長で2.3m、直接的と言うより西に開く緩い弧状を呈している。幅は20～25cm、深さは７～８cmで、底面での高低差は北を０として、南で17cm下がる。遺物は出土しなかった。

（７）柱列

ＳＡ72第６号柱列（第79図）

ＳＤ55と同じく、遺構群北端を画すると考えている柱列である。遺構を構成する柱穴は20個近くを数えるが規則性を欠く。径20～25cm、東端の柱穴のみ径40cmである。深さは８～30cmとばらつきがある。柱筋を西に延長すると、ＳＤ55西側の中軸線と合致する。このことから柱列が単独で機能を果たしていた言うより、ある時期にはＳＤ55と合わせて１つの施設を成していたと考えることも可能であろう。柱列自体の長さは16.5m、これをＳＤ55西端まで延長すると約23.5mになる。柱穴内より遺物は出土しなかった。

ＳＡ82第７号柱列（第79図）

遺物はＳＩ 32・57・64・66の西方をおよそ南北方向（Ｎ－４°－Ｅ）に通っている柱列である。第79図のように柱穴10個で完結しているとすれば柱間距離はちょうど10mになる。各柱穴は径15～40cmの円形を呈し、深さは８～27cm、確認面からの南端が柱穴のみ40cmを測る。ＳＡ82の検出位置からみれば北側とＳＤ55あるいはＳＡ72との関連性は強いものと思われる。柱穴内より遺物は出土しなかった。

３．南西部遺構群（図版31）

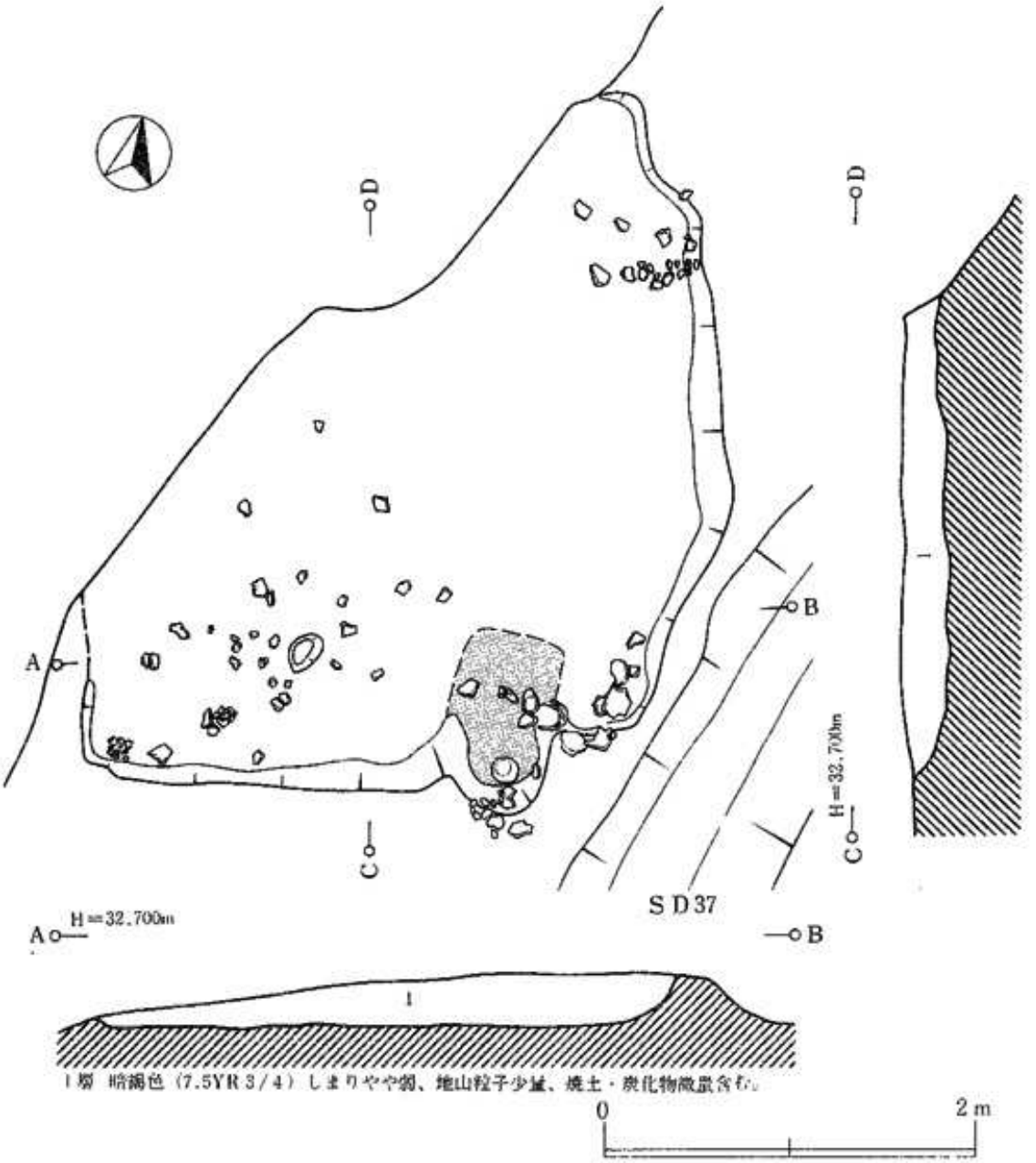
本群は、竪穴住居跡１軒、竪穴状遺構４基、土坑１基で構成される。遺構群を南北に延びるＳＤ37は本群を切っており、さらにこの西方にもＳＤ38が位置している。特に後者と本群の関係は明らかにしたい点であるが、開田による削平で不明と言わざるを得ない。ただし両者の記

述については本群中で行うこととする。本遺構群の特徴は、北部、南東部遺構と比較して、区画施設を有しない点を第１に挙げることができる。しかしながら、南東部遺構群の区画施設であるＳＤ56と本群のＳＸ62・77の配置状況（方向性など）をみると、両群の間に関連性が存在していたことは充分に想定できるところである。

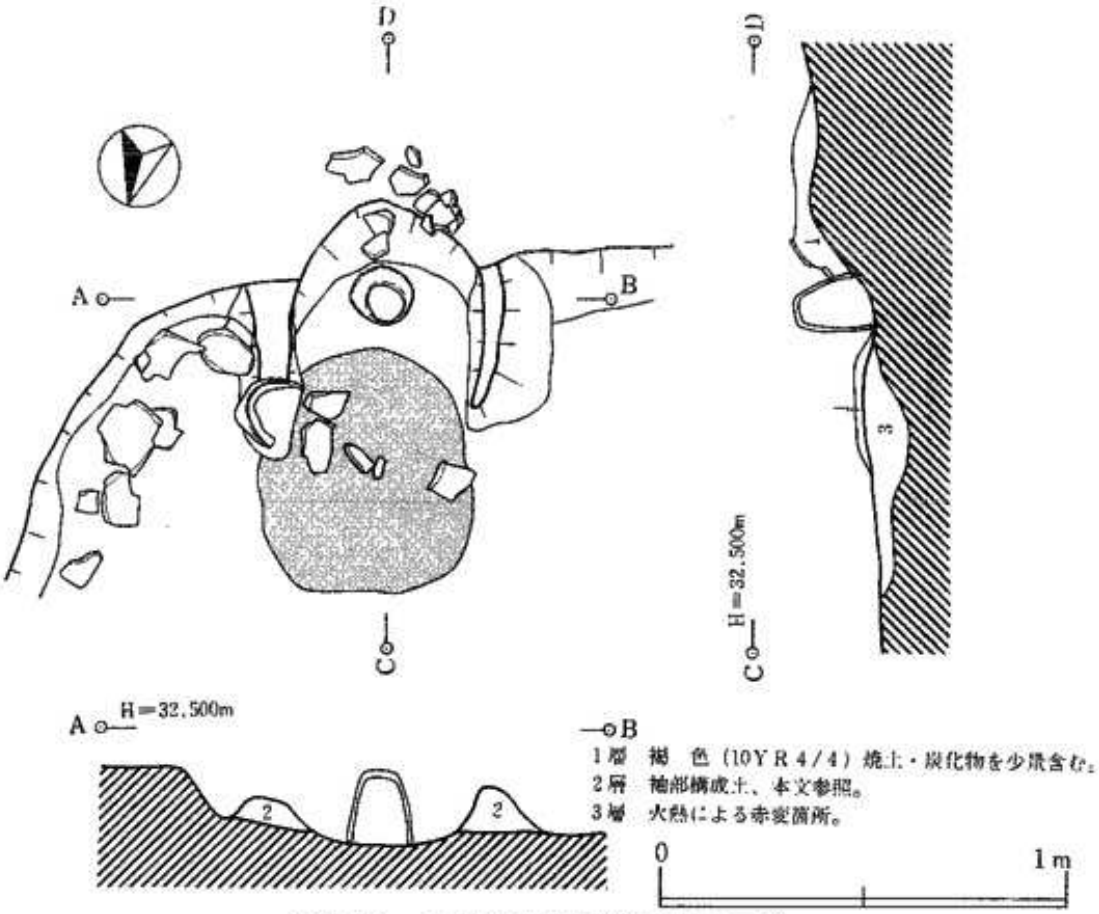
（１）竪穴住居跡

ＳＩ 65第19号竪穴住居跡（第103図～第106図、図版33・図版42）

遺構群南側、ＭＧ42・ＭＨ42で検出した。住居跡北西部は開田工事に伴い、完全に削平され



第103図　ＳＩ65第19号竪穴住居跡・ＳＤ37第11号溝跡

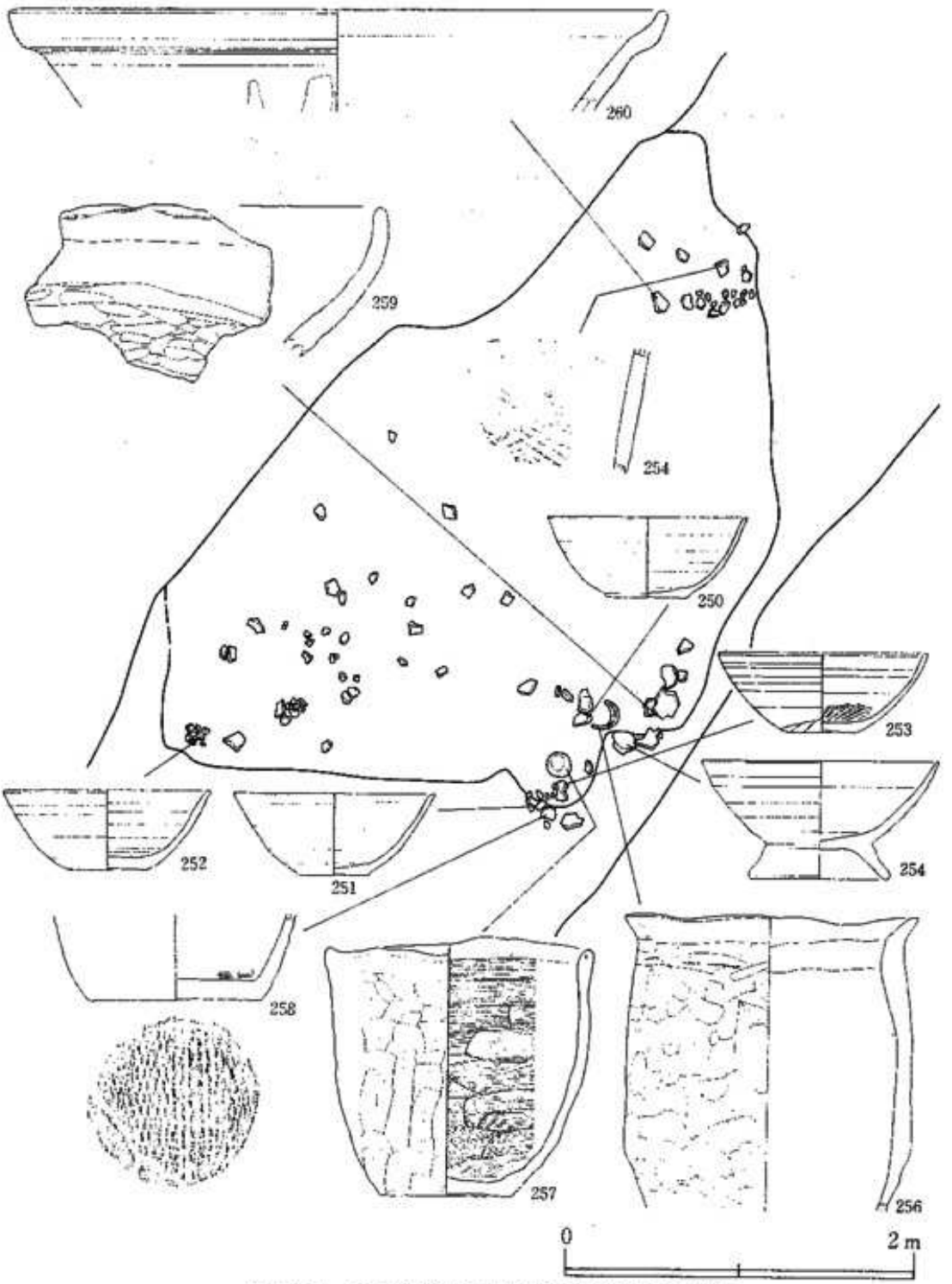


第104図　ＳＩ65第19号竪穴住居跡カマド

ていた。南東側には南北に延びるＳＤ37がこれをかすめるように通っているが重複関係はない。推定される南北長は3.7m、東西長は南壁で3.1m、中央部で3.5mになるものと思われる。深さは東側で25cmである。主軸方位は、Ｎ－9°－Ｗを示す。床面は平坦であるがさほど堅く締っていない。柱穴、壁溝は確認できなかった。

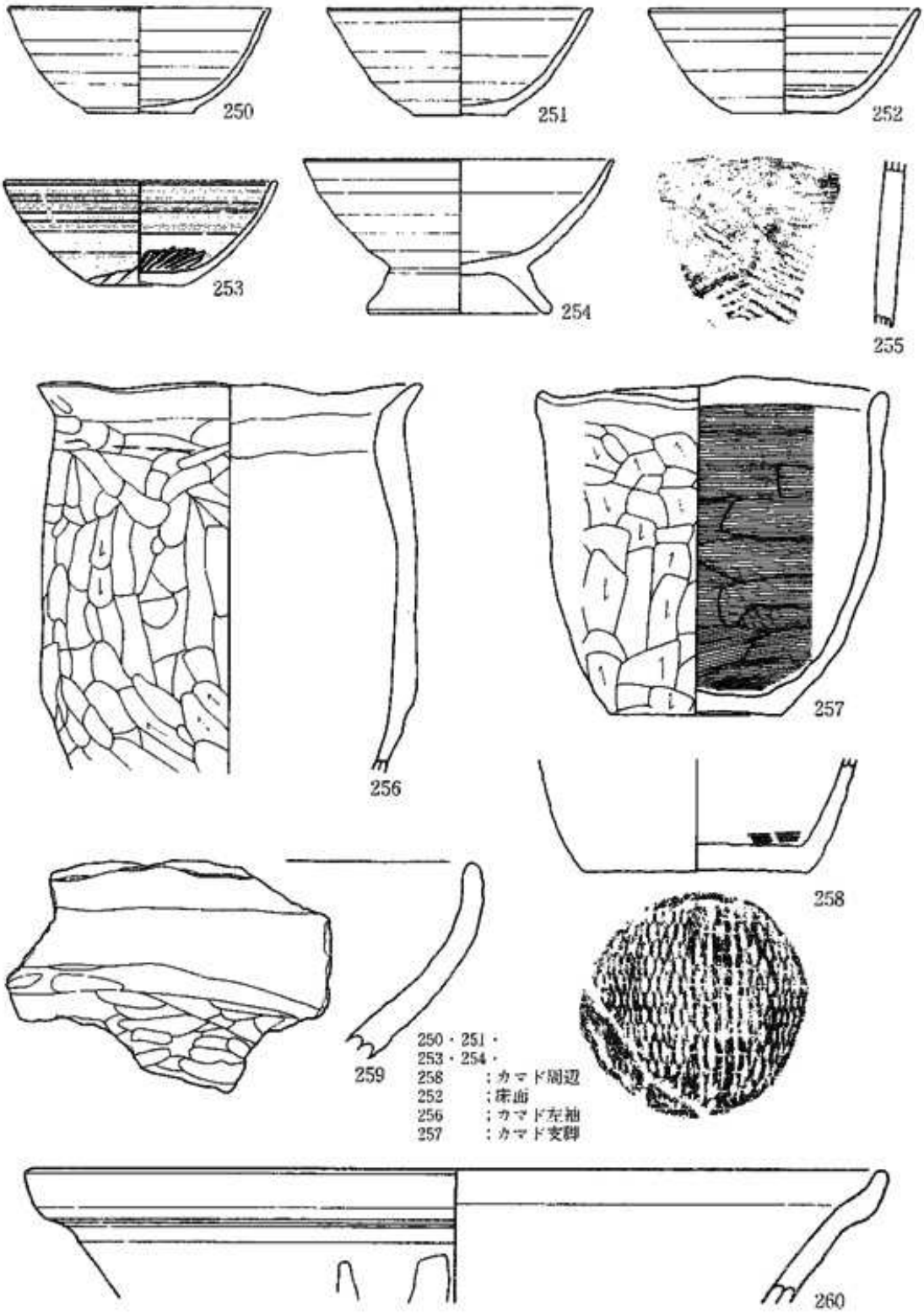
カマドは、南壁東寄りに位置している。壁をいくらかＵ字形に掘り進み煙出しとしている。左袖には土師器の長胴甕を正立状況で埋め込み芯材としている。さらに他の土器片を袖の補強材として用いているようである。右袖は粘土を主に黒褐色シルト質土を混入させた土で構築しており、土器等の使用は認められない。支脚は燃焼部中央に土師器甕を倒立させて転用している。この位置で燃焼部内法幅は40cmである。支脚前庭には堅く平坦な火床面が認められる。床面を掘り込んではいないが、火熱の影響で火床面がヒビ割れを起こし、面下11cmまで土色が変化している。

遺物はカマド周辺住居跡南西部、北東部に集中して検出されたが図示した遺物は、土師器坏、高台付坏・甕・鍋である。250～252は杯で、カマド周辺出土の250・251は二次火熱を受けてい



第105図　ＳＩ65第19号竪穴住居跡遺物出土状況

る。床面南東部出土の252は胎土に細砂粒を多く含んでいるものである。253は内外面黒色処理の施された坏で、カマド内出土である。底部は回転糸切りで切り離した後、体下半を軽く手持ちヘラケズリ調整を行っているようである。黒色処理に先立ち、内面～外面口縁部を丁寧にミ



第106図　ＳＩ65第19号竪穴住居跡出土遺物

ガキし、外面体部はやや雑なミガキがなされている。254はカマド左袖上から出土した高台付坏である。255はいわゆるタタキ目をもつ甕でロクロを用いている。北東部の埋土出土である。256はカマド左袖内に埋められていた甕でロクロを使用しており、底部を欠く。外面胴下半部は斜位方向の荒いケズリ、中央部もケズリであるが、下半を比較すると、ナデツケ様の痕跡である。口縁部から内面は横ナデのようである。支脚として用いられた257の甕も非ロクロ製品である。底部は丁寧にナデられているがすわりはよくない。外面はケズリ、内面はヘラナデが認められる。胎土には径2～7mmの比較的粒径の大きい小石が多く混じるが、焼成は良好である。258は底部に網代痕の残る甕でカマド周辺出土である。内面には部分的にハケメが認められる。259もカマド周辺出土の鍋である。外面には横位のナデツケ様の痕跡が残る。内面は指ナデのようである。外面には煤状炭化物が付着している。260は推定口径37cmの鍋でロクロを用いている。二次火熱を受け、一部には煤状炭化物が残る。北東部の埋土出土である。他の遺物には、須恵器甕もある。

（2）竪穴状遺構

これから述べる4基の竪穴状遺構としたものは、竪穴住居跡あるいは柱穴間に溝をもつ建物である可能性が高い。しかしながら遺構どおし重複や削平等による要因も加わり、これら遺構の形状を特定できないことと、床面上の焼面をカマドと認定できるか否かを明らかにできないことから、一応竪穴状遺構の各称を冠しているものである。

ＳＸ61第2号竪穴状遺構（第107図）

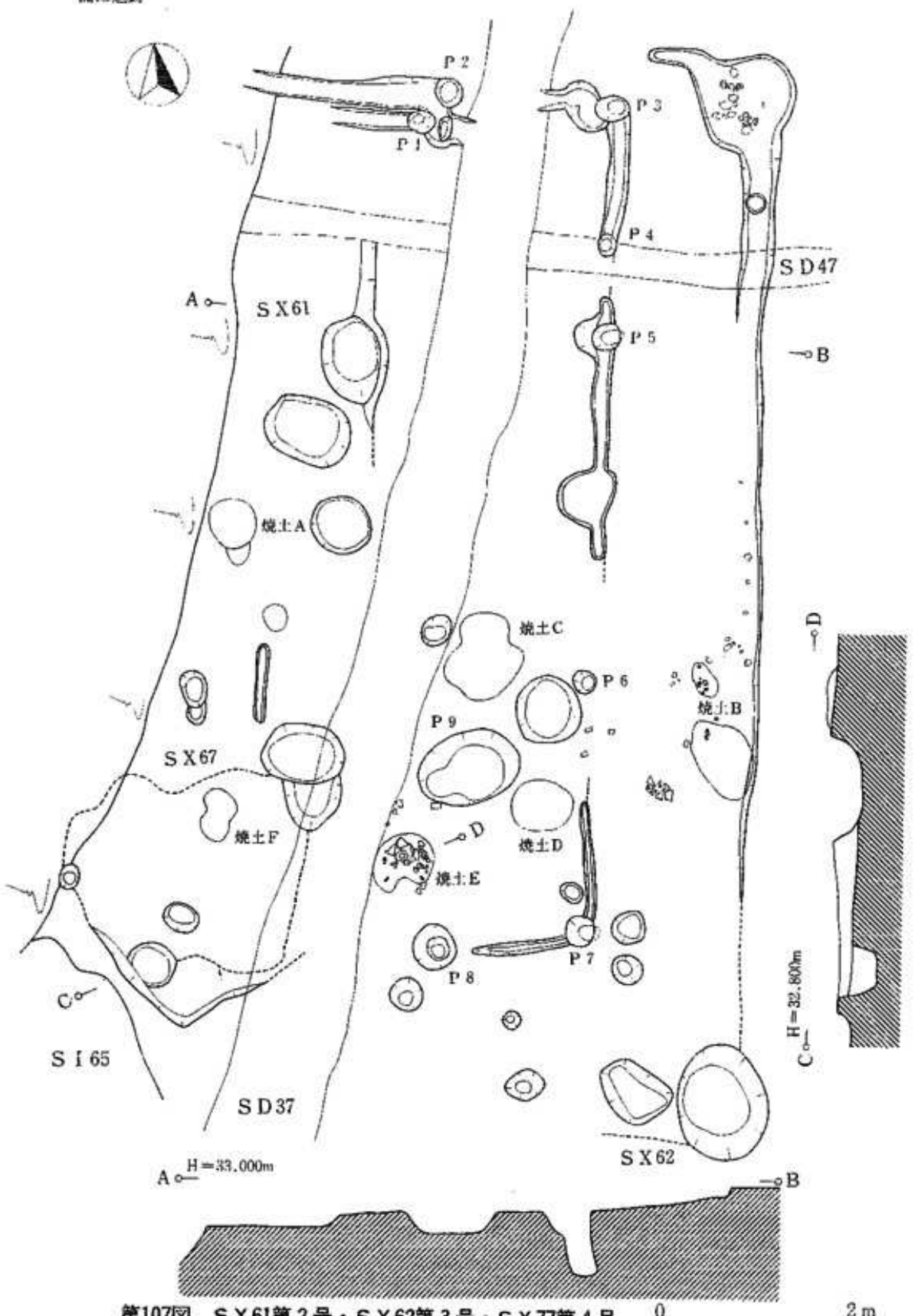
遺構はＳＸ77の内側北部に位置しているが両者の新旧関係は不明である。北側を東西に延び47に切られている。床面はＳＸ77より10cm下がっている。現存長1.8mの東壁とみられる部分と、床面上に認められる焼面（焼土Ａ）をもって竪穴状遺構としたものである。この壁はＳＸ77東壁と約2.3mの間隔をおいて平行している。焼土Ａは強い火熱の影響でレンガ状に堅く締まっている。カマドの火床面とも考えられるが、袖部等の上部遺構を一切確認できなかったことから明らかにできない。

遺物は土師器坏、甕が出土している。

ＳＸ62第3号竪穴状遺構（第107図・第108図、図版32）

遺構は、西側に緩やかに下る地山面で確認した。遺構群の最も外側（東側）に位置している。東側の壁のみ検出でき、その長さは10.7mを測る。北東、南東隅には径1m前後の浅い土坑が取り付く。北東隅から長さ70cm、幅15cm、深さ10cmの溝が延びる。溝は北東隅から南側にも長さ1.7m、幅0.3m、床面からの深さ5cmの規模で認められる。

東壁中央南寄りの床面上にて焼土の広がりを2ケ所で検出している。焼土Ｂ周辺の床面は平坦でやや堅く締まっている。



第107図　S X61第2号・S X62第3号・S X77第4号・S X67第5号竪穴状遺構

遺物は、焼土B周辺および北東隅の土坑内より、土師器坏・甕、須恵器高台付坏、軽石などが出土している。261は土師器坏で焼土B周辺出土である。二次火熱を受けもろくなっている。底部には回転糸切り痕を留める。262は土坑内出土の須恵器高台付坏で、底部に回転糸切り痕をもつ。その他土師器甕では底部に籾状圧痕をもつもの、内外面にハケメの認められるもの、ロクロ使用のものなども検出されている。

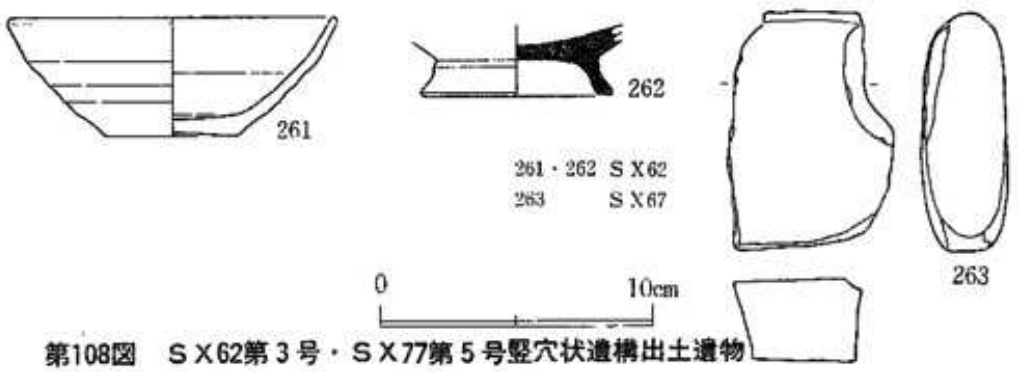
ＳＸ77第4号竪穴状遺構（第107図、図版32）

ＳＸ62内側を精査中に検出できたものである。確認・埋土状態からみれば、ＳＸ62構築の際ＳＸ77が埋められた可能性がある。遺構を平面的にみれば、柱穴とその間に溝をもつもので、北部遺構群のＳＢ78・81・南東部遺構群のＳＢ73・80と同一視できるかもしれない。ところがこれらと大きく異なるのは、ＳＸ77には明確に堅い床面が伴うという点である。この点からＳＸ77が掘立柱建物としても前4者とは形態を異にすると解することができるかもしれない。またＳＸ77が竪穴住居跡とすると、壁はＳＸ62により削平されたとしても、カマドが不明であることから直ちに断ずることはできない。

Ｐ3－Ｐ7を結ぶ東西は長さ8.4mで、ＳＸ62東側の壁から1.5m内側に位置する。東西長は削平されているが、北面で現存長3.7m、南面で1.2mの溝が残る。北面では部分的に溝が二重に確認できる。主軸方位はＮ－10°－Ｅを示し、ＳＸ62と同じである。柱穴径20cmのＰ4を最小として、他は径25～40cmの円形を呈している。確認面からの深さは最も浅いＰ4でも34cm、Ｐ6で37m、Ｐ1・8で43cm、Ｐ2・3・5で56～59cm、南東隅のＰ7では72cmを測る。柱穴間の溝は南東部で幅8～10cm、北東部では15～25cmとなる。深さは10～19cmである。

床面南東部で3ケ所の焼土の広がり（焼土Ｃ・Ｄ・Ｅ）を確認している。焼土Ｃ・ＤはＳＸ62焼土Ｂ同様、床面そのものはあまり焼けておらず、焼土の堆積が主となる。一方焼土ＥはＳＸ61焼土Ａと同様、カマド火床面を思わせるような堅い面を形成している。3ケ所の焼土の中央に位置する土坑（Ｐ9）には焼土が充填している。

遺物は、焼土周辺から出土している。土師器坏・高台付坏・甕、軽石などがある。高台付坏



第108図　ＳＸ62第3号・ＳＸ77第5号竪穴状遺構出土遺物

は内面に黒色処理が施されているものである。

ＳＸ67第５号竪穴状遺構（第107図、第108図）

ＳＩ 65の北東部に位置し、ＳＩ 65東壁から僅か20～30cmの間隔をおいてＳＸ67が構築されている。遺構は南・西壁の一部を確認でき、踏み締められた床面（点線内）が存在するが、カマドが不明確であることから竪穴状遺構としたものである。

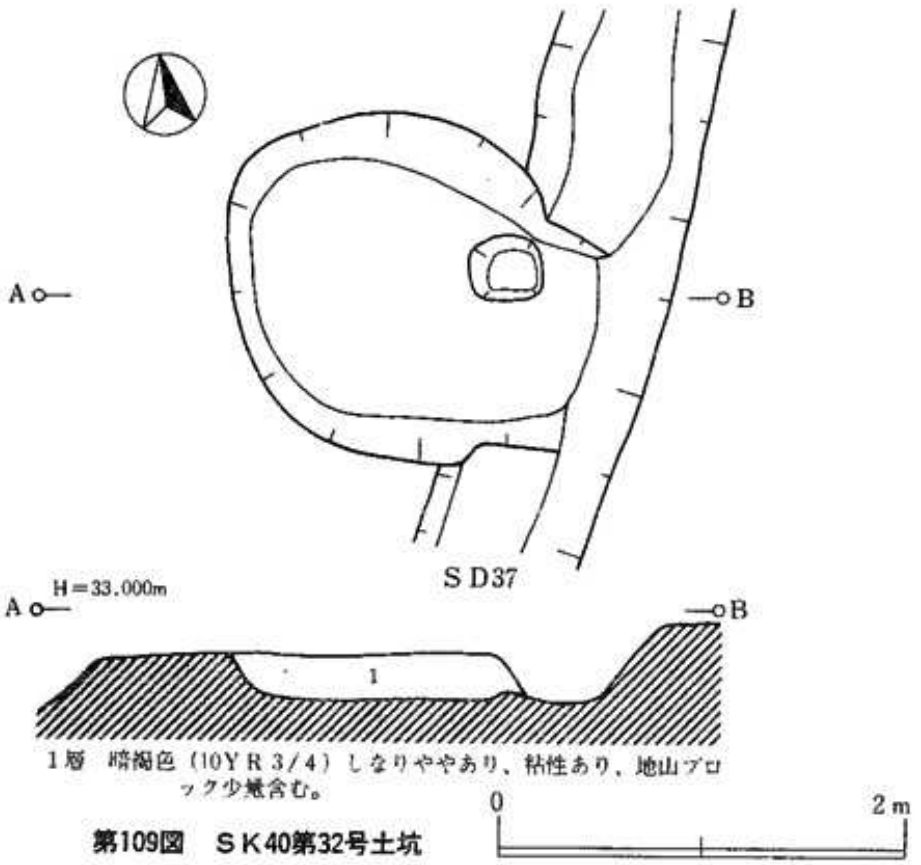
壁高は10～18cmで、壁溝は認められない。南壁を東に延長すると、位置的には焼土Ｅがカマド火床面に合致しそうである。しかし、床面と焼土Ｅ下面は後者が15～20cm高く整合しない。床面上の焼土Ｆは薄く分布する焼土である。

遺物は土師器坏・甕、砥石などが出土している。263は縦断面が楕円形を呈する砥石で、両端が欠損している。上、下面に砥面をもつ。摩耗痕をみる限りでは使用頻度は高くはない。

（３）土坑

ＳＫ40第32号土坑（第109図）

遺構群北部、ＭＦ45で検出した。東側をＳＤ37に切られている。このため規模は明確ではないが、東西を長径として2～2.2m、短径は1.7mの楕円を基調とするものであろう。深さは22cm、底面には平坦である。底面には径35cm、深さ16cmのピットが掘り込まれている。



第109図　ＳＫ40第32号土坑

遺物は土師器細片が出土している。

（４）溝跡

ＳＤ37第11号溝跡（第11図、図版32）

南西部遺構群をおよそ南北方向に延びている溝である。基本的には本群を切り込んでいると考えている。北端部では木根の攪乱が入り、ここが終始点なのか北側のＳＤ34とつながっていたのかについては明らかにできなかった。一方の南端は斜面に吸収され、確認できる全長は約45.5mである。確認面での幅は北側で0.7～0.8m、南側ではやや幅を増し、1～1.2mを測る。深さは北側15～25cm、中央部ＳＫ40と重複するあたりで25cm、南側では35～45cmとなる。断面形状は、逆台形様を呈するが、北側～中央部では緩いＵ字形となっている。底面での高低差は、北を０とすると南で2.25m下がる。

遺物は土師器坏、甕などが出土している。

ＳＤ38第12号溝跡（第11図、図版32）

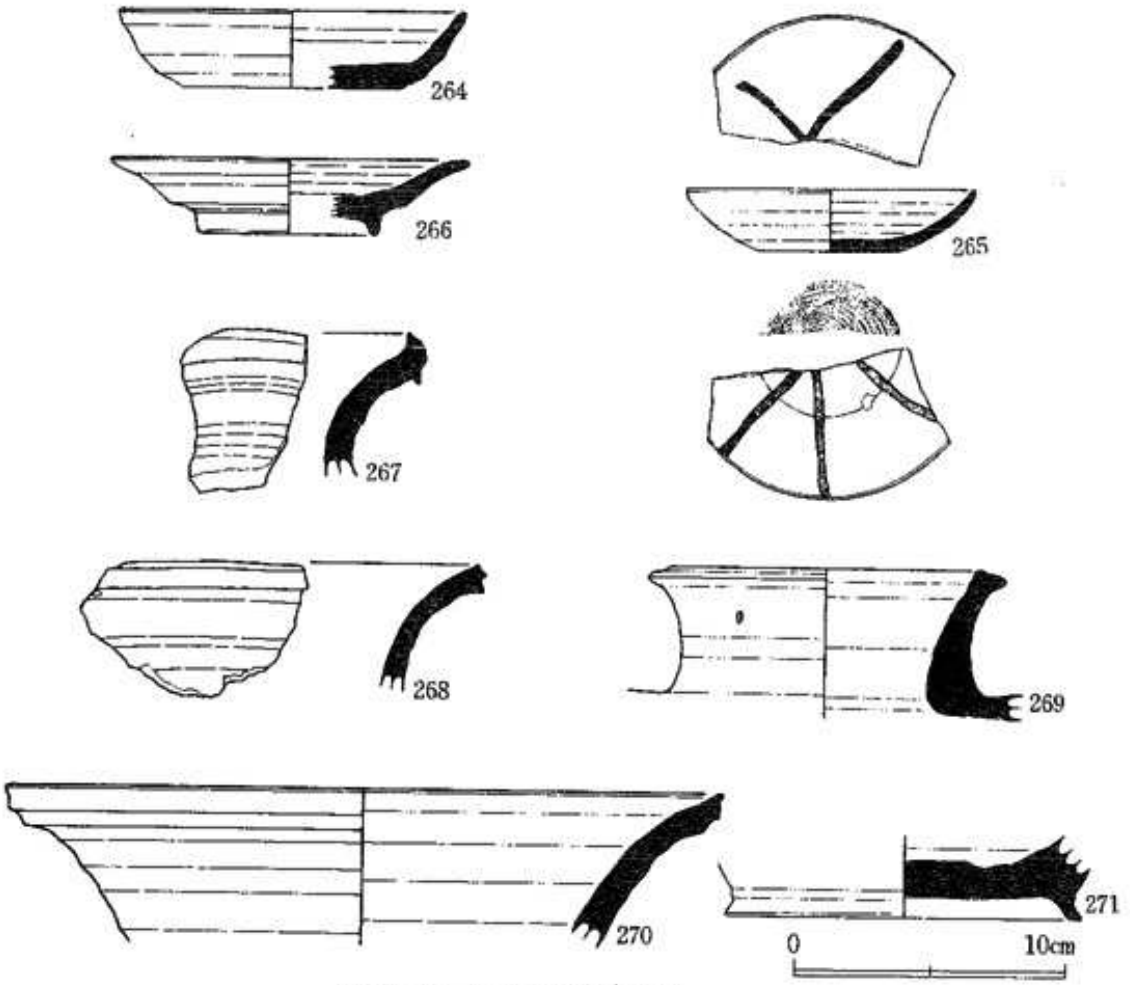
調査区南西端で検出した。この周囲は地山面までも削平されている箇所である。溝はＳＤ37とほぼ平行するように南北方向に延びる。北端は調査区外に及び、南端は斜面に落ちこんでいく。確認できる長さは13.5m、幅は30～40cm、南側では50～80cmを測る。深さは北側で10cm、南側でも20cmを残すにすぎない。底面での高低差は北を０とすると、南で40cm下がる。

４．遺構外出土の遺物

（４）須恵器（第110図、図版42）

福田遺跡において出土した遺物の大半は土師器であり、須恵器の量を整理用コンテナ数で計算すると全体の５％前後にすぎない。しかもＳＩ 28・21などの遺構内出土が多く、これから述べる遺構外出土のものはごく僅かである。

264は、底部に回転ヘラ切り痕を留める坏である。内面底部は摩耗著しく、墨痕は認められないものの、転用硯の可能性はある。出土位置は、北部遺構群と南東部遺構群に挟まれた無遺構部である。法量は口径12.6cm、底径7.9cm、器高2.9cmを測る。265は皿状を呈するもので、底部には回転糸切り痕をもつ。264同様内面に著しい摩耗痕が認められる。内外面ともに火だすきが残る。北部遺構群中央のＳＫ15南方のⅢ層中出土である。口径10.5cm、底径5.2cm、器高2.3cmである。266は高台付坏で、底部を回転糸切りの後高台を貼り付けている。264・265と同じくミガキ様の摩耗痕が認められ、転用硯の可能性がある。出土位置は、北部遺構群の東端を画するＳＤ33の東方、ＬＣ51・ＬＣ52Ⅲ層である。口径13cm、高台部径6.5cm、器高2.8cmを測る。267～270は壺もしくは甕の口縁部である。269の頸部には粘痕が残る。271は壺の高台部になるものであろう。底部1／2程の破片であるが、内面の凸凹面を擦っていることから、不要となった器を底



第110図　遺構外出土遺物(1)

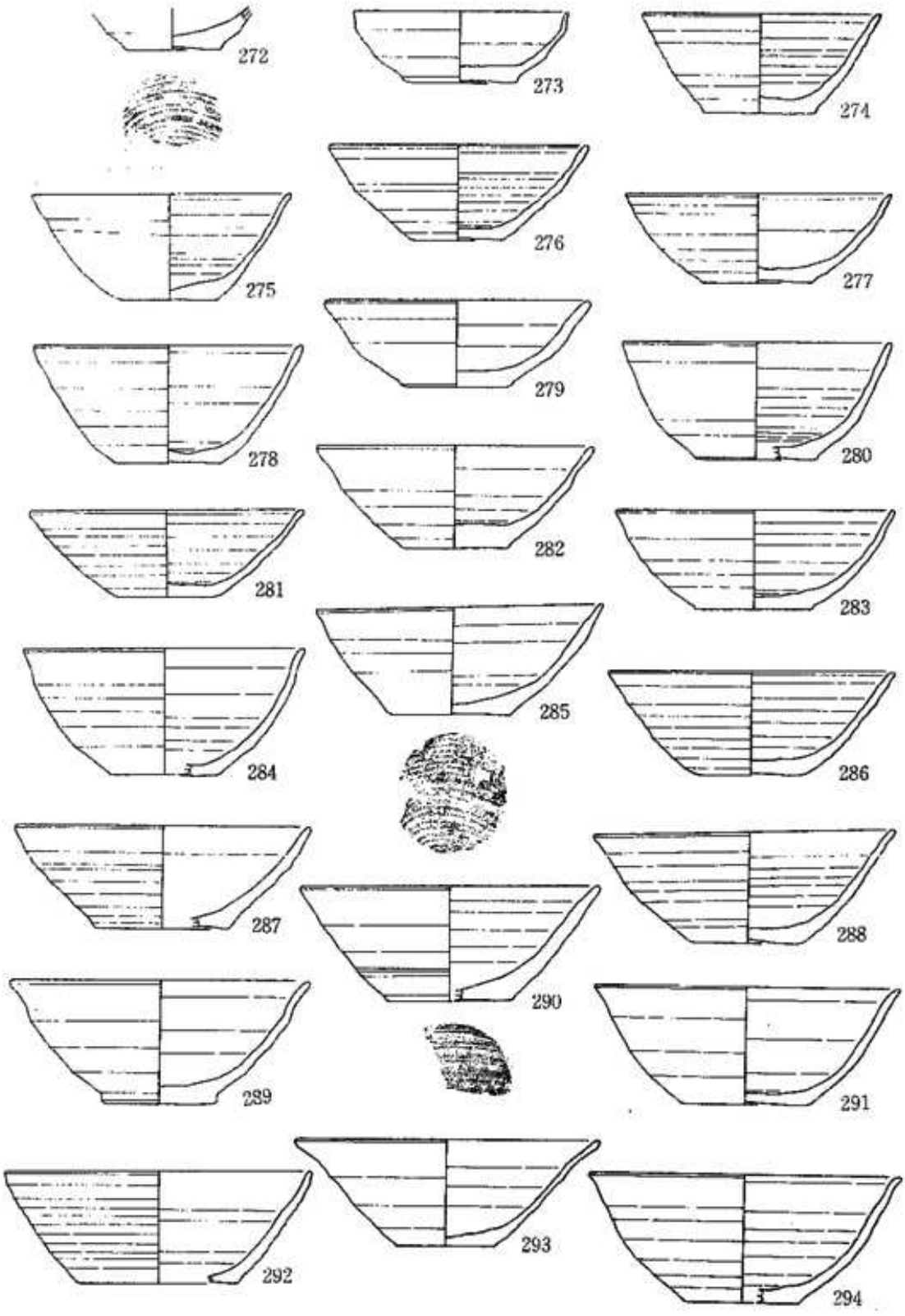
部を残して丁寧に打ち欠き、整形してから硯として用いた可能性がある。坏類同様擦痕が認められるが観察の域を出ない。

（2）土師器（第111図～第114図、図版43）

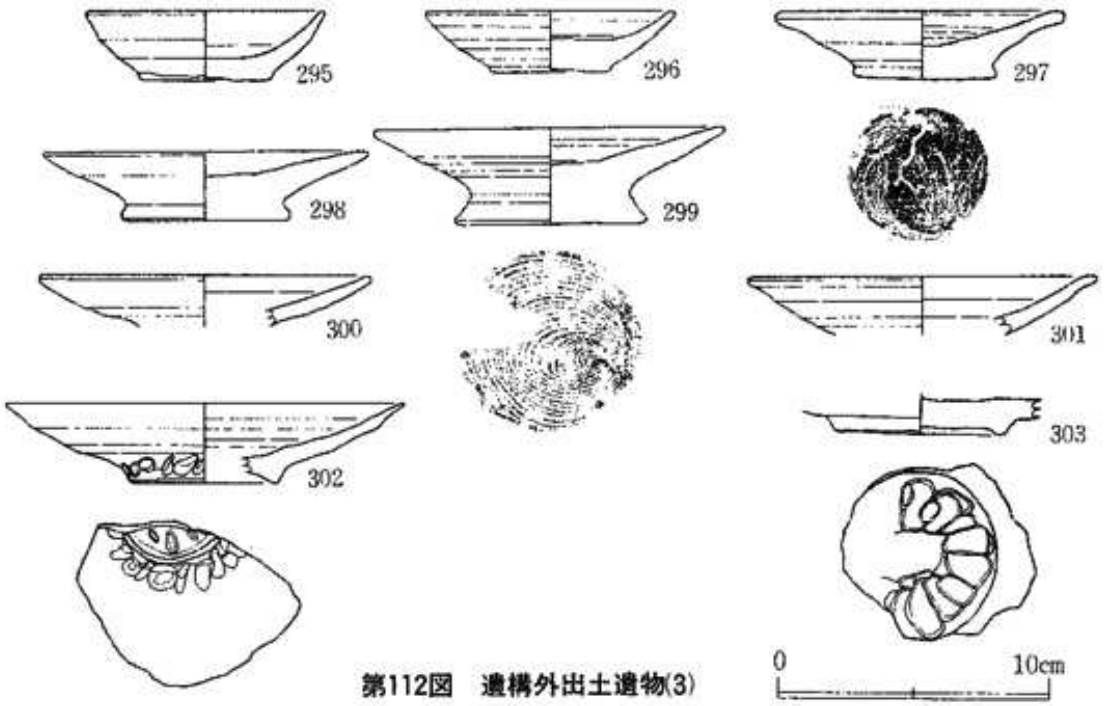
出土した土師器は、整理用コンテナで40箱分ある。うち遺構外出土は30%程を占める。しかしながら復元して図示できたものは少なく、殊に甕類は皆無に近い。ここでは坏・皿類、鍋を中心に紹介する。

272～294は坏である。底部切り離しは、272・280・290が静止糸切り、他が回転糸切りである。ただ291が前引き糸切りと称されている技法によっている。器形的には273が特異な部類に入る。また静止糸切りを残す285・290は、内面底部が円錐状に窪んでいる。二次火熱を受けているのは、275・287・288・294で、277・286は内面に288は外面にタール状の付着物が認められる。277・284は胎土に細砂粒を多量に含んでいる。

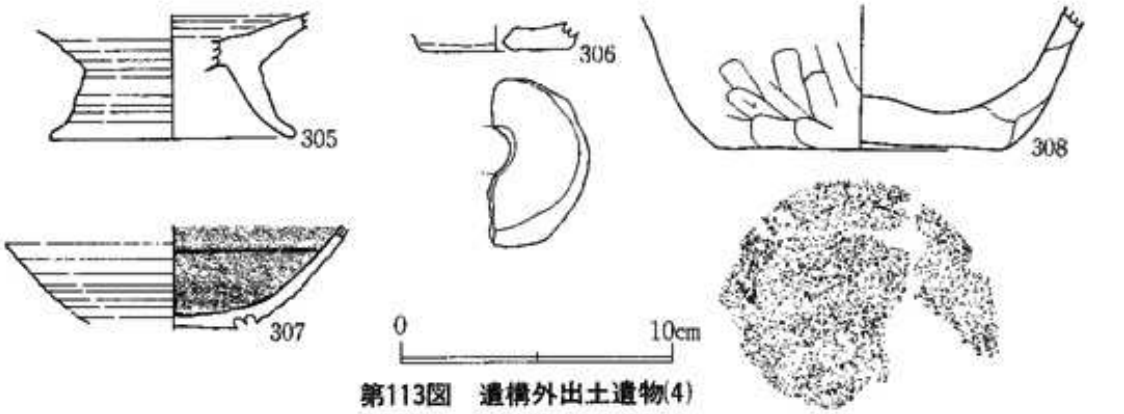
295～303は皿類である。296・298・300は、ＳＩ 28東方、ＳＫ44南方のＬＦ49出土である。



第111図　遺構外出土遺物(2)



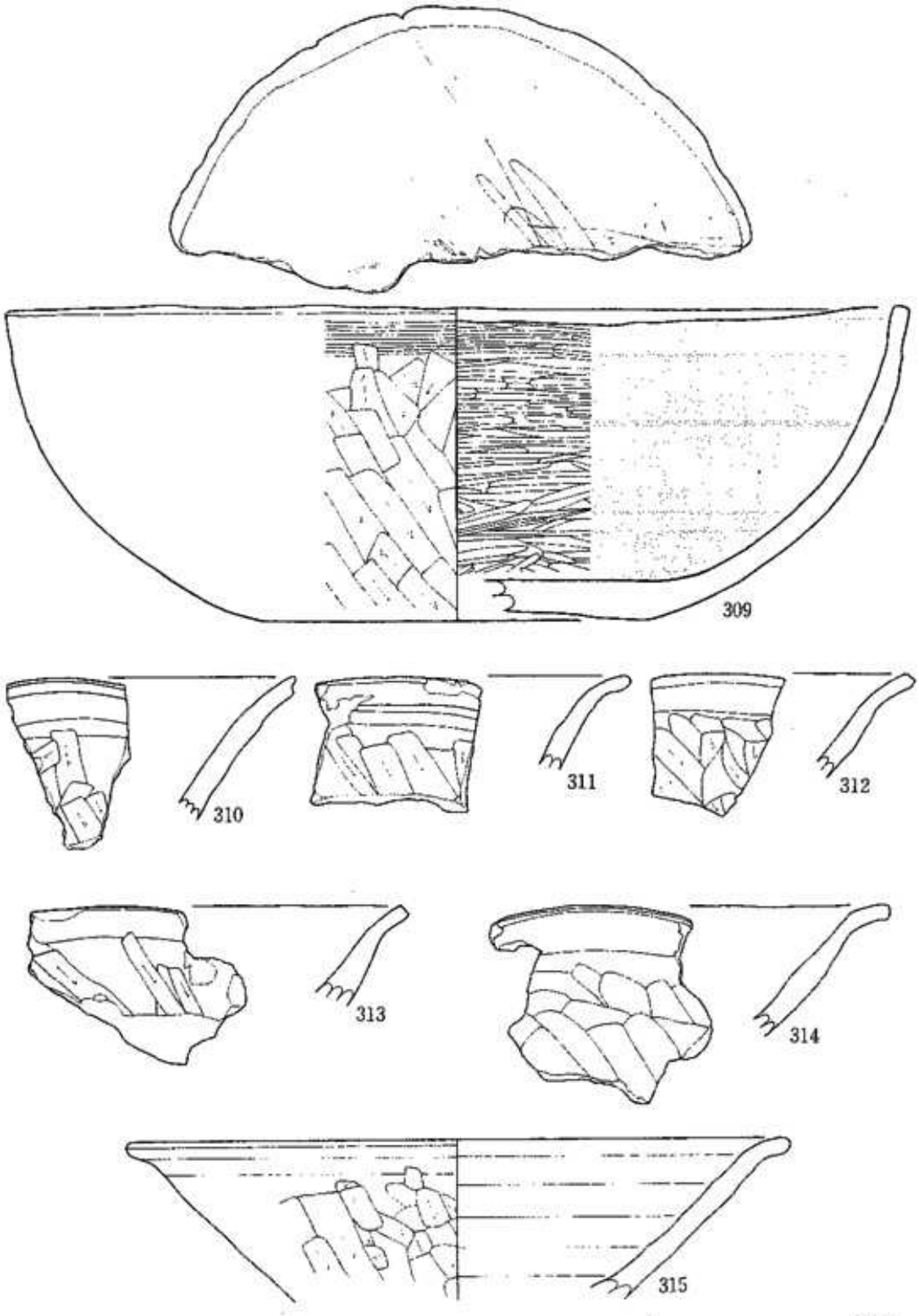
第112図　遺構外出土遺物(3)



第113図　遺構外出土遺物(4)

295はＭＡ50から出土しており、ＳＩ 27埋土の可能性もある。297・299は、須恵器高台付杯266の近くから出土している。高台付皿を除いて底部には回転糸切り痕跡を留める。297～299は、いわゆる柱状高台の皿で、高台部が台形様を呈する。302、303は底部に菊花状のケズリの認められる高台付皿である。302は体下半にも同様のケズリが施されている。

305は南側斜面にほど近いＭＩ40から出土した高台付坏か皿である。足高な高台である。306は杯であるが底部に孔をもつ。摩滅のため焼成後穿孔か否かは不明であるが、両側から穿っている。ＳＩ 29東方のＬＡ58出土である。307は内面をミガキの後、黒色処理を施した高台付坏である。口縁部と高台部を欠く。底部は回転糸切り痕を留める。ＳＩ 27東方のＬＪ 50より出土している。308はいわゆる砂底の甕である。外面にはケズリが残る。ＭＡ50出土であるのでＳＩ 27埋土の可能性もある。



第114図　遺構外出土遺物(5)

309～315は鍋の類である。309はＳＢ14の北方、ＬＥ55から出土したものである。口縁～胴部の大きな破片２点が内側を上に向けて重なるように検出されたものである。精査の結果、遺構に伴うものではなかった。非ロクロで黒色処理の施されている平底の鍋である。外面は口縁部を指等によるナデの後、底面も含めてケズリを行っている。内面は横位のミガキ、１単位は幅２～４mmある。底面は「井」字形にミガキを施している。なおこの部分には、意図的かどうかは明らかではないが、沈線もしくは擦痕が図のように認められる。法量は口径40cm、底径17cm、器高14.2cmを測る。310～314は破片のため、ロクロ使用の有無は明確にし得ない。外面は一様に斜位方向のケズリが認められる。内面は横ナデである。315はロクロ使用で口径29.4cmを測る。これも外面ケズリ、内面横ナデが施されるものである。

（３）土製品、陶器、銅銭など（第115図・第116図、図版43）

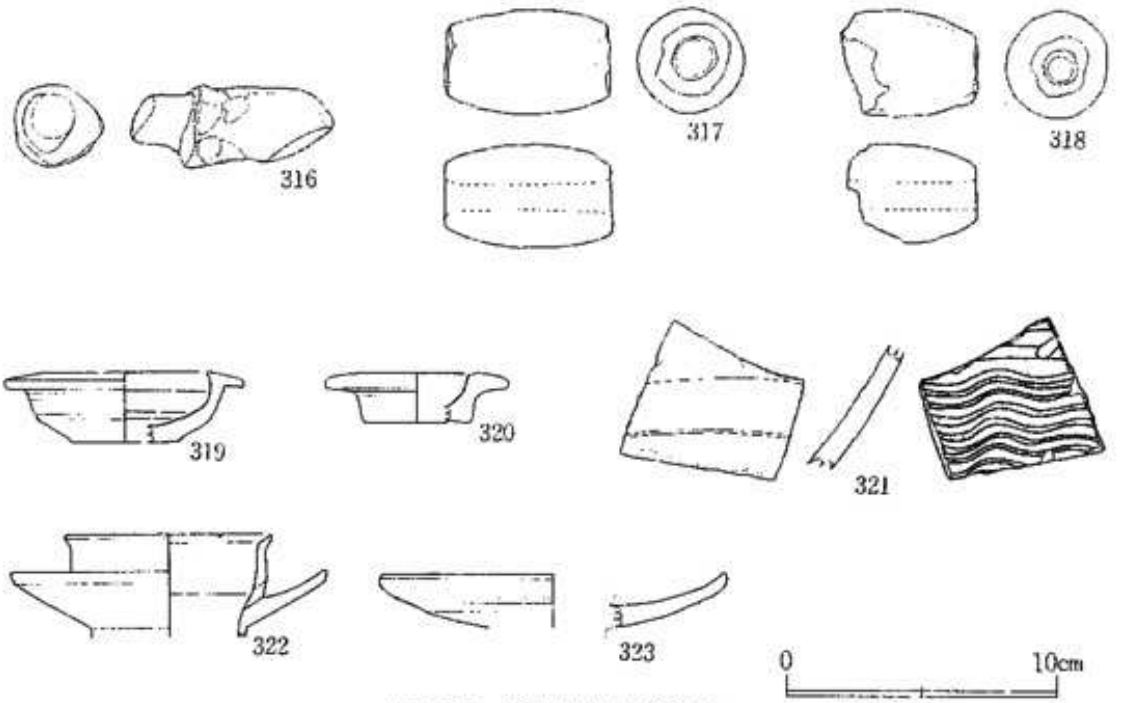
標題に示した遺物は総て遺構外出土であり、遺構内より得られた資料はない。

316は把手で、胎土・焼成は土師器と同一である。この種の形態は一般には甑に付くものと考えられる。しかしながら遺物の中で甑とみられるものの出土はない。出土位置は、ＳＩ05東方のＬＧ54である。317・318は土錘で、土師質ではあるが土師器の胎土とは異なる。319・320は瀬戸産の灯火具と思われるが、使用痕跡は認められない。底部には回転糸切り痕をもつ。319は灰釉、320は鉄釉で、それぞれ施釉は見込みのみである。321は浅鉢であろうか。見込みには、にぶい橙色の釉で波状文が描かれる。胎土は暗赤褐色で、外面には横位ケズリが残る。唐津産と思われる。322・323も灯火具である。同形態の例は、昭和62年に調査された秋田城跡第47次調査において１点出土している。324はガラス玉であり、調査区南西端ＮＡ40で出土したものである。最大径18mm、中央に径1.5mmの孔をもつ。重量は7.66g である。325・326は銅銭で、225は、洪武通宝、326はサビのため銭銘不明である。325は明代の鋳造で、1368年が初鋳造年となる。重量2.43g である。２点とも北部、南東部遺構群の間のＭＣ49・ＭＤ49出土である。

（４）石製品 －砥石－（第117図・第118図、図版44）

出土した石製品は縄文時代に帰属するものを除くと、総て平安時代の砥石となる。

砥石は平面形、横断面形が長方形を呈するもの(327～334)とその他の形態(335～340) に分けられる。327は４面を砥面とする。一般には使用痕跡は、長軸方向に平行して残されるものであるが、下面のみ直交する方向に付されている。1側面には擦痕あり、重量75g である。328も４面を砥面とするもので、縦断面形がくさび形となる。２側面には長軸に直交する鋭利な研磨痕(幅1.5～2mm)が残る。完形で123g を量る。329は上、下面に砥面をもつ。石材端部を利用して敲打を行っている。一部欠損し196g を量る。330は4面を砥面とするもので、２側面が使用に伴い凹状を呈す。重量117g である。331も4面を砥面とし、縦断面がくさび形を呈する。１側面に擦痕があり、また部分的に火熱を受けている。一部欠損し190g を量る。332は1側面を除く３面

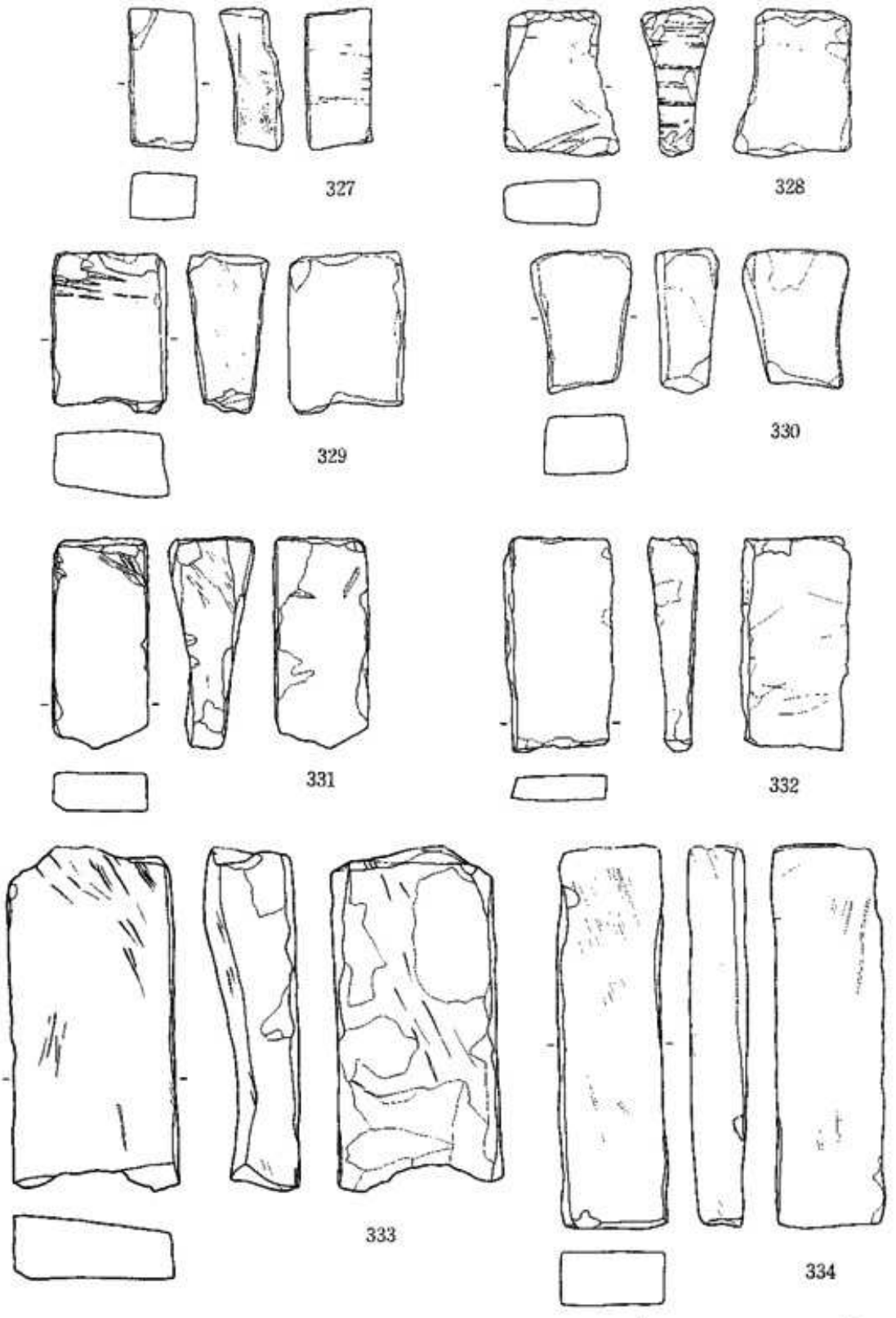


第115図　遺構外出土遺物(6)

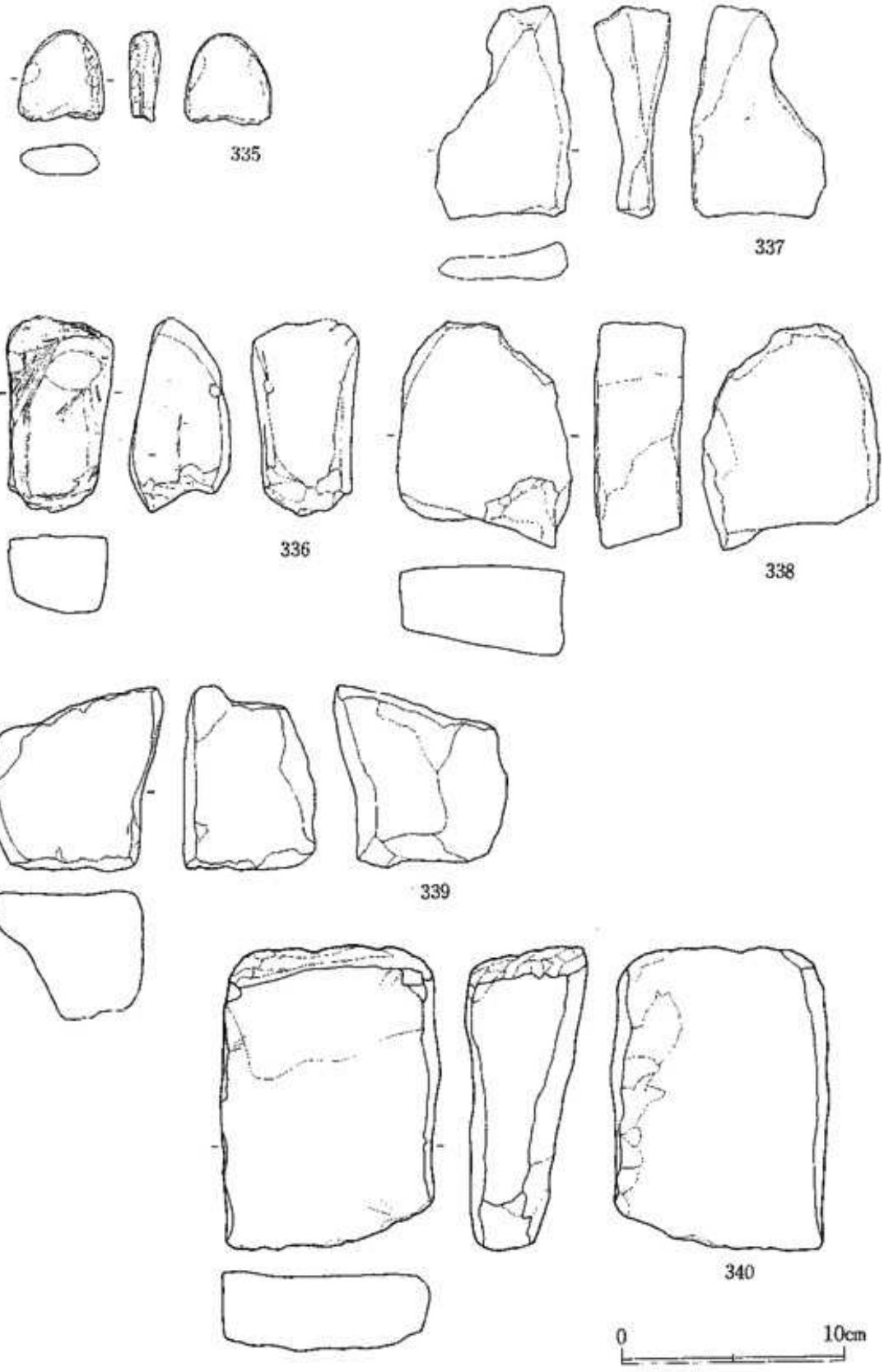
第116図　遺構外出土遺物(7)

を砥面としている。板状の石材を用いている。138g を量る。333は2面を砥面とする。下面の部分的に欠落しているのは、敲打による凹みである。石材の粒子は細かく、仕上げ砥とみられる。重量は632g である。334は、1側面を除く3面を砥面とする。いずれの砥面も平坦である。完形で380g を量る。以上の8点は凝灰岩を素材としている。

335は凝灰質シルト岩を素材とするもので、一見すると磨製石斧の基部を想起させる形態である。その総てを砥面に用い、不定方向の擦痕が残る。一部欠損し25.6g を量る。出土位置はLG54で、SI 05埋土の可能性もある。336は砥面を2側面にもつ。上面には鋭利な研磨痕が認められる。一部欠損し197g を量る。337は板状の石材を多少ねじったような形状を示すもので、皿状に窪む1面を砥面としている。重量は一部欠損し106g である。338は、側面を欠くもので意図的に欠いた可能性もある。上、下面を砥面とする。安山岩を素材とし、472g を量る。339は石英斑岩を素材とするもので、横断面が台形を呈する。欠損しており原形状は不明である。砥面は3面で、361g を量る。340も石英斑岩を素材とする。砥面は3面で、置砥と考えられるものである。重量は836g である。



第117図　遺構外出土遺物8）砥石(1)



第118図　遺構外出土遺物(9) 砥石(2)

第3章　まとめ

調査の結果得られた資料は次の通りである。縄文時代では、遺構としてTピット1基、土坑1基、遺物には縄文土器、石鏃、トランシェ様石器、削器、磨製石斧、石錘などを挙げることができる。平安時代では、遺構として竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡7棟、土坑30基、竪穴状遺構5基、焼土遺構3基、溝跡12条、柱列7列、遺物には、土師器、須恵器、鉄製品、砥石、軽石などがある。その他遺構外出土で、土錘、陶磁器、ガラス玉、銅銭など平安時代以降と考えられる遺物も僅かではあるが検出されている。本章では福田遺跡の主な活動期である平安時代の遺構に特定して若干のまとめを行う。

これら遺構群の最大の特徴は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡等の居住域の周囲に溝、柱列といった区画施設を有していることである。区画施設は調査区北側の北部遺構群と南側の南東部遺群の2ケ所で確認している。前者は幅50cm前後、深さ5～15cmの溝状を呈し（SD33・34）、遺構群の南と東を画している。後者は幅20～25cm、深さ5～18cmの溝状を呈し、溝底面にピットをもつもの（SD55・56）と、径20～25cm、深さ8～30cmの柱列（SA72）からなり、遺構群の北と西を画している。これらのことから、北部遺構群は溝による区画施設を伴い、南東部遺構群は板塀あるいは垣根等の区画施設と想定でき、景観の異なる二種類の区画施設が存在していたことになる。

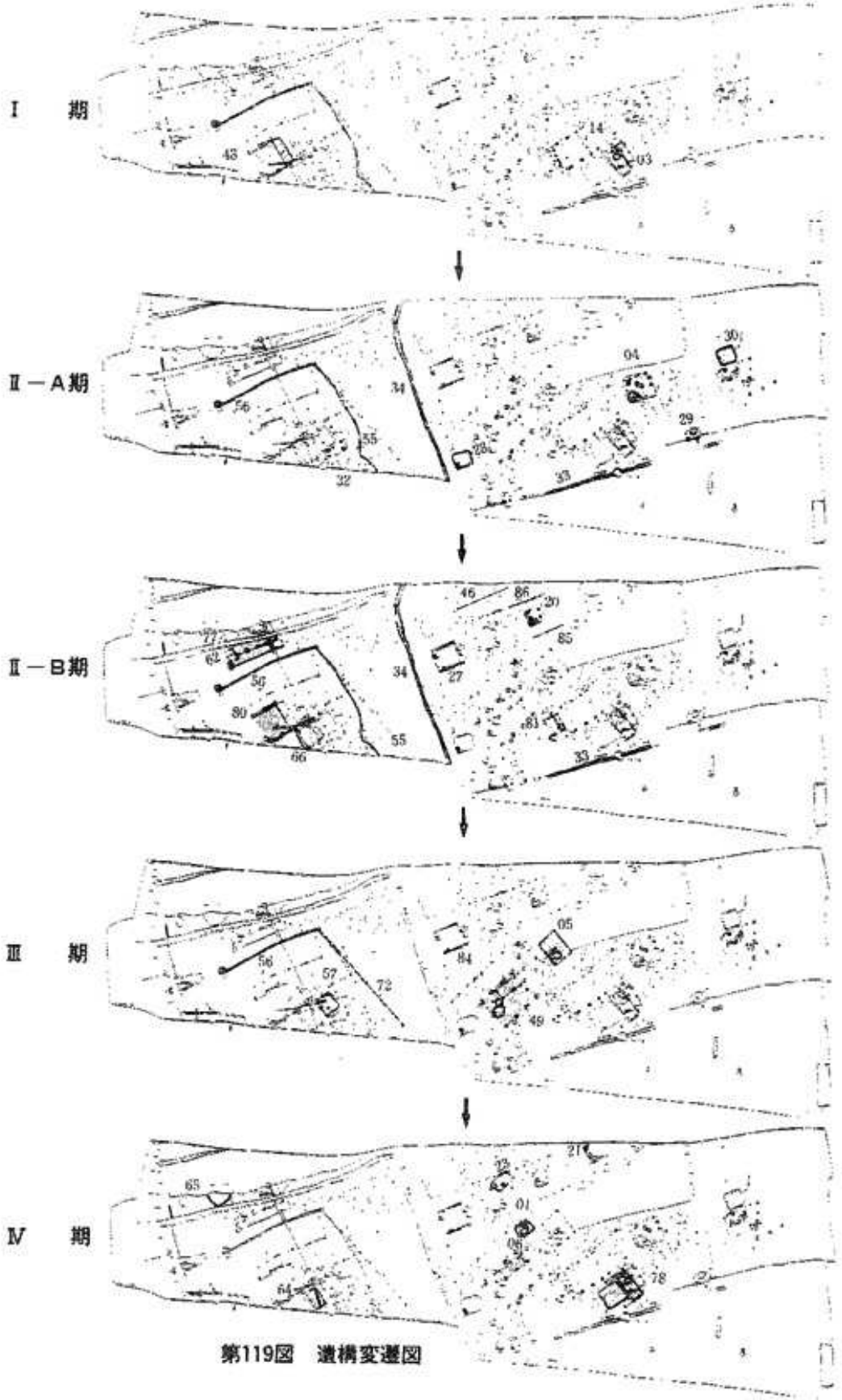
北部遺構群、南東部遺構群およびその西に位置する南西部遺構群は、その形態・規模、構成される遺構の種別、配置状態が大きく異なる。一方個々の遺構は、遺構群の枠を越えてそれぞれが一定の計画性を持っているようにも読み取れる。遺構の主軸方位を磁北との関係で見ると、ほぼ磁北方向に主軸が位置するグループ、主軸が磁北から東に振れるグループ、逆に西に振れるグループに3大別できることである。これを重複している遺構から新旧関係を明らかにして序列してみると、次のⅠ～Ⅳ期に分割が可能となる。

Ⅰ期――　主軸方位がほぼ磁北を指す遺構

北部遺構群では竪穴住居跡SI 03、掘立柱建物跡SB14、南東遺構群では竪穴住居跡SI 48での遺構で構成される。北部遺構群については、SD33・34の区画施設はまだ存在していない。南東部遺構群ではSD55・56の区画施設が機能を開始している可能性はある。

Ⅱ期――　主軸方位が10°～18°東に振れる遺構

北部、南東部両遺構群に区画施設が整う時期、南西部遺構群SX62・77も本期に属する。Ⅱ期は主軸方位が18°前後東に振れる一群（Ⅱ－A期）、10°前後東に振れる一群（Ⅱ－B期）に細分できるようである。



第119図　遺構変遷図

Ⅱ－A期は北部遺構群の竪穴住居跡ＳＩ04・28・29・30、南東部遺構群の竪穴住居跡ＳＩ32が該当する。Ⅱ－B期は北部遺構群の竪穴住居跡ＳＩ20・27、掘立柱建物跡ＳＢ81、柱列ＳＡ46・85・86、南東部遺構群の竪穴住居跡ＳＩ66、掘立柱建物跡ＳＢ80、南西部遺構群の竪穴状遺構ＳＸ62・77が該当する。

本期は、方向性にばらつきが大きい。たとえばＳＩ 30は方向的にはＡ、Ｂの中間に位置するものであり、カマドの形態・構築法がⅠ期のＳＩ 03に類するためここではＡ期に入れている。このような例もありＡ、Ｂに時間的差がないとみられる可能性、逆にさらに細分できる可能性をもつことが十分に想定できる。

Ⅲ期 —— 主軸方位が磁北から3°～5°西に振れる遺構

北部遺構群では竪穴住居跡ＳＩ 05、掘立柱建物跡ＳＢ49、柱列ＳＡ84、南東部遺構群では竪穴住居跡ＳＩ 57、北面を画する柱列ＳＡ72の遺構で構成される。北部遺構群では区画施設が消滅する。南東部遺構では北側の区画施設をＳＤ55からＳＡ72に作り変えている。この時西側のＳＤ56はＳＡ72とともに存続した可能性が高い。

本期は特に計画性を強く看取できる。ＳＢ49西側桁行の柱筋は北側のＳＩ 05西壁の柱穴列と同一線上に位置している。またＳＢ49に伴う柱列ＳＡ84を南に延した線は、南東部遺構群のＳＡ72を東に延長した線とほぼ直交している。

Ⅳ期 —— 主軸方位が磁北から6°～10°西に振れる遺構

北部遺構群では竪穴住居跡ＳＩ 01・02・21・23、掘立柱建物跡ＳＢ06・78、南東部遺構群の竪穴住居跡ＳＩ 64、南西部遺構群の竪穴住居跡ＳＩ 65で構成される。竪穴住居跡には小型化、長方形化が認められる。なお南東部遺構群の区画施設は本期も継続しているのか否かは明らかにし得ない。

以上のⅠ～Ⅳ期の分類は、遺構の方向性と重複関係から机上での操作に拠ったものである。直接的な重複関係を持たない遺構についても「同一方向に計画、構築された遺構は同一時期の所産である。」という仮定に立つものであり、分類基準としては不完全であることは否めない。一応この前提に立った場合の遺構群の流れを概括してみたい。各期を通じて南東部遺構群にはほぼ同位置での造り変えを伴いながら1軒の竪穴住居が存続していること。そして少なくともⅡ期においてはこの周囲に区画施設が構築されⅠ・Ⅲ期にも存続していた可能性があること。一方の北部遺構群では各期毎に基本的には竪穴住居跡1～4、掘立柱建物跡1～2が点在するように配置されていること。区画施設は方向性からみるとⅡ期に構築、廃棄されたようであること。このことから限られた範囲内の調査であることを念頭に入れつつも、福田遺跡のある時期における核は板塀や垣根などの区画施設をもつ南東部遺構群であり、この遺構群の計画性が北部、南西部遺構群を形成する際の規制となったものと推察できる。

おわりに、現段階においてできるⅠ～Ⅳ期のおおまかな年代を次の2点を基に付け加えておきたい。一つは、ＳＩ 28埋土出土の須恵器高台付皿（第49図116）を挙げることができる。これは若美町海老沢窯跡の製品と考えられるものであり、9世紀後葉の年代が与えられている。ＳＩ 28はⅡ－Ａ期にあたり、埋土であることを考慮して、本期は9世紀後葉かやや遡る時期とみることができる。いま一つは、白頭山を起源とする苫小牧火山灰の遺構内への二次堆積についてである。福田遺跡ではＳＩ 01、ＳＫ10・44の3遺構埋土上位より検出されている。この火山灰の降下年代を11～12世紀とみる考え(注1)、10世紀前半代とみる考え(注2)があるようである。ＳＩ 01はⅣ期に属することから、本期の下限は苫小牧火山灰降下以前となる。しかしながら求めるべく年代には幅が大きすぎる。

ここで一つの鍵となりうるのは、ＳＫ44の存在かもしれない。ＳＫ44埋土中（第3～4層上面）には図示しただけでも土師器の坏が5個体（第74図175～179）出土している。問題の火山灰はこれら土器の直上に二次的に入り込んでいるのである。これらの土器はたとえば、9世紀後半代と考えられるⅡ期の遺構群より出土した土師器と技法・形態的にも大きな差異は認められない。とすると、火山灰の降下時期を11～12世紀とみるより、10世紀前半代とする後者に立脚したほうがより妥当性をもつのではないか。

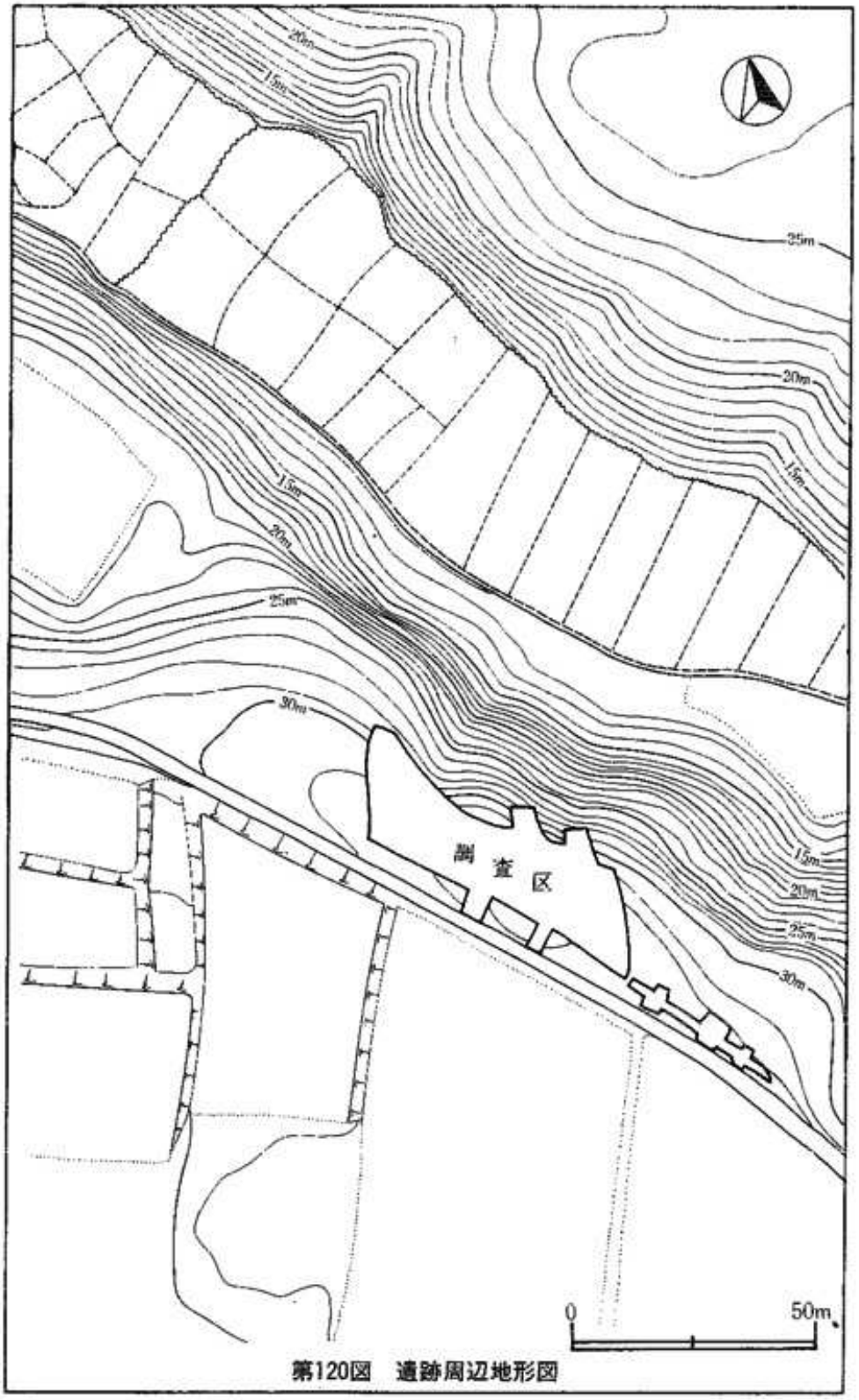
この仮説に立った場合、各期の年代は次のようになる。Ⅰ期は9世紀中葉～後葉、Ⅱ期は9世紀後葉、Ⅲ期は9世紀末～10世紀初、Ⅳ期は10世紀前半代と想定できそうである。

註1　町田　洋・新井房夫・森脇　広「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51　1981

註2　青森県六ヶ所村沖附1遺跡の「第34号竪穴住居跡における折戸53号様式の灰釉陶器の出土状況から、苫小牧火山灰の降下時期が10世紀の前半以前の可能性が強く」とある。
岡田康博ほか『弥栄平(4)(5)遺跡』　青森県教育委員会　1986
なお、大間・二宅・坂本『李平下安原遺跡』　青森県教育委員会　1988第Ⅵ章自然科学的分析において胎土分析・蛍光X線分析を担当された三辻利一氏によると、白頭山起源の火山灰を「10世紀末降灰」と明記している。さらに同書まとめにおいて、この火山灰の「降下は1回だけではない」ことを竪穴住居跡の覆土の状況から言及しており、この問題はまだまだ混沌としていると言わざるを得ない。

石　丁　遺　跡

（３ＫＣ）



第120図　遺跡周辺地形図

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

石丁遺跡は、北面を沢で画された台地端部に位置する。沢は蟹子沢遺跡が所在するところであり、沢を介した北岸には十二林遺跡が立地している。遺跡の位置する同台地の南端部には福田遺跡が占地している。

調査は、道路本線部分及び取り付け道路建設により切土される箇所を対象としている。対象区域には東西に市道石丁線が通っている。この市道以南は、水田・畑地造成事業と市道改良工事により地山面まで完全に削平されていることを昭和61年の範囲確認調査で明らかにしている。このため調査は、市道石丁線以北の台地平担部から北側斜面に移行する1080㎡を対象として実施した。

遺跡の現況は山林で、調査区内には市道改良工事の際の排土が市道に沿って高さ1.2～1.5m、上面幅約２m、下面幅5～7m の土手状に積み上げられている。標高は30～32m、蟹子沢との比高差は約20m ある。対岸の十二林遺跡は標高が25～27m であることから、石丁遺跡を見上げるという位置関係にある。

なお発掘調査は工程上、本線部分を８～９月に、取り付け道路部分を11月に分けて行っている。

遺跡の基本層序を観察するため、第121図に示したA地点(本線部分)、B地点(取り付け道路部分)を設定した。

A地点　土手状の盛土がなされている箇所(スクリーントーン部分)である。

Ⅰ層　暗褐色(10YR3/4)旧表土、木根、笹根多い。

Ⅱ層　黒褐色(10YR2/2)しまりやや弱、粘性ややあり。

Ⅲ層　黒褐色(５YR3/1)地山漸移層、Ⅱ層よりやや赤味強い。しまり・粘性ややあり。

Ⅳ層　黄褐色(10YR5/6)～褐色(10YR4/6)地山粘土層。

Ⅴ層　褐　色(10YR4/6)Ⅳ・Ⅵ層の混合土、Ⅳ～Ⅵ層までの層界は漸変している。

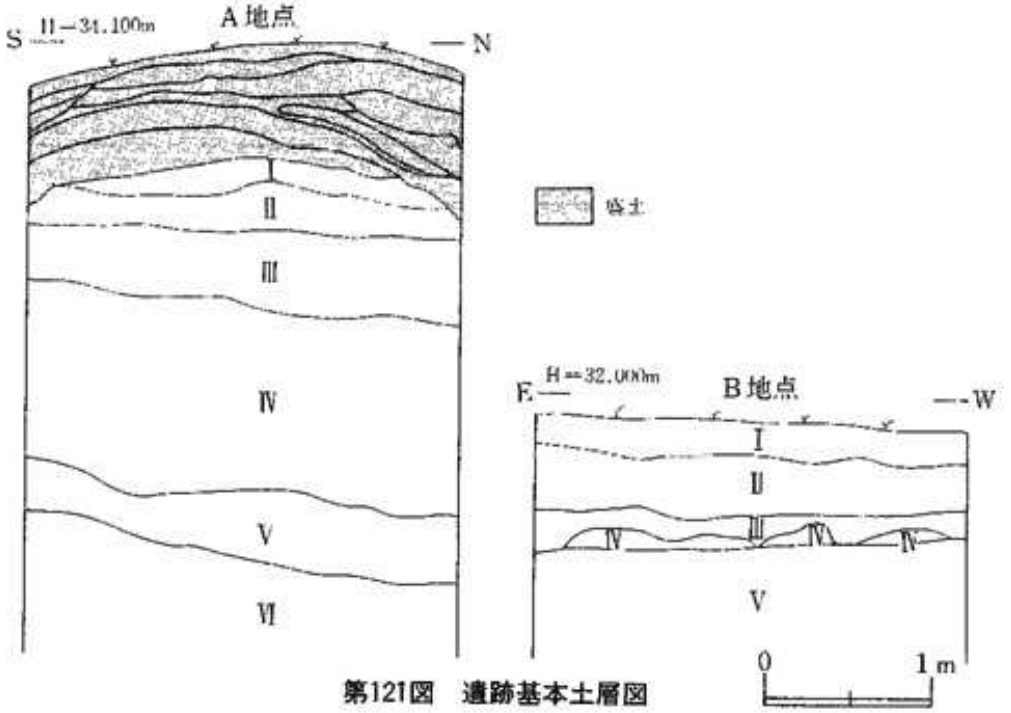
Ⅵ層　オリーブ褐(2.5Y4/6)砂質土、北側に向かい傾斜している。

B地点　取り付け道路部分の北端部である。

Ⅰ層　黒褐色(10YR2/2)表土、木根多い。

Ⅱ層　黒褐色(7.5YR2/2)遺物包含層、しまりはあるが粘性はやや弱。

Ⅲ層　褐　色(10YR4/6)地山漸移層、Ⅱ層粒子を多量に混入、しまりあり。



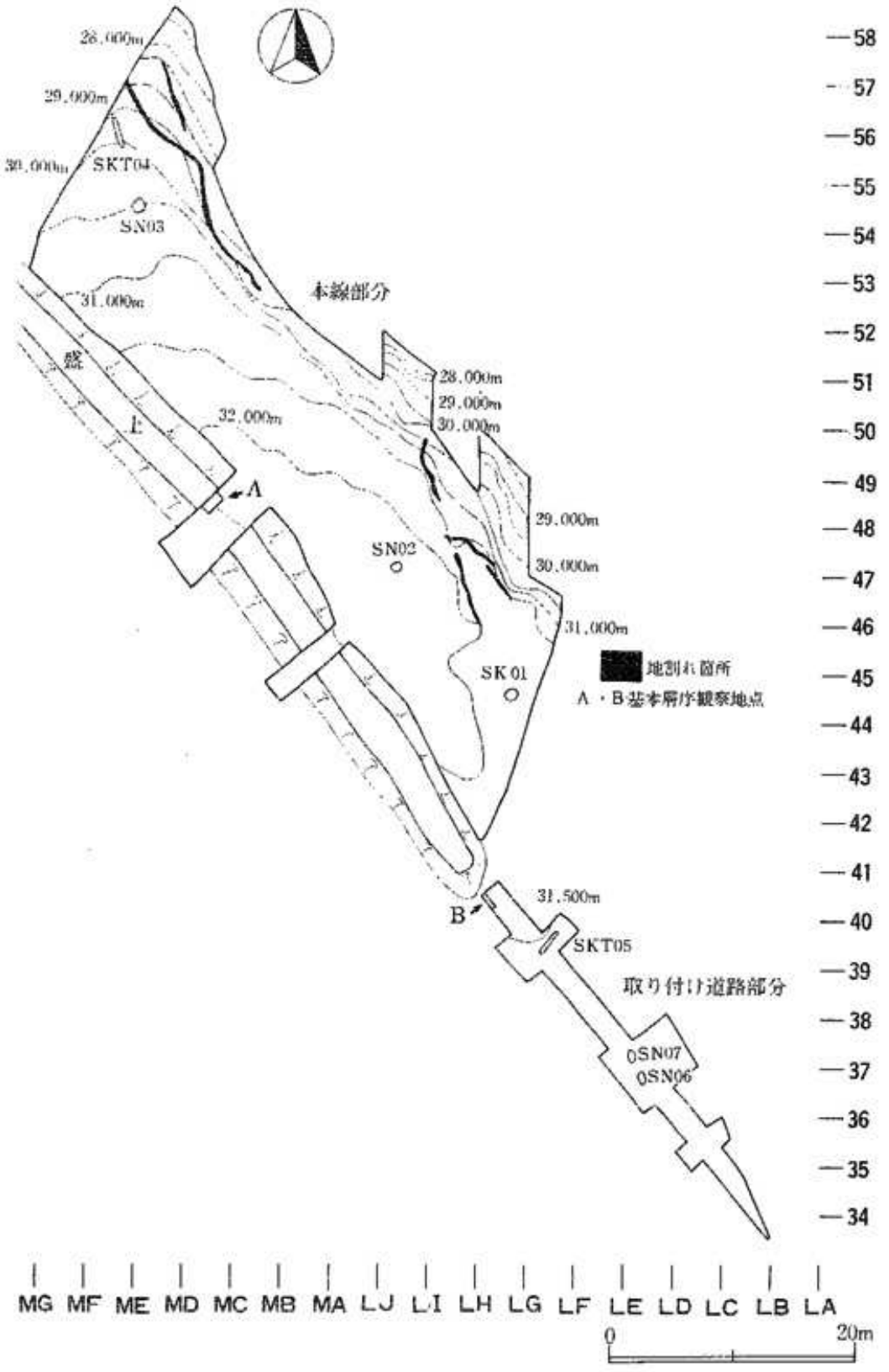
第121図　遺跡基本土層図

Ⅳ層　褐　色(10Y R4/6)地山漸移層、Ⅱ層粒子少量混入、確認できない所もある。

Ⅴ層　黄褐色(10Y R5/6)地山粘土層。

第2章　調査の経過

8月3日、本線部分調査開始。立木は既に伐採を終了していたが、一部の材木が搬出されておらず、まずこれらを調査区外へ運び出す作業に取りかかる。6日、調査区には笹を中心とする下草が一面に広がり、これを除去・焼却しなければならない。調査面積の割には手間どり、途中盆休みも入り、この作業が終了したのは17日であった。この間並行してプレハブ周辺の排水溝作り、駐車場整備等々も行っている。18日、土捨て場が北側の急斜面であるため、安全確保のため、歩み板等を用いて手すり付きの「土捨て台」を仮設、同日グリッド杭打設に取りかかる。19～25日まで、範囲確認調査時の排土を除去。26日、台地平坦面の粗掘り開始。伐根しながらの作業であり進度は遅い。グリッド杭打設終了。27日、調査区中央部より縄文時代前期とみられる土器片出土。遺構はまだ検出できない。28日、朝から断続的な雨、一輪車がぬかるみで足をとられるため、道路に砂を入れる作業を何度が行った。31日、本日は暑すぎるほどの晴天、作業の進み具合は良くない。9月1日、粗掘りをほぼ終了する。引き続き遺構確認のためのジョレンがけ作業に入る。I G44で土坑確認、S K01とする。2日、調査区内に残る土手状


28.000m
29.000m
30.000m
SKT04
SN03
31.000m
本線部分
28.000m
29.000m
30.000m
32.000m
A
SN02
29.000m
30.000m
31.000m
SK01
地割れ箇所
A・B基本層序観察地点
B
31.500m
SKT05
取り付け道路部分
SN07
SN06
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35
34
MG MF ME MD MC MB MA LJ LI LH LG LF LE LD LC LB LA
0
20m

第122図　遺構配置図

の盛土の除去に入る。この地点を深掘りして、基本土層図を作成することにした。3日、LI47とMD54で焼土遺構を検出、SN02・SN03とする。直ちに確認面での写真と図面作成を行う。5日、北側斜面の粗掘り開始。7日、A地点とした盛土部分での土層図作成に取りかかる。8日、全景写真撮影のため調査区内をジョレンがけする。9日、全景写真撮影、200分の1の遺構配置図及びコンタ作成を行う。10日から調査区内に数多く存在する風倒木痕と考えている黒色土の落ち込みを再精査、この結果16日調査区北端でTピットを確認できた。また台地縁辺部で地割れ痕跡と考えられる溝を検出(第122図遺構配置図を参照)、北端部では20m以上にわたって続くものである。一部を断ち割ってみると、幅20～30cm、深さは30～50cmで断面の形状が先細りのV字形を呈している。底部が上端のラインより斜面下方に位置していることからも、土層がすり落ちたものと解することができよう。17日、Tピットを完掘し、再度全景写真撮影を十二林遺跡側から行い、本線部分の調査を終了した。

取り付け道路部分の調査は11月16日より開始。調査区は道路沿いの細長い区域であるため、幅2mのトレンチを設定して、遺構・遺物を確認次第拡張していく方針を立てた。粗掘りは南東端より始める。18日、中央部分で焼土遺構が2つ並ぶように検出、SN05・SN06とする。SN06の南側で縄文土器の集中する箇所を確認。19日、北側でTピット確認、写真撮影のうち、直ちに掘り込み。完掘し平面画・レベル作成が終了したのは24日である。26日、細長い調査区の両端部から全景写真撮影を行い、これで石丁遺跡の現地での調査を完了した。

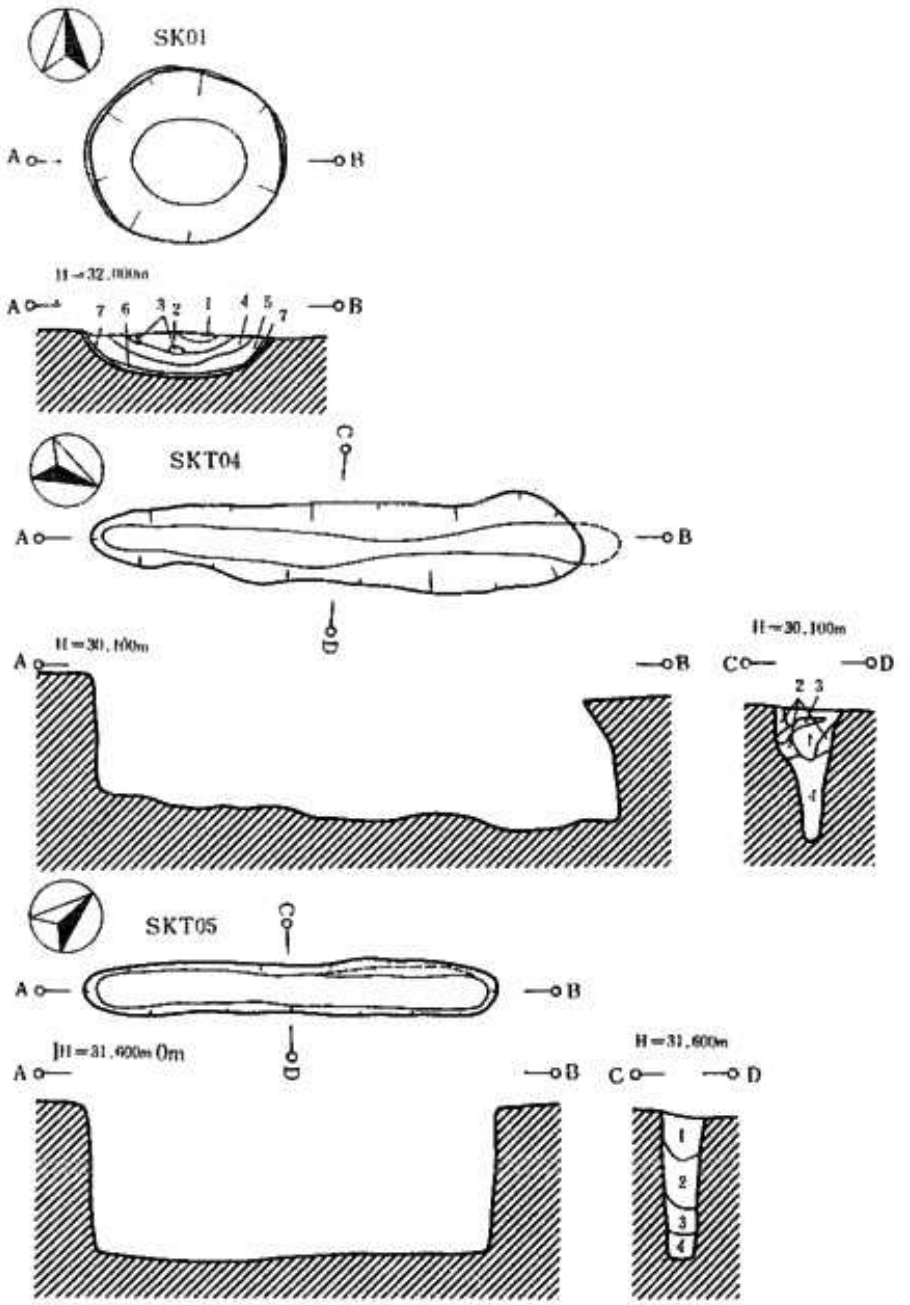
第2章　調査の記録

第1節　検出遺構

石丁遺跡において検出された遺構は、土坑1基、Tピット2基、焼土遺構4基である。これら遺構の帰属年代については、出土遺物を確認できず不明と言わざるを得ない。

SK01第1号土坑(第123図、図版49)

本線調査区南側、LG44の地山面で検出した。規模は、長径1.1m、短径0.95mで東西にやや長い円形を呈する。中央部分での深さは25cmある。側壁の大部分は火熱を受け赤化している。西～北側の壁が最も良く焼けており、赤褐色というより褐色～灰色を呈しており、還元に近い状態におかれたことを物語る。これに比すと、一方の東～南側の壁は火熱を受けた度合はやや低い。底面も北西部を中心に赤化している。堆土中には炭化物を主とする層(2・6層)が認め

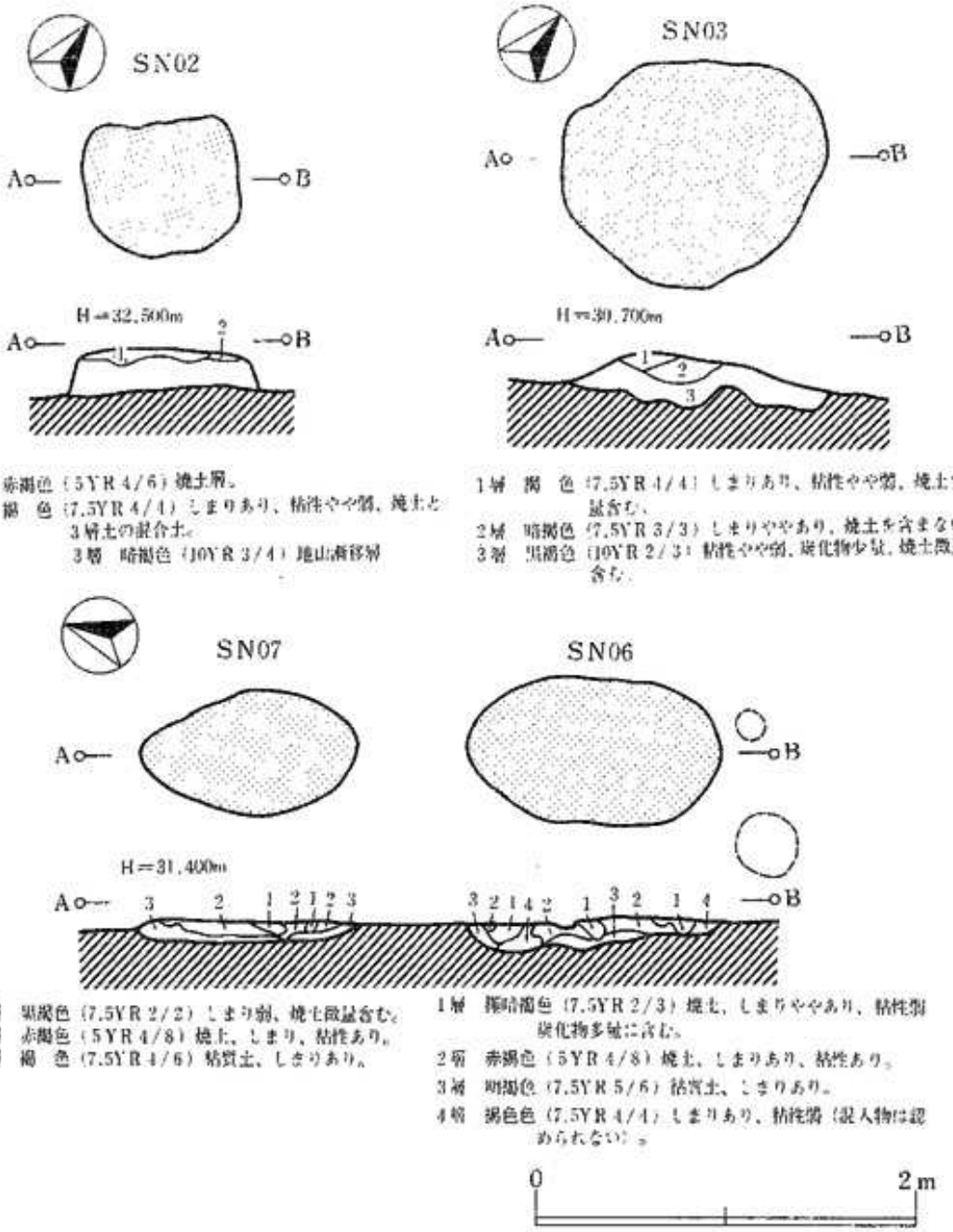


1層　黒褐色（10YR 2/2）しまり、粘性弱、地山粒子微量含む。
2層　暗褐色（10YR 3/3）しまり、粘性弱、地山粒子しもふり状に多量に含む。
3層　褐　色（10YR 4/6）粘質土、しまりややあり、混入物ほとんどなし。
4層　褐　色（10YR 4/6）粘質土、しまりややあり、黒褐色土微量含む。

1層　黒褐色（10YR 2/3）しまりやや弱、地山粒子ごく微量含む。
2層　暗褐色（10YR 3/4）しまり1層よりややあり、地山粒子多量に含む。
3層　褐　色（10YR 4/4）地山ブロック。
4層　褐　色（10YR 4/6）粘質土、しまりは2層と同じ。

0　2m

第123図　SK01第１号土坑・SKT04第１号Tピット・SKT05第２号Tピット



1層　赤褐色（5YR 4/6）焼土層。
2層　褐　色（7.5YR 4/4）しまりあり、粘性やや弱、焼土と3層土の混合土。
3層　暗褐色（10YR 3/4）地山漸移層

1層　褐　色（7.5YR 4/4）しまりあり、粘性やや弱、焼土少量含む。
2層　暗褐色（7.5YR 3/3）しまりややあり、焼土を含まない。
3層　黒褐色（10YR 2/3）粘性やや弱、炭化物少量、焼土微量含む。

1層　黒褐色（7.5YR 2/2）しまり弱、焼土微量含む。
2層　赤褐色（5YR 4/8）焼土、しまり、粘性あり。
3層　褐　色（7.5YR 4/6）粘質土、しまりあり。

1層　暗赤褐色（7.5YR 2/3）焼土、しまりややあり、粘性弱炭化物多量に含む。
2層　赤褐色（5YR 4/8）焼土、しまりあり、粘性あり。
3層　明褐色（7.5YR 5/6）粘質土、しまりあり。
4層　褐色色（7.5YR 4/4）しまりあり、粘性弱（混入物は認められない）。

0　2m

第124図　SN02第1号・SN03第2号
・SN06第3号・SN07第4号焼土遺構

られるが、遺物の出土もなく、何を焼いたいつの時代の遺構なのかについては明らかにできなかった。

SKT04第1号Tピット（第123図、図版49）

本線調査区北端、ME55・56で検出した。検出位置は北東部の斜面に移行する直前の平坦面である。確認面での長軸は2.72m、短軸は0.3～0.5m、底面は北側でオーバーハングしており、

その長さ2.86m、幅0.1～0.2mである。深さは約0.7mを測る。出土遺物はない。

ＳＫＴ05第２号Ｔピット（第123図）

取り付け道路調査区北側で検出した。検出位置は平坦面である。長軸2.3m、短軸は0.25～0.3mで、ほぼ垂直に掘り込まれ、その深さは0.8～0.85mを測る。出土遺物はない。

ＳＮ02第１号焼土遺構（第124図、図版49）

本線調査区中央南側、ＬＩ47で検出した。石丁遺跡では最高位の平坦面に位置する。経約70cmの不整方形を呈する焼土遺構である。焼土の厚さは５～８cm、地山漸移層（Ａ地点Ⅲ層に相当する）中に分布する。地山面から15～20cm浮いた形となっている。出土遺物はない。

ＳＮ03第２号焼土遺構（第124図、図版49）

本線調査区北側、ＭＤ・ＭＥ54で検出した。規模は長径1.4m、短径1.2mの不整円形を呈する。焼土の厚さは15～25cmで、地山面を僅かに掘り下げているが凹凸著しい。焼土の分布密度は、ＳＮ02より低い。遺物は出土しなかった。

ＳＮ06第３号焼土遺構（第124図）

取り付け道路調査区ほぼ中央部で検出した焼土遺構である。規模は、長径1.35m、短径0.75mの南北に長い楕円形を呈している。焼土分布はＳＮ02のように面的に広がるというものではなく、焼土の色調・密度・粒径等の異なるものの集合体という様相を示す。遺物は出土しなかった。

ＳＮ07第４号焼土遺構（第124図）

取り付け道路調査区ほぼ中央、ＳＮ06の北側に隣接して検出された。規模は長径1.15m、短径0.65mで南北に長い楕円形を呈する。出土遺物はない。

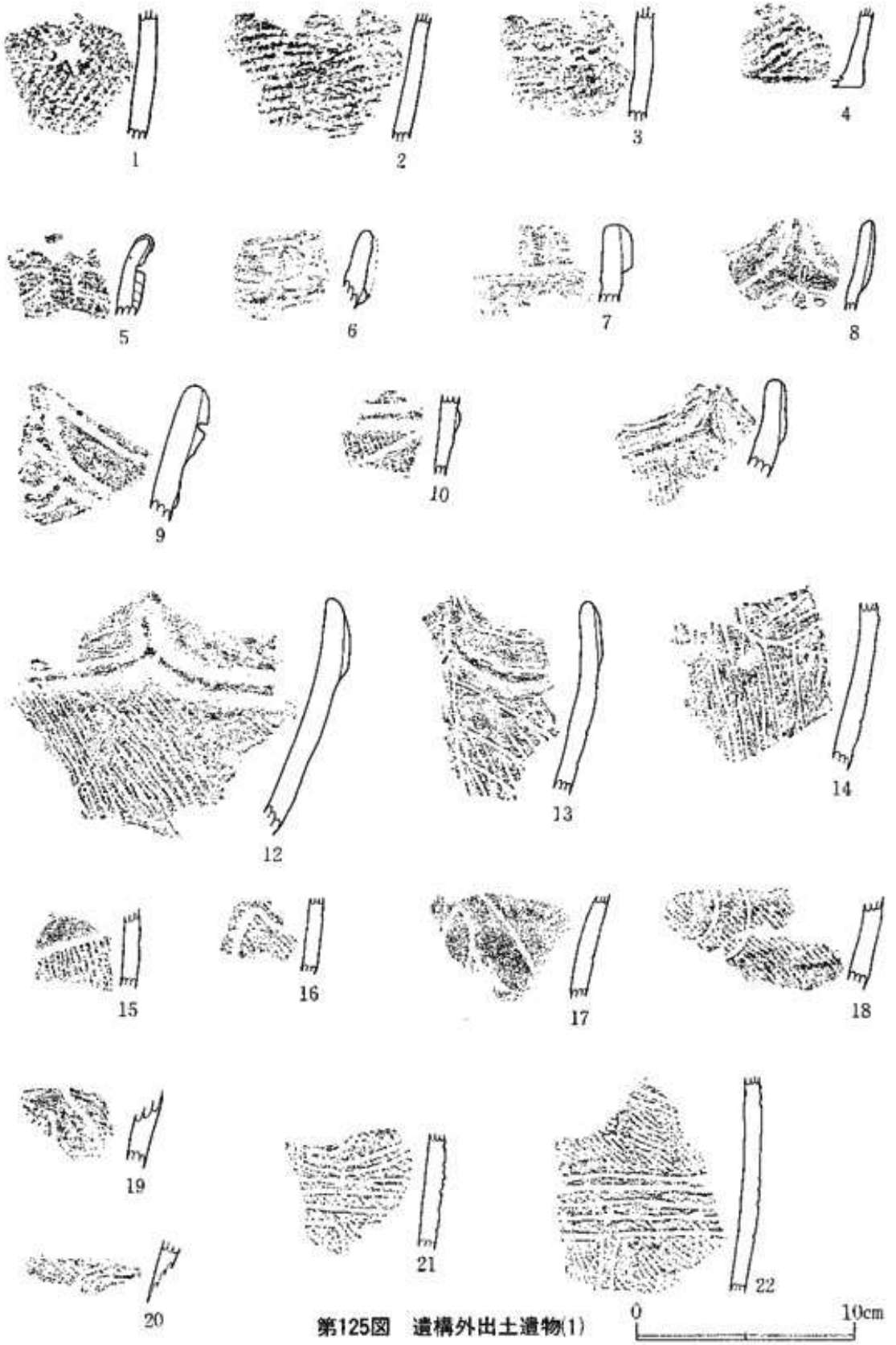
第２節　出土遺物

１　土器

縄文時代の土器として、本線側調査区から縄文時代前期の土器が、付け替え道路側調査区から、縄文時代後期初頭～前葉の土器が出土している。前者を第Ⅰ群、後者を第Ⅱ群土器として記述する。

第Ⅰ群土器（第125図－１～４、図版50）

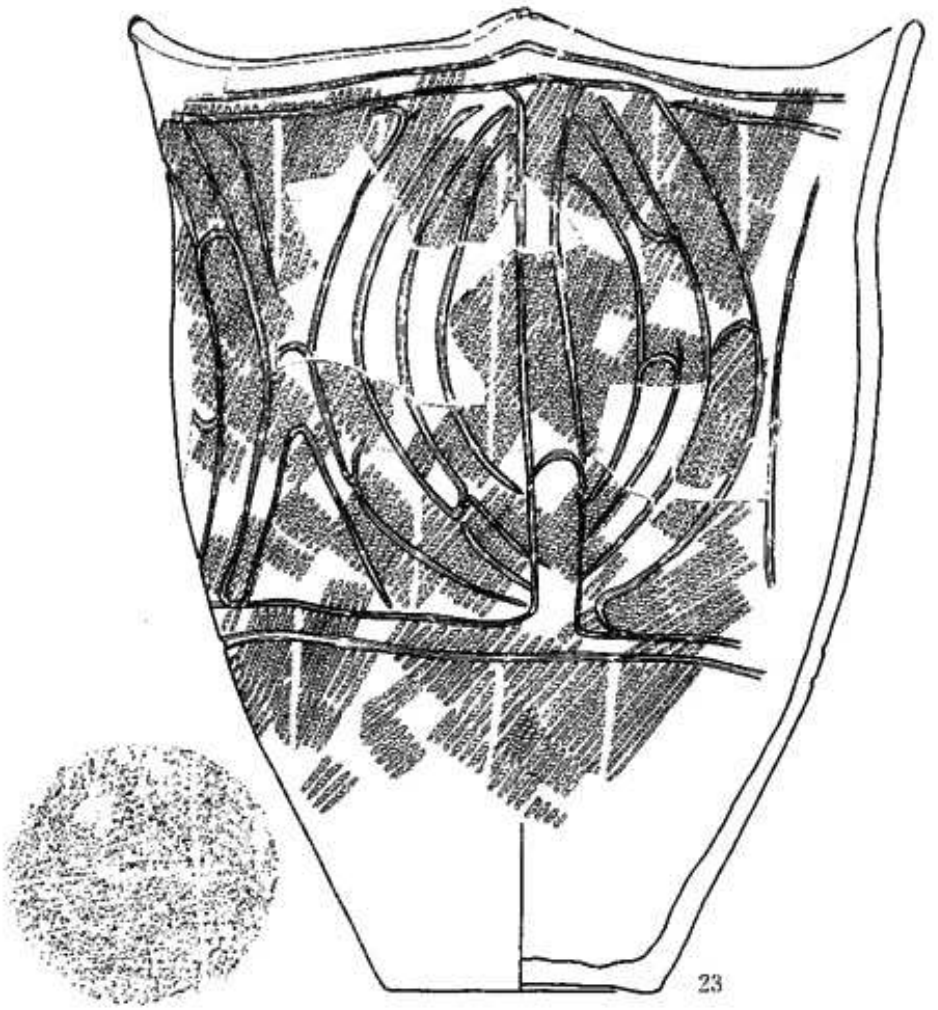
出土地点はＭＣ50グリッドで一括資料であり、同一個体である。体部から底部までほぼ直線的におりる深鉢形土器であり、底部は外側に張り出し気味となる。全面にＬＲＬの複節縄文が横位に回転施文されている。胎土には繊維を含みかつ比較的大きな砂粒を含んでいる。

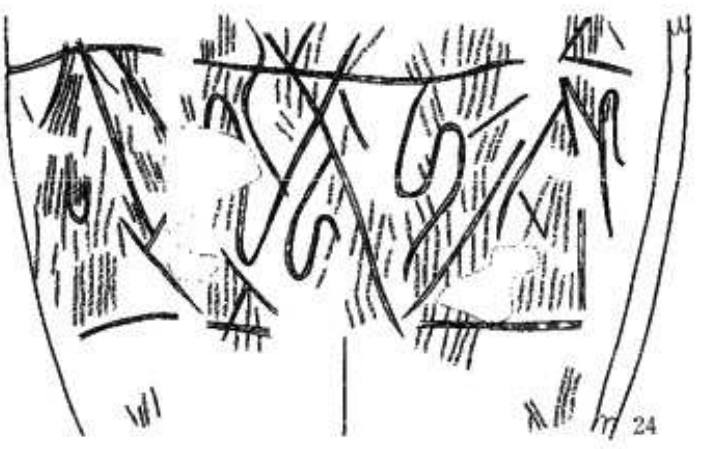


第125図　遺構外出土遺物(1)

第Ⅱ群土器（第125図－5～22・第126図－23、24・第127図－25、図版50・図版51）

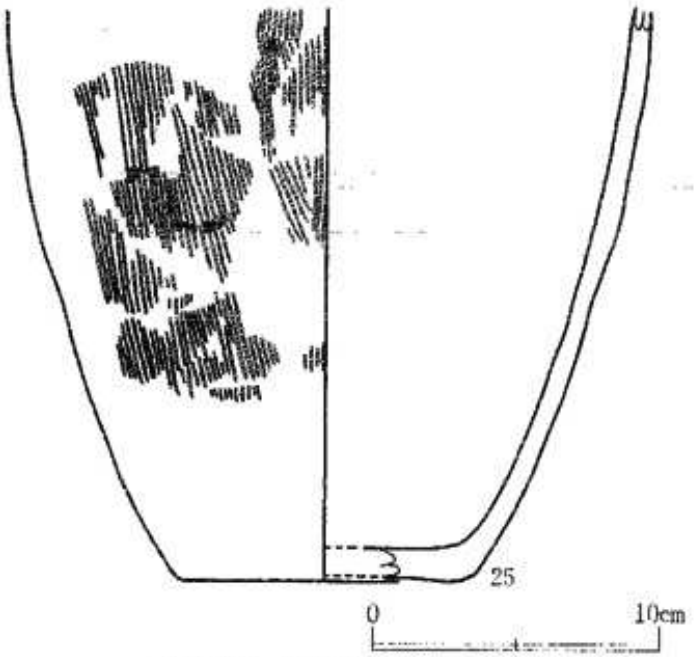
全て付け替え道路側調査区から出土した資料である。第125図－5は波状口縁の鉢形土器破片である。口縁部に文様帯をもつが、文様は粘土紐の貼付けと沈線によって構成されている。まず、口唇部外面に扁平な粘土帯が貼付けられ、その下の文様帯部分よりも若干高く作られている。そして波頂部には粘土紐による径1cm程のリングが貼付けられ、そこから、2本の粘土紐を撚り合わせた隆帯が、上下端をそれぞれ開放して貼付けられている。粘土紐の両側には反転する沈線が粘土紐施文後に描かれて、文様帯中を満たしている。胎土に砂粒を含むが焼成は堅緻である。6も粘土紐の貼付けによって口縁部文様帯の下限が画されている土器である。粘土紐は貼付け後横方向のナデ調整をうけ、その後、文様帯中に反転する沈線が描かれている。縦位に貼付けられた粘土紐もあったようだが、剥落しその痕跡が観察されるのみである。胎土には僅かであるが砂粒が含まれ、堅緻でかつ明るい色調に焼成されている。7も口縁部文様帯が粘土紐の貼付けによって作られている土器である。6同様、貼付け後の粘土紐は調整をうけ、さらに粘土紐の区画内に沈線が巡らされている。粘土・焼成も6と同様である。8は波状口縁の波頂部の破片。やはり粘土紐の貼付けが施されたものであるが、貼付け後の器面調整が徹底して行われているため、ほとんどそれと判らない。器面調整された表面が僅かな高まりとして残り、それを区画するように沈線が施文されていることからうかがい知ることができるのみである。波頂部から垂下する2条の沈線は波状口縁に沿って開き、さらにその下にも沈線による文様が描かれている。ほとんど砂粒を混じえない粘土で作られており、焼成も堅く、明るい色調に焼き上がっている。9も波状口縁の土器であるが、この土器の場合には貼付けられた粘土帯上に刺突が施されている。刺突は粘土紐粘土帯の連結する部分や、波頂部に垂直に施文されている。胎土には砂粒が多く含まれ、断面を見ると粘土は縞状に積まれている。10・15は同一個体の破片であるが、これも粘土紐貼付け後に調整された土器片である。調整は粘土紐両脇に沈線を引いて行われる。また地文に施される縄文はLの撚糸文である。明るい色調に焼き上げられているが、胎土に砂粒を含み器壁はかなり脆い。11～14は同一個体の土器で3～4単位の波状口縁をもつ深鉢形土器に復元できるであろう。体部はバケツ形に近く口縁部はやや内傾する。口縁の波頂部から3cm程の粘土紐を垂直に貼付け、その下にも波状口縁に沿って粘土紐が貼巡らされている。粘土紐は貼付けた後丁寧な調整をうけている。粘土紐で区画された口縁部の文様帯には粘土紐隆帯と口縁に沿って沈線が描かれるが、それが一部省略された破片(12)もある。体部にはLの撚りの絡条体を左上一右下の方向で回転させて斜行する撚糸文を施している。さらに部分的ながら葉脈状の文様(13)や曲線と直線を組み合わせての文様(14)を沈線で描いている。胎土にはごく僅かの砂粒を含むが、焼成は堅く明るい色調に発色している。16～19は沈線で曲線的な文様を主要モチーフとして描く土器である。17・19は卵形の構図の中にS字状に連鎖沈





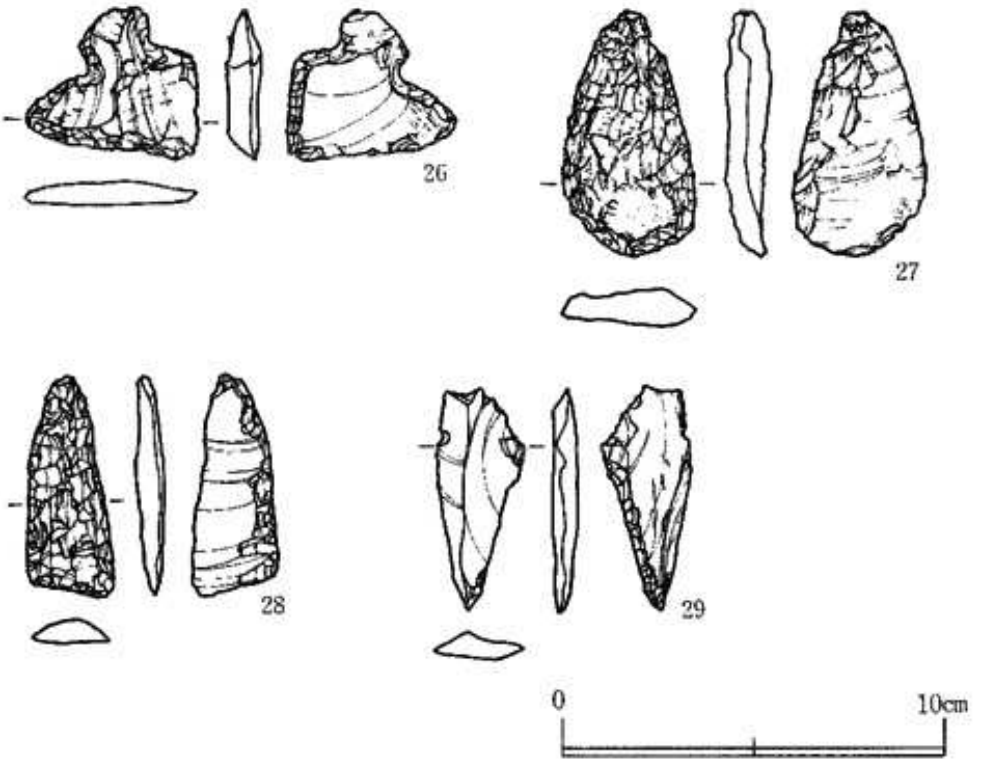
0 10cm

第126図　遺構外出土遺物(2)



第127図　遺構外出土遺物(3)

線が描かれる文様になるであろう。17の土器は磨滅が著しく判別できないが、地文の縄文は16・19がLR撚糸の縦回転、18がRL撚糸の横回転によって施文されている。いずれの破片も胎土に砂粒を含んでいるが、焼成は良好である。16・17はやや明るい色調に、18・19はやや暗い色調に発色している。20～22は同一個体の土器片である。地文に1段Lの撚糸を縦に回転し、無節の縄文を施した後、沈線による文様を描いている。沈線の文様は器面を水平に巡る5条の平行沈線を境とし、その上では2条の平行沈線による曲線的構図の文様、その下では垂直に降ろされる2条の平行沈線が描かれている。胎土には砂粒が含まれるが、焼成は良好でやや暗い色調に発色している。23は、4単位の波状口縁をもつ深鉢形土器である。口縁部は外反し、体部にやや膨らみをもたせて底部まで降りる。波頂部には2列の刻目が口唇に対して直角にまた垂直に施される。器高の上位7割程が広い文様帯の描画面として使われているが、文様帯の上下限は2条づつの沈線によって画され、うち上限を画する沈線は口縁に沿って波状に描かれている。文様帯中には口縁の波頂部に対応した位置で4単位の楕円形構図の文様が、沈線を重ねて描かれる。楕円形構図の文様には波頂部下から垂直に降りる2条の沈線とその左右両側に向かい合わせで描かれる4条づつの弧線によって構成されている。沈線は一方向に引かれるのではなく、ところどころでその方向を反転させて隣り合う沈線と連結するようにして描かれている。これらの沈線は地文にRLの縄文を縦回転して施文した後に描かれている。底部底面は僅かに中央部が凹む揚底となり、成形時に敷いていた笹葉状の圧痕が観察される。胎土に砂粒を含むが、焼成は良好でやや暗い色調に発色している。24は体部にやや膨らみをもつ深鉢形土器の体部破片である。地文としてLの撚りの絡条体を縦に回転して撚糸文を施した後、約8cmの間隔をあけて器面を巡る2条の沈線を引き、それを交わる斜めの沈線によって互い違いに連なる三角形の構図を作り出している。各々の三角形の構図内には縦位のS字状沈線が描かれている。胎土は比較的精選された粘土が用いられるものの、焼成は不良で脆弱な仕上がりである。



第128図　遺構外出土遺物(4)

暗い色調に発色している25は緩いカーブをもって降りる深鉢形土器の体部下半から底部にかけての破片である。体部にはLの撚りの絡条体を縦に回転させて撚糸文を施文しているが、23の土器と同様、底部近くの8㎝程の間は横位に丹念にミガキ調整が施されている。胎土に若干量砂粒を含む。明るい色調に発色してはいるが、焼成は不良で器壁は脆い。

2　石器

縄文時代の石器として、石匙1点、石鏃2点、調整剥離の施された剥片1点が出土している。

石匙(第128図26、図版51)

横長の剥片を素材とした横形石匙である（本体形状は左側縁側で尖り、右側縁側が直線的になる）。本体部分の下縁が左側縁にかけては主要剥離面側からの剥離によって、また右側縁と左側縁上部は表面側からの剥離によって刃縁として作り出されている。下縁の剥離は角度が深く、したがって、刃角も急峻なものになっている。摘みを作り出すための抉りの部分の剥離は両面から行なわれるが、右側では主要剥離面側から、左側では表面側からそれぞれ最終の比較的大きな加撃が行なわれて一面ずつの剥離面が残されている。摘み部分にあった打瘤は粗い調整によって剝ぎ取られているが、一部に打面を残している。それ以上の細かな剥離は加えられていない。硬質頁岩を石材としている。

石匙(第128図27・28、図版51)

27は瑪瑙製の石匙である。基部から先端に向かい側縁が直線的に開き、先端は円弧状に湾曲する。縦長の剥片を素材とし、周縁の調整剥離は主要剥離面側からのみ加え、表面側からの剥離は全く行なわれていない片面調整である。左側縁から先端にかけては比較的深い角度で剥離が施され、右側縁では浅い角度で調整されている。したがって左側縁から先端部での刃の角度は急峻であるが、左側縁では鋭い。表面側下部には大きな自然面が残されている。基部は打瘤を取り除くための加撃が行なわれ、打面中央から半分を大きく割り取っている。しかし、割れ方は不規則である。

28は頁岩の縦長剥片を素材とした石匙である。左側縁は基部に近い側で緩く湾曲し、右側縁では直線的に開く。また先端は直線的に作られている。調整剥離は素材剥片の表面側に丹念に施され、本来剥片の表面にあった稜線などは全くない。主要剥離面側へは、左側縁側だけ僅かに調整されている。素材剥面の打面、打瘤とも剥ぎ除かれている。

調整ある剥片(第128図29、図版51)

図の左側においた面の稜線右側に打瘤を含む凸面が残されている。したがって図の右側を打点として剥がれた横長剥片が素材である。調整はこの稜線右側から素材の表面側に向かって行なわれている。また、左側は折断され、その痕跡がネガティブなヒンジフラクチュアー面となって残っている。この調整剥離、折断によって鋭い尖端部分が作られている。石材としては頁岩が用いられている。

第3章　まとめ

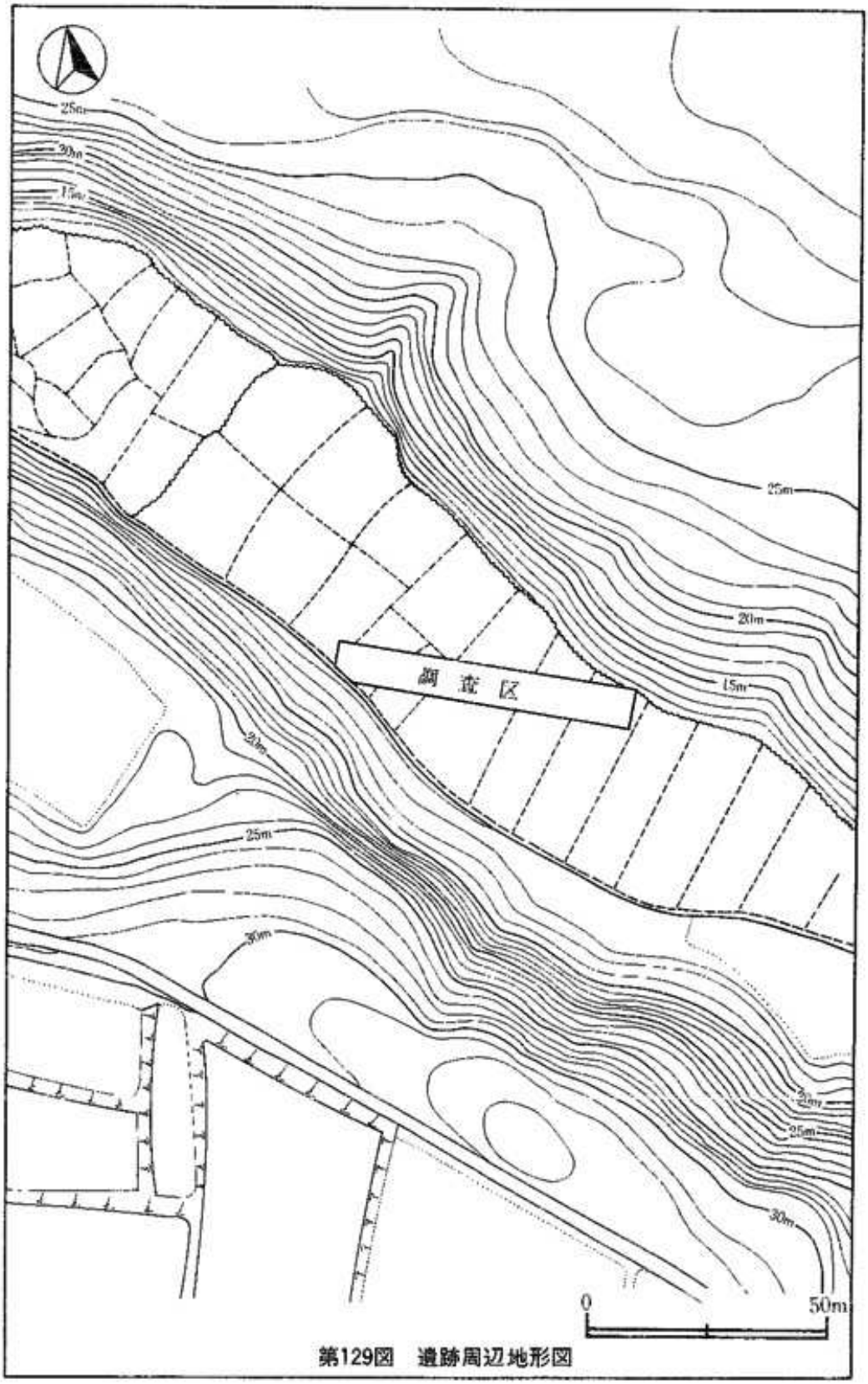
調査の結果、明らかにし得たことは、検出遺構に土坑1基、Tピット2基、焼土遺構4基を確認したこと、検出遺物に縄文土器(前期・後期初頭～前葉)が存在することである。昭和61年の範囲確認調査において、土師器の細片を見出だしているが、本調査では明らかにできなかった。唯一で最大の問題点は、遺構に伴う遺物がなく遺構・遺跡の帰属年代を特定できないことにある。遺物からみると、縄文時代に断続的に営まれた痕跡を示すが、遺構がこれらのある時期に含まれるものなのか、全く異なる時代に構築されたものであるかについては明確にできなかった。

遺構では2基のTピットは、長軸が2.72m、2.3mと2m代の数値を示しており、当該地域の同種の遺構と比較しても小型の部類に入るものであろう。SK01とした土坑は、何らかのもの

を焼成した遺構であることに異論はない。対岸に位置する十二林遺跡では、土師器の焼成遺構と考えている土坑が11基検出されている。形態的に見た場合、石丁のそれと大差ない。側壁・床面とも良く焼けて赤褐色を呈している。ところが石丁のＳＫ01は部分的ではあるが、還元状態になり、側壁が灰色に変化している。この点において十二林の遺構と大きく異なるものであり、かつ遺構の性格を想定できない要因にもなっている。

蟹子沢遺跡

（3KKZ）



第129図　遺跡周辺地形図

第1章　発掘調査の概要

第1節　遺跡の概観

蟹子沢遺跡は、成合台地を東西に開析している狭長な沢部に立地する。開析作用により分断された北側の台地には十二林遺跡、同じく南側の台地には石丁遺跡が位置している。標高は約11m、十二林遺跡との比高差は約15mである。現況は水田となっている。

遺跡は昭和61年9月～10月に実施した十二林遺跡範囲確認調査において確認・登録されたものである。これは当初、十二林遺跡の範囲を蟹子沢の所在する沢まで含めて考えていたものであったが、立地・出土遺物さらに小字名(蟹子沢)を考慮に入れ、十二林と分離し沢部を蟹子沢遺跡として登録したものである。

調査は工事工法上、切土される水路部分500㎡を対象として行った。調査の方法は、十二林遺跡等と同様グリッド方式によるものである。建設省が水路工事用に打設した中心杭を発掘調査の基準点とし、これを通る南北の幅杭を結ぶMAライン、これに直交する線を50ラインとしてグリッドを設定した。グリッドの呼称等については、前段の調査の方法を参照されたい。なお、南北方向のMAラインは磁北から東に20°偏っている。

第2節　調査の経過

9月18日、本日より調査開始。グリッド杭打設と並行しながら粗掘を始める。低湿地だけにわき湧水が著しい。19日、旧水田面の下には砂層面が存在するが、これが30～40cm掘り下げて現れる所と70～80cm下げても現れない箇所が認められる。20日、砂層面がなかなか現れないのは、調査区の両端部であり、ここには未発達ではあるが泥炭層が形成されている。22日、両端部では泥炭層の間に砂礫層が入る。1m程掘り下げても両端部では砂層に達せず。東側のI.D49では泥炭層中より土師器坏1個体分出土、十二林からの流れ込みか。25日、砂層面が地山であることを確認、この面の精査を行う。調査区東端のLE50では、泥炭～砂層内に3m、経30～40cmの倒木あり、浸水の影響で樹木が緑色を呈していた。中央部砂層面から縄文土器出土、後期中頃のものであろうか。28日、昨日までの雨で調査区は水没化した。水中ポンプ2台をフル稼動させても、排水が完了したのは午後の3時頃であった。30日、農繁期に入り、本日は作業員の出勤率きわめてわるい。10月1日、遺物は中央部に集中しており、出土位置とレベルを計測し取りあげる。2日、全景写真撮影を行い、調査を終了した。

第2章　調査の記録

第1節　遺跡の基本層位

昭和61年の範囲確認調査において、次の点が明らかになっている。耕作土(水田面)の下の砂層中より遺物が出土すること。一方で砂層面を検出できず、泥炭が堆積している箇所も存在すること。このように限られる範囲内の調査でも土層の堆積状態が大きく異なることが把握できていた。このため、東西に長い調査区の北側と南側の壁を利用する形で6ヶ所の土層観察ポイントを選び、湧水と格闘しながら深掘りを行い、土層断面図を作成した。以下では、遺跡の特徴を表しうる3ヶ所の土層断面図(柱状図)を掲げ、遺跡の基本層位を概括していく。

A地点(調査区西側南壁で観察している。)

Ⅰ層　黒褐色(10YR3/1)粘質土、耕作土(水田)。

Ⅱ層　黒褐色(10YR2/2)泥炭質粘土層、植物遺存体を多く含む。

Ⅲ層　黒　色(10YR2/1)泥炭質粘土層、植物遺存体を多く含むがⅡ層より少ない。

Ⅳ層　暗オリーブ灰(2.5GY4/1)砂層、泥炭質粘土層が細い筋状に入り込む。

Ⅴ層　黒褐色(2.5Y3/1)泥炭質粘土層、植物遺存体の混入度合はⅢ層より低い。

Ⅵ層　オリーブ灰(2.5GY5/1)砂層、泥炭質粘土層が筋状に入る。

Ⅶ層～Ⅸ層　砂層と泥炭質粘土層の混合土、Ⅶ層—砂4:泥6、Ⅷ層—砂2:泥8、Ⅸ層—砂8:泥2の割合。

Ⅹ層　灰　色(7.5Y5/1)砂礫層、地表面から1.8m程で達する。

B地点(調査区中央北側で観察している)

Ⅰ層　黒褐色(10YR3/1)粘質土、耕作土(水田)。

Ⅱ層　黒褐色(2.5Y3/2)泥炭質粘土層、植物遺存体を多く含む、混入度合はA地点Ⅴ層に類す。

Ⅲ層　灰オリーブ色(5Y3/2)砂層、植物遺存体を微量含む。

Ⅳ層　灰オリーブ色(5Y5/5)砂層、植物遺存体をごく微量含む、Ⅱ～Ⅳ層の層境は不明瞭。

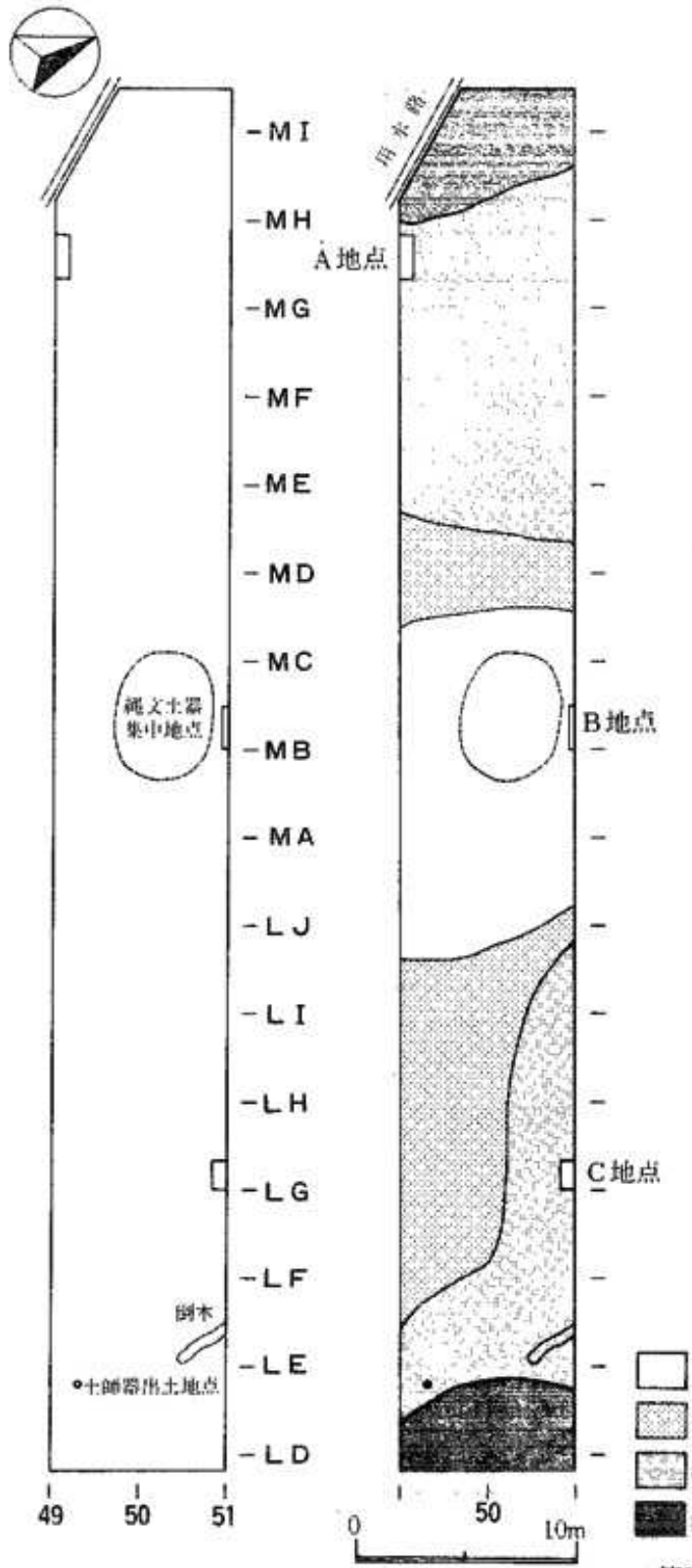
Ⅴ層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂層、いわゆる青砂層、植物遺存体を含まない。この層は少なくとも70cm下までは続き、次第に堅い砂層となっていく。

C地点(調査区東側北壁で観察、土層中の□印は花粉分析のためのサンプル抽出地点)

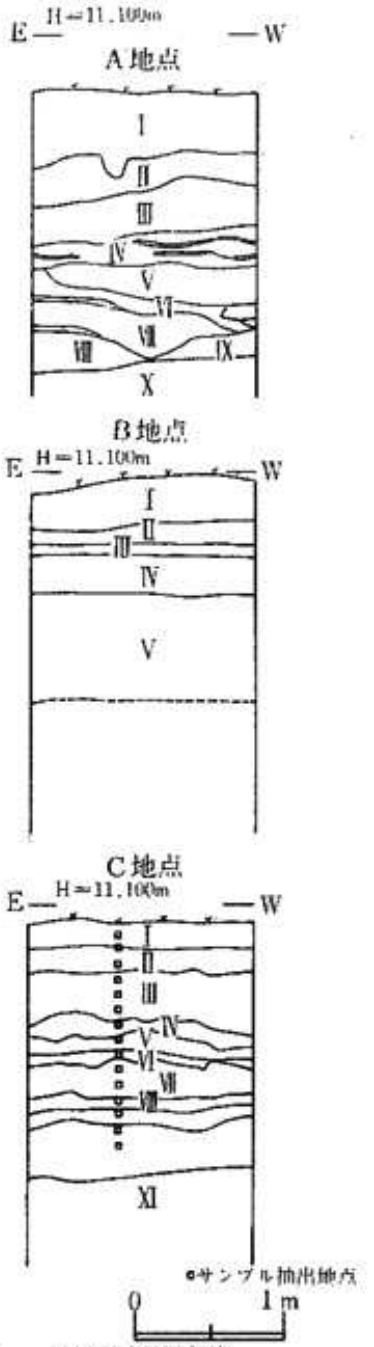
Ⅰ層　黒　色(10YR2/1)粘質土、耕作土(水田)、しまりあり。

Ⅱ層　黒　色(10YR1.7/1)粘質土、耕作土(水田)、しまり弱。

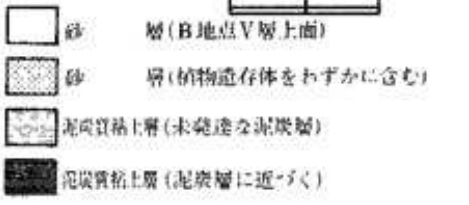
Ⅲ層　オリーブ黒色(7.5Y3/2)砂層、植物遺存体を多く含む。



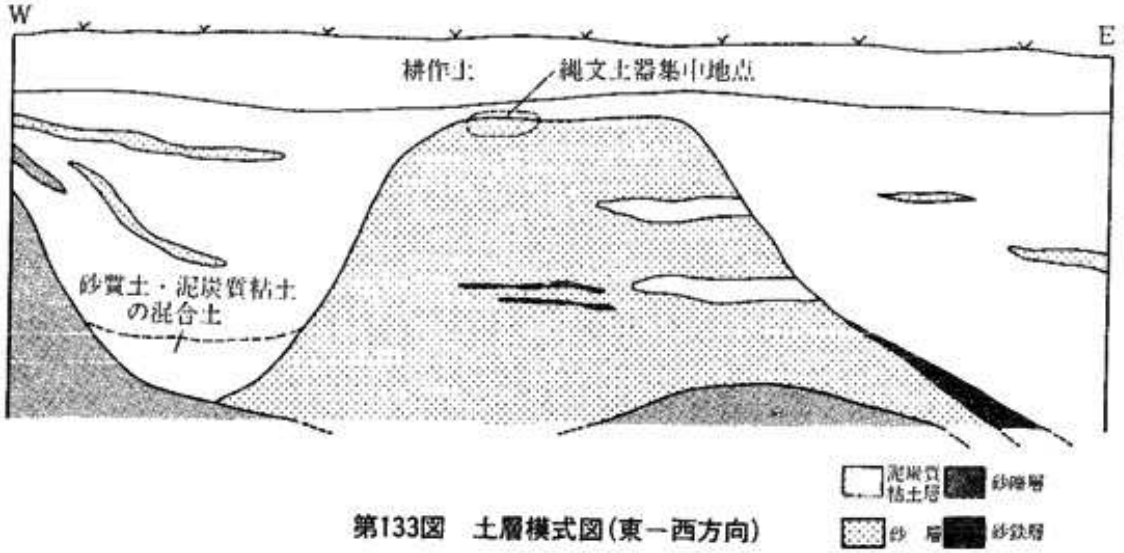
第130図　グリッド配置図及び遺物出土位置図



第132図　遺跡基本土層柱状図



第131図　B地点V層上面を基準にした土層平面分布概念図



第133図　土層模式図(東－西方向)

Ⅳ層　オリーブ黒色(5Y3/2)、泥炭質粘土層が筋状に入る。

Ⅴ層　オリーブ(5Y2/2)泥炭質粘土層、しまりあり、砂質土をブロック状に含む。

Ⅵ層　黒褐色(2.5Y3/1)泥炭質粘土層、しまり弱。

Ⅶ層　灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂層、Ⅲ・Ⅳ層に比較し砂粒が粗く大きい、下部に植物遺存体多く含む。

Ⅷ層　黒褐色(2.5Y3/1)泥炭質粘土層。

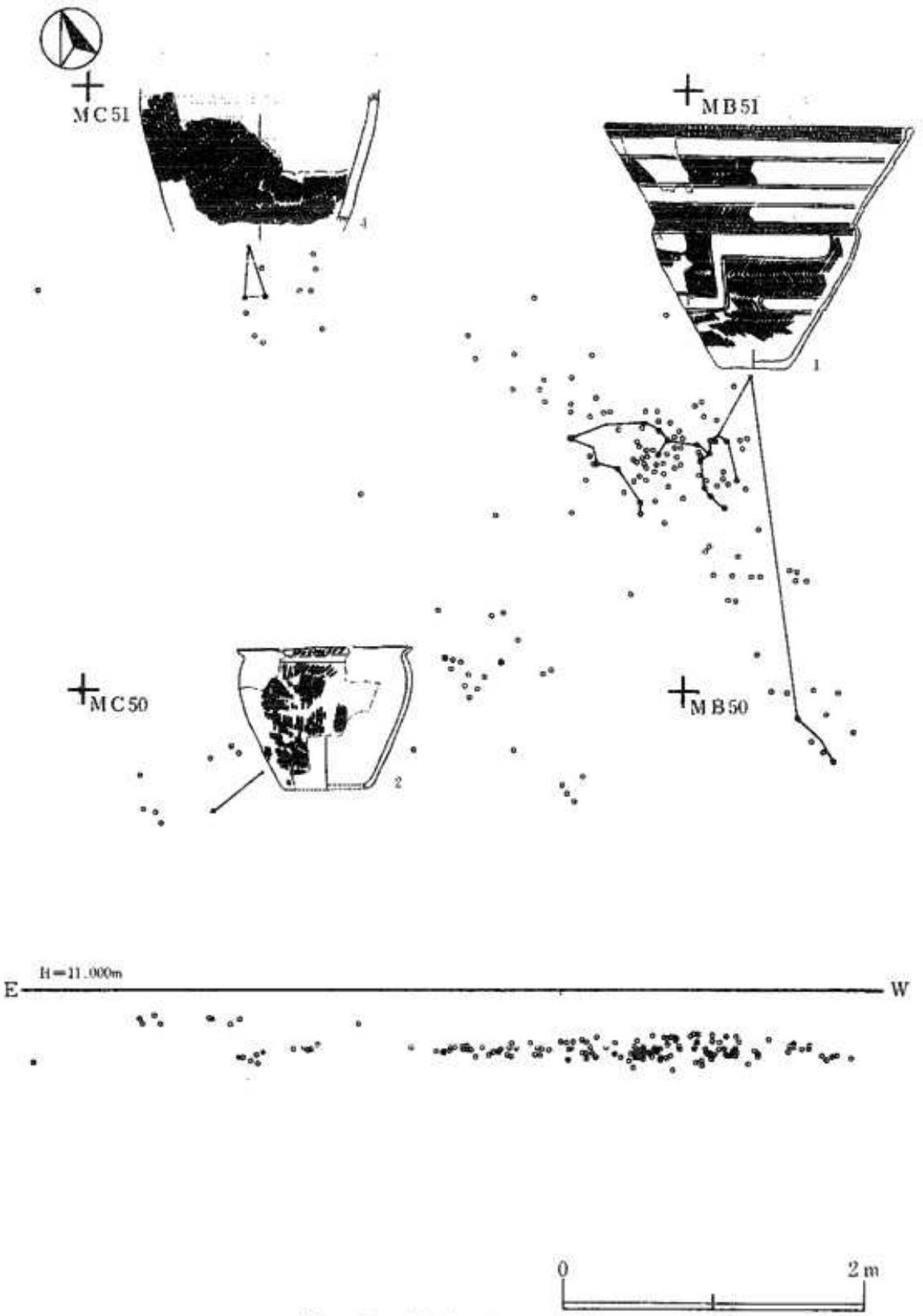
Ⅸ層　オリーブ黒色(5Y3/1)泥炭質粘土層。

Ⅹ層　灰色色(7.5Y4/1)砂層、粒は細かい、上部に植物遺存体含まれる。

Ⅺ層　灰　色(7.5Y5/1)砂礫層、径5～20mmの砂利層に径70～80mmの礫が混じる。A地点Ⅹ層に対応できる。

前記3ケ所の土層断面図と残り3ケ所の観察記録を基に、遺跡、調査区全体としての土層の堆積状態を概念的に模式図に表すと第133図のようになる。まず耕作土以下の土層は大きくみると、砂層と泥炭質粘土層から成る。それぞれ単層として堆積しているもの、砂層中に泥炭質の植物遺存体が含まれるもの、両者が混合しているものなどバラエティーに富む。泥炭質粘土層としたものは一般に植物遺存体を含む泥炭層と把えられる。ところが、蟹子沢では調査区の両端部を例外(第131図参照)として、植物遺存体が腐食しきっていない状態を示し、かつ遺存体の密度がやや粗であることから、泥炭層という名称を用いないことにした。

調査区中央部に突出して位置するのが砂層で、ほぼ平坦である。砂層は西に向かうと急激に落ち込み、泥炭質粘土が次第に厚く堆積していく。同層中には厚さ10～20cmの砂層が幾本か筋状に入り込み、下面では泥炭質粘土と砂が混合している。さらに下層には基盤とみられる径5～20mm程の砂礫層に達する。砂礫層は南西端を最高位として急速に沈み込んでいくようであり、



第134図　遺物出土状況及び接合関係図

B地点では確認できなかった。一方の東に向かうと西よりはやや緩やかに落ち込んで、泥炭質粘土層がこれを補完していく。ここでも筋状の砂層が存在する。調査中央から東寄りにも部分的ではあるが砂礫層を認めることができる。東端部では泥炭質粘土層中に厚さ10cm程の砂層を挟むが1.5m掘り下げても砂層面には達しなかった。これより下は湧水と側壁崩落のおそれが生じたため、掘り下げを断念せざるを得なかった。また砂層中にはごく薄い砂鉄の層も確認できた。

第2節　出土遺物

発掘調査により得られた遺物は、縄文土器、フレーク及び土師器、須恵器、陶磁器、土錘、軽石などである。前者は砂層上面あるいは砂層中より、後者は泥炭質粘土層より出土したものである。

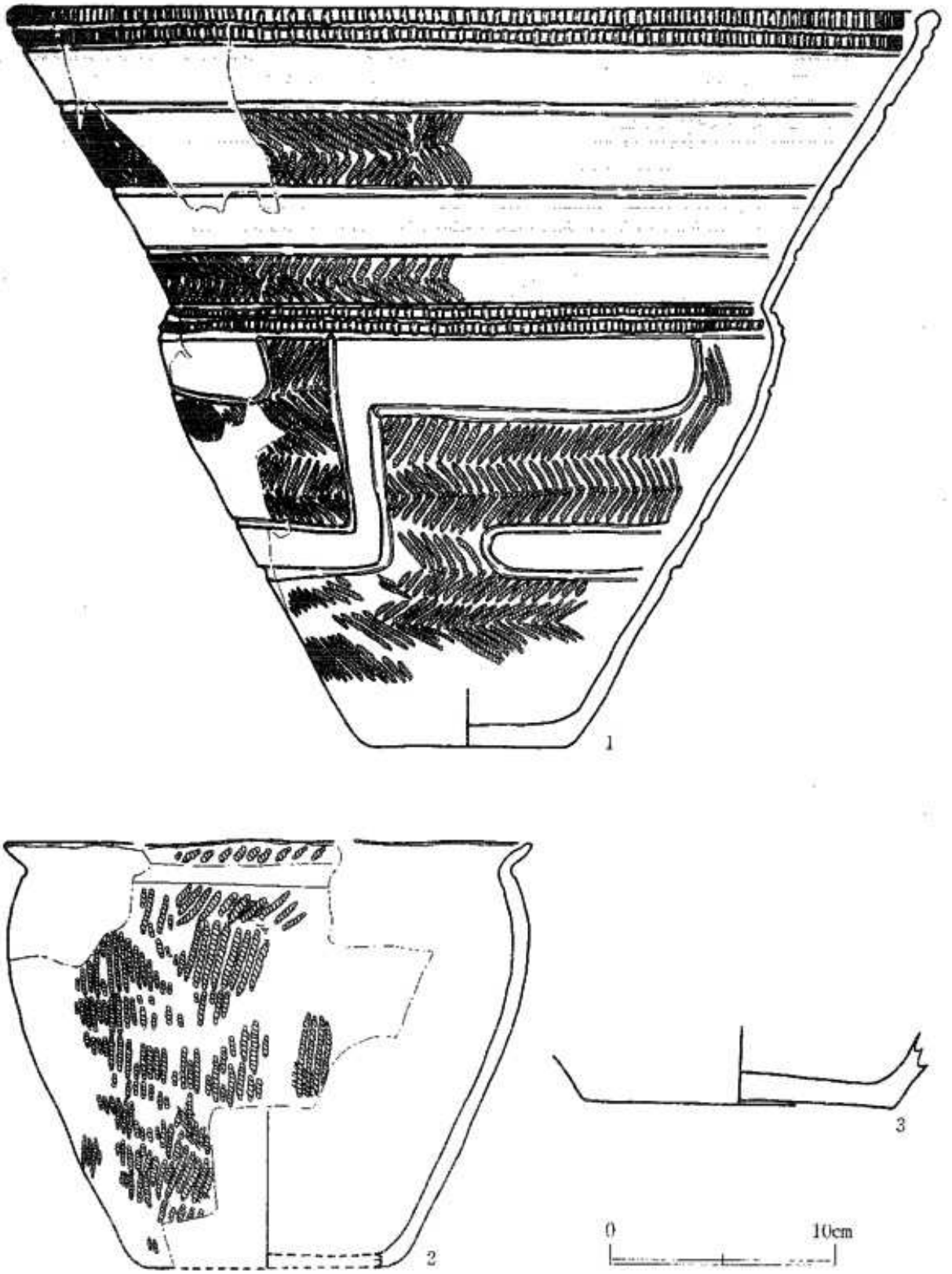
1　縄文時代の遺物（第13図－1～3～第139図－58～61、図版57～図版59）

該期の遺物は、MB50を中心とする径4m程の範囲に集中する。出土層位は砂層面であるが腐植しきっていない植物遺存体がいくらか混じる。第132図B地点の土層図でみると、Ⅲ・Ⅳ層に相当する。遺物はⅡ層からも少量検出されるが、Ⅴ層の青砂層からは確認できなかった。

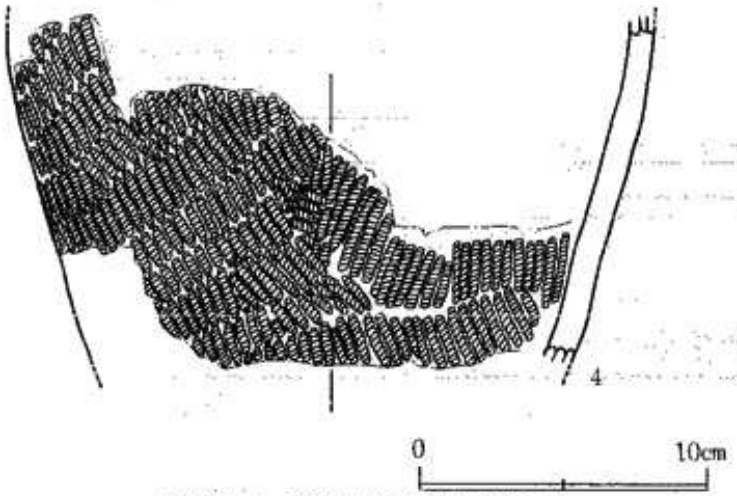
本遺跡から出土した縄文土器は、後期中葉に属するものと晩期終末から弥生時代初めに相当するものとの2つに分かれる。前者を第Ⅰ群、後者を第Ⅱ群土器として記述する。

第1群1類（第135図－1、図版57、第137図－5～16、図版58）

1は体部中央で屈曲する深鉢形土器である。口縁部はその内側で肥厚し段差をつくる。口縁外面と、体部中央の屈曲部分には刻目列が2段にわたって施されるが、刻目は沈線間を器面に対して右から左の方向で刺し取るように行われている。体部中央の屈曲部より上では2帯の縄文帯中に0段多条のRLとLRの縄文を横位回転施文して羽状縄文を表しているが、上下段の縄文帯とも器面の1/8周分毎に羽状縄文の方向を変えている。縄文帯の間の無文帯は深く削り込まれて、地文縄文部分よりもかなり低くなるが、器面調整方向は横位である。沈線も施文後調整をうけて幅広のものになっている。体部中央の屈曲部以下にはクランク状構図の文様が磨消縄文手法によって4単位描かれている。縄文は屈曲部以上と同様2種類の0段多条原体を用いての羽状縄文であるが、クランク状構図の中では比較的整然と回転されているものの、底部近くではその回転方向はかなりバラついている。底面中央は僅かであるが揚底気味となる。5～7、11・12、14～16とも同一個体である。



第135図　遺構外出土縄文土器(1)



第136図　遺構外出土縄文土器(2)

8は、鉢形土器の屈曲部分の破片である。屈曲部に2条巡らした沈線間には棒状工具を下から上へ突き刺すようにして施文した刻目列が並ぶ。また、この刻目列の下にはRLの縄文の回転方向を変えて表現した羽状縄文が施されている。

9は小形の鉢形土器か、壺形土器の口縁部破片である。0段多条RL縄文が施された後、沈線が描かれ、磨消されている。

第Ⅰ群2類(第137図—17、図版58)

無文で研磨された器面に条痕文が縦にひかれた土器片である。裏面にもナデ調整が丹念に施されている。

第Ⅰ群3類(第137図—18、図版58)

撚糸文の施された土器である。撚糸文はRの原体を用い、器面に対して縦に転がされている。

第Ⅰ群4類(第136図—4、第137図—19～29・第138図—30～46、図版58・図版59)

全面縄文の施される深鉢形土器である。いくつかの同一個体破片が含まれる。

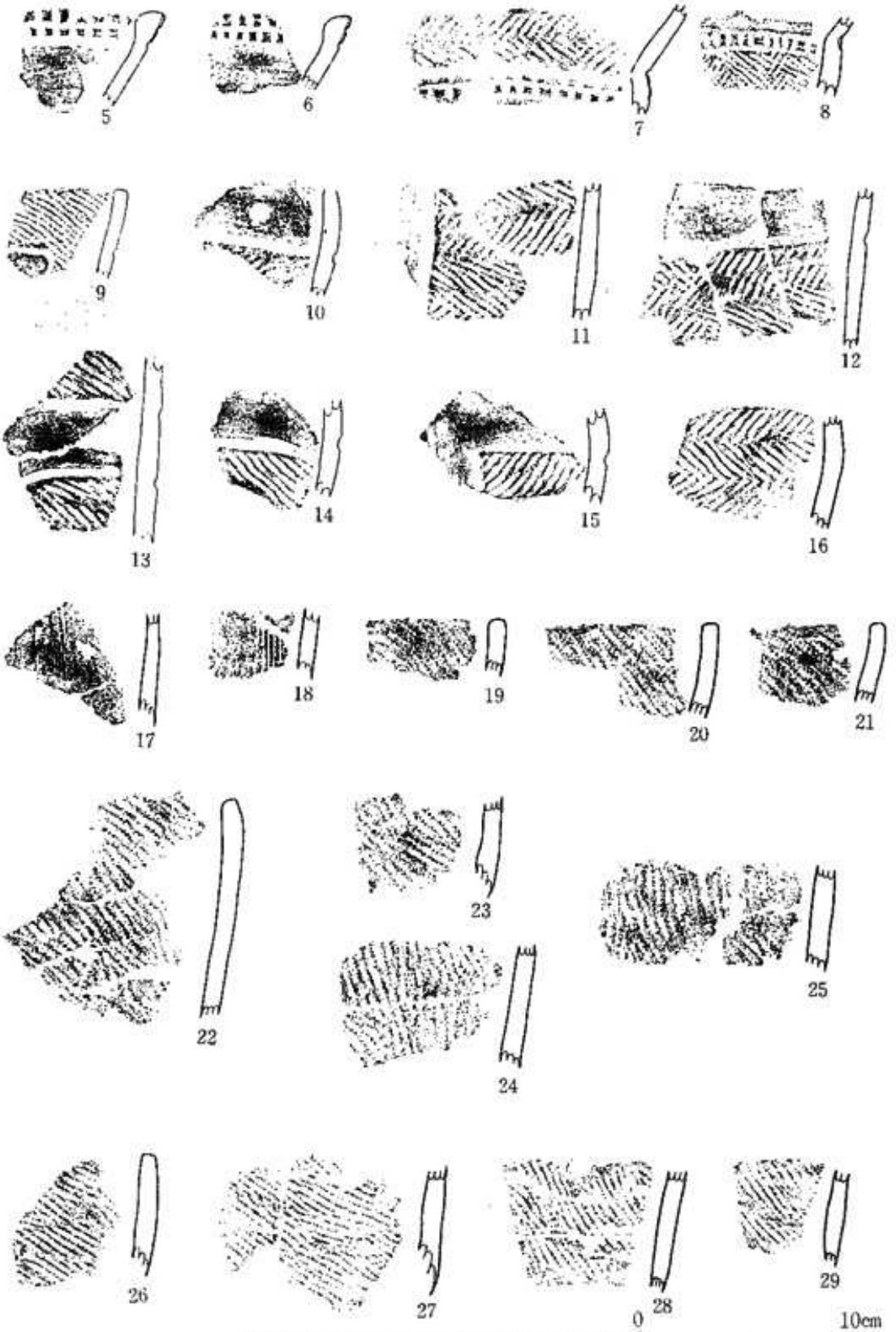
第137図—19～25; 口唇部が水平に切れる深鉢形土器である。僅かに内弯する口縁部以下RL縄文が全面横位に回転施文されている。胎土には砂粒を多く含んでいる。

第136図—4、第137図—26～29; 器形は口縁部から直線的に降りるバケツ形に近いものだろうか。口縁部以下0段3条のRL縄文が横位に回転施文されている。内面は横位の調整が丁寧に施されている。胎土は精選された粘土が用いられている。

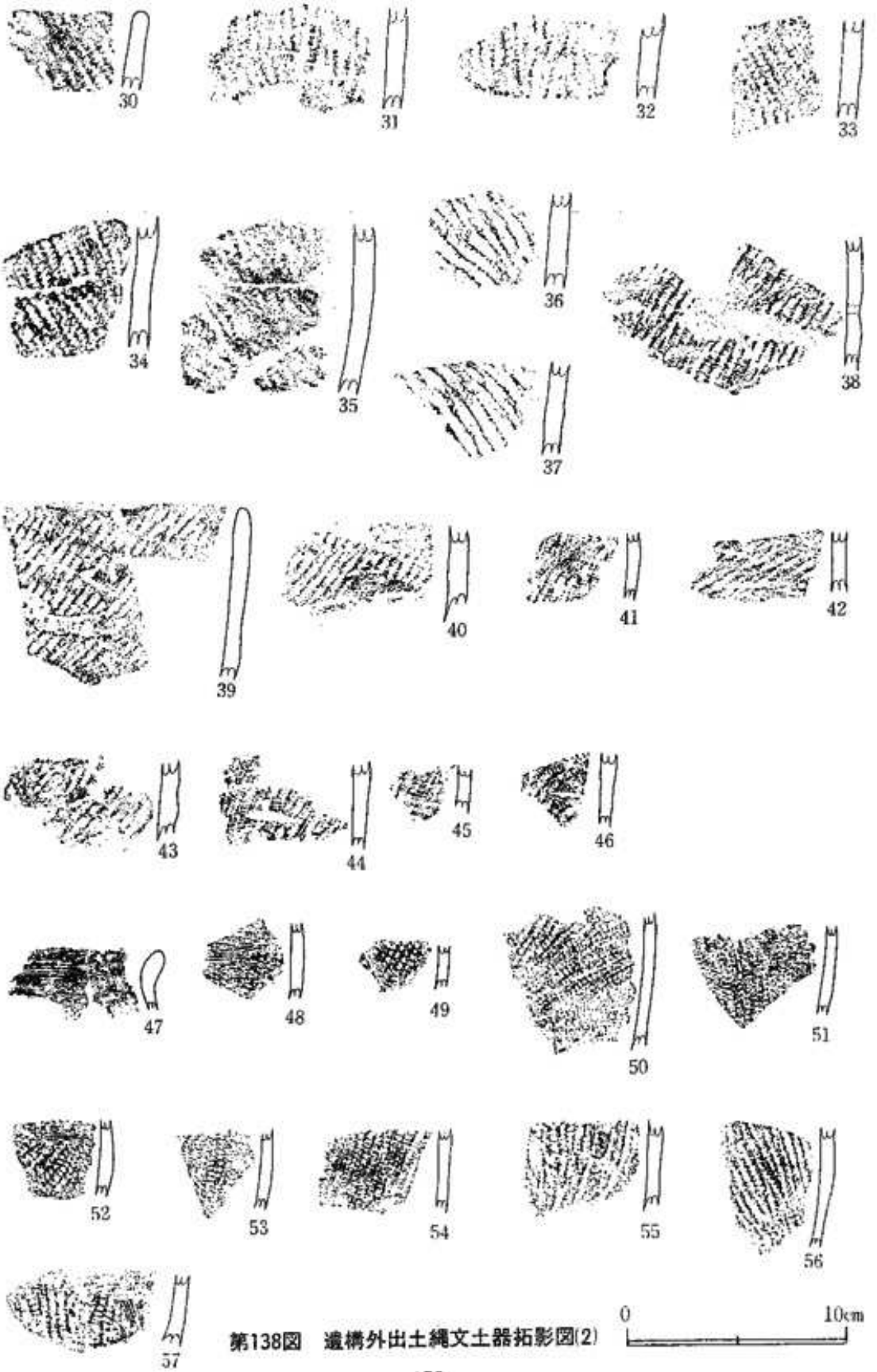
第138図—30～35; いく分丸味を帯びた口唇部をもつ深鉢形土器である。器面にはRL縄文が横位および左上—右下の方向で回転施文されている。

36・37;器面に0段多条のRL縄文を横位に回転施文している。胎土中に砂粒を多く含むが、焼成は良好である。

38～46; 第137図—19の土器同様、口唇部がいくぶん丸味を帯びる深鉢形土器である。器面には0段多条のLR縄文が横位に回転施文されている。内面の器面調整も丹念に行われている。胎土に砂粒を含むが焼成は良好で器壁は堅緻である。



第137図　遺構外出土縄文土器拓影図(1)



第138図　遺構外出土縄文土器拓影図(2)

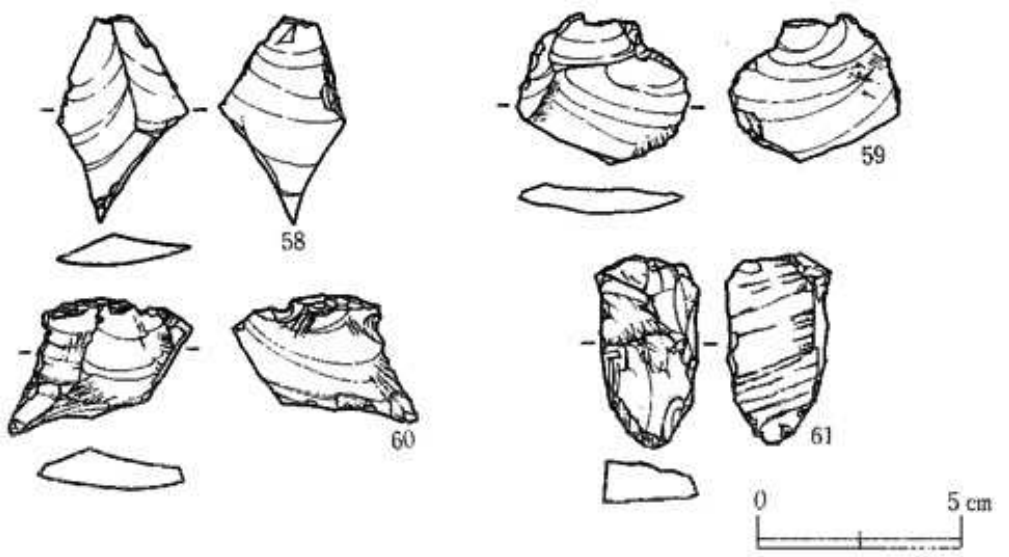
第Ⅱ群土器（第135図－2、図版57、第138図－47～57、図版59）

拓影図の46を除いた他の資料は全て第135図－2の土器と同一個体の破片である。

2は頸部で屈曲する鉢形土器である。LRの撚糸を口縁部上端と頸部屈曲下で横位回転施文して斜行縄文を表し、体部では右上－左下の方向で回転して縦走する縄文を表している。頸部の屈曲部位は横位にナデられて無文になる。体部の随所に縄文施文前に施されたハケ目調整の痕跡が観察される。ハケ目調整は体部上半では横位、体部下半では縦位に施される傾向がうかがえる。胎土は精選された粘土が用いられて製作されているが、焼成が悪く、器壁は脆い。46も、頸部の屈曲する破片であるが、第135図2の土器に比べ屈曲の度合が小さく、口縁部の断面形が丸味を帯び、器壁も厚い。鉢とするよりは甕に近い形状をもつのではないかと思われる。口縁部に横位に施されたハケ目調整痕が残る。胎土は精選された粘土が用いられ焼成も良好である。

石器として4点の剥片が出土している（第139図－58～61、図版57）

58は瑪瑙製の剥片。本来は図の正面側の右下辺にのびた形状のものであろうが、折断された痕跡が残る。打面の両側の縁辺が鋭く、かつ刃縁として使用された痕跡の刃こぼれを残している。59は頁岩製の剥片。図の下端はヒンジフラクチュアーとなり、また右下端は折断されている。打面の両側縁に僅かながら調整剥離が加えられ、とくに打面の左側は突起様に作り出されている。60・61とも頁岩または硬質泥岩製の剥片。60は図の下端および右側縁が折断されている。また左側縁には細かな調整剥離が施されている。61は、石の節離面に沿って割れたものであろう。折断面（図の左側面）を打面とするが、不規則な割れ方をしている。



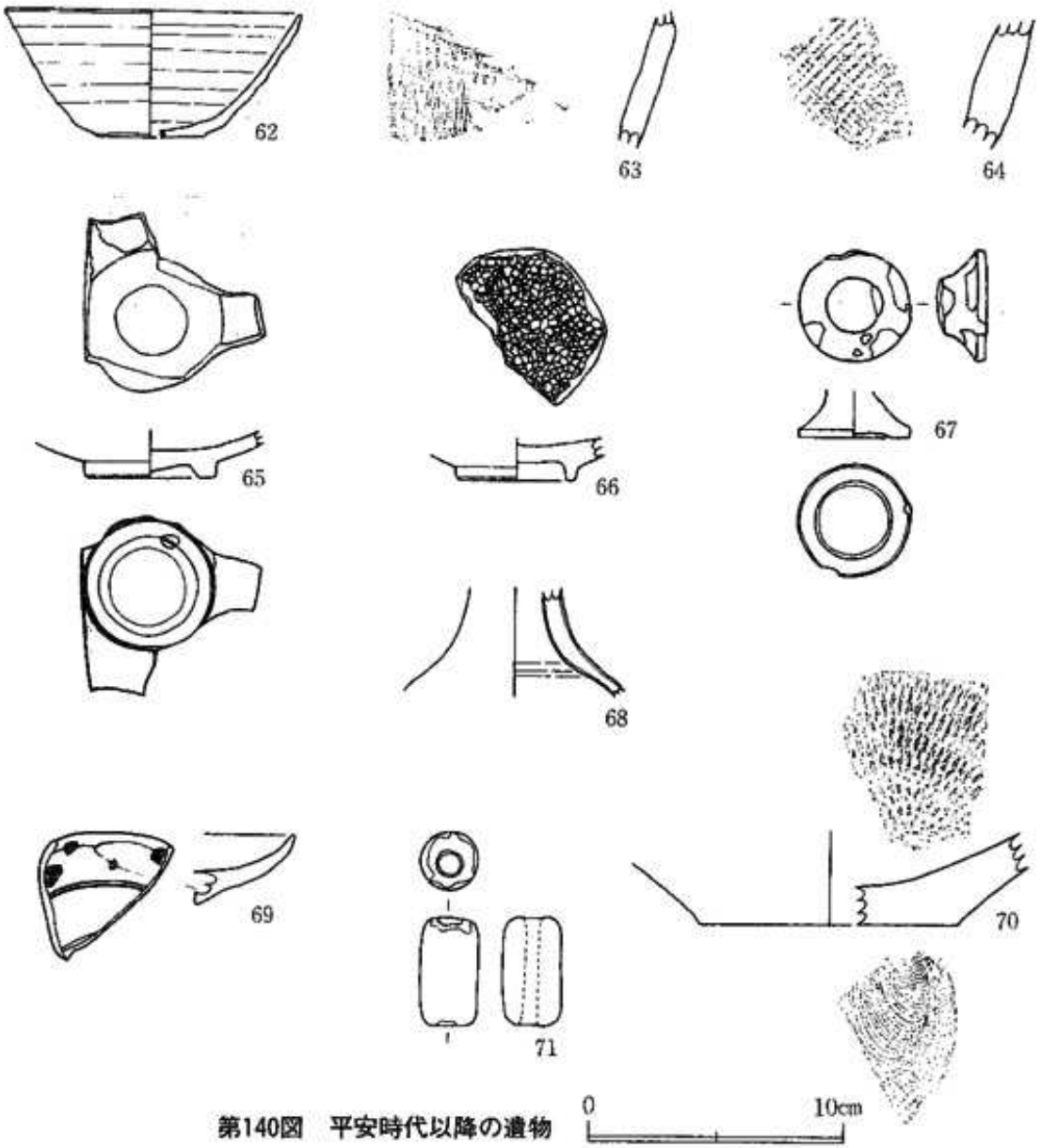
第139図　遺構外出土縄文時代石器

2　平安時代の遺物（第140図—62～64、図版60）

平安時代の遺物と考えられるものは、土師器坏、須恵器甕である。62は、調査区東側I.D49から出土した土師器坏である。ほぼ完形となった。出土層位は泥炭質粘土層上位である。水中に長く没していたせいか、器面が褐色を呈し、全面にヒビ割れをおこし、遺存状態は良くない。底部は回転糸切り、外面ロクロ目の凹凸は顕著である。歪みがあり、法量は口径11.2～12cm、底径4.4cm、器高4.9～5.3cmを計測する。63・64は須恵器甕で、調査区西側の泥炭質粘土層から検出された。63は灰白色を呈し、外面タタキ目、内面ナデを行っている。64は灰青色で格子目様のタタキ目を外面にもつ。器厚が15mmほどある。この他、土師器坏の底部破片が1点ある。

3　中世以降の遺物（第140図—65～71、図版60）

ここで紹介する陶磁器類等は調査区東側あるいは西側の泥炭質粘土層上位で検出されたものである。65は、貼り付け高台の皿である。高台貼り付けの後、底面から畳付まで削りによる整形を行っている。見込みには青緑～緑色の釉がかけられ、蛇ノ目釉ハギが認められる。外面は淡黄色の釉がかかり、暗赤褐色を呈する細かい貫入が広がる。胎土は灰黄色をしている。内外面とも光沢を放つが、見込み蛇ノ目釉ハギの部分のみ光沢が失われ、テカテカの状態となっている。器使用頻度の高さを反映しているものであろうか。66も台付の皿である。畳付以外に灰色の釉がかかる。全面に貫入が認められる。胎土は暗灰色を呈している。67は、瓶もしくは灯火具の底部と思われる。底面には削り出しによる低い台が作られている。胎土は灰白色で、青味がかった淡緑色の釉がかけられている。釉には気泡が混じるが、光沢を放つ。68は瓶の頸部破片である。胎土は灰色を呈し、外面に緑がかったオリーブ灰色、内面に濃緑～濃茶色系色の釉がかけられている。内外面にも光沢が顕著である。69は染付の皿である。底部は碁笥底と呼ばれる形態を示す。見込みには淡青色の二重圏線が描かれ、その外面には暗オリーブ灰～緑灰色を用いた文様帯が形成される。透明釉はここから外面全体にかけられている。外面体下半部には削り出しによるわずかな段が観察できる。胎土は灰白色を呈する。70は回転糸切り痕をもつ擂鉢である。推定底径は10.2cm、内面にはヘラ状工具により斜格子状におろし目が引かれる。だいぶ使い込まれているようであり、部分的におろし目が浅くなっている。色調は内面が灰色、外面は暗褐色である。71は土師質の土錘であるが、胎土を見ると中世以降の可能性が高く、ここに入れたものである。ほぼ完形で長さ4.2cm、径2.3cm、重量23.2g をはかり、径8～9mmの孔が穿たれている。色調は明褐色で焼成良好である。



第140図　平安時代以降の遺物

第3章　まとめ

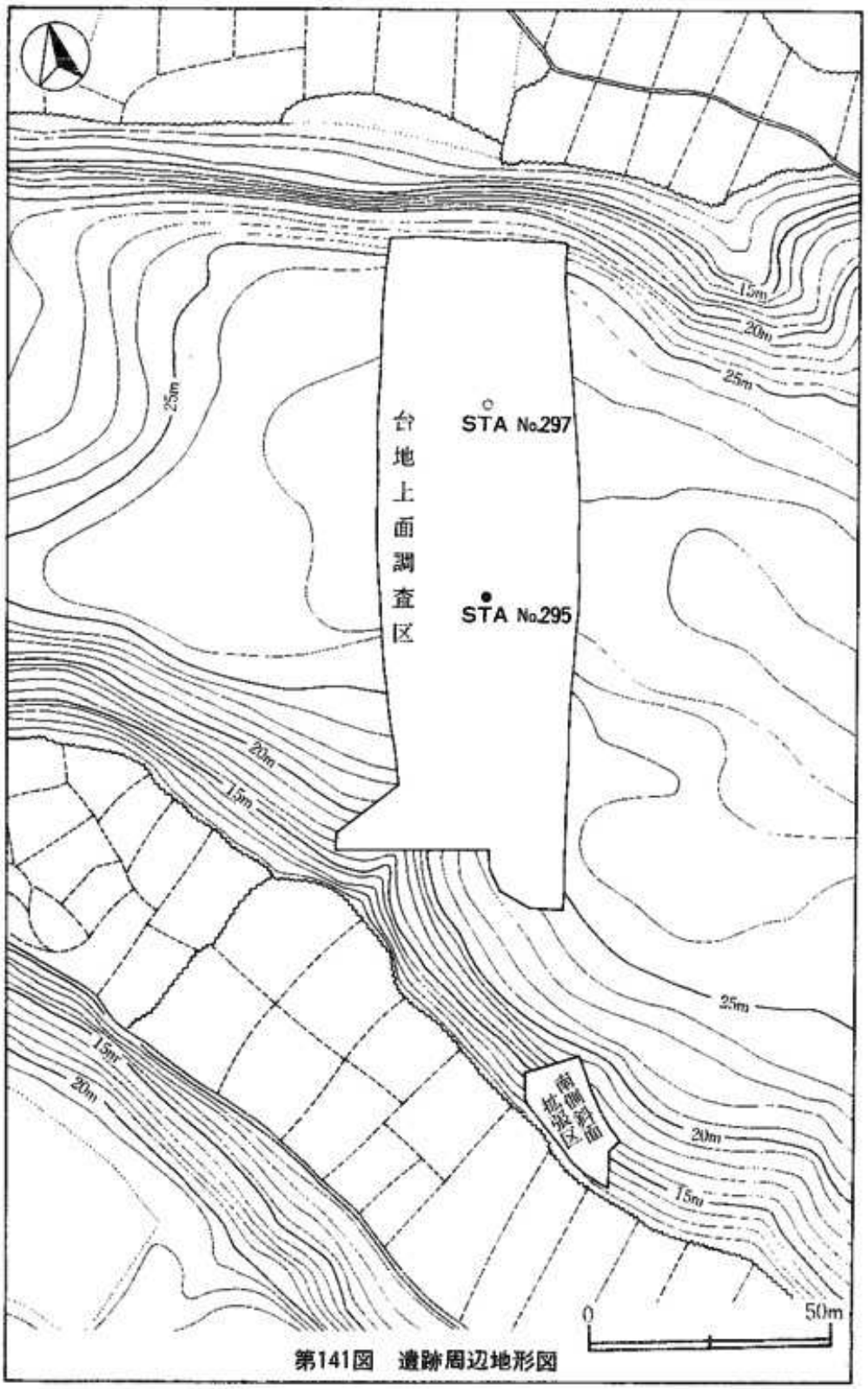
延べ11日間の調査で予定の水路部分500㎡を完掘した。本遺跡の調査は、遺構の確認はもちろんであるが、泥炭層(ここでいう泥炭質粘土層)出土遺物の採集を主眼として計画していた。結果的にはそのいずれも達成できなかった。しかしながら砂層中において限られ範囲内から縄文土器を集中的に検出することができた。この位置は砂が厚く堆積している箇所であり、周辺に向かって砂の堆積が薄くなり、泥炭質粘土層が次第に発達していく。仮に砂層面を生活面とすると、遺物の集中地点が最高位で平坦面を形成している。さらに水はけの良い場所でもある。これらのことから、遺物が出土した時点において遺構の存在が想定されていた。精査の結果、これを明らかにすることはできなかった。この点では遺物が原位置を保っているのか否かについては不明と言わざるを得ない。

遺物接合関係をみると、大形の鉢形土器がその場で潰れたかの様相を示している。さらに蟹子沢遺跡周辺に縄文時代後期中葉の遺跡が今のところ知られていない。これらの状況証拠は、蟹子沢の縄文土器については流れ込みによるものではなく、ほぼ原位置を保っていたとするには早急であろうか。

なお、第132図C地点においてサンプリングした花粉分析の結果は別編に示してある。

十　二　林　遺　跡

（3 J N H）



第141図　遺跡周辺地形図

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

十二林遺跡は昭和61年度に発掘調査された寒川Ⅰ遺跡の南側に沢を１つ隔てて隣接し、八竜能代道路建設にかかる埋蔵文化財包蔵地としては、能代市方向から数えて３番目の遺跡にあたる。

国道７号線沿いに秋田市方向から能代市方向に向かうと、能代市南部の浅内地区で成合、福田、石丁、寒川と４つの集落を通るが、このうち石丁集落と寒川集落がそれぞれ立地する台地に挟まれた舌状台地部分が遺跡に相当する。石丁集落と寒川集落の立地する台地の間には、国道７号線をはさんでちょうど浅内沼の中央部に接続するように寒川提があり、この寒川提に開口するように沢が東にむかって伸びている。十二林遺跡の立地する舌状台地はこの沢を２つに分岐させるように北西側に突き出している。遺跡は現在の日本海汀線から3.3km西に向かった標高26mほどの地点で、ちなみにＪＲ能代駅からは6.6km南にはなれている。遺跡のある台地の南北両側の沢地は現在水田として利用されているが、台地上面及び斜面については、西側の台地付け根部分が開墾されて広く耕地として利用されているものの、先端に近い側は雑木の生い茂るままにまかされている。しかし、かつてはこの台地先端側も耕地として利用され、また雑木が生えるようになってからはそれを原料とした炭窯が営まれていたらしい。現在の地表面にも畝の痕跡をとどめる高まりや、長径２m程もある卵形をした炭窯のくぼみを見ることができる。

八竜能代道路はこの舌状台地を南北に切り土して通す工事計画であるため、調査区は舌状台地の先端部から西に150mはなれた地点に、南北約120m、幅40mの範囲で設定された。また南側の沢地(蟹子沢遺跡)に面した斜面は比較的緩い傾斜地であり、遺構の存在も予想されていたため、この区域の拡張して調査することとした。結果的に調査した面積は台地上面で4,500㎡、南側斜面の拡張区で300㎡である。

前年度に実施した調査区内の範囲確認調査で、台地上面の調査区のうちおよそ北半分は遺構、遺物の存在とも希薄で、最終的な遺構確認面である地山までの深さも浅いことが知られていた。またこれとは逆に南半分では遺構、遺物とも密に存在し地山までも深く、遺構は部分的には重複してあることが確かめられており、斜面では鉄滓、須恵器片の出土から何らかの生産址の存在する可能性も考えられていた。この範囲確認調査の成果は本調査実施後の知見と一致し、本遺跡の主体をなす平安時代中～後期には台地の南側がおもに利用されていたと考えられる。

次に台地上面調査区での基本層位を第142図に示し、その註記を以下に記す。

Ⅰ層　黒褐色(10Y R2/3) 表土層、かつての耕作土でもある。根による攪乱をうけている層で、レンガや鉄など近代の遺物が含まれる。

Ⅱ層　黒褐色(10Y R2/3) 堅くしまっている。粘性はなく、粒子が細かくサラサラしている。炭化物を少量混入する。

Ⅲ層　暗褐色(10Y R3/4) やわらかくしまりなし。焼土粒および小ブロック、炭化物を含む。平安時代の土師器などの遺物が包含される。Ⅲ層は台地上面北半では薄いものの南半にゆくに従い次第に層厚を増す。また土性もやや粘性を帯びるように漸移する傾向が認められる。

Ⅳ層　褐色(10Y R4/4)やわらかく、粘性弱、黄褐色粘質土の粒、小ブロックを混入する。Ⅴ層上部の漸移層である。

Ⅴ層　黄褐色(10Y R5/6) 粘質土、最終的な遺構確認面であり、この層以下がいわゆる地山層である。

この他に、基本層位中に部分的に挟在する層がある。

A層　褐色(10Y R4/4) ＋暗褐色(10Y R3/3) 褐色土は堅くしまったブロックとして混じっている。

B層　黒褐色(10Y R2/1) やや堅く、粘性はない。炭化物を少量混入する。

C層　黒褐色(10Y R2/2) やや堅くしまっている。粘性はない。焼土粒、炭化粒を微量に混入する。

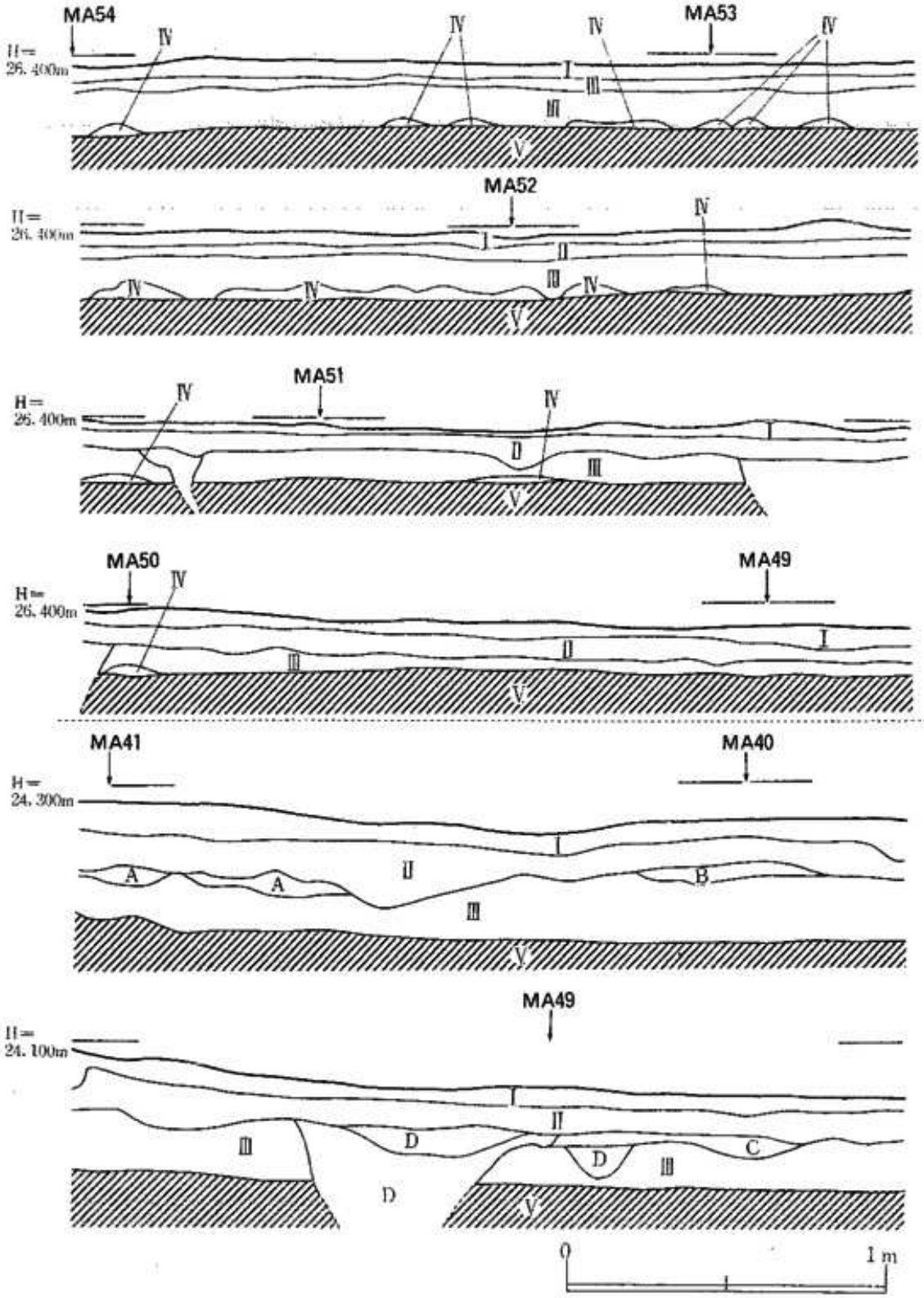
D層　黒褐色(10Y R2/3) 堅くしまっている。粘性は弱く、地山の黄褐色粘質土の小ブロックを含む。

また、南側斜面の拡張区ではこれと異なる層位が観察されたが、それについては、拡張区で検出された遺構の項で併せて記述する。

第2節　調査の経過

調査は5月11日から11月14日までの期間行っている。以下に日誌から抜粋して調査経過を記す。

5月11日、十二林遺跡の発掘調査開始。資材搬入用の進入路が建設されるまでの間、15名の小人数を配し、プレハブ・ハウスおよび駐車場用地部分約1,100㎡ついての調査を行うこととする。調査地は雑木伐採後の切り株が残り、枝葉が散乱する状態であったため、調査予定地内の刈り払い作業から行う。5月14日、刈り払い作業を終了し、プレハブ用地内に方眼杭打

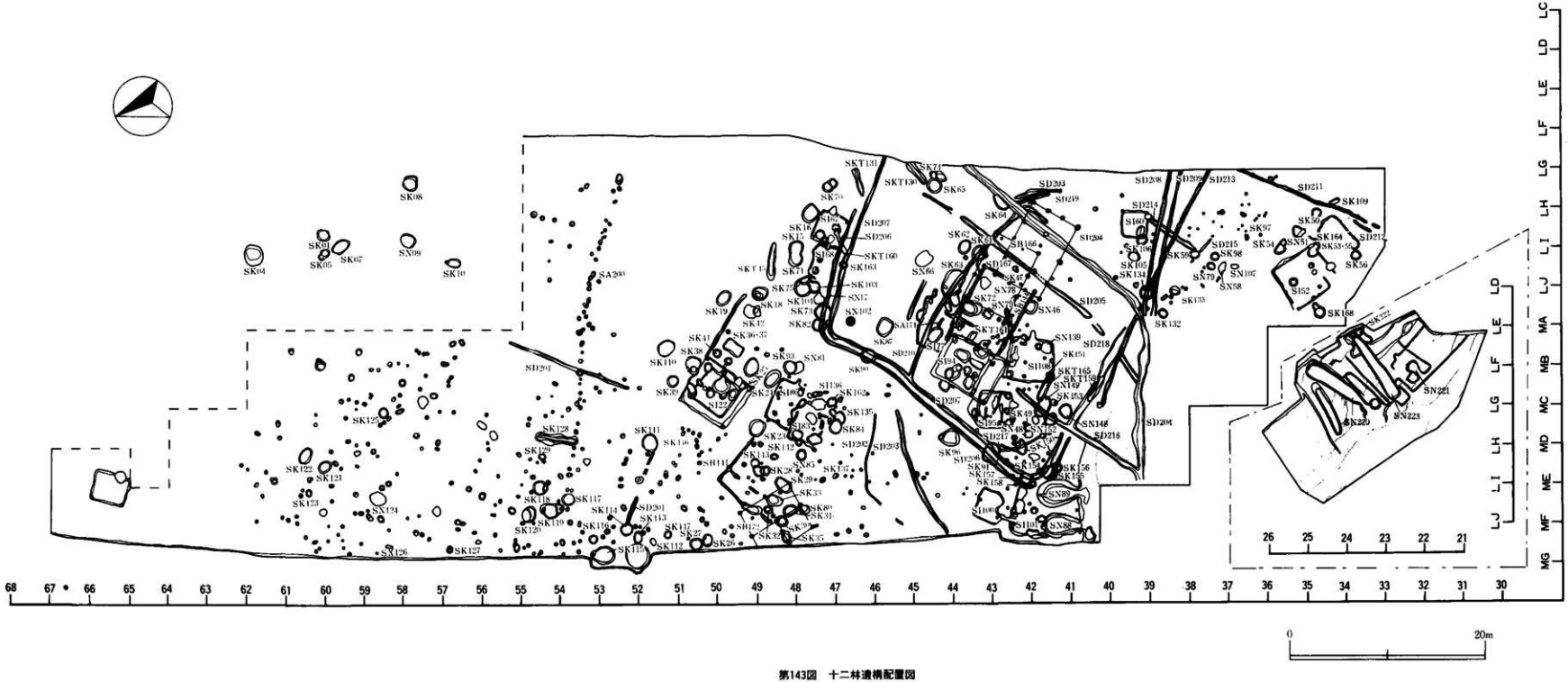


第142図　遺跡基本土層図

設作業を行う。また表土除去作業を開始する。5月15日、埋蔵文化財センター富隆所長来跡。能代工事事務所一行来跡。5月20日、調査区内に溜めおいた排土が一杯になったため、新たな排土については北側斜面に運搬する。平安時代の竪穴住居跡1軒を検出し、また遺構外からではあるが土師器皿などの土器が出土しだす。6月1日、十二林遺跡の調査班、本日から1週間福田遺跡に合流する。6月8日、十二林遺跡の調査を再開し、遺構確認作業を行う。6月13日、十二林遺跡のプレハブ用地および駐車場用地については遺構の検出をほぼ終える。竪穴住居跡(SI02)についても精査を開始し、住居跡内から土師器坏2個体を出土する。その他の遺構は、土坑5基と焼土遺構(土器焼成遺構;SK09)1基であるが、これらの中には、縄文時代の土坑(フラスコ状土坑;SK04、SK08)2基が含まれている。6月17日、SK09について半截した結果、覆土中に窯壁の崩落土と思われる焼土塊が検出される。6月23日、プレハブ予定地内の遺構精査を終了し、写真撮影を行う。6月25日、調査区内に溜めおいた排土を北側斜面に移動する作業を開始する。また調査区の北側から沢を渡って遺跡内に入る進入路が完成する。6月26日、55ラインから南側の調査区に方眼杭を打設する。調査用プレハブ・ハウス4棟の設置を終える。6月29日、60ラインから南側のグリッドの表土除去を開始する。7月1日、作業員数を40名程に増やし、表土除去作業を継続する。1グリッドに4～5名がはいり、表土に相当する第Ⅰ層を厚さ10cm程ではぎ取ってゆく。第Ⅰ層中には若干量の遺物が包含されているが、この時点では土師器坏、甕の破片と僅かな鉄滓の出土が確かめられている。7月6日、斜面を除く39ライン以南の方眼杭の打設を終え、台地上面の調査区についてはグリッド設定を完了する。7月7日、斜面部分の表土除去のため、ホイル・ローダー、ベルト・コンベアーを蟹子沢遺跡側に移動する。7月10日、路線内の南側斜面のうち、西側の急傾斜部分についてはグリッド方式によって表土を除去し、東側の比較的緩い傾斜の部分についてはA－Eの5本のトレンチを傾斜方向にそっていれて調査を続行。トレンチの幅は2mであるが、結果、西側の急斜面では遺物の出土はなかったものの、最も東側に位置するEトレンチ下部で鉄滓および須恵器片が出土する。7月11日、台地上面の表土除去は一応完了し、第Ⅱ層の掘り込みを開始する。また、併せて表土除去の際、土層観察のため残した畦を除去する。7月18日、調査区南側の表土を除去した第Ⅱ層中で竪穴住居跡の存在が分かるようになる。この時点での竪穴住居跡はおもにカマドの焼土の広がりによって確かめられている。7月25日、斜面側の表土除去を終える。遺物は斜面東側の部分を除いて目立った出土がなかったため、この斜面東側を中心としておよそ300㎡を拡張することとし、他の斜面部分については調査を中断する。8月1日、第Ⅲ層上面の精査(遺構確認作業)は、48ラインよりも北側のグリッドについて終了する。遺構の検出はさほど多くはないが、SK124の土器焼成遺構が検出されている。また第Ⅲ層中には土師器坏、甕などの土器片が包含されており、これら平安時代の遺物が帰属する遺構の構築面は第Ⅲ層中から第Ⅳ層までの間にある

と考えられ、48ライン以南の遺構確認作業は第Ⅳ層まで下げておこなうこととする。8月20日、夥しい量の鉄滓、炉壁片の集積箇所2基(SN102、SX17)を検出する。こうした中にはフイゴ羽口の破片も含まれている。かなり破壊されてはいるが製鉄炉跡と判断する。竪穴住居跡についてはこの時点までで、SI22、SI67、SI52の3軒の輪郭をとらえている。8月25日、北海道大学、天野哲也氏来跡。8月29日、遺構確認作業が進み、竪穴住居跡1軒SI83を追加検出している。またこの時点までに確認された土坑数は約50基に上る。8月27日、調査区の北端、駐車場用地で精査を続けていたSI02について調査を終了し、リフティング・ケーブル・カメラ・システムによって住居跡の垂直写真を撮影する。8月31日、鹿角市教育委員会、秋元信夫氏来跡。9月1日、奈良国立文化財研究所、工楽善通氏来跡。9月2日、調査区南端に確かめられていた近代の炭窯、SN88、SN89の精査を開始する。レンガ、木炭、煙突用土管などが出土している。土坑についての精査が進み21基について精査を終える。土坑形態には円形、楕円形など様々な種類がある。9月3日、調査区の南側斜面の東端300㎡部分について拡張作業にはいる。蟹子沢遺跡に近い最下部では若干の湧水があり、地山面までの掘り下げが不能な状態にある。鉄滓、須恵器片の出土が多い。9月7日、南側斜面の拡張区での遺構確認に努める。鉄滓、須恵器片に混じって製鉄炉炉壁片が出土しているが、製鉄炉本体の検出はない。9月9日、台地上面調査区の南半で検出されたSD206、SD207、SD208、SD209の覆土を掘り下げる。9月16日、竪穴住居跡SI94を検出する。確認時、覆土中央に大きな木根による攪乱がみとめられたが、輪郭そのものへの影響はない模様。南側斜面の拡張区では、本来の地山である灰褐色～黄褐色砂質土を覆う黒褐色土の上にさらに黄褐色の再堆積層が被っており、この再堆積層、黒褐色土を掘り下げての遺構検出に努める。拡張区の中央で大形の製鉄炉炉壁片を検出する。9月25日、SI52竪穴住居跡中央から26個の土錘が出土。南側斜面の拡張区では、製鉄炉炉壁片の東側から、焼土化した壁面の間に木炭の堆積する遺構(SN220)を検出する。焼土化した壁の中央にベルトを設定して掘り進む。9月29日、SN220については出土する遺物が木炭に限られ、炭窯であろうと判断する。9月30日、SI22、SI94については拡張された住居跡であることが分かる。南側斜面拡張区のSN220東側に検出されたSN221を半截する。鉄滓と細かく砕けた木炭が多量に出土する。10月5日、近代の炭窯、SN88、SN89の北側に検出した竪穴住居跡SI101の覆土を掘り進む。住居跡の南側は炭窯によって壊されている。穴沢義功氏来跡。10月6日、SD221の覆土を掘り上げる。溝底に1.5m程の間隔をおいて柱穴が穿たれていることが確認される。南側斜面拡張区のSN220は覆土を掘り進んだ結果、北東－南西に長い炭窯であることが判明したが、この窯体東脇から焼土によって縁どられたピットを検出する。窯体内部の煙道位置からみてその開口部であろうと判断された。10月14日、竪穴住居跡SI22の中央部に検出された土坑P3の覆土中から土師器坏2個が重なった状態で出土する。下にあった坏の

内面には漆状の樹液膜が認められた。竪穴住居跡ＳＩ94の南側にさらに１軒竪穴住居跡ＳＩ108を検出し、覆土を掘り始める。覆土中には炭化材、焼土が多量に混じっている。南側斜面のＳＮ220先端部から南東におよそ４ｍほど離れた箇所の土坑状の落ち込み（ＳＫ222）内から、10数個体分の土師器坏、甕が出土する。10月22日、当初土坑と思われていたＳＫ77が覆土を掘り上げた結果、竪穴住居跡であることが分かる。40ライン北側で遺構外の柱穴を探し、掘り上げる。ＳＩ94竪穴住居跡の東側では、竪穴住居跡に接続する溝のある掘立柱建物跡ＳＢ144が検出される。また、52・53ライングリッドでは東西方向に並ぶ柱列ＳＡ200を検出する。10月24日、南側斜面の拡張区でＳＮ220の焚口東側から青灰色に還元した窯壁を検出する。窯壁は固結した砂質土からなり、幅80cmほどの間隔をおいて２列あり、斜面上方にむかって伸びている。窯壁の間からは、須恵器甕の破片が出土している。ＳＮ223とする。10月27日、竪穴住居跡ＳＩ94の南西側から新たに１軒の竪穴住居跡ＳＩ95を検出し、覆土を掘り始める。南側斜面の拡張区で検出されていたＳＮ223は、地下式の須恵器窯窯であることが確認される。斜面をくりぬいて窯体をつくっており、須恵器甕の大破片が出土し始める。またその先端は土師器坏、甕の出土したＳＫ222に向かっているように予想される。10月28日、由本町小中学校の社会科教員、永瀬福男氏ほか来跡。10月29日、ＳＮ223の須恵器出土状態の写真撮影。須恵器は甕が中心であるが、中には坏も混じっている。武田孝義氏、小林嘉兵衛氏来跡。10月31日、若松鉄四郎氏来跡。毎日新聞、秋田魁新報取材。11月４日、台地上面調査区の遺構について覆土の掘り上げに関しては、ほぼ終了する。竪穴住居跡はこの段階で12軒（うち３軒は１回の建て替えが行われている）と確定する。11月７日、ＳＮ223については中軸線での断面図作成を終える。窯壁先端の煙出しは、やはりＳＫ222坑底部に開口しており、ＳＫ222に投げ込まれた土師器坏が一部ＳＫ223の煙出しをつたって窯体内覆土中に混在している。また横断面には、トンネルにくりぬいた窯壁の天井部が焼土化したアーチとなって確認された。午後２時から現地説明会を開催。11月９日、浅内小学校、中川校長以下教員一行来跡。11月10日、航空写真撮影。11月14日、斜面側拡張区全体のリフティング・ケーブル・カメラシステムによる写真測量を行い、台地上面についても調査後の全体写真撮影を行って調査全工程を完了する。11月26日、プレハブ・ハウスの撤去、発掘資材の搬出を行い、解散する。



第143図　十二林遺構配置図

第２章　発掘調査の記録

第１節　縄文時代の遺構

縄文時代に帰属すると判断された遺構には10基の土坑がある。このうち、２基はフラスコ状土坑であり、他の８基はＴピット(陥し穴)である。フラスコ状土坑は調査区の北側、プレハブ用地内で検出され、対してＴピットは調査区中央から南側にかけて検出された。いずれも遺跡基本層位第Ⅴ層上面が遺構確認面であるが、Ｔピットの中には平安時代の竪穴住居跡床面上でその上部が削られて検出された例もある。

１．フラスコ状土坑(第144図、図版62)

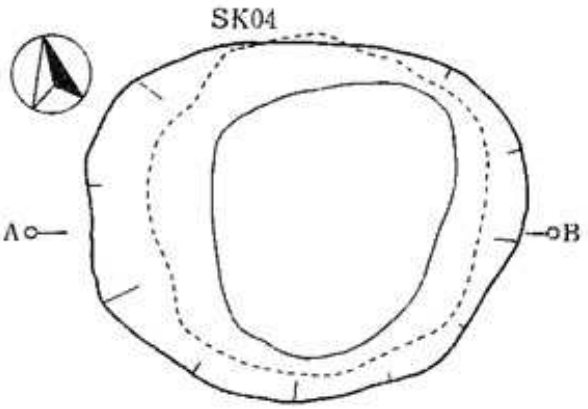
ＳＫ04第１号フラスコ状土坑(第144図、図版62)

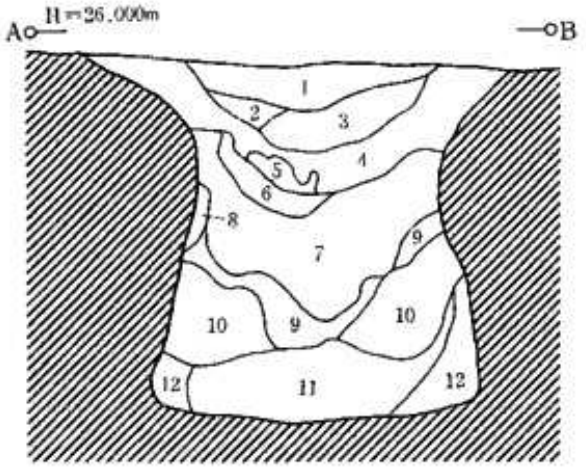
調査区の北側、ＬＨ61グリッドで検出した。

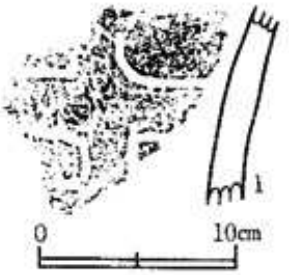
表土を除去し基本層位第Ⅴ層まで下げた段階で、暗褐色～極暗褐色土が同心円状に広がるプランとして確認された。確認面でのプランは東西に長軸をもつ楕円形である。断面観察を行った結果、覆土は12層に分けられた。これらのうち、坑底部壁際に堆積する10層・12層が褐色～明褐色を呈する壁面崩落土で、坑中央に堆積する９層・11層が暗褐色～褐色を呈する坑外からの流入土である。前者、後者とも互いに他の層の間に入り込んで互層に堆積するが、フラスコ状土坑埋没過程の初期堆積層が、このような互層をなすことは、とりもなおさず、その土坑が開口した状態で放棄され、自然堆積のままにおかれたことを示している。また、坑中央部に土坑を塞ぐように堆積する７層はやはり褐色を呈する壁面崩落土で、この層の堆積時に大規模な開口部～頸部の崩落があり、その時点で土坑の埋没は完了したと見て良い。この７層より上位に堆積する黒褐色～暗褐色土は地表面に残された凹みに、外からの流入するのと同様にして充填していったと考えられる。第144図－１の後期前葉の土器はこの７層中からの出土であり、本土坑が構築－使用－廃棄されたのは、この後期前葉以前である。

平面形は開口部が長軸の長さ2.2m、短軸の長さ1.8mの楕円形で、底面が径1.7m前後のいびつな円形となる。頸部は長軸の長さ1.5m、短軸の長さが1.2mのやはりいびつな楕円形であり、その長軸方向は北東－南西方向にあって、中心はやや東に寄る。したがって、本来の頸部が開口部の中央にあったと仮定した場合、頸部の崩落は北東側・東西側で著しかったと考えられる。開口部から底面までの深さは1.8m程ある。

第144図－1は7層中から出土した土器片である。深鉢形土器の体部破片であるが、器面には沈線による文様が描かれている。おそらく扁平な矩形区画の沈線を上下に重層させ、また横位に







1層 褐暗褐色 (7.5YR 2/3) 粘質、孔隙は少なくかたくしまっている。炭化物の微細粒が少量混入。

2層 黒褐色 (10YR 2/2) 3層に比較し孔隙が少なくしまっている。炭化物粒の混入も少ない。

3層 黒褐色 (10YR 2/2) 粘性なし、孔隙が多くやわらかい。炭化物微細粒、焼土粒混入。

4層 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質、孔隙は少なくしまっている。炭化物粒、黄褐色土粒混入。

5層 暗褐色 (7.5YR 3/4) 粘質(大)孔隙は少ない。ブロック状に混入した土である。

6層 暗褐色 (7.5YR 3/3) 粘質、孔隙がありやわらかい。黄褐色土粒混入。

7層 褐 色 (7.5YR 2/4) 粘質(大)孔隙は多くやわらかい。黄褐色土が斑状に混入。炭化物片 (径10mm程) 下部で多い。遺物 (土器片) を含む。

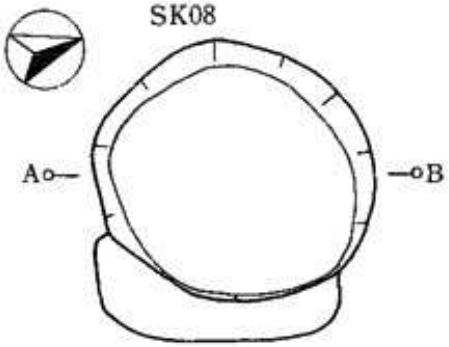
8層 暗褐色 (7.5YR 3/6) 粘質、孔隙は少ない。壁面の崩落とかした土。

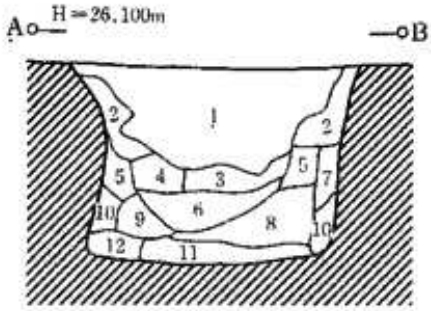
9層 褐 色 (7.5YR 4/6) 粘質、孔隙が多くやわらかい。ホソボソしている。黄褐色土が斑状に混入。

10層 明褐色 (7.5YR 5/6) 僅かに粘質、極めて孔隙が多い。やわらかくボソボソしている。壁面の崩落土。

11層 暗褐色 (7.5YR 3/4) 粘質、孔隙ややあり、10層と比較するとしまっている。

12層 褐 色 (10YR 4/6) 粘質、キメ細かいが多孔質でやわらかい。壁面崩落土。





1層 暗褐色 (10YR 2/3) 褐色土 (10YR 4/6) 粒子微量、炭化物少量混入。土は非常にかたくしまり、粘性弱。

2層 暗褐色 (10YR 3/3) 褐色土 (10YR 4/6) 少量、炭化物少量混入。土は非常にかたくしまり、粘性弱。

3層 黒褐色 (10YR 2/3) 1層より褐色土粒子及び小ブロック多量混入。炭化物少量混入。土は非常にかたくしまり粘性強。

4層 黒褐色 (10YR 3/2) 褐色土粒子及び小ブロック少量、炭化物少量混入。土はかたくしまり粘性強。

5層 褐 色 (7.5YR 4/4) 褐色土 (10YR 4/6) 多量、炭化物微量混入。土はかたくしまり、粘性強。

6層 黒褐色 (10YR 2/3) 褐色土粒子及び小ブロック多量、炭化物微量混入。土はややかたくしまり粘性強。

7層 褐 色 (10YR 4/6) 炭化物微量混入。土はかたくしまり粘性弱。

8層 暗褐色 (7.5YR 3/3) 褐色土多量、炭化物微量混入。土はややかたくしまり粘性強。

9層 褐 色 (7.5YR 4/4) 炭化物微量混入。土はかたくしまり粘性弱。

10層 褐 色 (7.5YR 4/6) 炭化物微量混入。土はややかたくしまり粘性強。

11層 黒褐色 (10YR 3/2) 炭化物微量混入。土は非常にかたくしまり粘性強。

12層 褐 色 (7.5YR 4/4) 11層と同じ。

第144図　SK04第1号フラスコ状土坑・SK08第2号フラスコ状土坑

も重ねたような文様となるのであろう。胎土には石英粒をはじめ径0.5mm程度の砂粒が多く混入されている。焼成は良好で器面に目立った剥落、細かな亀裂などは認められない。

ＳＫ08第２号土坑(第144図、図版62)

調査区の北側、ＬＧ57グリッドで検出した。ＳＫ04からは18m程南に離れた位置にある。

遺構確認面は基本層位第Ⅵ層で、黒褐色土の円形プランとして確認した。

覆土断面は12層に分けて観察された。５層・７層・９層・10層・12層が壁面の崩落土と思われる褐色土で、坑内周縁に堆積している。坑底近くの覆土はＳＫ04ほどに壁面崩落土と坑外流入土が互層をなした堆積状況を示すとは言い難いが、中央部に堆積する６層黒褐色土がレンズ状の堆積を見せることから、本土坑もまた自然堆積のまま埋没したと考えられる。

平面形は開口部が長軸の長さ1.45m、短軸の長さが1.3mの楕円形で、底面は長短軸とも開口部より10cm程小さ目の楕円形である。開口部から底面までの深さは1.0mである。頸部のくびれは崩落し開口部から底面まで壁はほぼ垂直に降りるが、坑内に堆積する褐色土の量はさ程多くはなく、本来、頸部のくびれは小さかったものと推測される。

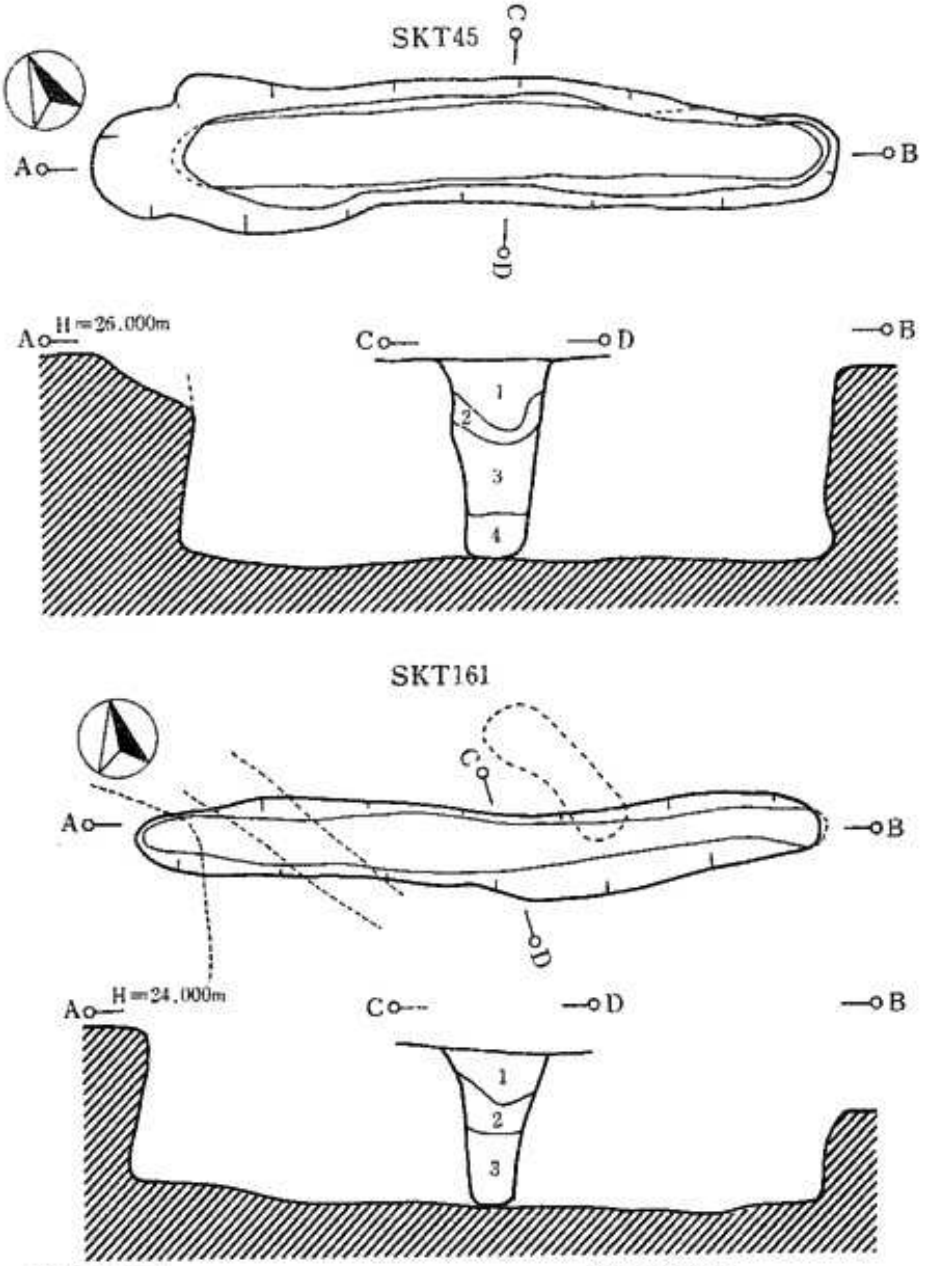
覆土中から炭化物が少量検出された他は、遺物の出土はなかった。

２．Ｔピット(第145図～第148図、図版63・図版64)

Ｔピットは、台地上面調査区の中央部に１基(ＳＫＴ128;第２号Ｔピット)が、中央からやや南側によった調査区東際に４基(ＳＫＴ45;第１号Ｔピット、ＳＫＴ130;第３号Ｔピット、ＳＫＴ131;第４号Ｔピット、ＳＫＴ160;第６号Ｔピット)が、南側の平安時代遺構集中区内にそれら遺構と重複して３基(ＳＫＴ159;第５号Ｔピット、ＳＫＴ161;第７号Ｔピット、ＳＫＴ165;第８号Ｔピット)が検出された。調査区内の地形との関係でみると、単独で位置するＳＫＴ128は標高26m程の平坦な場所に、またＳＫＴ45、ＳＫＴ130、ＳＫＴ131、ＳＫＴ160は標高25～26mの緩斜面の降り際に、そしてＳＫＴ159、ＳＫＴ161、ＳＫＴ165は緩斜面を降りきったあたりから調査区南側の急斜面への降り際に位置する。

平安時代以降の遺構によって上部を削られている例が４基あり、構築時の規模をそのまま計測することはできないが、長さは凡そ３～４m、幅は40～60cm、深さは0.8～１mの範囲にあるとみてよいだろう。この中にあって、ＳＫＴ128は長さ4.36m、幅0.91m、深さ1.33mという突出した規模を持つ。長軸の方向には規則性がない。ただし、緩斜面降り際のＳＫＴ45とＳＫＴ160、ＳＫＴ131とＳＫＴ130は、それぞれの組が６～８mの間隔をおいて、やや西に開く形で並列している。第１表に個別の規模・特徴を記す。

以上８基のＴピットには遺物を伴出した例はないが、その確認面から縄文時代の遺構と判断した。



SKT45註記

1層　暗褐色（10YR 3/3）地山粒子（0.5～5mm大）少量混入。しまりあり。

2層　暗褐色（10YR 3/4）地山粒子少量（1層より多い）混入。1層との層境ははっきりしない。しまりあり、1層よりやや弱。

3層　黄褐色（10YR 5/6）主に地山粒子。しまりは2層よりやや弱。粘性強。（短期間に流入したもの）

4層　暗褐色（7.5YR 3/4）1・2層よりやや明るい。地山粒子を多量に含むが暗褐色土が主である。しまりやや弱。粘性ややあり。

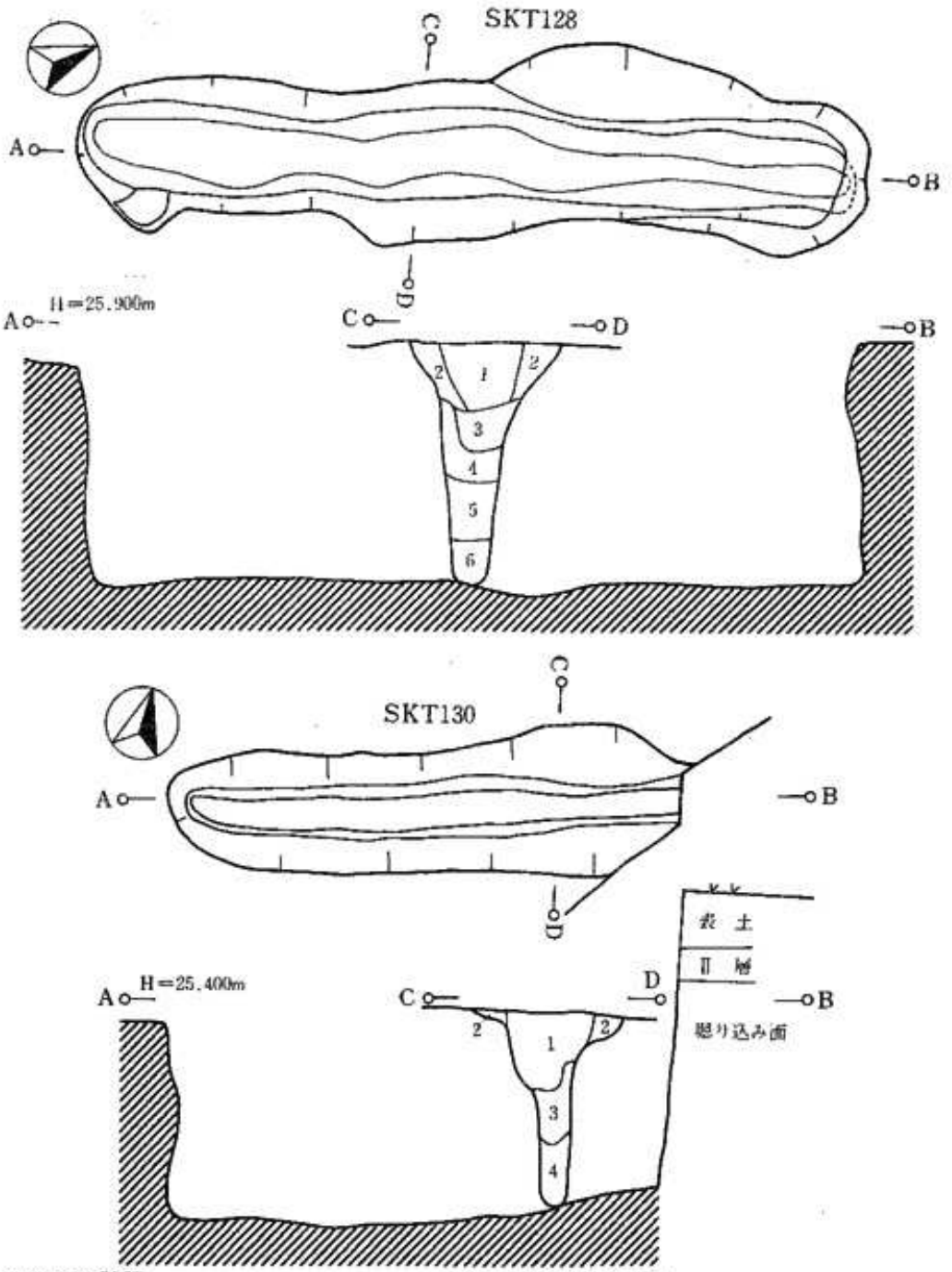
SKT161註記

1層　暗褐色（10YR 3/3）褐色土粒子及び小ブロック少量、炭化物少量混入。土はややかたくしまり粘性強。

2層　褐　色（7.5YR 4/4）暗褐色土がごく微量混入。土はややかたくしまっている。粘性強。

3層　褐　色（10YR 4/6）混入物なし。土はややかたくしまっている。粘性強。

第145図　SKT45第1号Tピット・SKT161第7号Tピット



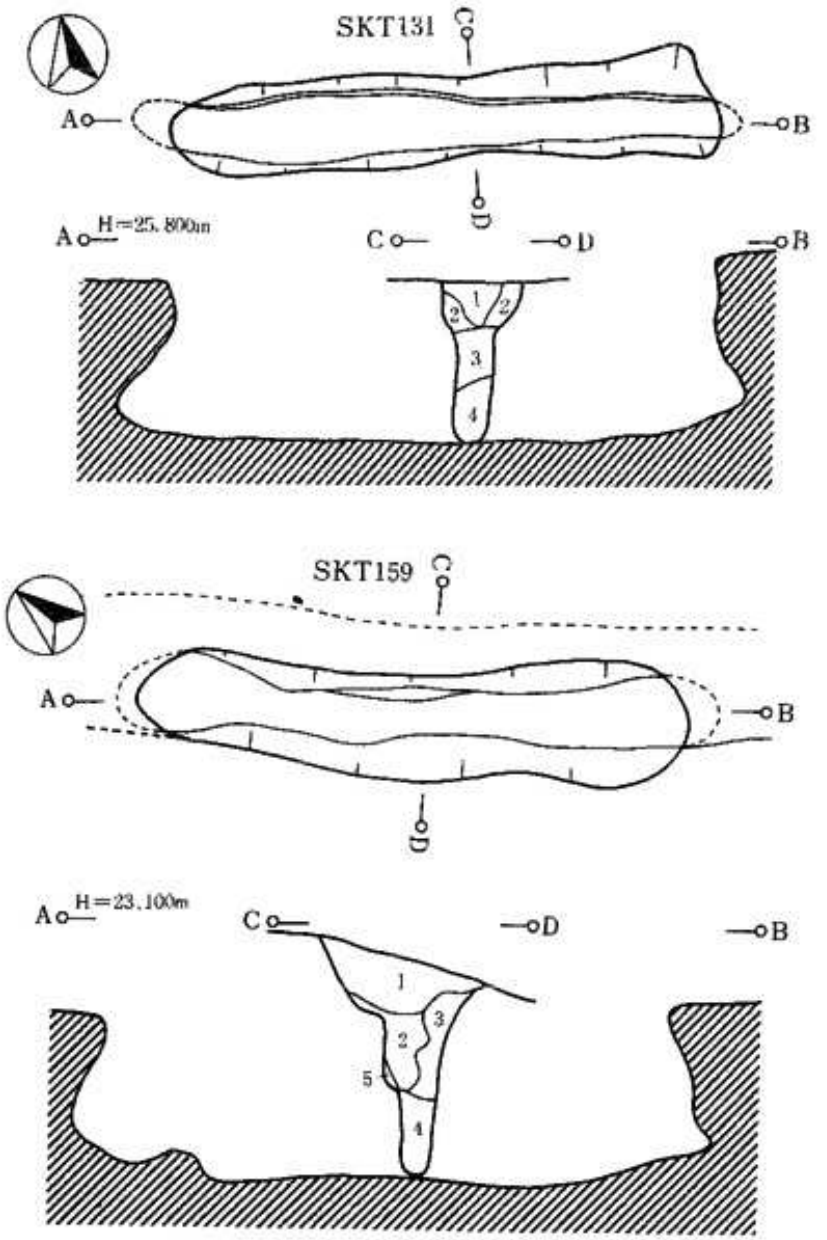
SKT128註記

1層　黒褐色（10YR 2/2）炭化物少量混入。土はややかたく粘性なし。
2層　暗褐色（7.5YR 3/3）褐色土（10YR 4/6）少量混入。土はかたく粘性弱。
3層　暗褐色（7.5YR 3/4）炭化物微量混入。土はかたく粘性弱。
4層　褐　色（7.5YR 4/4）炭化物微量、褐色土（7.5YR 4/3）多量混入。土はややかたく、粘性弱。
5層　褐　色（10YR 4/6）混入物なし。土はややかたく粘性弱。
6層　暗褐色（10YR 3/4）炭化物微量混入。土はかたく粘性弱。

SKT130註記

1層　黒褐色（10YR 3/2）地山粒子で小ブロック状に少量混入。しまり、粘性ややあり。
2層　暗褐色（10YR 3/3）地山粒子の混入は1層よりややあい。
3層　暗褐色（10YR 3/3）2層と同じ。粘性2層よりややあり。
4層　褐　色（10YR 4/6）1～3層粒子微量混入。地山粘土の二次性焼土。しまり、粘性あり。

第146図　SKT128第２号Tピット・SKT130第３号Tピット



SKT131註記

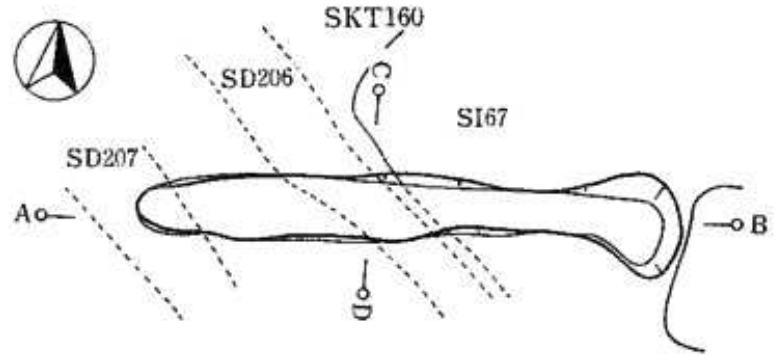
1層　黒褐色（10YR 3/2）地山粒子をほとんど含まない。しまりあり。
2層　暗褐色（10YR 3/3）地山粒子小ブロック状に混入。しまりあり。
3層　褐　色（10YR 3/4）地山粘土を主とするが30%位は1・2層粒子が入り込んでいる。しまりあり。
4層　暗褐色（10YR 3/4）地山粘土小ブロック少量混入。しまりはあるが1～3層よりやや弱。

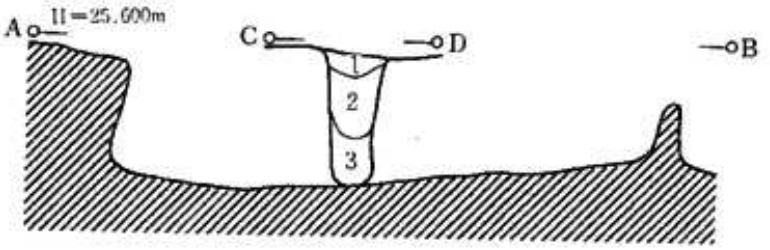
SKT159註記

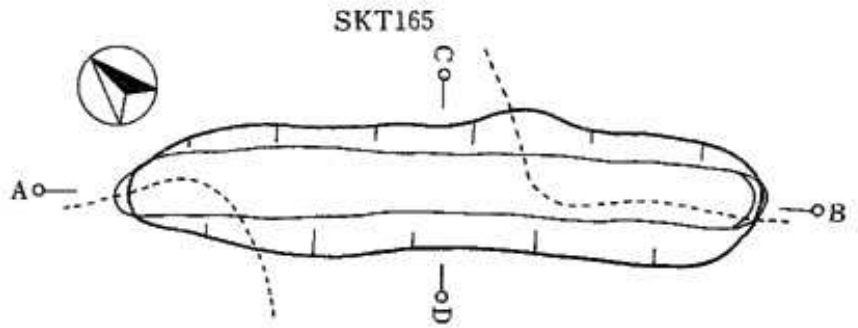
1層　黒褐色（7.5YR 3/1）焼土粒子，炭化粒子微量混入。土はややかたく粘性弱。
2層　褐　色（7.5YR 4/4）混入物なし。上はかたくしまり粘性弱。
3層　黒　色（7.5YR 4/6）炭化粒子微量混入。土はかたくしまっている。粘性強。
4層　明褐色（7.5YR 5/6）混入物なし。土はやわらかく粘性弱。
5層　明褐色（7.5YR 5/8）混入物なし。上はかたく粘性強。
6層　褐　色（10YR 4/6）黒褐色（7.5YR 3/1）と同じ位に混入。上はかたい。

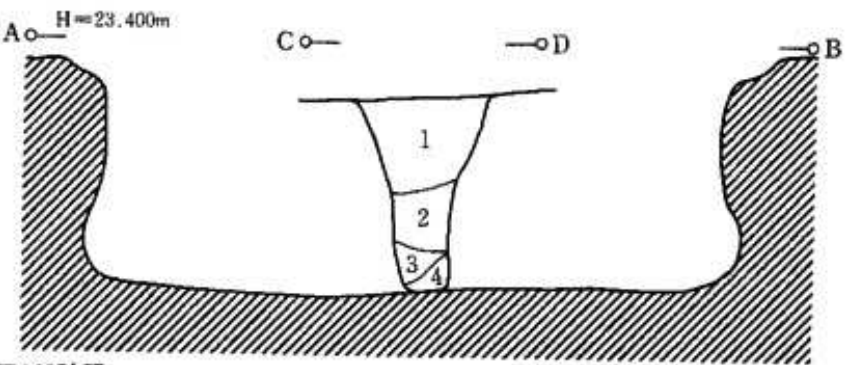
0　2m

第147図　SKT131第4号Tピット・SKT159第5号Tピット









SKT160註記

1層　黒褐色（10YR 2/3）地山粒子ごく微量、炭化物微量混入。しまりややあり。

2層　黒褐色（10YR 3/2）地山粒子、ブロック多量混入。しまりややあるが1層よりは弱。

3層　黒褐色（10YR 2/3）地山粒子少量混入。しまり2層よりやや弱。2層との層境ははっきりしない。

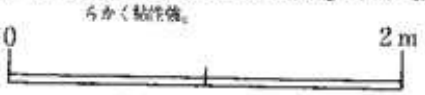
SKT165註記

1層　黒褐色（10YR 2/3）黄色土が斑状にわずかに混入。炭化物少量混入。土はややかたく粘性強。

2層　黄　色（10YR 4/4）暗褐色土混入。土はやわらかく粘性強。

3層　黄　色（10YR 4/6）かたいブロック混入。土はやわらかく粘性強。

4層　黄　色（10YR 4/6）3層よりやや灰色っぽい。土はやわらかく粘性強。



第148図　SKT160第6号Tピット・SKT165第8号Tピット

第1表　Tピット観察表

番号	遺構番号	検出区	法量(単位cm)	長軸方位	備考
1	SKT 45	LH48 LI48	381×60×100	N-67°-W	
2	SKT128	MC53-54	436×91×133	N-15°-E	
3	SKT130	LF44-45 LG44-45	288×68×106	N-68°-E	東半分調査区外。
4	SKT131	LF46 LG46	307×44× 81	N-83°-W	
5	SKT159	MB40	305×53×108	N-41°-W	SD218によって切られる。
6	SKT160	LH46-47 LI46	278×33× 67	N-83°-E	SI 67、SD206、SD207によって切られる。
7	SKT161	LJ42 MA42	351×41× 76	N-61°-W	SA144、SI 108によって切られる。
8	SKT165	MB41	332×70× 99	N-46°-W	SI 108、SN149によって切られる。

(長さ×幅×深さ)

3．本遺跡のフラスコ状土坑について

本遺跡で検出された2基のフラスコ状土坑のうち、SK04については縄文時代後期前葉より前というだけでその帰属時期の上限がどこまでさかのぼるのかは不明である。またSK08については、上下限の決め手にも欠けるのであるが、一応、SK04とさ程隔たりのない時期のものと考えておきたい。

縄文時代に作られるフラスコ状ピットはその形態や内部の出土遺物から食料貯蔵穴としての機能が考えられている。時期的には前期以降晩期までの各期を通して存在するが、その立地パターンは以下のように整理されるであろう。

1．住居跡などの集落を構成する他の遺構と併存する場合

2．他の遺構に伴わず独立して立地する場合　a　何基か群集してある場合

b　散在あるいは単独で立地する場合

このような立地パターンの類型をその機能と合わせて考えると、1は集落内で日常の食事に供される食料を貯蔵する「集落内貯蔵」の類型であり、2は集落から離れた場所での非集落内貯蔵、すなわち「採集地貯蔵」の類型として了解される。換言すれば、「集落内貯蔵」を消費の場での貯蔵、「採集地貯蔵」を生産(採集)の場での貯蔵と規定することもできる。

ところで、植物性食料はその採集・栽培の如何を問わず、得られる時期は季節的に限定される場合が大半である。縄文時代の植物性食料のうち、その大きな部分を占めていたと考えられる堅果類については、言うまでもなくその採集時期は年1回の秋であり、その貯蔵期間も加工

しない限り、翌春までの冬期間に限られる。したがって、大規模な採集地では収穫物である堅果類の量も相当量に上り、それを集落へ搬入するのに要する期間、採集者が収穫物を貯めおくことが可能であり、かつ他の採集者やそれを摂食する動物から保守することが可能な施設が必要である。広範囲な採集地を複数の集落で管理し収穫に関しては大掛りな共同作業を行うことでもない限り、収穫物を採集地から集落へ直接に運搬することには限界があり、採集地を有効利用するためにもそうした必要度は高かったと見ることができる。集落から離れた遺跡で見つかるフラスコ状土坑は、そうした「採集地貯蔵」の必要を満たすものであったと考えたい。

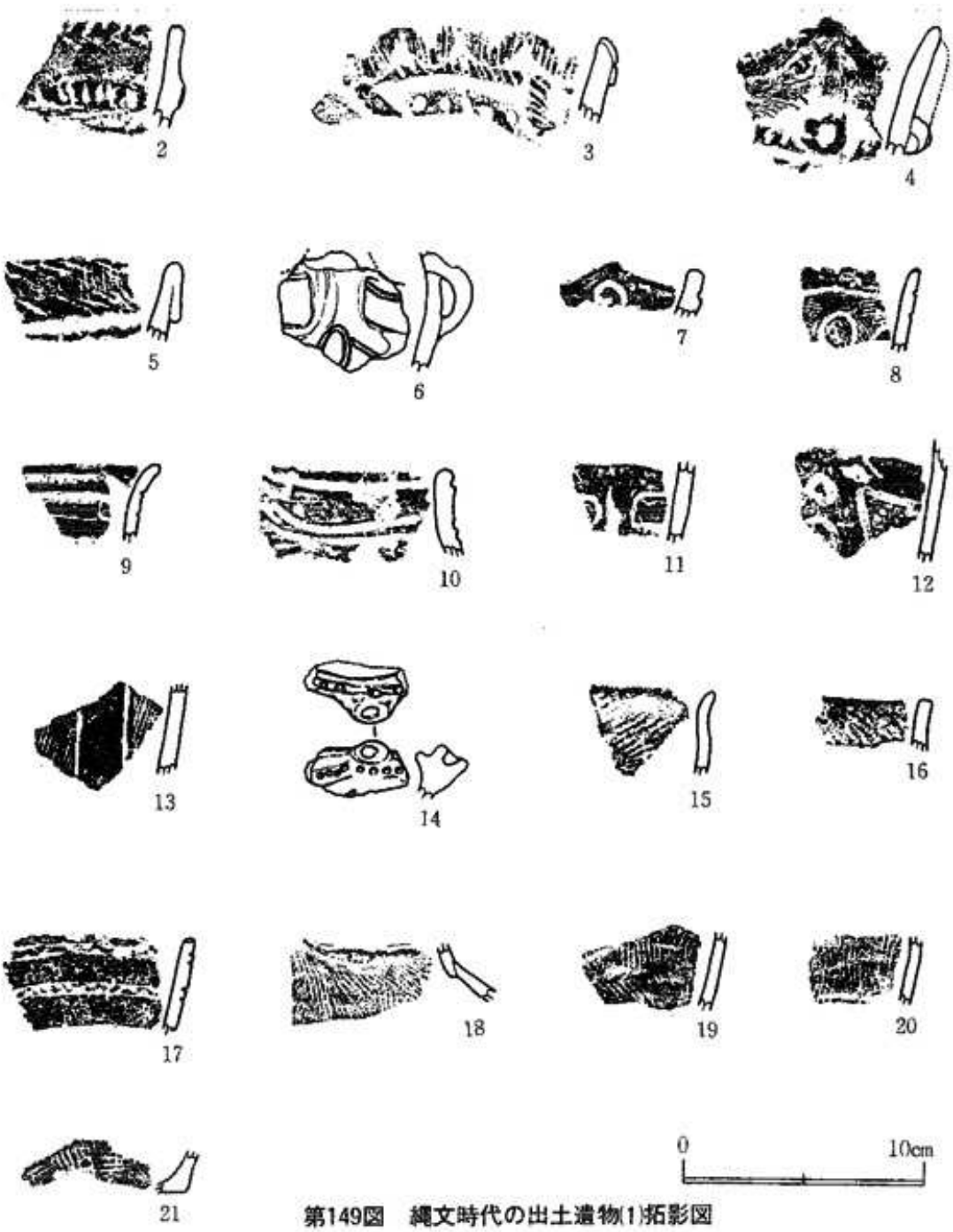
さて、そうした必要によって生じた「採集地貯蔵」における前記a、b 2つの類型差は、どのように解釈可能なのか、考えてみたい。aのように群集してある場合には、大概、土坑同士が重複したり、隣り合う土坑のうちより新しい土坑を掘った際の排土が、より旧い土坑の覆土として観察されることがある。したがって、そうした群集してある貯蔵穴の存在は、長期間集落と採集地の関係が不変だった、すなわち、採集者の属する集団が何年もの間その場を採集地として利用していたことを意味する。対して、bのように単独あるいは散在した状態でしか貯蔵穴が作られなかった場合は、集落と採集地の関係が不安定であったことが示されていると考えられる。より実際的な解釈を選べば、採集地が恒常的な生産量を維持し得ない程規模の小さいものであったか(もしくは必要としない程度の小規模にしか採集活動が行なわれなかったか)、あるいは、集落規模が小さく常に移動を繰り返していたのかいずれとなろう。収穫量の多寡と集落規模の大小は相対的に変動するものと見做す必要があるから、前者のような場合には、大規模集落に対しては他にもいくつかの採集地の存在を想定することが必要であるし、小規模集落に対しては、その採集活動が年を追って地点を変えていたと見ることができる。

本遺跡例のようにフラスコ状土坑がほとんど単独であるような場合は、以上のように集落から離れた「採集地貯蔵」のうちでも、集落との関係が不安定な状態で営まれた例であろう。本遺跡の周辺で見ると北側の沢を隔てた舌状台地上に、中期後葉～後期前葉の5軒の竪穴住居跡をもつ寒川Ⅰ遺跡がある。この集落はその住居軒数から見て小規模集落で、その集団構成員数もきわめて少なかったと見られる。本遺跡近辺での集落遺跡としては唯一既知の遺跡であるが、本遺跡のフラスコ状土坑2基を残した集団の居住域としての可能性は考えて良いのではないかと思われる。

第2節　遺構外出土の縄文時代～弥生時代の遺物

本遺跡で出土した縄文時代～弥生時代の遺物はきわめて僅少である。調査区全体で見ると北半部分に偏る傾向が認められるものの、集中して出土した地点はなく土器片や石器が包含層中

に散在する程度の出土状態でしかない。また、土器片によって知ることのできるその帰属時期は縄文時代前期から後期、弥生時代後期と長期に亘るが、各時期ともその内容は非常に希薄である。そのため、出土している石器類のうち少数の特徴的な石器を除いては、その帰属時期は不明とせざるを得ない。したがって、土器については一応の時期別を考慮した上で群を設定し記述することとするが、石器については特に時期的な基準を考慮せず記述を進めてゆく。



第149図　縄文時代の出土遺物(1)拓影図

第Ⅰ群土器(第149図－2、図版105)

縄文時代前期の土器である。ごく僅かに外傾する口縁をもつ深鉢形の器形であると考えられる。この破片の部分で見る限り、口縁は平縁である。口縁下3cmの部位には粘土紐を貼付けた後、丹念にナデつけた隆帯が施され、この隆帯上および口唇上にはLRの撚紐を縦位及びほぼ直角に当てた、縄文原体の側面圧痕列が施文されている。口縁上端から隆帯までの間は横位にナデつけられて無文とされる。胎土にはごく僅かながら繊維が含まれる。また砂粒の混入は非常に細かな石英粒が観察される程度である。しかし、胎土に用いられる粘土のキメは繊維の混入もあってか、さほど細かくはない。

第Ⅱ群土器(第149図－3・4、図版105)

第149図－3の土器は、口縁の外傾する鉢ないしは深鉢形の器形をとるものと思われる。口縁下に1本の粘土紐が貼付けられ、口唇上とその粘土紐上をかけてさらに別の粘土紐が鋸歯状に貼付けられている。また、口縁下にも斜位の粘土紐が貼付けられている。粘土紐上にはLの撚りの絡条体を回転した撚糸文が施されるが、その施文は各々の粘土紐毎に行なわれており、条の方向が粘土紐毎に異なっている。この粘土紐の貼付文の他、口縁下には棒状工具による刺突文が横位5列に施文されている。胎土には砂粒を含むが焼成は良好で器壁は堅緻である。第149図－4は山形の波頂部をもつ波状口縁の土器である。口縁はやや外反する。口縁下には粘土紐が1本巡らされ、波頂部からも垂下する粘土紐が貼付けられた痕跡が認められる。口縁下を巡る粘土紐との接続部位には頂部を僅かに凹ませた粘土瘤が貼付けられる。口唇上と口縁下を巡る隆帯上にはLRの撚紐の側面圧痕列が施される。裏面の器面調整は横位のミガキが丹念に施されている。胎土にはごく僅かの砂粒と繊維が含まれるが、焼成は良好である。

第Ⅲ群土器(第149図－5～16、図版105)

第149図－5は折返し口縁の鉢または深鉢形土器となるであろう。貼付けられた粘土帯の上面には、Lの撚りの絡条体を縦位に回転させて縦走する撚糸文を表した後、同じ原体を左上―右下方向で回転させて、斜行する撚糸文を表している。胎土に含まれる砂粒は少ない。焼成は比較的良好であるが、器壁は脆く裏面は全面剥落している。6は橋状把手をもつ鉢ないしは深鉢形土器の破片である。把手は口縁上に付けられた突起下に設けられていたと推測される。把手上下の付け根からは1条づつの沈線が口縁に沿って巡るものと思われる。また把手下には縦位S字状に連鎖して施される沈線の上端が認められる。胎土には大粒の砂粒を含むが、焼成は良好で器壁は堅い。7も鉢ないし深鉢形土器の波頂部の破片である。口縁の波頂部直下に渦巻き状の沈線が描かれている。胎土には細かな砂粒を若干量含むが焼成は良好で器壁は堅緻である。8は器壁の厚さ、器形の弯曲の具合から鉢形土器になるものと思われる。口唇部に加えられた刻目列によって小波状口縁を呈する。口縁下には磨消縄文手法による文様が描かれるが、地文

に施される縄文は、Lの撚紐を横位に回転させた無節の縄文で、沈線は浅く施文後の調整は行なわれていない。胎土には僅かな量の砂粒を含み、焼成は不良で器壁は脆い。9は外反する平口縁の鉢形土器破片である。口縁下には2条の平行沈線が巡るが、一部分で沈線の描く方向を反転させて上下の沈線を連結している。胎土には砂粒を多く含み、断面を見ると粘土はパイ状に薄く積み上げられている。焼成は良好である。10は、大きくうねる波状口縁の鉢ないしは深鉢形土器となるように思われる。口縁直下を巡る沈線1条とその下に2条の弧線を描いている。胎土には細かな砂粒が含まれているが、焼成は不良で器壁は脆く、表裏面の剥落が著しい。11・12とも沈線による文様が描かれた土器片である。12では渦巻状の沈線と矩形構図の沈線とが描かれている。おそらく、渦巻状沈線を境として左右両側に同形の構図が描かれるであろう。胎土は両者とも砂粒を含むが、焼成は11では良好、12では不良で器面の剥落が著しい。13は地文にLの撚りの絡条体を回転した後、縦位の沈線を引いてその間を磨消した土器片である。内面も丁寧にナデられて平滑に仕上げられている。胎土には細かな砂粒を含むが、焼成は良好で器壁はしっかりしている。14は浅鉢形土器、あるいは口縁が大きく開く鉢形ないしは深鉢形土器の口縁部破片である。口縁一箇所に上部に盲孔をもつ突起が付けられている。口唇の外側と突起下部とに先端の丸い棒状工具による刺突列が施されている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良好で器壁は堅緻である。15・16は平口縁の鉢ないしは深鉢形土器で、口縁以下、全面縄文の施される土器である。15は口縁上端が屈曲して外側に反るプロフィールをもつ土器片で、体部に施される縄文はRLの撚紐の縦回転による。16は直角に切れる口唇部をもち、口縁部はほぼ直立する。器面にはRLの撚紐を横位に回転して縄文を施文している。両者とも胎土に砂粒を含むが、焼成は良好で器壁は堅い。

第Ⅳ群土器(第149図—17～21、図版105)

第149図—17は口縁部から直線的に降りる鉢形土器の口縁部破片である。口唇上には先端の角ばった工具により刻目列が入れられる。口縁下には1.7cm間隔で交互刺突文が施されているが、交互刺突文を表すにあたっては、半截竹管状の同時施文具によって平行沈線を描き、その間の盛り上がった部分の上側については器面に対して右下から左上の方向で、下側では器面に対して右上から左下の方向で刺突列を施文している。刺突には先端の尖った細い工具が用いられている。胎土には大粒の砂粒が含まれるが、焼成は良好で堅緻である。18～21は非常に細かな縄文が施された土器片である。18の壺形土器の肩部破片は頸部に近い部分に朱塗りされた痕跡が残り、体部には撚りの細かなRL縄文が横位回転施文されている。裏面に残る粘土積み上げ痕を見ると、頸部を作る粘土は体部の粘土帯の内側に貼り付けて形成されている。19・20は同一個体の破片であるが、撚りの細かなRLの撚り紐を横位および左上—右上の方向で回転して斜行および縦走する縄文を施文している。21は鉢形土器の底部破片である。体部下半では縦走す

る縄文を、体部上半では斜行する縄文が表されている。この土器の場合には1つ1つの条の間隔が合っており、附加条の縄文である可能性もある。その場合巻きつけられる側は1段のRの撚糸である。いずれも胎土には細かな砂粒を含むが、焼成は良好である。

以上のⅠ～Ⅲ群土器のうち、第Ⅰ群土器については胎土の類似、基本的には原体先端の圧痕列であるループ文と同じ縄文原体の側面圧痕列が施文されることから、前期前葉の表館式土器に類似する土器としてとらえておきたい。また、第Ⅱ群土器については粘土紐の貼付文が施される特徴から、中期中葉の円筒上層c式およびd式に比較されるものと思われる。また第Ⅲ群土器は後期前葉のあたりに位置づけられる土器群であり、第Ⅳ群土器は交互刺突文、附加条縄文の可能性のある縄文を含む細かな縄文が施されることから、天王山式、小坂X式に比定可能である。

石鏃(第150図－22、図版106)

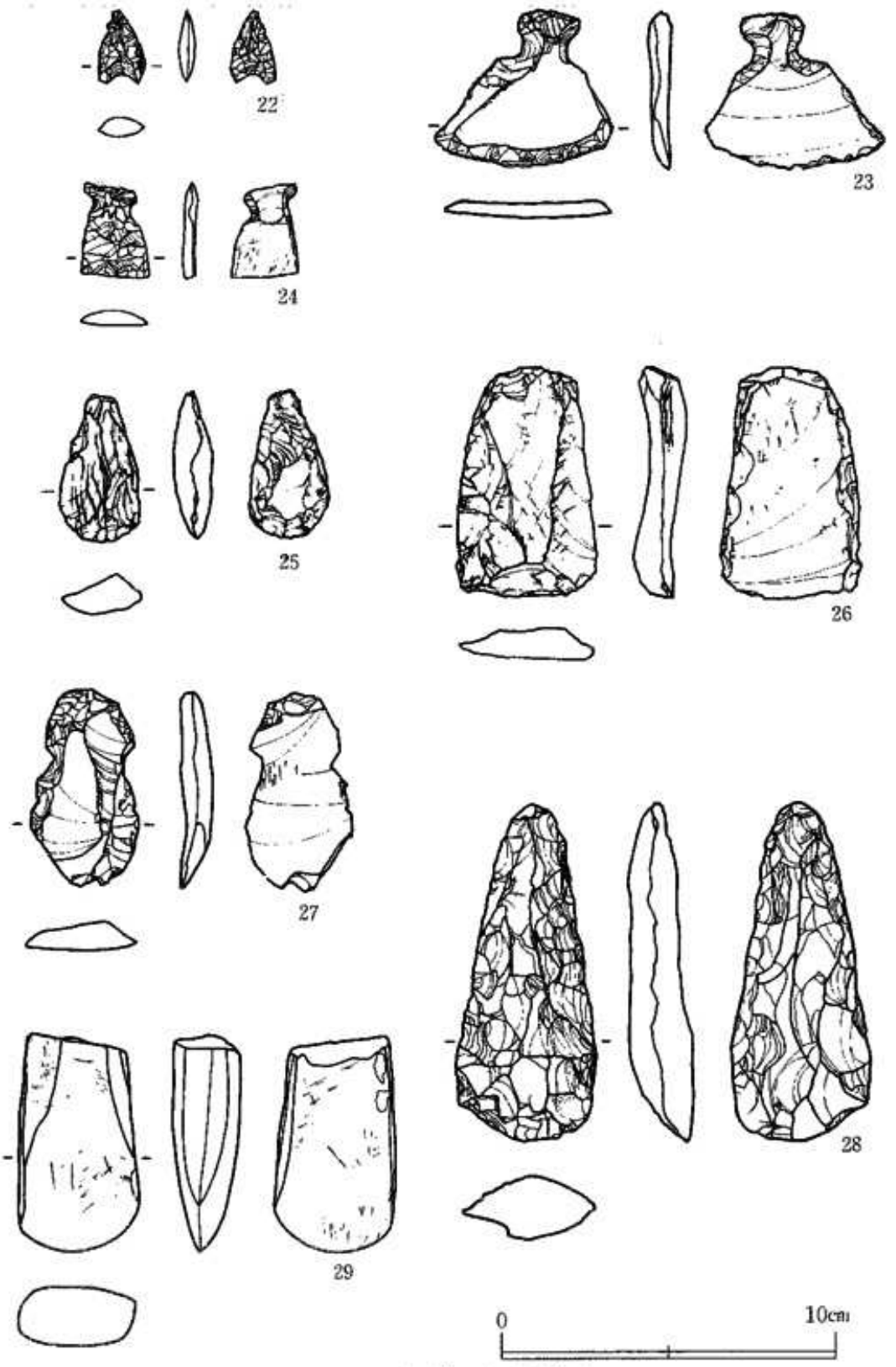
頁岩製の有脚の石鏃である。両面に細かな調整剥離を加えて形を仕上げているが、図の左側に置いた面の左側縁先端には2回の比較的大きな剥離痕が残る。先端を尖らせるための加工と思われるが、完結しないままにおかれたものであろう。

石匙(第150図－23・24、図版106)

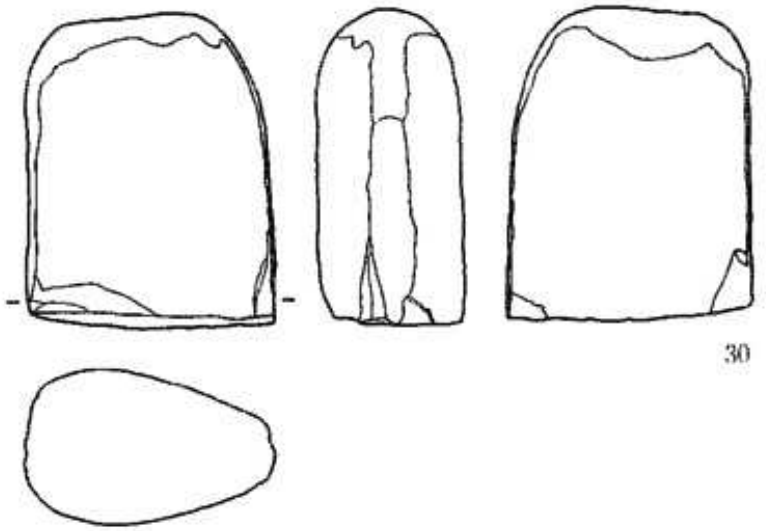
23は頁岩製の横形石匙である。横長の剥片を素材とし、本体部分は主に主要剥離面側からの剥離によって形を仕上げている。また図の左側に置いた面の右側縁は折断されている。摘部分の頂部には剥片を取り出した際の打面が残されている。摘を作り出すための抉り部分は、左右とも主要剥離面側からの加撃で表面側に比較的大きな剥離面を形成した後、その剥離面を打面として、主要剥離面側に細かな剥離を加えている。24も頁岩製の縦形石匙である。縦長剥片の先端部、ヒンジフラクチャーで終わる側を摘部分としている。本体はその先端を折損しているが、調整剥離は全て、主要剥離面側から表面側へ向かって施されている。摘を作り出すための抉りは、図の左側に置いた面の右側では表面側から、左側には主要剥離面側から加えている。

石錐(第150図－25・26・27、図版106)

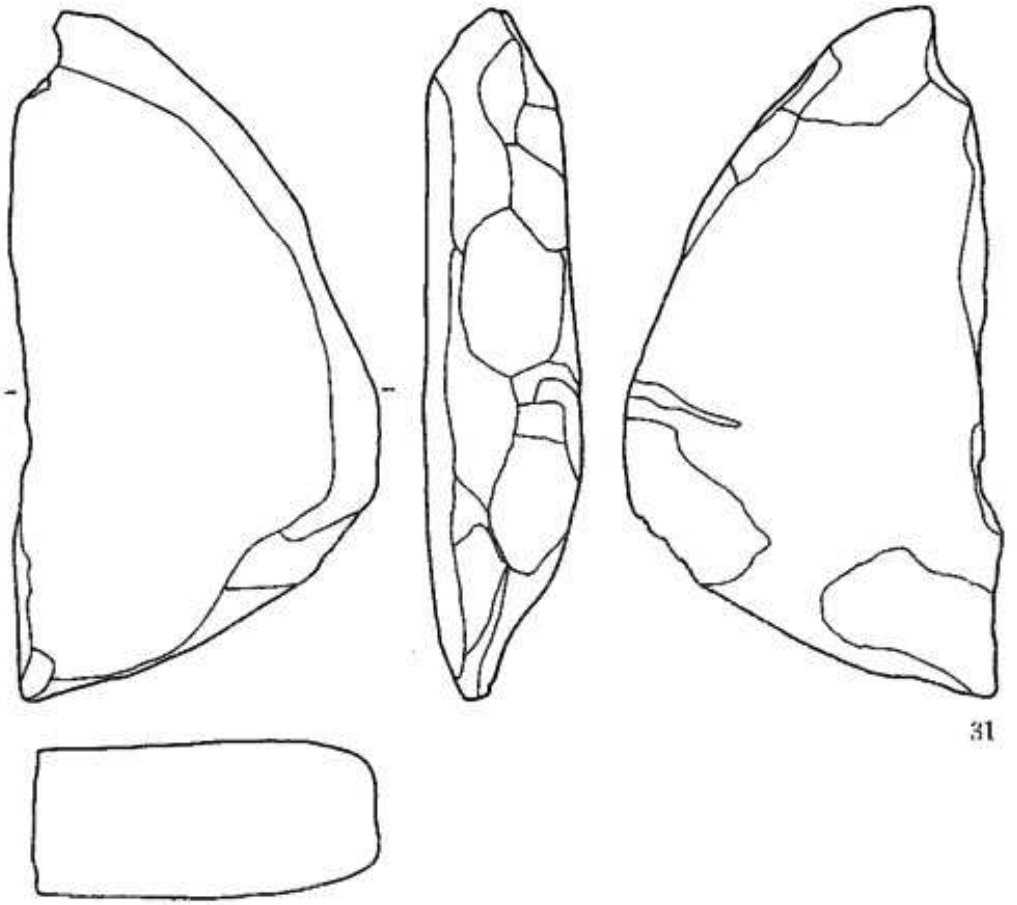
25は瑪瑙製の石錐である。両面に調整剥離を加えて形を仕上げており、刃の部分は弧状となる。26も瑪瑙製の石錐である。縦長の剥片を素材としており、基部に剥片を取り出した際の打面が残されている。直線的な刃部は、剥片を取り出した際の最も古い面に、主要剥離面側から細かな剥離を加えて作り出している。側縁の調整は、主に表面側から主要剥離面側に向かって小さな剥離を加えて行っているが、図の左側に置いた面の左側縁には、最後、表面側に2回の大きな剥離を加えて厚さを調整している。27は頁岩製の石錐である。縦長の剥片を素材として利用したものと思われるが、両面とも丹念に調整剥離が施され、素材の表面、主要剥離面、打面等は全て除去されている。刃の部分は弧状に、側縁は直線的に仕上げられて、基部は尖る。



第150図　縄文時代の出土遺物(2)



30



31

第151図　縄文時代の出土遺物(3)

断面形は、図の左側に置いた右側が凸面となり、刃部も最終的な細かい調整はこの面に対して施され、片刃の形状を呈する。

掻器(第150図－28、図版106)

縦長剥片の表面側縁にのみ調整剥離を加えて形状を整え、また刃部を作り出している。主要剥離面側には全く手が加えられておらず、図の左側に置いた面の上端と左下端には折断痕が残る。また、側縁中央よりやや上の部位では両側に同じく主要剥離面からの加撃によってノッチが入れられている。

磨製石斧(第150図－29、図版106)

緑色の安山岩製の磨製石斧である。基部側を折損する。刃縁は図の左側に置いた面でやや右側に偏って弧状に湾曲する。刃部再生に伴う刃縁の研ぎ出しの結果と思われるが、同時に刃部右側が摩耗の激しかったことを示す。すなわち、この磨製石斧の場合、縦斧として使用され、図の右側縁が下方、柄の握り部分に近く装着されたものと思われる。

擦石(151図－30・31．図版106)

30は半欠品であるが、安山岩質の扁平な楕円礫の両側縁に擦面が残されている。また上部に敲打によって平坦に作り上げられている。擦面の周囲に加撃しての剥離痕は認められないが、基本的に狭長な擦面を形成する扁平打製石器と同形態を示し、同じような使用法がとられたと思われる。31も半欠品であるが、やはり安山岩質の扁平な円礫を用いている。この場合擦面は扁平礫の両面であり、片面、図の右側に置いた面から側縁を加撃して面の形状を整えている。石皿のような使用のされ方をしたものであろうか。

以上の石器のうち、石鏃に分類した第150図－26の石器は、その製作法、形態とも早期～前期初頭のトランシェ様石器に類似する。また、擦石のうち、第151図－30の石器は扁平打製石器と同形態で、これについては前期～中期中葉の時期に伴うものと見て良いであろう。

第3節　平安時代以降の遺構と遺物

今回の調査で検出された平安時代の遺構としては、竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡5棟、柱列2列、有溝柱列2列、土器焼成遺構14基、土坑96基、製鉄炉2基、須恵器窯窯1基、炭窯1基、鍛冶関連遺構1基がある。また、遺構確認面が平安時代のそれよりも上位にあり、同時代の遺構を切って構築されたものを含む溝跡17条がある。これについては明確な時期の特定はできないのであるが、それらの中でも新しい時期に措くことのできるＳＤ206は、近代の炭窯ＳＮ89よりも下位で確認されている。したがって、一応この3節で扱うこととする。

これらの遺構のうち、竪穴住居跡以下製鉄炉までと溝跡は台地上面の調査区で検出され、須

恵器窯窯、炭窯、鍛冶関連遺構は南側斜面に拡張した調査区で検出されている。記述は、便宜上この調査区毎に行う。

１．台地上面調査区

（１）竪穴住居跡

ＳＩ02第１号竪穴住居跡（第152図～第155図、図版65～図版67・図版107）

台地上面調査区の北端、ＭＤ65、ＭＥ65グリッドにある。検出地点は緩く北側へ傾斜しており、台地の北縁までは５m程の距離しかない。

表土を除去し、第Ⅳ層上面まで掘り下げた結果、黒褐色～暗褐色～褐色の方形プランとして確認した。南北に長い長方形の南側は、おもに黒褐色土が充填し、北側では褐色土が入っている。東壁輪郭の一部に暗褐色土中に焼土粒が混じった張り出しが確認され、カマド煙道部と判断された。確認面で見る限り、煙道部の焼土化の程度は弱い。

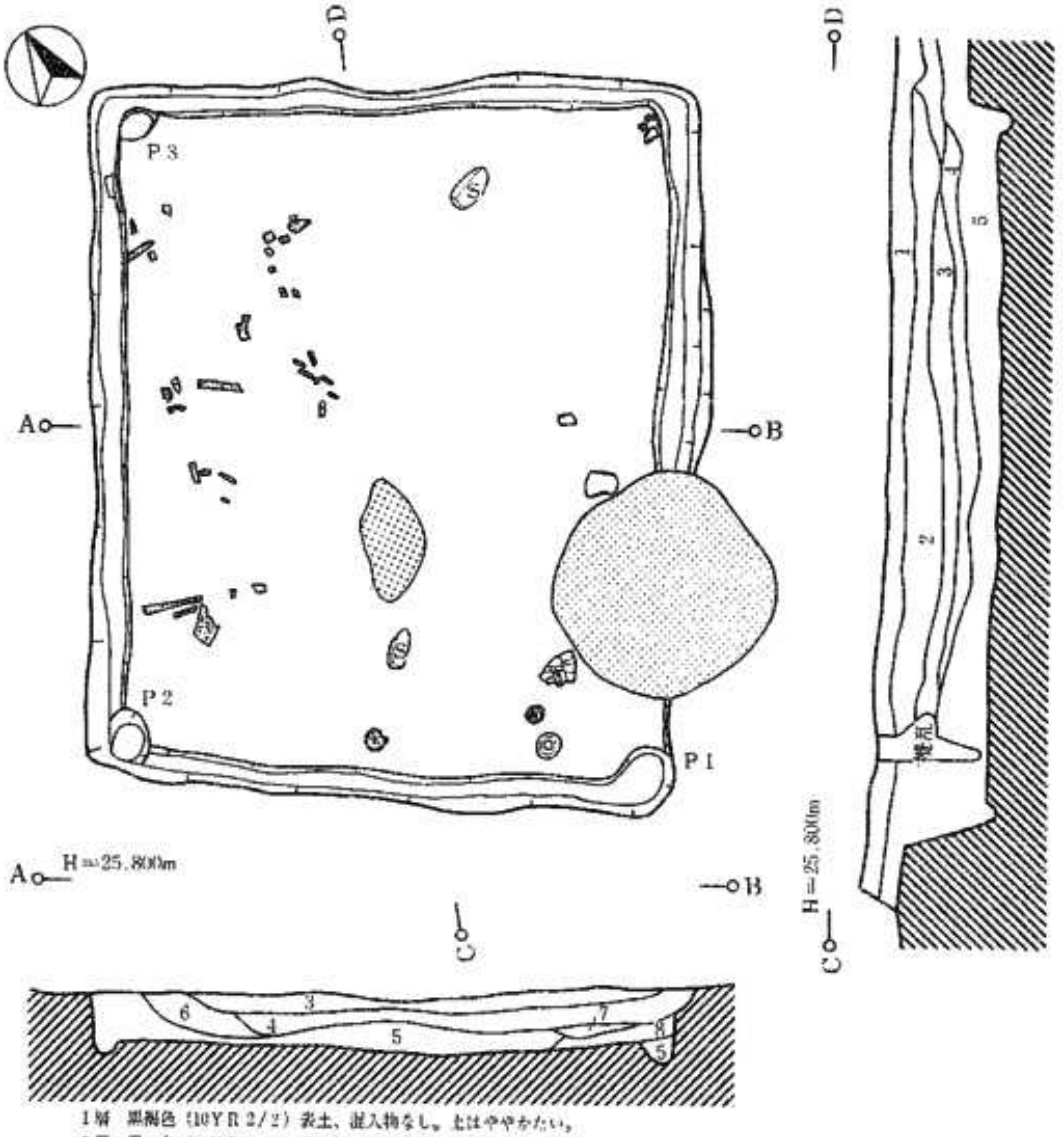
覆土は、表土層（Ⅰ層）以下、８層に分けられた。一部に木根の攪乱が認められるものの概して整然とした層準で、自然堆積によって埋没したであろう過程が良く示されている。攪乱部分を除いては断面に垂直方向のセクションラインはあらわれておらず、住居内の構築材の痕跡は、４層以下の覆土中に混入する炭化材砕片、それに西側半分の床面直上に貼り付いて散在する炭化材によって知ることができるだけである。

平面形はカマドの付設される側の壁が長い長方形である。長軸の長さ3.5m、短軸の長さ3.1m、面積は10.74㎡を測る。北側に向かう緩い傾斜面に位置するため、北壁で16cm、南壁で30cmとその壁高に差がある。床面は概して平坦で、西側半分に炭化材が散乱する他、カマド焚口部の前方90cmの箇所に60×30cmの範囲で白色粘土の広がりを確認した。また北壁と南壁の床面上で20×10cmの河原石が１個づつ確かめられた。壁面の立ち上がりは東壁、西壁、南壁で75°前後、北壁で85°前後を測る。壁溝はカマド部分を除いて壁際に沿って四周している。深さは３～10cm、幅は10～25cmで概して東西壁で広く、南北壁で狭い。柱穴はこの壁溝内の南東隅、南西隅、北西隅で確かめられ、それぞれＰ１；８cm、Ｐ２；9.5cm、Ｐ３；20cmの深さがある。

カマドは東壁に付されている。カマドの中軸線は東壁の長さの約３分の１南壁から離れた部分に設定され、その方向はＷ－51°－Ｎを指す。焼土のひろがりによって確かめられる焚口最前部から煙出し孔先端までの長さは1.65m、カマド本体部分と煙道部の長さの割合は4.5対5.5である。カマド本体部分の両軸の幅は70cmを測り、支脚の中心は焚口最前部から55cm奥、中軸線から15cm北へずれた位置に設けられている。第Ⅲ層を幅35cmでくり抜いて作られた煙道は、燃焼部の端から50cmの間は水平で、その後、煙出し孔の下40cmの間は15°前後の緩い傾斜で上る。カマドの遺存状況は煙道前部が崩れていた他は良好で遺物も多い。支脚としては小形の甕（39）を倒立させて用いているが、燃焼部底面に伏せられた２個の坏（33、35）と甕の破片の上に

置くことにより、燃焼部底面からの高さ20cmを保っている。その他、カマド右袖の奥からは、甕の大形破片(42)が内面を上にした状態で出土している。また、カマド右袖部分には凝灰岩の切石が芯材として用いられている。

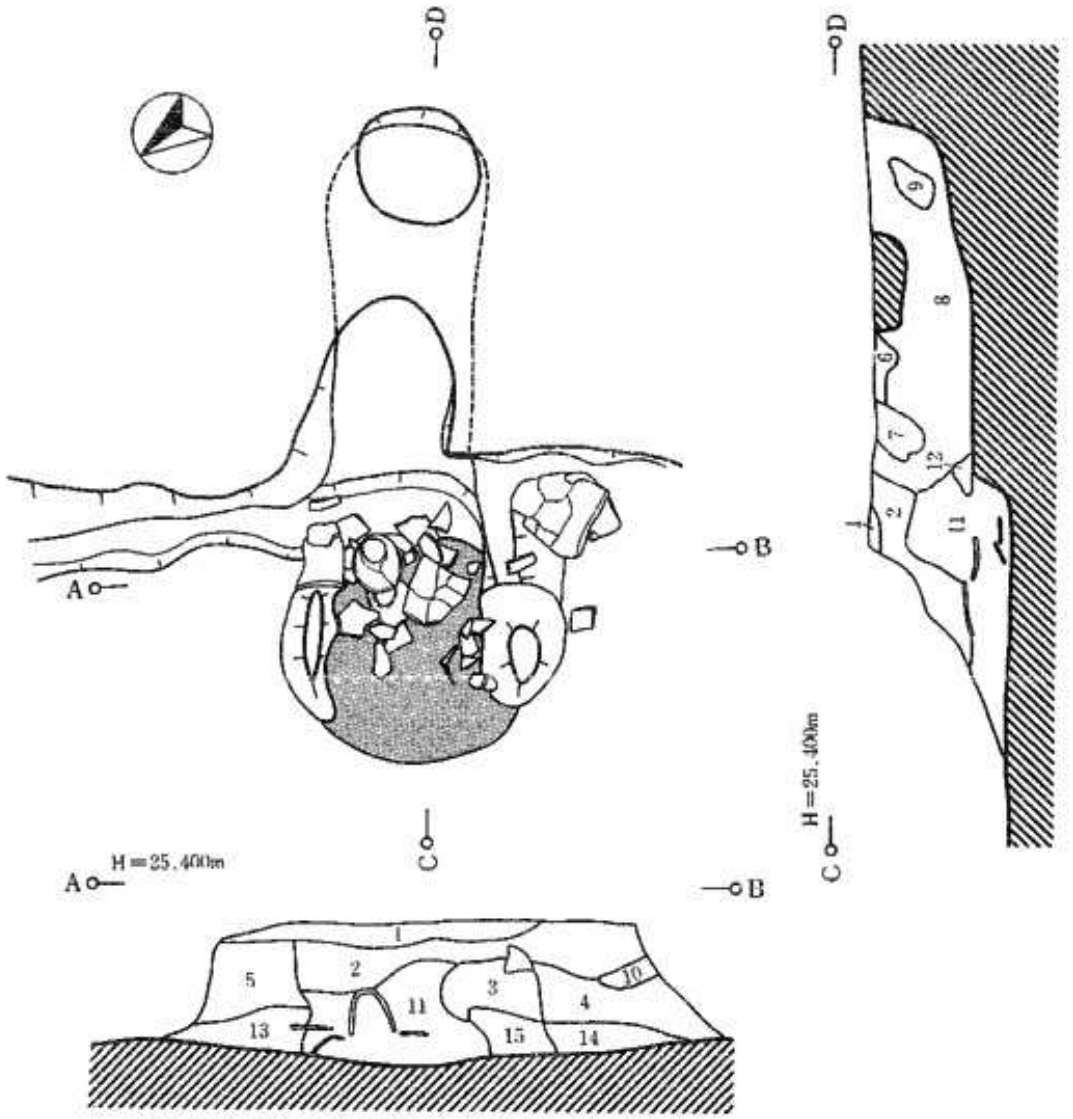
出土遺物には、土師器坏・甕がある。32～38の坏は底部に回転糸切り痕を留める。37は胎土に細砂粒を多く含んでおり、外面には煤状炭化物が付着している。33・35は支脚として用いら



1層 黒褐色 (10YR 2/2) 表土、混入物なし。土はややかたい。
2層 黒 色 (10YR 2/1) 混入物なし。土はかたくボロボロして粘性なし。
3層 黒 色 (10YR 2/1) 暗褐色土微量混入。2層よりやや黒っぽい。土はかたくやや粘性あり。
4層 黒褐色 (7.5YR 3/2) 炭化物微量混入。土は比較的かたく粘性あり。
5層 暗褐色 (7.5YR 3/4) 炭化物少量、明褐色土 (7.5YR 5/8) 粒子極少量混入。土はかたくベトベトしていて、粘性強。
6層 褐 色 (7.5YR 4/4) 炭化物微量混入。土はかたくベトベトしている。粘性強。
7層 褐 色 (10YR 4/6) 炭化物微量混入。土はかたくベトベトしている。粘性強。
8層 暗褐色 (10YR 3/4) 焼土微量混入。土はやわらかく粘性あり。

0 2m

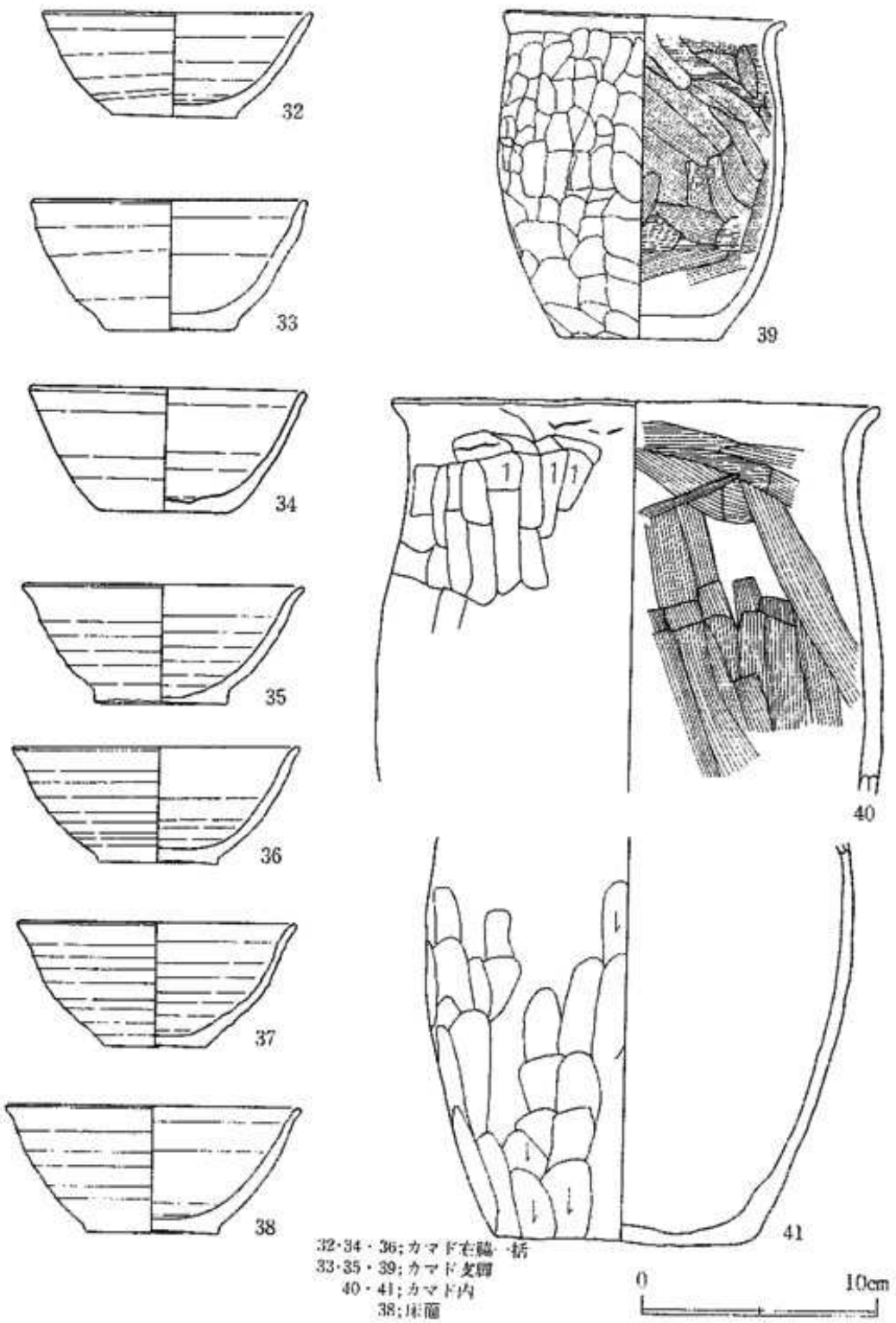
第152図　ＳＩ02第１号竪穴住居跡



1層　黒褐色（10YR 2/3）混入物なし。土は非常にかたく粘性なし。
2層　暗褐色（10YR 3/3）褐色土（10YR 4/6）粒子微量、炭化物微量混入。土はややかたく粘性なし。
3層　褐　色（7.5YR 4/6）炭化物、焼土微量混入。土はややかたく粘性弱。
4層　暗褐色（10YR 3/4）炭化物微量、焼土少量、褐色土（7.5YR 4/6）少量混入。土はややかたく粘性なし。
5層　褐　色（7.5YR 4/3）炭化物微量、焼土少量混入。土はかたく粘性弱。
6層　褐　色（7.5YR 4/4）混入物なし。土はやわらかくボロボロしている。粘性なし。
7層　褐　色（7.5YR 4/6）混入物なし。土はやわらかく粘性弱。
8層　暗褐色（10YR 3/4）褐色土（7.5YR 4/6）少量混入。土はやわらかく粘性なし。
9層　黒褐色（7.5YR 3/2）炭化物多量混入。土は非常にやわらかい。
10層　黒褐色（10YR 2/3）混入物なし。土はやわらかく粘性なし。
11層　褐　色（7.5YR 4/4）炭化物微量、明褐色土（7.5YR 5/8）小ブロック少量混入。土はかたく粘性弱。
12層　極暗赤褐色（5YR 2/4）暗褐色土（7.5YR 3/4）少量混入。土はややかたく粘性なし。
13層　褐　色（7.5YR 4/4）炭化物、焼土微量混入。土はややかたく粘性なし。
14層　褐　色（7.5YR 4/4）炭化物、焼土微量、褐色土（7.5YR 4/6）多量混入。土はややかたく粘性なし。
15層　褐　色（7.5YR 4/4）炭化物微量、焼土混入。土はややかたく粘性なし。

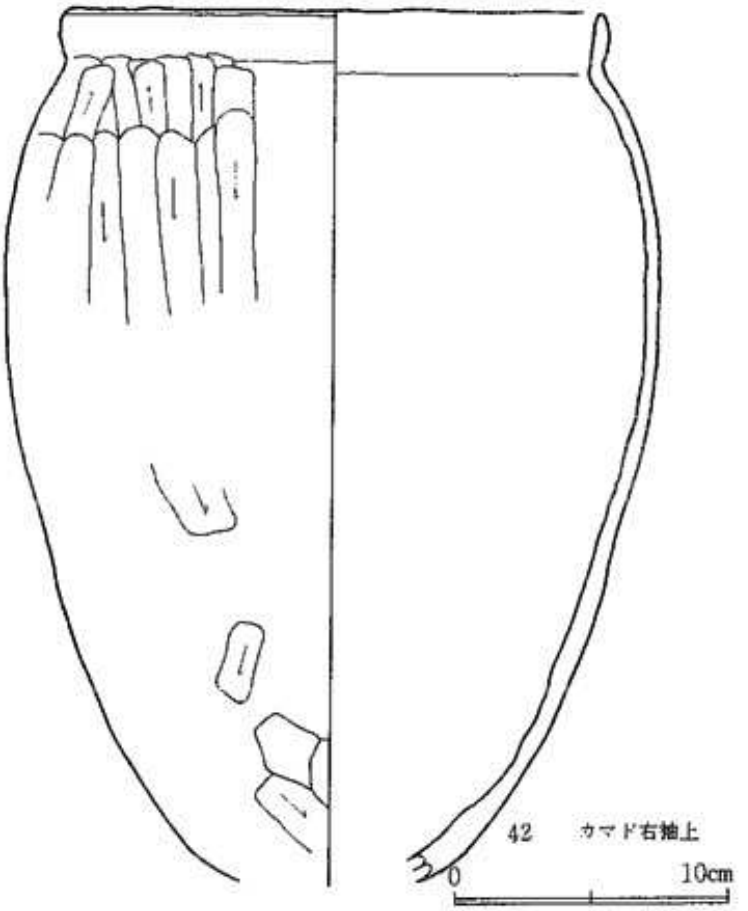
0　1m

第153図　SI02第1号竪穴住居跡カマド



第154図　ＳＩ02第１号竪穴住居跡出土遺物(1)

れたものである。32・34・36は住居跡南西隅のカマド右脇で、38は北東隅で出土している。特に36と32は前者が後者の上に重なった倒立状態で検出されている。39～42の甕はいずれも非ロクロのものであるが、図示し得なかったなかにロクロ使用の甕も検出されている。39が33・35の坏の上に置かれて支脚の役割を果たしていたものである。器面調整は、基本的には外面を縦位のケズリ、内面を縦位あるいは横位のヘラナデを施している。



第155図　ＳＩ02第１号竪穴住居跡出土遺物(2)

ＳＩ22第２号竪穴住居跡Ａ・Ｂ(第156図～第161図、図版68・図版69・図版107)

台地上面調査区のほぼ中央、ＭＡ49・50、ＭＢ49・50、ＭＣ49・50のグリッドにまたがって検出された。ＳＡ200の柱穴列からは13m南に位置する。

この竪穴住居跡は、同一地点で規模のより小さな住居跡から大きな住居跡へと建て替えられている。確認された順に後者をＡ住居跡、前者をＢ住居跡として記述する。

Ａ住居跡

表土を除去した第Ⅲ層上面で検出した。焼土粒と炭化物粒を混じえた暗褐色土の長方形プランとしてあらわれ、南東壁の輪郭の一部に、焼土化の著しい箇所が認められてカマドと判断した。

平面形はカマドの付設される側の壁がやや長い長方形で、長軸5.75m、短軸5.3m、面積は30.25㎡を測る。この住居跡のあたりから地形は南に向かって微かに傾斜しており、したがって確認された壁の高さも北東側では40cmと高く、南西側では15cmと低い。底面は貼床された部分が僅かに凹むが、概ね平坦である。床面中央には開口部径85×75cm、深さ30cmの土坑(Ｐ３)があり、その中央底面から倒立状態で重ねられた土師器坏２個体(47、53)が出土した。この他柱穴

以外の土坑が北壁寄りに4箇所(P2・6・7・11)と東壁寄りに1箇所(P5)あり、P5からは土師器甕の破片が、P6からも土師器甕と白色粘土が出土している。この他、P6底面から出土したのと同様の白色粘土は、住居跡の北東隅に近いP2の脇でも径40cm程の範囲の広がりとして確かめられている。壁面の立ち上がりは北西壁で80°前後と最も急峻になるが、南東壁・南西壁では65～67°で、北東壁では60°前後とかなり緩くなる。壁溝は北西壁では壁に沿って、南西壁ではその東寄りの部分で、壁から15～20cm内側で切られている。北東壁では柱穴に連続して東隅、北隅の西端にわずかに切られているが、中央の大部分には認められず、東壁では全く切られていない。壁溝の幅は10～50cmと広狭があり、深さは3～5cmときわめて浅い。柱穴は住居跡の四隅で確認されたが、南隅で2箇所に穿たれている。P12;30.5cm、P13;30.5cm、P14;22cm、P15;4cm、P16;20cmの深さである。

カマドは南東壁の南寄りに付設されている。カマド中軸線は南東壁の長さの約1/4分だけ南西壁から離れた部位に設定され、その方向はN－38°－Wを指す。カマド全体の形状は細長く、カマド本体(袖部)と煙道が一体となっている。焚口最前部から煙出し孔先端までは1.3m、カマド本体両袖の間は65cm（内法幅は26cm）を測る。煙道は短く、燃焼部から20cm壁外へ出たところで立ち上がる。燃焼部底面は著しく焼土化しているが、この焼土の上には天井部の崩落した粘土塊が堆積していた。

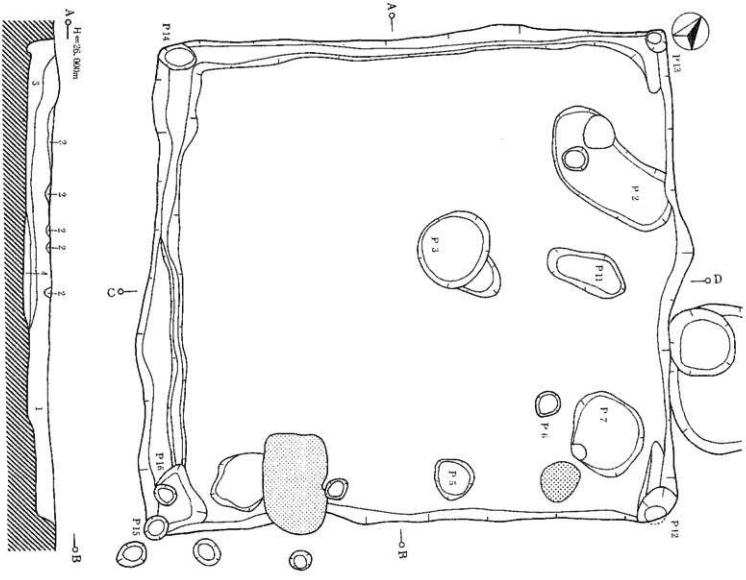
覆土は11層に分けられた。11層のうち1～4層までが、竪穴住居跡内を広範囲に埋める土で、5～11層は南北のセクションベルト中に確認された壁際の堆積土である。覆土の大半を占める1～4層で見る限り、それらは水平方向に伸びるセクションラインによって分割されており、この住居跡が自然堆積によって埋まったことを示している。床面上に部分的に堆積する4層は、貼床が焼土化したものである。

B住居跡

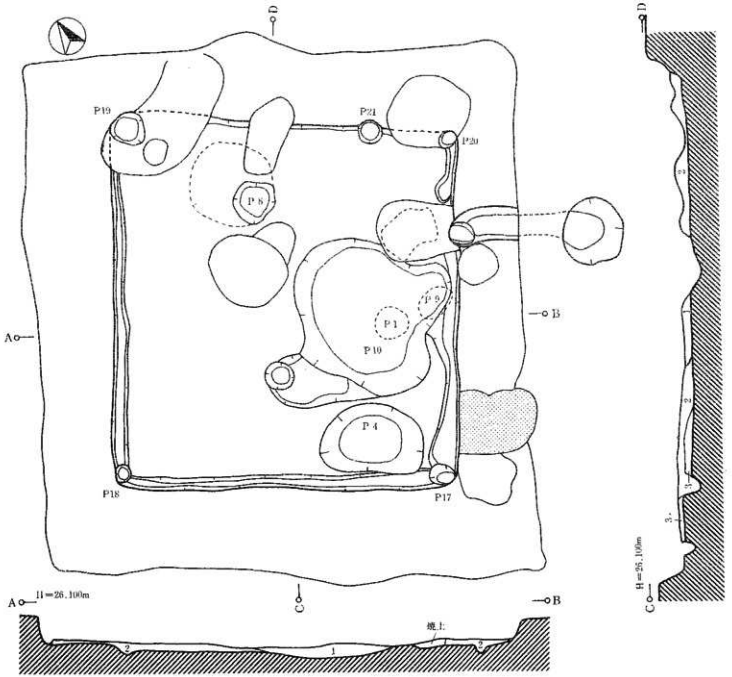
A住居跡の床面を精査してゆく過程で検出された。A住居跡の床面が、黄褐色土のブロックを多量に含む暗褐色土を用いての貼床であり、その貼床部分を剝ぎ取った結果、A住居跡よりもひと回り小さい方形プランとしてあらわれた。また、A住居跡内につくられている土坑のうちP11、P2の底～壁面にB竪穴住居跡の立ち上がりのラインが観察された。

平面形は長軸3.97m、短軸3.75mのカマドに付設される側およびその向側の壁が長い長方形である。面積は14.9㎡である。柱穴は基本的に住居跡四隅にあり、P17;36cm、P18;26cm、P19;26cm、P20;16cmの深さがある。他に北東壁にP21があるが、深さは10cmに満たない浅いものである。壁高は北西壁3cm、北東壁8cm、南東壁11cm、南西壁16cmと住居拡張時に削られて残存する高さは低い。南東壁寄り中央に径1m前後、深さ25cmの不整形の土坑(P10)があり、また、南壁にも径55×40cm、深さ25cmの土坑(P4)がある。西側の床面はA住居跡の土坑によっ

第156図　SI22A第２号竪穴住居跡



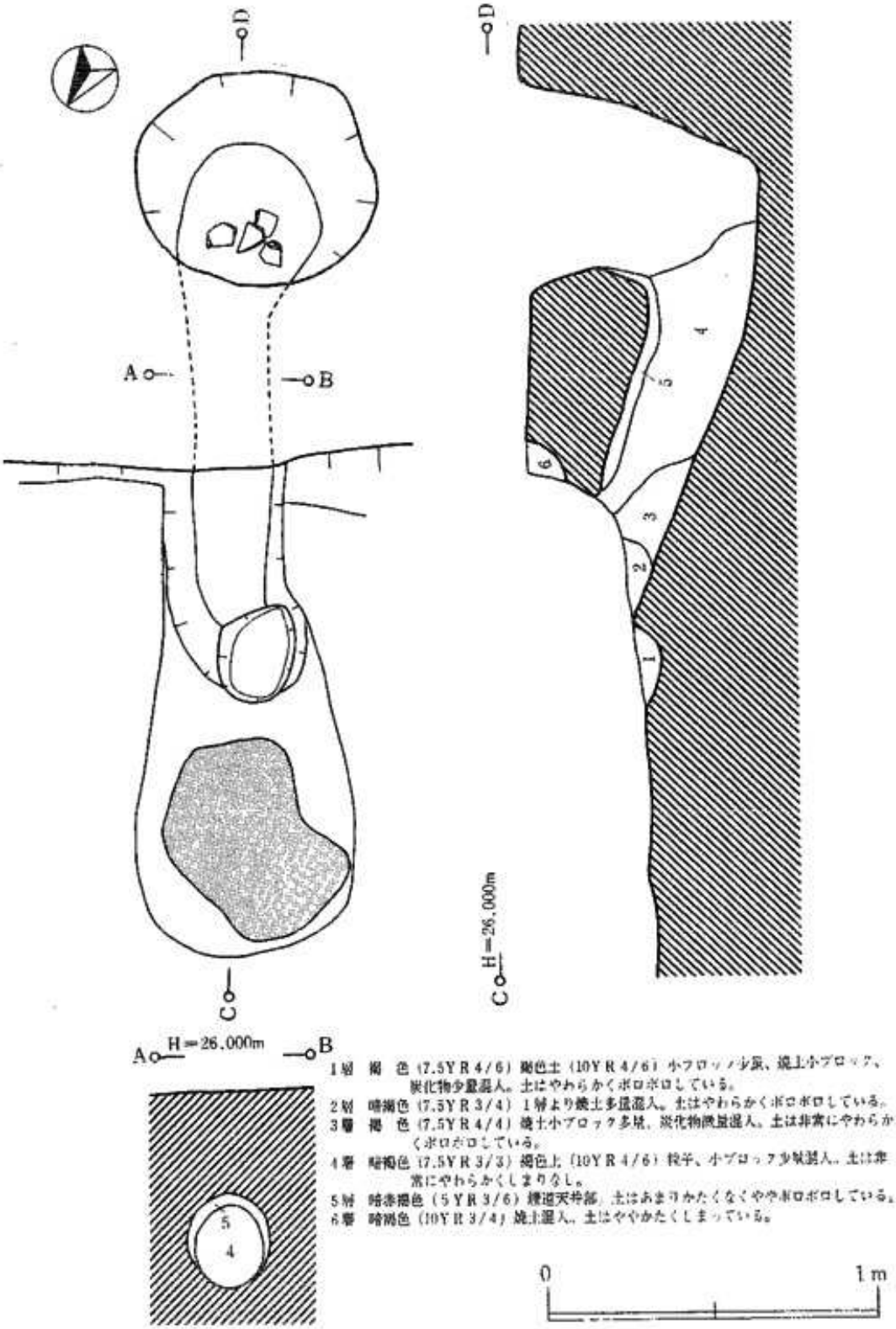
1層　暗褐色（7.5YR 3/4）焼土粒子微量、炭化粒子少量、明褐色土（7.5YR 5/6）少量混入，土はかたく粘性弱。
2層　暗褐色（10YR 3/3）混入物なし。土はかたく粘性なし。
3層　褐色（7.5YR 3/3）炭化粒子少量、焼土粒子微量、明褐色土（7.5YR 5/6）少量混入。土はやわらかく粘性弱。
4層　暗褐色（7.5YR 3/4）明褐色土（7.5YR 5/6）多量、炭化粒子微量、焼土少量混入。土はかたく粘性弱。
5層　にぶい黄褐色（10YR 4/3）混入物なし。土はかたくしまっている。粘性弱。
6層　暗褐色（10YR 3/3）混入物なし。土はかたく粘性なし。
7層　褐　色（7.5YR 4/4）焼土粒子、炭化粒子微量混入。土はややかたく粘性弱。
8層　暗褐色（7.5YR 3/4）混入物なし。土はややかたく粘性弱。
9層　暗褐色（7.5YR 3/3）混入物なし。土はややかたく粘性弱。
10層　緑茶褐色（5YR 3/6）焼土多量、炭化粒子少量混入。土はやわらかくボロボロしている。粘性なし。
11層　褐　色（7.5YR 4/6）混入物なし。土はやわらかく粘性弱。



1層　褐　色（7.5YR 4/4）焼土，炭化物，ロームブロック多量混入。粘性強く土はかたい。
2層　暗褐色（7.5YR 3/4）黄褐色土（10YR 5/6）多量，焼土，炭化粒子微量混入，土はかたくしまっている。粘性弱。
3層　褐　色（7.5YR 4/6）混入物なし。土はややかたく粘性中。

第157図　SI22B第2号竪穴住居跡

0　2m

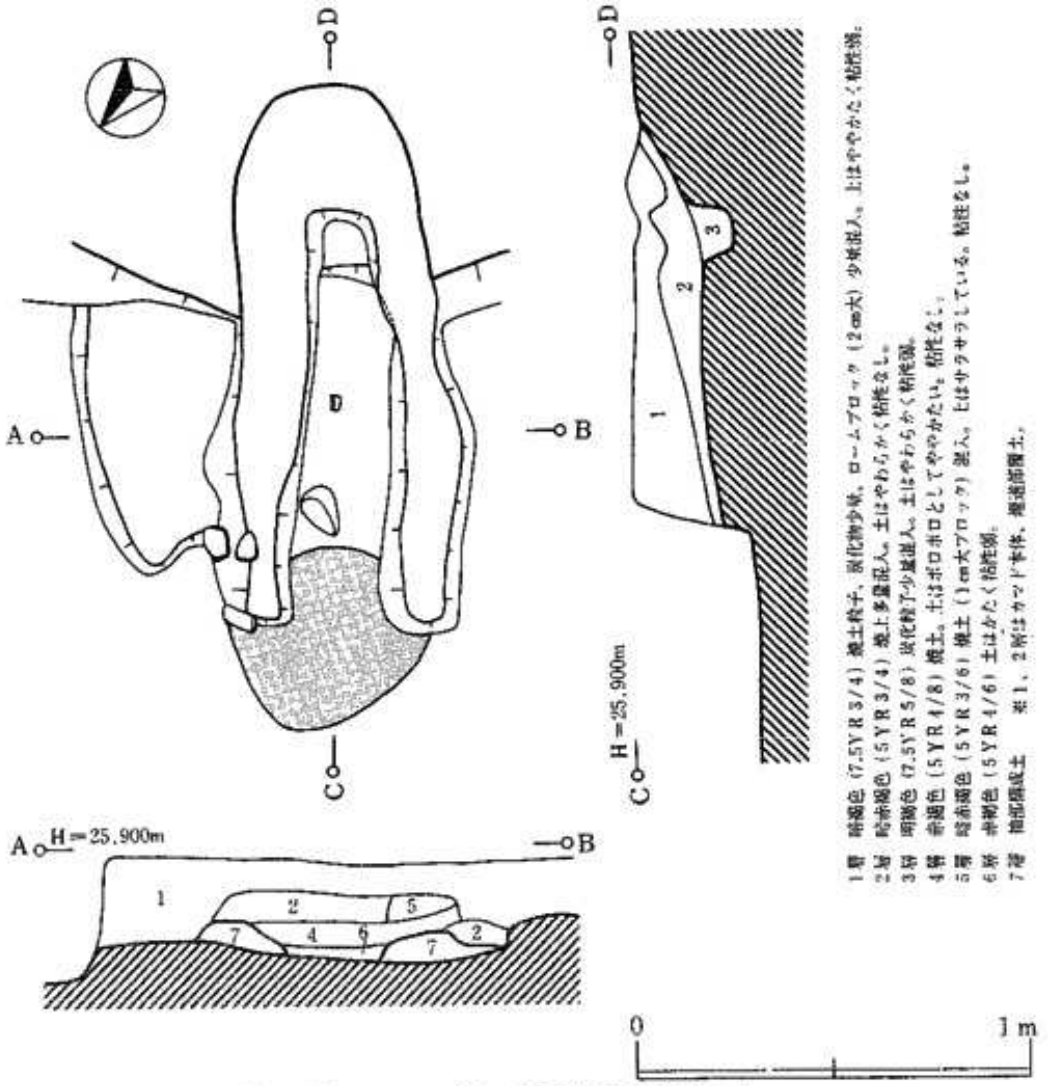


1層　褐　色（7.5YR 4/6）褐色土（10YR 4/6）小ブロック少量、焼土小ブロック、炭化物少量混入。土はやわらかくボロボロしている。
2層　暗褐色（7.5YR 3/4）1層より焼土多量混入。土はやわらかくボロボロしている。
3層　褐　色（7.5YR 4/4）焼土小ブロック多量、炭化物微量混入。土は非常にやわらかくボロボロしている。
4層　暗褐色（7.5YR 3/3）褐色土（10YR 4/6）粒子、小ブロック少量混入。土は非常にやわらかくしまりなし。
5層　暗赤褐色（5YR 3/6）煙道天井部。土はあまりかたくなくややボロボロしている。
6層　暗褐色（10YR 3/4）焼土混入。土はややかたくしまっている。

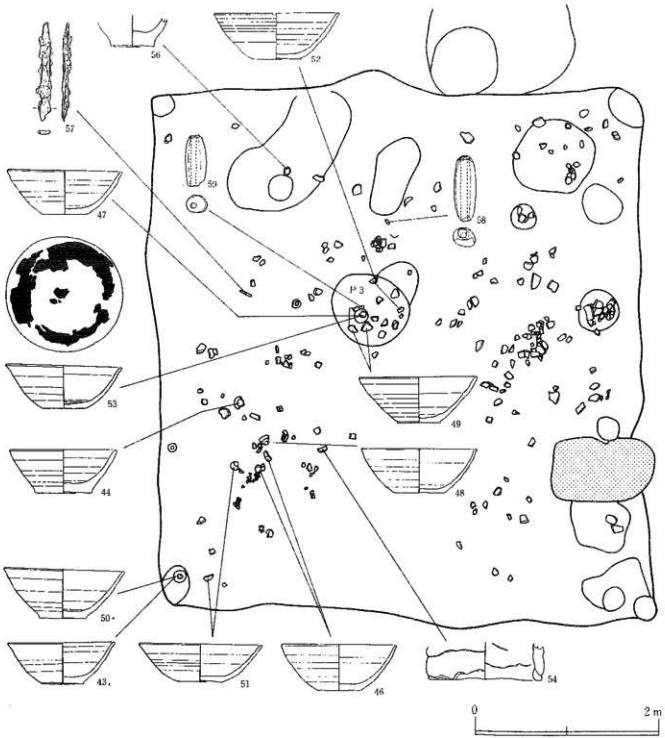
第158図　ＳＩ22Ｂ第２号竪穴住居跡カマド

て切られていることを除けば、比較的平坦な広い空間がある。北東壁を除く3つの壁に沿って壁溝が切られている。壁溝の幅は、8～30cmで、深さは3～8cmと浅い。

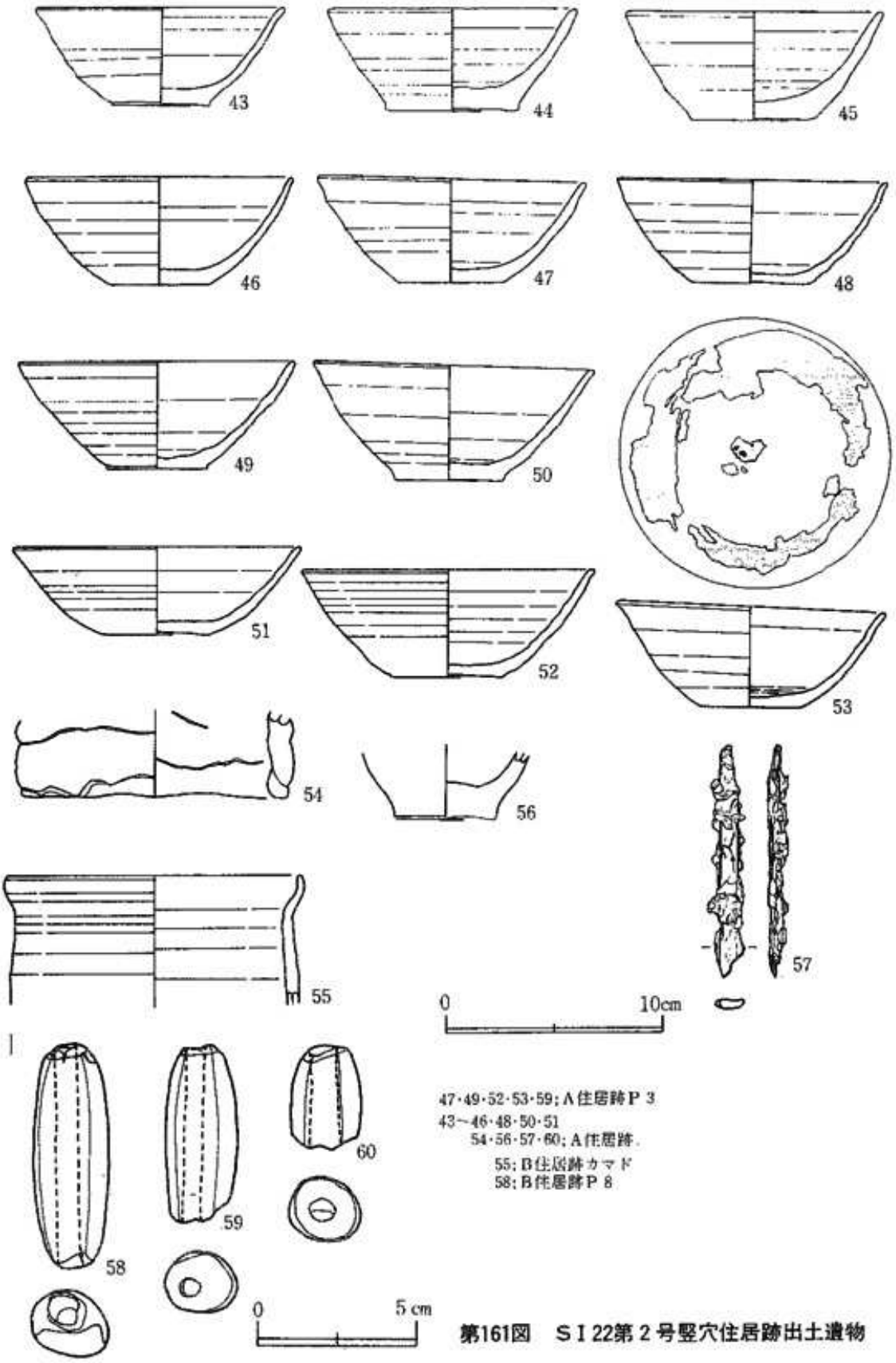
カマドは南東壁の東寄りに付設され、中軸線は南東壁の長さの約1/4分だけ北壁から離れた部位に設定されている。中軸線の方向はN－35°－Wを指す。カマドは住居の壁外に煙道をくり抜いたトンネル式のものであるが、煙道の半ばから焚口部までA住居跡構築時に失われている。焼土化した燃焼部底面の先端から煙出し孔までの長さは2.7mで、煙道部と燃焼部の長さの割合は3：7とかなり煙道が長い。煙道は幅20cm、高さ25cmで、はじめほぼ水平に中半から22°程の傾斜で下向きに掘り抜かれている。煙出し孔は開口部径70×60cm、深さ70cmで、底面から土師器甕の破片(55)が出土している。また、煙道から煙出し底部にかけては吸炭した結果、表面が黒色に焼き締まっている。



第159図　SI22A第2号竪穴住居跡カマド



第160図　ＳＩ22A第２号竪穴住居跡遺物出土状況



47·49·52·53·59; A住居跡P 3
43～46·48·50·51
54·56·57·60; A住居跡.
55; B住居跡カマド
58; B住居跡P 8

第161図　SI 22第2号竪穴住居跡出土遺物

出土した遺物には土師器坏(内面黒色処理したものも含む)、高台付坏(内面黒色処理)、甕、土製支脚、須恵器甕、刀子がある。ＳＩ22Ａ住居跡より検出したものが多く明らかにＳＩ22Ｂ住居跡出土とし得る遺物は、図示した中では55・58の２点にすぎない。

43～53は坏で摩滅により切り離しの不明な48を除き、底部には回転糸切り痕を留める。43・50は住居南西隅で倒立して重なっていたもので、43が下に位置する。同じように47と53もＰ３内で倒立して重なっていた。下の53は、内面ほぼ全体に漆膜が認められるものである。45は全体的に厚手な造りとなっている。55の甕はＢ住居跡カマド出土のものである。ロクロを使用しており、内面口縁部にのみ煤状炭化物が付着している。56は小型の甕になるものであろうか。底部には回転糸切り痕を留める。またＡ住居跡壁溝の貼床上から小型の刀子(57)が刀先を北へ向けた状態で出土している。58～60は棒状を呈する土錘で、58がＢ住居跡Ｐ８出土、59がＡ住居跡Ｐ３出土である。なお、覆土内から炭化米７粒を検出している。

SI52第3号竪穴住居跡Ａ・Ｂ(第162図～第167図、図版70～図版72・図版107・図版108・図版109)

台地上面調査区の南端、ＬＩ34・35グリッド、ＬＪ34・35グリッドで検出した。

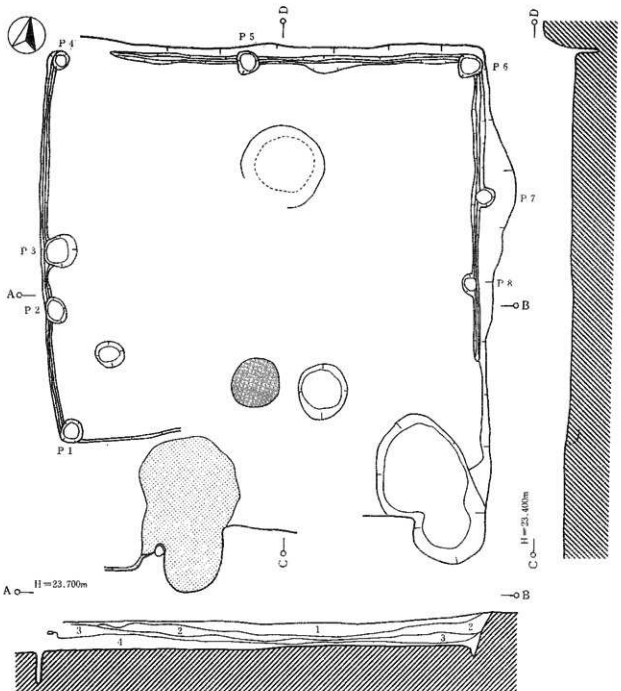
台地上北端に位置するＳＩ02に対し、本住居跡は南端に単独で位置し、塀と思われるＳＡ211・213有溝柱列の区画内にある。

確認面は一応基本層位第Ⅴ層黄褐色土の上面であるが、この台地上面南端では表土から第Ⅴ層上面までがきわめて薄く、15～20cmほど下げると遺構確認面に達する程であった。第Ⅳ層以上の堆積土が薄いため、住居跡の位置する箇所は地表面でも浅い凹みとして認められており、当初は南側斜面へ開く沢頭部分とすら考えられていた。第Ⅴ層上面を露出させた結果、径５～６ｍの円形の黒褐色土の広がりが確認され、黒褐色土中に焼土粒・炭化物の混入が認められていたため、住居跡の可能性を考慮して調査した。

覆土はその大半が地山の二次堆積土によって占められており、最上位に堆積する黒褐色土を除いては人為的な埋め立てが行われた可能性も考えられる。覆土を掘り上げた結果、２箇所のカマド痕跡と、一部壁の立ち上がりが二重になっていることが確認され、より規模の小さな旧い住居跡から、規模の大きな新しい住居跡へと拡張されていたことが判明した。

Ａ住居跡

Ｂ住居を廃棄して南壁を1.2～1.4m南側へ拡げている。この時、北壁はそのままに利用し、東壁については南壁までの距離を延長している。また西壁についてはその立ち上がりを確認できなかったが、柱穴の対応関係からそのままに使用されたものと考えられた。南北長5.3～5.6ｍを測り、東西長はＢ住居跡と変わらず4.8mを測る。面積は推定26.26㎡である。基本的な土層構造はＢ住居のそれを踏襲し、主柱は４隅とその中間位置にあったと考えられる。住居の拡張にともなっての柱の移動は、Ｐ３からＰ２、Ｐ７からＰ８の位置へ、また検出できなかったが、



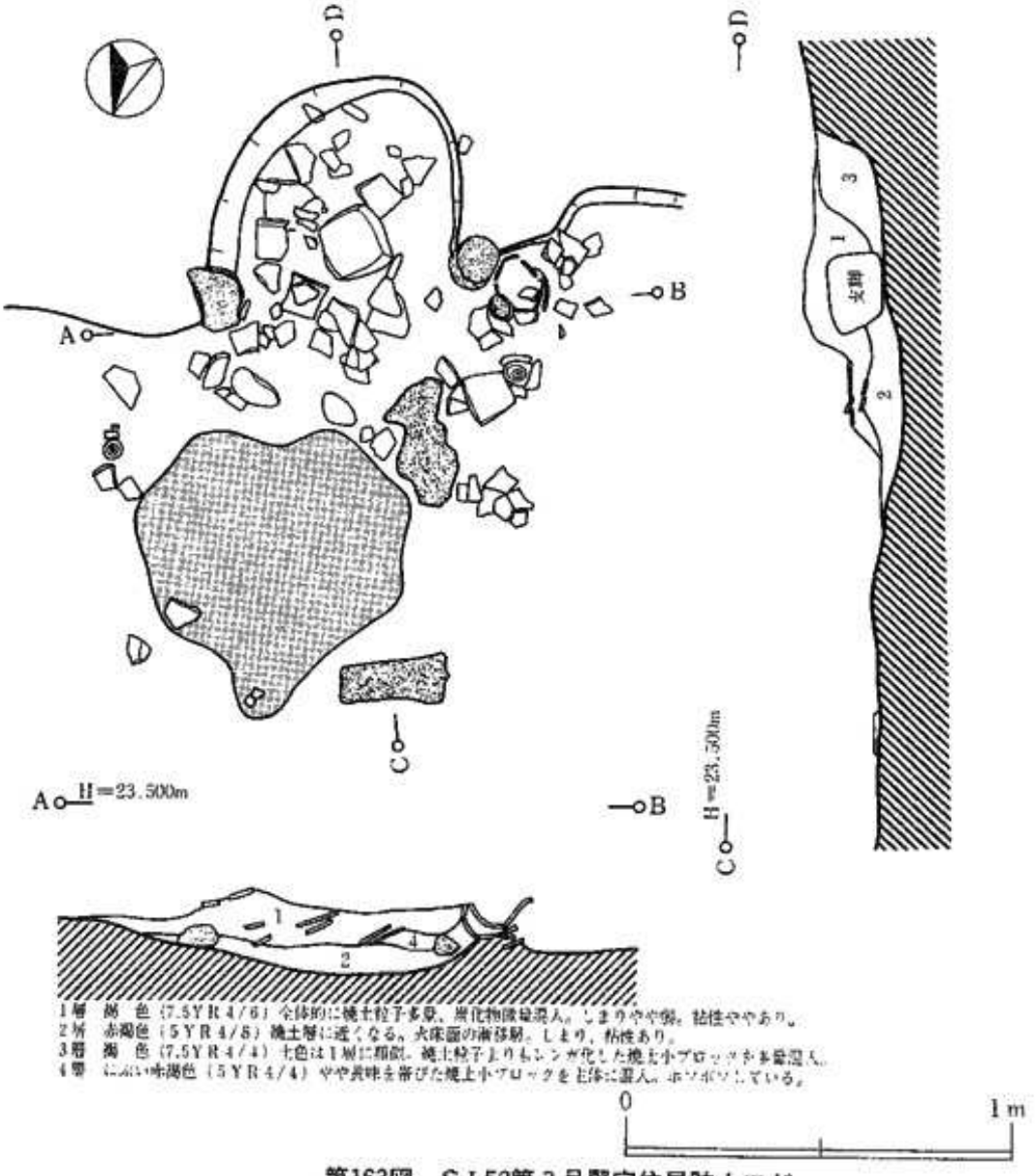
1層　黒褐色（10YR 2/3）全体に焼土が小ブロック状でまじわっている。
2層　褐　色（7.5YR 4/4）土はやや軟らかく粘性強焼土と炭化物が少量混入。
3層　黄褐色（10YR 1）地山粘土の二次堆積土。上から見る限りでは覆土と思えない状況を呈している。やや硬い。
4層　明褐色（10YR 1）3層同様の二次堆積土。土性もほぼ同じで混入物がほとんどない。ただし3層に比べ軟かい。

0　2m

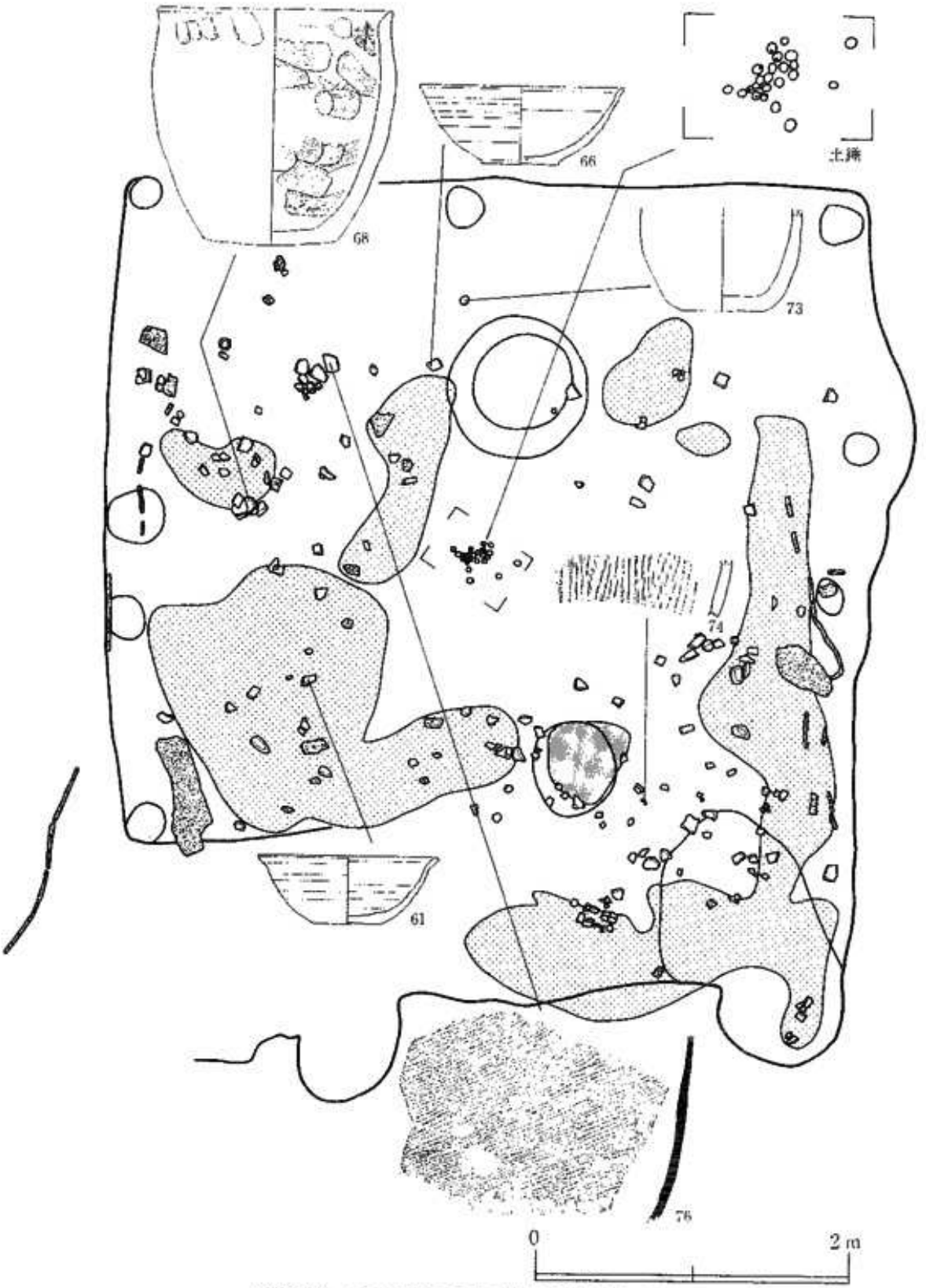
第162図　SI52第3号竪穴住居跡

南西隅のＰ１および南東隅に想定される位置からそれぞれさらに南側1.2~1.4m離れた位置へと行なわれたのであろう。Ｂ住居にはあった壁溝はこの新しい住居では掘り込まれていない。住居の南東部に位置する長さ1.7m、最大幅1.05mの土坑と、住居中央北側に重複してあるピットのうち、径の小さい方のピット（点線部分）はこの新しい住居に伴っている。

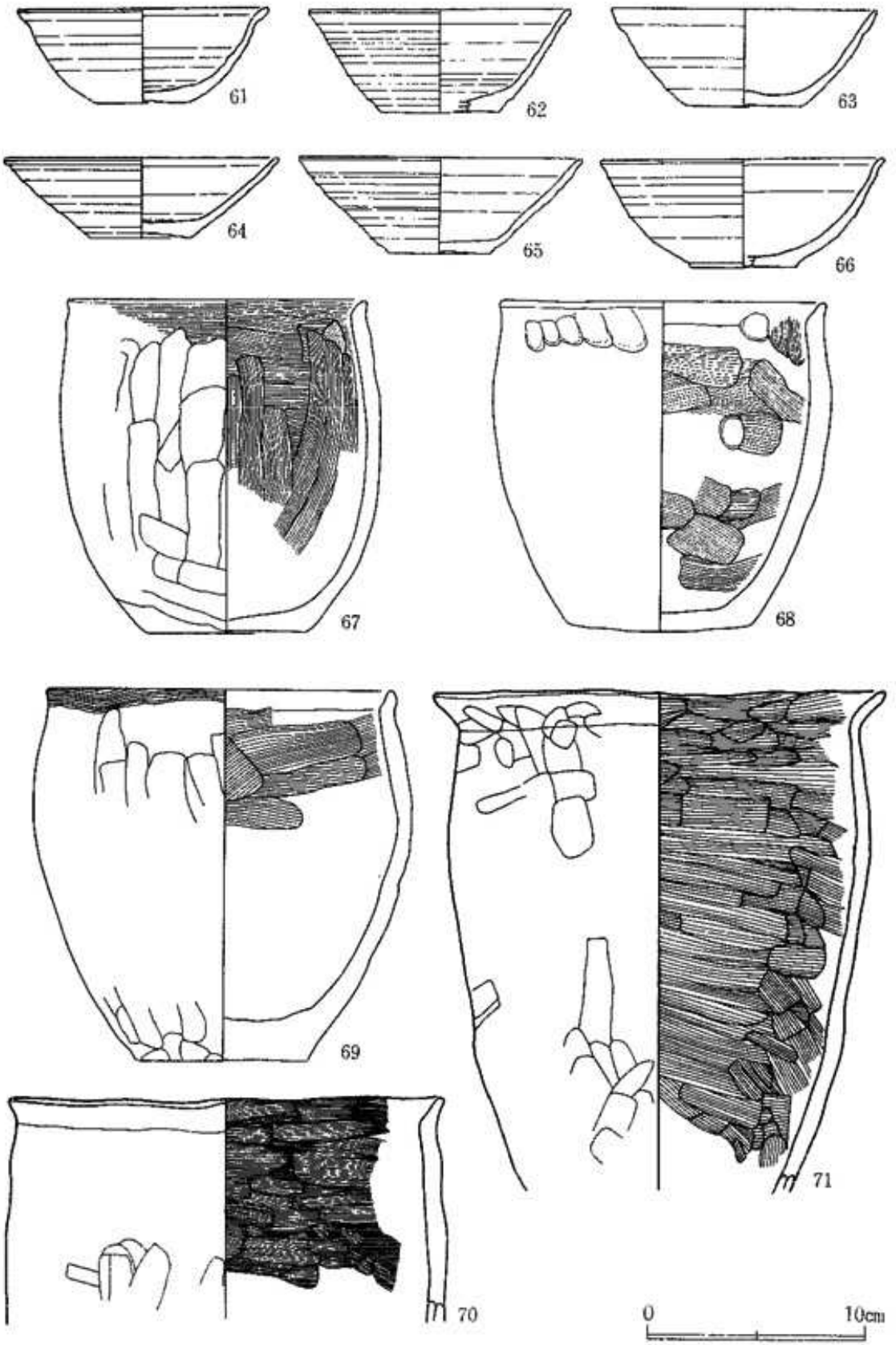
カマドは南壁に位置するが、住居跡壁面との関係で特徴的な形態を有している。構築にあたってはまず住居壁を長さ、幅とも60cm程Ｕ字形に掘り込む。この中央には縦12cm、横13cm、高さ17.5cmの直方形に形づくった粘土製の支脚を置く。支脚位置はカマド両脇の住居壁を結んだ線上か、それよりやや外側にあたるため、燃焼部自体がある程度住居外へ出る構造になる。通常のカマドは住居壁を境として、その内側に燃焼部、その内側に煙道および煙出しという住居の



第163図　ＳＩ52第３号竪穴住居跡カマド



第164図　ＳＩ52第３号竪穴住居跡遺物出土状況

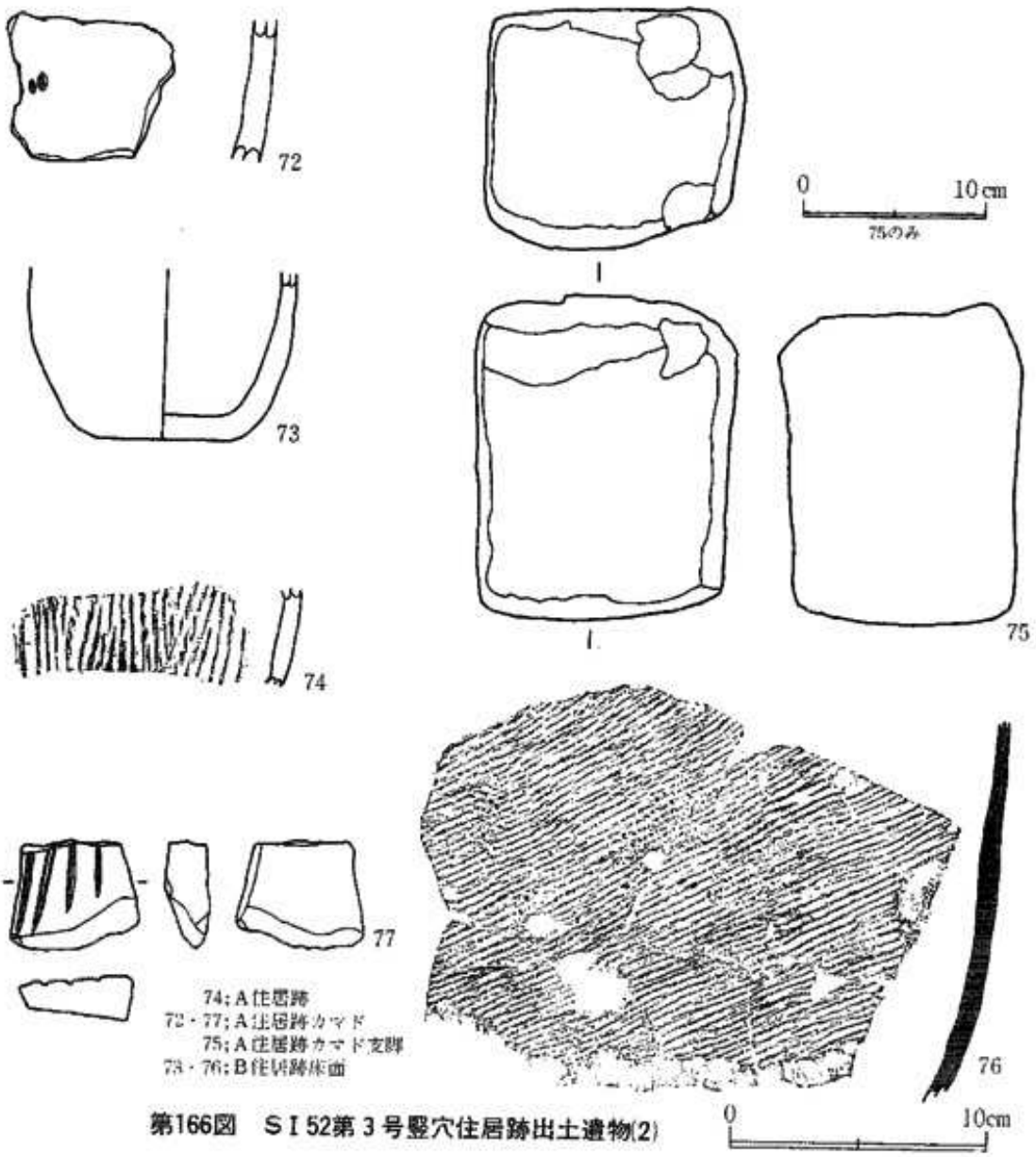


第165図　ＳＩ52第３号竪穴住居跡出土遺物(1)

土壁と関連した明確な構造上の区分を備えているのに対し、住居壁外へ燃焼部をもつ変則的な構造である。U字形に掘り込まれた部分と住居壁の接点には、それぞれ軽石が据えられており、袖部はこの軽石を基部の芯材として住居内に延びていたものと考えられる。その延長は、袖の構築に用いられたとみられる粘土の遺存状態は悪く不明瞭だったが、支脚の前方1mの箇所が径60～70cmほどの範囲に焼土化し、特に支脚に近い側に赤褐色に固結した面が認められた。最低この部分まで粘土で覆われていたとすれば、軽石の据えられた基部から50cm以上は延びていた可能性がある。

B住居跡

東西4.8m、南北4.2m、面積20.38㎡の規模である。南壁を除き幅7～10cmの細い壁溝が巡る。



第166図　SI52第3号竪穴住居跡出土遺物(2)

深さは東壁下で10cm、西壁下では25～32cmを測る。柱穴位置は基本的に新しい住居と同様、各隅と各壁中央に設けられていたと思われる。4隅に位置する柱穴はP1・P4・P6の3つを確認したが、南東隅の柱穴は確認できなかった。また壁中央に位置する柱穴はP3・P7・P5で、南壁側に想定される柱穴は確認できなかった。柱穴の平面形は新しい住居に伴うP2・P8も含めて径20～35cmの円形で、深さはP2・P5で14～16cm、P3・P6・P8で33～34cm、最も深いP4で52cmを測る。

カマドは南壁ほぼ中央に径55cm程の火床面が残るのみである。この火床面の東隣りに径60cmのピットがあり、焼土粒や土器片を覆土に含むことからカマドに伴う施設と考えられた。他に住居中央北側に同心円状に重複した径60cmと径90cmのピットが確認されたが、そのうち外側のひとまわり大きなピットはこのB住居跡に伴うものである。

出土した遺物には、土師器坏(内面黒色処理しているものも含む)・甕、須恵器甕、土錘、土製品(支脚)、砥石がある。検出位置はAカマド周辺及びこの北側に多く、明らかにB住居跡に伴う遺物は、73と76の2点のみである。

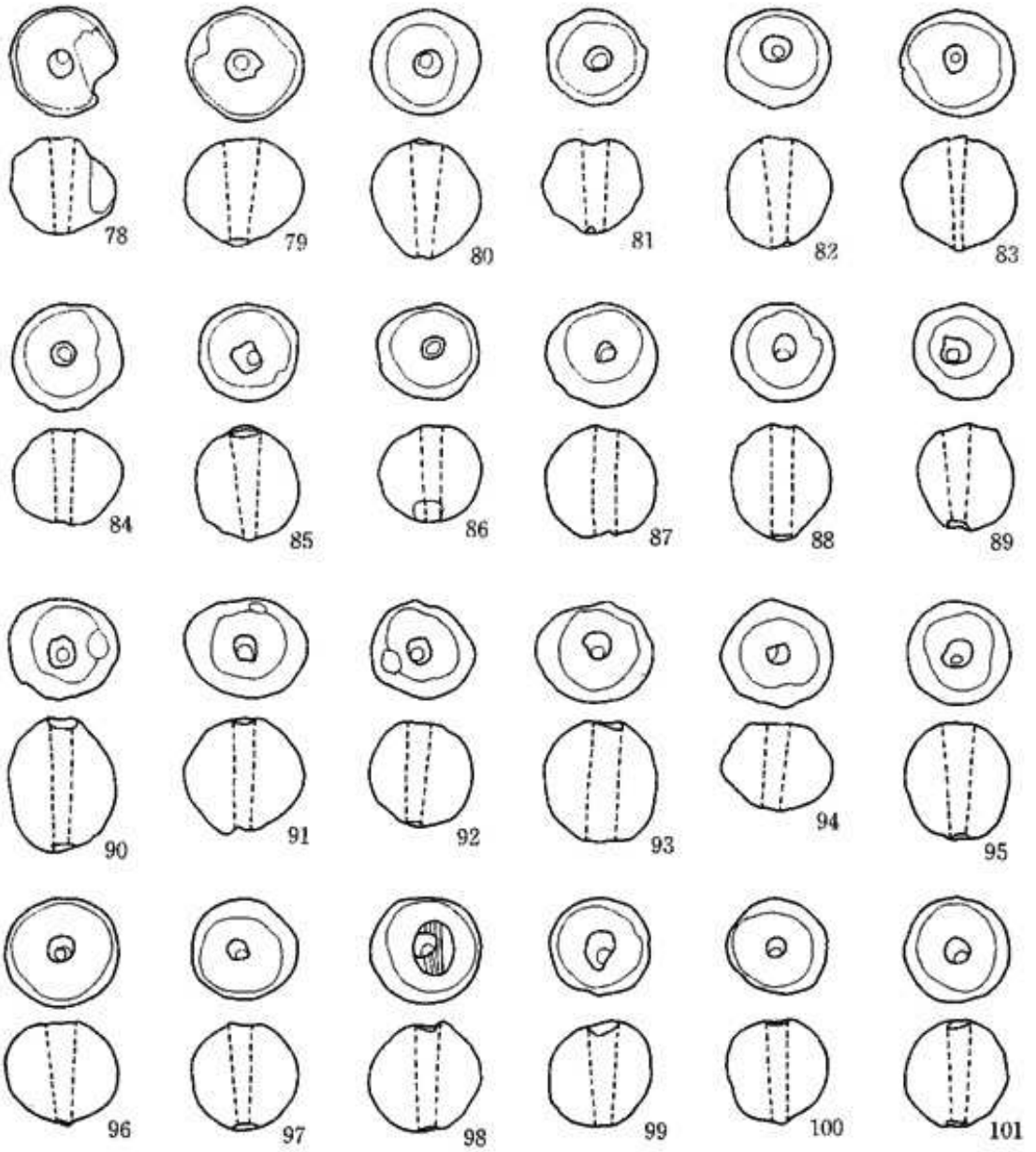
土師器坏は図示し得なかったものを含めて、底部で換算して20個体以上はある。61～66の6点は底部に回転糸切り痕を留める。61・62は胎土に細砂粒を多く含んでおり、63・66は二次火熱を受け、器面が剥落している。65は内外面にタール状の付着物が認められる。甕では図示した8点は非ロクロのものであるが、破片にはロクロ使用の製品も出土している。67～71は、基本的に外面を縦位のケズリ、口縁部は横ナデ、内面を横位のナデを施しているものである。68の内外面には成・整形時の指頭によるオサエの痕が認められる。72は甕胴部破片であるが、外面に2つの叩圧痕が付されている。73はすわりの良くない平底を呈する甕で二次火熱を受け、器面が剥落している。内面には煤状炭化物を付着しているもので、B住居跡床面出土である。74はいわゆるタタキ目をもつ土師器甕で、内面はナデられている。

須恵器甕はB住居跡床面出土で、同一個体の破片が10点近く検出されたが、いずれも二次火熱を受け裏面が剥落しているものが多く、接合できなかった。76はその1片である。外面には平行タタキ目を施している。77の砥石はA住居跡カマド周辺出土で、4面を砥面としている。上面には、鋭利な研磨痕が4条残る。78～102は球形の土錘とみられるもので、レベル的にはA住居跡床面上出土である。26個がほぼ一塊となって出土している点が最大の特徴である。平均値をみると、長さ24.47mm、幅23.23mm、重さ17.96gを示す。

SI60第4号竪穴住居跡（第168図・第169図、図版73）

調査区の南側、LH39グリッドで検出された。

確認面は基本層位第Ⅳ層の褐色土漸移層上面であるが、褐色～暗褐色土の方形プランとして確認されている。当初、その規模が小さいため、土坑として遺構登録されたが漸移層を掘り下



第2表　SI52第3号竪穴住居跡出土土錘計測表

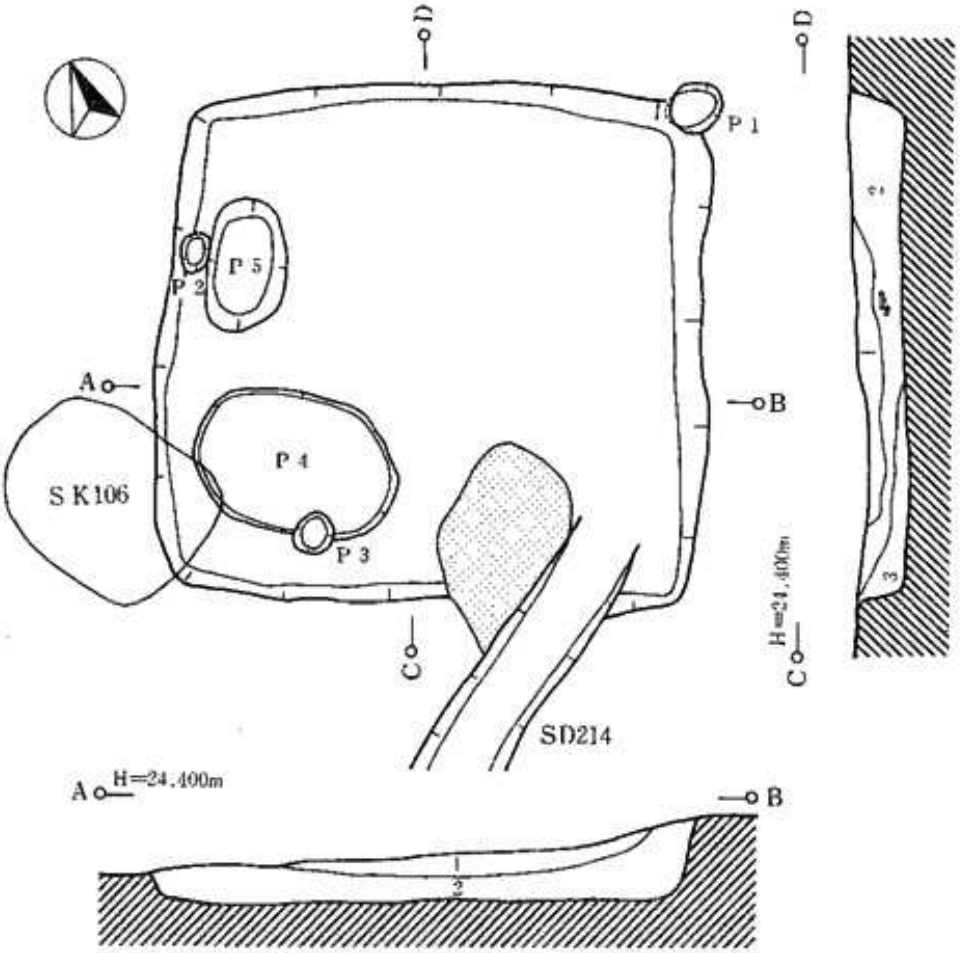
	長さ	幅	重さ		長さ	幅	重さ		長さ	幅	重さ
78	20.60	20.78	15.70	87	29.20	29.90	18.71	96	20.75	30.02	19.72
79	20.85	30.09	19.41	88	30.09	20.75	16.94	97	20.80	20.76	17.86
80	30.20	28.80	20.07	89	30.73	20.64	14.95	98	20.88	20.95	19.89
81	25.60	20.60	13.27	90	30.65	20.88	23.06	99	20.74	30.75	15.24
82	220.88	20.80	17.87	91	30.09	30.23	20.69	100	20.83	20.68	15.84
83	30.02	30.06	20.70	92	20.79	20.76	16.11	101	28.60	20.83	18.19
84	20.62	20.88	17.70	93	30.32	30.08	22.31	102	30.05	20.68	17.34
85	20.97	20.79	17.14	94	20.48	20.94	16.54	103	20.82	20.73	16.63
86	20.62	20.81	14.85	95	30.11	20.81	20.15	1??	24.47	23.23	17.96

（長さ、幅はmm、重さはg）

第167図　SI52第3号竪穴住居跡出土遺物（3）（土錘）

げて第Ⅴ層上面まで覆土のレベルを下げた時点で、南壁の輪郭の一部に焼土粒の濃く混じったカマド部分が確かめられ、住居跡と判断された。南壁カマド付設位置をＳＤ214によって、また南西部をＳＫ106によって切られている。

規模は東西壁長2.75m、南北壁長2.6m、深さは約30cm、面積6.92㎡を測り、やや隅の丸い正方形を呈する。壁溝はなく、柱穴と判断されるピットには北西隅の住居壁上端に穿たれたＰ１、西壁際の北壁寄り、土坑状のＰ５との間に穿たれていたＰ２、南壁近く土坑状のＰ４の上端にあるＰ３がある。これらのピットは径20～26cmの円形ないしは楕円形で、深さはＰ１が56cm、Ｐ２が31cm、Ｐ３が37cmを測るが、その配列に規則性は認められない。Ｐ５・Ｐ６は土坑状のピットであり、Ｐ５で長さ68cm、幅40cm、深さ16cm、Ｐ６で長さ104cm、幅70cm、深さ５cmの規模である。住居跡内からの出土土器のほとんどはこの２つの土坑状ピット内部及びその周辺から



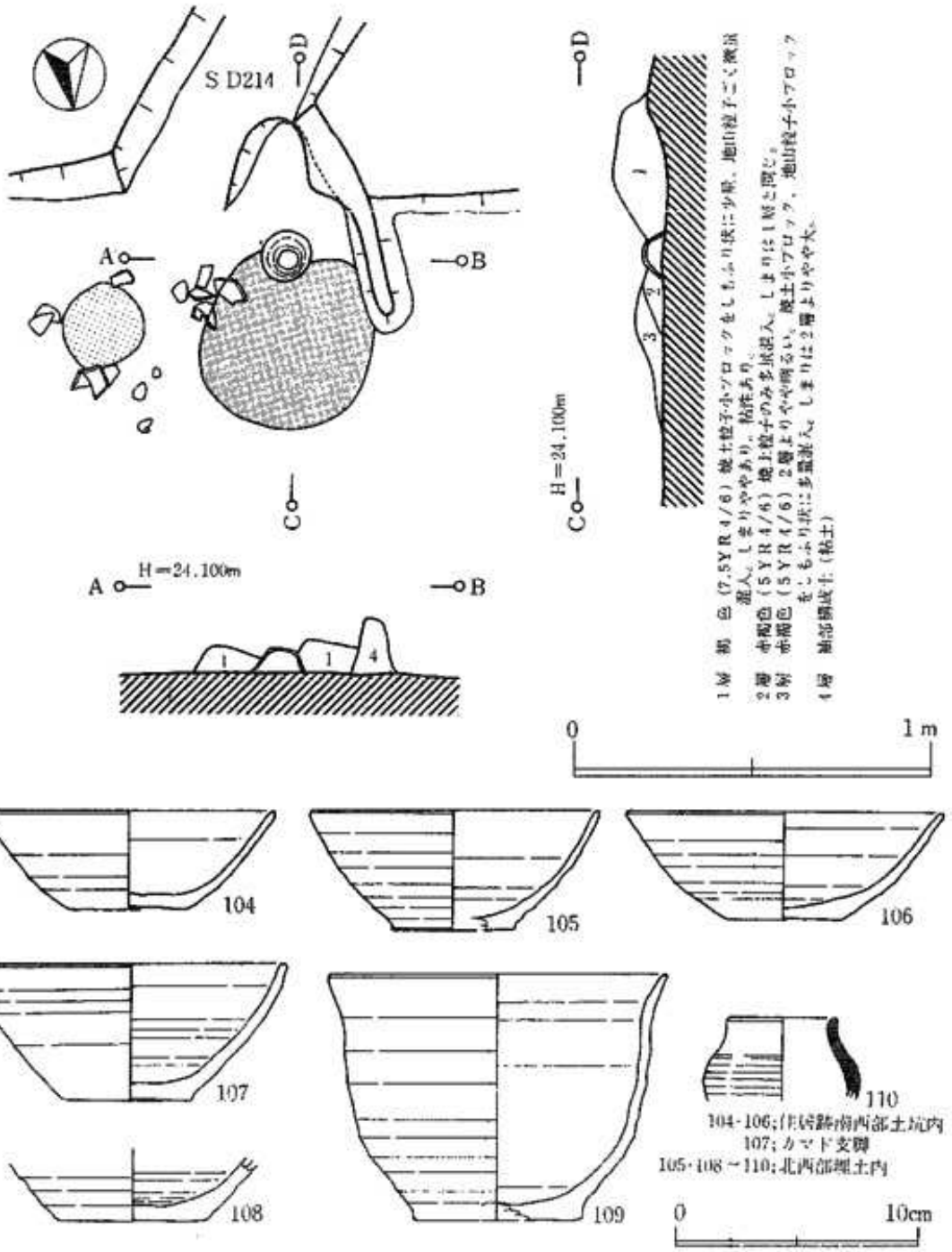
1層　暗褐色（10YR 3/4）土にややかたくく粘性なし。
2層　褐　色（7.5YR 4/6）炭化物少量、黄褐色土（10YR 5/6）混入、土はかたく粘性なし。
3層　褐　色（10YR 4/4）炭化物微量、焼土多量、黄褐色土（10YR 5/6）混入、土はややかたくく粘性なし。

0　2m

第168図　ＳＩ60第４号竪穴住居跡

の出土である。

カマドは南壁の東寄りに付設されている。ＳＤ214によって煙出しから左袖部にかけて破壊され、確認時、破壊された袖部が固結・焼土化した小塊の状態で覆土中に確認された。遺存する右袖は住居壁からやや外側に開きながら33cm程住居内に延びており、おそらく失われた左袖も同様に外側に開いて全体では燃焼部から煙出しに向かってすぼまる形状を呈していたものと



第169図　ＳＩ60第４号竪穴住居跡カマドおよび住居跡出土遺物

考えられる。袖部には粘土が主用材に用いられ、その内側は固結化している。燃焼部には支脚に用いられた土師器坏が倒立して置かれ、支脚位置から焚口方向にかけての径50cm程の範囲が最も焼けた火床面となっている。

出土した遺物は、土師器坏・甕、須恵器小壺があり、量的には多くはない。土師器では摩滅により底部の切り離しが不明な104～106を除くと、109のロクロ使用の甕を含めて回転糸切り痕を留めている。104・106は南西部の土坑（Ｐ４）出土、107はカマドの支脚として転用されたものである。108は坏あるいは甕の底部であろうか。図示した６点の土師器はいずれも二次火熱を受けているという共通点をもつ。110は灰青色を呈する須恵器小壺である。住居跡北西部で床面より24cm浮いた位置で出土している。

ＳＩ67第５号竪穴住居跡（第170図～第174図、図版74・図版75・図版108）

調査区中央からやや南寄り、ＬＧ46・47グリッドにある。ＳＡ200柱穴列からは南側約25m離れた地点にある。

表土を除去した後、第Ⅲ層中を掘り下げる過程で確認された。乾燥した状態では第Ⅲ層とほとんど同じ色調の土で覆われており、明瞭なプランを把握し得なかった。いくぶん水気を含んだ状態ではじめて褐色土中に焼土粒や炭化物、粘土塊などの含まれていることがわかり、また輪郭部分が中央よりもやや黒色がかった暗褐色土の帯で縁どられていることにより、地山面と住居跡プランとを峻別し得た。竪穴住居跡は南壁でＴピットＳＫＴ160を切っており、また南壁の一部がＳＤ206によって切られている。

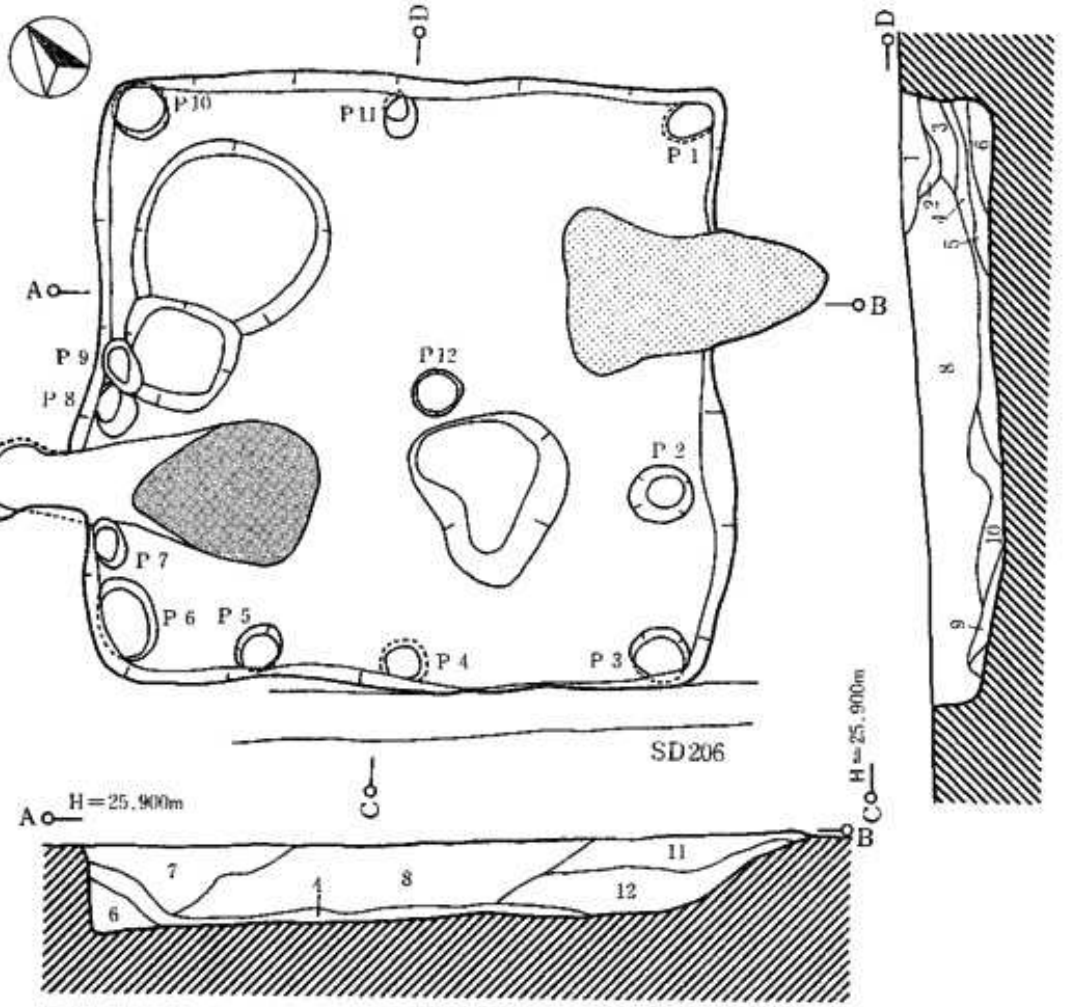
カマドや床面につくられている土坑内の充填土を除けば覆土は10層に分けられた。住居跡中央部の大半を褐色土が占め、壁際にやや色調の暗い土が厚さ10cm内外で互層をなして堆積している。また床面の直上に堆積する土も有機物を含む暗い色調を帯びた土である。

平面形は正方形で壁間の長さは北東－南西壁、北西－南東壁とも3.1mで、面積は9.67㎡を測る。壁高は北東壁および南東壁が45cm、北西壁が40cm、南西壁が30cmである。床面は中央からやや南寄りの部分と北隅に土坑がある他は概して平坦である。壁の立ち上がりは北東壁約80°、南西壁75°、北西壁83°、南東壁70°と急峻である。壁溝は切られていない。柱穴の配置は基本的に住居跡四隅と中間位置であるが、ほかに床面中央にも１箇所設けられている。その他、北西壁に付設されたより旧いカマドの両脇にも１箇所づつの柱穴（Ｐ７・Ｐ８）が掘られている。各柱穴の深さはＰ１；31cm、Ｐ２；９cm、Ｐ３；25cm、Ｐ４；31.5cm、Ｐ５；38cm、Ｐ６；21cm、Ｐ７；14cm、Ｐ８；11cm、Ｐ９；32cm、Ｐ10；24cm、Ｐ11；26cm、Ｐ12；21cmである。

カマドは北西壁と南東壁に１箇所づつ設けられている。遺存状態からは北西壁のものが旧く、南東壁のものが新しい。北西壁のカマドは、その中軸線が北西壁長１／３だけ西隅から離れた部位に設定され、その方向はＮ－136°－Ｅを指す。煙道部の先端はその上面が削られているが、

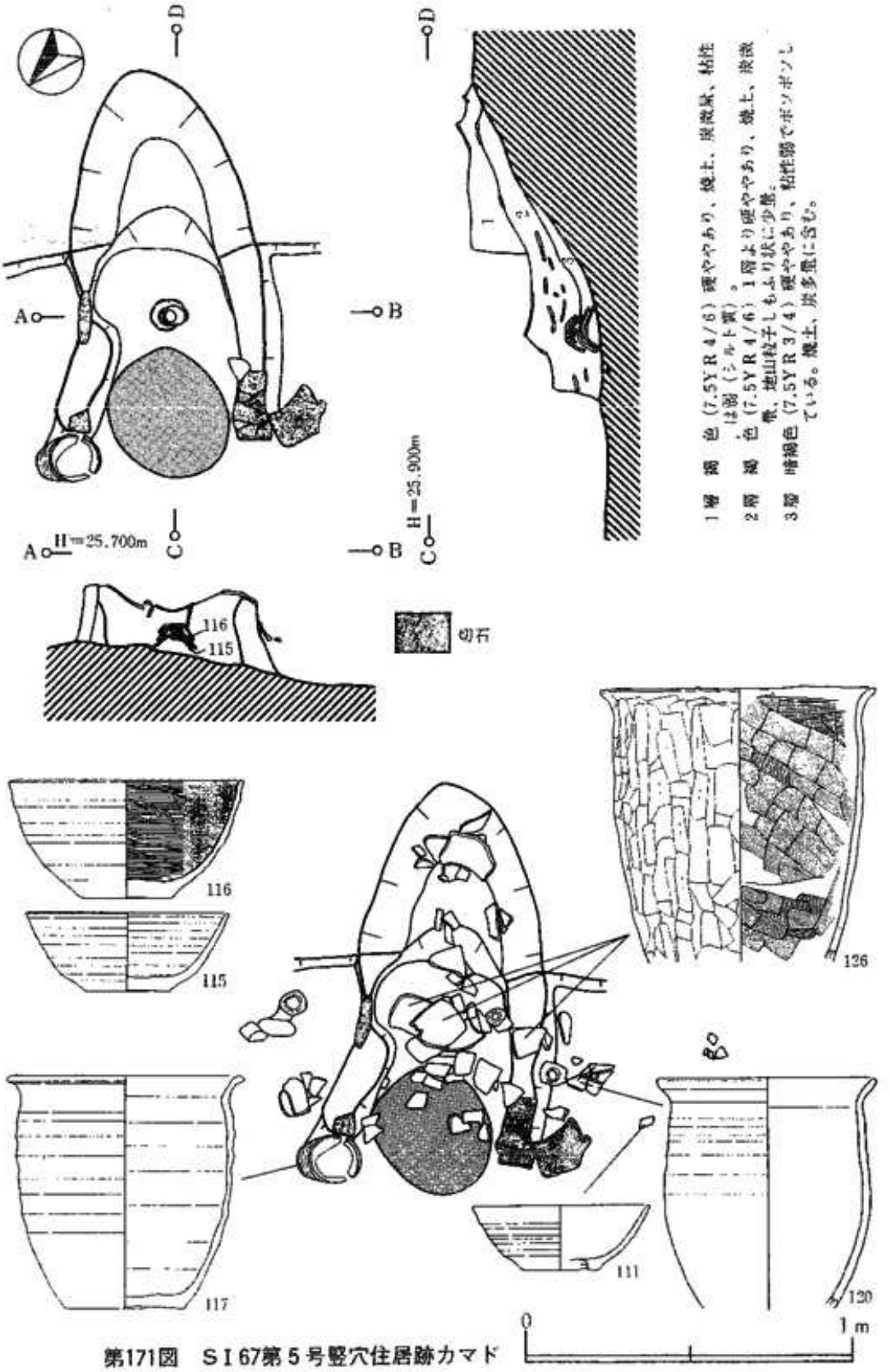
焼土の広がりによって確かめられる焚口前部から煙出しまでの長さは1.7mで、壁外の煙道長と本体長の割合は３：７である。カマド本体部分は両袖部、天井部など全て取り除かれ、焼土化した焚口前部から燃焼部火床面だけが残存している。焼土の範囲は焚口ー煙道の方向に90cm、本体内法を示す直交方向で70cmの広がりをもつ。

東壁に付設されたカマドは、その中軸線位置が南東壁長の１/３だけの東隅から離れた部位に

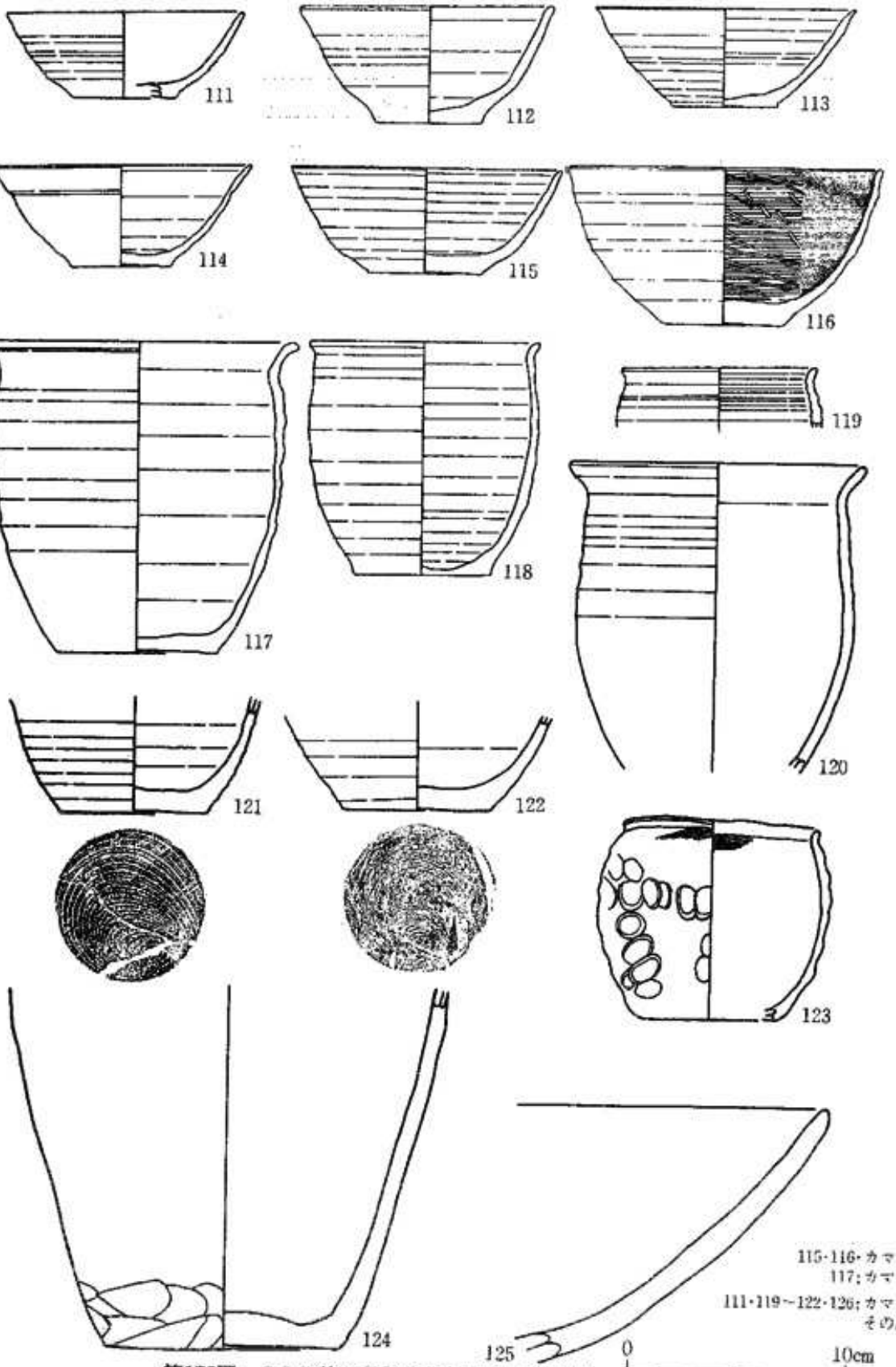


1層　褐　色（10YR 4/4）ロームブロック（黄味強、径5～10mm）多量、焼土粒微量混入。土はややかたく粘性ややあり。
2層　暗褐色（10YR 3/4）ロームブロック1層よりやや少ない。焼土少量、炭化物微量混入。土のかたさは1層と同じ。
3層　暗褐色（10YR 3/4）ローム粒子少量、炭化物、焼土粒少量混入。土のかたさはやや弱。
4層　暗褐色（10YR 3/3）ローム粒子微量混入。上下層よりだいぶ黒く見える。
5層　黒褐色（10YR 2/3）ローム粒子は4層より混入量少ない。4層より暗い。土のかたさはやや弱。
6層　褐　色（10YR 4/4）土色は8層と同じ。ロームブロック粒子少量、炭化物微量混入。土のかたさは8層より弱。粘性は8層よりややある。
7層　暗褐色（10YR 3/4）8層よりやや暗。8層よりローム混入量少ない。土のかたさは8層よりややあり。粘性弱。
8層　褐　色（10YR 4/4）ロームブロック5層と同じくらい混入。土のかたさは1～3層よりややある。
9層　暗褐色（10YR 3/3）ロームブロック、炭化物多量混入。土はかたく、粘性あり。
10層　暗褐色（10YR 3/4）ローム粒子、焼土微量、炭化物少量混入。土はややかたい。
11層　カマド1層に対応する
12層　カマド2層に対応する　｜第171図参照。

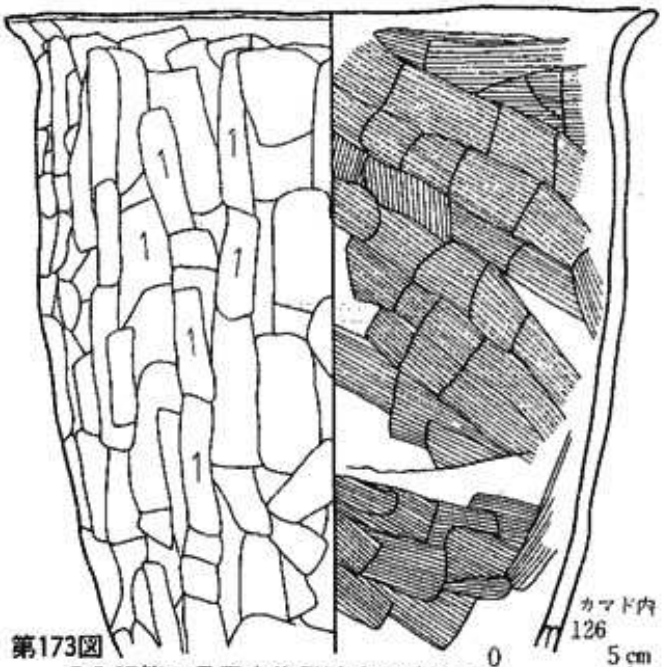
第170図　ＳＩ67第５号竪穴住居跡



第171図　SI67第5号竪穴住居跡カマド



第172図　ＳＩ67第５号竪穴住居跡出土遺物(1)

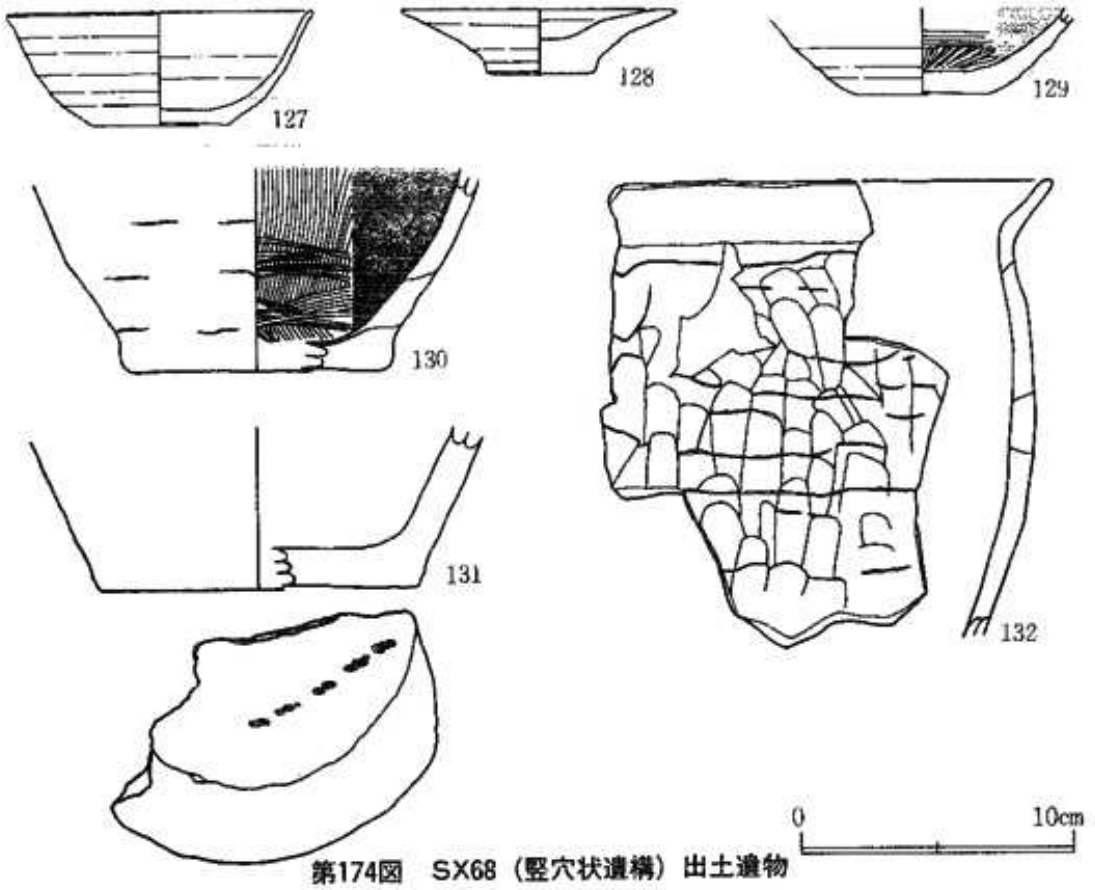


第173図　SI67第5号竪穴住居跡出土遺物(2)

設定され、その方向はN－52°－Wを指す。煙道はU字形に掘り込まれた短く立ち上がるもので、その長さは55cmを測る。焼土の広がりの先端焚口部から壁際までの本体長が70cmであり、煙道長と本体長の割合は1.4：5.6である。カマド本体部分の遺存状況は良好であるが、右袖と左袖では用材が異なり、部分的に改築された可能性がある。右袖は基部に黒褐色シルト質土を主体とした土を厚さ5cm敷く。上部は粘土を主とし、シルト質土を少量混ぜた土で構築している。先端部には凝灰岩の切石が芯材として埋め込まれている。一方の左袖は粘土を主とするが、多量の焼土が混っており右袖より土に粘性としまりを欠く。先端部には土師器甕を正立させ、切石と合わせて芯材としている。両袖の幅はその外側で65cm、内法で40cmを測る。焚口から50cm程中に入った部分に5個体の土師器坏を倒立状態で重ね、さらにその上に胴下半部を欠く土師器甕を正立させている。これで支脚の高さは15cmになる。

出土した遺物には、土師器坏・甕・鍋がある。カマド内あるいはその周辺で集中的に検出されている。111～115は底部に回転糸切り痕を留める坏である。111・112・114は二次火熱を受け、111は内面に煤状炭化物が付着している。114は薄手な作りで、体上半に屈曲部をもつ形態である。115・116は支脚として転用された4個の坏のうちの2点である。116は口径14.2cm、底径5.4cm、器高7.2cmを測り、坏というより埦状を呈している。内面は横位を主とするミガキの後、黒色処理している。

甕は図示したもので見る限りではロクロ使用が多いが、復元できなかった破片を点検していくと、大半は非ロクロ製品となるものであった。ロクロ使用の117～122のうち、底部の遺存するものについては回転糸切り痕を留める。118を除きカマド内出土で、117はカマド左袖の芯材として用いられている。117・118・120・122は二次火熱を受け、119は内面に、117は内面口縁部にのみ煤状炭化物が付着している。123は小型の甕で底部を欠く。内外面には成形時の指頭によるオサエ痕が顕著に残っている。124は、底面を丁寧にナデてある甕で、二次火熱を受けている。126はカマド内出土の甕である。外面を縦位のケズリ、内面は不定方向にヘラナデを施している。外面に煤状炭化物が付着している。



第174図　SX68（竪穴状遺構）出土遺物

125は非ロクロの鍋で、カマド北側の床面出土である。胎土に細粒を多く含んでいることと、火熱を受けていることから、内外面の調整痕を観察できない。

なお、覆土中から炭化米を113粒検出している。

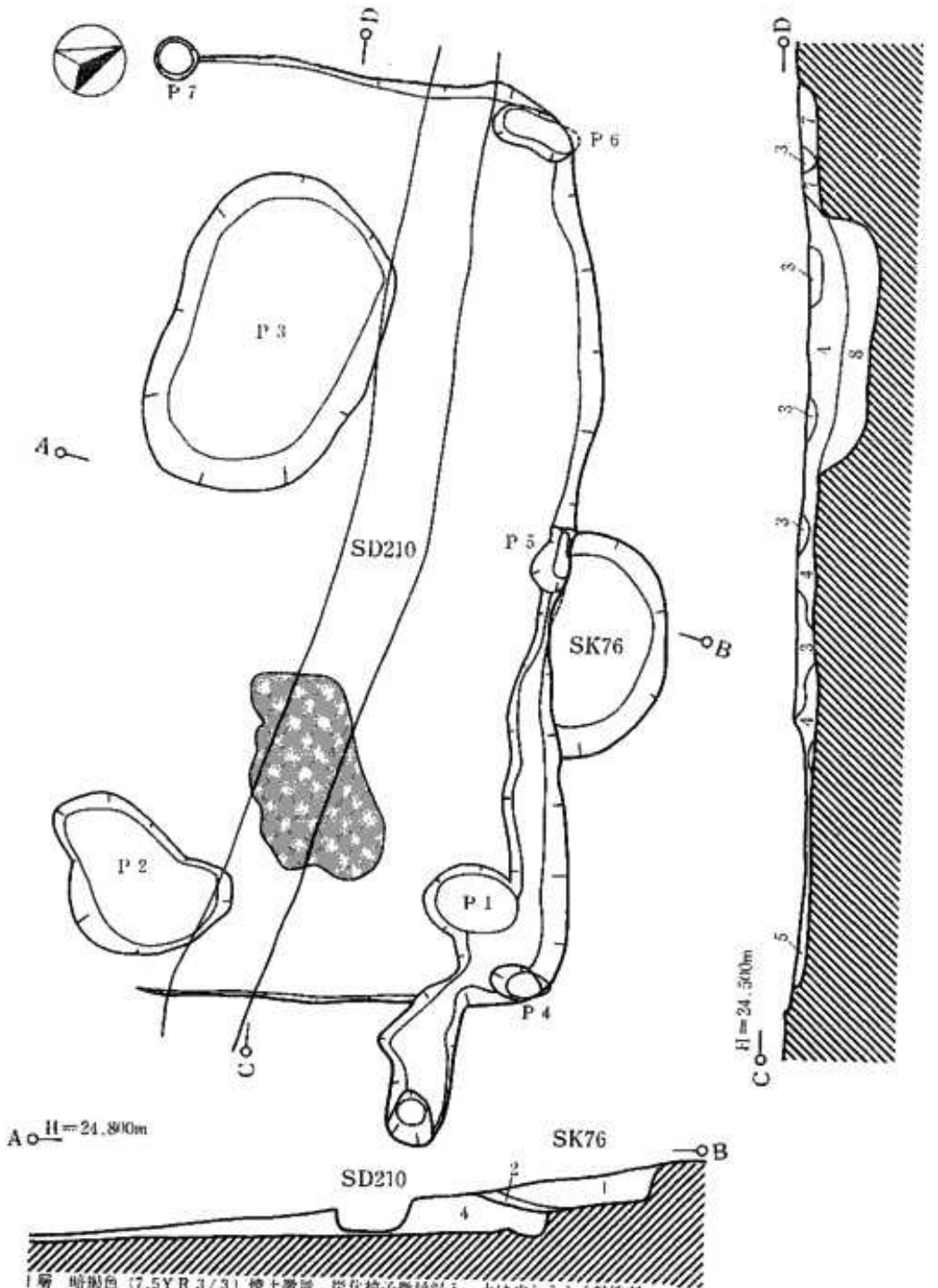
ＳＩ67の西壁を切り込むかたちで、ＳＸ68としていた遺構が存在する。精査の結果、堅い床面と考えられる広がりを検出した他は、壁、柱穴、カマド等、住居跡と認定しうる施設を確認できなかった。一応、竪穴状遺構ととでもして扱うべきであろうが、ここでは出土遺物についてのみ報告する。

出土した遺物には、土師器坏・皿・甕がある。127は坏、128は柱状高台の皿で二次火熱を受けている。129は内面を黒色処理した坏で、３点とも底部には回転糸切り痕を留どめる。130～132は非ロクロの甕である。130内面にはミガキの後黒色処理を施しており、甕の中では唯一黒色処理の認められるものである。132は外面に縦位のケズリが施されている。131の底面には縄文様の圧痕が認められる。

ＳＩ77第６号竪穴住居跡（第175図～第177図、図版108）

調査区南側の遺構密集箇所、ＳＩ94の北東側ＬＪ44グリッド、ＭＡ44グリッドで検出した。

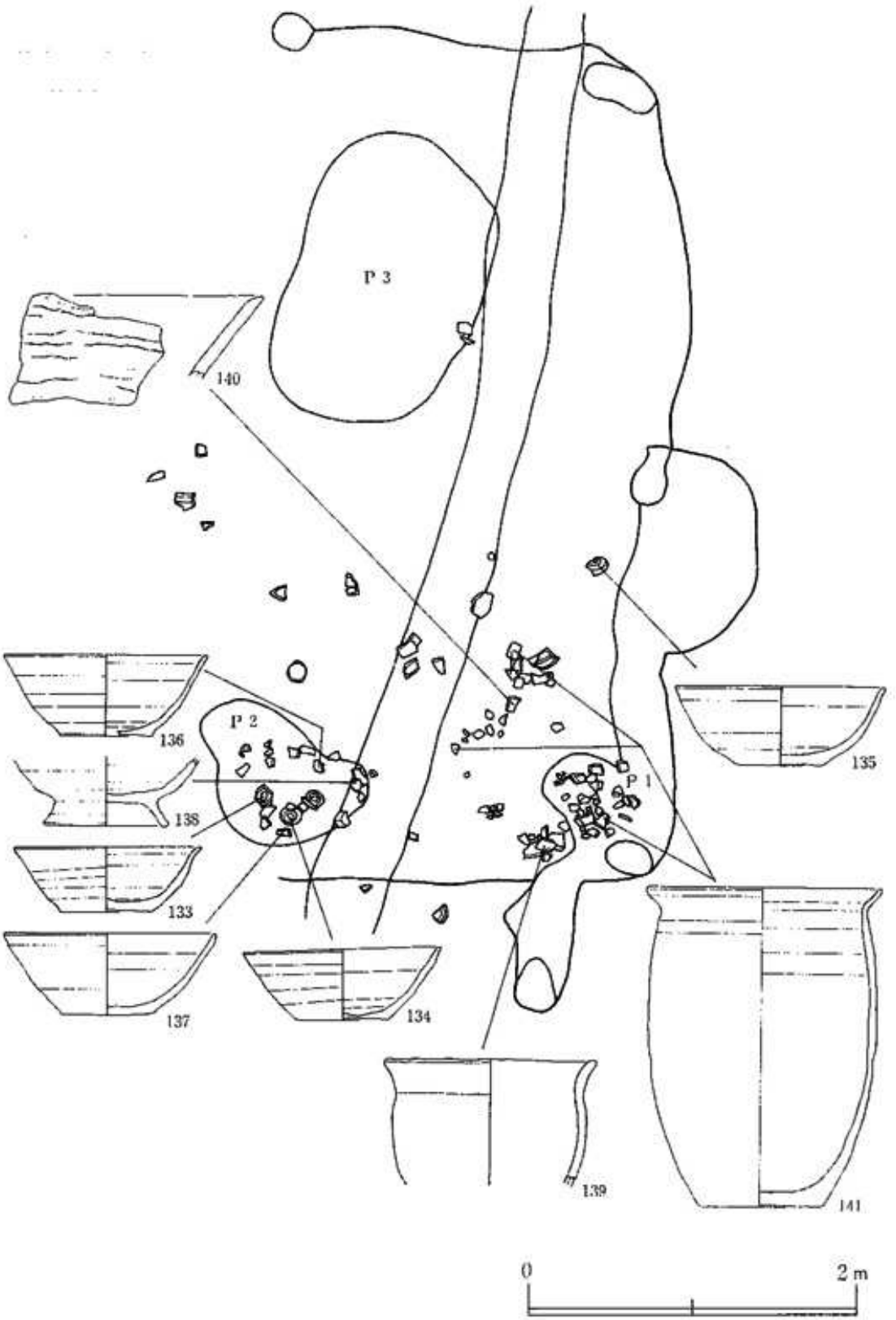
最終的な遺構確認面は第Ⅴ層上面であるが、第Ⅲ層を掘り下げてゆく過程で北東壁の輪郭を



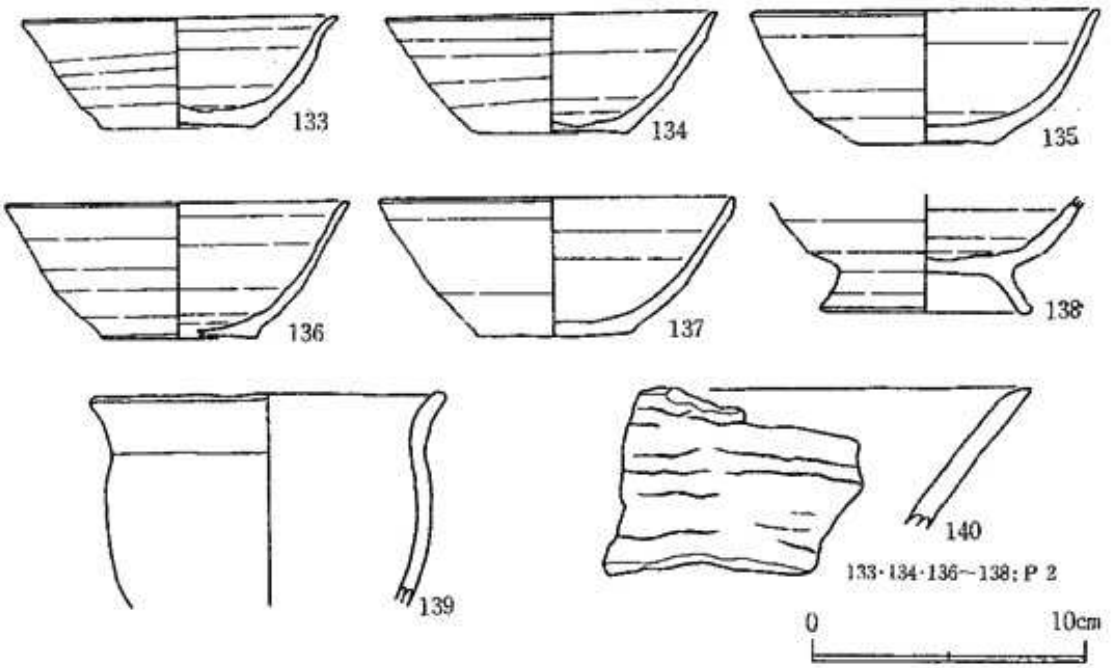
1層　暗褐色（7.5YR 3/3）焼土微量、炭化粒子微量混入。土はやわらかく粘性弱。
2層　橙　色（7.5YR 4/6）混入物なし、土は非常にかたく粘性なし。　SK76覆土
3層　黒褐色（7.5YR 2/2）焼土粒子、炭化粒子微量混入。土はやわらかく粘性なし。
4層　暗褐色（7.5YR 3/4）焼土粒子、炭化粒子微量混入。土にややかたく粘性弱。
5層　褐　色（7.5YR 4/4）焼土粒子、炭化粒子少量、明褐色土（7.5YR 5/6）少量混入。土はやわらかく粘性弱。
6層　褐　色（7.5YR 4/3）焼土粒子微量、明褐色土（7.5YR 5/6）少量混入。土はやわらかく粘性弱。
7層　暗褐色（10YR 3/3）混入物なし。土はややかたく粘性弱。
8層　暗褐色（10YR 3/3）炭化粒子微量混入。土はかたく粘性なし。

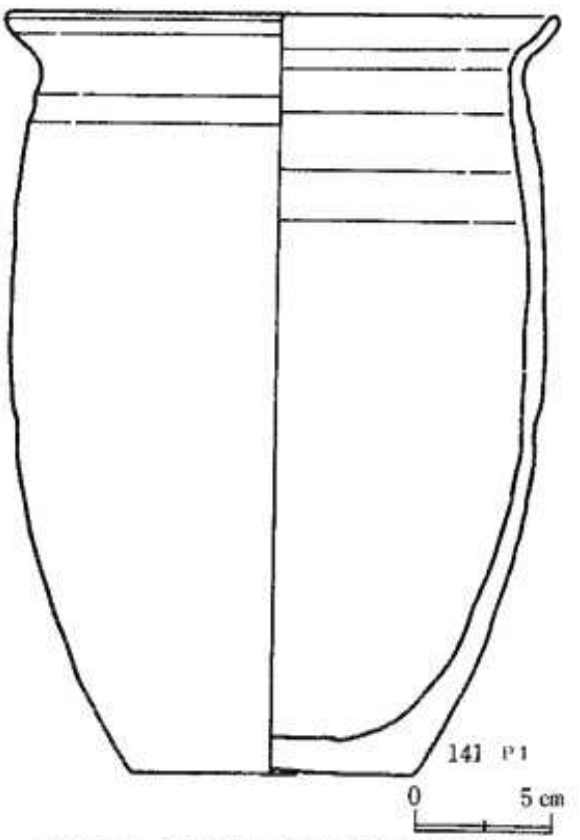
0　2m

第175図　SI77第6号竪穴住居跡



第176図　ＳＩ77第６号竪穴住居跡遺物出土状況





第177図　S I 77第6号竪穴住居跡出土遺物

不明瞭ながらとらえることができた。緩斜面の中央に位置するためその南側は不明であるが、S I 94、S A144と重複し、これらによって切られている。また北東壁に位置するS K 76および住居跡内を北西一南東に走るS D 210もこれを切っている。

北西壁と南東壁間の長さは5.2mを測る。また仮にP 7が北西壁の中間に位置するとして北東壁と南西壁間の長さは約5mとなり、本来は正方形に近いプランを呈していたと思われる。柱穴は基本的に四隅とその中間位置にあり、P 4～P 7までが確認された。P 4は径28×20cm、深さ23cm、P 5は径38×24cm、深さ20cm、P 6は径46×20cm、深さ23cm、P 7は径25cm、深さ28cmで掘り込まれている。東隅に溝が切られている他は明確な壁溝は確認されなかった。床面上には3箇所の土坑状ピットが検出された。東隅にあるP 1は径52×40cm、深さ15cmに掘り込まれ、内部から土師器甕(141)を含む土師器片が多く出土している。南東壁

に沿って設けられたＰ２は径110×70cm、深さ22cmで掘り込まれ、高台付のものを含む土師器坏(133・134・136～138)を出土している。住居跡西側にあって長軸の長さ1.8m、短軸の長さ1.2m、深さ30cmのＰ３は、その中央部に径28cm、深さ18cmのさらに小さなピットをもつ。このピットについては覆土に混って炭化物の小片が出土した他は目立った遺物の出土はない。

カマドは南東壁北寄りに付設されている。ＳＤ210に壊され、本体燃焼部～焚口の火床面と、煙道が確かめられたに過ぎず、部分的にとらえられたにとどまる。煙道部は壁際からの長さ１m、中央部での幅30cm、深さ６cm程度に掘り込まれ、火床面は壁から１m程離れて、径120×60cmの範囲に焼土化している。

出土遺物は住居跡東側に集中しており、殊にＰ２・Ｐ１で検出例が多い。遺物は土師器坏(内面黒色処理したものも含む)・高台付坏・甕・鍋、須恵器甕、軽石がある。133～137の坏は二次火熱により底部の切り離しの不明な219を除くと、回転糸切り痕をもつ。133・134・136～138はＰ２出土である。図示したものを含めて、底部で換算して15個体以上の坏が出土している。高台付坏138はやや足高な高台が付されるもので底部の切り離しは明らかではない。139の甕は摩滅のため器面調整を観察できない。内面口縁部にのみ煤状炭化物が付着している。この他非ロクロ甕は底部でみて６個体以上確認している。141はロクロ使用の甕でＰ１及びその周辺から出土したものである。外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデの痕跡が残る。外面の１/４程は器面が赤っぽくなっており、丹を塗ったようにもみられる。140の鍋は非ロクロで６～10mmの粘土積み上げ痕が残る。本住居跡から出土した土器は、他住居出土に比較して、全体的に胎土に細砂粒を多く含んでいる。

ＳＩ83第７号竪穴住居跡(第178図・第179図・第181図、図版76・図版77・図版108)

調査区中央からやや南に寄ったＭＣ47・48グリッドで検出した。

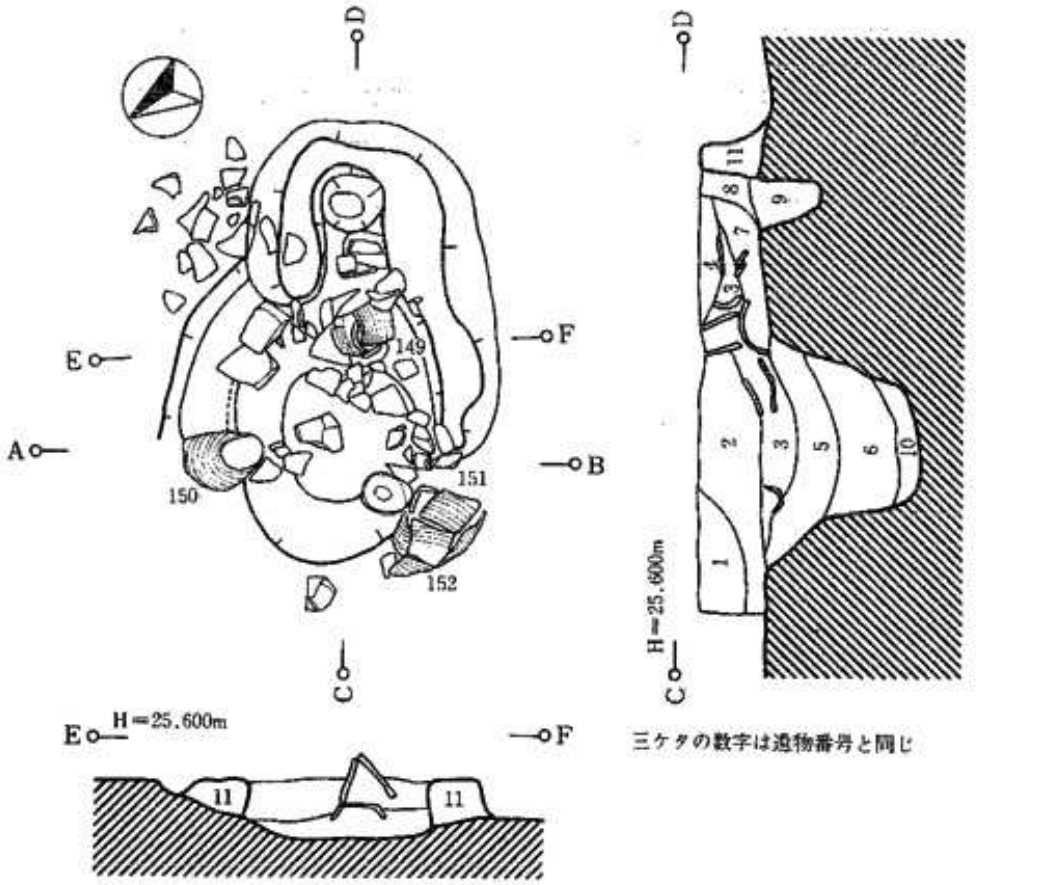
確認面は基本層位第Ⅴ層上面であるが、ＳＩ86・ＳＩ136との重複があり、また周辺に土坑も多く、それらの遺構構築時の排土が再堆積するような状況であったため、全体のプランは判別しにくい状況であった。住居跡として確認はカマドの検出によってなされた。

住居跡全体の形態については北壁と西壁北半を確認できたに留まる。北壁には幅15～20cm、深さ６cmの壁溝が認められる。明確に当住居に伴うとみられる柱穴は、北西隅の１つである。深さは床面から22cmである。床面は平坦で特にカマド南側は堅くしまっている。床面には北西隅とその南側に２基の土坑が掘り込まれている。北西隅のＰ１は長軸110cm、短軸85cmの隅丸方形を呈するもので、深さは40～45cmである。Ｐ１の南西部から溝が延びているが、これはＳＢ141に伴うものであるが、新旧関係は明らかにできなかった。南側のＰ２は長径155cm、短径110cmのやや歪な楕円形を呈している。深さは22cmである。

カマドは推定東壁北寄りに位置している。このカマドの形態は、袖部から煙出しにかけての

1層 暗褐色（10YR 3/4）土はやや硬く炭化物微量混入、粘性なし。
2層 暗褐色（7.5YK 3/4）土はやや軟い。黄褐色土（10YR 4/6）砂質火山灰(?) 黄褐色土（10YR 5/6）がブロック状に少量混入。炭化物焼土微量混入、粘性なし。
3層 褐 色（7.5YR 4/6）土は硬く焼土多量混入炭化物微量混入、粘性なし。
4層 褐 色（7.5YR 4/4）土はやや硬い炭化粒子微量混入明褐色土（7.5YR 5/6）小ブロックが少量混入焼土微量混入粘性弱。
5層 暗褐色（10YR 3/3）土は軟く炭化物、焼土微量混入粘性弱。
6層 暗褐色（10YR 3/4）土は硬く焼土炭化物微量混入、褐色土（10YR 4/4）が小ブロック状に混入、粘性なし。
7層 褐 色（10YR 4/4）土は硬く炭化物微量混入粘性なし。
8層 暗褐色（10YR 3/3）土は軟く粘性弱、褐色土（10YR 4/6）小ブロック状少量混入、炭化物、焼土微量混入。
9層 褐 色（7.5YR 4/6）土は硬く粘性弱、炭化物微量混入。
10層 明褐色（7.5YR 6/8）土はやや硬く粘性弱、炭化物微量混入。
11層 暗褐色（7.5YR 3/4）土はやや軟く粘性弱、炭化物微量混入。
12層 暗褐色（7.5YR 3/3）土はやや軟く粘性弱、黄褐色土（10YR 5/6）が多量混入、炭化物微量混入
13層 褐 色（7.5YR 4/4）土性は4層に近似。

第178図 SI83第7号竪穴住居跡・SI86第8号竪穴住居跡・SI136第14号竪穴住居跡



1層　褐　色（7.5YR 4/4）地山粒子・焼土粒子微量，炭化物ごく微量混入。しまりややあり。
2層　褐　色（7.5YR 4/4）土色は1層と類似し，層境ははっきりしない。地山粒子少量、炭化物ごく微量混入。しまりややあるが1層よりやや弱。
3層　暗褐色（7.5YR 3/4）焼土を主体的に含む。しまりは2層よりやや弱。
4層　褐　色（7.5YR 4/6）焼土多量混入。しまりは3層と同じ。
5層　極暗褐色（7.5YR 2/3）焼土少量混入。しまりやや弱。
6層　褐　色（7.5YR 4/6）焼土は5層より多く混入。しまりは5層より弱。
7層　暗赤褐色（5YR 3/6）しまり、粘性あり。
8層　褐　色（7.5YR 4/4）しまりやや弱、粘性あまりなし。サラサラしている。
9層　褐　色（7.5YR 4/3）しまり、粘性あり、サラサラしている。
10層　暗褐色（7.5YR 3/3）炭化物主体で焼土をしもふり状に多量に混入。しまり弱。粘性ややあり。
11層　カマド本体（粘土）。

0　1m

第179図　SI83第7号竪穴住居跡カマド

本体部分を、粘土を用いて馬蹄形に巡らせて構築している点で特異である。径17cmの煙出しピットの周囲には高さ15cm前後の粘土を巡らせている。左袖は部分的に粘土が失われているが、先端部には土製支脚が芯材として埋め込まれている。この土製支脚の内には、長さ・幅10cm、厚さ7cmの凝灰岩の切石が入っていた。切石は左袖内にも入っており、袖の補強材としても用いられていたものであろう。右袖先端部にも切石の入った土製支脚が遺存していた。この位置から煙出し部までの全長は85cmである。燃焼部には長径60cm、短径50cm、深さ38cmのピットが掘り込まれている。しかしながらピット上面には明確に火床面とみられる焼面が存在しないことから、カマドとこのピットの関係及びカマドの使われ方に疑問点が多い。支脚はピット上端東側で検出した。南—北方向からの土圧により潰れているが、土師器甕(破片)の上に土製支脚を置くものである。支脚底面のレベルが底面より5cm程浮いており、現位置を保っているかどうか不明である。

遺物は、カマド内あるいは南西部のP2出土のものが多い。土師器坏・甕・鍋、土製支脚、筒状土製品、鉄製品が検出されている。142・143はP2出土の坏で、142は底部に回転糸切り痕を留め、143は内外面にタール状の付着物が認められる。144～147は甕で146を除きロクロを用いている。145内面にもタール状の付着物が認められる。147は外面にケズリを施しているが、17～19mmの粘土の積み上げ痕が残る。148は非ロクロの鍋でカマド内から出土している。外面にケズリが認められる。149～151は土製支脚でカマド内出土である。149は燃焼部中央に位置しており、支脚として用いられたものであろう。脚部には1対のU字形の切れ込みが入り、これを結んだ線に直交する位置で径約7mmの孔が2つ穿たれている。器高は12.7～13.2cmを測る。150はカマド左袖先端の芯材として用いられた支脚で、内に切石が入れられていた。脚部の切れ込みは深く大きく、器高14.5～15.1cmの半分近くになる。151は150と対になるような右袖先端部に位置していた。これにも切石が入っている。V字形の切れ込みが認められる。152はカマド右袖の上面に置かれていたもので、筒状を呈する土製品である。土製支脚と同じような作りをしており、7～18mmの粘土積み上げ痕が内外面に残る。口径10.1cm、底径8.5cm、器高30cmを測る。153はP2出土の鉄製品で断面が長方形(6.5×4.5mm)を呈しており、中空となっている。

なお、カマド燃焼部に掘り込まれているピット内から炭化米3粒と、魚骨（椎骨部分とみられる）1片が出土している。

S I 86第8号竪穴住居跡(第178図・第180図・第182図、図版78・図版110)

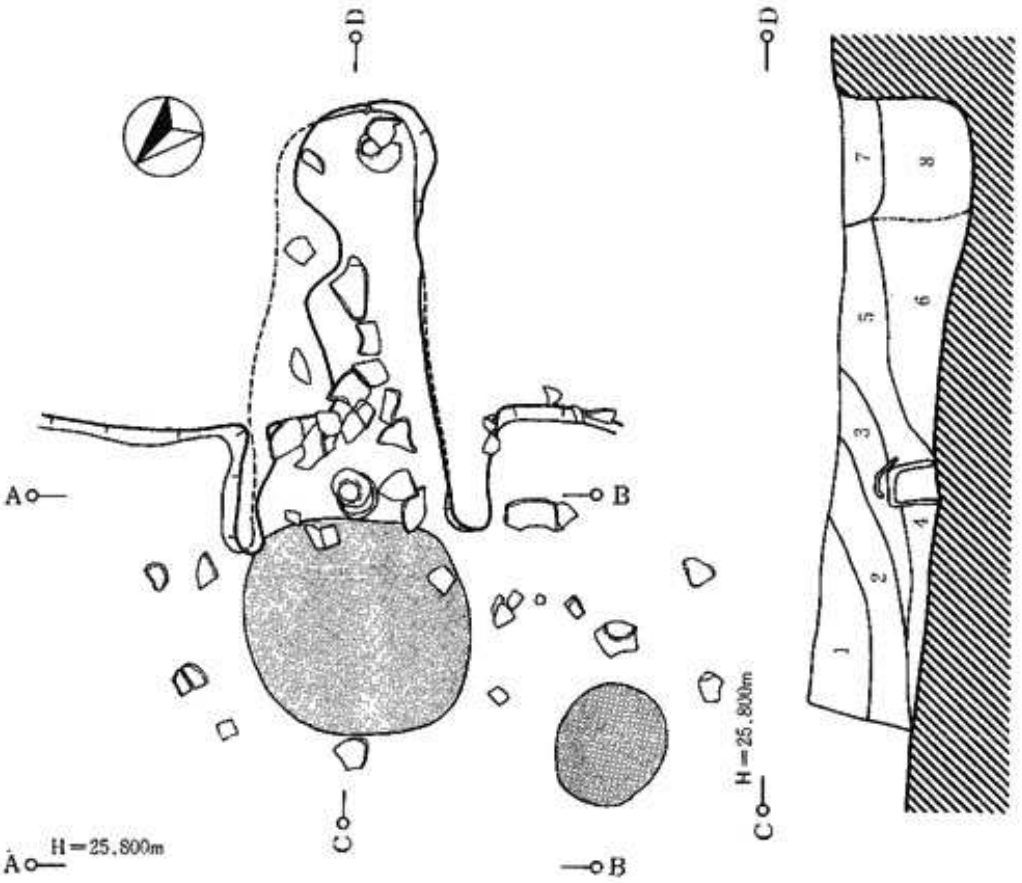
S I 83の北側、MB47・MC48グリッドで検出した。

確認面は基本層位第Ⅴ層上面である。北壁側の矩形プランは比較的明瞭にとらえることができたが、S I 83と重複している南壁側についてはほとんど壁の輪郭がわからなかった。北壁の

長さで見た規模は、東西4.4mであるが、南壁不明瞭のため南北の差し渡しは2.3m以上としか特定できず、形態も方形になるであろうこと以上にはわからない。

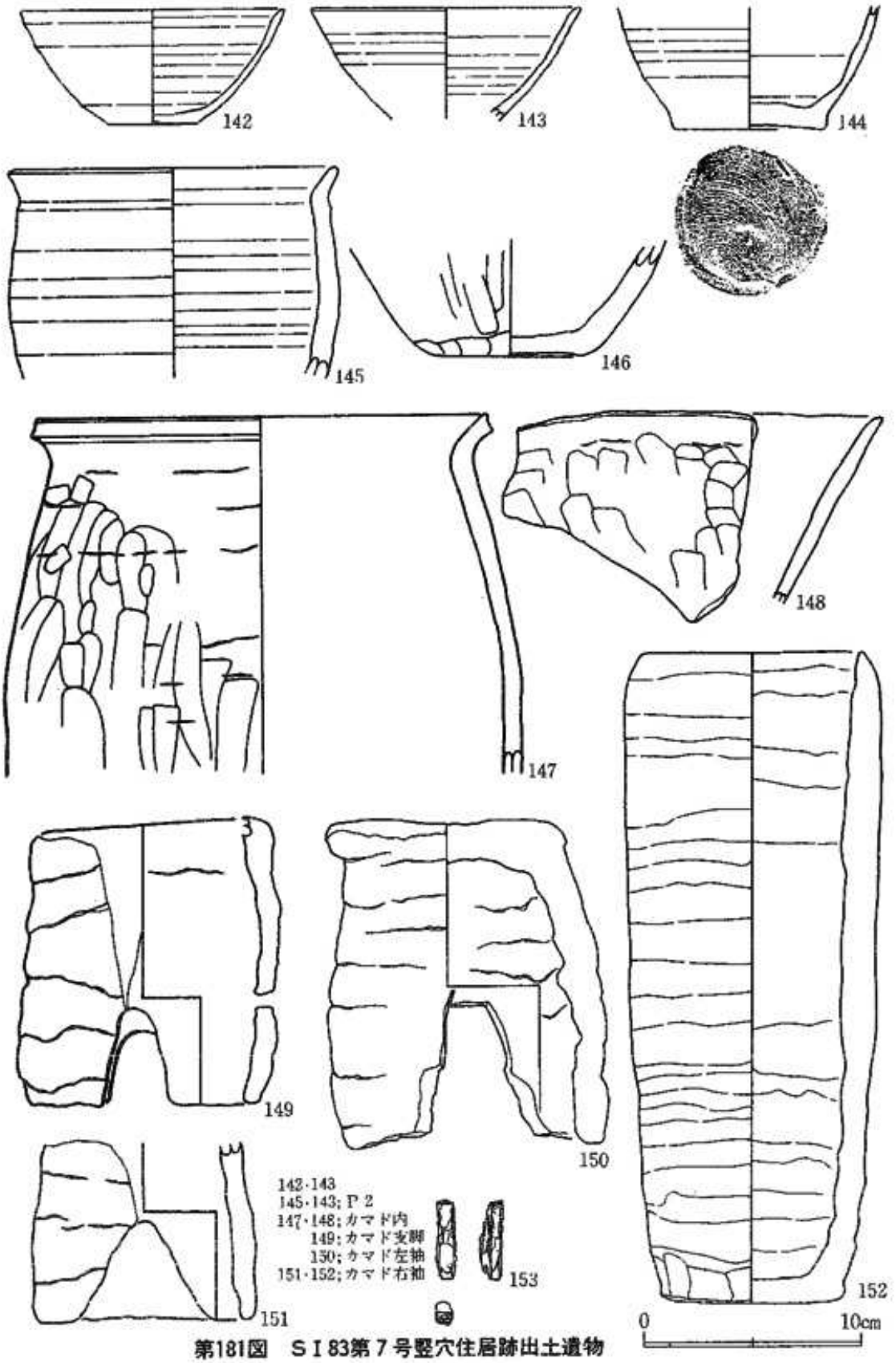
柱穴は北壁の両隅に付くＰ１・Ｐ２以外、この住居跡に伴うか否か不明である。Ｐ１で径26cm、深さ10cm、Ｐ２で径18cm、深さ12cmを測る。壁溝はない。

住居跡南側でＳＩ83と重複するが、ＳＩ83の北壁に近い部分がＳＩ86の貼床によって覆われ

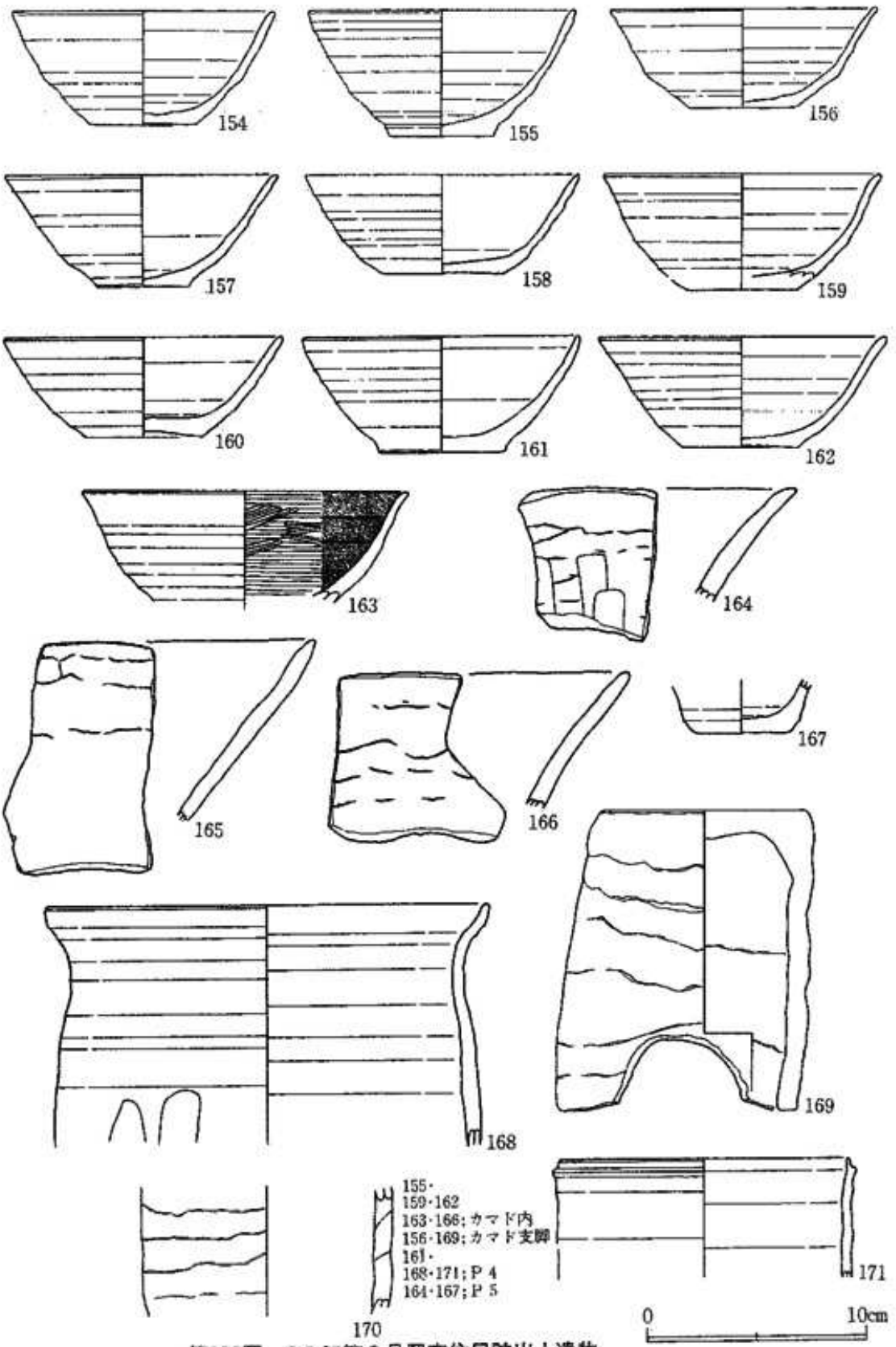


1層　褐　色（10YR 4/4）地山粒子をしもふり状に少量、焼土微量混入。しまりやや弱。
2層　褐　色（10YR 4/4）土色は1層に類するがやや暗。しまり1層と同じ。粘性は1層よりやや強。地山粒子微量混入。
3層　褐　色（10YR 4/6）地山粘土小ブロック混入。しまりは1・2層と同じ。粘性は1層よりややある。
4層　褐　色（7.5YR 4/6）焼土少量、炭化物微量混入。しまりやや弱。
5層　褐　色（7.5YR 4/6）焼土ブロック、地山粘土小ブロック多量混入。しまり、粘性あまりなくボソボソしている。
6層　暗褐色（7.5YR 3/4）地山粒子微量、炭化物こく微量混入。しまりはあまりないが粘性は5層よりある。
7層　暗褐色（7.5YR 3/4）地山粘土小ブロック（火を受けていると思われるが赤くないレンガ状）を少量混入。七層がボソボソしている。しまりややあるが、粘性はとんどない。
8層　極暗褐色（7.5YR 2/3）7層より暗。褐色土とややお化した焼土が半々ずつ斑状に入っている。炭化物微量混入。
9層　地山漸移土。

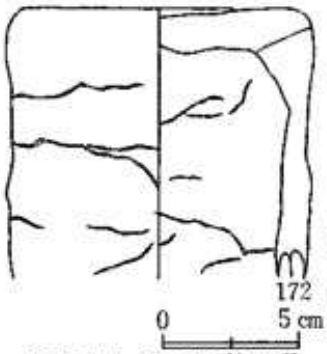
第180図　ＳＩ86第８号竪穴住居跡カマド



第181図　ＳＩ83第７号竪穴住居跡出土遺物



第182図　ＳＩ86第８号竪穴住居跡出土遺物



第183図　ＳＩ136第14号竪穴住居跡出土遺物

ているため、これより新しいと判断した。西壁ではＳＢ141と重複するもこれとの関係は明らかではない。

カマドは東壁側に位置している。袖の先端部はカマド崩落時に失われているようであるが、その他の遺存状況は良好である。煙道部は長さ80cmでトンネル状に掘り込まれている。形態は先端に向かう程細くなっており、住居壁部分での幅47cm、煙出し部先端での幅37cmを測る。煙道底面は煙出しに向かってやや下降している。袖部は粘土を主用材とするもので、残存する長さは30cm前後である。燃焼部中央には支脚が置かれている。土製支脚の上に土師器坏を倒立させたもので、両者とも火熱で影響で脆くなっている。この支脚位置で燃焼部内法幅は48cmを測る。支脚の前面には径55cmの火床面が観察できる。火床面端から煙出しまでの全長は160cmである。

出土した遺物は土師器坏・甕・鍋、土製支脚がある。遺物はカマド内あるいは推定床面南側のＰ４・Ｐ５内より多く検出されている。154～162の坏は、摩滅あるいは欠損により底部を観察できない158・159を除いて回転糸切り痕を留める。このうち155・156は前引き糸切りと称されている技法による。９点とも二次火熱を受けており、特に158が著しい。155がカマド煙道部、159・162がカマド内、161がＰ４出土である。156は169とともに支脚として用いられている。528はカマド内出土の坏で、内面に横位・斜位のミガキの後、黒色処理を施しているものである。底部を欠き、外面には煤状炭化物が付着している。

167は小型の甕であろう。底部には回転糸切り痕を留め、二次火熱を受けている。Ｐ５出土である。168はロクロ使用の甕で、外面の一部にケズリ痕が残る。

164～166は非ロクロの鍋である。いずれにも外面には粘土積み上げ痕が認められる。164はＰ５出土、166はカマド内出土である。169・170は土製支脚で、169の上に156の坏を倒立させて支脚としていたものである。169は土製支脚としては薄手に位上げており、焼成も良好である。Ｐ４から出土した171の器形は特異である。ほぼ直立する口縁部にロクロを用いてつまみ出された口唇部が、内傾しながら立ち上がる。この結果、口縁と口唇の接点外側には凸帯状の高まりが一巡する。それはあたかも羽釜の鍔を退化させたもののように感じられる。

ＳＩ94第９号竪穴住居跡Ａ・Ｂ（第184～第189図、図版79・図版80・図版110・図版111）

調査区南側緩斜面上の遺構密集箇所中央、ＭＡ42・43・44グリッド、ＭＢ42・43・44グリッドで検出された。

基本層位第Ⅴ層上面で北東壁およびその両端の輪郭が確認された。覆土の中央は木の根によって大きく撹乱されていた。緩斜面上に位置するため、南西側では漸移層第Ⅳ層の堆積が厚く、

確認当初、南西壁およびそれにとりつく北西壁、南東壁の輪郭は不明瞭であった。

A住居跡

B住居跡の南西側床面を拡張して作られ、B住居跡の北東壁、北西壁、南東壁と北隅・東隅の柱穴、およびカマドは位置を変えずそのままに踏襲されている。

北東壁と南西壁の間の壁長が6.4m、北西壁と南東壁の間の壁長が5mの長方形を呈し面積は32.55㎡を測る。壁の高さは北東壁で68cm、南西壁で15cmと、斜面の傾斜方向に向かうに従い低くなる。南および西隅でそれぞれSI108とSI95と重複し、それらを切る。四周する壁に沿って幅20～50cm、深さ10cm程度と壁溝が切られており、柱穴はこの壁溝中各隅に確認された。P9・P12・P13・P15とも径40～50cm、深さ30～40cmで掘り込まれている。床面上には土坑状のピットがいくつかあるが、P2・P5・P6・P7は坑内に褐色～黄褐色土が充填されるか、開口部が褐色土で覆われており、住居の拡張に伴って埋め(貼床)られた考えられ、A住居跡とともにあったのはP1・P3・P4の3つのピットと判断された。住居跡東隅にあるP1は径70×50cm、深さ30cmに掘り込まれ、底面に白色の粘土が溜っていた。覆土中からは土師器坏(176)、小形の甕(185・187)、鍋底部(198)などの破片が多く出土している。住居跡中央からやや西側にあるP3は径75cm、深さは25cmに掘り込まれ、やはり小形の甕の破片(186)を出土している。P3の南西側にあるP4は径70×85cm、深さ10cmの浅いピットである。

カマドは南東壁ほぼ中央に付設されている。壁外をU字形に掘り込み、その先端に径25cm程のピットを掘り込んで煙出しとしている。壁際からの煙道部長は43cm、中央での幅は34cm、確認面からの深さは15cmを測る。本体部分は左右両袖が八の字形に開き、その間に径40×50cmの範囲で焼土化して固結した燃焼部火床面があり、さらにその前部25cm程の範囲にまで固結する程に至っていない焼土化した面が続いている。袖部は褐色～黄褐色の土で作られているが、左袖部の遺存状態がよく、その先端には芯材に用いられた切石、土師器坏が検出された。本体中央部での両袖の幅は90cm、燃焼部前部の固結していない焼土面を焚口とすると、焚口先端から住居壁までの長さが95cmで、煙道部と本体の長さの割合は3：7である。煙道中軸線を袖部中央へ延長したカマド軸線方向はN－34°－Wを指す。カマド左袖部左側には径45～57cm、深さ24cmのピット(P8)があるが、これはB住居跡に伴うものである。

B住居跡

北東壁と南西壁の間の壁長が4.9mとA住居跡よりも1.5m程短く、四周する壁の長さがほぼ等しい正方形のプランを呈する。面積は24.22㎡である。壁溝に沿ってあった南西壁は拡張に伴って壊され、同時にこの壁溝も埋められている。柱穴はA住居跡でも引き続き使用されたP9・P15の他に南隅(P11)と西隅(P14)にある。P11は径77×35cm、深さ33cmで、埋立時に一緒に入れられた土師器坏が多く出土している。P14は径42×35cm、深さ26cmに掘られている。また、

ＳＩ94第９号竪穴住居跡Ｃ－Ｄ土層註記

1層　黒褐色（10YR 3/2）ローム粒子、焼土微量混入。土はかたく粘性なし。
2層　暗褐色（10YR 3/4）褐色土（10YR 4/6）小ブロック状に多量に混入されている。炭化粒子、焼土少量混入。土はかたく粘性なし。
3層　暗褐色（7.5YR 3/4）炭化粒子少量混入。明褐色（7.5YR 5/6）が少量混入されている。土はやわらかく粘性弱。
4層　褐　色（7.5YR 4/4）明褐色土（7.5YR 5/6）全体的に混入されている。土はやわらかく粘性強。
5層　暗褐色（7.5YR 3/4）明褐色土（7.5YR 5/6）混入されている。土はやわらかく粘性弱。
6層　明褐色（7.5YR 5/6）混入物なし。土はやわらかく粘性弱。
7層　明褐色（7.5YR 5/6）混入物なし。土はかたく粘性弱。
8層　明褐色（7.5YR 5/6）混入物なし。土はやわらかく粘性弱。
9層　褐　色（7.5YR 4/4）明褐色土（7.5YR 5/6）多量混入。土はやわらかく粘性弱。
10層　暗褐色（7.5YR 3/3）明褐色土（7.5YR 5/6）少量混入とブロック状に少量混入。土はやわらかく粘性弱。
11層　明褐色（7.5YR 5/6）暗褐色土（7.5YR 3/3）少量混入。土はややややわらかく粘性強。
12層　褐　色（7.5YR 4/4）明褐色土（7.5YR 5/6）少量混入。土はやわらかく粘性弱。
13層　褐　色（7.5YR 4/6）焼土微量混入。土はややややわらかく粘性弱。
14層　暗褐色（10YR 3/4）焼土粒子多量混入。炭化粒子微量混入。土は比較的やわらかく粘性弱。

〃　Ｅ－Ｆ土層註記

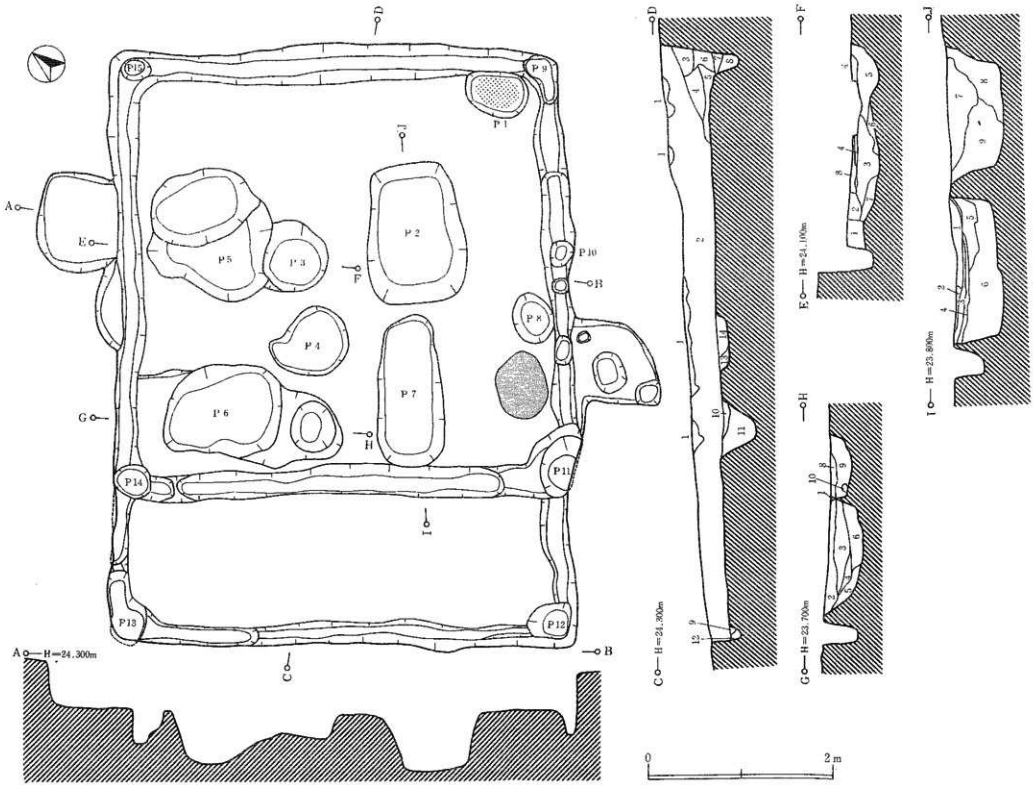
1層　褐　色（10YR 4/6）混入物なし。ブロックが多量混入されている。土は比較的やわらかく粘性弱。
2層　暗褐色（10YR 3/3）褐色土（10YR 4/6）・小ブロックが多量に混入。土はややややわらかく粘性弱。
3層　褐　色（10YR 4/6）焼土、焼土粒子、炭化物がそれぞれ少量混入。土はブロックになって多量混入されている。土はやわらかく粘性弱。
4層　暗褐色（10YR 3/3）焼土粒子微量混入。土はややややわらかく粘性弱。
5層　褐　色（10YR 4/6）暗褐色土（10YR 3/3）が多量混入。褐色土がブロックになって多量混入されている。土はややややわらかく粘性弱。
6層　褐　色（10YR 4/6）焼土微量混入。土はかたく粘性弱。
7層　褐　色（10YR 4/6）混入物なし。土はブロックになってややややわらかく粘性弱。
8層　褐　色（7.5YR 4/6）焼土粒子微量混入。炭化物微量混入。土は比較的やわらかく、粘性弱。

〃　Ｇ－Ｈ土層註記

1層　褐　色（10YR 4/6）混入物なし。砂でかたくサラサラしている。粘性なし。
2層　暗褐色（10YR 3/4）炭化粒子微量混入。黄褐色（10YR 5/6）多量混入。土はかたく粘性弱。
3層　褐　色（7.5YR 4/4）黄褐色土（10YR 5/6）多量混入。炭化粒子少量混入。焼土微量混入。土はかたく粘性弱。
4層　黄褐色（10YR 5/6）褐色土（7.5YR 4/4）少量混入。焼土微量混入土はかたく粘性弱。
5層　褐　色（7.5YR 4/4）黄褐色土（10YR 5/6）多量混入。焼土少量混入。炭化粒子少量混入。土はやわらかく粘性弱。
6層　褐　色（7.5YR 4/4）黄褐色土（10YR 5/6）多量混入。焼土多量混入。炭化物少量混入。炭化粒子少量混入。土はやわらかく粘性弱。
7層　褐　色（10YR 4/6）炭化粒子微量混入。土はかたく粘性弱。
8層　暗褐色（10YR 3/4）褐色土（10YR 4/6）多量混入。炭化粒子、焼土粒子少量混入。土はかたく粘性弱。
9層　暗褐色（7.5YR 3/4）褐色土（10YR 4/6）、焼土粒子多量混入。炭化粒子少量混入。土は比較的かたく粘性弱。
10層　褐　色（10YR 4/6）焼土微量混入。炭化粒子微量混入。土はかたく粘性弱。

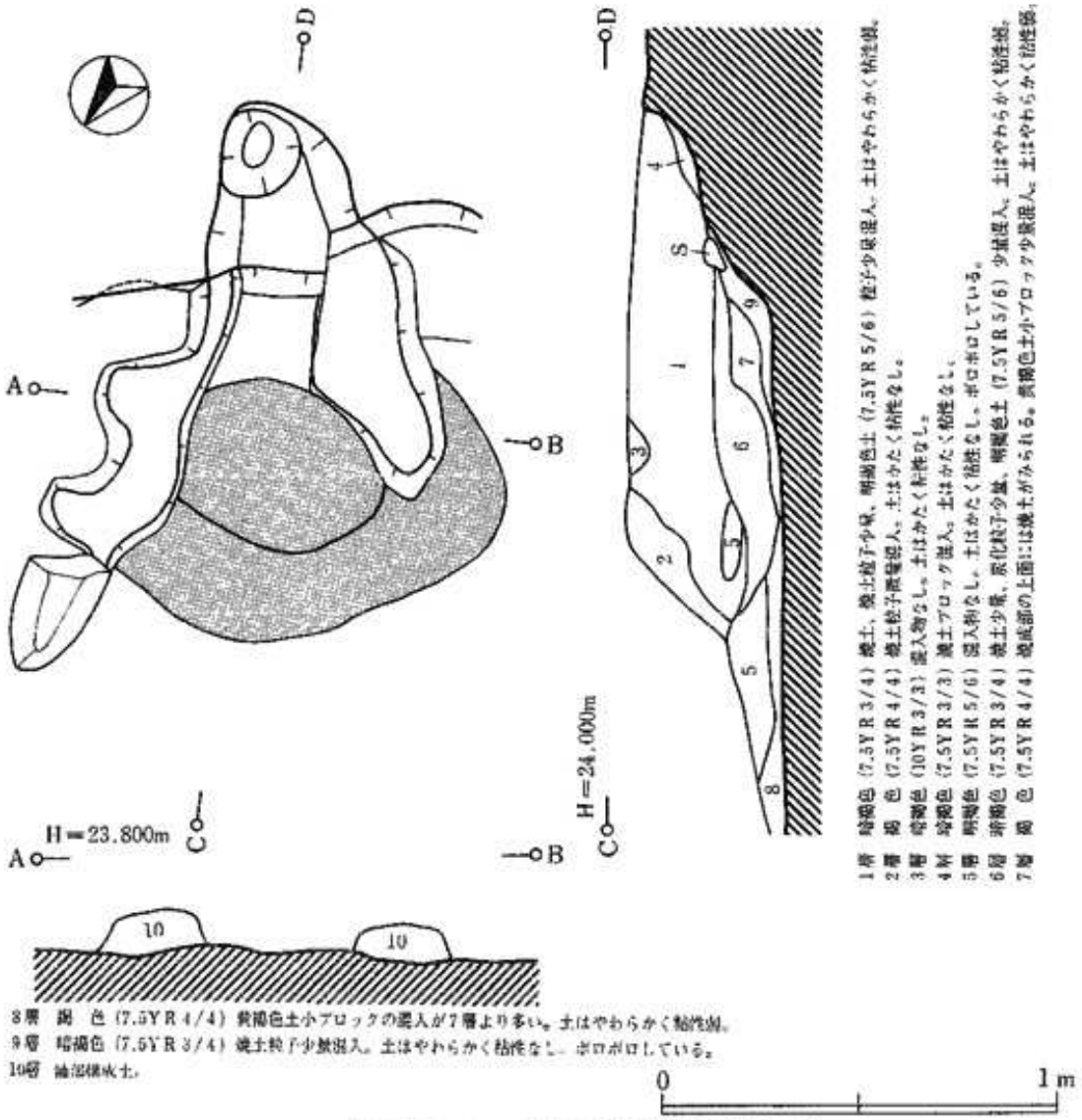
〃　Ｉ－Ｊ土層註記

1層　褐　色（10YR 4/6）焼土粒子、炭化粒子微量混入。黄褐色土（10YR 5/6）多量混入。土はかたく粘性なし。
2層　暗褐色（10YR 3/4）黄褐色土（10YR 5/6）少量混入。土はやわらかくボロボロしている。粘性なし。
3層　褐　色（10YR 4/6）褐色土（10YR 4/4）少量混入。土はかたく粘性弱。張り床部分。
4層　暗褐色（10YR 3/4）焼土粒子、炭化粒子、褐色土は微量混入。土はやわらかく粘性弱。
5層　褐　色（10YR 4/6）褐色土（10YR 4/4）少量混入。焼土粒子、炭化粒子は微量混入。土はやわらかく粘性弱。
6層　褐　色（7.5YR 4/6）褐色土（10YR 4/6）多量に混入。炭化物少量混入。土は非常にやわらかく、しまりけがなくボロボロしている。粘性強。
7層　褐　色（7.5YR 4/4）焼土粒子、炭化粒子少量混入。黄褐色土（10YR 5/6）ブロック状に多量混入。土はかたく粘性弱。
8層　明褐色（7.5YR 5/6）混入物なし。土は非常にやわらかくボロボロしている。粘性弱。
9層　褐　色（7.5YR 4/6）明褐色土（7.5YR 4/6）多量混入。炭化粒子少量、焼土微量混入。土はやわらかく粘性弱。



第184図　ＳＩ94第９号竪穴住居跡出土遺物

このＢ住居跡にはＳＢ144がその南東側にとり付く形で検出されている。Ｂ住居跡の北東壁・南西壁にＳＢ144の桁が55cm程重なって接続している。カマド位置はＡ住居跡になっても変えられていないが、南東壁の南寄りに付設されている。床面上にはＰ２・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７の４つの土坑状ピットがある。Ｐ２は住居跡中央よりもやや北側に位置し、長さ1.5m、幅１mの隅丸の方形を呈し、深さ1.2m で、その南西側に縦列してあるＰ７は、長さ1.65m、幅0.7m、深さ50cmに掘られている。いずれも断面形は逆台形を呈する。住居跡の西隅にあるＰ６は長さ1.9m、最大幅1.05m、深さが最も深いところで40cmであり、その内部で長軸の長さ1.2m、短軸の長さ0.9mの歪つな楕円形を呈するピットと、、径55cmの円形に掘り込まれたピットに分かれている。北西壁中央近くに位置するＰ５は、径1.3×1.4m、深さ60cmの歪な円形に掘り込まれている。これらのピットのうち、Ｐ５からは土師器坏、甕(189)などを含む破片が多く出土している。



第185図　ＳＩ94第９号竪穴住居跡カマド

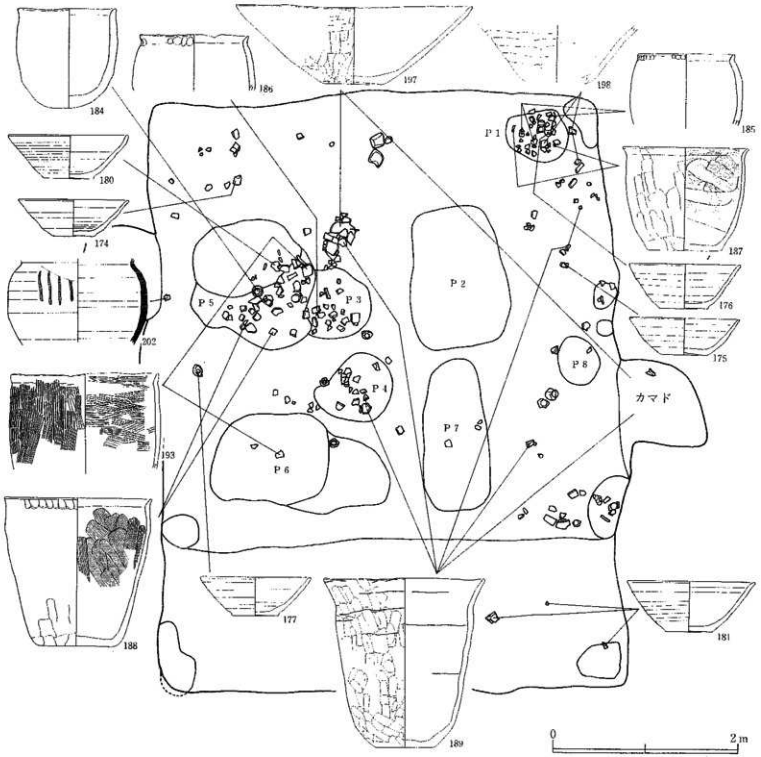
出土した遺物は、土師器坏・甕・鍋、土製支脚、須恵器壺、土錘、砥石がある。遺物はカマドあるいはP1・3～6・8より出土したものが多いが、B住居跡に伴うP5・6から出土した188・193の甕を除いた遺物についてはA住居跡に帰属するものであると考えている。

173～181の坏は底部に回転糸切り痕を留める。174・177は胎土に細砂粒を多量に混入させている。174・175・178は二次火熱を受け、175はより顕著に認められる。173は赤褐色を呈す坏であるが部分的に灰色を呈する箇所があり、還元状態におかれた可能性がある。181は内外面に煤あるいはタールがびっしり付着しているものである。176はP1、178はP8、179はP6上面、180はP5、181はP1とP4出土が接合できたものである。P1出土の182は椀形を呈する。底部には回転糸切り痕を留める。183は高台付坏でこれも椀形を呈している。底部の切り離しは不明であるが、高台を貼り付ける前に菊花状の削り出しを行っている。内面は横位・放射状のミガキの後、黒色処理を施している。ミガキは外面口縁部にも認められる。カマド内より出土している。

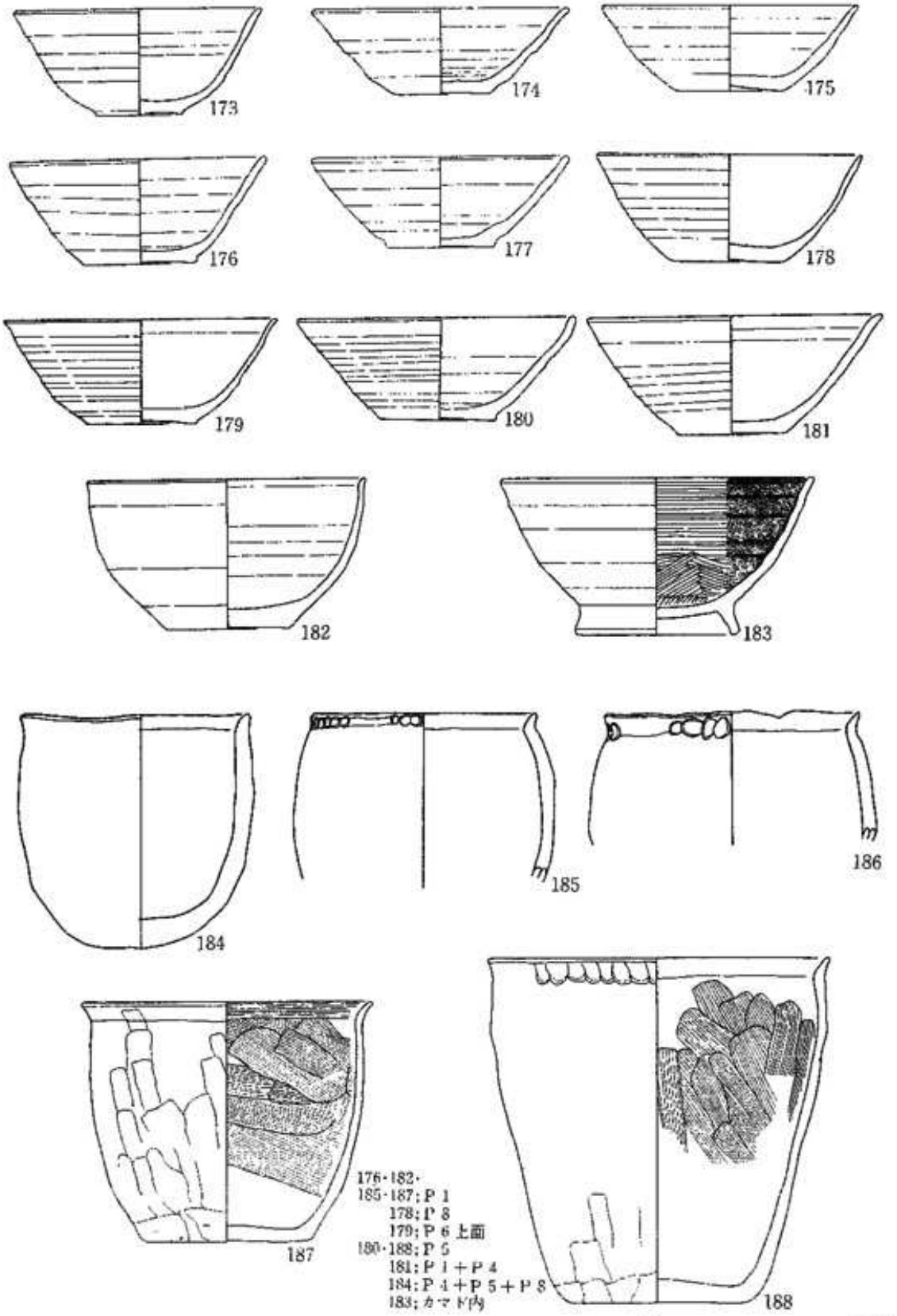
184は小型丸底の甕である。二次火熱を受け、内外面の器面調整を観察できない。内面口縁部にのみ煤状炭化物が付着している。P4・5・8出土の破片から復元できたものである。185・186は同じような形態を示す甕で、いずれも外面口頸部～口縁部に指頭によるオサエ痕が残る。185はP1出土で二次火熱を受けている。186はP3・5・8出土で内面に煤状炭化物が付着している。187は薄手な作りの小型甕でP1出土である。外面は縦位のケズリ、胴下半部には横位にケズリを施している。内面はヘラナデの後、口縁部には横ナデが認められる。二次火熱を受けている。188はP5(B住居跡)出土の甕で、内外面に指頭によるオサエが残り、歪んだ器形となっている。外面にはケズリ、内面には縦位・斜位のナデが部分的に観察できる。底面は187とともに丁寧にナデられている。

189～191の甕はカマド内出土で、191は口縁部と底部が接合できなかったものの胎土等から同一個体と考えている。いずれも粘土積み上げ痕を残し、外面には縦位のケズリが施されている。189・191の底部はいわゆる砂底を呈している。189は口径24.3cm、底径8.8cm、器高25.9cmを測り、底径・器高に比して口径が大きく、特異な器形の部類に入るであろう。作りとしても全体に雑である。190は内面に煤状炭化物が付着している。192は胴部が丸味をもつ甕となるものであろう。外面には縦位のち横位にケズリ、内面には横位のヘラナデが認められる。193はP5・6(B住居跡)より出土した甕である。外面には縦位の、内面には横位のハケメが施されている。

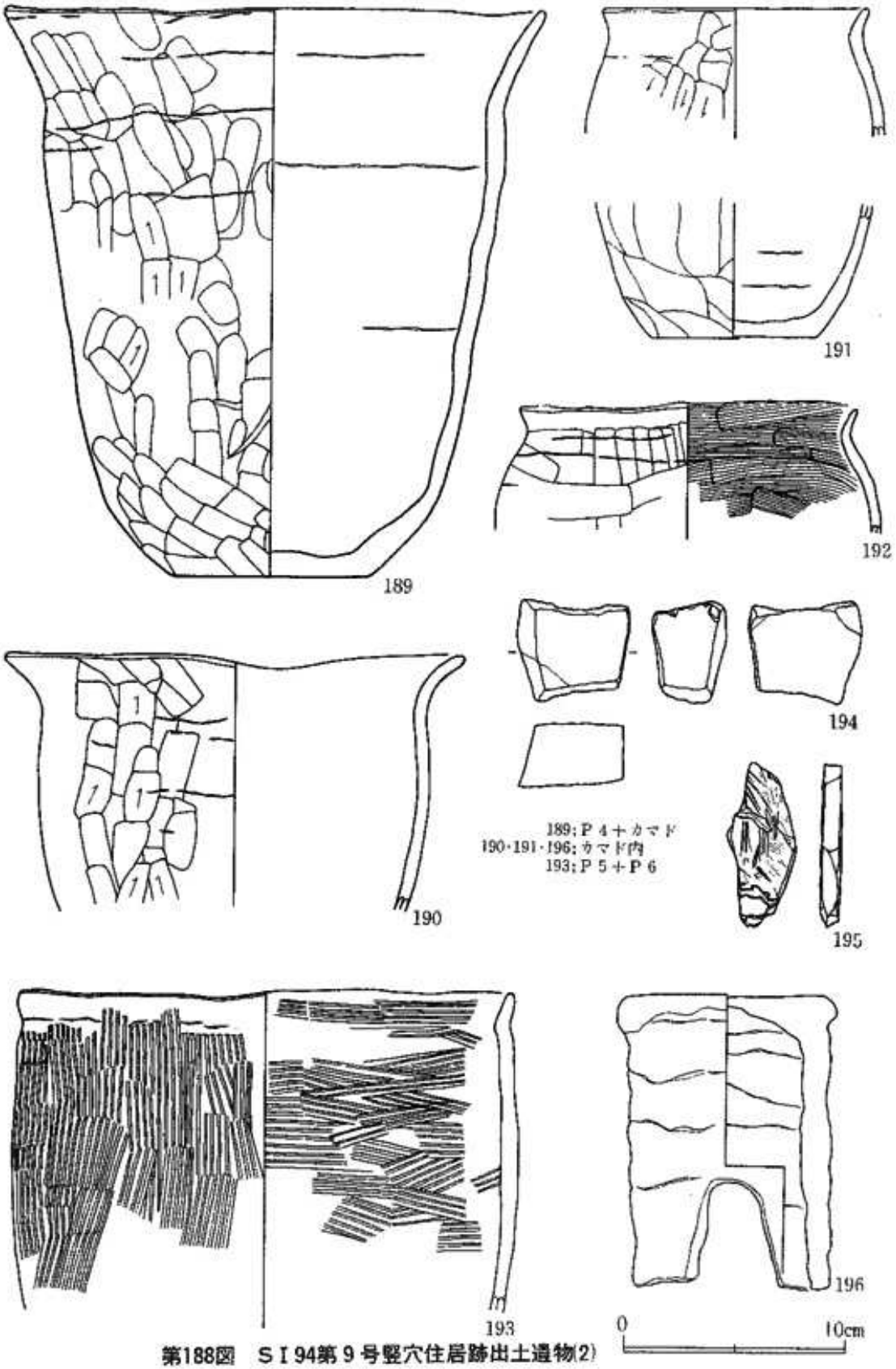
197～200は非ロクロの鍋で197は平底、198は丸底を呈する。197は口径35.8cm、底径8.5cm、器高12cmで、平底ではあるが安定感は良くない。外面は不定方向にケズリ、内面はナデのようである。カマド内とP3北側床面出土が接合できたものである。198は内外面に幅10～15mmの



第186図　ＳＩ94第９号竪穴住居跡遺物出土状況



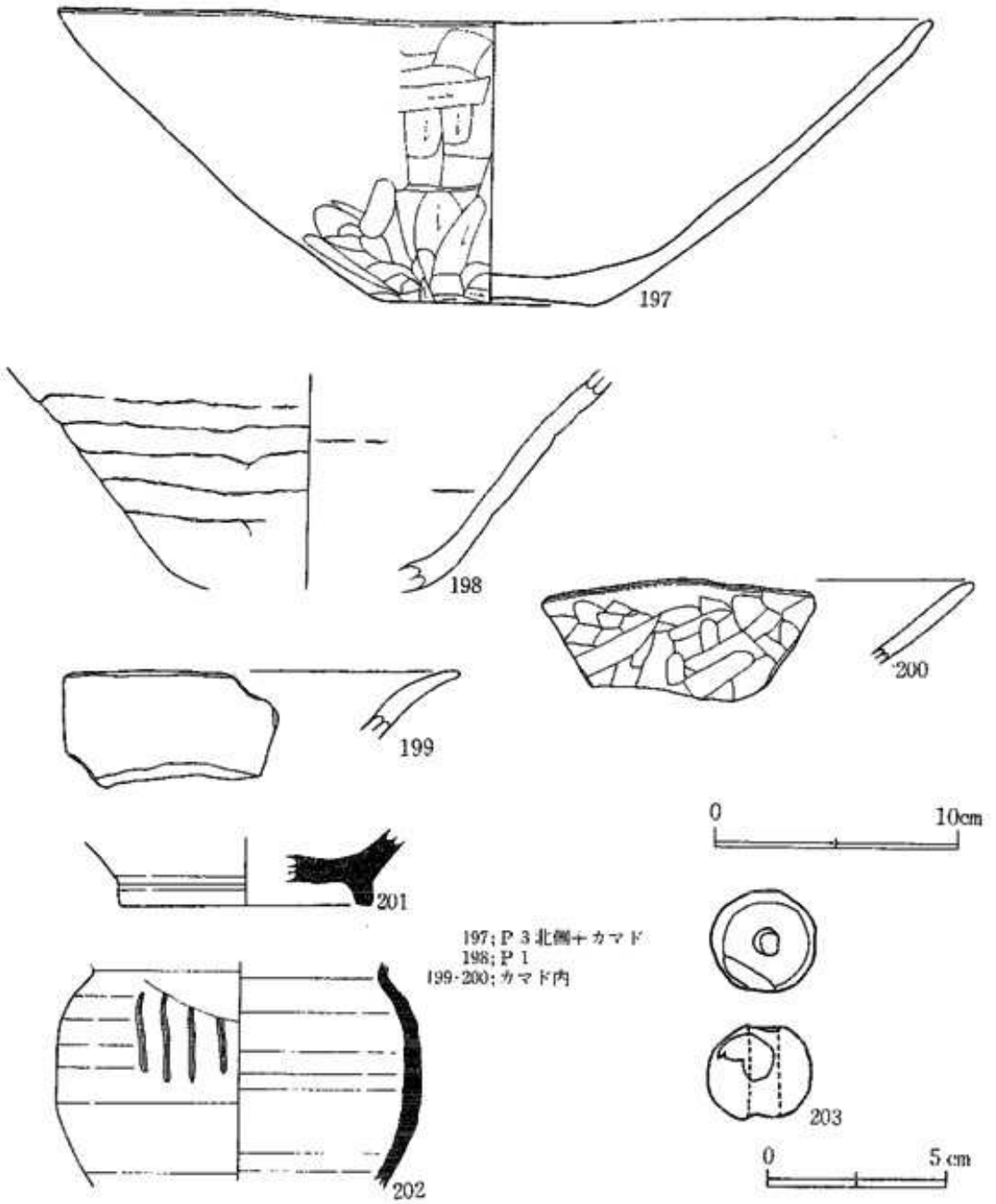
第187図　ＳＩ94第９号竪穴住居跡出土遺物(1)



第188図　ＳＩ94第９号竪穴住居跡出土遺物(2)

粘土積み上げ痕が認められる。P1出土である。199・200はカマド内出土で197とは別個体となる。199は摩滅のため内外面の器面調整が明らかではない。200の外面は不定方向にケズリを施している。196は土製支脚でカマド右袖前面と左袖前面で出土した破片が接合したもので、支脚としての原位置を保っているものではない。器高13.2cm、胴径9cmの細身の製品である。

須恵器には図示したものの他に7点の破片資料が出土している。201は甕か壺の高台部である。202は壺の胴部である。胎土には径1～2mmの砂粒を多く含んでいる。胴部に4本の線刻



第189図　SI94第9号竪穴住居跡出土遺物(3)

が認められる。上から下方向に引かれているようである。図示面左で長さ33mm、幅1.5～2mmでそれぞれの間隔は8～10mmである。

203は球形の土錘で完形で出土している。194は砂岩を素材とした砥石である。図示面下端を欠く。4面を砥石としている。195は図示面1面以外は剥落・欠損している砥石である。上面には不定方向の擦痕が認められる。

ＳＩ94は多量の遺物が出土しており、図示し得なかった資料も点検して、底部で換算した個体数は次のように推定できる。土師器坏57個体以上、非ロクロ甕20個体以上、ロクロ使用の甕3個体以上となる。その他炭化米14粒を検出している。

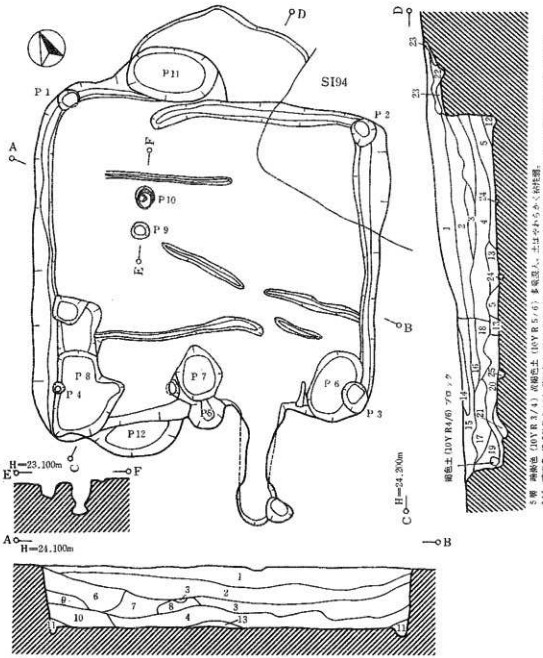
ＳＩ95第10号住居跡(第190図～第194図、図版81～図版84・図版111・図版112)

調査区南側の緩斜面上にある遺構密集箇所のうち、ＭＢ42・43グリッド、ＭＣ42・43グリッドで検出された。

本住居跡の位置するあたりは、調査区中央の南側から次第に傾斜する緩い斜面の降り際にあたり、第Ⅴ層の漸移層である第Ⅳ層も最も厚く堆積している。遺構の最終的な確認面は第Ⅴ層上面であるが、北側に隣接するＳＩ94の南西隅が本住居跡覆土を壁面としていたことから、まだ完全にそのプランを表し切っていない第Ⅳ層中でも、その存在が予想された。

カマド位置の前部にあたる住居跡中央からやや南東に寄った覆土中に、オリーブ褐色を呈する火山灰混入層(3層)の堆積が認められた。火山灰混入層は長さ140cm、幅40～50cm程の広がりをもち、床面から10～20cm上位に堆積している。

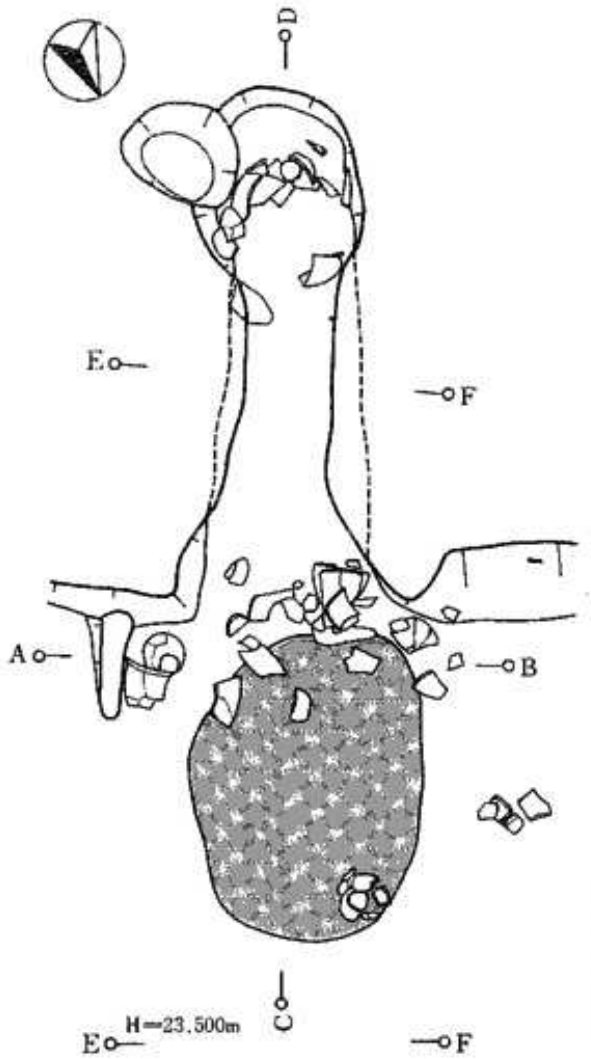
規模は東西壁長3.7m、南北長3.4m、深さは中央部で66cm、面積13.78㎡を測る。平面形は隅の丸い方形である。主柱穴は北西(Ｐ1)、北東(Ｐ2)、南東(Ｐ3)、南西(Ｐ4)の各隅に確認された。土坑状の掘り込みによって痕跡程度にしか確かめられなかった南西隅のＰ4を除いたＰ1～Ｐ3とも、径20～35cm、深さ20～25cmで、南壁を除いて巡る幅15～20cm、深さ5～10cmの壁溝を切って掘られている。またカマドの西側の南壁にかかって径40cm、壁の上端からの深さが50cmのＰ5がある。床面からの深さで見ると他の柱穴よりも10cm程浅く、主柱穴とは別の、おそらくはカマド上の上屋構造に関係する柱穴と考えられる。他にカマドの両脇（Ｐ6・Ｐ7）と住居跡南西隅(Ｐ8)、および北壁外(Ｐ11)、南壁外(Ｐ12)に土坑状のピットがある。Ｐ6は長さ80cm、幅50cm、深さ17cm、Ｐ7は長さ60cm、幅50cm、深さ35cmで、それぞれ内部から完形の土師器坏(212)と土師器坏破片を出土している。Ｐ8は長さ1.6m、最大幅80cm、深さ25cmで完形の土師器坏6個(207～210、213、215)と、須恵器壺(229)の破片を出土している。Ｐ11は長軸の長さ105cm、短軸の長さ58cmの楕円形に掘り込まれ、住居跡の外側ではあるが、その深さは66cmと床面よりも10cm程深い。このＰ11の覆土の上位には竪穴住居跡の覆土中に堆積していたと同じ火山灰が径30cm程の円い範囲で検出された。堆積レベルは住居跡覆土中のそれ

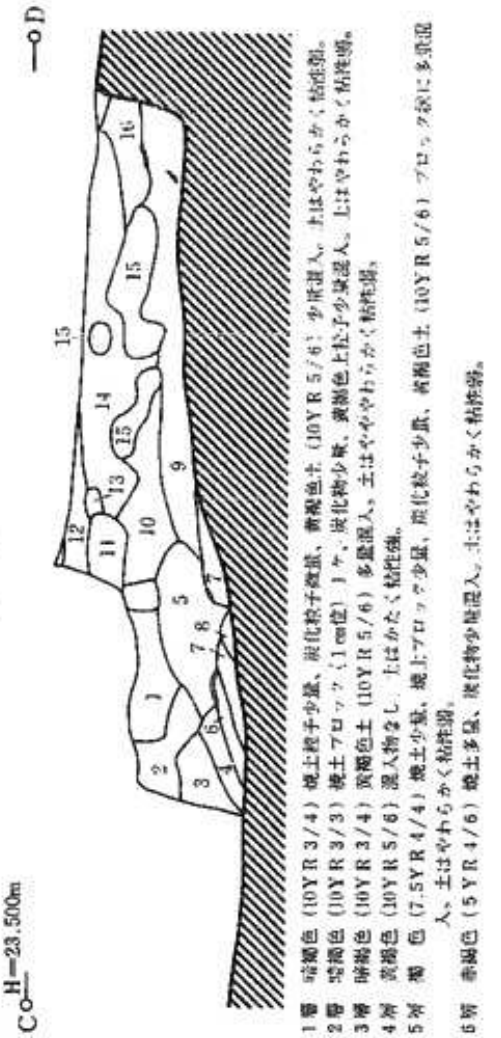


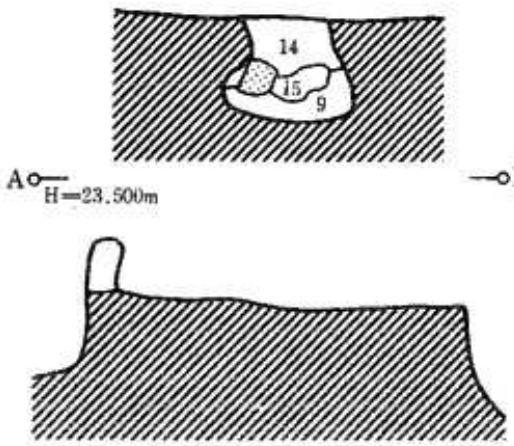
1層　暗褐色（10YR 3/4）焼土粒子少量、炭化物少量、地山粒子少量混入。上はかたく粘性なし。
2層　褐　色（7.5YR 4/4）黄褐色土（10YR 5/6）少量、炭化物は大きめのが多量、火山灰が少量、焼土粒子少量混入。上は比較的かたく粘性弱。
3層　暗褐色（10YR 3/4）黄褐色土（10YR 5/6）小ブロック状に多量、炭化粒子少量、オリーブ褐色土（2.5YR 4/6）火山灰が少量混入。土はかたく粘性弱。
4層　暗褐色（10YR 3/4）黄褐色土（10YR 5/6）大ブロック多量、焼土粒子微量、炭化粒子微量混入。土はやわらかく粘性弱。
5層　暗褐色（10YR 3/4）黄褐色土（10YR 5/6）多量混入。土はやわらかく粘性弱。
6層　暗褐色（7.5YR 3/4）黄褐色土（10YR 5/6）多量、炭化粒子微量混入。上は暗褐色土がやわらかく、黄褐色土がかたい。粘性弱。
7層　暗褐色（10YR 3/4）黄褐色土（10YR 5/6）小ブロック多量混入。上はやわらかく粘性弱。
8層　暗褐色（10YR 3/4）黄褐色土（10YR 5/6）大ブロック多量、炭化粒子微量混入。土はやわらかく粘性弱。
9層　暗褐色（10YR 3/3）黄褐色土（10YR 5/6）多量混入。土はやわらかく粘性弱。
10層　褐　色（10YR 4/6）黄褐色土（10YR 5/6）多量、炭化粒子微量混入。土はやわらかくボロボロしている。粘性弱。
11層　褐　色（10YR 4/6）黄褐色土（10YR 5/6）火山灰少量混入。土はやわらかく粘性弱。
12層　暗褐色（10YR 3/4）褐色土（10YR 4/6）多量混入。土はやわらかく粘性弱。
13層　暗褐色（10YR 3/4）黄褐色土（10YR 5/6）少量、炭化物少量、焼土微量混入。土はやわらかく粘性弱。
14層　黄褐色（10YR 5/6）暗褐色土（10YR 3/4）多量、炭化粒子微量混入。土は非常にかたくしまっている。粘性なし。
15層　暗褐色（10YR 3/4）黄褐色土（10YR 5/6）粒子少量、炭化物少量、焼土微量混入。土はやわらかく粘性弱。
16層　暗褐色（10YR 3/4）黄褐色土（10YR 5/6）粒子少量、炭化物少量、焼土少量混入。土はやわらかく粘性弱。
17層　褐　色（10YR 4/6）黄褐色土（10YR 5/6）多量混入。土はやわらかく粘性弱。
18層　褐　色（7.5YR 4/4）黄褐色土（10YR 5/6）小ブロック多量、炭化粒子微量混入。土はやわらかく粘性弱。
19層　褐　色（7.5YR 4/4）黄褐色土（10YR 5/6）小ブロック少量、炭化粒子微量混入。土はやわらかく粘性弱。
20層　暗褐色（10YR 5/6）暗褐色土（10YR 3/4）少量、炭化粒子微量、焼土微量混入。土はやわらかく粘性弱。
21層　暗褐色（10YR 3/3）黄褐色土（10YR 5/6）少量、炭化物少量、焼土微量混入。土はやわらかく粘性弱。
22層　暗褐色（10YR 3/4）褐色土（10YR 4/6）少量混入。土は非常にかたくしまっている。粘性なし。
23層　黄褐色（10YR 5/6）褐色土（10YR 4/6）少量混入。土は非常にかたい。粘性弱。
24層　褐　色（7.5YR 4/4）にぶい黄色（2.5YR 6/4）の粘土混入。焼土、炭化物混入。土はやわらかく粘性弱。
25層　褐　色（7.5YR 4/4）焼土、炭化物混入。土はややかたくしまっている。粘性弱。

第190図　ＳＩ95第10号竪穴住居跡

0　2m







7層　暗褐色（7.5YR3/4）焼土・焼土ブロック少量混入。土はやわらかく粘性弱。

8層　暗褐色（10YR3/4）焼土多量混入。土はやわらかく粘性弱。

9層　暗褐色（10YR3/3）焼土・赤褐色土（5YR4/6）多量混入。土はやわらかく粘性弱。黒褐色土のボロボロした土を含む。

10層　暗褐色（7.5YR3/3）黄褐色土（10YR5/6）粒子少量混入。

11層　暗褐色（7.5YR3/4）黄褐色土（10YR5/6）少量、焼土粒子微量混入。土はややわらかく粘性弱。

12層　暗褐色（10YR3/4）焼土粒子微量混入。土はややわらかく粘性弱。

13層　褐　色（10YR4/6）混入物なし。土は比較的かたく粘性弱。

14層　褐　色（10YR4/4）褐色土（10YR4/6）多量混入。土はかたく粘性弱。

15層　赤褐色（5YR4/6）土はかたくしまっている。天井部分の崩落土と思われる。

16層　暗褐色（7.5YR3/4）焼土多量、炭化物少量、遺物混入。土はやわらかくボロボロしている。

第191図　SI95第10号竪穴住居跡

0　1m